

帝国の緋き皇女の軌跡
～七の絆と奇蹟～

慢次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの軌跡のキャラ、ラインに双子の兄がいたらどうなるのか、そしてエレボニア帝国の皇女がアルフィンだけではなく、姉がいたとしたらの物語です。（仮）

あらすじは、あとで書き直します。

入りきれないタグー転スラ（大賢者）

色々と設定を変えていますので、受け付けない方は回れ右でお願い致します。

【とある方との共同作品です。】

目次

第0章 トールズ士官学院編

第0章 1-1 話 入学式 1

第0章 2-2 話 オリエンテーション

第1章 初めての特別実習編 闇は動き出す編 34

第1章 3-1 話 2週間が終わつて。

第1章 4-2 話 4月の夕暮れ。

第1章 5-3 話 トワ生徒会長と生徒会。

第1章 6-4 話 初めての自由行動日。

第1章 7-5 話 コレットの依頼。

第1章 8-6 話 学院長の依頼。それは旧校舎の調査。

第1章 9-7 話 それぞれの放課後。

第1章 10-8 話 その日の夜。

第1章 11-9 話 カトリーナ・クラリス。

第1章 12-10 話 初めての实技

78

66

50

151

167

34

108

125

132

108

91

167

108

91

167

	テスト。	175	第1章―19―17話―騒乱の足音と
	第1章―13―11話―暗躍、闇に蠢		平和の使者。
	く者達。	190	第1章―20―18話―さらわれた人
	第1章―14―12話―出発、聞こえ		達。
	てくるイヤな足音。	196	第1章―21―19話―リイン達の救
	第1章―15―13話―紡績の街パル		出。
	ム。	212	第1章―22―20話―燃えるパル
	第1章―16―14話―パルムでの特		ム。
	別実習。	223	①
	第1章―17―15話―ユファイ達の知		第1章―23―21話―燃えるパル
	らない所で。	244	ム。
	第1章―18―16話―残りの依頼。		②
250			第1章―24―22話―導かれる者
			達、パルム決戦。
			第1章―25―23話―全て終わった
			348
			336
			321
			301
			286
			269

あとで。

368

課後。

422

第2章―白亜の旧都編く騒乱の足音編く

第2章―白亜の旧都編―30―5話―

第2章―白亜の旧都編―26―1話―

5・22 (16:50) ↓5・23 (07:

5・04 ↓5・05 ↓5・22―いろんな

15)―自由行動日①―

出来事。

375

第2章―白亜の旧都編―31―6話―

第2章―白亜の旧都編―27―2話―

5・23 (09:40)―自由行動日②

5・22 (07:20)―悩みと新し

452

い仲間。

397

第2章―白亜の旧都編―32―7話―

第2章―白亜の旧都編―28―3話―

5・23 (12:i5)―自由行動日③

5・22 (13:25)―VII組女子の手

465

作りクッキー。

409

第2章―白亜の旧都編―33―8話―

第2章―白亜の旧都編―29―4話―

5・26 (10:00)―5月の実技テ

5・22 (15:45)―それぞれの放

479

スト。

第2章―白亜の旧都編―34―9話―	6―6―5・16 (15:40)―	警
5・26↘5・29 (08:20)―	視庁特務課。――	552
車内のアクシデント。――	7―7―5・16 (21:30)↘5・	
ミサキ・カミジヨウ編【鉄血の子供達】	19 (11:30)―	ジエラル・ダン
1―1話―ミサキ・カミジヨウ	テス。――	566
497	シエルファニール編【貴族派】	
2―2話―4・24・悪魔の薬、再び。	1―1―04月〇〇―	平塚春雪。
――	586	
3―3―5・08 (13:25)―	2―2―5・07―	禁忌の術。
ムリア海の捜査。――	594	
4―4―5・16―	3―3―5・07↓	05・14―
5―5―5・16 (14:30)―	名前。――	606
――	4―4―5・23↓	5・24―
538	過去 (平	

塚春雪)との決別。

616

ステイル・アレフガルド編【星杯騎士団】

の換金。

702

1-1-1 話-ガセな情報。

624

7-7-7 5・0 5-1 祝杯。

718

緋里雪奈(結社)編【怪盗団】

8-8-8 5・0 6-5 0 7-1 鴨志田の

1-1-1 4・2 6-1 決意。

643

後は ∴。

732

2-2-2 4・2 7-1 決戦、カモシダパレ

9-9-9 5・0 8-1 メメントスと初の

ス。

648

依頼。

748

3-3-3 4・2 7-1 奪え、カモシダのオ

1-0-1 1 0-1 5・0 9-1 次なるタ

タカラ。

664

ゲットは。

761

4-4-4 4・2 7-5 0 2-1 鴨志田卓

1-1-1 1 1-5・1 0-5 1 3-1 丸喜

の改心。

679

先生。

772

5-1 5-1 5・0 2-1 雪奈と蓮。

1-2-1 1 2-1 5・1 4-1 喜多川佑介。

695

787

1 3 | 1 3 | 5 · 1 5 | 斑目の個展。

798

1 4 | 1 4 | 5 · 1 6 | 斑目邸へ。

810

1 5 | 1 5 | 5 · 1 7 | モデル。

821

1 6 | 1 6 | 5 · 1 7 | 5 · 1 8 | 中野

原。

833

1 7 | 1 7 | 5 · 2 1 | (1 8 : 0 0) |

5 · 2 2 | (1 6 : 0 0) | モデルとして

潜入。

845

1 8 | 1 8 | 5 · 2 2 | (1 6 : 4 5) |

祐介の目覚めと怪盗団入り。

861

芳澤すみれ編〔Crusaders (十字

架を付けた集団)〕

1 | 1 | 4 · 2 7 | 芳澤すみれとして

の誇り。

877

2 | 2 | 5 · 0 2 | 依頼者。

882

3 | 3 | 5 · 0 3 | 十文字家の英雄と

その娘。

889

4 | 4 | 5 · 0 3 | 帝国 (エレボニア)

へ。

904

5 | 5 | 5 · 0 3 | ↓ 5 · 0 4 | トラウ

マ。

912

6 | 6 | 5 · 0 4 | 帝国の問題と旅の

出会い。

925

7 | 7 | 5 · 0 4 | 日本人移民街にて。

8 | 8 | 5 · 0 4 | 明らかになる真実。 939

9 | 9 | 5 · 0 5 | アルフィンとの出

会い。 967

1 0 | 1 0 | 5 · 0 5 (0 8 : 5 0) |

今、セントアークで起きてる事。

980

1 1 | 1 1 | 1 1 | 5 · 0 5 (1 0 : 1 5) |

鉄血を恨む者達。 995

1 2 | 1 2 | 2 | 5 · 0 5 (1 1 : 4 0) |

セントアーク騒乱の序章。 1010

1 3 | 1 3 | 1 5 · 0 5 (1 3 : 0 0) |

騒動の後で。 1022

1 4 | 1 4 | 1 5 · 0 6) 5 · 0 7 | ゴ

ルデンウィーク明け。 1041

1 5 | 1 5 | 1 5 · 1 3 | 丸喜先生とカ

ウンセリング。 1050

1 6 | 1 6 | 1 5 · 1 4 | 渋谷セントラ

ル街の裏の闇。 1067

1 7 | 1 7 | 1 5 · 1 4 | 徳川義景と一

条将斗。 1084

1 8 | 1 8 | 1 5 · 2 2 (1 3 : 4 5) |

ヴァイオレットとグリムキャッツ。 1095

19 | 19 | 5 : 2 2 (1 3 : 4 5) |
 共和国支部の闇 | | | 1109 |
 20 | 20 | 5 : 2 2 (1 4 : 3 0) |
 悪野専務。 | | | 1126 |
 アルフィン編【アークライド解決事務所】 | | | |
 1 | 1 | 5 : 0 5 (2 2 : 5 0) | | バ |
 ルムフレイム宮にて。 | | | 1131 |
 2 | 2 | 5 : 2 1 (0 7 : 3 0) | | 旅 |
 立ち。 | | | 1135 |
 3 | 3 | 5 : 2 1 (0 9 : 4 5) | | カ |
 ルバード共和国へ。 | | | 1144 |
 4 | 4 | 5 : 2 1 (1 1 : 0 5) | | ク |
 レイユ村。 | | | 1154 |

5 | 5 | 5 : 2 1 (2 2 : 3 0) | | 騒 |
 動。 | | | 1166 |
 6 | 6 | 5 : 2 1 (2 3 : 4 5) | | ク |
 レイユ村攻防戦。 | | | 1181 |
 7 | 7 | 5 : 2 2 (0 7 : 2 0) | | イ |
 デイスへ。 | | | 1196 |
 8 | 8 | 5 : 2 2 (1 0 : 4 5) | | ヴア |
 ン・アークライド。 | | | 1205 |
 9 | 9 | 5 : 2 2 (1 2 : 3 0) | | ゴ |
 ルド・マウンテン共和国支部。 | | | 1221 |
 10 | 10 | 5 : 2 2 (1 3 : 4 5) | | |
 斑目一流斎。 | | | 1236 |
 1 | 1 | 1 | 1 | 5 : 2 2 (1 4 : 0 0) | | |

奇襲と取り調べ。

1 2 1 1 2 1 5 · 2 2 (1 6 · 0 0)

パンツ同盟。

1263 | 1245

第0章―トールズ士官学院編

第0章―1―1話―入学式

七耀暦1205・1月初頭：エレボニア帝国西部、ラマール州・ジュノー海上要塞にて、貴族連合軍と帝国の若き皇女の軍が両軍入り交じって戦っていた。貴族連合軍は、大将を失い、帝都ヘイムダルを奪われ、海都オルデイスまでもが陥落した。

敗走した貴族連合軍は、オーレリア將軍がいるジュノー海上要塞へ逃げ落ちる。若き皇女の軍もジュノー海上要塞を囲むように部隊が配置される。そして両軍が入り交じって戦いが始まった。海上要塞に立て籠る貴族連合軍は、若き皇女の軍を退ける。

そんな中、白馬にまたがった若き皇女が戦場をかける。ただひたすら前に、前にと。オーレリア將軍がいる場所へひたすら前に。そして

ユファイ「オーレリア將軍、貴女に一騎打ちを申し込みますわ！」

オーレリア「ユーフェミア皇女殿下：殿下自らがこの私に：一騎打ちを…」

オーレリアはそう言っただけでしぼしぼ考えて、そしてユファイを見据えながら喋り出す。
オーレリア「ふっ、面白いことを申される…。良いでしょう、皇女殿下。皇女殿下の八葉の腕前を見せてもらおうとしましょう！」

オーレリアは、大剣を構える。ユファイも緋の鞘から太刀を取り出して構える。
ユファイ「わたくしの太刀がどこまで通じるのか分かりませんわ。でもわたくしには支えてくれる仲間がいますわ！わたくしをここまで送り届けてくれた人達のためにも負けられません！」

オーレリア將軍とユファイ皇女は、ジユノー海上要塞にてぶつかることになった。

これは、若き皇女ユーフエミアが、帝国の英雄、西ゼムリアの英雄となっていく物語。劣等生の軌跡外伝、緋の皇女の軌跡、閃の軌跡のOP【明日への鼓動】物語は、七耀暦1204年3月31日へ。

帝都発ペキン着の横断鉄道の列車が、春に染まりかけている風景の中を駆け抜けてい

く。今、この貨客列車には、学生が多く乗っている。学生が列車に乗ることは別に珍しいことではない。ただ、帝都から東側へ向かう学生はいない。学校があるわけでもない。

普通なら、帝都の東に向かう学生はいない。だがこの日の帝都中央駅から東へ向かう学生で駅は混雑していた。白の制服を着ている者達。緑の制服を着ている者達。

真紅の制服を着ている者達。白と緑の制服を着ている者達は、同じぐらいだ。

だが、真紅のを着ている者達は明らかに少ない。白や緑の制服を着ている者達から、ある意味注目されていた。

??? 「おい、あの制服見たことないぞ」

?? 「ああ、でもさあの紋章？俺らと同じだよな？」

ヒソヒソと話している

そんな話を不快に思った、緑色の髪で、メガネをはめた少年が

?? 「僕は…僕は見せ物じゃないんだぞ」

メガネの少年はそう言って、列車に乗り込んでいく。しかし列車の座席はどこも埋

まっている。緑の少年は、キョロキョロと探していると、金髪の少女から

?? 「あの…もしかしたらお席をお探しですか？よろしければ、どうぞ」

?? 「え!？」

金髪の少女から思いもよらない申し入れに、メガネの少年は驚いた。

?? 「どうしたんですの？」

?? 「あ、ありがとうございます」

そう言つてメガネの少年は、荷物を荷物入れに置き、金髪の少女の横に座る。

?? 「まあ、なんて綺麗な方。でも何処かで見たような」

メガネの少年は、ついつい見とれてしまう。すぐに我に返り、金髪の少女の横に座る。

?? 「この女性どこかで見たはずなんだか？」

と思ひながら、女性を直視出来ない。2人の間に妙な間があくのである。

メガネの少年は、金髪の少女を直視できないが、少女の匂いや2つの膨らみを見ていた。

?? 「あのく貴方も同じ制服ですわね」

少年はビクツツとして声が出なかつたが、すぐに答えた。

?? 「そういえば君も同じ色の制服？」

話すことにより、少しオチツイタヨウナだ

メガネの少年は、白や緑を着た人間達のかっこうの的になっていたが、目の前の金髪の少女も同じ真紅の色の制服を着てるのを見て、ちよつと安心した。メガネの少年は、これから通うツールズ士官学院のことはちゃんと調べたはずだと思った。パンフレットも何度も隅々まで見た。

なのに、真紅の制服のことはどこにも書いてはいなかった。メガネの少年は、ツールズ士官学院に問い合わせてみようとも思った。制服が今年から変わったのではないかと、思ったりもしたが帝都中央駅でその思い込みも崩れさった。だが今、微かな希望を持ち始めた。

横に座っている金髪の少女は、自分と同じ真紅の制服を着ていると。自分だけの仲間外れではないのだと少し安堵したメガネの少年。すると横に座っている金髪の少女が、彼に話しかける。

?? 「帝都中央駅の混雑は凄かったですね」

?? 「確かに：いつもならこんなんじゃないんだが」

?? 「そうですの？」

?? 「今日は特別じゃないかな。この列車に乗ってるほとんどがトールズ士官学院行きだと思おうし」

?? 「そうなのですか」

?? 「ええ」

メガネの少年の言ったことに金髪の少女は納得したようだった。改めて金髪の少女は、メガネの少年を見据えて

?? 「自己紹介がまだでしたわ。わたくしの名前は、ユフィ・レンハイムと申しますわ」

?? 「ぼ、僕の名前はマキアス・レーグニッツだ」

ユフィは、レーグニッツと聞いて驚いた。カール・レーグニッツ、帝都で彼の名前を聞いたことはいないほどの人物。

カール・レーグニッツ帝都知事。革新派の有力人物である人物である。ギリアス・オズボーン宰相と共に帝都ヘイムダル改革を推し進めてきた実績がある。ユフィもそん

な彼とこんなところで会うとは思わなかった。

そして列車のアナウンスが流れる。

「本日は、帝都発、ケルディック経由、バリアハート行き旅客列車をご利用頂きありがとうございます。次はトリスタ、トリスタ。1分程の停車となりますので、お降りになる方は、お忘れのないようご注意ください」

アナウンスが鳴り終わると、列車に乗っている学生達がそわそわガヤガヤとをはじめた。トールズ士官学院があるトリスタ駅はすぐそこまで来ている。マキアスもユフィも緊張感が出てきた。

ユフィ「なんだか、緊張してきましたね」

マキアス「これから学院生活が始まると思うと緊張してくるな」

ユフィ「そうですね。あ、あのマキアスさん」

マキアス「ユフィさん、何かな？」

ユフィは、少しモジモジしながらマキアスにこう頼んだ。

ユフィ「あ、あのマキアスさん。宜しければ、わたくしと入学式がとり行われる講堂まで御一緒にいきませんか？わたくし、1人だと心細くて」

マキアス「ご、御一緒にですか!？」

ユフィ「あのー御迷惑なら…わたくし1人で…」

マキアス「御迷惑なんかじゃない。むしろ…僕は…」

マキアスは、ユフィを見据えてそう言った。マキアス自身もなぜそう言ったのかは、自分自身でも分からなかった。ただマキアスの中で何かが目覚めたのは言うまでもない。

ユフィとマキアスは、列車から降りて、トリスタの地に下り立った。帝都近郊都市

トリスタ、かの獅子心皇帝ドライゲルスが晩年にこの地で教鞭をとっていた。その学院こそが、トールズ士官学院である。トールズ士官学院は、彼が設立した学院なのである。

トリスタ駅から出ると、ライノの花が2人の入学を祝ってるかの如く花びらが舞っている。ユフィとマキアスはその光景を見て感動する。

マキアス「ライノの花が綺麗に舞っているな」

ユフィ「そうですわね」

緑の制服を着た学生は足を止めて、ライノの花を見ているが、白の制服を着た学生達は見向きもせずに通り過ぎていく。

ユフィ「貴族生徒の方々は、ライノの花が興味がないのでしょうか？」

マキアス「貴族生徒は、ライノの花どころか、平民だって興味がないのだろう……」

ユフィ「そうですか……」

ユフィがマキアスの言葉を聞いて表情を曇らせる。それを見たマキアスは

マキアス「どうかしたのかい？」

ユフィ「い、いえなんでもないですわ」

ユフィは思った。自分も貴族といえれば貴族になる。しかしマキアスを見ててその事を閉ざすのであった。

しばらく、ライノの花を見ていた2人は、トールズ士官学院がある方向へ歩き出す。トリスタの街には、最低限度のお店があるし、住民もトリスタの街に住んでいる。トリスタの住民は、温かな目で学院生を見ていた。

ユファイが教会でお祈りをしたいとマキアスに言つて、2人トリスタ礼拝堂でお祈りをやった。お祈りを上げた後、トールズ士官学院の方へ歩いて門をくぐつたところで、ユファイとマキアスは不意に言葉をかけられた。

小柄な緑の制服を着た女子生徒と、黄色い作業着を着たふくよかな男子生徒がユファイとマキアスに話しかけてきた。

?? 「ご入学おめでとうございます。うんうん君たちが最後までいただねユファイ・レンハイムさんとマキアス・レーグニツ君でいいんだよね？」

ユファイ「は、はい、初めまして」

マキアス「ええ、合ってますが、しかし何故僕達の名前を？」

マキアスがそう尋ねたら、小柄な緑の制服を着た女子生徒は、今は話せないと云つた。今度は黄色い作業着をきたふくよかな男子生徒がユファイとマキアスに話しかけてきた。

?? 「これが2人の申請した品かい？」

マキアス「ええ。パンフレット通りですね」

ユフィ「はい、わたくしのはこれですね」

マキアスとユフィは、己の得物をふくよかな男子生徒に預けた。

??「それじゃ二人とも 体育館へ急いでね」

緑の制服の少女は微笑んだ

ユフィとマキアスは、自分達が最後だと聞いたから急いで講堂まで来たが、緑の制服を着た生徒や白の制服を着た生徒達が来てるのを見て

ユフィ「さっきの方、わたくし達が最後だと仰られましたよね？」

マキアス「ああ、確かにそう聞いた。何が最後なのか……」

ユフィとマキアスは、何が最後なのか分からないまま、入学式がとり行われている講堂へ足を踏み入れる。講堂の中は、結構の人数が集まっており、緑と白の制服を着た生徒がほとんどだった。だがちらほらと真紅の制服を着た生徒達もいた。ユフィとマキアスは、互いに安堵した。

安堵した後は、2つ席が空いてるところに座る。

マキアス「それにしても、この制服が僕達だけじゃなくてよかった」

ユフィ「そうですね」

ユファイとマキアスがしゃべっていると、トールズ士官学院の教官とおぼしき人物達が講堂の前に集まってくる。

教官の中にヴァンダイク学院院长がいる。教頭が入学式の進行役を努める。そして、今年のトールズ士官学院の入学式が始まった。新入生の学生達は、緊張の表情をしている。そしてヴァンダイク学院院长が

オリヴァルト理事長からの祝電なのが読み上げられる。ユファイはちよつと嬉しい気持ちになる。形式な祝電であつても、妹の立場ならではの嬉しさがあるのだろう。そしてヴァンダイク学院院长が、ある言葉から力をいれ始める。

ヴァンダイク学院院长「――最後に君たちに1つの言葉を贈らせてもらおう。本学院が設立されたのは、およそ220年前のことである。創立者はかの、〔ドライケルス大帝〕―〔獅子戦役〕を終結させた、エレボニア帝国、中興の祖である」

ヴァンダイク学院院长「即位から30年あまり、晩年の大帝は、帝都から程近いこの地に兵学や砲術を教える士官学校を開いた。近年軍の機甲化と共に本学校の役割りも大

大きく変わっており

ヴァンダイク学院長「軍以外の道に進む者も多くなつたが……それでも大帝が遺したある言葉」は今でも学院の理念として息づいておる。【若者よ、一——世の礎たれ。】

ヴァンダイク学院長「“世”という言葉をどう捉えるのか。何を持って“礎”たる資格を持つのか。これからの2年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手がかりにして欲しい。ワシの方からは以上である」

ヴァンダイク学院長のお言葉が終わり、盛大な拍手が鳴り響くなか入学式は終わった。

ヴァンダイク学院長が壇上から去り、教頭が変わりにしゃべり始める。

教頭「これから、各自記されたクラスへと移動してもらおう。クラスにて、オリエンテーションを行う。では解散」

教頭の解散の合図で、緑の制服を着た生徒、白の制服を着た生徒は次々と立ちあがり、自分達のクラスへと歩きだした。

マキアス「クラスを記したもののなんか無かつたぞ!？」

ユファイ「わたくしでもすわ」

マキアス、ユファイ以外の真紅の制服を着た生徒も文句を言い出した。

?? 「ハイハイ!! 静かに。赤の制服の皆はここに残ってね」
と大きな声が響きわたった

ユフイやマキアス、その他の真紅の制服の着た学生達は、声を発した教官の方へ視線を向けた。その女性教官は、とても士官学院の教官とは思えない格好をしていた。

マキアス「ユフイさん、あれは!? 教官なのか? 格好から見てそんな風には見えないな」
マキアスは疑問を持ちながら周りを見渡したのだ。

するとユフイから ユフイ

「変わった格好の教官さんですね」

マキアス「変わった格好って問題だけじゃないだろ…」

マキアスは、ユフイの問いに戸惑いながらも、女の教官の話聞いていた。

?? 「どうやらクラスが分からなくて、戸惑ってるみたいね。実はちよつと事情があつてね。君達にはこれから【特別オリエンテーリング】に参加してもらいます」

?? 「へえ？」

?? 「特別オリエンテーリング？」

?? 「ふむ……？」

?? 「ちい……また厄介な事を……」

?? 「……」

真紅の制服を着た生徒達はそれぞれの反応を見せた。それは当然の反応であろう。パンフレットに書かれていないことをさせられそうになっているのだから。

そして女の教官は、ユファイ達についてくるように言った。真紅の制服を着た生徒達は戸惑いながらも彼女に付いていく。

ユファイ「わたくし達も行きましょうか」

マキアス「そうだな。いちいち考えていても仕方がない」

ユファイとマキアスは、最後尾から付いていくこととした。

ユファイとマキアスや他の者達がたどり着いた先は、随分と古びた校舎があるところだった。女の教官は、その古びた校舎の扉を鍵で開けると中へ入っていく。真紅の制服を着た生徒達は、渋々と文句を言いながら入っていく。ユファイとマキアスも古びた校

舎へ足を踏み入れる。

古びた校舎の中はカビ臭く、長年使っていないことがわかるような状態の有様だった。真紅を着た生徒達は、ますます怪訝な表情になっていく。一体こんなところで何をさせられるのかと。すると女の教官が1つの柱の場所に移動した。

?? 「ふんまああんた達なら大丈夫だとは思うけど気を抜かないでね」

女性教官はそつとボタンを押したのである

すると床が突然傾き地下へ真つ逆さまな状態になる。不意を疲れた生徒達は下へ落ちていった。ユフィは武道の心得があるから、何とか踏ん張ろうとしたが、女の教官からの妨害に合い地下へと落ちていった。

旧校舎地下に落とされた生徒達は、カビ臭い匂いとホコリが舞って咳き込んでいた。落ちてきた場所は、ほとんど最近に使われていないような部屋であった。達也はすぐに気がつきアリサに駆け寄る。アリサが倒れていた場所は、達也の近くだった。

達也「アリサ、大丈夫か？」

アリサ「ええ、大丈夫よ……」

アリサはスカートがめくれていないかチェックを入れる。めくれてないことを確認すると安堵した。念のためにアリサは、達也に聞いてみる。

アリサ「達也、見てないよね？」

達也「見てないが」

アリサ「別にあつさり、見てないって言わなくても……」

アリサは、達也が照れながら見てないって言うてほしかった。他の男に見られるのは嫌だが、達也になら見てほしかった。新しく下ろしたニューのピンクのパンツ。望みが無くても僅かな可能性に掛けたが、あつさりと潰えた。色々と思考が回ってるアリサに達也が話しかける。

達也「アリサ？」

アリサ「た、達也!？」

達也「先ほどからずっと黙りこんでいたからな。やはりどこかぶつけたか？」

アリサ「どこもぶつけてないわよ」

達也とアリサはこんなものである。ユフィとマキアス達はどうなったのか……。

マキアスは、ふと目を開けると暗闇に包まれた場所だった。

さつきまで薄暗いとはいえ旧校舎にいたのだ。そして地下に落とされたとしても真つ暗になることがあるのかと考えていた。

そして無意識に鼻を突き出した。すると

ユフィ「あ、アン……や、やめてください……！」

マキアスは、気づいてはいないのだが、彼がいる場所はユフィのスカートの中。そして鼻を突き出した場所は、ユフィの大事な場所。

あろうことかマキアスは、さらに突き出す。

ユフィ「ア、アン、い、いい加減にやめてください!!!」

ユフィは、スカートの中からマキアスの顔を引つ張り出してから、往復ビンタをやった。何が何だかわからないマキアスは、往復ビンタをくらい尻もちをついた。ユフィが真つ赤にしてスカートを押さえる姿を見て、マキアスはようやく自分が何をやったのか気づいた。

一気にマキアスは青ざめた表情になる。そしてユフィに

マキアス「……あ、あれはわざとじゃないんだ。信じてくれ、ユフィさん！」

ユフィ「……………」

ユフイは、ジト目でマキアスを見て、プイと反対方向を向いた。女子生徒達からは、ユフイと同じジト目で見られ、男子生徒達（ガイウスを除く）からは、憐れんだ目で見られた。

マキアスがユフイにラツキースケベないイベントを起こし、女性陣から冷やややかな目と男性陣からは、複雑な視線を受けていた。

マキアス「言っておくがわざとじゃないからな」

アリサ「いくらわざとじゃないと言ってもアレは…私も同じくひっぱたいてやるわ」
達也「アリサ…まあ確かにな」

達也も過去にアリサとラツキースケベイベントを起こした事がある。その後、1週間は口も聞いてくれなかった苦しい思い出がある。だから達也は、苦笑を浮かべるしか出来なかつた。

微妙な空気が流れた後、ユフイもちよつとマキアスに対する仕打ちに後悔の念もあつた。なにも往復ビンタをする必要はなかつたのではないかと。せつかくマキアスと出

会えたのに、これで疎遠になるんじゃないかと。

ユファイがそう悩んでいたら、突然あの女性教官の聞こえた。

?? 「マキアス：ちよつと問題を起こさないでくれる？」

マキアス 「ぼ、僕は別に問題は起こしてないですよ！」

マキアスは必死に違うと弁明したが聞き入れてはもらえなかった。そんな中で、入学案内書、パンフレットや制服以外に贈られてきたものから聞こえてきたのだった。マキアスや他の者達はそれを手に取る。

?? 「それは特注の《戦術オーブメント》よ」

それから女性教官による「戦術オーブメント」の説明があり

?? 「これはエプスタイン財団とライنفォルト社が共同で開発した次世代の戦術オーブメントの1つ。第5世代戦術オーブメント、【ARCU】よ」

達也 「ARCU……そういうことか」

アリサ 「みたいね……」

エマ 「戦術オーブメント……魔法（アーツ）が使えるという特別な導力器のことですね」

?? 「そう結晶回路（クォーツ）をセツトすることで魔法（アーツ）が使えるようになるわ。というわけで各自受け取りなさい」

しかし完成させて既に学院に持ち込むとは、流石に噂以上の会社というわけか、心の中で達也は思っていた。しかし達也だけでなくアリサも同じ事を考えていたのである。

だが、達也やアリサの知らぬところで、日本の四葉の技術も入ってるのである。四葉は前からラインフォルト社と提携を結ぶことを考えていた。だがグエンは四葉と組むことをよしとしなかったが、娘のイリーナは、提携を結ぶ事を決定していた。

帝国正規軍は密かに日本の四葉家から新しい戦車を購入することも決められていた。そしてそれをラインフォルト社が大量に生産できるようにも計らっている。全ては鉄血宰相と四葉深夜による決定から進み始めていた。

帝国の革新派と日本の四葉の同盟が、帝国の貴族派、日本の十師族同士の争いが加速していくことに。そしてG∴D教団の事件で混乱していたクロスベルも両者の争いに巻き込まれていく。

それはカルバード共和国でも両者と同じようになりつつあった。ロックスミス大統領派と反対勢力の対立は目にもみるようになるわかってしまうほど悪化していた。帝国ほどにまでいつてはいないが、いつ同じになるかわからないところまできているのは確かなのだ。

そんな激動の時代の中、作られたのが、クロスベルの特務支援課であり、オリヴァルトとミサキの提唱でトールズ士官学院の中に新たに設立された特科クラスVII組であった。

と、横道にそれてしまったが話を戻そう。ユフイや達也達は、自分達の得物が置かれてる台座の場所までやってきた。得物と色んな色に輝くクオーツがそこにあった。みんな、クオーツを手に取りARCSUSの中心に、はめ込んだその瞬間に輝き出した。

??「君たち自身とARCSUSが共鳴・同期した証拠よ。これでめでたく魔法（アーツ）が使用可能になったわ。他にも面白い機能が隠されているんだけど……まっそれは追々つて所ね。それじゃあさっそく始めるとしますか」

ここから奥にダンジョンが広がっている。

?? 「そこから先のエリアはダンジョン区画になってるわ。割と広めで入り組んでいるから少し迷うかもしれないけど無事、終点までたどり着いたら旧校舎1階に戻ることが出来るわ。まっちょよつとした魔獣なんかも徘徊してるんだけどね」

女性教官がそう言った後、批判の言葉が飛びまくることとなる。

?? 「……みんなで協力しあって進めば何とかなるはずよ。まずは行動するのみよ」

女性教官は批判の言葉をかえし、ユファイ達にそう言った。互いに協力しあえば、おのずと道は開けると女性教官は言いたかったのだろう。

ユファイ達は、地下通路の奥の方を見据える。その中でユーシスが1人で先に歩き出す。

マキアス 「待ちたまえ、君は1人で行くつもりか？」

ユーシスはマキアスの方を向き

ユーシス 「馴れ合うつもりはない。それでも《貴族風情》と連れ立って歩きたいのか

？」

マキアス「ぐう………」

ユーシス「まあ魔獣が怖いのであれば同行を認めなくてもいいが。武を尊ぶ帝国貴族としてそれなりに剣は使えるつもりだ。貴族の義務（ノブレス・オブリージユ）」

として、力なき民草を保護してやってもいいが？」

貴族の義務（ノブレス・オブリージユ）は間違っではないが、今のマキアスなら激昂させかねない状況になってしまっただろう。やはり…マキアスの表情はみるみるうちに怒りに染まり

マキアス「だ、誰が貴族ごときの助けを借りるものか。もういい！ だったら先に行くまでだ！ 旧態依然とした貴族などより上であることを証明してやる！」

そう言っつてマキアスは先に歩いて行ってしまった。ユフィはそれを見て、マキアスの後を追う。

ユフィは、みんなが何か言っているのを気にしながらマキアスの後を追う。ほとんど使われた形跡が無い中、マキアスの足跡を見て

ユフィ「マキアスさん、そんなに急がなくても…」

ユフィは、マキアスに追い付くため走り出す。

旧校舎の地下迷宮は、楽々なものではなかった。すぐに分かれ道が現れる。ユフィは2つの分かれ道の真ん中で

ユフィ「マキアスさんは、どちらの道にいかれたのでしょうか？」

ユフィは2つの分かれ道を交互に見て

ユフィ「こちらですわ」

ユフィは、そう言つて左の方へ走つて行く。

ユフィは、中々追いつけないので、五感の神経を全集中させた。

マキアス「き、君も1人で来てたのか？」

ユフィは、マキアスから話しかけられたが、気づかなかつた。彼女は神経を全集中させると周りが見えなくなる場合がある。だからマキアスから話しかけられてもわからなかつたのだ。

マキアスは、ユフィの肩に手を置いた途端、刀で斬られそうになり、後ろに後退しながら尻もちを付く。

マキアス「……！あ、危ないじゃないか！」

ユフィ「…!!マキアスさん!」

ユフィは慌てて刀を鞘に直しマキアスに駆け寄る。

マキアス「ぼ、僕は君に話しかけようとしたただけだ!」

ユフィ「マキアスさん、ごめんなさい」

ユフィは、マキアスに謝罪をする。マキアスはやれやれと思いつつながら

マキアス「不意に話しかけた事は謝るよ」

ユフィ「ごめんなさい、マキアスさん。わたくし、集中すると周りが見えなくなるんです」

マキアス「まあ、僕も集中したら周りが見えなくなるかな」マキアスは、何気にユフィにフオローを入れた。マキアスも勉強に集中しすぎて、飲みかけのコーヒーに入ったコップをこぼしたことも多々あるのだ。

ユフィ「マキアスさんもそうなのですか?」

マキアス「うん、まあね」

マキアスの答えにユフィはクスクスと笑った。ユーシスと対峙していた時のマキア

スの表情は、なんだか怖いと思っていたが、こうやって冗談を言うマキアスの表情は怖くないと感じていた。

ユフィ「それじゃあ、探索を再開しましょうか、マキアスさん」

マキアス「そうだな」

ユフィとマキアスは、そう言うのと探索を再開した。歩き出して、すぐにわかったことだが、この辺りに人の出入りはほとんど無いくらいに埃やカビが舞っていた。

マキアス「しかし学園にこのような場所があるとは」

マキアスは辺りを見ながら 呟いた

ユフィ「トールズ士官学院の旧校舎にこのような場所があるなんて聞いてませんわ」

マキアス「本当にここは旧校舎なのか？」

ユフィは内心驚きを隠せなかった。父親、兄オリヴァルトからトールズ士官学院の旧校舎の事は聞かされてはいた。

だが今いるような場所は聞いたことがない。

ユフィは戸惑いながらも、探索をすることを決意し

ユフィ「マキアスさん、ここは進むしかないですよ」

マキアス「ユフィ君はこういうところは平気なのかい？」

ユフィ「わたくしは平気ですよ」

マキアス「この娘 は 一体何者なんだ？普通ならこのような場所慣れてるとは言わないだろう」

マキアスは 疑問に思いながらも 前に進むのであった

しばらく進んでいくと、魔物が徘徊しているので、ユフィは太刀で、マキアスは導力銃で応戦する。

マキアス「たあ!!」

ユフィ「紅葉斬り!!」

マキアスの援護射撃で魔物がひるんでいるうちに、ユフィは太刀で仕留める。

マキアス「お疲れ ユフィ。しかし君のその武器は東方の物なのかい？」

ユフィ「エエ そうですわ 帝国では珍しいのかしら」

ふと微笑んでいた。

東方の武器、主に昔は大亜や日本あたりを指していた。今の時代では日本系の刀が東方の武器の主流になっていた。エレボニア帝国では珍しい武器だが、カルバード共和国より東の国々では、有名な武器の1つと数えられている。

太刀を一躍有名にしたのは、ユン・カーファイ。彼は大亜の国の人間だったが、日本に亡命し八葉一刀流の道場を日本に開く。カシウスや九島烈など弟子などに恵まれる。

そこから色々と派生した流儀も存在する。例えば日本の千葉家も八葉の流れを組み込んだ一族でもある。

ユフィは、自らの太刀をマキアスに見せる。

マキアス「帝国の剣より小さいが、重さは…ある！」

ユフィ「初心者では、太刀を持ち上げることも出来ませんわ」

マキアス「…そ、そうなのか!?!」

そんなことを喋りながら、2人は歩みだした。そして地下迷宮を歩いて進んでいると、どこからかカタカタと音がしてくる。

マキアス「何の音だ？」

ユファイ「近づいてきますね」

2人は背中合わせでお互いの得物に手をおく。カタカタ、カタカタどこから近づいているのは間違いない。距離が縮まってるのは確かなのだ。

お互い気を配りながら警戒していると、マキアスの肩にポタツと何か落ちてくる。

マキアス「つ、冷めたっ…何だ…？」

マキアスが真上を見上げると、何か落ちてくる。それもマキアスをめがけて。ユファイはそれに気付き太刀を振るう。しかし肝心なところでかわされる。

ユファイ「は、早い！」

マキアスを襲おうとした何かは、次なる目標をユファイに定めていた。マキアスは導力銃で、何かを狙い撃つ。しかし寸前のところでかわされる。

マキアス「スピードが早い。何なんだアレは…ユファイ君！君にさっきのが…」

ユファイ「ええ、わたくし達の背後の天井から近づいてきた魔物だと思いますわ！」

マキアス「な、なんであんな魔物が旧校舎に!!」

魔物の姿は、蜘蛛の巨大化したようなものだ。ユフィは、太刀で巨大蜘蛛に斬りかかるが前脚で弾かれる。

マキアスもユフィの援護射撃を行い、なんとかしようとしたが、弾は硬い皮膚にはばかれる。

マキアス「何だ、あの巨大蜘蛛の硬い皮膚は！」

ユフィ「…通常の攻撃は：おそらく効かないでしょうね…」

マキアス「通常の攻撃が効かないならどうすれば…？」

ユフィ「…やるしかないですわね」

マキアス「ユフィ君…!？」

ユフィはそう言うと太刀を鞘にしまう。しまったことにマキアスが驚く。ユフィは巨大蜘蛛を見据えながら呼吸を整える。太刀の鞘を左手に太刀を右手に持つ。

ユフィ「八葉一刀流…：弍の型…：裏疾風…：焔！」

高速なスピードで巨大蜘蛛を斬り付けて背後に回って螺旋撃のような攻撃を加えた。

ユフィの攻撃を食らった巨大蜘蛛は、よろめきその場に倒れ込んでパチパチと燃えて

異様な匂いを発していた。マキアスはユフィの攻撃を見て腰を抜かしそうになったが、何とか踏ん張っていた。

ユフィ「…？マキアスさん大丈夫ですか？」

マキアス「だ、大丈夫だ…」

ユフィ「…さっきのアレを見て驚かれていますね…」

ユフィはパチパチと燃えている巨大蜘蛛を見ながらそう言った。ユフィは、マキアスに自分が怖いイメージを印象付けてしまったと思ってしまった。

だがユフィの思いとは逆にマキアスは

マキアス「正直言えば驚いたさ。でも恐怖とかの気持ちではないんだ。そ、そのなんと言うか、カッコいいと言うかなんと言うか」

マキアスは、ちよつと自分で何を言ってるのかわからない状態になっていた。そんなマキアスを見てユフィは

ユフィ「…：…カッコいいですか…：…ウフフ、初めてそんなこと言われましたわ…」

マキアス「そ、そうなのかい？」

ユフィ「そうですわ」

過去、兄であるオリヴァルトと冒険しているときは、可憐だとか綺麗だとか、凄いと

言われてきたが、カツコいいとは言われた事がないのだ。だからマキアスから言われたことは新鮮味であった。

ユファイ「∴巨大蜘蛛は倒しましたが、ここは早く抜けることが先決ですわね」

マキアス「そうだな。こんな巨大蜘蛛に何回も襲われていては、身が持たないからな」
マキアスがそう言うと、こちらへ向かってくる足音が聞こえてきた。

第0章-2-2話-オリエンテーション

アリサ「あら？貴女達」

ラウラ「そなたらか、ここで戦闘をやってたのは？」

足音の正体は、アリサ達であった。

ユフィ「ええ、巨大蜘蛛に襲われて、戦闘になってしまいましたね」

エマ「巨大蜘蛛？巨大蜘蛛と言うのは、アレのことですか？」

エマが燃えている巨大蜘蛛の残骸の方を指で指した。ラウラが興味ありの表情で

ラウラ「…そなた、八葉の者か？」

ユフィ「ラウラさん、八葉をご存知で？」

ラウラ「ああ、父上から聞かされていた。いずれ八葉の者と出会うだろうと」

ヴィクター S アルゼイド

ヴィクターとは、ラウラの父親であり、アルゼイド流を極めた者であり、光の剣匠と

呼ばれる人物である。

ユフィ「ラウラさんのお父様が!？」

ラウラ「ああ。まさか、こんなに早く会えるとは思わなかったが…」

ユフィ「わたくしも、女性のアルゼイド流の方と出会えて嬉しいですわ」
ユフィとラウラは、お互いに手を出し合って、宜しくと声をかけた。

アリサ「なんだか、私達にはわからないわね、エマ?」

エマ「そうですね」

マキアス「そうだな、僕達にはわからない、剣術家同士の何かなのか…」

グオオオオオオ!!!

ユフィ達がいる地下迷宮の床が雄叫びや地響きで揺れる。それもユフィ達が目指す方の方角から聞こえてきた。

ラウラ「さっきの雄叫びといいこの地響き…この先にいるのか!」

エマ「そうですね」

ユフィ「もしかすると、他の方々達が戦ってらっしゃるのでは?」

アリサ「:おそらく達也達が戦ってるんじゃないかな…」

マキアス「僕達も急いだ方がいいんじゃないか?」

ユフィ達が話してる最中でも雄叫びと地響きは続いていた。だがユフィは、奥の方を見つめて

ユフィ「わたくしも行きましよう。どのみちこの通路しかありませんし…」

マキアス「そうだな。君が覚悟を決めてるのに、僕が覚悟を決めないわけにはいかな

いだろ」

アリサとエマは、ユファイとマキアス事を気にしてるようだが、ラウラは気にしてはいない。

ラウラ「アルゼイド流の人間として逃げるわけにはいかない」

ユファイ「アリサさんもエマさんも準備は、宜しいですか？」

アリサ「…わ、私は準備出来てるわ！」

エマ「私もです」

ユファイ「それではいきましょうか」

ユファイがそう言うのと先に走り出した。そのあとをマキアス、ラウラ、アリサ、エマの順番に雄叫びと地響きができる中心地へ走り出したのだった。

雄叫びと地響きに足を取られながらもその元凶まで走る。

ユファイは、少しばかり不安もあった。

リベールの異変を乗り越えてきたとはいえ、ここにはオリヴァルトやエステル達はいない。

自分達でなんとかしないといけないという気持ちちはやり始めていた。

そんなユファイに気づいたのかマキアスが

マキアス「ユファイ君、どうかしたのか？さつきから険しい表情になってるが？」

ユファイ「……え!?わたくし、その表情をしてみましたか？」

アリサ「してたわよ」

マキアス「…正直言えば…僕も不安さ。こんな雄叫びや地響きを聞いていると」

アリサ「私だつて不安ね」

エマ「私も不安です。でも…不思議とみなさんとなら…何だかやれる気がするんです」

ラウラ「…ふむ、そうだな。不安や焦りよりも何だか不思議と力が湧いてくるようだな」

ユファイも感じていた。うちなる力が湧いてくるのを。ユファイにはわかる。

ユファイは、リベールの異変で何度もこの経験をしている。

リベールでの苦難を潜り抜いてきたあの力だとわかった。

オリヴァルトやケビンからは、ユファイが持つ天性

【繋がる力…絆の力】

そう名付けられたもの。

リベールの異変で、エステル達はユファイの力で何度も危機を救われている。

ユファイ「みなさん、行きましよう！この先、何があつてもみなさんとならやれそうで

す！」

マキアス「そうだな。君の言葉は不思議と不安な自分を奮い立たせてくれる」

アリサ「私はいつでもOKよ」

ラウラ「私もだ」

エマ「ええ、行きましょう！」

ユファイ達は、再び駆け出した。地響きと雄叫びの元凶がいる場所へと。

剣のぶつかる音、銃の弾の破裂音や導力魔法を使用している様々な音が聞こえる。ユファイ達が向かっている先で別のみんなが戦っているのは間違いない。

ユファイ達が広々とした空間に出た時は、達也達が、石の塊のガーゴイルと戦っていた。マキアス、アリサ、エマは、ユファイとラウラの攻撃をしやすくするために援護射撃をやる。アリサは導力弓、マキアスは、導力銃、エマは魔導杖を使い援護射撃をやる。しかしマキアスの導力銃、アリサの導力弓は硬い皮膚によって弾かれる。

マキアス「なっ!!」

アリサ「なんて硬さなの！」

リン「ああ、俺や達也の太刀も簡単に弾かれた！」

ラウラが勢いよく大剣を石の塊のガーゴイルに振り下ろした。ダメージは与えたよ

うだが、すぐに再生する。

マキアス「な、なんだと！」

達也「何度斬り付けても導力魔法で砕いてもすぐに再生する！」

ユーシス「しぶとさだけは、一人前だな……」

斬つても、叩きつけも、魔法で砕いても、復活する石の塊のガーゴイル。するとリインと達也が前後に分かれながら走り出して

達也・リイン「紅葉斬り！」

前後から切り裂かれた石の塊のガーゴイルはよろめきながらもなんとか持ち直す。

リイン「やっぱりダメか？」

達也「いや……ダメではなさそうだな……。あと一押し二押し……あればいけるか！」

達也はずっと石の塊のガーゴイルの復活具合を見ていた。最初に攻撃して再生した速度よりも遅くなってるのを気づいた。そしてもう一人気づいているものがいた。

それはユフィである。ユフィもマキアスやアリサ、エマやラウラの攻撃、先程の達也とリインの攻撃から再生スピードを割り出していた。

ユフィ「みなさん、これからガーゴイルに総攻撃を仕掛けます！エマさん、エリオットさんは、導力魔法でガーゴイルに攻撃を！」

エマ「わかりました」

エリオット「うん、やってみる」

ユフィ「フィーさんは、ガーゴイルを貴女の動きで振り回してください！」

フィー「ん、わかった」

ユフィ「マキアスさん、アリサさんは、遠距離からの牽制をお願いします！」

マキアス「ユフィ君！任せたまえ！」

アリサ「わかったわ」

ユフィ「ユーシスさんとラウラさんは、側面からの攻撃をお願いします！」

ラウラ「承知！」

ユーシス「わかった！」

ユフィ「達也さん、リインさん、貴方達は八葉の使い手でしょ？」

達也「まあな」

リイン「ユフィ、君も太刀：それじゃあ」

ユフィ「そうですわ。2人には、紅葉斬りをガーゴイルに！」

達也「わかった！」

リイン「わかったけど、君は君で」

ユフィ「まあ、見ててください！」

ユフィの指示通りにみんなは所定の位置に移動してからの総攻撃が始まった。凄ま

じい音が鳴り響く中、達也とリインは、駆け出していく。ユフィはそつと太刀を鞘に直し一点を見つめる。

ユフィと達也とリインのARCSが光だしていた。

そしてその光は、すべてのメンバーのARCSが光で結ばれていく。

達也とリインの紅葉斬りが石の塊のガーゴイルをよろめかせる。そしてそこにユフィの攻撃が炸裂する。

ユフィ「紅葉斬り!!」

ユフィの紅葉斬りで、石の塊のガーゴイルの首が空中に舞う。ユフィはラウラにユフィ「ラウラさん!最後はお任せします!」

ラウラ「任せろ!」

ラウラは、床を思い切り蹴り飛ばして高くジャンプして、空中に舞う石の塊のガーゴイルの首を大剣で振り下ろした。

石の塊のガーゴイルの首は真つ二つに割れながら消えていく。首が斬られて消滅と同時にガーゴイルの身体も徐々に消えていき、最後には何も残らなかった。

倒した瞬間、エマとエリオットがその場に座り込んだ。達也とリインは互いにハイタッチを交わっていて、リインと達也がユフィのところに来た。そしてハイタッチを交

わしたのだった。

達也とリインとユフイはハイタッチ交わした。

ユフイ「達也さんとリインさん、見事に息ピッタリでしたね」

リイン「まあ、双子だからね」

達也「双子でここまで合わせられたら凄いだろうさ。大方は、ARCCUSの新機能に助けられたのさ。そうなのだろう、サラ教官？」

達也がそう言ったため、みんなが階段の方を向く。そこにはあの女の教官が立っていた。名前はサラ・バレストラインである。

サラ「ありや達也にはバレてたか。まあそうね、ARCCUSの真価ってワケね」

階段の上にいるサラ教官が、ユフイ達の所へ降りてくる。

サラ「いやくやつぱり友情とチームワークの勝利よね。うんうんお姉さん感動しちゃったわ」

サラ教官は全て見て見たようなことを言った。達也やフイーは、こんなタイミングで来るなんてと言った。他のみんなもそれには同意であった。

そしてサラ教官がオリエンテーションについて話すようだ。

サラ「…これにて入学式の特別オリエンテーションは全て終了何だけど……何よ君達、もつと喜んでもいいんじゃない」

マキアスは、サラ教官に喜べないと怒り、アリサは疑問と不信感しか湧いてこないと言っている横で達也がため息をはいている。でもユフィは、この疲れさえも気持ち良いものに思えるのは何故?と思っていた。やはりリベールの旅のことを思い出したからのか?今のユフィにはわからなかった。

今サラ教官が、1人1人の疑問や疑念に答えている。「Ⅶ組」がなんの目的に作られ、なぜ身分や出身が関係なく集められたのか、なぜユフィ達がなぜ選ばれたのかを。

サラ「一番判りやすい理由はその《ARCU》にあるわ」

エマ「この戦術オーバーメントに?」

サラ「エプスタイン財団とラインフォルト社と日本のFLT社が共同発した最新鋭の戦術オーバーメント。様々な魔法(アーツ)が使えたり、通信機能を持っていたりと多彩な機能を秘めてるけど……その真価は「戦術リンク」なのよ」

エマ「さつき、みんながそれぞれつながっていたような感覚……」

サラ教官は続けて、戦場に置ける実用性を話した。ARCUが戦場に置ける革命だといい、理想的でもあった。しかし現時点ではARCUに個人差があり、新入生の中でユフィ達11人は、とにかく高い数値を示した。そして身分や出身も関係なく選ばれた理由でもある。

つまり能力第一を取ったってことだろう。

ラウラ「なるほど」

マキアス「な、なんて偶然だ……」

ラウラとマキアスが声に出して言う。

サラ「さて——約束通りに文句の方を受け付けてあげる」

サラ教官は約束の文句の受付をやってるみたいだがどうなることやら……

サラ「——トールズ士官学院はこのARCSの適合者として君たち11名を見出した。でもやる気の無い者や気の進まない者に参加させるほど予算的な余裕があるわけじゃないわ。それと、本来所属するはずだったクラスよりもハードなカリキュラムになるはずよ。それを覚悟してもらった上で「Ⅶ組」に参加するかどうか——改めて聞かせてもらいましょうか？」

ちなみに辞退者は、本来所属クラスに戻るようだ。だがユフィや達也、リインは答えはもう決まってる。それは誰かに言われたからではない。ユフィは、自分自身の見聞を広げるためだけではなく、帝国を帝国の今の現状を自分の目で確かめたいからである。

達也とリインは自分達の出生や両親を探すために。心で決めてきたのだから。…自分達には退路はないのだから。達也達がいざ行こうと思つたらユファイが先に

ユファイ「ユファイ・レンハイム、是非、参加させてもらいますわ」

サラ「やつぱり一番乗りは貴女ね。まあ予想通りだけど」

ユファイ「無理を言つて入学させてもらえたのですから。だからわたくしを高められるところならどこでも構いませんわ」

己を高められる場所という言葉に反応する達也とリイン。どうやら2人も本当の両親や出生のことを探す以外にもあるのが、己を高められる場所だったのだ。達也とリインは同じく前へ出て

達也「達也・シュバルツアー——自分は特科クラスⅦ組に参加致する」

リイン「リイン・シュバルツアー、同じく特科Ⅶ組に参加します」

サラ「なるほどなるほど……。男子はあんた達が一番か。まあ予想はついたけど」

サラ教官が何かを言つてるが、ユファイにはうまく聞き取れなかつた。達也、リインの宣言後は、みんなが参加表明をされていき…

アリサ「——私も参加します」

サラ「あら意外ね、てつきり貴女は反発して辞退するかと思つただけど？」

アリサ「―確かにテスト段階のARCSが使われているのは個人的には気になりますけど……この程度で腹を立てていたらキリがありませんから。それに達也が参加してするのに、私が参加しないわけにはいかないから」

アリサは、達也がARCSの開発に関わっていたことに驚いたし、まあそれだけではないのだが。アリサは達也の顔をじっと見ている。

達也「なんだ、アリサ？」

アリサ「なんでもない」

アリサはすぐに他の方を向いた。なんだかんだで、エリオット、ガイウス、ラウラ、エマと参加表明をやっていた。

フィーが参加表明が終わったところで、マキアスとユーススが再びケンカを始める。

ユーススはマキアスを尻目に：前に出てきて

ユースス「ユースス・アルバレア《Ⅶ組》への参加を宣言する」

マキアスとユーススはまたもめ始め：散々言い合った後に

マキアス「マキアス・リーグニッツ！特科クラス【Ⅶ組】に参加する！古ぼけた特権にしがみつく、時代に取り残された【貴族風情】にどっちが上か思いしらせてやる！」

ユースス「面白い！」

マキアス・ユーシスが参加した時点で、全員の参加表明となり、笑顔でサラ教官が

サラ「これで11名——全員参加ってことね！——それではこの場をもつて特科クラス《VII組》の発足を宣言する。この1年ビシバシしごいてあげるから楽しみにしてなさい——！」

ここにツールズ士官学院特科クラスVII組が発足した。後々に帝国史に名を刻むことになる。いや帝国史だけではなく、ゼムリア史の中に名前を刻まれることになっていく。

ユファイ達が知らない所に入り口付近に3人が会話をしていた。1人はミサキである。ミサキは、ロイドと会つてすぐに列車でトリスタまで駆け付けてきた。自身も発足に携わつたVII組を見るために。

ヴァンダイク「やれやれまさかここまで異色の顔ぶれが集まるとはのう。君の妹君も含めて。これは色々大変かもしれないな」

オリビエ「確かに。——でもこれも女神の巡り合わせというものでしょう」

ヴァンダイク「ほう——？」

オリビエ「ひよつとしたら、彼らこそが“光”となるかもしれません。動乱の足音が

聞こえる帝国において対立を乗り越えられる唯一の光に――

ミサキ「私も、オリビエさんの言ってることに賛成ですね。オリビエさんの妹君、ユフィさんですか。あの子からは何か特別な何かを感じるんですよ。あの子がⅦ組を、そして国家：エレボニアを……そしてクロスベルを……正しい何かに導いてくれるんじゃないかと思えるんです。かつて私を導ってくれたあの人みたい……」

オリビエ「君もクロスベルでは、そう言われてるんじゃないのかい？」

ミサキ「私は、鉄血の子供達の一員になってしまいました。もう半分は汚れてしまいましたから。そう言われてるのは……ロイドです」

オリビエ「ミサキ君、君は汚れてはいないよ。君の心は綺麗なものだって、エステル君やヨシユア君が言っていたからね。綺麗な心だからこそ、君は僕のⅦ組構想に協力してくれたのだろう？」

ミサキ「……私ができるのはこれくらいですから……。クロスベルでは、特務支援課という部署が希望の光になります。帝国でも希望の光をつてオリビエさんの考えに共感したんです」

オリビエ「こちらこそ、ミサキ君。これからもよろしく頼むよ」

ミサキ「はい」

第0章―トールズ士官学院編終了。

第1章―初めての特別実習編―闇は動き出す編―

第1章-初めての特別実習編-闇は動き出す編- 第1章-3-1話-2週間で終わって。

第1章-初めての特別実習編-闇は動き出す編

1-1-204・4・17-朝-第3学生寮-306号室-ユフィの部屋

激動の2週間で過ぎようとしている。その2週間の内には色々であった。ユフィ達が第3学生寮に来た頃は、とても学生寮として、生活を出来るものではなかった。あのオリエンテeringが終わった後にユフィ達は簡単な掃除を全員で疲れた身体にムチを打ってやっていったのだ。

それだけではなく、第3学生寮には、お風呂がなくユフィ達は、第2学生寮に行ってお風呂を借りなくてはならない始末だった。そして昨日やっと急ピッチで作れた第3学生寮のお風呂が完成したのだった。お風呂は男女にちゃんと分かれてるみたいだし、簡素の作りではなかった。

流石は、ユースやユフィがいる手前、本当の簡素のお風呂には出来なかったのだろう。まあ学院のトップは知っていても当然だろう。

そんな中ユフィは机の方へ行き、帝国時報を手に取り、気になる事がなく見てみる。

【クロスベル警備隊の一部、暴走しクロスベル市内を一時占拠】

【クロスベル警察特務支援課とクロスベル遊撃士支部の協力により解決される】

暴走の原因は、ウルスラ病院のヨアヒム・ギュンター教授が深く関与しており、クロスベル警察捜査一課は慎重に捜査を進めている。

マクダエル市長から、ロイド・バニングス、ミサキ・カミジヨウの2人は表彰される。帝国時報・クロスベルタイムズのページの真ん中にロイドと嬉しそうにとなりに写るミサキの姿が写真があった。

ユフィ「ミサキさん……良かったですね」

ユフィは、ミサキの事は知っている。オリビエが前に連れて来たことがあるのだ。

ミサキは、自分の素性をユフィにも話したのだ。包み隠さず全てを彼女に。

ユフィは、大粒の涙を流しながらミサキの話を聞いていた。そしてミサキの身体を抱き寄せてたのだ。力強く抱きしめたのだ。

ミサキは、自然と涙が零れた。強く抱きしめられたのは、ガイとオリビエに抱きしめられた以来だったからだ。

少しでもオリビエの力になってあげたいと心に決めていた。そこにユフィも抱きしめてくれたから、この兄妹は偉大だと心に思った。

もちろんユフィも同じ気持ちであるのは変わらない。ミサキの力になってあげたいと思っている。ただ皇女である以上、表だって手助けが出来ないのが、歯痒いところでもある。

ユフィは、部屋の窓を開ける。するとトリスタの街を包むひんやりした風が部屋を吹き抜ける。

ユフィ「春先のひんやりした風が気持ちいいですわ」

今の彼女の姿は、下着姿である。シルクの白の花柄が入ったブラとブラと同じ模様のパンツである。

彼女の好みの色は白だが、別に色モノを持ってないわけではない。青や緑、ピンク系なども持っているのだ。

それとミサキからのプレゼントで貰った赤と黒の下着もあるが一度も身に付けたことはない。

ユフィ「ふつつ、わたくしにもミサキさんみたいに、素晴らしい殿方と巡り会えるのでしょうか」

ユフィは、ルンルン気持ちで身支度を始めた。

ユフィ達が第3学生寮で、学院へ行く準備を整えている頃、学院の方ではサラ教官とヴァンダイク学院院长と通信でオリヴァルト皇子が話していた。

トールズ士官学院―学院院长室

オリヴァルト「……ということだ。サラ教官、引き受けてくれるかい？」

サラ「皇子殿下からの提案ならば、断れないでしょう」

ヴァンダイク「突然の言い出しですまないのお、サラ教官」

サラ「ええ、あたしもうすすすとは感じてはいましたから」

サラ教官、オリヴァルト皇子、ヴァンダイク学院院长が話しているのは、1―1組 ア

ンジエリナ・ログナー、1―3組 スハルト・オルランド。

アンジェリナとスハルトは、入学試験の時は、ARCS適性検査で数値が離れていたものの、ここ2週間でVII組と同じ数値まで伸ばしてきた。

今のクラスにいるより、VII組に編入させて伸ばした方が良いと、緊急リモート理事会が開かれ、全会一致で2人のVII組への編入が認められていた。

すでにアンジェリナ、スハルトの両名には、VII組編入の話が担任教官からされている。両名とも編入の意思を示したようだ。

ヴァンダイク「VII組運営が上手くいってるといふことで、日本のFLT社が出資を増

額してくれるそうだな」

サラ「日本のF L T社がですか。まあA R C U S開発に携わっていますか」

オリヴァルト「サラ教官の疑問は、何故F L T社が出資を増額してきたのかってところかな？」

サラ「まあ、簡潔に言えばそうですね」

オリヴァルト「R F社の会長からの直々の連絡だね。4月から学院に対する新たな出資社が決まったって。他の理事からも了承を得たと言われてしまったからね」

帝国のR F社と日本のF L T社が提携を結んだ事は、業界人でもなければ一般的な人間には知られていない。

サラ「今年になってから、F L T社製の戦車や装甲車などが、正規軍に大量に導入されてますよね」

ヴァンダイク「そうじゃな。ワシの軍の古き知り合いからの話なんじゃが、どうやら帝国政府の意向らしいんじゃない」

オリヴァルト「革新派：オズボーン宰相の意向つてのが本当なんだろうがね」

ヴァンダイク「そうじゃな、今年になってから、領邦軍に対抗して軍拡を推進しているようじゃからな」

領邦軍とは、貴族の軍隊のようなものである。主に四大名門が保持する領邦軍は、正

規軍の数には届かないが実力者が揃っているとされている。その領邦軍も正規軍に對抗して、軍拡を行っている。

領邦軍の軍拡を唱えてるのは、四大名門の筆頭であるカイエン公である。

カイエン公は、革新派が推し進める政策を否定し古き帝国へ戻そうとしている。カイエン公を支持して集まる集団を貴族派と呼び、オズボーン宰相を筆頭に改革を推し進めている政策集団を改革派と世間一般では呼ばれている。

その貴族派と改革派と対立が今年になつて激しさを増している。その一つが軍拡である。そしてその二つめが軍拡を推し進めるために、四大名門は各地で税金を高くしている。

これが帝国の現状であり、個人的にどうこう出来るような状態でないことは、サラ、オリヴァルト、ヴァンダイクもわかっているのであった。

そのための光となりうるのがツールズ士官学院、「特科クラスVII組」である。

すると学院長のドアがノックされる音が聞こえてから男子生徒と女子生徒の声がかえってきた。

スハルト「1-3組　スハルト・オルランド、入ります」

アンジェリナ「1-1組　アンジェリナ・ログナー、入ります」

ヴァンダイク「スハルト君、アンジェリナ君、ようこそ学院長室へ。そして彼女が編

入先のⅦ組の担任教官のサラ・バレスタイン教官じゃ」

サラ「学院長の紹介もあったけど、貴方達が編入するⅦ組の担任教官、サラ・バレス
タインよ、これからよろしくね」

アンジェリナ「よろしくお願いしますね」

スハルト「よろしく」

達也とリインは、いつもの朝練を西トリスタ街道までやっている。

たまにそこにユファイとラウラも加わることもあるが、今日は早めに切り上げていた。
もちろん達也とリインもだが。

サラ教官から、Ⅶ組はいつもより早く登校して頂戴と言われたためである。

達也とリインとユファイとラウラも、何故Ⅶ組だけだと考えていたが、わからなかった。
もちろんユファイ達だけではなく、アリサ達も疑問がわかるわけでもなく、Ⅶ組はまだ
誰も登校していない時間に登校することになる。

1-1204・4・17・早朝・Ⅶ組教室

まだベッドで寝ていたいという雰囲気は漂うⅦ組内。ユファイ達は朝練で、とつくに目
は覚めてるけどこんなに早く学院に来ることはないから戸惑いもある。するとサラ教

官が教室へ入ってきた。

サラ「グッドモーニング！ほらっそこ！眠そうな顔をしない！」

サラから注意を受けたのは、マキアス、エリオット、ユーシス辺りである。まあ、マキアスのあくびで、エリオットとユーシスが巻添えをこうむった形になった。エリオットは笑い、ユーシスはしかめ面になった。マキアスは恥ずかしさをごまかすために

マキアス「一体何ですか！サラ教官？僕達をこんな早く呼び出して？」

エマ「そうですね。朝方に急にⅦ組全員を起こして早く登校するように……。何かあったのでしょうか？」

サラ「まあ、学院にもあたしにも事情があるのよ。まあ、あんた達を呼び出したのは他にもない。Ⅶ組に新たな仲間が加わる事になったのよ。それも2人ね」

サラ教官の話聞いて、Ⅶ組内が騒ぎ出す。入学式のオリエンテーションで11名で、Ⅶ組を発足させたから、人数は増えるとは考えてはいなかったのだ。サラ教官は、例外の説明を行う。

サラ「まあ、他のクラスでその2人は一つ飛び抜けているのよ。ARCSの適性検査でもあなた達と変わらない数値になってるしね。話が長引いたわね、2人共入って来て」

サラ教官の呼び掛けで、Ⅶ組のクラスの中に2人の生徒が入ってきた。1人は男子生

徒で、赤髪のロン毛の中肉中背の身体付きをしている。もう1人は女子生徒で髪の色は紫でお尻のあたりまでである。2人共に元のクラスの制服を着ている。男子生徒は緑を。女子生徒は白の制服を。

男子生徒の姿を見るなり、ユファイとアリサが声を上げる。

ユファイ「貴方は…!?!」

アリサ「3組のスハルト・オルランド!」

スハルト「ああ!白とシマの女か」

スハルトの言った事にマキアスとエリオットが反応する。

マキアス「白?」

エリオット「シマ?」

ユファイとアリサが顔を真っ赤にしながらマキアスやエリオットに

ユファイ「マ・キ・ア・スさん…!白とか忘れてくださいね?」

マキアス「ひい!」

アリサ「エリオットもよ?」

エリオット「うんうん!」

マキアスは、ユファイの優しい笑顔の中の笑ってない目を見てビビり、アリサの笑顔の怒りにエリオットも聞かなかった事にした。

まずユフィは、Ⅶ組に向かつてる途中にスハルトにスカートをめくられた。ただ幸いに彼以外には誰もいなかった。

アリサは、達也がいる図書館へ向かう途中にスカートをめくられた。しかしユフィの時と違い、他クラスの男子生徒が2人いたのだ。アリサはすぐにひっぱたいてやろうと追っかけたが追い付けなかった。

サラ「スハルト、あんたね！なに問題を起こしてるのよ！まったくそんなことをしてたからなのね。スハルトがⅦ組に加入するつて聞いた3組の女子生徒達が嬉しそうにしてたのが、わかったわ」

スハルト「あいつらにしたら問題児が消えて、さぞや嬉しいだろうな」

アリサ「ただ、Ⅶ組に問題を移しただけでしょ？」

マキアス「…スハルトとか言ったな。Ⅶ組でそのような事をしないでもらおうか！」

スハルトははあくため息をはいて

スハルト「なんだよ、ムツツリスケベメガネ。説教から間に合ってるぜ」

マキアス「な、な、な、ムツツリ…」

ユーシス「フツ」

マキアス「き、君、何がおかしいんだ？」

ユーシス「なくに、アイツの言葉が言い当てているなど感心しただけだ」

マキアス「なんだと……！」

リイン「やめないか、2人共！」

リインに宥められて、渋々2人はケンカをやめた。サラもため息をはいて、スハルトに自己紹介を促した。

スハルト「えー一部の女子から紹介がありました、1-3組から編入してきた、スハルト・オルランドだ。まあ、よろしく！」

スハルトのせいで戸惑っていた女子生徒も自己紹介をやり始める。

アンジェリナ「1-1組、貴族クラスから参りました、アンジェリナ・ログナーと申します。今後ともよろしくお願いしますね」

スハルトとは違い深々と頭を下げてお辞儀をしたアンジェリナ。そして達也の方を見てにこやかに微笑んだ。アリサはすぐに

アリサ「アンジェリナさん！」

アンジェリナ「アリサさん、よろしくですね。それと達也さんも」

達也「よろしく、リーナ」

達也とアリサとアンジェリナが知り合いなのは、RF社の本社があるルーレは、ログナー侯爵の足下である。アンジェリナはログナー侯爵の次女である。

つまりRF社関係で、ログナー侯爵家とは付き合いがあるというわけだが。

アンジェリナ「Ⅶ組に編入は少し不安でしたけど、達也さんやアリサさんがいるのは正直助かりました」

達也「そうか？リーナなら貴族クラスでもやっていけると思ったが？」

アリサ「達也つたらもうー」

リーナ「達也は俺と違って顔が広いな。まさかログナー侯爵家のお嬢様と知り合いだったとはな」

達也はリーンを見ながら

達也「あのなリーン、前にリーナの事は話したぞ。お前が忘れただけだろ？」

リーン「そうだったっけ？」

達也「話したぞ」

リーンはあくまでも始めて聞いた表情をしている。達也はまたもやため息をはいた。するとスハルトがアンジェリナの背後に回り、スカートをめくり上げた。

達也やリーン、ユース、ガイウス、マキアス、エリオット、男性陣は、アンジェリナのオーシャンブルーのパンツを目撃することになる。

それと同時にアンジェリナの悲鳴も早朝の本校舎にこだましたのだった。

スハルトとアンジェリナの2人を新たに加えた特科クラスⅦ組。

スハルトという大問題児を抱えたⅦ組は、この先どうなっていくのか。まだユフィ達にわかるハズはなかった。

嵐のような朝のホームルームが過ぎ去り、授業に入っていくのであった。

そして——この時間はトマス教官の帝国史である。《獅子戦役》についての授業である。ユフィは小さい頃から、皇帝である父親やオリビエからずっと聞いていた話しだから、復習みたいなものになってる。

トマス「………ある一人の流浪の皇子が辺境の地立ち上がったのです。ドライケルス・ライゼ・アルノール、第73代エレボニア皇帝にして「獅子心皇帝」と呼ばれる中興の祖である」

ドライケルス軍は最初は少数だった。しかし帝国の各地で人心をつかみ、心ある有力者を得ることで、一大勢力になった。ユフィは大帝を尊敬している。小さいときは、大帝みたいになりたいと思っていたほどだ。それで父親やオリビエに、ユフィは、やんちゃだなくと言われていた。

トマス「そのドライケルス皇子が最初に挙兵した辺境の地ですが——達也・シユバルツアー君、その地がどこかご存知ですか？」

達也がトマス教官に指名された。達也が席から立ち上がり

達也「ノルド高原です。帝国北東部に広がる高原地帯です」

トマス「おお、知っていましたね。当時ドライケルス皇子は放浪の果てに異郷の地ノルドで遊牧民たちと暮らしていました。そして帝国本土での内戦を聞き遊牧民の協力を得て挙兵したのです」

ノルド高原。ガイウスの故郷である。ユフィは、ノルド高原に行ってみたいなどと内心思っている。アルノール家とノルドの民は不思議な力で繋がっていると父親やオリビエに言われていた。ユフィもガイウスとは、不思議な縁で繋がってるような気がしたのだった。

今日も一通りの授業が終わって、そして放課後――

サラ「―お疲れ様。今日の授業も一通り終わりね。前にも伝えたと思うけど、明日は《自由行動日》になるわ。厳密に言うとは休日じゃないけど。授業はないし、何をすることも生徒たちの自由に任せてるわ」

トールズ士官学院の教育精神は、生徒たちの自主性を育成するのが目的である。サラ教官の例は参考にならないとⅦ組の誰もが思っていた。学院の施設は開放されてるようなので、部活動も自由行動日にやってるのだ。ユフィも何か部活動をやってみよう

かと思っていた。リベールで旅をしていた頃、クローゼの学校生活や部活動や生徒会の話を聞いていたから、興味があるのだ。

サラ「それと来週の水曜日に【実力テスト】があるから」

アリス「それは一体どういう……?」

アリスが疑問に思ったことを聞いている。

サラ「ま、ちょっとした戦闘訓練の一貫つてところね。一応評価対象のテストだから体調には気をつけておきなさい。なまならない程度に身体を鍛えておくのもいいからね」

ユーシス「…フン面白い」

スハルト「めんどくせーことやるのかよ!」

エリオット「ううっ、何か嫌な予感がするな」

フィー「ふああ……」

サラ教官の話しを聞いたユーシスは面白がり、スハルトは、めんどくさいと言い、エリオットは不安感を抱き、フィーは相変わらずのマイペースだ。サラ教官の話しはまだ続く。

サラ「そして—実技テストの後なんだけど改めて【VII組】ならではの重要なカリキュラムを説明するわ」

エマ「そ、それは……」

重要なカリキュラム。一体何を〔Ⅶ組〕させる気だとみんなが思っていた。ただ何が来ようが不安はないとユファイや達也は思っていた。

サラ「ま、そう言う意味でも明日の自由行動日は、有意義に過ごすことをお勧めするわ。HRは以上…副委員長、あいさつして」

マキアス「は、はい。起立—礼」

Ⅶ組の面々は、部活動見学に行くようだ。ユファイもアリサ達と見学しに行くことにした。身体を動かす部活動を選ぶことを考えていた。ユファイは、パンフレットで部活動紹介を見たときに大方決めていた。水泳部に入部することを。

第1章-4-2話-4月の夕暮れ。

VII組の教室からいち早く出たスハルトは、本校舎の屋上に来ていた。そして北の空を眺めていた。

スハルト「フツ、変態大魔王か……。今の俺にピッタリの徒名じゃないか」

スハルトは、自分の懐から何かを取り出す。それは家族のように写っているスハルトとその他の人間達。そして小言で喋り出す。

スハルト「……団長……副団長……団のみんな、なんで俺も一緒に逝かせてくれなかったんですか……何故俺だけ、生かせたんですか！俺には……この世に未練なんかもうないんです。赤い星座を出てから行くところがなかった俺を拾ってくれた団長と団と最期まで共に……」

スハルトは崩れ去るように屋上の床に座り込んだ。

スハルト「……赤い星座の連隊長時代には、大切な恋人のソフィアを亡くし……虹の旅団時代では……団長、副団長、団のみんなを失ってしまった……俺は……死神だな……。ははっ、死神は、ランディ兄貴の徒名だったな……」

ソフィア・クロサバード。スハルトの赤い星座の連隊長時代の恋人。スハルトは猫

兵、ソフィアは、遊撃士という異色のカップルであった。

初めて出会ったのは、どこかの戦場の近くであった。

戦場に迷いこんできた民間人を守るために、スハルトは身を挺して守り、崖の下に落ちたが運良く川に落ちた。

川で流されているスハルトを助けたのが、後々恋人になるソフィアだ。

ここまで語ったが、これ以上は本人の口から語られる日がくるだろう。そのときまで待つとしようか。

屋上の片隅で、スハルトが座り込んで泣いているところに、誰かがやってきた。スハルトはすぐに写真を懐になおして、平常心を取り戻した。

?? 「うーん、先客がいたのか？」

スハルト 「あ、あなたは、2年の変態大魔王先輩じゃないですか」

?? 「誰が変態大魔王先輩か！誰だそんな噂を流してるヤツは……って変態大魔王先輩じゃないかよ」

スハルト 「変態大魔王後輩ですが、先輩は何の用で屋上に？」

?? 「それはだな、屋上に女子がいないからな。夕方の屋上って北風が強くなつてな……それを知らずに屋上に出てくる女子のスカートがまい上って……な！」

スハルト「なるほど…」

スハルトはこの先輩の話を聞いていた。それとなんだか自分と同じような匂いがするなども感じた。

??「おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名前はクロウ・アームブラストだ」

スハルト「俺は、スハルト・オルランド。1-3からVII組へ編入した」

クロウ「お前もか」

クロウを急にニヤニヤとしながらスハルトに

スハルト「な、何だよ、クロウ先輩？」

クロウ「VII組って、女子のレベルみんな高いだろ。他のクラスの連中が羨ましがってたぜ」

スハルト「確かにレベルは高いと思うぜ。だがそれだけと思うが？」

クロウは呆れた表情をしながらスハルトを見る。お前は何もわかってはいないと。これだからおこちやまは困る的なことを言われる。

クロウ「はあくそれだからおこちやまなんだよ」

スハルト「クロウ先輩、あんたはどう思ってたんだよ？」

クロウ「俺か…。VII組の女子は他のクラスよりもレベルは高いと思うがな。貧乳から巨乳、色とりどりの下着…」

スハルト「…あんたもスカートめくりとかしてんのかよ？」

クロウ「誰がそんな幼稚な事をするかよ！」

スハルト「悪かったな、幼稚だよ…」

クロウは馴れ馴れしくスハルトと肩を組み

クロウ「そうイジけんよ。そんなお前にとつておきのネタを教えてやるからよ。と

にかく耳貸せ」

スハルト「な、なんだよ」

スハルトはおとなしくクロウの言うことを聞いた。それは本校舎階段下のあるエリアやツールズ士官学院を東西に流れる川の橋のところ、学生会館の階段下など教えた。

スハルト「なるほどね……」

クロウ「フツ、これが先輩ってやつさ。ところで、お前のクラスに金髪の女子がいるだろ？」

スハルト「金髪？アリスの事か？それともユフィの事か？」

クロウ「あつ、そのユフィって女子の方だ」

スハルト「ふーん、名前はユフィ・レンハイム。平民出身らしいけど、雰囲気とかしゃべり方がどうも貴族のような感じがしないでもないんだが」

クロウ「なるほどな。あの子はユフィっていうのか、そうか、そうか」

スハルトは、変態大魔王な表情をしているクロウを見てちよつと引き気味になりながらも

スハルト「あんた、あのユフィをナンパでもするのかよ？」

クロウ「さーな。お前はまあ：Ⅶ組で頑張りな」

クロウはスハルトにそう言つて、屋上から去つていった。

スハルト「……あの先輩：一体なんだったんだ？」

茜色に染まる空の下で、スハルトは複雑な気持ちで屋上にいたのだった。

スハルトが屋上で語り合っている頃、ユフィ達一向はグラウンドからギムナジウムへ向かう。

ギムナジウムでの部活動は、フェンシング部と水泳部の2つしかない。

アリサとアンジェリナは、すでにラクロス部に決めており、ユフィとエマとラウラの付き添いでついてきていた。

ユフィとラウラは、水泳部を見学していた。もちろん水泳部が活動するのはプールである。プールサイドに集まった2人男女はユフィ達を見て

クライン「俺は、水泳部部長のクラインだ。新入生のみんなはゆつくり見学していつてくれ」

マイン「わたしは副部長のマインよ、新入生のみんな、よろしくね」

部長からの自己紹介と副部長の自己紹介があり、水泳部の人数は部長と副部長が2人だけである。そこにユファイ、ラウラと男子生徒が加わるので、5人となる。

ラウラ「水練、ふむ、いい鍛練になりそうだな」

ユファイ「確かに、いい鍛練になりそうですわ」

ユファイもラウラも純粋に水泳を楽しむと言うよりも鍛練のためにやるような感じか。エマは水泳部、もちろんフエンシング部でもなかった。

そんなエマのため、アリサとアンジェリナは、エマの部活動探しを手伝うみたいで、ギムナジウムから出ていった。

ユファイとラウラは、引き続き水泳部の施設を見せてもらう。見せてもらうといってもギムナジウム内のものである。施設といったが、更衣室、更衣室の中にあるシャワールーム、2階にあるくつろぎスペースの休憩ルームぐらいしかない。見せてもらっている途中にユファイのARCSの着信がなる。クライン部長の許可をもらいユファイは出る。

サラ「良かった、出たわね、ユファイ」

声の主は、サラ教官だった。

ユファイ「あの、サラ教官？わたくし部活動見学の途中なんですけど？」

サラ「わかってるわよそんなこと。大事な話があるからARCSで連絡してんでしようが！」

ユフィ「大事な話ですか？ 一体何の話でしょうか？」

サラ「とにかく、学生会館の2階の奥の部屋に行きなさい。絶対よ、ユフィ！ 行きなさいよ！」

ユフィ「わかりましたわ」

サラ「それじゃーね」

サラ教官は、そう言うとARCSの通話を切った。側でラウラが心配そうに見ていた。

ラウラ「ユフィ、どうしたのだ？」

ユフィ「サラ教官に学生会館の2階の奥の部屋に行けって言われましたわ」

ラウラ「学生会館か…。まだ行ってはいなかった場所だな」

ユフィ「学生会館には、食堂や購買部、部活動エリアなどあって、4階には貴族専用カフェがあるのよ」

ラウラ「ふむ…」

クライン「サラ教官に呼ばれたのか？」

ユフィ「はい。正式には学生会館の2階の奥の部屋にですが」

クライン「学生会館の2階の奥の部屋かあ……生徒会室に呼ばれたんだな」
ユファイ「せ、生徒会室に？」

クライン「とにかく、行ってみるといい。今日は部活動はしないから安心してくれ」
マイン「活動は明日だからだね」

ラウラ「水泳部の今後のことは私が聞いておく」

ユファイ「ラウラさんに、クライン部長、マイン副部長、すいません。わたくしはこれで失礼します」

ユファイはみんなに一礼すると、水泳部が活動するプールから出ていくのあった。

ギムナジウムから出たユファイは、西日に照らされた。風も昼間とは違い冷たい風が北から吹いていた。

ユファイ「学生会館は確か……ギムナジウムから南に向かったところ……達也さんがいつも行く技術棟の南側だったはずですわ」

ユファイはギムナジウムから技術棟の前を通りすぎて、すぐに学生会館の建物が現れる。

ユファイ「ここが学生会館のはずですわ」

そう言つてユファイは、学生会館へ入ろうとしたら誰かに話しかけられた。

?? 「お勤めゴクローさん。入学して半月になるが調子の方はどうよ」

ユフィは、話しかけられた相手を見て、すぐに同級生ではないことに気が付き

ユフィ「あ、ええまあ、正直、大変ですけど今は何とかやっている状況ですね。授業
やカリキュラムが本格的に始まったら目が回りそうな気がしますね」

?? 「はは、わかってるじゃん。特にお前たちさんには色々てんこ盛りだろうだからな。
ま—せいぜい肩の力を抜くんだな」

ユフィ「は、はあ……えつと先輩ですよ？名前を伺っても構いませんか？」

?? 「まあまあ、そう焦るなつてまずはお近付きの印に面白い手品を見せてやるよ」

ユフィ「手品ですか……?」

?? 「ん—そうだな。ちよいと50ミラコイン貸してくれねえか？」

ユフィ「50ミラコインですか？はい、わかりましたわ」

ユフィは財布を上着のポケットから取り出し、50ミラコインを探し始めたとき、ふ
と横から誰かがやってきた。

達也「またやってるのですか。はい、50ミラ、クロウ先輩。今度は俺のクラスメイ
トから借りるんですか？」

ユフィ「達也さん！」

クロウ「ちげーよ、後輩にちよつと手品を見せるだけだから…よ…そんじやよく見とけよ」

50ミラコインが空を舞いクロウの手元に落ちてくる。

クロウ「さて問題、右手と左手、どっちにコインがある？」

ユフィ「それは——右手ですか？」

達也「じゃあ、俺は両方になしで」

クロウ「はあ…達也…のやつにはバレたか…」

ユフィ「達也さん…どういうことですか？」

達也「ユフィ…まあ…俺のもよく…見ていてくれ」

達也が、再び取り出した50ミラコインを空に放ち、コインが舞ながら手に落ちてく

る。そして…

達也「ユフィ…コインはどちらでしょう？」

ユフィは、ずつと見ていてあることに気がついた。さつきも今回も真下に巾着袋が

あつた事に…。そこから導き出された答えは

ユフィ「右にも左にも入ってないですわ。あるのは巾着袋ですね？」

達也「正解だ。右手にも左手にもない…：答えはこの巾着袋の中だ」

クロウ「ぐぬぬ…：全く可愛げのない後輩くん達だよ…。達也もユフィも。まあその

調子で精進しろってことだ。せいぜいサラのしごきにも踏ん張って耐えて行くんだな。そうそう生徒会室なら2階の奥だぜ。そんじやよい週末を」

クロウ先輩は、そう言って正門の方へ歩いて行った。ユフィは、クロウ先輩がただ者ではないと己の血が騒いでるのがわかった。達也がここに来たことも疑問がついた。

達也「サラ教官に頼まれたんだ。ユフィが生徒会の方から学院生活に必要な物を持ってくるみたいだから、君も手伝ってほしいとARCSから連絡を受けたんだ」

ユフィ「サラ教官にですか？」

達也「ああそうだ。とにかく生徒会室まで行くか」

ユフィ「そうですわね」

ユフィはふと不思議に思った。さっきのクロウ先輩は、なぜ自分達が生徒会室にようがあると思ったのか。すると達也が

達也「さっきのクロウ先輩の事か？」

ユフィ「ええ」

達也「まあ、一言で言えば、ふざけた先輩だな。ただ、底知れぬ感じもする一面を持っている」

ユフィ「底知れぬ感じですか…」

達也「まあ、気にしないでくれ。俺のただの勘だから」

ユファイ「そうですか」

達也の言った底知れぬ何かは、ユファイも感じとってはいたのだ。だがどう説明していいのか分からなかったから言わなかっただけだ。

ユファイと達也は、2階奥の生徒会室に目を向ける。生徒会室って普段なら絶対こないと達也とユファイは思った。生徒会室の扉の前に立ったユファイと達也は、コンコンと扉をたたいた。

第1章-5-3 話-トワ生徒会長と生徒会。

?? 「はいはい鍵はかかってないからどうぞ」

ユファイと達也は、声の主をどつかで聞いたことあると思いながらも、生徒会室のドアを開けて中に入る。

達也 「失礼致します」

ユファイ 「失礼致しますわ」

?? 「えへへ…2週間ぶりですね。生徒会室へようこそ。達也・シユバルツァー君とユファイ・レンハイムさん。サラ教官の用事で来たんでしょう？」

ユファイ 「え、ええ、入学式以来ですね。なるほど生徒会の方だったんですね」

その後、この小柄の緑の制服を着た女子生徒が2年生で生徒会長だと知って2人は驚いた。彼女の名前はトワ・ハーシエル。困っていることや相談したいことがあったら生徒会まできていいと言われた。なんて優しい方だとユファイは感動した。

達也が、サラ教官からの用事の事を言い出した。

トワ 「あ、うんうん、これなんだけど…はいどうぞ。一番上が達也君で二番目がユ

フイさんのはずだよ」

ユフイは達也から受け取り：

達也「これは学生手帳じゃないですか…。そう言えばまだもらってなかったな」

ユフイ「後は残りのⅦ組メンバーに渡せばいいんですね」

トワ「本当に遅れてごめんね」

トワ会長は、遅れた原因を話してくれた。ユフイ達「Ⅶ組」はちよつとしたカリキュラムが、他のクラスと違うらしく《戦術オーブメント》も通常とは違うタイプだから別の発注になったようだ。

トワ「うん、学生手帳には戦術オーブメントの説明書も載っているんだけど他の1年生は今までと同じ標準タイプだから同じレイアウトに仕えるんだ。でも君たちのは特注品で操作説明違うから少し時間が掛かっちゃったの」

達也「そうだったのですか…。!?もしかしてそういういった編集までトワ会長がなされてると?」

トワ「うん、サラ教官に頼まれてーごめんね、こんなに遅れてちゃって」

ユフイと達也は、サラ教官は何やつてるのかって思った。明らかに生徒会長の権限を超えた仕事をトワ会長にさせてると思えなかとしか思えないと。…これは明らかにサラ教官自身の仕事だと、達也が考えていたら、ユフイがトワ生徒会長に

ユフィ「トワ生徒会長！」

トワ「え!? ユフィさん、何かな？」

ユフィ「本来ならサラ教官がやるべきことを、トワ会長に押し付けてるみたいですよ」
「で」

ユフィの言葉に対してトワ生徒会長は、サラ教官はいつも忙しそうだし他の教官の仕事を手伝うことも多いから今さらだつてだと。ユフィと達也はなんて健気な女性なんだと感心してたら、サラ教官から何でも生徒会の仕事を手伝うとかのお話しになっていたのだ。

トワ「うんうんさすがは新生【VII組】だね」

達也「その……一体何の話ですか？」

達也がトワ生徒会長に何のことなのか尋ねた。もちろんユフィもなんのことだかわかならない。

話を聞いていくうちにユフィもわかったのだ。達也もわかったようでサラ教官は確実に生徒会の処理しきれない仕事を【VII組】に回すつもりらしいと。トワ生徒会長が説明によれば、「私たちが【特科クラス】の名に相応しい生徒として自らを高めよう」つて、みんな張り切っているから……生徒会の仕事を回してあげてつて。【VII組】のみんな

が聞いたらどう反応するか。ユフィと達也は顔を見合せながら、ため息をはいた。ユフィスやフィー、スハルトは絶対にやらないだろうと。

達也「……………」

ユフィ「……………」

2人が黙り込んでしまったため、それを見たトワ生徒会長が

トワ「ひよつとしてわたし何か勘違いしちやつてた？入学したての子たちに無理難題を押し付けようとしてたとか？」

トワ会長が悲しそうな顔をしたため、ユフィの心を痛めた。Ⅶ組じゃなく、自分が生徒会の仕事を手伝えれば良いだけの話だと結論づけた。そしてユフィは生徒会の仕事を手伝うことに決めた。

ユフィ「トワ生徒会長、サラ教官のおつしやつた通りです。トワ生徒会長は随分お忙しそうですね、遠慮なく仕事を回して下さいませ」

達也「……ユフィ……良いのか？君だって……好きなクラブに入りたいんじゃないのか？」

ユフィ「私は、水泳部に決めましたし、生徒会の仕事と両立したいって部長と副部長

に話をしますから。トワ生徒会長の頑張りを見ていたら。なんだか生徒会の仕事をやりたくなつたんですわ」

達也「ユフィ、君ってヤツは…わかった…俺もトワ会長を手伝いますよ。その方が色々融通が利くと思いますし」

ユフィは、オリヴァルトから困つてる人がいれば、助けてあげるのがでは皇族の勤めだと聞かされている。だから苦には決してない。

そして達也も生徒会に協力するのは、自身の研究や工作のためである。技術棟である先輩とARCU Sの調整やデータ収集、CADの帝国での普及などの仕事もやっているのだ。だから生徒会を味方につければ、スムーズに行くと言達也はふんだからである。ただ、ここ何日か詰めすぎた面もあるようだが。だからトワ生徒会長が

トワ「どうしたの？達也君顔色悪いよ？」

トワ生徒会長が、達也の顔をのぞきこむように心配していた。ユフィもそのことを心配していた。

達也「すいません…ここ何日か遅くまで勉強や工作の方をやってまして」

ユフィ「達也さん…頑張りすぎじゃ？」

達也「頑張りすぎか…まあ、アリサにも言われてるが」

ユフイ「アリスさんだって心配してるんじゃないですか!」

達也「自分ではそんなにやってるつもりはないんだか?」

トワ「あの達也君……あまり頑張りすぎるのも良くないと思うの。頑張り過ぎて、倒れてしまったら何にもならなくなってしまうから。もし困ったことがあるなら相談にのるからね」

達也「あ、ありがとうございますトワ生徒会長」

ユフイ「わたくしもあまり良いアドバイスは出来ないかもしれませんが、相談にはちゃんとのりますわ。」

達也「ありがとうございます……ユフイ」

そしてトワ生徒会長が、仕事の依頼について話してくれた。主に仕事は士官学院と、トリスタの町の人たちの【依頼】をこなしていくものである。

トワ「今日中にまとめで、朝までに寮の郵便受けに入れておくから。達也君かユフイさんのポストのどちらかに入れてもいいかな?」

達也「構いませんよ」

ユフイ「ええ、お願いしますわ」

この後、ユフィと達也は、学生会館の食堂で夕御飯を奢ってもらうことに。2人は最初は断っていたが、トワ生徒会長が生徒会の仕事をやってもらうから、それのお礼として、奢らせて欲しいと言われたのだ。ユフィも達也もそう言われると、断ることができなかった。

そのまま、ユフィと達也はお世話になることを決めた。

ユフィと達也が、トワ生徒会長に奢ってもらってから学生会館から出ると既に陽が沈み暗闇に空は染まり始めていた。

達也「もう……夕方か……時間が経つのは早いな」

ユフィ「はあ……そうですわね。結局、学食でトワ生徒会長に夕食まで奢ってもらいましたし、本人はまだ生徒会のお仕事があるっておっしゃっていましたが、本当に頭がさがりませんね」

達也「トワ会長には何から何まで感謝だな。だから力になってあげたいなって改めて思ったよ」

ユフィ「達也さん、わたくしもですわ」

そんな話をしていたら、達也のARCSの着信音がなり……

達也「達也・シユバルツァーですが、えーとサラ教官ですか」

サラ「グーテンターク。わが愛しの教え子よ。どうやらあんたたち2人トワ会長に夕食をおごってもらったみたいね」

達也「俺はともかく、ユフィには……その愛しの教え子を騙し討ちしてくれましたね。どういうつもりでしょうか？」

サラ「——詳しくは言えないけど来週伝える『カリキュラム』にもちよつと関係してのよ。確かにハーサルをやってもらおうと思つてね。生徒会が忙しすぎるのも確かだ。一石二鳥の采配だと思わない？」

達也「トワ生徒会長の仕事を増やしてるのはサラ達教官達のせいだと思いますが、まあ趣旨はわかりました。明日の自由行動日は生徒会の手伝いをすればいいんですか？」

サラ「あくまで君たちの判断に任せるわ。特定のクラブに入るなら無理にとは言わないわよ」

達也「俺は、ピンとくる部活がまだないので問題はない」

ユフィ「わたくしも手伝うことにしましたわ。水泳部と両立になりますが」

サラ「ユフィ、あんたまで手伝ってくれるとは思わなかったけど、とにかく助かったわね」

ユフィは、昔から誰かの手伝いをするのが好きだった。だが皇女の身分のため、手伝うどころか、周りがみんなやってしまうのだ。だからユフィ・レンハイムとして初めて感謝されたとき、すごく嬉しかったのだ。ユフィがそんなことを考えていたら、達也がサラ教官に肝心な部分を聞いている。

達也「サラ教官……一つ聞いて良いか？ どうして俺やユフィなんだ？」

ユフィ「……………」

達也「クラス委員長はエマで、副委員長はマキアスだぞ。真つ当な身分なら……ユフィスやラウラ、アンジェリナもいる。なのに「俺ら」なんだ？」

サラ「ふふっ……それはあんたたちはあのクラスの“重心”とでも言えるからよ」

ユフィ「え？」

ユフィと達也……2人は驚いていた。自分達が重心なりうる？ どういうことだ？ 達也は、どういう意味だとサラ教官に詰め寄る。

サラ「中心じゃないわ、あくまでも“重心”よ。対立する貴族生徒と平民生徒、留學生までいるこの状況において君たちの存在はある意味“特別”だわ。それは否定しないわよね？」

ある意味特別か。ユフィは、オリヴァルトを除けば、この帝国の皇帝と皇妃の間に出来た娘である。特別か特別ではないかと言われれば特別であろう。だがその特別の中にも何かを秘めているのも確かなのだ。それは兄、オリヴァルトも述べていた絆を結ぶ力なのかも知れない。それは達也にも言えることなのだ。

サラ教官の話は続く……。

サラ「そしてあたしは、その『重心』にまずは働かけることにした。《VII組》というのはじめての試みが今後どうなるのかを見極めるために。それが理由よ」

達也は長い溜め息を吐き、アルコールを摂取していないか尋ねた。案の定、サラ教官はアルコールを摂取していた。

達也「はあ………やっぱり飲んでいたか……」

達也は呆れたような表情になりながらもサラ教官の話を聞いている。

サラ「ま、まあ深く考えずにやってみたら？ 君たちは他の生徒より焦りが見えるわ……。まずは飛び込んでみないと立ち位置も見いだせないわよ。それじゃあね。寮の門限までにはちゃんと帰ってくるのよ。間違っても不埒な行為はしちゃダメよ」

達也「しませんか」

ユフィ「しませんわ！」

ユフィと達也は、声を揃えて反論した。そして2人はクスツと笑った。

立ち位置……サラ教官の言うとおりに動くしかないかと。こんなところで立ち止まっていたら、いつまで経ってもオリヴァルトやユン老師に追いつけないと、ユフィと達也は考えていた。

――

ユフィと達也が第3学生寮に戻ると、2人以外は自分の自室にいるようだった。明日は初めての自由行動日で、部活動解禁でもある。

達也「俺達もいったん部屋に戻ろう。生徒手帳はゆつくりしてから配ろう」

ユフィ「そうですね。その方がよろしいですし」

2階のところで達也とユフィは分かれる。前も言ったとおり2階が男子寮エリア、3階が女子寮エリアである。クラスの男子の生徒手帳は、達也が配ることに。女子の分は、ユフィが配ることになった。

ユフィは自分の部屋に戻ると、Ⅶ組女子の生徒手帳を机の上に置いた。

ユフィ「それにしても、今日は色々なことがありましたわね……」

朝早くサラ教官に呼ばれてクラスに行ってみれば、Ⅶ組に新たな仲間が増えるイベントがあった。それも2人も増えることに。

1人目は男子生徒であり、スハルト・オルランド。

2人目は女子生徒で、アンジェリナ・ログナー。

スハルトは、1-3組からⅦ組へ編入。

アンジェリナは、1-1組からⅦ組へ編入。

2人共、ARCU Sの適正能力が入学式の時よりかなり上がっており、Ⅶ組の平均値と同じであった。元のクラスで能力を伸ばすのではなく、Ⅶ組に編入させて切磋琢磨させた方がよいと、緊急理事会でも決まったのだ。最終的には、オリヴァルトやヴァンダイクも了承し、スハルトもアンジェリナも納得したの編入である。

ただユフィは、スハルトには幾分の不安があるのだ。

ユフィはとある日、職員室からⅦ組に戻る途中にスカートをめくられたのだ。そのときは、スハルト以外誰もいなかったのが幸이었다。

しかしユフィは、スハルトに白のシルクの花の柄が入ったパンツを見られたことは恥ずかしいことなのだ。

好きな殿方に見られるのと意味が違う。

もやもやとしてしまうユフィであった。

そしてしばらくして、ずいぶんと遅くなった生徒手帳を配るため、持ち主の部屋を訪ね回る。ユファイは、アリサ・ラウラ・エマ・フィー・アンジェリナの順番で届けた。達也は、リン・エリオット・ユース・マキアス・ガイウス・スハルトと配っていく。ユファイは、アリサ、ラウラとアンジェリナとは話し込んでしまった。ラウラから、入部届けの紙を受け取った。どうやらクライン部長とメイン副部長から頼まれたようだ。

ユファイはラウラに生徒会の仕事を終わらせたら水泳部に行くと伝えた。

アリサとは、スハルト問題を少し話した。アンジェリナとは、スハルト問題と達也のことについて話した。

女子全員に生徒手帳を渡し終えたユファイは、明日は生徒会の手伝いをしないといけな
いから早く寝ることにした。

そしてユファイは就寝の床についた。

第1章―6―4話―初めての自由行動日。

まだユファイ達、他のみんながまだ寝静まつてる頃から起き始める人物がいた。

マイン・サルナード。

ユファイ達の水泳部の先輩で部の副部長である。

クラスは、2―4組。平民のクラスである。彼女は男女共に人気があり、一部の人間達には、アンゼリカと双壁だとも言われている。彼女はそんなことは気にしてはいない。

第2学生寮（4階建て）の部屋（1階と2階は、今年度は1年生の男女）の一室、405号室がマイン・サルナードに割り与えた部屋である。

そんな彼女の部屋は、身体作りの器具や健康器具なんかもある。

彼女は、下着姿でいる。これは彼女が昔からしていた習慣である。本当は真つ裸でやりたかったが、実家の両親からせめて下着ぐらいは身につけてくれと言われてから、下着姿でいるようにした。

マイン「今日も水泳部に行く前に、いつもの日課をやっておきましょう」
ダンスから体操服を取り出す。上着と緑のブルマを取り出した。

上着を着て、ブルマを穿く。

マインは姿見の鏡でハミパンが無いか確かめる。

マインでもハミパンは、恥ずかしいのだ。水着の食い込みは気にしないのだが、ハミパンは恥ずかしい。そんなマインであった。

マイン「さてと、今日は後輩達も初めての自由行動日だし、先輩としてちゃんとしな
いとね」

マインは、405号室から出て、第2学生寮から出る。トリスタの街の外、東トリスタ街道へ出る。

まだ陽が登らぬ東の空を正面にマインは、ケルディックに向けて走る。

軍人はまず基礎体力作りからだと言われたと父親に教えられている。その父親も生粋の帝国軍人であった。

マインもそんな父親を見て育ったので、帝国軍人に道に進むこと決めていた。だが父親は、帝国軍人に娘をしたくはなかった。

軍人とは、どんなに奇麗事を言っても人殺しをするのに変わらない。それが守るための戦いであっても。そんな役目は、父親が全て受けるといふ意気込みがあったのだ。

父親の名前は、カイン・サルナード。帝国軍第3機甲師団所属、隻眼のゼクスの副官だったのだ。第3機甲師団にカインありと言われたゼクスの片腕だった。

何故過去形なのかと言うと、カインは、帝国の第2次東方戦役（七耀暦1203年・7月）にて大亜の地にて戦死してしまったのだ。

帝国軍第3機甲師団は、東方遠征軍として大亜に派遣されたのだ。大亜国内では、ゼクスの本隊とカイン分隊に分かれて戦っていたのだ。

そんな中、大亜軍が自国民を虐殺してる現場に遭遇したカイン大隊は、民間人を守るために戦った。

そして、民間人の子供を庇って命を落としてしまう。

カインが知ったのは、トールズ士官学院で授業を受けてる時だった。

カインは、カインのトールズ士官学院行きは渋々認めたのだ。トールズは、卒業後も軍人になる以外の職業に付いた卒業生も沢山いる。それで認めたのだ。カインも軍人じゃない道も模索して入学した。

だが東方戦役にて、父親のカインの戦死は、カインの中で何かが弾けた。それはずっと心に封じていた父親と同じ軍人になることの想いが溢れてきた。

細々と執り行われたカインの葬儀の後、母親のリリアは、カインに対して

リリア「カイン、貴女の好きにやりなさい。そのかわり後悔するような決断だけはしないこと、良いわね？」

カイン「ありがとう、お母さん。私は帝国軍人になるわ。お父さんと同じ道を歩むこ

とにする」

母親のリリアは少しの沈黙の後

リリア「ふふっ、あの人の血を引いてるものね。マイン、頑張つて帝国軍人になりなさい。あの人を唸らせるような軍人に」

マイン「うん、約束するよお母さん！」

マインは、カインの墓前と母親リリアに立派な帝国軍人になることを決意したのだつた。

そして今に至る。

トリスタとケルディックの中間地点から再びトリスタへ向けて走る。

マインは、まだ何もかも発展途上に過ぎない。まだ父親のカインの足元にすら追いついていない。だけど一度足りとも諦めたつもりはない。

ちゃんと親友でライバルでもある水泳部部长のクラインやラクロス部のテレジアとエミリー、後輩のラウラやユフィもいる。

みんなと競つて高めれば、自ずと道は見えてくると思つて頑張っているのだ。

東トリスタ街道をトリスタまで走り抜けたマインは、第2学生寮へ戻る。

ようやく東の空から太陽が登り始め、トリスタの街に光を差しこみ始めていた。第2

学生寮の平民生徒達が徐々に起き始めている。そんな中、マインはシャワーを浴びて、自室で水泳部副部長としての準備をしていた。もちろん下着姿である。

マイン「水泳部の準備は、こんなものでしょうね」

プールの使用許可書を教頭に出さないといけない。マインはちよつと苦笑いをしながら

マイン「教頭に出さないといけないんだよね」

学院長は良つて言われているが、しかし教頭は、平民生徒を馬鹿にしてるんじゃないのかと思われるが、マインは別にそうではないと思つている。

教頭は、口は悪いが生徒達をちゃんと考えてるのだ。

準備を終えたマインは、今は亡きカインの写真を見て

マイン「お父さん、行ってきます。必ず私は立派な軍人になって見せるわ。だから見守つていてね」

そう言うのと彼女は、自室から出ていった。

2年生になり最初の自由行動日。悔いのないように過ごして行こうと思つて。

――1204・4・18―朝―第3学生寮―306号室―ユフィの部屋―

ユフィはいつもよりも早く起きて、鍛練を済ませて、お風呂で汗を落としてから、自分

の部屋で支度をしている。

トワ生徒会長の仕事を手伝うのだから、ミスなんかは許されないと意気込む、ユフィ。トワ会長なら許してくれそうだが、甘えてはならない。これからは、厳しい時代にもなりそうだし、そんなことでは生き残れないだろうと、決意を新たにしたり。

ユフィは自分の得物である太刀を見ながらそう思った。

机に置かれている水泳部の入部届けの紙を見ている。そこにはちゃんと自分の名前は書いている。見落としはないようだ。ユフィは、それと学院指定の水着を取り出さなといいけないことに気づく。水着は、確かクローゼットにしまいこんでいた。

クローゼットの中から、学院指定の水着を取り出して、改めて見てみる。普通に学校指定のスクール水着である。別にエロエロのスクール水着ではない。

ユフィ「確か、水着を入れる袋がありましたよね？」

ユフィは水着を入れる袋に水着を入れて、身体を拭くバスタオルも袋に入れ、変えの下着類も入れ、入部届けも懐に入れた。

準備も万端にしてから、最後の身だしなみを確認してから

ユフィ「さてと、行きましょうか」

ユフィは、自分の部屋を出て、1階へ向かうことにした。

確かトワ生徒会長は、依頼書はポストに入れるって言つてた。ユフィはポストの方へ行くと、そこには達也が先に来ていた。達也が早く来ていることは、予想の範囲内だ。彼は時間を指定されたりすると約束の時間より絶対早く来る。

その事がこの2週間であつた事だ。ユフィは達也に挨拶をする。

ユフィ「お待たせしましたわ、達也さん」

達也「ユフィ、おはよう。俺も今さつき来て、ポストに入つていた依頼書を見てるだけだ。これが依頼書のように」

ユフィは達也から封筒の中身を受け取り、依頼が書かれた依頼書を見た。そこにはこう書かれていた。

【・旧校舎地下の調査《必至》】

【・導力器の配達《必至》】

【・落としした生徒手帳】

【学院の裏手にある《旧校舎》の地下での不思議な現象が起こつてゐるらしい。そこで腕のたつ生徒に調査を頼みたい、詳しくは学園長室まで聞きにきてくれたまえ。(ヴァンダイク学院長)】

【技術部の方で修理した各種導力器製品をそれぞれの持ち主配達してほしい。(2-III組・ジヨルジユ)】

【学生手帳をどこかに落としてしまい、いまだに見つかからない状況です。どうか捜索に協力してもらえませんか？先に学生会館の1階を探しているので時間があれば話を聞きに来て下さい。(1-IV組・コレット)】

ユフィは、ふと止まる。まるで遊撃士がこなす依頼ではないかと、彼女は思った。トワ生徒会長達、遊撃士の仕事みたいのをやってたのかと感心してしまった。

ユフィ「なるほど……学院長や技術部や新入生からの依頼ですね。ふむふむなるほど……なんだかが燃えてきましたわ！」

ユフィはやる気十分になり、達也からその事で聞かれる。

達也「ずいぶん張り切ってるな」

ユフィ「そうだね。わたくし遊撃士のお友達がいて……その人達がカツコいいって思ってたんです」

ユフィの脳裏には、オリヴァルト、エステル、ヨシユアやアガット、クローゼ達と冒険していたリベールの思い出が浮かんでいた。彼らのようになりたいとも思ったこともある。リベールの思い出に浸っていた時に、達也の声で現実を引き戻される。

達也「ユファイには、遊撃士の知り合いがいるのか？」

ユファイ「ええ、その方々は、わたくしに勇気を与えてくれたのです。前に進めなかつたわたくしの背中を押してくださった：最高の友達ですわ」

達也「そうか、最高の友達か……」

ユファイ「達也さんには、そんな方々のはいらつしやいませんの？」

達也「俺に？……うーむ……。ラインやアリサか……郷のみんなかな」

ユファイは、アリサが入つてることによつと羨ましかつたりする。アリサの仕草や言動からみて、達也が好きなのはわかっている。そして達也から聞いた今の言葉で確信に変わる。

達也とアリサは、両思いなのだ。達也は照れ隠しに

達也「コホン、そうだ：ユファイには、コレットさんの依頼をやってほしいんだが？」

ユファイ「え!?! まあ構わないですが？」

達也「まあ簡単に言つてしまえば、学院長の依頼は2人で行くとして、コレットさんからの依頼と技術部の配達、コレットさんの依頼は同じ女子が行く方が安心できると思うのだが？ それに技術部のジョルジュ先輩は、俺の知り合いだし受けるのは当然だろう」

ユファイ「わかりましたわ、達也さん。女の子の依頼はやはり女がやらなくてはという

理由は無いですが、技術部の先輩が達也さんの御知り合いならそれも仕方がないですわ」

達也「済まないな、ユファイ」

ユファイ「別に構いませんわ。遊撃士のお仕事に憧れを持ってたのは事実ですし」

遊撃士は、支える籠手の紋章を旗印に民間人の保護するのを誇りに思っている人達ばかりだとユファイは思ってるし、誇りに思っている。

エステル達は、ユファイをユファイと認めてくれて、ユファイを誇りだと思ってくれるのだから、彼女もエステル達を誇りだと思っている。

達也「とにかくよろしくな、ユファイ」

ユファイ「こちらこそ、よろしくお願いしますわ、達也さん」

ユファイと達也は固く握手を交わした。

達也「コレットさんは、学生会館の1階にいるようだ。頑張ってくれ、ユファイ」

ユファイ「ええ、達也さんもがんばって下さい」

達也「それと、ユファイは水泳部に入学したんだろ？」

ユファイ「ええ、どうしてそれを？」

達也「朝一にサラ教官から聞いたんだ。言っておくが、俺から聞いたのではない。サラ教官がペラペラと話しただけだ」

ユフィ「アハハ、わかってますよ」

達也「それでは始めようか」

ユフィ「はい」

ユフィと達也は、第3学生寮からそれぞれの依頼者の下へ進行方向を向ける。達也は技術部がある技術棟へ、ユフィはコレットが待つ学生会館に向かって歩き出した。

第3学生寮から、学生会館へ目指す途中のトリスタの街にあるライノの花がほとんど散り、緑色の匂いが漂う季節になってきた。

トールズ士官学院の1年生にとっては、初めての自由行動日である。部活動にせいを出すもよし、勉強にせいを出すのもよし、遊ぶのもよし、なんでもできるのが、トールズ士官学院である。だが無計画な事をすれば、身を破滅してまうだろう。

まあそんなアホみたいな事をする生徒はいない。

ユフィがトールズ士官学院の方を歩いて行っていると、シスターロージーヌが礼拝堂前を掃除していた。

ユフィ「ロージーヌさん、おはようございます」

ロージーヌ「ユフィさん、おはようございます。今日から自由行動日ですね。何か部活

に入られたのですか？」

ユフィ「水泳部に入ったのですが、生徒会のお仕事も…」

ロジュー「えっ!? ユフィさん生徒会のお仕事もされるのですか!？」

ユフィ「はい、まあなんと言いますか…成り行きの部分もありますけど、わたくし一人ではなく、達也さんも手伝ってらっしゃるので」

ロジュー「達也さんもですか…。そんなお二人共にエイドスの御加護がありますように」

ユフィ「ロジューさん、ありがとうございます」

ユフィはロジューに一礼した後、トールズ士官学院の方へ歩いていく。

トールズ士官学院の方から結構な声が聞こえてくる。トールズ士官学院の部活動は大変盛んに行われているのがわかる。

ユフィ「わたくしも楽しみですわ」

ユフィはそう言ってトールズ士官学院の方へ歩いていった。

まずは、依頼をする前に、水着等が入っている袋をジムナジウム内の女子更衣室に置いてくることにしたのだ。袋を持って依頼をこなすには邪魔になるからだ。

女子更衣室に入ると、マイン副部長がいて着替え中だった。

マイン「あらっ? ユフィさんは、生徒会にお仕事を済ませてからじゃなかったかしら

「？」

ユファイ「はい。水着の入った袋を更衣室のロッカーに預けに来たんです。それと入部届けを書いて持って来ましたわ」

ユファイは、水着の袋の中に入れていた入部届けの紙をマインに渡す。

マイン「確かに受け取りました。後でクライン君に渡しておくわ」

ユファイ「お願いしますわ」

マイン「ユファイさんのロッカーは、壁側のロッカーの列の3番目ね。2番目はラウラさんだから」

ユファイ「わかりましたわ」

ユファイは壁側の3番目のロッカーの扉を開けて、水着等の入った袋を置く。

そして出ようとしたユファイだったが、マインの2つの膨らみを見て驚いてしまう。

マスクメロンが2つ…

そうユファイは頭の中で思い付いた。それに競泳水着が何だか食い込んでるようにも思えたが、マインはユファイに挨拶してそのまま出ていった。

ユファイ「マイン先輩…大胆な方ですわ…」

ユファイも感心しながら女子更衣室から出てジムナジウムから出た。

ギムナジウムからコレットが待つ学生会館に向かつて歩き出した。ギムナジウムに
来た頃は、まだ空気がひんやりと冷たかったが、陽に温められてポカポカ陽気な感じに
なっている。ユフィは、こんな時に野原で寝転んだら気持ち良さそうと考えていた。

そんなことを考えながら、学生会館の1階にやって来た。この1階にいるコレットを
探しました。何かを探してゐるような女子生徒が1人いたからすぐにわかった。

ユフィ「貴女が1年IV組のコレットさんでしょうか？生徒会に依頼を出されていませ
んでした？」

コレット「え〜とそうだけど…あなたってVII組の人だね？もしかして生徒会に入っ
たの？」

ユフィ「い、いえ、わたくしは、生徒会には入っていませんわ。ただお友達が、生徒
会のお手伝いをやってらっしゃいますからお手伝いをやらせてもらってただけです」

コレット「へえ…そうなんだ〜同じ1年なのに…やはり特科クラスの人達てやつぱり
すごいんだね」

自分はそんなに凄くないと、ユフィは思っている。凄いと言われたら達也やマキアス
達だと思っている。ユフィは、別に謙遜して言ってるわけではない。

ユフィ「そんなにわたくしは凄くないですわ。確かに凄い人もいらつしやいます。そ

れよりも、コレットさんは学生手帳をさがしているんですよね？」

コレットの話だと朝から心当たりがあるところを探していたようだ。けど未だに見つからないようだ。

コレット「今すぐ依頼を受けてくれると嬉しいけど…都合の方はいいかな？えーとユフィさんだっけ？」

うん？ユフィは疑問に思った。…コレットに、自己紹介をしたのか？いや名乗っていない、なのにどうしてと？

コレット「別に驚かなくてもいいよ。特科クラスの人達みんな注目されてて…有名だから…名前を知っててもおかしくないかな…ハハハ」

自分達Ⅶ組はやはり注目されてる。士官学院の中でも異質の存在である特科クラスⅦ組。

達也、リンみたいな田舎から出てきた人間や、ユースやラウラやアンジェリナのような貴族もいる。マキアス達みたいに都会の平民も一緒にいること自体が、周りから見れば異質に見えるのかもしれない。

ユフィ「ハハハ…わたくし達有名なんです…えつと今からわたくしも学生手帳の搜索に協力いたしますわ」

コレット「ありがとう…ユフィさん」

ユフィ「ユフィで構いませんわ」

コレット「じゃあ、私もコレットでいいよ」

ユフィ「わかりましたわ、コレット」

コレット「改めてよろしくね。ユフィ」

そしてコレットが言うには、昨日の放課後に図書館で本を借りようとして、その時に初めて気付いていたようだ。図書館で本を借りる為には、学生手帳が必要になるからだ。無いと本は借りれない。

コレットが最後に学生手帳を確認したのは、放課後が始まったときで、彼女の教室でことだから、友達としゃべってた時に学生手帳に軽くメモをとったようだ。だからコレットは、覚えてると言った。では図書館までに、立ち寄った場所とかに落とすという可能性が出てくる。

コレット「でも学生会館や本校舎と図書館にしか行ってないしな……」

ユフィ「それならかなり絞れますわね。じゃあ手分けして探してみましようか」

コレット「と言うのも実は、今朝のうちに図書館は探したんだ。野外の方も用務員さんに聞いてたからね。そしたら学生手帳なんか落ちていないと言われたの」

ユフィ「だったら……尚更ですわね。本校舎の方は各教室も当たって見るべきでしょうか？」

コレット「ううん…自分達の教室は既に昨日の内に調べたし他の教室には入っていないから」

ユファイは、コレットから廊下は休憩スペースを重点的に探してほしいと頼まれた。

早速、本校舎2階の休憩スペースに行く事にした。

第1章ー7ー5話ーコレットの依頼。

学生会館から本校舎に移動するユフィ。するとブルマ姿でランニングしているアリスとアンジエリナに会う。2人は、ラクロス部に入部している。

アリス「ユフィも生徒会の依頼頑張ってるね」

アンジエリナ「ユフィさん、頑張ってくださいね」

ユフィ「アリスさんもアンジエリナさんも頑張ってくださいね」

アリスもアンジエリナも手を振りながらグラウンドへ走っていく。ユフィも2人に手を振った。

そしてユフィは本校舎に入り2階へ向かう。本校舎の中は、外より涼しいしひんやりしている。

本校舎の方で部活動を行っているのは、吹奏楽部と料理部である。本校舎2階には、料理を作っている匂いが漂っているし、吹奏楽部の優しい音色が鳴っている。

コレットが言っていた本校舎2階のある場所に休憩エリアのスペースがとられた場所がある。

そこでは雑談をしたり、勉強をしたりして利用している人間は多い。よく達也やアリ

サは、何かの勉強をしたりする場所でもある。達也とアリサだけじゃないが、ユーシスとガイウスとリインもよく勉強をしている。

話がずれてしまったが、依頼者のコレットは、この場所で友達と雑談をしていて、その時に学生手帳をメモ代りに使った。ユファイが休憩エリアまで来て考えていた。

ユファイ「ここで昨日、コレットがお友達と雑談をしていらつしやった」

ユファイは、コレットから説明されたとおりに、ソファアーに座り雑談をしているのでやってみた。そして上着の内ポケットから学生手帳を取り出した。

ユファイ「それで、学生手帳を取り出してメモを書かれた……」

ユファイは、学生手帳を取り出す時にあることに気がついた。

ユファイ「まさか、そんなこと……」

ユファイは、以前学生手帳をスカートのポケットに入れていたことがある。しかしスカートのポケットは落としやすいのだ。まさか入れたつもりになって、ソファアーの下とかに落としたのではないかと、ユファイは気づいた。

ユファイはソファアーの下を見るが、落ちてはいない。

ユファイ「あれ……おかしいですね？」

スカートのポケットから落ちるなら、ソファアーの下に落ちるはず。ここで落としたのなら、ソファアーの下に落ちるはず。もしくはソファアーとソファアーの間に挟まってる可能

性もある。

ユフィは、ソファーとソファーの間を見てみる。すると学生手帳らしきものが見えて
いる。

ユフィ「あ、ありましたわ、コレットの学生手帳が！」

慌ててソファーの間に手を入れて学生手帳を取り出そうとする。しかし学生手帳を
掴むことが出来ず、ソファーの反対側に落としてしまった。

ユフィ「反対側に落としてしまいましたわ」

困ったユフィは、誰かに助けを求めようとする。しかし助けを求めることを止めた。
この依頼は、自分自身がコレットから引き受けたのだ。他人に助けを求めたら何の意味
もないのだ。

ユフィ「コレットはわたくしに依頼してこられたんです。ならわたくしは、最後まで
やり遂げなきゃならないんです」

そう気合いを入れたユフィは、床によつん這いになりながら、ソファーの反対側に落
ちた学生手帳を拾うために手を伸ばした。

ユフィが学生手帳と格闘中と同時刻、Ⅶ組教室では、マキアスが1人で勉強していた。
第2チエス部の部長のステファンが、教室で1時間勉強してから、第2チエス部の活

動をやると言われている。だからマキアスもⅦ組教室で勉強しているのだ。

マキアスも静かなⅦ組教室で勉強する方が集中できるので。今の第3学生寮では静かに勉強が出来ない。その原因はスハルト・オルランドである。彼が1―3からⅦ組に編入してくるまでは静かに出来ていた。

だが彼が編入してきた後、うるさくて出来なくなった。

昨日編入してきたばかりの彼が、マキアスの安息の時間を奪ったのだ。彼はすぐに寮で問題を起こした。

今朝も一番にアリサとアンジェリナの朝シャンの邪魔をしたようだ。それで寮は朝からうるさくなつてしまった。

ちなみにユフィと達也が、生徒会の依頼の紙を見始めた頃は、その騒動が収まった後だ。達也は、一部始終を知っているが、ユフィは知らない。

マキアス「うん？もう一時間も経っていたのか…。勉強に集中できるのは問題無いが、ステファン部長との約束時間に遅れるのはまずいな」

マキアスは、勉強道具を鞆に入れてⅦ組の教室を出る。そして1階に降りる階段のあるところに行こうとしたら、2人組の他のクラスの男子生徒がニヤニヤして何か言っている。Ⅶ組のユフィ・レンハイムだと。それを聞いたマキアスは黙って近づいていく。

男子生徒1「おおうアレ、かなりいいんじゃない」

男子生徒2 「そうだな。白のパンツ…それにいい具合に食い込んでるな…」

男子生徒1 「ああ…！オレ…このまま…あのぴー」

男子生徒1は、禁止用語を言ったため、セリフをカットします。

男子生徒2 「…だな！ARCSで写真でも撮ってみるか」

男子生徒1 「頼むぜ…」

ARCSで、ユフィのパンツを写真に納めようとした時、マキアスが

マキアス「君達、それ以上のことをやれば、教官達や生徒会に報告するが？」

男子生徒2 「げっ…VII組の！」

男子生徒1 「ここは、逃げるが勝ち！」

2人男子生徒は、マキアスに咎められると、そそくさに1階へ逃げていく。するとよつん這いになりながらパンツを見せていたユフィが

ユフィ「やつと取れましたわ！」

マキアスはユフィに近づき

マキアス「一応聞くけど、ユフィ君、君は何をやってるんだい？」

ユフィ「コレットの学生手帳を取ってたんですわ」

マキアス「コレットの学生手帳？」

ユフィは、マキアスに生徒会の依頼の中の1つがコレットの学生手帳を探す依頼だと

説明した。

マキアス「なるほど、それでそのコレット君が言っていた休憩エリアに来て、ソファア
の間に学生手帳が挟まってるのを見つけた」

ユフィ「そうですね。挟まってる学生手帳を取ろうとして、反対側に落としてしま
いましたわ」

マキアスはメガネをくいつと上げながら

マキアス「なるほど。それでよつん這いになりながら学生手帳を取ろうと…」

ユフィ「そうですね」

マキアスは呆れながらユフィを見る。彼女とは、入学式の日に出会ってから色々あつ
たが、しっかりとした部分と抜けた部分があることにわかった。抜けた部分とはこうい
うところだ。

マキアス「男子の僕が言うのは、おかしいが、一言言わせてもらう。ユフィ君、こ
んな場所できつきの格好はマズイ。他のクラスの男子生徒達が…君の…」

マキアスが言葉を濁した理由をユフィは気付き顔を真っ赤にする。

ユフィ「マキアスさん、ありがとうございます。わたくし、物事に集中すると回りが
見えなくなるんです」

マキアス「…物事に集中するのは、別に悪くはないのだが…」

マキアスは、もし自分がⅦ組教室で勉強せずに第3学生寮でやっていたら、目の前の彼女は魔の手に落ちていたかもしれない。そんな彼女は、マキアスに対して安心した笑顔を見せている。

ユフィ「アハハ、マキアスさんがおっしゃった事、よく言われますわ」

マキアス「それで、その依頼者のコレット君はどこにいるんだい？」

ユフィ「コレットは、学生会館の1階に待ってますよ」

マキアス「学生会館か。なら僕も途中まで行こう」

ユフィ「マキアスさんも？」

マキアス「学生会館の2階の一部屋に第2チエス部があるんだ。僕は第2チエス部に入部したんだよ」

ユフィ「第2チエス部ですか。わたくしは水泳部ですわ」

マキアス「そうなのか。とにかく学生会館に向かうとしようか」

ユフィ「はい、ありがとうございますわ」

ユフィとマキアスは、本校舎2階休憩エリアから学生会館へ向かう。

ちよつと時間は、遡ることなる。スハルトと共にⅦ組に編入してきたアンジェリナである。

彼女は、朝早くからラウラと共に第3学生寮前にて素振りをやってからお互いのクラブのための自室で支度をしているのである。

アンジェリナ「達也さん：トリスタ街道で素振りを毎日なされてるなんて……。私が剣を取ったのも——」

アンジェリナは小さきときから政略結婚の道具のように周りから扱われていたのだが、姉アンゼリカも庇いはしていたのだが、アンゼリカ自身も子供であったためどうすることもできなかつた。だがある時：再び政略結婚先を皇帝一家と縁のあり先のことがあるユミルのシュバルツアー男爵家を選ぶのである。

しかしその話しも破談になる。シュバルツアー男爵家からの断りだった。いや正式に言えば達也自身が断つたのだ。

達也「結婚とは：互いに好きな人同士とするものなんだ。君はそうじゃないか？」

アンジェリナ「私は：所詮：政略結婚の道具にしか：なりませんの」

達也「道具つて!!君は君なんだ!もつと自分を大切にした方がいい」

子供ながらにアンジェリナは思つたのだ。この男の子は自分のために怒つたり笑つたり泣いたり……。一緒になつて……。

他の貴族の子供とは違うと。どこか平民のような感じもするのだと。

アンジェリナ「あするとき：私は決意しました。あの方は私の——」

アンジェリナはまたあの事を思いだして…顔を赤面させていた。彼女は顔をぶいぶいとふり、身支度をすませることにした。

第3学生寮を出たアンジェリナは学院の方へ歩いていくとスハルトが何やらトリスの川で釣り竿をもっているの見る。

アンジェリナ「スハルトさん…ここで釣りでもされてるんですの？」

スハルト「…なんだ？アンジェリナか…見てわからないのか？釣りだよ釣り！」

アンジェリナ「それぐらいわかりますわ」

アンジェリナとスハルトはしばらく言い合っていたがスハルトの方が釣りの方に集中したためにだ。だがスハルトは

スハルト「あまり水面の前に近づかない方がいいぜ…」

アンジェリナ「あっ……」

アンジェリナは気がついて、一歩下がる。

アンジェリナ「スハルトさん…あなたって人は!!」

スハルトが真剣な顔してアンジェリナに

スハルト「お前！ラクロス部なんだろ？アリサはとつと行ってるぜ。まあもう…みんなグラウンドの方に出てるかもな」

アンジェリナ「なっ！」

アンジェリナは驚いている。この川と学院のグラウンドからは離れているにど。何故、みんなグラウンドに出てることをスハルトはわかっているのかと。

スハルト「…匂いだよ。遅刻したくなければ早く行きな」

アンジェリナ「言われなくても行きますわよ！フン」

アンジェリナはそう言うのとラクロス部が活動しているグラウンドに歩いて行く。途中で何やら荷物を運んでいる達也を見かけるが、声をかけずにラクロス部へ行ってしまう。

スハルト「フン…全く…俺に構わずさっさと行けばいいのによ」

スハルトはそう言うのと、釣りに集中するのだった。

アンジェリナは、グラウンドの端にある外の女子更衣室へ向かい中へ入る。

そして体操服（ブルマ）に着替えてからアリサ達のいるグラウンドの方へ向かう。向かう前にブルマからハミパンをしてないか確かめる。確認してから行く。

アリサ「アンジェリナ、来たわね」

アンジェリナ「アリサさん、ごめんなさいね」

アリサ「良いのよ、本当は待ってても良かったのに…」

アリサは申し訳なさそうにアンジェリナに言った。

アンジェリナ「私のためにアリサさんに迷惑をかけるのは申し訳ないので……」
アリサ「全く……貴女って人は……」

そんな2人を複雑そうに見ている人物があった。

フェリス・フロラルド。

彼女は、ラマール州のフロラルド伯爵家のご息女である。つまり貴族のお嬢様ってことになる。

フェリスは、アンジェリナが、寄せ集め集団のVII組に編入したことが信じられないでいる。彼女はましてはそこらの貴族と違う。四大名門のログナー侯爵家のご息女の一人なのだから、あんなVII組に自分の方から行くなんておかしいと思っている。

何故、平民の生徒と仲良くしているのか……。彼女の中にいろんな葛藤があった。

アリサとアンジェリナの姿を見て、エミリーとテレジアもその光景を見て微笑ましいと思っている。そしてフェリスとも仲良くなれると信じている。

かつてのエミリーとテレジアもアリサとフェリスのような感じだったのだから。きつと上手く壁を乗り越えて仲良くなれると。

より良きライバルとして、仲間として。

ユフィとマキアスは、学生会館へやって来た。

先ほどユファイが訪れた時よりも、学生が多くなっている。

ユファイ「先ほどより、人が増えてますね」

マキアス「その学生手帳は、依頼主のコレット君もので良かったんだよね？」

ユファイ「ええ、一応中身の方を確認させてもらいましたわ」

ユファイは、学生会館に来る前に先ほどの休憩エリアで、学生手帳の持ち主の名前を確かめた。学生手帳の名前を記載されてるところには

「――1年4組――コレット――」

だから間違いはないのである。

マキアス「なら、持ち主のコレット君を探さないとな」

ユファイ「ええ、そうですね」

ユファイとマキアスは、学生が集まっている学生食堂をキョロキョロしていると、とあるテーブルの方から声をかけられる。

コレット「ユファイ、ここ、ここだよ！」

ユファイ「コレット、そちらにいらっしやいましたか」

ユファイがマキアスにお礼を言おうとすると、ここまで来たのだから最後まで付き合うと言った。

ユファイとマキアスは、コレットの席にまでやって来て、学生手帳を彼女に渡す。

コレット「間違いない、私の手帳だ！ふっ…本当に良かった。これがないと自分を証明できないからね、本当にありがとうね、ユフィ」

ユフィ「どういたしまして」

コレット「えくとユフィ、それで結局とこで見つけてくれたの？」

ユフィ「学生手帳のあった場所というのは、談話スペースのソファアの継ぎ目と言いますか…溝の部分に挟まってましたわ」

コレット「談話スペースのソファア…そつかあそこでみんなで休んだ時に…あつそう言えば前にも座った時にも落としましたことがあつたんだよね」

ユフィ「コレットは、学生手帳をどこに入れてるんですか？」

コレット「え!?そりやスカートのポケットだけど」

やつぱりとユフィは思った。女子生徒は、学生手帳、メモ帳をスカートのポケットに入れて、ことが多いのだ。ユフィも以前スカートにメモ帳を入れていて、落としたことがあるのだ。そのとき達也が拾ってくれて、上着のポケットなら座つても落ちないだろうと、教えてもらっている。今のユフィは、学生手帳を上着のポケットに入れて、メモ帳は貴重品のところに置いている。だからユフィは、コレットにも上着のポケットに入れることを教えることにした。

コレット「あつ本当だ！ポケットがあるんだ。ここなら滅多なことがない限り落とさないで済みそうね」

ユフィ「ハハハ：わたくしも実は言いますと：上着のポケットの事は同じクラスの男子に教えてもらったんです。わたくしもメモ帳をスカートのポケットに入れていて、落としみたいで、たまたまそこを通りかかった同じクラス男子に拾われた時に、上着のポケットの事を教えてくれましたわ」

コレット「そうだったんだ：その男子君には感謝感謝だね。で、その男子君がその彼なんだね！」

ユフィ「ふえ!？」

コレットは、ユフィと一緒にいたマキアスがその拾ってくれた男子だと勘違いしているようだ。コレットはニヤニヤと笑い、マキアスはなんのこともやらずでわからない表情をしている。ユフィは慌ててコレットに説明をする。

コレット「なんだ、違うのか。でも何で一緒にいるのかな？」

コレットは、マキアスが何故ユフィと一緒にいるのか気になるようだ。マキアス自身もユフィのパンチラを見てから一緒にいるなんて答えられるはずもなく。

マキアス「たまたま、彼女とは一緒になったんだ。ただそれだけだ」

とメガネをカチツとやった。まあ、内心はドキドキのマキアスであった、コレットもそれ以上は追及はしてこなかった。

コレット「ユフィにはすごくお世話になっちゃったね。お礼の代わりに2人には、ここでコーヒーを奢ってあげるね」

ユフィ「い、良いんですか、コレット？」

マキアス「ぼ、僕も良いのか？」

コレット「良いつて。私にはこれくらいしかできないから」

ユフィ「それじゃ、コレットのお言葉に甘えてますわ」

マキアス「ありがとう、コレット君」

ユフィとマキアスは、コレットにコーヒーを奢ってもらった。マキアスは、学生食堂のコーヒーも旨いと太鼓判を押した。ユフィもトリスタの喫茶キルシエのコーヒーとは違う味わいだと感心しながら飲んだのだった。

コーヒーを奢ってもらった後、分かれ際にコレットから、アクセサリーをもらった。ユフィは受け取れないと言ったがコレットは

コレット「別に気にしなくていいよ。というのもそれぞれこないだ間違えて同じ物を2つ買っちゃったんだよね。だから有効活用ってことでというか：親友の証みたいなもの

かな」

ユフィ「……そうですね……ありがとうコレット」

コレット「今日も本当にありがとうねユフィ、それにマキアス君」

マキアス「まあ、僕は何もしてないけどね」

ユフィはコレットの依頼を達成致しました。

学生会館の外の出てユフィとマキアスはちよつと話していた。

ユフィ「マキアスさん、ありがとうございました」

マキアス「まあ、良いつてことさ」

ユフィ「マキアスさんは、これから第2チエス部に行かれるんですね？」

マキアス「ああ、部長も随分と待たせてると思うしね」

ユフィ「マキアスさん、ありがとうございました」

マキアス「ユフィ君、別に僕は何もしてないからね」

ユフィ「いいえ、マキアスさんは何もしてなくはないですよ」

ユフィは、あの時の事を思い出す。本校舎2階の休憩エリアのソファアの間に挟まっていたコレットの学生手帳を取るときである。学生手帳を向こう側に落としたり、学生手帳を拾うことに意識を集中してあまり、スカートの中身をモロに見せていることを知らなかった。マキアスが男子生徒達を追い払ってくれたから、何も無かった。もし彼

が来なかったら、自分は何をされたかわからないと不安がいっぱいになった。

でもそこにマキアスが現れ男子生徒達を追っ払ってくれたことは、ユファイの中で何かが目覚め始めていた。

マキアス「ユファイは、まだ生徒会の依頼の仕事をするのだろうか？」

ユファイ「ええ、そうですね」

マキアス「そうか。ただ無理はするなよ、ユファイ君」

ユファイ「ありがとうございます。マキアスさん、今日はありがとうございました」

ユファイとマキアスは、学生会館の前で分かれた。彼は再び学生会館に入って第2チエス部へ向かった。

ユファイは、ARCSで達也に連絡した。達也も依頼を片付けて、ユファイに連絡をするつもりだったようだ。

達也は、本校舎の学院長室に向かっていているから、ユファイにも来るように伝えてきた。

ユファイ「さてと、後は学院長の依頼だけですわ。達也さんは先に学院長室に向かっていらっしやいますわ」

そう言うと、ユファイは、本校舎の学院長室に向かうことになった。

第1章―8―6話―学院長の依頼。それは旧校舎の調査。

ユフィと達也は学院長室前で待ち合わせていた。お互いに依頼を終わらせたから、学院長の依頼をすることになったのだが。

学院長室、お偉い方と会うとわかるとなんだか緊張してくる。それは誰とて同じではないだろうか。別に悪いことをしたわけでもないのにドキドキしてくる。それはユフィや達也も同じよう。

ユフィ「達也さん、なんだか緊張してきますね」

達也「確かに。あまり学院長室なんてくることなんてないだろうからな」

ユフィ「普通に学院生活を送ってれば、ほとんど来ない場所でしょうし」

達也「ただ、学院長が生徒会に依頼を出すと言うことは、何かあるんだろうな」

ユフィは、ヴァンダイク学院長には、別の場所では顔を合わせているのだ。それは、ユーフエミア皇女殿下”としてだ。ユフィ・レンハイムとしては、会ったことがない。彼女は緊張しながら、学院長の依頼か一体なんだろうと思っていた。

2人は学院長室のドアをノックして学院長室に入った。改めて自己紹介をする。

達也「—学院長、失礼します。1年Ⅶ組・達也・シユバルツァーです」

ユファイ「同じく、ユファイ・レンハイムです」

ヴァンダイク「おお、待つておったぞ」

ヴァンダイク学院長：2アージュは越えている身体でユファイと達也を見ている。普通なら怯むとこだが彼の目は、優しい眼差しで2人を見ている。

ヴァンダイク「—トワ会長から聞いてるよ。君らが引き受けてくれたとな。初めての自由行動日なのに悪いが話しを聞いてもらってもよいかかな？」

達也「はい、構いませんよ。そのために来たのですから」

ユファイ「旧校舎の地下の調査ということでしたが」

ヴァンダイク「うむ、入学式の時に君たちが使った場所じゃ。ちなみにあの落とし穴の仕掛けは、サラ君が使うと言い出してな……。まあちとやりすぎであったのはワシの方からも謝らせてもらおう」

達也「いいえ、学院長に謝れては、俺達も怒るに怒れませんかよ」

ヴァンダイク学院長からバラされたあの時の真実。それはあの時の地下へ落とししたのはサラ教官の独断だった。これを知ったら、ユーシスやマキアス達はなんて言うかわ

からないと2人は心に思った。

ヴァンダイク「——話は戻すがあの旧校舎はずいぶん不思議な逸話があつてのう——あの石の守護者（ガーコイル）などもその一つになるじやろう」

達也「あれは……どう考えでもあれは異常ではない魔獣でした。まるで——」

ユフィもあれは魔物つて言つた方がいいと思つた。

ヴァンダイク「うむ、魔獣というよりも魔物といつた方がいいじやろう。しかも放つておけば、いつも間にか元通りの石像へと戻つてしまう」

達也「やはり……そうか」

ユフィ「達也さん？」

達也「いや……そんなことを言つてるジオルジュ先輩達が、いたなつて思い出しただけさ」

ヴァンダイク「うむ、ゆえに昔からこの学院では生徒達の修練と腕試しにあの地下が使われてきたのじや。——しかしここ一年ほど少しばかり状況が変わつてな。無かつたはずの扉が現れてたりどころからもなく声が聞こえたりと不思議な報告が相次いでいるのじや」

達也「……うん大体は聞いてた通りだな。ジオルジュ先輩達も先の先輩達から聞いて

た話しだから詳しくはわからないって言うたな」

ユファイ「学院長は、わたくし達にそういう現象の確認をしようのが依頼なのでしようか？」

ヴァンダイク「うむ：そういうことじゃな。頼みたいのは、地下を一巡りして先月末と違った事が起きていないか確認してもらいたいということじゃ。君たちなら適任じゃろう？」

ユファイ「確かに：―承りました。何とかやつてみましょう。あのがーコイルが復活していたら：：わたくしと達也だけじゃ：：厳しいかもしれませんが？」

ヴァンダイク「そのときはとつと引き返すじゃな。それとこの依頼はⅦ組全員に対する依頼じゃ。他のメンバーについても協力を頼めそうな仲間がいたら声をかけて一緒に入りなさい」

達也「はい。なるべく協力して入ります」

学院長から鍵を受け取り、達也とユファイは、共に旧校舎に行くことにする。達也はARCSで協力を求めやすい人物に連絡してみた。結局連絡とれたのはリインとエリオットとガイウスだけだった。

ユファイもマキアスに連絡しようと思ったが、コレットの時もあるし、第2チエス部に行ったばかりの彼を呼び出すのは気が引けたのだ。結局5人で旧校舎地下探索をやる

ことに。

ユファイは、5人では心細いかも知れないけどやるしかないと静かに決意した。

再び5人で旧校舎に入り地下への扉に繋がる階段のところまでやってきた。

エリオット「うう……またこの場所に来るなんて。ど、どう考えても無謀だと思うんだけど」

達也「まあ確かに。気が進まないなら無理には言わないが」

エリオット「ううん来週は、実技テストなんていうのもあるみたいだし——少しでも魔導杖の扱いには慣れておきたいから。それに達也やリインやガイウスやユファイだけだつて……4人だけじゃ心配だよ」

リイン「ありがとな。エリオット」

ガイウス「そうか……助かる」

ユファイ「ありがとうございます、エリオットさん」

しかしすぐに異変に気がつくユファイ達。明らかに先月の入学式でオリエンテーションをやったときの雰囲気はあるものの、何かが違う。

エリオット「……あれ？……見たところあの化け物は見当たらいね。不気味な石造と

かもないからね。どういうことだろうね？……この部屋……？」

達也「いや……何か変だと思っていたが……俺達があああの化け物と戦った時よりも部屋が小さくなっている」

ガイウス「おそらく……2回以上——おまけに見覚えのないものまで現れているようだな」

ユファイ「あれって……前に来た時には、扉なんて無かったはずですよ」

リン「ああ無かった。——正直、半信半疑だったんだけど」

達也「とにかく降りて扉の向こうを調べる必要があるな」

ユファイ達は、階段を降り、旧校舎地下1階へと足を踏み入れた。

——旧校舎地下1階——内部

達也「こいつは驚いたな」

エリオット「ってここ完全に別の場所じゃない？ぼくたちこんな場所なんて通らなかつたし」

リン「ああ、間違いない。《どうやら地下の構造が完全に変わった》みたいだな」

エリオット「そんな……」

ガイウス「徘徊している魔獣の気配も変わっているようだ。——どうする、達也、リイ

ン、ユファイ？」

達也「——学院長は地下の異変の確認だ。こんな状況になつて以上手ぶらで帰れない。行けるところまで言つてみよう」

ユファイ「そうですね。ヴァンダイク学院長から頼まりましたから、やらないわけにもいきませんわ」

エリオット「はあ、仕方がないか」

ガイウス「——女神の加護を。行くとしよう」

ユファイは上手く「戦術リンク」を使いながら、地下1階の奥地までたどり着くことができたが、奥地では突然現れたミノスデーモンとの戦いになった。

ユファイ達の《戦術リンク》を上手く使いながら、ユファイと達也で、リインとガイウスでエリオットはアーツも使いながら、最後はユファイと達也の紅葉斬りとリインの十文字斬りだけでけりをつけたのであった。

第1章-9-7話-それぞれの放課後。

エリオット「なんとか：倒せたね」

リン「ああ【戦術リンク】もやつと使いこなせてきたな」

ガイウス「【ARCUUS】を通じて：呼吸を合わせる感覚みただった」

ユファイ「そうですね。どうやらここで終点みたいですし：みなさん戻りましょうか」

ユファイ達は、来た道を引き返し始めたすぐに異変が起きていた。さつきまで光っていなかった何かの装置が光出していた。

リン「あの装置：来たときと違って光ってないか？どうということなんだ？」

エリオット「そうだよね、あの装置ってあんな風に光ってた？」

達也「いいや：そんなことはなかったはずだ」

ユファイ「とりあえずですけど、調べてみましようか？」

ユファイ達は、謎の装置を調べ始める。装置の周りを調べて見ても変わった部分はない。するとユファイが何か見つけ装置のある部分を触る。

すると5人は、突然光に包まれた。いきなり旧校舎の地下1階の入り口まで戻され、ユファイ達5人には驚いたが、考えても仕方ないので旧校舎から出てきたのだった。

――1204・4・18・夕方・16:00・旧校舎外

達也「そろそろ夕刻か」

エリオット「はく思った以上に時間がかかったね」

ユファイ「とりあえずですが、ヴァンダイク学院長に、私と達也さんとで報告に行きますけど、リインさん、エリオットさんとガイウスさんも来て下さると助かりますけど?」

エリオット「うん。もちろん」

ガイウス「行くでしょうか」

リイン「ああ、俺も行くよ」

――1204・4・18・夕方・16:20・旧校舎外↓本校舎・学院長室にて

ユファイ達5人で学院長に報告しに行ったが、そこにはサラ教官もいた。ユファイ達の報告を学院長と、サラ教官はやはり予想外の出来事だったようだ。旧校舎自体は士官学院ができる前からずっとあったようだ。それも相当な昔、暗黒時代:それよりも前:歴史

の授業で出てくるものみたいなものかもしれない。しかし旧校舎地下が、別物に変わるのには前代未聞なことであり、サラ教官も引き続き調査すると言った。もちろんユファイ達も学院長から感謝された。

11204・4・18・夕方・16:50・学院長室↓本校舎廊下1階

学院長室から出てきたユファイ達はサラ教官に

サラ「ふつなかなか頑張ったじゃない。どうやらARCSの機能も少しは掴めてきたみたいだし」

達也「『戦術リンク』だな」

ユファイ「確かに使いこなせればかなりの力になってくれそうな感じはしますわ」
エリオット「でもなかなかタイミングが合わせるのが難しいよね？」

ガイウス「そうだな、俺は武器柄、達也、リン、ユファイとは合わせやすいな」
リン「達也は別として、俺もユファイやガイウスとは合わせやすいな」

ユファイ「私も達也さん達は別にして、ガイウスさんとは合わせやすいですわね」
達也「ガイウスとは、朝の鍛練で手合わせさせてもらったことがあるからな」

エリオット「えっ!?なにそれ!なんか僕だけが仲間外れ感が……」

サラ「とにかく……今日は依頼も含めて色々とお疲れ様。特に達也とユファイ、また次

もこの調子で頼むわよ」

達也「一度乗った舟だ。……このまま生徒会の手伝いは続ける。仕事柄俺には一番合つてると思うしな」

ユフィ「私も達也さんと同じ気持ちですわ。生徒会のお仕事は続けながら水泳部も頑張つていきますわ」

サラ「達也やユフィなら……あの忙しい生徒会長の力になつてくれると信じてたわ」

ユフィ「ええ、トワ生徒会長を見ていたら手伝わなきゃって思いましたから」

達也「すまないな……ユフィ」

ユフィ「ええ、構いませんから」

サラ「トワ会長には伝えておくから。それと旧校舎の方は君たちに鍵を預けおくと学院院长が仰つていたからまた気が向いたときにでもみんなで見に来て頂戴。それじゃーね」

エリオット「えつと……」

リン「いいのか？達也、ユフィ？」

達也「別に入りたいクラブもなかったからな、それに生徒会の仕事もいいかなつて思つたんだ。まあ仕事柄上手くやってやるさ」

ユフィ「ふふつ、私は兼任つてことで。それに困つてる人がいると、ほつとけないん

です」

リイン「そうか…手が足りなさそうなら遠慮なく声をかけてくれよ、達也、ユファイ」
エリオット「…それと旧校舎に行くときは、また付き合わせてもらうから」

ガイウス「俺も時間があれば手伝うぞ」

達也「リイン、エリオット、ガイウス、そのときは任せたぞ」

ユファイ「みなさん、ありがとうございます。それに達也さんもありがありがとうございます
た」

ユファイ達5人は、学院長室前で分かれた。リイン、エリオットとガイウスは、クラブ
の方へ達也は、表の方へ出て行った。

ユファイは、水泳部へ向かうため、ジムナジウムへ向かうことにしたのだった。

11204・4・18・夕方・17:10・本校舎↓ジムナジウム

ユファイは、みんなと分かれてジムナジウムへ向かう。すでに太陽が西に傾き黄昏色に
染まり出しているが、部活動はどこもやっていた。

ジムナジウムの中へ入ると急いで女子更衣室に入る。

彼女のロッカーは、壁側の3番目だった。ロッカーの扉を開けると自分の水着等を入

れた袋がある。袋からスクール水着を出した。

ユフィは、制服の上着を脱ぎ、ロツカーのハンガーにかける。ブラウスとスカートを脱ぎ、ハンガーにかける。今の彼女は下着姿である。

白のシルクに話の柄が入ったブラと同じ色のシルクの花柄が入ったパンツ。パンツはマキアスや他のクラスの男子生徒がガン見していたヤツである。

ユフィ「早く着替えて行かないと、水泳部の活動が終わってしまいますわ」

ユフィはそう言うと、急いで水着に着替えるのだった。そして着替えた終えてプールサイドへと急いだ。

プールサイドには、クライン部長とマイン副部長がなにやら話している。ユフィは2人に

ユフィ「すみません、遅れましたわ」

マイン「生徒会のお仕事、お疲れ様」

クライン「話は、サラ教官とマインから聞いている。お疲れ様、ユフィ君」

ユフィは申し訳なさそうに自分の活動時間はあるのか聞いてみた。

ユフィ「ありがとうございます。それでわたくしが活動できる時間は、ありますでしょうか？」

クライン「あるとも。時間の延長は、生徒会から認められるから。ユフィ君が活動できる時間はちやんとあるからね」

マイン「私達は、もう水泳部の仲間なんだから、遠慮なしにいきましょう！」

ユフィ「はい、マイン先輩！」

ユフィは、準備運動をやってから、プールに飛び込みそのまま泳ぐ。

彼女は泳ぐのは得意なのだ。オリビエと旅をしていた頃、よく川なので泳いでいたのだ。それでよくミユラーを心配させていたのだが。

その泳ぐ姿を見て、クラインとマインは、目を驚かせていた。クラインは、自分の目間違いはなかったと。マインは、自分の後継者が見つかったという目をしていて。ラウラも驚いて

ラウラ「ユフィ、そなた…できるな。ライバルがいてこそ…腕は伸ばせるというもの」
すぐにいいライバルが見つかったと誇らしげに見ていた。同じ新入部員のパスカルもユフィに見とれていた。

見とれているものの、水中のなにかも元気になっていた。

それはたまたま、パスカルが目を上に向けた時、ユフィがプールから上がっていた。そのときに彼女の食い込み水着を見て、そうなってしまった。

その後、彼は無心で泳ぎまくったという。

旧校舎↓学院長室↓学生会館・生徒会室。

ユフィ達と別れた達也は、生徒会室に来ていた。なんとなく訪れしまった達也は、トワに先程の報告も兼ねてやっていった。

トワ「あつ、達也君、お疲れ様。今日は生徒会の仕事を手伝ってくれてありがとうね」
達也「いえ、少しでもトワ生徒会長のお力添えできたのなら俺としては光栄です」

トワ「えへへ、本当に助かつちやったよ」

達也「いえ、俺だけではなく、ユフィもやってくれましたし」

トワ「ユフィさんにもありがとうって伝えておいてね」

達也「わかりました。本人に伝えておきます」

トワ「ジオルジュ君だつてとっても感謝してたみたいだし。まさかあの旧校舎の調査まで、成し遂げちやうなんてね。本当にお疲れ様」

達也「はは：また何かあつたらいつでも言つて下さい。また来月も力にならせて頂きますよ」

トワ「あははありがとう。今日は早めに帰つてゆっくり休んでね」

達也との話の合間に忙しそうに仕事をしているトワ生徒会長。……まだ：忙しいくらいに仕事があるのかと考えてた達也。ここまで来たなら最後まで付き合うことにした達也は、トワ生徒会長に

達也「トワ生徒会長、もしかしてまだ仕事が残っているんじゃないでしょうか？ ついでし最後まで付き合わせてもらいますよ」

トワ「えつと……いいのかなあ？ 達也君も疲れてるでしょう？」

達也「いえ大丈夫です。それにトワ生徒会長の笑顔を見れば疲れなんか吹き飛びますよ」

トワ「ふふっありがとう。達也君は優しいんだね。それじゃ、あとちよつとだけ手伝つてもらつちやおうかなあ」

その後達也は、トワ会長の事務仕事をできる範囲で引き受け、一通り仕事を終わらせたあと、お茶をご馳走されることになった。ただ予想をしてたよりも、ハードで忙しいことが分かった。こんな大変な事を毎日続けてるなんて、本当に頭があがらないなと思つた達也であった。

トワ「はあ……ようやく一息ついたね」

達也「はは……トワ生徒会長お疲れ様でした。しかし生徒会っていうのも本当に忙しそうですね」

トワ「あはは……まあねいっつも仕事は持ち帰りだし。でも本当にいいの、達也君？」

達也「えつと、来月も生徒会の手伝いをするって話しでしょうか？」

トワ「教官に言われたからって絶対やらなきゃダメだつてことはないと思うけど――」

「トワ生徒会長……これは自分で決めたことですから。（わざわざ家を出てこの士官学院まで来たんだ。それにサラ教官に言われた自分の立ち位置を、自分が何者なのか、それを必ず見いだすためにも!）」

トワ「あのね達也君。身も蓋もないことをいうかももしれないかももしれないけど、そんなに無茶してがんばらなくてもいいんじゃないかなあ」

達也「え?」

トワ「その、頑張ること自体はわるいことじゃないよ。でも時々は羽を休めることも大切なことだと思ってる。じゃないと本当に頑張りたいときに頑張れなくなっちゃうから」

達也「……トワ生徒会長のそのお言葉、肝に銘じときます」

トワ「はわわっ……ごめんね! 達也君の事情もよく知らないで……! で、でもねやっぱり無理をして体をこわしたりしたらよく無いとおもうんだ。達也君もこの学院の大切な生徒の1人なんだから」

達也「トワ生徒会長……ありがとうございます。なんだか肩が軽くなった気がしますよ」

トワ「えへへ……そっか。その疲れたらいつでも生徒会を訪ねてきていいからね。こう

してお茶を出してあげるくらいならわたしにもできるからね」

達也「はは…ありがとうございます。(トワ生徒会長、この人といるとなんだかほつとさせてくれるな。アリサとは違う何か安心できる…うまく説明出来ない何か、コホン…次からも無理はせずに精一杯がんばるとするか)」

しばらく達也は、トワ生徒会長と雑談をしてから、まだ簡単な仕事が残つてると言うトワ生徒会長に挨拶をして、生徒会室を後にした。

学生会館↓ギムナジウム(プール)

達也は学生会館から出た後は、ふとギムナジウムの方へ歩いて行つた。西からは夕日の光に照らされて校舎のガラスから光が反射していた。

ギムナジウムに入ると奥の方からは、水の匂いやすぐ横の練式場からはかけ声が聞こえる。達也は奥のプールは、水泳部が使っているであろうプールの方へ向かった。

水泳部はちゃんと練習をしていた。何故、達也がここに来たかは、ユフィにもう一度お礼を言うため出もある。彼女はラウラと話しているようだった。

達也「2人共、お疲れ様」

ユフィ「達也さん？」

ラウラ「達也ではないか？」

ユフィ「達也さん、また何か頼まりましたか？」

ユフィは、また誰かに頼まれものでも引き受けたと思ってるのかもしれない。達也は、ただもう一度礼を言いに来ただけだから。

達也「ユフィにもう一度礼を言いに来たんだ。水泳部があるのに、俺の生徒会の手伝いをやってくれたことのお礼だな」

ユフィ「うふふ、…別に気にしてませんわ。こうして残りの時間で水泳も出来るからね、達也さんが気にする必要はないですわ。わたくしが自らの意志でやっただけですわ」

達也は、そう言ってくれると助かると思うのが、水泳部の方は大丈夫なのかと考えた。だがユフィは、大丈夫だと言った。

ユフィ「ですから達也さんが気にする必要はありませんから」

達也「ああ…分かった」

つついユフィの返事に頷いてしまった達也は、彼女に悪い気もするけど、彼女が良いと言ってるから良いのかと思つた。しかしラウラの咳払いで我に帰つた。

ラウラ「コホン…達也にユフィ…何、2人だけで、話を進めている？旧校舎の搜索は

来月から私は私も参加しよう。良い鍛錬になりそうだからな」

ラウラの来月から旧校舎の搜索を手伝うって宣言されてしまったが、ラウラが来てくれるなら心強いと達也はそう思った。ユファイが驚いた声をあげる。

ユファイ「ラウラさんも!？」

ラウラ「旧校舎の依頼はⅦ組全員に対しての依頼なのだろうか？ならば私が行くのは問題はないはずだ」

ユファイ「いやそれに関しては問題ではなく、流星に水泳部をわたくしとラウラが抜けるのは大丈夫なのかなってことですわ！」

ユファイの心配は、水泳部の自分達が2人も抜けて大丈夫かなというのが心配なのだろう。達也は、クレイン部長やメイン副部長にユファイやラウラの件を話した。クレイン部長はやメイン副部長は、快くOKしてくれた。ユファイとラウラが感謝の言葉を述べてきた。

ユファイ「ありがとうございます、達也さん、何から何まで」

ラウラ「すまぬな、達也。そなたには感謝しなくてはな」

達也「別に構わない。それが仕事だからな」

達也は、これも生徒会の仕事の一環のだからと思った。ユファイやラウラの水着姿を見たのだから、少しは喜べと。喜ばなければ、世間の男達がバッシングを受けてしまう

だろうと内心で思っていた。しかしラウラには気付かれているようだ。

ラウラ「達也よ：何をジロジロ見ている？」

達也「ふっ：何でもないさ。やっぱり水泳は、2人共、大の得意なんだな」

ラウラ「私の故郷『レグナム』は湖畔にある町だからな。寒中水泳も鍛錬のために日常的にやっていたから、少しくらいはサマになるだろう」

ユフィ「わたくしの故郷でも良く寒中水泳やってみましたわ。わたくしも鍛錬のためにやってみましたから。泳ぐことが好きだから楽しめましたね」

2人に共通するのは、寒中水泳を故郷でやって、それを鍛錬のためにやってるわけだ。

達也は、なんかすごい2人だよと思った。ラウラが真剣な眼差しで話しかけてきた。

ラウラ「以前父上に言われていた言葉がある。『時に剣を手放すことで得られるものがある』らしい。前々から士官学院に入ったら実践してみようと思っていてな」

達也は、ラウラの父上の『光の剣匠』の言葉に重みを感じると思った。それはもちろんユフィも同じだった。

達也「俺も以前同じ事を言われたことがあるんだ。だからわかる気がするな」

ラウラ「ほう：」

ユフィ「わたくしも言われましたわ」

達也もこれ以上は、水泳部の邪魔になるし、ユフイやラウラの水着姿は目のやり場に困ると判断し立ち去ることにした。

達也「俺はもう行くけど、ユフイにラウラ、クラブの方、頑張ってくれ」

ラウラ「ああこれからもっと精進しなくてはな」

ユフイ「わたくしも精進しなくっちゃ。それと達也さん、今日は本当にご苦労様でした」

達也「ユフイもご苦労様」

達也は2人に手を振ると、クライン部長とマイン副部長に軽く頭を下げってから、プールから出る。

すぐにギムナジウムから出て、達也はグラウンドの方から第3学生寮へ帰ることにした。

ーアリスとフェリス

ー11204・4・18・夕方・17:30・ギムナジウム↓グラウンド

ユフイやラウラ達と分かれた達也は、グラウンド側から第3学生寮に帰ろうとしたら、夕陽が差すグラウンドに1人ポツンと作業をしている人物がいた。

もちろんアリスである。

達也「なぜ、アリサだけが片付けを？ アンジェリナや他の貴族生徒もいたはずだろ？」
達也は周りをキョロキョロして確認するが、誰かがいるようには見えない。

達也「まさか、仲間外れとかなのか？」

そんなことを考えながら達也はアリサに話しかける。

達也「アリサ……」

アリサ「た、達也か、アハハ、嫌なところを見られちゃったわね」

達也に苦笑いしながら申し訳ないように黙々と道具を片付けているアリサ。

達也「アリサ、一人で片付けをしているのか？」

アリサ「アハハ、新入部員の仕事だもの」

達也「アンジェリナや貴族の生徒もいただろ。なのにか？」

アリサ「アンジェリナは手伝ってくれるって言うてくれたけど、もう一人その子が彼

女を引っ張って先に帰っちゃって……ね」

アンジェリナは、アリサの手伝いをしようとしたが、もう一人の貴族生徒が邪魔をしたらって感じだろう。彼女が四大名門の貴族だから、そんなことはしなくてもいいってことなんだろう。

アンジェリナもアリサだけに押し付けるなんて心が痛めてるだろうと、考えた達也は達也「アリサ、一人じゃ大変そうだし俺も手伝うよ」

アリサ「え!?!……達也に悪いよ……いつも達也に助けてもらってるし」

達也「気にするな、アリサ。俺もアリサには助けてもらってるからな」

そう言いながら達也は、ラクロスの部が使ったゴールのやつとかを、アリサと一緒に片付けた。

水泳部の場合は、みんなでワイワイと活動しているように感じたが、ラクロス部は違うのかと達也は感じた。アリサが達也に

アリサ「達也、本当にありがとう」

達也「気にするなって言っただろ。俺は別に気にはしてない」

達也は、アリサのブルマ姿を誰かにこれ以上見せたくないという気持ちもあった。アリサ自身も達也にブルマ姿をもっと見て欲しいが中々そんなことを言えないのであった。

このあとアリサが着替えるのを待って、達也とアリサは一緒に第3学生寮へ帰るのであった。

――夕方↓夜

陽も暮れ、水泳部の活動も終わり、各自更衣室で着替えてから、学生会館へ行くことに。クライン部長とマイン副部長が、ユファイ達新入部員を歓迎会みたいなことをしてくれるようだ。

ユファイ「ありがとうございます、クライン先輩、マイン先輩」

パスカル「本当にこんなことしてもらって良かったのですか？」

マイン「いいのいいの。水泳部の毎年の恒例行事みたいなものだから」

クライン「まあ、歓迎会と言っても学食を奢るくらいしかできないからね」

ユファイ「いえいえ、わたくし達はそれでも嬉しいですわ」

クライン「ありがとう、ユファイ君、パスカル君……それとラウラ君？」

ラウラは、誰かと話している。緑の制服を聞いているから、平民クラスの人間だろう。

???「あの、えと、先輩、私、モニカと言います。水泳部に興味があつて色々教えて

ほしいんです」

ラウラ「うん、それは構わんが……私は先輩ではないし、先輩は、あそこにいるクラ

イン部長とマイン副部長だ。そこにいるユファイとカスパルは同じ水泳部の1年だ」

モニカ「ええ……!?そ、そうなんですか!？」

ラウラ「ああそうだ」

ユファイ「わたくしやパスカルさんも同じ1年ですわ」

パスカル「そうだよ…モニカさん。敬語は無しでいいよ」

モニカ「えとでも…」

彼女はラウラの方を見て…本当に良いのか判断をしかねていた。

ラウラ「そなた、モニカと申したな。パスカルの言うとおりだ。敬語はなしにしよう。もしそなたが私が貴族だからと迷ってるなら心配無用だ。私はそのようことは気にしないからな」

ユファイ「わたくしはユファイです。よろしくお願いします、モニカさん」

パスカル「俺はカスパルだ。よろしく」

ラウラ「私はラウラだ、改めて宜しく頼む、モニカ」

クライン「部長のクラインだ。改めて宜しくな、モニカ」

マイン「副部長のマインよ。改めて宜しくね、モニカ」

5人は、モニカの入部歓迎会を改めて行ったのである。

第1章―10―8話―その日の夜。

ギムナジウム（プール）↓学生寮へ

ユフィ達は、モニカの歓迎会を30分くらいやったのだった。クライン部長は、新入生が4人も増えたことに感激していた。マイン副部長も女子が増えたことに感激していた。

帰りも第2学生寮の前までやって来て、クライン部長達、パスカル達と分かれて、ユフィとラウラは第3学生寮へ歩き出す。

2人が第3学生寮に帰っていたら、キルシエのマスターのフレッドが何やら困った顔で表に立っていたのだ。ユフィはすぐに何かあったのかと思い、マスターのフレッドに話しかけたのだ。

ユフィ「どうかされたのですか、フレッドさん？」

フレッド「うん？ユフィか。ちよつとまずつまつたんだよ」

ユフィ「まずったとは？」

フレッド「いやそれがな、いつもウチで使っているある調味料があるのだが…それをさつき使いきってしまったな」

フレッドは調味料を切らしたことで、今から買いに行くことも注文をとることも出来ないでいるようだ。だが調味料は絶対に持つておきたい。何故ならその調味料を使った料理を、楽しみにしている学院生もいるようだ。ラウラが代用はできないかつて聞いているが、フレッドは出来なくもないが、風味が大きく変わるからできない。

ユフィは、これも生徒会の依頼の延長だと言ってフレッドに

ユフィ「フレッドさん、その調味料ってどんなものでしょうか？」

フレッド「ああ、大陸南部が原産の『パッションリーフ』と呼ばれる少し珍しい香料だ」

パッションリーフ、大陸南部にそう言う香辛料があるって聞いたことあるとユフィは思った。

フレッドはいつもならブランドンのお店で特別に仕入れてもらってる。こまめに在庫チェックしていれば、切らすこともなかったって嘆いている。

パッションリーフ、調理部のニコラス部長なら、知ってるかもしれないとユフィは考えた。

ユフィ「フレッドさん、少し待つてもらえないでしょうか？」

フレッド「ユフィ、良いのかい、頼んでも？」

ユフィ「構わないですわ。これも生徒会の依頼の一環だと思えば、なんとでもなりま

すしね」

生徒会の依頼と思えば筋は通ると心に思った。トワ生徒会長を通さずに、やるのはちよつと引け目を感じるユファイだが、やるしかないと腹を括る。

ユファイ「それにちよつと心当たりがあるので、なんとかなると思いますわ」

フレッド「ユファイ、ありがとう」

ユファイ「フレッドさん、確実な保証ありませんが、よろしいでしょうか？」

フレッド「ああ、わかつてる」

ラウラが心配そうにユファイを見ている。

ラウラ「ユファイ、そなた」

「大丈夫ですよ。これでもわたくしは、これでも生徒会の端くれです。ラウラは先に第

3 学生寮へ帰ってもらつて構いませんわ」

ラウラ「ユファイ、良いのか？ 私も手伝おうか？」

ユファイ「大丈夫です。何かあればラウラに頼りますから」

ラウラ「…そうか。ユファイ、何かあれば、私も手伝おう。…：ではまた後でな」

ユファイ「ラウラ、わたくしの荷物を持って帰つて貰えませんか？」

ラウラ「構わないぞ」

ユファイは、ラウラに荷物を預ける。彼女は、何か言いたそうだったが、言わずに第3

学生寮へ帰って行った。

ユフィは、ラウラにごめんと行って、フレッドの依頼を開始する。まずは、ニコラス部長に会ってパッションリーフのことを尋ねてみることにした。

ユフィは再び本校舎2階の調理部を目指した。

調理部の部室に入ったユフィはニコラス部長に話しかける前に向こうから話しかけてきた。

ニコラス「やあ、ユフィ君か。調理部に何か用事かい？」

ユフィ「ニコラス部長、少しよろしいでしょうか？」

ユフィはニコラス部長に事情を伝えて、「パッションリーフ」をもっていないかを尋ねた。

ニコラス「なるほど、そういう事情で『パッションリーフ』を探しているのか……。でもすまないね。僕も使ったことはあるけど、今は持ち合わせていないんだ」

ユフィ「あ：あ、はい。わかりましたわ」

ユフィは、やっぱり駄目だったと肩を下ろす。仕方がない、大陸南部原産だから帝国では手に入りにくいからと聞いていたとおりでと思いい出した。でもニコラス部長は何かあるようで

ユファイ「ふむ、だが諦めるにはまだ早いよ、ユファイ君」
ユファイ「どういうことでしょうか、ニコラス部長？」

ニコラス部長は、調理部には無いが、学生会館の食堂、学生食堂にはあるのではないかと教えてくれた。ニコラス部長が、以前学生食堂で食べた日替り定食から、パツションリーの風味を微かに感じたみたいだ。それも隠し味に使つてる程度だが。流石ニコラス部長だとユファイは思った。

学生食堂は、ラムゼイさんが仕切つて調理をしているようなので、ラムゼイさんに聞いてみることに。

ユファイ「ニコラス部長、どうもありがとうございます」

ニコラス「いや、すまないね、ユファイ君」

ユファイ「いえいえ、これがわたくし達のお仕事ですから」

ユファイはニコラス部長に挨拶を済ませてから、本校舎から学生食堂がある学生会館へ歩き始めた。

そして学生会館の学生食堂へやって来たユファイは、調理室へ入った。

ラムゼイ「うん？何か用か？……もしや、摘み食いにでも来たか？」

ユファイ「違いますわ。わたくしはラムゼイさんに用があつて来たんです！」

ユファイは、つまみ食いをしに来たわけではないと、改めてラムゼイさんに事情を話し

た。

ラムゼイ「なるほど。【キルシエ】のために、パッションリーフが欲しいのか？」

ユフィ「はい」

ラムゼイ「それなら…確かにここにある」

ユフィ「本当ですか！」

これでキルシエのマスターのフレッドも、フレッドの料理を食べる学院生も困らなくてすむとユフィは安堵した。

ラムゼイ「ああ、これを持っていくといい」

ユフィはパッションリーフの束を受け取った。

ユフィ「すいません、ラムゼイさん。あっ、お代金を払わないといけませんわね」

ラムゼイ「ふむ、そんなものをとるつもりはない。とりあえず…それだけあれば、2

週間は凌げるだろう。これで足りないようなら、また来るといい」

ユフィ「分かりました、ラムゼイさん。どうもありがとうございます」

ユフィはラムゼイさんにお礼をして、調理室から出た。しかしラムゼイさん優しい人だったと感謝した。そしてキルシエへ向かうことにした。

キルシエに到着したユフィは、すぐにマスターのフレッドに話しかける。

フレッド「もしかして……パッションリーフを持ってきてくれたのか？」

ユフィ「ええ、パッションリーフは持ってきましたわ」

ユフィは、パッションリーフの束をフレッドに渡した。

フレッド「はは、…まさか本当に持つてきてくれるとはな。どうもありがとな、恩に着るぜ、ユフィ」

ユフィ「わたくしは、〃承った依頼は必ず達成させる〃がモットーですので」

しかしパッションリーフの束を見て、かなり値がはるのではないかと言われた。

ユフィ「それなんです、実は調理部ではなく、学生食堂から貰ったものなんです」

ユフィはフレッドに事情を話した。

フレッド「なるほど、そんなことが…学生食堂のラムゼイさんか…。改めてお礼を言いにいかないとな」

ユフィ「わたくしからもお礼を致しましたけど、フレッドさんからもお願いしますね」

フレッド「ああ、そうさせてもらうよ。あと、ユフィにも感謝しないとな。お陰でお客様をがっかりさせずに済むし。何より、ここまで一生懸命に動いてくれたことが、嬉しかったぜ。つまらないものだけど、是非これを持っていてくれ」

ユフィはフレッドから、クリスマスビーピザを3個受け取った。

ユフィ「こんなに沢山…いいんでしょうか？」

フレッド「はは、もちろん良いに決まってるさ。生徒会には、いつもこの商店街は、助けられてるからな。今回はユファイにもな」

ユファイは、フレッドと世間話を少ししてから、クリスピーピザを持って第3学生寮へ帰った。

クリスピーピザは、Ⅶ組のみんなと分けて美味しく頂きましたさ。

——第3学生寮—306号室—ユファイの部屋—夜

ユファイが、フレッドさんからもらったクリスピーピザをⅦ組全員で食べた。やはりキルシエのフレッドが作ったものであるため、誰も食べ残しは無かった。

後は、各自自由時間になり、消灯の時間までは、自由に過ごせる。シャワーを浴びる時間は決められている。ユファイはすでにシャワーを浴びている。

勉強を教え合うよし、Ⅶ組メンバーと絆を高めるのよし、男女間の部屋を訪れるのよし、つまり風紀を乱さない限りはOKなのだ。

そんな中ユファイは、1日の記録を付けていた。その日に起きた出来事、たあいもない事なども記載されている。

しかし今日の記録には、いろんな事がかかっている。まずは生徒会の依頼を達也とこ

なしたこと。次に水泳部に入部して、クライン部長、マイン副部长やパスカル、モニカとも友達になったこと。3番目に、キルシエのフレッドさんの依頼を引き受けて、解決したことを書いてある。

【パーシヨンリーフ】

大陸南部が原産であり、主にリベール王国で栽培されている香辛料なのだ。パーシヨンリーフ好きな人間は、それが無いと料理を食べた感じがしないと云わしめる香辛料なのだ。

しかし、今では東方から【唐辛子】や【醤油】などの輸入品も多く帝国内に入ってきているため、絶対というほどでは無くなった。

むしろ、【唐辛子】や【醤油】などが、【パーシヨンリーフ】よりも価格が安く、帝国企業もリベールから日本からの輸入に切り替えが起きている。

ユフィの太刀を置いている刀置き台も日本からの輸入品である。

今のユフィは、キャミソールにショートパンツというラフなスタイルで、長い金髪もポニーテールに結んでいる状態である。

ユフィ「ふふっ、今日は色々ありましたわ」

依頼の仕事を通じて親友になったコレット。

水泳部に入部してきたモニカ。

それだけではない。旧校舎地下探索では、前回の入学式のオリエンテーションの時と違い、地下構造が全く異なっていた。

ユフィ「…うん…あの旧校舎の地下がまるつきり構造が変わってましたわね」

父や兄、オリヴァルトから聞いていた話とは、全く違う。地下構造が変わることは、2人の話からは聞かされてはいないのだ。

トワ生徒会長からも去年までは、こんなことは無かったと聞いている。

だが今年になって、旧校舎の構造が変わることが起こるとは誰も説明が出来ない。

いくら考えても、ユフィに何か考えが出るわけでもない。ただ分からないがずっと続くだけである。

ユフィ「旧校舎の事は、一端置いときましょう」

ユフィは、ふとベッドのところに置いてある自分の洗濯物に気が付く。おそらくエマ当たりが部屋に運んでくれたのである。

洗濯物を片付けるために立ち上がる。片付けていると自分のパンツを手に取る。

ユフィは、今日の休憩エリアでの一こまを思い出す。男子生徒達に自分のパンツを見せて恥ずかしかったこと。マキアスにも見られたが、彼にだったらと良いかなという自分がいることも。

ユフィ「マキアスさんの好みの色の下着って：何色なんでしよう？」
彼女は、自分がとんでもないことを口にしたことに気がつき、思わず身体中が赤く暑くなる。

ユフィ「わたくしつたら、何をいつてるんでしよう！」

ユフィは、冷たいベッドにダイブして火照った身体を冷やすのだった。

そんな感じで、夜も更けていく。

――第3学生寮―302号室―アリサの部屋

アリサは、先程までアンジェリナが部屋を訪れていたのだ。

なぜ彼女がアリサの部屋を訪れたのは、ラクロス部での夕方の片付けの件である。彼女は、アリサの手伝いをするつもりだったが、フェリスによって妨害されてしまったのだ。

フェリスの言葉

【大貴族である貴女が、平民のやるお片付けをやる必要はないですわ】

アンジェリナはそうは思わない。大貴族だからと言ってふんぞり返るつもりはない。

アリサもアンジェリナを以前から知っていた。彼女は、よくログナー侯爵家の屋敷を抜け出して、ルーレの礼拝堂で教会のお手伝いをしていた。それをよく見ていたのだ。

姉アンゼリカとは、違う意味でアンジェリナはルーレの民から慕われている。

そんなアンジェリナを支えているのは、あの時の達也の言葉であり、彼女が強くなるうとしたのも達也の言葉からである。

アリサ「ふう…ライバル宣言されちゃったな…」

アンジェリナ「私は達也さんをお慕いしています。アリサさんが達也さんを好きな事も知っています。それでも私の気持ちは変わりません」

アリサはふと窓を開けて、トリスタを吹き抜ける風を入れた。火照った身体にはちようどいい気持ちよさの風だ。

アリサ「それにしても、達也が昔そんなことをね…」

アリサも小さいとき、達也とリインの故郷のユミルで、助けられた事がある。

アリサがユミルの地で迷子になって泣いた事がある。父親と母親と離れ離れになり、寂しくなつて泣いていた。そんな時、ヒーローのように現れた少年である。

その少年は、泣いていたアリサを寂しくない、寂しくない、必ず父親と母親のもとに連れていってくると頭を撫でてくれたのだ。

泣いていたアリサは、いつの間にか安心していた。少年に引つ張られ父親と母親のもとに連れてきてもらったのだ。

アリサは、少年に名前を聞いた。だが少年は

??「名乗る程の事はしていないから。君もお父さん、お母さんを心配させたらだめだよ」

そう言つて少年は去つて行つた。アリサは少年の事は心と身体に焼き付いていた。

それから父親が事故で亡くなり、いろんな事が起きる。そんな慌ただしい時に、母親によつて達也が連れてこられる。

母親曰く彼の能力は、目を光らせるものがあるから、RF社にバイトという形で入つてもらふことにしたと。

アリサは、母親に連れてこられた達也を見て、忘れていたあの時の事を思い出した。

そう迷子になり、助けてくれたあの少年だつてことを。

だが彼自身は覚えてはいなかった。あの時の事は、彼の中では、日常の一コマだったのだろう。でもアリサの中では、彼を好きになるきっかけだったのだから。

アリサ「私も、負けない。この気持ちに嘘は付きたくないから」

夜空の星達がアリサを応援するかのよう輝いていた。

――第3学生寮―201号室―達也の部屋↓1階の応接室

達也は、風呂に入った後に、ユファイがフレッドから貰ってきたクリスピーピザをみんな

なで食べた。フレッドの料理は達也も美味しいのは知っていた。

学生食堂のラムゼイの料理も旨いというのも忘れていない。つまり順位は決められないってことになる。

そして達也は、サラ教官に呼び出されて、1階へ行った。サラ教官は1階の応接室で何かをしていた。

達也「…サラ教官、何の用でしょう？」

サラ「達也、あんたに届け物よ」

達也「届け物？一体誰からですか？……九重の師匠からですか」

サラ「へえ…あの九重八雲から？」

達也「へえー、サラ教官も九重の師匠をご存知で？」

サラ「ええ、もちろんよ。日本での依頼を何度か一緒にやったことがあってね。その時に知り合ったわ」

達也「なるほど…」

達也が九重八雲と知り合ったのも、ユン老師の飲み仲間であったからである。彼も帝國・ユミルに滞在していた。達也は、しばらく九重八雲からも指導を受けており、同じクリインも指導を受けている。

達也「この荷物は…一体」

荷物の中身は酒だった。酒はサラさんに渡してくれと書いてあった。あと別に手紙も添えられた。

達也「サラ教官……喜んで下さい。九重の師匠が酒を贈ってくれました」

サラ「何！酒だつて？あの八雲が酒を？まあいいわ、頂くわね」

達也「日本の……【サムライ酒】だそうですね」

サラ「そう……じゃあさっそく飲みますか」

サラ教官は、さっそくサムライ酒を飲むためにつまみを取りに行った。

達也「俺は、部屋で手紙を読みますのでこれで失礼します」

達也はサラにそう言つて、自室へ帰つてから九重八雲からもらつた手紙を読むことにした。

第3学生寮—1階応接室↓2階—201号室

達也は椅子に座りながら手紙を読み始める。

【達也君、元気にしているかい？風の便りで君が士官学院に入学したことを聞いたよ。ユン老師も僕も君やリイン君が少しずつ前に進んでいること良いと思つてるよ。ユン老師は、今、昔のお弟子さんのところに滞在してるそうだよ。僕の方はね、新しい弟子が入つて来たんだ。男の子なんだけど、中々のセンスのあるだよ。何だか君達兄弟と

初めて会った時の感覚だね。これからみっちり鍛えていくつもりだよ。士官学院を卒業したら、一度日本に招待しよう、君達兄弟やエリゼさんやご両親も一緒に。あと決して無茶だけはしないようにね。

九重八雲

九重八雲からの手紙を読んだ達也は、

達也「全く九重の師匠らしい言い方だな。九重の師匠も元気でやってるみたいだし安心か。それにしても師匠が言っていた新しい弟子か……」

達也は思った。九重八雲の目にとまるような人間はそういないと。達也やリインが、九重八雲の目にとまったのも単なるユン老師の弟子ってだけで目にとまった訳ではない。その事はユン老師からも聞かされている。だからこそ達也は、その弟子になった人間の事を興味が出たのだった。

達也「九重の師匠の弟子になったのなら、いずれ会えるだろう」
そう決意して達也は、製作中のあるものを作り出したのだった。

第1章――111―9話―カトリーナ・クラリス。

時は遡り

トールズ士官学院にとある人物が入学してきた。その人物とは、ラマール州の片田舎からやって来た女子生徒である。

カトリーナ・クラリス。

正式には、ラマール州北部にある山沿いにある片田舎のアマール村の出身である。そのアマール村で、父親と兄・クロードによって大事に育てられて元気に育つ。

その兄は、アマール村の日曜学校でとてもいい成績を残したため、帝都の学校に推薦されたのだ。推薦したのは、アマール村の日曜学校を担当してくれている礼拝堂の講師だったのだ。

だが兄、クロードが選んだ道は、帝都の学校では無かった。

帝都近郊にある士官学院、トールズ士官学院だったのだ。クロードは、講師の推薦の申し出は嬉しかったのだ。だがアマール村の現状を見ると、帝都で3年間も学校生活は送れないと。

林業と農作物を売って生活費を立てているアマール村。カイエン公は、ラマール州の

庶民に対して税金を上げることを行った。

アマール村は、林業や農作物をラマール州に献上しているから、税金の上がり幅は少なかったが、いつまでももつものでも無かった。

そして2年が経ち、クロードが帝都の帝都庁勤めに。それも帝都庁トップであるカー・レーグニッツに認められたのだった。

アマール村では、村一番の出世頭として、クラリス家は、称えられるようになった。

そしてそれから3年が経ち

クロードの妹であるカトリーナがトールズ士官学院を受けて合格したのだ。

今のアマール村で一番できる女の子だろう。3年前に彼女の兄が帝都庁に勤めるようになって、この集落の生活も幾分は豊かになったが、ここは「貴族派」のリーダーの地のカイエン公爵の足元であるため「革新派」もやすやすとは出来ないものである。そんな彼女も兄に憧れてトールズ士官学院へと入学するのであった。

カトリーナは、大変浮かれているのである。何故ならこの村にいるのも今日までである。入学式は明後日だが、ここはトールズ士官学院から随分と離れたところにある山奥の村だから、明日バタバタして行くより、明日の内にトリストアについていけば、後はバ

タバタしなくてもいいと父親に言われたからである。かつて兄のクロードもそうやって行つたようだ。

カトリーナは、正直思うところの村から出たことがほとんどない。

だから出られただけでもうれしいのだが、兄が通つたトールズ士官学院にも行けるのが彼女は嬉しいのだろう。

ぼさつとしているカトリーナに父親のリツキーは

リツキー「ほらカトリーナ！なにぼさつとしてるんだ？」

カトリーナ「え!？」

父親のリツキーが怒っていることと理由がわかっていないカトリーナ。それを見て父親はため息をはき

リツキー「明日の朝には出発しなきゃならないだろうが！ゆつくりとしている時間はないぞ」

カトリーナ「そうだった。急がなきゃ」

カトリーナは、のんびりし過ぎたと慌てて急いで準備をし始めた。

リツキー「全くお前は誰に似たんだらうな？」

リツキーにそう言われ、彼女は誰に似てるかと、村のおじさんやおばさんは容姿はお

父さん似って言われている。性格はお母さん似って言われてるようだ。

カトリーナ「あたしは両親似だよ。お父さんとお母さんの良いところを受け継いだの」

リツキー「……ふっ！全くお前：言うようになったな」

カトリーナ「あたしも何時までも子供じやないわよ。あたしだって、お兄ちゃんと同じように」

カトリーナは、トールズ士官学院に入学してもっと成長して帰ってくる。だから安心して天国のお母さんに礼をいれる。それと彼女自身、父親のリツキー、兄であるクロードを守ってくれと願った。

カトリーナは、その後（出発する準備を終えた）村の親友のサリーナやロザーヌに明日出発の挨拶をやってしばらく3人で色々の話をやった。ロザーヌが士官学院のカッコイイ男子を紹介しなさいとか、サリーナも同じこと言ってる。

この村には若い男子、カッコイイ男子はもういない。去年までいたガロンは村から出てラマール州の領邦軍（ラマール州の徴兵により）に入隊した。

その前は彼女の兄だった。兄・[クロード・クラリス]は帝都庁に勤めている。今は帝都庁でレーグニッツ帝都庁知事に功績を称えられて、レーグニッツ帝都庁知事の片腕となつてゐるみたいだから村の一番の出世頭って言われている。彼女も父親のリツキーも

鼻が高いというのは、あまり言うとは自慢話になりかねないからここくらいで、止めておこう。

そしていよいよの出発の朝がやってきた。彼女の中では、ワクワク感80%で不安が20%の割合でワクワク感が勝っている。不安感があるのは、彼女のような田舎娘が、上手くやっていけるかと思っただけ。

入学式は明日だから今日の内に出発するのは、彼女以外にもいるかもしれないがとにかく昨日のうちに挨拶を済ませたし：名残はおいしいけれど、みんな：サリーナとロザーヌ：落ち着いたら手紙を書くことを決めた。

そしてカトリーナは街道を歩いて、まずはラマール州の鉄道：ラマール本線が通っている身寄りの駅を目指し、そこから帝都まで行って、帝都でクロイツェン本線に乗り換えてトリストタで降りる。今日中にトリストタに着く。

これがカトリーナが立てた計画、上手く行ってくれと信じて。緑の制服に身を包み、彼女は村のみんなに挨拶をして、父親のリッキーやサリーナとロザーヌに分かれの挨拶をしてから、彼女はみんなに背を向けて出発する。

カトリーナ「みんな行ってきます」

村のみんな「行ってらっしゃい！カトリーナ！」

カトリーナはみんなの声援を背にアマール村を出ていく。

まずは旧ラマール街道を南東に行きラクウエルの駅から列車でトリスタを目指すことに。

時は戻り今はトールズ士官学院での初めての自由行動日である。

カトリーナ・クラリスのクラスは、1-4組である。クラスでの友達もでき他のクラスの友達も出来た。

1-VII組のユフィ・レンハイムという女子生徒。

クラリスが学生食堂の席を探していたら、ユフィから席を譲ってもらってから、友達になったのだ。

話していると不思議な子だと感じたカトリーナだったが、そこが彼女の魅力だなと思ったのだ。

そして、仲良くなって何日目にサリーナやロジーヌにもやっていたアレをユフィにもやったのだ。

そう彼女の18番は、スカートめくりである。

周りに誰もいないのを確認して、ユフィのスカートをめくった。

カトリーナの目には、ユフィの白いシルクのパantsが映った。彼女は予想外だと思っ

てしまった。てつきり赤とか黒とかだと思ったからだ。そんな戯れ事をしながら日常を暮らしていた。

そして自由行動日は、部活動で生を流すことに。

園芸部に入るとは、入学前から気に入ったからである。カトリーナは、土いじりが大好きであり、何かと暇さえあれば、土いじりをしていた。部長のエーデルに頼み、園芸部の土地に、農作物を作ってみることにしたのだ。

カトリーナのメモ帳には、野菜の作り方や土や水の配分なんかも独学で学んだことを書いている。

それを見たエーデル部長は、驚いていた。カトリーナは、必ず大物になるのではないかと思った。

エーデルが思った事は、ヴァンダイク学院長やオリヴァルト理事長も感じとつていた。カトリーナは、スハルト、アンジェリナのように急激にARCU S適性能力を伸ばしている。今回のARCU S適性検査で、飛び抜けていけば、カトリーナのVII組編入決定される。

これは、スハルト、アンジェリナの時の緊急理事会で、スハルト、アンジェリナ以外

で後1人飛び抜ける生徒が出てきた場合は、本人の了承を得れば、Ⅶ組編入が決定される。

4月の時点では、カトリーナ・クラリス、Ⅶ組編入候補として記録される。

第1章―12―10話―初めての実技テスト。

―11204―4・21―朝―グラウンド

ユファイ達は、予告されていたとおりにグラウンドに集まっていた。朝と表記にあるが、朝ではなく、朝と昼の中間な時間帯である。

予告されていたものと言うのは、実技テストである。これからⅦ組は、毎月1回は実技テストがあるのだ。それを乗りきって行くしかないのだ。

グラウンドに立っている姿は体操着姿である。

男子は上着に短パンに、女子は上着にブルマである。女子は男子の視線がどうしても気になるものである。ファイがマキアスに対して

ファイ「サラ、マキアスがユファイのブルマ姿をガン見してる」

ユファイ「えっ!?!」

マキアス「こ、こら、ファイ君…君は何を言ってるんだ!?!」

ファイ「目線でわかるから」

マキアス「……!?!」

ユーシス「ふっ、破廉恥なヤツめ」

スハルト「見たいなら、バレないようにしようぜ、マキアスよ」

ユフィは、フィーやアリサによってマキアスから見えない位置に連れてこられた。マキアスは、再び女子にジトメで見られた。

マキアス「……僕が何をしたらって言うんだ……」

リイン「ドンマイ、マキアス！」

ガイウス「今日は悪い風が吹いたのかもしれない。必ず良い風も吹く。だから落ち込
むな、マキアス」

マキアス「……それって慰められているのか？」

マキアスは、がくしとへこんでいた。

そんな光景を見ていたサラ教官から、いつまで続けるのかと怒られた。

サラ「……じゃあ予告通り《実技テスト》を始めましょう。前もって言うっておくけど、このテストは単純な戦闘力を測るものじゃないわ。『状況に応じた適切な行動』を取れるかを見るためのものよ。その意味で、なんの工夫もしなかったら、短時間で相手を倒せたとしても評点は辛くなるでしょうね」

ユーシスやアリサが

ユーシス「フン……面白い」

アリサ「単純な力押しじゃ評価に結び付かないわけね」

サラ教官は、4月の最初の実技テストを開始することを宣言する。第1試合はユ
ファイ、達也、エリオット、ガイウスが指名された。ユファイとエリオットはいきなりだと
緊張し、達也は別に気にせず、ガイウスは普通とおりな表情をしていた。

ユファイ「緊張しますわね」

達也「いつもとおりにやるだけだ」

ガイウス「承知」

エリオット「うん、出来るだけやってみるね」

ユファイ達はサラ教官に言われた通りに前へ出る。

サラ「ふふ、よろしい。それじゃあ、とつとと呼ぶとしますか」

サラ教官は、指をパチンとした後に、近くに謎の物体が出てくる。ユファイ達はみな驚
く。

ユファイ「サラ教官、それはまさか：!？」

達也「これは：」

エリオット「ま、魔獣!？」

ガイウス「いや、命の息吹を感じない！」

サラ「ええ、そいつは作り物の『動く力カシ』みたいなもんよ。そこそこ強めに設定
してあるけど、決して勝てない相手ではないわ。：わかってるでしょうけど、力押しで

倒しても意味はないから。ちゃんとARCCUSの戦術リンクを活用しなさい」

ユフィ「ARCCUSを活用ですか。はい、やってみますわ」

ユフィはそう言つて、達也達と調査で入った旧校舎でのことを思い出す。旧校舎の調査時に戦術リンクの組み合わせも色々試してみた。それはユフィも達也もエリオットもガイウスもリインも経験済みである。

おそらくサラ教官は、自分達4人を選んだのもそのためではないかと思つたのだつた。その事は、達也も考えていたことだった。

ユフィ達は各々の武器を取りだし、*“動くカカシ”*と対峙する。

サラ「それじゃ、第1試合、達也班…始め!!」

試合のゴングがなった。ユフィとガイウス、達也とエリオットで戦術リンクを繋いだ。

エリオットは、まず自身のクラフト「エコーズビート」で俺達のDF力をupさせる。そしてガイウスがクラフト「ゲイルスティング」を放つ。渦巻く風は動くカカシに向かつて一直線に当たるが、あまり効いているようには見えない。達也が激励を飛ばす。達也「俺の番だな。よーし一気に行くぞ」

ユフィ達のステータスがupした。そしてステータスupしたユフィが動くカカシ

に向かつて

ユファイ「これはどうですか！弧影斬！」

弧影斬が動く力カシに命中するがビクともしない。

ユファイ「か、硬いですわ！」

達也「硬いか…別の戦い方をする必要があるな」

エリオット「どうするの、2人共？」

ユファイ「達也さんの言う通りですわ、効かないのであれば、別の戦い方をするまでです。ガイウスさんさっきのをお願いしますわ！」

ガイウス「承知！」

ユファイ「エリオットさんは後方からアーツで掩護を！」

エリオット「うん、わかった」

ユファイ「達也さん、アレでいきましょう！」

達也「アレか、わかった。ユファイを信じよう」

ユファイに指示された通りに2人が、それぞれに動き出す。まずは、エリオットがアーツで牽制をかけ、ガイウスがゲイルステイングを放つ。ユファイと達也はすぐさまに

ユファイ「弧影斬、弧影斬」

ユフィの弧影斬が両サイドから動くカカシを捉えて、空中に浮き上がる。そこに達也が

達也「紅葉切り！」

紅葉切りで動くカカシに、大ダメージを与えたようだ。動くカカシはピクリとも動かなくなった。

勝負は、ユフィ達が勝ったのであった。

今のところはユフィ達4人とリインは、この中ではおそろくずば抜けていると思う。ガイウスとエリオットが疲れた表情で声をあげた。達也は何事もなかったようにいるな。ユフィもつかれるほどではない表情をしていた。

達也「ふっ、これぐらいか」

ガイウス「うまくいったな」

エリオット「何とか勝てたあ…」

ユフィ「戦術リンク、旧校舎の調査の時でもそうだったですけど、上手く活用出来れば何とかなりそうですね、みなさん？」

サラ「そうですね。ユフィの言うとおりに、あなたは戦術リンクも使っていたようだし、

やはり旧校舎地下での実戦が効いているじやないの？」

ユフィ「ははは：そうかもしれませぬね」

ラウラ「やはり：ユフィの言った通りだな。旧校舎は鍛錬の場所のようだ」

スハルト「なるほどな」

マキアス「やはり、あのとユフィ君と一緒に行けば……」

やはり旧校舎地下で実戦を積んだユフィ達と、それ以外の人間の戦術リンクの差は今の時点では、ついでに思うだろうと思う。ただ埋められないものではない。彼らとて、旧校舎で実戦を経験すれば、ユフィ達を追いつけない距離ではない。それどころか、ユフィ達を追い抜く事さえあるかもしれないのだから。そしてサラ教官は第2戦目のメンバーの名をあげた。

サラ「——それじゃ次！ラウラ、エマ、アンジェリナ、マキアス、前に出なさい」

ラウラ達は返事をして、ユフィ達の前に出て先ほどの戦術 α と戦闘に入った。やはりユフィ達とは違い、上手く自分達の戦闘スタイルに持つていけない。やはり「戦術リンク」が上手く使えるか使えないかで、大きく違うようだと達也は感じていた。

苦勞の末にラウラ達は戦術 α を倒した。やはり達也が予測した通りに苦戦を強いられてしまっていた。ラウラとアンジェリナは、善戦していたように見えたが、やはり戦術リンクが上手く活用しきれていないようだ。あの場合は、ラウラとマキアス、又は

ラウラとエマ、アンジェリナとマキアスカエマと組んでた方が良かったように見えた。そして最後に残りのメンバーがサラ教官により名を呼ばれた。

サラ「残りの全員はまとめてかかってきなさい!!」

スハルト「サラ、最後は適当かよっ?!」

フィー「サラ、怠慢…」

サラ「つべこべ言わずにやる!」

ユーシス「チツ、めんどくさいことを」

アリサ「なんで、私がこのチームに…」

残りのユーシス、アリサ、フィー、スハルトの4人は一斉に戦術殻αに立ち向かった。明らかにさっきのラウラ組と違って、さらに戦術がバラバラだ。ユーシスとスハルトはバラバラに行動し、アリサとフィーは、合わせようとやっているが、なかなかあわないみたいだな。

最後にアリサとフィー、スハルトの連携プレーにより戦術殻αはガクガクいいながら崩れていった。

アリサ「なんとか、なったわね…フィー…それにスハルト」

フィー「なんとか」

スハルト「まあな。やるじゃねーか、アリサ」

アリスとフィーとスハルトが3人で握手をかわしている。エマやラウラやユーシスが話している。

ユーシス「はあはあ……」

ラウラ「なかなかなひ苦戦させられたものだ」

エマ「やつぱり【戦術リンク】が鍵になるみたいですね——」

ユーシス「チツ、面倒なものを!!」

ユーシス達は色々言ってるみたいだが、【戦術リンク】は慣れていくしかないだろう。ユフィ達は、旧校舎地下で慣れて今回があるわけだから。他の者達も旧校舎で特訓と言うか調査をしていくうちに慣れていくものだから。そしてサラ教官が実技テストの終了を告げる。

サラ「これにて4月の実技テストは終了ね」

これにて、4月の最初の実技テストが終わった。面倒な事が起きなくて良かったが、ユーシスとマキアスが事が問題がまだ残ってるのである。ラウラがサラ教官に疑問を聞いた。

ラウラ「——しかしサラ教官、先ほどの傀儡めいたものはいったい何だったのさ？」

マキアス「そ、そう言えば………!」

エリオット「機械……?見たことないかも」

アリサ「……どこかで…見たような……」

達也、スハルト、ユフイ「……」

ラウラ達の疑問に対してサラ教官は

サラ「んーとある筋から押し付けられちゃった物でね。あんまり使いたくないんだけど、色々設定できて便利なのよねー。まあテストの役に立ったし結果オーライということで」

達也とスハルトとユフイは、あの戦術殻を見たことがある。達也は、RF社の機密エンジニアで、スハルトは、赤い星座時代に、ユフイは、リベールの異変の時に。一体なんの筋ですかと、サラ教官とユフイ達は思った。

ただみんなそんな解答じゃ納得しないだろう。サラ教官はこれから本題を話そうと
していた。

サラ「——さて【実技テスト】はさつきも言った通りここまでよ。先日話した通りここからはかなり重要な伝達事項があるわ。君達【VII組】ならではの特別なカリキュラムに関するね」

この特別なカリキュラムが今後のVII組の運命を加速させていくものになる。

サラ教官が特別実習の説明を始める。

サラ「ふふ、流石にみんな気になってたみたいね。それじゃ説明させて貰うわ」

サラ教官の話しに、みんな釘付けになっている。確かに聞くだけなら、興奮するかもしれない。サラ教官は話しを続けている。

サラ「——君たちに課せられた特別なカリキュラム——それはズバリ【特別実習】よ！」

エマ【特別実習】ですか……？」

マキアス「……何だか嫌な予感しかしないんだが……」

サラ教官は気にせず話し続ける。

サラ「君たちにはA班、B班に分かれて指定した実習先に行ってもらおうわ。そこで期間中、用意された課題をやってもらうことになる。まさに特別な実習なわけね」

特別実習、普通なら社会科見学みたいなものを想像するかもしれない。ユフィ達も甘い考えを持っていたかもしれない。

だがそんな甘いことがあるわけがない。そんな甘いものなど無いことを後々に気づかされることになる。エリオットが不安そうに

エリオット「学院に入ったばかりに、いきなり他の場所へ？」

アンジエリナ「その仰り方だと、サラ教官が引率されるわけではないのですね」
アンジエリナがサラ教官が引率しないのか聞いている。

サラ「ええ、あたしが付いていっただら修業にならないでしょう？獅子は我が子を千尋

の谷についてね」

アンジェリナ「はあ……」

ラウラ「ふむ、修業ならばむしろ望むところではあるが……」

ユーシス「——バレスタイン教官。結局、俺達に何時、どこでどこへ行けと言うんだ？」

サラ「オーケー、話をすすめましょう。さつきも言った通り君たちはA班、B班に分かれてもらうわ。さあ受けなさい」

ユフィ達全員1枚の紙を受け取った。その紙には、各自どの班に割り振られたのか、行き先はどこなのか、誰が一緒の班なのかすべて書かれていた。

「A班・達也・アリサ・ラウラ・エリオット・フィー・アンジェリナ・ガイウス↓（実習地——交易地ケルディック）」

「B班・ユフィ・リイン・マキアス・ユーシス・スハルト・エマ↓実習地——紡績町パルム）」
A班7名、B班6名。ちゃんと均等に班分けされてる。行き先の距離に違いはあるが。

A班達也達が行く実習先であるケルディックである。

正式名称クロイツェン州交易地ケルディックである。交易地ケルディックは帝国東部にあるクロイツェン州にある、昔から交易が盛んな町。帝都と大都市バリアハート、

更には貿易都市クロスベルを結ぶ中継地点として知られている場所だ。そしてこのあたりは大穀倉地帯として有名だ。【帝国の台所】や【帝国の食料庫】と呼ばれることもある場所だ。

そして大市というのが有名であり、今では外国からも商人達が訪れ、観光客もやって来るようになった。

B班ユフィ達が行く実習先は、帝国南部にある紡績街パルムである。

正式には帝国南部のサザーラント州南部に位置する小都市で、古くから紡績業で栄える町として知られている。

導力革命を経た現在においても、水車を動力とした紡績機による伝統的な手法を用いて紡績を行っており、市内に引かれた水路には何台もの水車が連なっている。紡績の原料となる生糸は近隣の養蚕農家から供給されている。

繊維製品を製造する上で重要な染色も盛んであり、毎年4月には【春の染上げ】という行事が存在し、毎年染色に携わる職人達がその腕を競い合う。

パルム産の繊維製品の品質は高く評価されており、帝国各地の高級店で取り扱われている他、国外へも輸出されている。

白亜の旧都セントアーク方面とクロイツェン州方面、リベール王国方面の街道の合流地点でもあり、交易で訪れる商人等の街道の行き来は昔から多い。近年は、パルム郊外に日本からの移住者が増え日本人居住エリアも出来ている。日本企業も多数進出しており、日本人居住エリアの近くに工場エリアも多く出来ている。

パルムは、南の隣国リベール王国に最も近い帝国の都市でもある。

班分けと行き先が決まったⅦ組の全員の温度差は違った。明らかにA班とB班の雰囲気の違いは明らかだ。達也やアリサは

達也「俺は、A班だ」

アリサ「良かった、達也と一緒に」

ラウラ「ほう……興味深い班分けだ」

ラウラがそんなことを言い、ガイウスはケルディックとパルムのことを聞きたいみたいだ。

ガイウス「ケルディックとパルム……どちらも帝国なのか？」

この疑問に対してエリオットとエマが答える。

エリオット「う、うん。ケルディックは東にある交易が盛んな場所だけど」

エマ「パルムは帝国南部にある紡績で有名な場所ですね」

達也やアリサが話している横で、スハルトやマキアス達が騒ぎ出した。

スハルト「あそこか……。めんどくさいな」

マキアス「ば、場所はともかくB班の顔ぶれは……。!?」

ユーシス「あり得んな」

サラ「この際だから、2人共仲良くなりなさいよ」

サラ教官の問いにマキアスとユーシスは、嫌だと表情をしている。

サラ「はあくとかく日時は今週末、実習期間は2日くらいになるわ。A班、B班共に鉄道を使って実習地まで行くことになるわね。各自、それまでに準備を整えて英気を養っておきなさい。——！」

そして特別実習日の4月24日まで日が進むことになる。

第1章-13-11 話-暗躍、闇に蠢く者達。

1-1204・4・22-深夜-帝国・サザラント州パルム郊外

深夜、サザラント州紡績街パルムの近郊にある、とある工場に数台のトラックが運び込まれてきた。

工場内にトラックが運び込まれたのを確認すると、工場の主である工場長が姿を表す。ただ工場長は、不満げな表情をして

工場長「今回は、納品が遅れているようだが？」

運び屋「すいません、クロスベル経由の仲間がクロスベル警察に捕まりました。それで迂回ルートを使って来たんですよ」

工場長「クロスベル警察に捕まっただと？」

運び屋「ええ、そう情報が入って来たんで迂回をしたんですよ」

工場長「クロスベル警察の署長やクロスベル警備隊のあの司令に賄賂を渡してるはず。まさか裏切るつもりじゃないだろうな」

工場長と運び屋が慌てていると、1人の少年がやってきた。どす黒い雰囲気醸し出した黒々しいスーツを着た男である。

?? 「別に裏切ったわけじゃないみたいだけどね」

工場長 「あ、明智さん。裏切ったわけじゃないとは、どういう？」

彼の名前は明智吾郎。日本に置いては、名探偵明智として、事件解決をしている。日本のマスコミや国民の間では、探偵王子だと言われている。だが自分達がやらかしている事件を操作して己の手柄にしているに過ぎないエセ探偵である。裏の仕事を請け負うのが、本来の姿である。そんな明智が日本からわざわざ遠い帝国までやって来たのは、日本のとある人物に頼まれたからである。

明智 「君達は馬鹿なのかい？」

明智に馬鹿と言われて運び屋の男はすぐに気がつく。

運び屋 「まさか…特務支援課の連中が!？」

明智 「御明察…その特務支援課がとあるアジトに踏み込んだんだ。まあ、これからクロスベルでは騒乱が起きそうみたいだからね」

ニヤリと悪党の笑みを浮かべる。

工場長 「クロスベルの騒乱と我々の仕事がどういう関係が？」

明智 「クロスベルが混乱に陥れば、帝国、共和国に入り込みやすくなる。やつらは、国境に目を向けなくてはならなくなる。通常よりも人員を増やさなくてはならない…これ以上は言わなくてもわかるだろう？」

運び屋「なるほど」

明智の言い分はこうだ。クロスベルが混乱に陥ることによって、帝国も共和国も互いに国境の門の方へ目を向ける。国境の門に集中が向き、隙が出来る場所が出来ると。

明智「それと君達が活動しやすいように帝国の貴族や領邦軍のトップの連中には、買取しておいた」

工場長「ありがとうございます、明智さん」

明智「…安心はするな、油断もするな…。日本の行方不明事件、帝国軍情報局、鉄道憲兵隊、遊撃士、日本の千葉家の連中もかぎ回っている。金城やあの方も気をつけると言われている…」

工場長「はっ、」

運び屋「はっ、」

工場長「お前達、吟味をしろ！上玉は貴族への贈り物だ。そうでは無いものは、この工場の労働力にする。男達は、猟兵団に売却する」

工場長の発令と共に、工場から人員が出動し、荷物を確認し始めた。

ーパルム郊外の丘

パルム郊外の丘から、とある工場の内部を見ていた人物がいた。紫色の帝国の婦人服

を身に纏った女性である。麦野沈利をモデルにしたような女性と言った方がいいか。

名前は麦野静江。七草弘一の娘であり、真由美達の異母兄妹でもある。七草家のエージェントであり、真由美の付き人でもある。彼女は、日本の第一高校を主席で入学して、主席で卒業している。もちろん生徒会長も努めていた。今年から国立魔法大学に入学している。そんな彼女がこんな帝国のサザラント州南部のパルム郊外にいるのかというのは、真由美からある指令を受けている。

【高校生連続失踪事件】

失踪している高校生達の保護者達が、警察に被害届けを出して受理をしているのに、全く捜査をしているようには見えない。マスコミに訴えかけてるが、真剣に取り合つてはもらえない。

嘆く悲しむ保護者を見て、真由美は心を痛めていた。だから父親であり七草家当主である七草弘一に黙つて、静江を帝国に派遣する。静江の調べによつて失踪した高校生達が帝国に連行されている情報を得たからである。

しかしそもそもとある工場から離れたパルムの丘から見えるのかと言う話になるだろう。しかし静江には見えるのである。

彼女は、真由美と同じ「マルチスコープ」が使えるからである。それともう一つ先天的な能力が使える。「原子崩し（メルトダウン）」という能力だ。「マルチスコープ」と

「原子崩し（メルトダウン）」と組み合わせるなら、ある意味最強かもしれない。

静江「なるほどね。まさかの明智吾郎…貴方がそっち側の人間なのね。どうりで警察組織が動かないはずだし、マスコミも取り上げないわけか」

静江は、胸の下で腕を組み考えていた。明智吾郎は、警察組織に事件解決のために協力し、マスコミのコメントにも素直に応じている。その明智は、マスコミの前でこの高校生達の失踪を事件性は無いと発言している。

静江「国民的な明智の意見なら、事件性無しと片付けられてもおかしくはないか。でもそれは権力で…金城とあの方…？」

【金城潤矢】

金城潤矢とは、渋谷を拠点にする人身売買グループ。日本の警察、遊撃士達が血まなこになって捜しているが、尻尾すら掴めない。

以前日本の警察が、金城の部下を確保したのだが、取り調べ中の留置場の中で自殺していたのだ。最初は、金城潤矢への突破口だと警察やマスコミは騒いでいたが、自殺されたことの批判は上がらなかった。普通なら批判の矢先に警察が晒されるはずだが、マスコミはそれをほとんど報じなかった。報じても罪の意識に悩ませるの自殺で片付けた。疑惑や疑問を持った人達も少なからずいた。

だが、そこに明智が自殺して発言し、疑惑を持っていた人間達も納得してしまった。

そして今に至る。

静江「今すぐ、潰してあげたいけど、証拠を固めないかね。まずはパルムでの情報収集かしらね」

静江はそう言うと、パルムの街の方へ歩いて行った。

第1章—14—12話—出発、聞こえてくるイヤな足音。

—11204・4・24・朝・第3学生寮—306号室—ユフィの部屋。

ユフィは、身支度と荷物の最終確認をしていた。特別実習は、2泊3日の予定である。ユフィ達B班の人間達は、朝早く起きている。

A班が行くケルディックは、トリスタから1時間くらいで行ける距離だが、B班ユフィ達が行くところは、帝国南部の紡績街パルム。トリスタから、約8時間は列車で過ごして到着する距離にある。つまり朝早く出発しても夕方近くに到着することになる。

ユフィ「2日前から準備しましたし、忘れ物はないですよね？」

ユフィはそう言いながら、旅行用のバックの中身を確かめている。ちなみに旅行用バックは、VII組の特別実習のために用意されたバックである。ちなみにバックの製造元は、日本企業（四葉の配下の企業）である。確かめ終えた彼女は、自分の得物である太刀とARCSが入ったホルダーを身につけて、姿見の鏡で最後の身嗜みを確かめる。

ユフィ「それでは行ってきますわ」

ユフィは、帝都の方を向いてそう言った。言った後、旅行用バックを持って部屋を後にした。

彼女が第3学生寮の1階に降りてきたら、みんなが既に来ていた。

マキアス「ユファイ君、おはよう」

ライン「おはよう、ユファイ」

エマ「おはようございます、ユファイさん」

スハルト「ユファイ、おはようさん」

ユーシス「フン、おはよう」

ユファイ「みなさん、おはようございます。わたくしが一番最後みたいですね」

どうやら男子で最初に来てたのは、スハルトらしく次にラインとマキアスで、エマが来てユーシスだったようだ。スハルトが

スハルト「紡績街。パルムが実習先だから、さっさと出発した方が身のためだぜ」

ユーシス「そいつの言うとおりでな。パルムは、帝国、サザラント州南部の街だ。ゆっくりしている時間は無い。とつとと行くぞ」

スハルトとユーシスは、そう言うのと荷物を持って第3学生寮から出ていく。

マキアス「き、君達…ま、待ちたまえ…」

ライン「…全くあの2人は…。焦らず行こう、マキアス」

マキアス「…あ、ああ、そうだな」

マキアスをなだめながら、荷物を持って第3学生寮を出るラインとマキアス。最後に残ったユフィとエマは

エマ「アハハ：何だか賑やかですよね」

ユフィ「そうですね。わたくし達も行きましようか」

エマ「そうですね、ユフィさん」

ユフィとエマも学院指定旅行用バックを持ってから第3学生寮を出た。

――第3学生寮↓トリスタ駅

まだ朝焼けがする空の下で、小鳥達のさえずりが聴こえる中、すぐ側のトリスタ駅へ向かう。トリスタの住宅の方から、風に乗って、朝ごはんの匂いが漂ってくる。鼻腔を刺激され、お腹が鳴るのを必死に我慢しながら、トリスタ駅の中へ入るB班一行であった。

――西トリスタ街道出入口の所

ユフィ達がトリスタ駅の中に入っていくところを見ていた人物が2人いる。

そのうちの1人が、クロウ・アームブラストである。

クロウ「ユフィ達はパルム組か。あつちはあつちで問題が山積みだろうが」

もう1人は、緑の制服を着た女子生徒である。クラスは1-4組、マリア・ハーティ

アである。髪の色はとあるのインデックスみたいな髪の色。目も同じか。別にシスターではない。バストは普通でスタイルは良し。部活は入ってないが、生徒会には所属している。生徒会での役目は、書記兼情報管理職に付いている。

マリア「クロウ、ケルディックの方には行くの？」

クロウ「ちよつくら、散歩がてらにな」

マリア「そう…今回はわたしはパスね。生徒会の仕事が忙しいもの」

クロウ「分かってるさ。俺達はケルディックの方に専任するさ。パルムの方は、スポンサーの日本の獅童一派がやってくれるだろう」

マリアは怪訝な表情をする。

マリア「わたしは、あんな奴らと手を組むのは反対だった。人身売買をやってるような連中だよ！」

クロウ「マリア、お前の言うことは分かっている。あの鉄血を倒すためだ、仕方がない」

マリア「それは分かってるわ。目的のためなら、鬼にも修羅にだって…なって見せる」

クロウ「……………」

マリア「どうかした？」

クロウ「いいや…」

クロウは思っていることがあった。本当にマリアみたいな子を自分達の目的のために引き込んだ事は、良かったのか。彼女は自らが進んでやってきたのだから、良いのではないかと。そんな考えが試行錯誤していた。

マリア「人が来るわ、わたしは先に戻るね」

マリアはそう言つて第2学生寮へ戻つて行つた。

クロウ「…なるようにしかならないか。ユフイ、お前さんのお手並み拝見といこうか」
クロウはそう言つて、そのまま学院へと足を運んだ。

—

ユフイ達B班一行は、駅の改札口で駅員のマチルダから、乗車切符を購入しホームの方へ行く。パルム行きは2番ホームの列車に乗り込む必要がある。すぐに駅のアナウンスがなり

アナウンス「まもなく2番ホームに帝都行き旅客列車が到着します。ご利用の方は連絡階段を渡つたホームにてお待ち下さい」

アナウンスが終わつた直後にパルムへ向かう帝都行き旅客列車が、トリスタ駅へ入つ

て来た。列車が止まるとすぐにドアが開き、ユースとスハルトが乗り込む。幸い朝が早いので、降りてくる乗客はいなかった。

マキアス「き、君達、待ちたまえ！」

マキアスはそう言いながら、列車に乗り込んで行った。

リイン「さてと、行くとするか」

リインもそう言つて列車に乗り込んでいく。

エマ「ユファイさん、私達も乗りましょう」

ユファイ「そうですね」

ユファイとエマもそう言つて列車の中に乗り込んで行った。

これからB班の最初の特別実習が始まっていく。実習地パルムの地に置いて、いろいろな陰謀が渦巻いているとは、このときのユファイ達には、知るよしもなかった。

ー トリス タ ↓ 帝都 ヘ イム ダル

ー 帝都 ヘ イム ダル で、サザーラント本線の列車に乗り換えて再び帝国南部へ。

ー 帝都 ヘ イム ダル ↓ 西トウキョウ移民街

乗り換える途中で、ヘイムダル中央駅で駅弁を買ったユファイ一行。パルム行きの列車の中で、駅弁を食べ始める。

リイン「初めて、駅弁つてのを食べるけど、旨いな。マキアスは、こういうのを食べてたのか？」

マキアス「あるわけないだろ……。さつき調べたんだが、あの駅弁売り場は、4月になって出来たものだ。僕がトリスタに向かう時には無かったからな」

ユファイ「マキアスさんの言うとおりですわ。わたくしも帝都出身ですが、3月まではハイムダル中央駅に無かったですね」

スハルトがため息をはきながら会話に入ってくる。

スハルト「：駅弁：東方の国：東ゼムリアの大国、日本のやつだな。日本の駅には普通にある。日本国内の列車なら、駅に停車中にも駅弁を売ってるおばちゃん売りに乗車してくるな」

リイン「へえー詳しいんだな、スハルト」

スハルト「まあーな……」

ユーシス「日頃の行いとは、えらく違うのだな？」

スハルト「別にいいだろ……。まあ、サラ、サラ教官にクギをさされてんだよ……」

スハルトは、出発前にサラ教官にクギをさされている。特別実習中に問題を起こせば、問答無用で赤点決定、虹の旅団の団長の墓と恋人のソフィアの墓に問題を報告するとまで言われた。

スハルトは、団長やソフィアに恥を報告されたくないもので、真面目……いや本来の性格ではないにしろ、そうしなければならぬわけである。

マキアス「自業自得だな、スハルト」

スハルト「はあく？ ムツツリメガネだけには言われたくはないな！」

マキアス「だ、誰がムツツリだ！」

リインとユーススが笑い出すと、ユフィとエマも笑いだした。そしてスハルトも笑いだした。

マキアス「君達、笑うんじゃない！」

そんな会話をしながら、朝ごはんの駅弁を食べるのであった。

帝都へイムダルを出発して約4時間あまりが経過した頃、新しく出来た新駅に停車する。新駅とは西トウキョウ移民街にある西トウキョウ駅である。

しかし西トウキョウ駅、平時なら駅弁を売りに乗車するおばちゃん達がいるはずだが、今日はどうやらないようだ。その代わりいるのは、鉄道憲兵隊とサザーラント州の領邦軍の兵士達だった。

列車の中からユフィ達をそんな状況を見ていた。

マキアス「鉄道憲兵隊と領邦軍が西トウキョウ駅にいるんだ？」

スハルト「鉄道憲兵隊と領邦軍…そうか…」

リン「何か分かったのか、スハルト？」

スハルト「いや、別に…。ただ、鉄道憲兵隊と領邦軍が動くってことは、何かあったと踏みべきだなと思ってな」

ユーシス「確かにな。領邦軍は余程がない限りは動かん。それが動いてるとなると…」

ユーシスはなにやら考え始めた。

ユファイ「それにしても、鉄道憲兵隊のみなさんも領邦軍のみなさんも、荷物を重点に調べてますわ」

鉄道憲兵隊の隊士達と領邦軍の兵士達は、共同で貨物列車や西トウキョウ駅から乗ってくる乗客の荷物を調べている。

そして、一部の鉄道憲兵隊の隊士達がユファイ達が乗ってる列車に乗り込んできた。

??「ちよつと失礼しますね。自分達は、鉄道憲兵隊の者であります。本来ならセントアークに出発しているはずですが、事件が起きまして、皆様には協力してもらいます。えーと私の自己紹介がまだでしたね、私は、クロード・クラリスと申します。以後お見知りおきを」

列車の中の乗客が騒ぎ出す。早くセントアークに行きたい乗客もいるようだ。

クロード「大変失礼ですが、荷物検査にご協力して下さい」

クロード達は、1人1人の手荷物を調べている。しかし何故手荷物検査までするのか批判が出てきた。事件とは一体なんだと言っている。1人が批判の声をあげたため、検査を拒否する人間まで出てきた。

クロード「みなさん、お気持ちわかりますが、事件解決のためにご協力ください」
クロードはそう言っているが、乗客達は聞く耳を持たない。そんな中、列車の先頭車両の方から女性が歩いてきた。その女性は、金髪ポニーテールに白いブラウスにタイトスカートをはいている。

??「みなさんすみません、私は、帝国軍情報局所属、ミサキ・カミジヨウと申します。皆様に少しばかりお手間を取らせてもらえないでしょうか？パルムの東の日本人街から、とある犯罪の犯人が逃走しています。西トウキョウ駅内に逃げ込んだ情報があるので、それを調べているのです。我々に協力してくれば、時間もかかりませんので」
その女性ことミサキが頭を下げ、協力を求めた。すると反発していた乗客達が大人しく協力的になった。乗客のなかにはミサキを知っているものもいるらしく、かなり歓声が上がっている。

ミサキ「クロード君、分かった？頭を下げるときは下げるのよ」

クロード「分かっていますよ、それにしても全くミサキ先輩には敵わないですよ……」
ミサキ「そんなことはないわよ。クロード君は、帝都知事閣下に買われてるんだから、
これからこれから」

ミサキは、クロードの肩をポンポンと叩いた。

これから、ミサキとクロードによる乗客の手荷物検査が始まった。

ミサキとクロードを見て、ユファイ、マキアス、スハルトは、三者三様の表情をしてい
た。

――西トウキョウ駅―列車内

乗客の手荷物検査が始まって、10分が経過した頃にユファイ一達B班のところにミサ
キがやって来た。

ミサキ「今から手荷物検査を致しますね」

ユファイ「ミサキさん、お久しぶりですわ」

ミサキ「あら、ユファイちゃんじゃないの？それにマキアス君に……スハルトじゃないの

？」

マキアス「ミサキさん、お久しぶりですわ」

スハルト「つたく…会いたくもない女だよ…」

リン「3人共、この人と知り合いなのか？」

ユフィ「ええ」

マキアス「父の仕事関係で知り合ったかな」

スハルト「まあ、色々だな」

リン「色々って何だよ？」

スハルト「別にいいだろ」

ユフィ、マキアス、スハルトがそれぞれの説明をやった。説明に困ったユフィやスハルトに対して、ユーシスが本題を聞き出した。

ユーシス「領邦軍はともかく、鉄道憲兵隊や帝国軍情報局が出張るほどの事件が起きていると言うわけか？」

ミサキ「そうね。パルムの東の日本街での犯罪ね、そこから西トウキョウ駅に逃げ込んだみたいね」

スハルト「大体、その犯人は何をやらかしたんだ？」

ミサキ「まあ…色々だね。ツールズ士官学院の学生さんは、気にしなくて良いからね。手荷物検査はさせてもらうけどね」

ミサキがツールズ士官学院と言ったので、みんなが驚いた。ミサキがⅦ組設立提起人

の1人とは、思わないだろう。彼女はそう言いながらユファイ達の荷物を調べていく。ユファイ達もその事件の事が気になったが

ミサキ「パルムに特別実習に行くのでしょうか？事件の事に興味を持ってくれるのは、嬉しいのだけど、学生さんは学生さんらしく特別実習に勤しんでね」

ユーシス「何故、そんなことを貴女が知っている？」

ミサキ「貴方達の教官であるサラさんと知り合いだからね。サラさんから聞いたの」
スハルト「サラか」

エマ「ミサキさん、パルムの方は大丈夫なのでしょうか？」

ミサキ「パルムは大丈夫よ。あくまでも日本人移民街と西トウキョウ駅内…その周辺が搜索の対象だから」
エマ「そうですか」

ミサキの説明によれば、パルムの東にある日本人移民街と今列車が停車している西トウキョウ駅とその周辺が搜索の対象だと。特別実習先のパルムは関係がないとのこと。ユファイやスハルトは、気になる事があつたが、ミサキに言うのを止めた。なぜならもう1人彼、クロードがやってきたからだ。だがクロードの表情は渋い。

クロード「半分より後方の車両は全てチェックしました」

ミサキ「クロード君、ご苦勞様。その顔だと犯人、犯人の痕跡も見つからなかったん

でしょ？」

クロード「ええ、何も…」

ミサキ「私もこの子達を調べて終了だから」

マキアスがクロードに話しかける。

マキアス「やはり、クロードさんでしたか。遠目からそうじゃないかと思ってましたが。クロードさんは、帝都庁勤めじゃなかったですか？」

クロード「アハハ、そうなんだがね、マキアス君。君の父、カール帝都知事閣下から、4月から鉄道憲兵隊に出勤を命じられたんだ」

マキアス「父が…：出勤を？」

クロード「でも、俺は鉄道憲兵隊に出勤させてもらって、良かったと思ってる。帝都庁勤めでは、わからないことがわかるからね」

マキアス「そうですか」

クロード「なに、マキアス君が気にすることではないよ。これは、俺が選んだ道だからね。そうだ、俺の妹もトールズ士官学院にいるんだ。名前はカトリーナ。カトリーナ・クラリスって言うんだ」

クロードが自分の妹がカトリーナと話すと、ユファイが立ち上がる。

ユファイ「か、カトリーナですか!？」

クロード「君、えーと……」

ユフィ「ユフィです。ユフィ・レンハイムですわ」

クロード「ユフィさん、なるほど、君がカトリーナが言っていたお友達か」

ユフィ「カトリーナには、わたくし以外にもお友達は、いっぱいいますわ」

クロード「そうみたいだね。だけど、ユフィさんやフィーさんやヴィヴィさんや、部活の先輩のことを書いてたからね。カトリーナがちゃんとやれてるみたいで安心したよ。田舎娘だけどよろしくお願いするよ」

ユフィ「はい」

ミサキ「はい、おしゃべりはここまでね。あまり列車を停めるわけにはいかないし、Ⅶ組の生徒さんのパルム到着が夜にするわけにはいかないでしょ？」

クロード「そうでしたね。俺とミサキ先輩は引き続き犯人捜しですが、みなさんは、パルムまでの列車旅をお楽しみ下さい」

ミサキ「列車旅を楽しんでね、Ⅶ組のみんな。あ、それと昼ごはんは、セントアークで購入してね。セントアークには、美味しいあつたか弁当屋さんが、駅のホーム内で売ってるおばさんがいるから」

スハルト「……!!」

ミサキは、スハルトに対してウインクをした。つまりスハルトとあつたか弁当屋のお

ばちゃんとかあると言うわけだが、まだユフィ達は気がついていない。

ミサキ「それじゃあ失礼します…」

クロード「みなさん、俺達はこれで…」

ミサキは、スハルトのそばを通った時、口パクでこう言った。

ミサキ「貴方はいつまで立ち止まるの？いつまで、過去を引きずってるの？私が知ってる男達（ロイド、和也）は、悲しみを乗り越えて戦ってるわ。もちろん私も。貴方はいつ立ち上がるの？」

もちろんマキアス達は気づかない。わかるのは、もちろんユフィとエマである。ユフィは、ミサキが言った悲しみの過去が気になったが、追及は出来なかった。人の過去に勝手に踏み込んでほらないと思ったからだ。スハルトも何かに耐えるような表情をしていた。

乗客の手荷物検査を終えたミサキとクロードは、列車から降りた。

そして列車は再び動き出した、白亜の旧都セントアーク、そして紡績街パルムへと。だが、この騒動はもうすでに始まっていたのだった。

第1章-15-13話-紡績の街パルム。

——西トウキョウ駅↓白亜の旧都セントアーク駅内

西トウキョウ駅での出来事で、白亜の旧都セントアークに着いたのは昼過ぎであった。ここでは30分間停車する。セントアークは観光地でもあり、人の乗り降りが激しいからである。

そんな中、ユファイとマキアスはあつたか弁当屋から弁当を人数分購入してきた。あつたか弁当はセントアークでは人気があり、評判がいい。だから観光客はそのあつたか弁当を買いに来るのだ。

ユファイ達が人数分購入出来たのは、奇跡に近かった。

ユファイ達は、列車内で遅れた昼ごはんを食べることに。

昼ごはんを食べる時にスハルトが何かを聞いてきた。

スハルト「ユファイ、マキアス、ちょっと聞きたいが、この弁当を売ってたのはおぼちゃんだったか？」

ユファイ「いいえ、若い女性の方だったですわ」

マキアス「ユファイ君、確かいつも売っているおぼさんは、用事があるとかでないっ

て言つてたな」

スハルト「そうか」

スハルトが窓の外を見ている。その表情は、どこか寂しさと悲しみが含まれている。リインがスハルトに

リイン「どうしたんだ、スハルト？」

スハルト「別にどうもしないさ」

リイン「別になんでもないようには見えないけどな。悩みがあるなら聞くぞ？」

スハルト「別に悩みなんかねーぞ」

スハルトはそう言うと、あつたか弁当を食べ始めた。リインはとりあえず聞くのをやめ、あつたか弁当を食べ始めたのだった。

セントアークで停車していた列車は、紡績の街パルムへと再び走り出したのであつた。

ー白亜の旧都セントアーク↓紡績の街パルム

ユフィ達B班が紡績の街パルムに到着したのは、すでに太陽が西に沈みかけている夕方だった。クタクタになりながらパルム駅からパルムの街の方へ歩いてやってきた。

リイン「やつと着いたな、パルムに」

スハルト「そうだな、夜になる前に着けて良かったぜ」

マキアス「こんなに列車に乗って移動はしたことないからな」

ユフィ「お尻が痛いですね」

エマ「そうですね」

ユーシス「これからどうするんだ？宿に行くのか？」

ユフィとマキアスは、もう一度サラ教官からもらったメモ帳に書いてあるのは

パルムに到着したら、【宿酒場（白の小道亭）】に行くこと。

B班の宿泊所は、【宿酒場（白の小道亭）】。人数分の宿泊予約を取ってあるから安心してなさい。

【宿酒場（白の小道亭）】のオーナーであるマケインさんに話を通すこと。彼は特別実習の事も話してあるから。パルム到着したその日はゆっくり休みなさい。

B班は、2日目が事実上の1日目、マケインさんからとあるモノを受け取りなさい。と書かれていた。

エマ「宿酒場（白の小道亭）のオーナーのマケインさんに会うのが最初の目的みたいですね」

ユーシス「さっそく、行って見るとするか」

ユーシスは、宿酒場（白の小道亭）の看板を見つけて、歩き出す。

マキアス「ま、待ちたまえ！何故君が先に行く！」

マキアスもユーシスの後を追う。

スハルト「はあくここまで来て揉めないで欲しいんだが……」

リイン「そうだな、珍しくスハルトがまともなこと言うんだな……」

スハルト「……言つてろ」

リインとスハルトもユーシスとマキアスが入って行つた宿酒場（白の小道亭）に入つていく。

ユフィ「また、このパターンになりましたね」

エマ「ふふつ、そうですね。それじゃあいきましようか」

ユフィ「はい、そうですね」

ユフィとエマもそう言うのと宿酒場（白の小道亭）へ入つて行つた。

――紡績の街パルムー宿酒場（白の小道亭）

ユフィ達は、宿酒場（白の小道亭）へ足を踏み入れた。

宿酒場（白の小道亭）の内部は、夜ご飯を食べに来ている人間達から、お酒を飲みに来ている人間達もいる。だからお酒の匂いも漂っていた。

マキアス「さ、酒くさ……」

スハルト「当たり前だろ、宿酒場だからな」

ユーシス「フツ…」

マキアス「何故、君はそこで笑う？」

リン「まあまあ、それでオーナーのマケインさんに会うんだろ？」

ユファイ「そうですね、マケインさんに会うことになってますけど…」

エマ「誰かに聞いてみますか？」

ユファイが達が誰かに話しかけようとしたら、カウンターの方からも声が聞こえてきた。

マケイン「そうだな、別に大した問題は起きてはいないかな」

静江「そう…他には何かなかったかしら？」

マケイン「…他ね…他…あ、あつたな…近くの日本人移民街から逃げてきた少年がいたな…」

静江「…少年!ちよつと詳しく教えてくれないかしら？」

マケイン「まあ、いいが…。で逃げてきた少年は、酷く怯えていてね、保護した人が、元締めに連絡したんだ。で元締めは、領邦軍に連絡し、保護してもらった。今はセントアークにいるんじゃないか？」

静江「領邦軍に…領邦軍って平民とかに冷たいんじゃないの？」

マケイン「サザーラント州の領邦軍は、他の州の領邦軍とは違う。ハイアームズ侯を始め、いいひとばかりだから。特にハイアームズ侯の二男は出来る人間だよ」

静江「そうなの？」

マケイン「そうだな、来月にセントアークで開かれる貴族平民の融和政策によってパルムの納める税金も減らされたんだ。それ以外でも、帝国政府が打ち出した東方移民団の受け入れも、他の貴族達が渋る中、ハイアームズ侯はいち早く手を挙げ、サザーラント州の中に移民団の街を作られたわけだからな」

静江「それが、今の日本人移民街なのね」

マケイン「そう言うことだな」

静江「ありがとう。有意義な時間を過ごせたわ。お代のミラ置いていくね。それとこれはチップ……。セントアークか……」

マケイン「毎度あり。セントアーク行くつもりなら、急いだがいいぜ。次が最終なはずだしよ」

静江「ありがとう、オナー、それじゃあ」

そう言うと、紫色の帝国婦人服を身に纏った女性が、ユフィ達の側を通っていこうとした時

静江「あら？どこかの学生さんかしら？」

ユファイ「はい、そうですね」

静江「そうなのね、じゃあ頑張つてね」

そう言うのと静江は、パルムの駅の方へ歩いて行った。ユファイ達もちよつと不思議思った。今の帝国で女性の一人旅は珍しくはないのだが、とても旅行者には見えなかつたからである。だが今は早くゆつくりしたいから、然程気には止めなかつた。

マキアス「すいません、貴方がオーナーのマケインさんでしょうか？」

マケイン「そうだが、どこかの学生さん……！もしかして君達はツールズ士官学院の学生さんかな？」

ユファイ「そうですわ」

マケイン「ようこそ、ツールズ士官学院特科クラスⅦ組の諸君、紡績の街パルムへようこそ」

ーパルムー宿酒場（白の小道亭）夜

宿酒場（白の小道亭）のオーナーである、マケインによつて夜ご飯をご馳走になることに。その前に部屋の案内とお風呂に入ることを薦められた。長旅で疲れている身体を癒すためにユファイ達は先に選んだ。もちろん部屋は、男女別々である。

そしてお風呂を済ませてきたユファイ達の前に、テーブルいっぱいにご馳走が並んでいる。

みんなは、それぞれの食べたい料理から食べ始めた。

――

ユファイ達が食べ終わったのを確認すると、マケインは士官学院から預かっていた封筒をユファイに渡す。

封筒を受け取ったユファイ達は、中身を確認する。そこには、パルム班は2日目（特別実習開始の時に見る）と3日目の午前中まで活動時間とし、活動範囲はパルムと日本人移民街までとする。与えられた課題をこなすことが目的である。

パルム班も今日から、実習内容のレポートを書く。書いたレポートは担任教官へ提出すること。

ライン「今日は本当に移動だけで終わった感じだよな」

マキアス「そうだな」

スハルト「達也達A班は、今日から特別実習の課題をやってるだろうな」

ユーシス「だろうな。向こうは、ケルデック、トリスタから1時間で着くからな」

ユファイ「そうですね。わたくし達は、明日からが本番ですね」

リイン「しかし、特別実習の課題って何だろうな？」

ユーシス「何かをさせるつもりなのか？」

スハルト「さあな、何の説明もないからな……」

マキアス「なんにせよ、今日はレポートを書いて明日に備えて寝た方がいいな」

ユファイ「そうですね……」

ユファイは、窓の外を見ている。

マキアス「ユファイ君、どうかしたのか？」

ユファイ「ううん、さっきの女の人が仰っていた事が気になりました……」

スハルト「さっきの女の人……ああ……さっきの日本人移民街の事を聞いていた女か？」

リイン「確かに気になることは言っていたな、少年がどうのつて」

エマ「マケインさんも何か知ってる感じがしましたが……」

ユーシス「俺達が気にしても仕方がないだろう。俺達は、ただの士官生だ、何が出来るわけでもないだろう？」

ユーシスの言っていることは、正しい。士官生が何を出来るわけでもない。あくまでもユファイ達は、特別実習に来ているだけだ。与えられた課題をやればいいのだ。それ以上の事は、越権行為にしかない。

ユーシス「話は以上だ。俺は先に休ませてもらう」

ユーシスは、そう言うかと与えられた部屋に戻っていく。

マキアス「キ、キミ！勝手なことを！レポートは！」

ユーシス「安心しろ、自室で書くからな」

スハルト「まあ、ユーシスの言うことも一理あるな。さーて、俺も自室でレポート用紙でも書くか」

スハルトもそう言うかと自室へ戻って行く。

マキアス「全く勝手な連中だ……」

ユフィ「とにかく、今日の事をレポートにまとめましょう」

リイン「そうだな」

エマ「そうしましょうか」

ユフィ、マキアス、リイン、エマの4人は、今日の出来事をレポートに書き込んで行くことに。

トリストタ駅から西トウキョウ駅までは順調な旅路だった事。

西トウキョウ駅の緊急停車の件。

それは、日本人移民街からの犯罪者が逃げた事が発端。

鉄道憲兵隊、領邦軍、帝国軍情報局が動いて捜査していること。

白亜の旧都セントアークを経て、紡績の街パルムを無事たどり着けたこと。

4 日本人移民街で起きている事件とはなんだったのか気になるようなことをユファイ達
4 人を書いたのだった。

第1章―16―14話―パルムでの特別実習。

―11204・4・25・朝・紡績の街パルム―

―宿酒場（白の小道亭）

いろんなところで、いろんな思惑がある中、ユファイ達はレポートを書き上げて寝ることとしたのだった。トリストタからパルムまで、約8時間。昨日の場合は、アクシデントもあって、8時間+ α もかかってしまい心身共に疲れはてていた。

そしていつもの鳥のさえずりで、目が覚めてしまうユファイであるが、今日はまだ眠ったままである。

先にエマが起き、身支度を始めた音で目が覚めてしまうユファイであった。

エマ「あ、ユファイさん、おはようございます。今日もいい天気みたいですよ」

ユファイは、エマに言われるがまま、窓の外から入ってくる太陽の日射しを見て

ユファイ「ま、眩しいですわ」

エマ「ユファイさん、完全に目が覚めましたか？」

ユファイ「ええ、覚めましたわ」

ここは、パルムの宿酒場（白の小道亭）の宿の部分である。男子（4人）と女子（2

人」と分かれて、泊まったのだ。女子の方が広々としているのは、4人部屋に2人しかいないのもある。

ユフィもベッドから出て身支度をし始める。

太陽の日射しで、エマの黒の下着が照らされて、妖艶に見える。それに対して、ユフィの下着は白であり、よりよく白を輝やかせている。マキアスが今のユフィを見れば、鼻血を出すのは確定だろう。

そんな身支度の一部だった。

身支度が終わったユフィとエマが、酒場の方に来たら、リン達がすでに来ていた。

リン「ユフィ、エマ、こっちだ」

ユフィ「すいません、みなさん」

エマ「遅れました」

スハルト「別に謝らなくていい。女子は時間がかかるのは当たり前だから」

マキアス「スハルト、そんなことを口でいちいち言わなくても…」

ユフィ達が、そんな話をしていたら、オーナーのマケインさんから朝食を頂くことに。帝国の代表的な朝食である。

マケイン「すまないね、本当はもつと豪華な朝食にしたかったけど」

リイン「構いませんよ」

マキアス「そんな特別扱いしなくていいですから」

スハルト「あまり豪華な朝食を食べたら、このあとに控えている『特別実習』に差し支えるだろ？」

リイン「差し支える？」

ユフィ「マキアスさん、アレを？」

マキアス「わかった、ユフィ君」

ユフィに言われて、マキアスは昨日マケインからもらった学院の封筒から一枚の紙を取り出す。

取り出した紙には、学院長と理事長の判が押してあり、サラのサインもあった。そして内容はこう書かれていた。

【・日本人移民街へある物を届けてほしい《必至》】

【・魚釣りを教えてほしい《必至》】

【・迷子の捜索】

【・とある薬草をもらって来て欲しい】

【・南サザーランド街道の魔物退治《必至》】

「パルムの東にある日本人移民街に住むヤマシタという人に渡したいものがある。本来なら自分で渡したいのが、足を怪我をして渡しにいけない。どうかこの私の話を聞いてもらえないだろうか。自分の家は、東側の門の近く民家です。（パルムの住民―バス）」

「子供達に魚釣りを教えてほしい。魚釣りができる人に来てもらいたい。自分はパルムの中を流れる川の側にいます。（パルムの住民―トラスト）」

「私は、日本から来た観光客ですか、今朝から子供の行方がわかりません。パルムの街の中を探しましたが、見つかりません。どうかみなさんの力を貸してもらえませんか？私
は、宿酒場（白の小道亭）にいます。（日本からの観光客・鷹山実理）」

「パルム礼拝堂のシスターのマルチナです。とある薬草を切らしてしまいました。本当ならセントアークからの商人さんが持ってきてくれるのですが、生憎その商人さんは、別の場所に行つてらっしゃるみたいです。詳しい事は、パルム礼拝堂のマルチナまで訪ねて来てください。礼拝堂にてお話します。（パルム礼拝堂―マルチナ）」

「南サザーランド街道の人気の無いところに狂暴な魔物が住み着いています。ほつとけ

ば、旅人や観光客に危害を加える可能性があり、即時に退治をお願いする。(サザーランド州領邦軍、パルム詰所)

これを昨日マキアスと一緒に見たユファイは、生徒会の依頼の仕事と同じであり、遊撃士の仕事と同じであること気づいた。スハルトも昨日、ユファイとマキアスがその紙を見ていたのをチラ見しただけが、遊撃士の依頼の仕事みたいなのをさせるのではないのかと気づいた。マキアスもユファイから聞かなければ、まだわかっていなかっただろう。他のメンバーはまだポカーンとしていたのだった。

――

この後、ユファイがサラから聞いた話をした。自由行動日の日にユファイと達也が、特別実習のために、先に経験させてたこと。

ユファイと達也を別の班にして、その経験を生かす事など説明した。

リン「そういう事だったのか。どうりであの日、達也もユファイもウロウロしてたわけか」

ユーシス「その事はわかった。だが俺達でそんなことをしなくてはならないんだ？」

スハルト「それがⅦ組の育成方法なんだろう？」

マキアス「与えられた実習内容ならやるしか無いだろう？君は、やりたくないならやら

なきやいいだろ？お貴族様は、こんなことやりたくはないらしい」

ユーシス「な、何だと？」

リイン「マキアス、ちよつと言い過ぎだろ！」

スハルト「大丈夫なのか：こんなんでもやれるのかよ…」

ユファイ「ここで言い争っても何も解決しませんわ！マキアスさんもユーシスさんもお分かりでしょ？」

ユファイに怒られたマキアスは、申し訳ないような表情をした。ユーシスも何やらぼつが悪そうな表情になった。リインもスハルトもエマも感心していた。

ユーシス「ユファイに言われたら仕方がない：やるしかないだろ」

マキアス「ユファイ君、すまない。大人げないところを見せてしまったな」

ユファイ「わかって下されば良いですから」

ユファイがニコニコしながらマキアスとユーシスを見ていた。リインとスハルトは、互いに顔を合わせてユファイをマジで怒らせてはダメだと思つたのだった。

そしてユファイの提案で、B班を2班に分けることに。なぜ2班に分けるのかと言うと、全員が依頼に関われるようにするためだと。

班分けはこうなる。ユファイとリイン班に分かれることに。

〔ユファイ班ーユファイ・マキアス・スハルト〕

【リイン班ーリイン・ユース・エマ】

ユフィとリインは、上手く班分けにした。つまりマキアスとユースを一緒の班にするのは外した。

ちなみに魔物退治の依頼は、全員でやることにして、他の依頼（必至）は、別々にやることに。

そして何の依頼をするかコイントスで決めた。

ユフィ班ー【魚釣りを教えてほしい】【とある薬草を取って来て欲しい】

リイン班ー【日本人移民街へある物を届けて下さい】【迷子の搜索】

【魔物退治】は全員で当たることに。そう取り決めを決めた。全て終えたら宿酒場（白い小道亭）のマケインに報告すること。

そしてユフィ達B班は、初めての特別実習を開始することになった。

ー白亜の旧都セントアーク侯爵家にて。

ユフィ達がパルムの街で特別実習を始めた頃、旧都セントアークでは、静江とハイアームズ侯爵家の二男が侯爵家で会談をしていた。

静江「ありがとうございます、フデレリック卿。こんな小娘ごときの話聞いて下さって」

フデレリック「そうかしこまれなくても結構だよ。リラックスして構わない。日本の七草家にエージェント…いや七草家現当主の御息女と言った方が良いかな？」

静江「…アハハ…やはりご存知でしたか…私のことも」

フデレリック「ああ、君の父君の弘一氏とも何度か話したことがあつてね。その時に娘さんが何人もいるが、静江は出来た娘だと自慢してらつしやつたからね。それで覚えていたのだよ」

静江「アハハ…フデレリック卿にお褒め頂き光栄であります」

フデレリック「静江さんが、直接私のところに来ると言うことは、やはり例の少年の事かな？」

静江「やはり…日本人移民街から逃げてきた少年は、セントアークに？」

フデレリック「ああ、セントアークの大聖堂で保護してもらっている。私達も色々手を尽くしたが、彼は何かに怯えているのだよ」

少年は、一度パルムの元締めに預けられ、その後領邦軍が保護しセントアークまで連れてきた。だが、何かに怯えているようで、話をできる状態ではなかった。それを見たフデレリックが、セントアーク大聖堂の大司教に報告し大聖堂の方で保護してもらうことにした。

フデレリック「今は、大司教の話では、大分彼も落ち着いてるらしい」

静江「そうですか…。すみませんね、日本の問題を帝国まで持ち込んでしまつて」
フデレリック「構わないよ。むしろ帝国が日本の方に問題を持つていつてないか心配であるがね」

静江「まあ、えーとそれは…」

静江は解答に困つた。帝国の問題に首を突つ込んでるのは、七草弘一や獅童正義…。帝国側が日本に関与するのは、貴族派の中心人物のカイエン公であるが、目の前のフデレリックも貴族の中でもキレる人物の一人なのだから。フデレリックもそれはわかつたようで

フデレリック「私は貴族派には属していないよ。属したら、貴族と平民の融和政策なんてしないよ。かといって革新派でもないのだから。私はオリヴァルト皇子の考えに賛同してるのさ」

静江「オリヴァルト・ライゼ・アルノール…リベールの異変を解決した人間の一人…皇族の間でありながら、民と寄り添つてる方なんですよね」

フデレリック「リベールから帰つてきたオリヴァルト皇子は、顔つきが違つてね、帝国を変えるんだつてね」

静江「そうですか。それでフデレリック卿もそういう政策を？」

フデレリック「そうだね。私もオリヴァルト皇子の理念を聞いて、手助けがしたくて

ね…。せめてサザーランド州から変わっていいこうつて考えてね」

静江「ハイアームズ侯爵閣下は、それを？」

フデレリック「父上からは、承諾は頂いてるからね」

二男フデレリックの改革を、父上であるハイアームズ侯爵は、認めている。他の州からの移民者も増えているのは間違いない。ハイアームズ侯爵家も貴族派に所属はしてゐるものの、貴族派の中でも穏健派であり、貴族派と改革派の仲を取り持とうとしてゐるが、中々と上手くはいかないのも事実である。

静江「フデレリック卿のなされてゐることは、是非応援したいですね。七草家としてはなく、麦野静江としてですけど」

フデレリック「なるほどね、七草家は、密かに貴族派と繋がりを持ってたね」

十師族の中で、帝国との関係を持つてゐるのが、七草家と貴族派。四葉家の改革派。後は獅童正義一派と繋がりを持つ七草家。獅童正義一派も貴族派が繋がっている。

静江「恥ずかしながら…」

フデレリック「失礼した。話が逸れてしまったね。少年の事だが、大司教から勧められたのだが、日本に帰国させようと思う。本人も帰国したがってるようだしね」

静江「わかりました、少年に会わせてもらえませんか？」

フデレリック「わかった。静江さん、会わせよう」

静江は、フデレリックと共に侯爵家から少年が保護されているセントアーク大聖堂へ向かうことに。

ー宿酒場（白い小道亭）↓パルム礼拝堂

ユフィとマキアスとスハルトは、先にパルム礼拝堂から来た依頼を済ませることにした。

魚釣りの依頼は、パルム内から出る必要もないので、先に薬草の依頼を先に片付けた方がいいだろうと、スハルトが言ったためだ。ユフィもマキアスも異論はなかった。

すぐにパルム礼拝堂に着いたユフィ達は、礼拝堂に入りシスターマルチナを探す。するとマルチナの方からやって来た。

マルチナ「あのすいませんが貴女方は、もしかしてツールズ士官学院の方達でしょうか？」

ユフィ「はい、そうですが、貴女がシスターマルチナさんでしょうか？」

マルチナ「はい、マケインさんから聞いて依頼を出したのですが、大丈夫だったでしょうか？」

マキアス「はい、大丈夫です。それで依頼の方は、いつも来る商人の方が別件で来られないと言うことでしたが、僕達でも大丈夫なのでしょうか？」

マルチナ「大丈夫ですよ、貴女方にはパルムの丘つてところにエリン草が植えてある

んです。万が一のために我々はパルムの丘にエリン草を植えてるんです」

パルムの丘。パルムと日本人移民街との間にある人工的な丘である。そこは丘ということもあり、パルムの街と日本人移民街も見下ろす事もできる絶景でもある。パルムの丘の中腹には、イストミア大森林から持って来た木々もあり、小さなイストミア森林もあり、その一部にパルム礼拝堂の畑があり、そこで薬草であるエリン草を栽培している。

スハルト「つまり、そのエリン草を採って来れば良いのか？」

マルチナ「はい」

マキアス「エリン草とはどのような？」

ユフィ「確か青白い色をした薬草ですよね？」

マルチナ「ええ、そうですけど。えーとご存じの方がいらつしやるので、大丈夫ですよね。エリン草を5束くらい持って来てください」

ユフィ「わかりましたわ」

スハルト「じゃあ、早速行こうぜ」

マキアス「そうだな」

ユフィ達は、パルムの東から東日本街街道を東へ歩き出した。

ーパルム↓東日本街街道↓パルムの丘

パルムの東の街道、昔は別名で呼ばれていた。今は東に日本人移民街が出来て名称が変わつたのだ。その街道沿いには、田んぼや畑も広がっている。田んぼや畑には、人が結構いて農作業をしている。

ユフィ「あの方々はみなさん日本人なのででしょうか？」

スハルト「だろうな」

マキアス「彼らは、東方では真面目で勤勉な民族と聞くと、なぜそんな人達が帝国に移民を……」

スハルト「話によれば、今の日本もこの帝国や隣の共和国と同じさ。貴族派だの、革新派、移民推進、反対、親帝国、反帝国など分かれてるんだよ」

ユフィ「……やはりどの国々も……」

ユフィが複雑な表情をしたため、スハルトは

スハルト「まあ、俺達がいくら考えても変わるわけではないし、今は実習課題に集中しようぜ」

スハルトはそう言うのと街道を歩き出す。マキアスもスハルトの言つてることに同感してしまふ。自分達がいくら考えても国の役職に就いてない限りは、変えることいや変えることのチャンスすらないことを痛感してしまふ。

それはユフィとて同じであつた。

ユフィ達は、パルムの丘に着いた。確かにマルチナさんが言っていたように人工的に作られた感のある丘である。パルムの丘の方からの風がとても気持ちがいい。

ユフィ「パルムの丘から吹いてくる風が気持ちいいですわ」

ユフィが風に吹かれて髪やスカートが揺れているのを見てマキアスはちよつと見とれてしまった。

スハルト「確かに風は気持ち良いが、無防備になるなよ」

ユフィ「えっ!？」

スハルトから言われ、ユフィは風でスカートがヒラヒラとしていたのを慌てて押さええる。そしてマキアスを見る。

マキアス「ぼ、僕は何も見えてないぞ!」

ユフィ「……」

スハルト「遊びはここまでして、さっさと行くぞ」

スハルトはそう言うのとパルムの丘の方へ歩き出した。

マキアス「僕は何も見えてないぞ、信じてくれ、ユフィ君!」

ユフィ「……わかってますわ。マキアスさんはそんな人ではないですから」

ユフィはそう言ってパルムの丘へ歩き出した。マキアスもため息をはいてパルムの

丘へ歩き出した。

ーパールムの丘・イストミア森林エリア

パールムの丘の一部を人工の森林エリアにしている場所が、イストミア森林エリアである。セントアークの西に広がるイストミア大森林の一部の木々を許可をもらい植えさせてもらったのだ。

人工の森林エリアだが、神秘的な雰囲気漂っている。そんな中をユファイ、スハルト、マキアスは歩いている。

ユファイ「何だか、不思議な感じな場所ですわね…」

マキアス「そうだな。何だかお伽噺に出てきそうな場所たわよな…」

スハルト「まあ、本体のイストミア大森林はもつとすごいぞここよりもな」

ユファイ「セントアークの西に広がるイストミア大森林ですか…」

スハルト「A班、達也達が行っているケルディックの近くにあるルナリア自然公園は人工的な場所だが、イストミア大森林はマジで手付かずの自然な場所だ」

マキアス「なるほど…」

ユファイ「スハルトさんって意外に物知りなんですわね」

スハルト「別に、ただ知ってるだけさ。とにかくエリン草が栽培されている場所に行
くぞ」

ユファイ達は、エリン草が栽培されている畑の前までやって来た。そこには見事なほどにエリン草が育っている。

パルムのシスターマルチナが密かにここで栽培しているようだ。セントアークからの商人がこれないときは、このエリン草を使ってなんとかしているようだ。

ユファイ「エリン草を5束でしたよね？」

マキアス「5束のはずだ」

スハルト「エリン草は5束で良いぞ。だがその前に……」

スハルトは回りを見て自分の得物を取り出す。それを見たユファイとマキアスも自分の得物を取り出す。

ユファイ「マキアスさん、スハルトさん、どうやら囲まれてますね！」

マキアス「ああ、どうやら僕達がエリン草に夢中になつてる時に囲まれたか」

スハルト「まあ、そうだろうな」

ユファイ、マキアス、スハルトは互いに背中を合わせた。

ユファイ達を取り囲んでいる魔物は、パルムの丘でしか見ない魔物のようだ。

大カタツムリが3体、大ナメクジが4体、大蝶々が3体いる。

ユファイ「見たことがない魔物ですわ」

スハルト「こんなデカイヤツは見たことがないが……小さいヤツならあるだろ」

マキアス「……カタツムリとナメクジと蝶々か？」

スハルト「だろうな…小さい奴らなら良かったがこんなデカイやつをほっとくわけにはいかないだろ！」

マキアス「スハルト、そうだな」

ユファイ「わかりましたわ。近くにパルムや日本人移民街がありますもの。ほっとくわけにはいきませんわ！」

ユファイ達は、街に被害を出させるわけにはいかないと魔物達と戦うことに。

――

何とか魔物達を倒したユファイ達。周りには先程倒した魔物達が転がっている。

ちよつと魔物の匂いが臭いような感じがする中、ユファイ達はエリン草を5束を根本から取り出した。

取り出した後、パルムの丘からパルムの街や日本人移民街を見下ろすユファイ、マキアス、スハルト。

スハルト「あつちに見えるのが日本人移民街だな」

マキアス「へえー、結構な街だな」

ユフィ「そうですわね」

スハルト「結構な日本人が移民して来てるのだから当たり前だろうが……」

スハルトは日本人移民街の方に視線を向けている。それに気づいたユフィが

ユフィ「スハルトさん、どうかしましたの？」

スハルト「い……いやなんか違和感があったのだが」

マキアス「違和感？」

スハルト「ああ……日本人移民街の方向でだが……」

ユフィ「日本人移民街の方って、ライン達が依頼で訪れるものがあつたはずでは？」

スハルト「確かに届ける依頼があつたな……」

マキアス「とにかく今は、エリン草をパルム礼拝堂のマルチナさんに届けるのが先決だろう」

ユフィ「そうですわ」

スハルト「わるいな、ユフィ、マキアス」

ユフィ達はそう言うと、パルムの丘のイストミア森林エリアから出て東日本街街道をパルムの方へ歩く。3人は色々な事を考えている。1日目の移動の時から何か怪しい動きはあつた。日本人移民街から西トウキョウ駅への犯人逃走事件……そんな事があつたのだから。

その事件を帝国軍情報局、鉄道憲兵隊、領邦軍が当たっている。その事が異常さを醸し出している。

だが、ユースから言われたこと。

ただの士官生がどうにかできる状況ではないのは、ユファイ達もわかっている。

だがユファイは胸のあたりにモヤモヤがしていたのだった。そしてパルムの方へ歩き出した。

――日本人移民街

一方スハルトから見られていた日本人移民街の方の連中は……

日本人移民街の自警団。パルムの東にある日本人移民街の治安維持組織。サザーラント州にありながら、自治が認められている。州の治安維持組織の領邦軍ですら立ち入りすら出来ない。

そんな連中の見張り台の1人が、パルムの丘から視線に気づいた。

見張り1 「なんか視線を感じたんだが？」

見張り2 「視線？どこから？」

見張り1 「パルムの丘の辺りからだが……？」

見張り2 「パルムの丘から？バカを言え。あの辺りには、明智様より与えられた魔物を放ったはずだろ？」

見張り1 「確かにそうだが…。人影を見たんだよ…」

見張り2 「パルムの丘にうっかり迷いこんだ住民が喰われるのをみたんじゃないのか？」

見張り1 「やめろよ、そういうのは」

見張りの男の1人は人間が食べられるのを想像してしまった。もう1人の見張りの男も

見張り2 「まあ、気持ちの良いものではないな」

見張り1 「そういや、トールズ士官学院の学院生が特別実習の課題の一件で日本人移民街に来てるらしいな」

見張り2 「トールズ士官学院…日本の魔法大学みたいなところか」

見張り1 「ちよつと違うだろうが、まあ大体は合ってるだろう」

見張り2 「で、その士官学院の学院生が遊撃士みたいな事をしてるんだ？」

見張り1 「しらねーよ」

見張り2 「とにかく、俺達の任務は、日本人移民街の警備だ。別に帝国人が入って行けないわけではないしな」

見張り1 「そうだな…平和が一番だな」

見張り台の2人は、呑気に鼻歌を歌い出した。この2人の思惑とは違う方向に物事は

動きだそうとしていた。

第1章—17—15話—ユフィ達の知らない所で。

—日本人移民街・「ゴールド・マウンテン」社

エレボニア帝国と日本国が国交を樹立した当初から帝国内に進出した企業である。日本人移民街に帝国支社を構えている。

「ゴールド・マウンテン」社は、七草家に支援してもらっている。そして今では、獅童正義一派にも荷担していて、国会議員も排出している。

表向きは、食料品加工や文房具品を扱う企業して知られているが、裏の顔は人身売買を行う企業として裏世界では知られている。

そんな中、ミサキはコツコツと「ゴールド・マウンテン」帝国支社内を悠々と歩いている。

何故ミサキが悠々と「ゴールド・マウンテン」帝国支社を歩いているかと言うと、十三工房に依頼して作らせた香水。「幻夢」ミサキが命名した香水。

この幻夢の匂いを嗅いだ物は深い眠りについてしまう。ちよつとでは起きれない代物である。

ミサキ「効果はてきめんね。私自身はこんな匂いで気絶なんか出来ないけど」

ミサキは、神経系のガスや毒ガス系で死ぬことは出来ない。D::G教団で、対毒耐性実験などをされ、耐性を持ってしまったからだ。

ミサキ「…しかしコイツら…この『ゴールド・マウンテン』帝国支社の社員かしらね？」

ミサキは、部屋を1つずつ確認して、倒れている連中を見て判断しているのだ。社員と言うより猟兵か日本の〇〇のようだ。

ミサキ「…一般社員はどこにいるのかしら？」

普通なら一般社員もいるはずだと探し回る。だがどのフロアにも一般社員らしき人物はいない。

ミサキ「見落とすわけでもないし…」

一般社員がいらないとなると、『ゴールド・マウンテン』帝国支社は名ばかりの会社つてことになる。するとどこかからともなく、機械音が聞こえてくる。

ミサキ「まさか…結社の人形兵器かなにかかしら？」

ミサキの予想外は的中し、人形兵器郡が襲ってきた。

的はあくまでもミサキなのか、『ゴールド・マウンテン』帝国支社の人間には攻撃しないようだ。

ミサキ「へえーちゃんとプログラミングされてるんだ…」

ミサキは人形兵器郡の一体を攻撃をすり抜けてパンチで壊した。彼女のパンチは特殊なパンチ。パンチを受けたものは、木端微塵になつてしまう。

硬化魔法と衝撃波を組み合わせて作られた技。【硬波衝撃翔】

【硬波衝撃翔】、ただ何体もある人形兵器郡に連続で放つのは難しい。

ミサキは、人形兵器の何体かの足元を狙い足技をかける。人形兵器郡の何体かは体勢を崩す。体勢を崩しながら、他の人形兵器郡を体勢を崩しながら倒れる。その隙を見て、部屋から抜け出す。

ミサキ「あんなの全部相手してたらキリがないわね」

廊下を走りながら、人形兵器郡から逃げる。逃げていても他の場所から人形兵器郡が現れる。

ミサキ「しつこいわね。だったら…」

ミサキは硬化魔法を発動し身体全体的を硬化する。そしてそこからステップをふみながらの攻撃を加える。

硬化魔法で固くなったミサキの蹴りをくらい後方に吹き飛びながら無惨に壊れていく。

ミサキ「ルバーチエのマフィア達の時にすでに経験済みなのよ。こうやって戦つてれば倒せるつてこともね」

ミサキは蹴りの次はパンチを繰り出した。それも連続にパンチを繰り出しているのだ。人形兵器郡の何体かは、連続パンチで壊されていった。

ー旧都セントアーク↓日本人移民街

ミサキが「ゴールド・マウンテン」帝国支社を襲撃している同時刻、静江は同じく日本人移民街にいた。ミサキとは違う場所、「ゴールド・マウンテン」帝国支社の工場である。

昨日の夜、セントアーク大聖堂に保護されている少年から話を聞いたのである。

少年の名前は、マコト・ハギムラ（萩村誠）

日本国籍、高校生、年齢は17歳。

日本の渋谷内でお友達と遊んでいたら、突然黒服の男達に襲われ、気がついたら帝国の日本人移民街の「ゴールド・マウンテン」帝国支社の工場に運ばれていたと。

その工場は、名ばかりで何かを生産しているわけではない。日本の子供達を使って何かの実験をしていたと。

実験というのは、D∴G教団がやってきたような生体実験。

生まれ持った能力者のようなものを実験にて生み出せないかと、試行錯誤をやりながらやっている。

そんな話を少年こと萩村誠から聞いたことを頭の中で整理した。そして「ゴールド・マウンテン」社の工場に突入することにした。

工場の見張りの警備は2人と巡回中の警備3人いる。

静江「さてと……見張り2人、巡回中が3人……」

腰のホルダーから改造した導力銃を取り出す。

静江の導力銃（デスガン）

彼女が密かに十三工房に依頼して作らせた導力銃。それは表向きの武器ではない。裏の顔のこれは、敵対対象を確実に殺す為の武装が仕込まれている。マルチスコープを使えば、軍事基地やテロリストの拠点なども1人で壊滅できる。

自分の生まれ持った能力、原子崩し（メルトダウン）を頻繁に使うわけにはいかない。無慈悲に人を殺すわけにはいかないからだ。それが真由美との約束なのだから。

「ゴールド・マウンテン」帝国支社がD∴G教団の理念を受け継いだのか、本社自体が受け継いだのかはわからない。全て静江は、七草弘一から聞いたものだ。

静江「……D∴G教団……あの人から聞いていたけど……全く聞いている以上に下衆な連中ね」

静江は静かに、導力銃（デスガン）の引き金を引く。もちろんマルチスコープを使つて。そして音もなく弾丸が見張りや巡回の警備員に命中する。

命中した警備員は全員血を吹き出して倒れた。静かに静江は警備員の死体の場所に
来た。

静江「真由美との約束は、救いようのある人間は殺さない。けどあんた達は救いよう
のないクズ：D∴G教団の片棒を担いでいるのだから」

静江は静かなる闘志を抱いて「ゴールド・マウンテン」帝国支社の工場に足を踏み入
れた。

第1章-18-16話-残りの依頼。

ーパルムの丘↓パルム礼拝堂

パルムの丘からエリン草を持って帰って来たユファイ達。パルムの丘で魔物に襲われた以外は何もなかった。しかし気になることがあったのは間違いない。

疑問を抱きながらパルムの礼拝堂へ向かう。そしてユファイは、シスターマルチナにエリン草5束を渡す。

マルチナ「みなさん、ありがとうございます」

ユファイ「いえいえ」

スハルト「シスターマルチナさんよ、ちよつと聞きたいことがあるけどいいか？」

マルチナ「はい？なんでしょう？」

マキアス「スハルト、君はパルムの丘のアレを言うのか？」

スハルト「そうだが」

パルムの丘のあの魔物は普通の魔物とは言いがたい。だからスハルトは以前から出没していたのか確認したいのだ。スハルトは、パルムの丘での出来事を話す。マルチナはすぐに驚きの声を上げる。

マルチナ「いえ！そんな魔物はいままではいませんでした！おかしいな…そんな話はいままで聞いたことありません」

ユフィ「聞かれたことはいないんですか？」

マルチナ「はい」

マキアス「ど、どういう事だ？」

スハルト「…誰かが、パルムの丘に運び込んだか…あるいは…」

スハルトがいろんな可能性を考えている。

マルチナ「とにかく、みなさんが無事で良かったです。それと貴女方が見た魔物の事は、領邦軍やヴァンダールの道場の方に相談してみます」

ユフィ「わかりましたわ」

マルチナ「それとこれはお礼です」

マルチナから、ちょうどいいくらいのお茶を貰った。ユフィ達は喉が渴いていたためおいしく頂いた。

ーパルム礼拝堂↓パルムの中を流れている川

ユフィ達は、パルム礼拝堂の次に向かったのは、魚釣りを教えてほしいという依頼者が待つ川の近くへ行ってみる。するとそこには釣り竿を持つ父親と子供達がいた。確

か父親の名前はトラストさんだ。

ユフィ「貴方がトラストさんでしょうか？」

トラスト「うん？ああ、俺はトラストだが、君達がやってくれるのかい？」

マキアス「はい、何でも子供さん達に釣りを教えてほしいとのことですが」

トラストさんは、自分の子供達に釣りのやり方を教えてほしいと。1人目は男の子のランドで、2人目は妹のライン。トラストさんは、本当は自分が教えたいそうだが、どうしてもセントアークに行くかなくてはならない用事があるからと依頼を出したようだ。

ユフィ「わかりましたわ、トラストさん」

スハルト「釣りの方は俺達が教えるから、あんたはセントアークでの用事を済ませてきな」

マキアス「スハルト、君な…すみません、彼はあんな感じなので…」

トラスト「アハハ、頼もしい限りだよ。それでは、私の方はセントアークに行つてきます。子供達の方をお願いしますね」

トラストは、会釈するとパルム駅に向かつて行つた。ユフィ達は子供達のために釣り

竿を持つ。

ランド「釣りを教えてくれるの、お兄ちゃん？」

スハルト「ああ、教えてやるさ。まずはだな…」

兄、ランドをスハルトは連れていく。どうやら本格的に魚釣りを教えているようだ。ユフィとマキアスも

マキアス「魚釣りを教えろと言われても、実は僕はやったことが無いんだ。ユフィ君はどうなんだ？」

ユフィ「マキアスさん、大丈夫ですわ。わたくし、釣りは得意なんですわ」

マキアス「え…？ そうなんだね」

マキアスは驚いた表情でユフィを見ている。女の子のラインもユフィのスカートの裾をくいくいとしてきた。

ライン「わたしも出来るの？」

ユフィ「もちろんできるわ」

ライン「うん！」

ユフィ達は、トラストさんの子供、ランドとラインに魚釣りを本格的に教えることになった。

ーパールム内の川にて。

ユフィ達とランド、ライン兄妹は魚釣りをして楽しんでた。スハルトは兄ランドを妹ラインは、ユフィとマキアスが教えていた。兄妹はみるみるうちに上達していく。スハルトやユフィが教えるのが上手いのか、はたまた兄妹が魚釣りの才能があるのかはわからないが。そんなある時スハルトがランドに何かを教えたようで、意図的に何かをやらかした。それは

ユフィ「え…!?…キヤー!!」

マキアス「…ぶおっ!!」

ライン「わぁー、薔薇模様のパンツだ」

ランドが投げた釣りの針が、ユフィのスカートに刺さり捲りあげていた。捲り上がっているせいで、パンモロ状態である。マキアスは、ユフィの白のシルクの薔薇の模様が入ったパンツをガン見しながら、自分の上着を脱いで周りから見えないようにしながら、彼女のスカートから針を取る。するとスカートは何事もなかったように元に戻る。

ユフィは、真つ赤にしながらスハルトを睨んでいた。マキアスがスハルトに

マキアス「……ス、スハルト！君は何をしてるんだ！」

スハルト「何って魚釣りだが、何か？」

スハルトはそう言った。あくまでもランドの釣り竿の針が間違えて、ユフィのスカートの方に飛ばしてしまったと主張している。マキアスも依頼主の子供であるため強気

では言えない。ランドも申し訳なさそうに

ランド「ごめんね、お姉ちゃん」

ユファイ「…うん、良いのよ。誰にでも間違いはあるものね」

ランド「ごめんね、お姉ちゃん」

ユファイ「ふふっ、釣り竿の針を二度と人に向けて放つてはいけませんよ」

ランド「うん！」

ランドはユファイにそう言われ、返事をした。一方スハルトは呆れた表情をしていた。

それから楽しく魚釣りを続けていた。

ランドやライン兄妹は、ユファイ達に教えられてかなり上手くなった。ユファイもスハルトももう教えることは無くなった。そう思えた時に、セントアークからトラストさんが帰って来た。

トラスト「ランド、ライン、ただいま」

ランド「パパ!!」

ライン「パパ!!」

ランド、ライン兄妹は、父親であるトラストさんに抱きついた。ユファイ達と親しく

なつたとはいえ、やはり父親が一番だろう。

トラスト「みなさん、2人はちゃんといいい子にしてみましたか？」

ユフィ「してましたわ。頼まりました魚釣りの方もかなり上手くなりましたから」

ランド「パパ、魚釣り上手くなったよ！」

ライン「うん、パパ、ラインね、魚釣り上手くなったよ！」

ランド、ライン兄妹は、父親であるトラストに魚釣りが上達したことを報告している。

ユフィ、マキアス、スハルトもその光景を見て喜んでいる。

トラスト「みなさん、本当にありがとうございます。大したお礼は出来ませんが、これをお受け取り下さい」

ユフィはトラストからエナジードリンクを貰った。エナジードリンクは飲み物であり、日本からの輸入品である。桐条食品の開発された飲み物で、疲労回復を促進する働きがある。帝国でも人気が出て、品薄状態が続いている。

ユフィ「このような物を受け取ってよろしいのでしょうか？」

トラスト「子供達に魚釣りを教えてくれたお礼さ。遠慮することはない」

ユフィ「ありがとうございます」

マキアス「ありがとうございます」

スハルト「悪いな」

3人は、トラストからエナジードリンクを貰った。

ユフィ「それでは、トラストさんわたくし達はこれで」

マキアス「トラストさん、エナジードリンクの飲み物ありがとうございます」

スハルト「またな、ランド！ライン」

ランド「スハルトのにいちちゃん、メガネのにいちちゃん、それと薔薇柄のねーちゃんまたね！」

トラスト「薔薇柄？」

ライン「パパは、気にしちやダメ。おにいちちゃんもデリカシーがないことを言っちゃダメ！またね、ユフィおねえちゃん！」

3人に手を振られながらユフィ達はこの場所から歩き出した。

歩き出してちよつとしたら、ライン達からARCSに連絡が入る。どうやらライン達も2つの依頼を片付けたようだ。後は南サザーランド街道に出没する魔物を倒す依頼だけになった。

ライン「ユフィ達は先に南サザーランド街道に出て待っててくれないか？すぐに俺達も駆けつけるから」

ユフィ「わかりましたわ。わたくし達は先に南サザーランド街道に出て待っていますわ」

リイン「了解」

リインからの連絡はこれで切れる。だがリイン達がこの連絡の後に囚われの身になることをユファイ達は知らなかった。

ーパールム↓南サザラント街道の外れの丘

依頼に書かれていた凶暴な魔物がどんなものか見に来たユファイ達。

先に魔物の特徴を知りたいとスハルトが言ったため、凶暴な魔物が見れる外れの丘までやって来た。

南サザラント街道から少し外れた丘。別に大した丘でもないため、名前は無い。

その名前のない丘から凶暴の魔物を見ている。凶暴の魔物は、タイガーベアーと呼ばれる凶暴な魔物。

タイガーベアーは、冬場は冬眠していて出戻さないが、冬眠から覚める春先にお腹を空かせて凶暴になると言われている。

スハルト「タイガーベアーか：冬眠から目覚めたばかりってどこか」

ユファイ「：春先に山の農業で成り立っているような村、鉾山の街などで必ず被害者が出ると思われるタイガーベアーですわ」

マキアス「この辺りも生息地なのか？」

スハルト「わからん。近頃生息範囲が広がっているとは聞いたことがあるが、まさかパルム近郊にまで出没するとは」

ユファイ「予想以上のスピードですわね」

そんなことを喋りながらリイン達の到着を待つユファイ達。しかし到着してもおかしくない時間になっても、リイン達が現れない。

マキアス「全くリイン達は何をしてるんだ？」

スハルト「…迷うところではないしな…またお人好しが出て人助けでもしてるんじゃないのか？」

ユファイ「そんな気もしますが…」

マキアス「…どうかしたのか、ユファイ？」

ユファイ「…いえ…何でもないですわ」

スハルト「……………」

マキアス「とにかく、しばらく待とう。それで来なかったらARBUSで連絡しよう」

しばらく待ったが、リイン達は来ることも連絡が来ることもなかった。太陽の陽も真上から照らし始めている。つまり昼間になろうとしている。ユファイ達の考えは、昼間までに魔物退治まで済ませるつもりでいたが、リイン達が来ないから予定通りに進まなく

なっていた。

ユファイ「…ダメですわ、繋がりませんわ」

マキアス「繋がらないって…」

スハルト「導力電波が届かない地下に行ったとか？」

マキアス「地下…？何故地下なんか？」

スハルト「…わからん…ただリイン達が何かの事件に巻き込まれた可能性が高くなつたな」

マキアス「じ、事件!？」

ユファイ「スハルトさんの仰るとおりですわ。わたくしもそんな気がします」

スハルト「…西トウキョウ駅の騒動からどうやらおそらく繋がってるみたいだな」

ユファイ「ええ…おそらくは」

マキアス「…まさか!」

ユファイ達が一連の出来事の話をしていたら、街道の方から悲鳴が聞こえた。旅行者達はどうやらタイガーベアーに見つかって襲われそうになっている。ユファイ達はすぐに奥地から街道へ出て、タイガーベアーを囲むように立つ。

ユファイ「貴方は早くパルムの方へ避難をしてください。わたくし達がタイガーベアーは食い止めますわ!」

スハルト「そうだな、タイガーベアーが街にでも入り込んだらヤバイな」

マキアス「だから僕達が食い止めるだろうが！」

ユファイ達は、己の得物を構える。旅行者達はお札をのべると、パルムの街の方へ走って行った。

ユファイ「リイン達がない分、わたくし達がやるしかありませんわ！」

マキアス「そうだな！」

スハルト「ああ！」

ユファイ達とタイガーベアーとの戦いが始まった。

ユファイとスハルトは、タイガーベアーに近付いて太刀と剣で攻撃する。その攻撃は、すぐに避けられる。避けたところをマキアスが導力銃を撃つ。

しかしマキアスが放った導力銃の弾丸は、タイガーベアーの横をすり抜けて壁に命中してドカンと音をならす。

スハルト「へたくそ、マキアス」

マキアス「な、なんだと！」

ユファイ「マキアスさんもスハルトさんもケンカしている場合じゃないでしょ！」

タイガーベアーは、そんな3人に対して、手の爪を尖らせて突進してきた。3人はすぐさま真横に飛ぶ。

「真横に飛んで体勢を整える3人。そこにタイガーベアーは襲いかかってくる。スハルトは突進してくるタイガーベアーを自分の得物で受け止める。だがタイガーベアーの力も凄いものだ。スハルトが後ろへ押されている。マキアスは導力魔法で援護する。タイガーベアーはマキアスの導力魔法を避けるため、スハルトから距離を取る。そこへユファイが太刀で

ユファイ「すきありですわ!」

だがユファイの攻撃は、タイガーベアーの右腕で防がれる。

ユファイ「…中々やりますわね…ですが…力押しだけでは、意味はありませんわ!」

ユファイの太刀が、タイガーベアーの右腕ごと斬り裂いた。

ユファイのこの攻撃は、ただの攻撃ではない。彼女が最大値に力を出したわけではない。では何なのかと言えば、タイガーベアーは自らの力で、自滅したのだ。そして自滅していたところにユファイの軽い力でタイガーベアーの手が斬り裂かれたというわけである。

だが片方の左腕でユファイを攻撃してくる。ユファイはとっさに太刀で防御体勢を取りなんとかしようとする。そんな時、マキアスがタイガーベアーの背中に回り

マキアス「ユファイ君に何をする気だ!」

マキアスは導力銃をタイガーベアーの背中に向けて連続で撃つ。ユファイが後方へ避

けると、すかさずスハルトも正面から剣を振り下ろす。

それだけのダメージをくらいつながらもまだ立っているタイガーベアー。

ユフィ「…忒の型…疾風！」

ユフィの八葉一刀流忒の型疾風をくらい後方へ倒れていくタイガーベアー。雄叫びをあげることなく倒れていく。

タイガーベアーが倒れた衝撃で、砂ほこりや地響きが鳴り響いた。

砂ほこりや地響きがおさまった後、スハルトがタイガーベアーの生死を確認するため
に調べる。だがタイガーベアーはすでに死んでいた。

スハルト「タイガーベアーはもう死んだから安心しな…」

マキアス「君は全く…恐れを知らないと言うか…」

スハルト「恐れ…？そんなもん遠くの昔に失ったさ」

マキアス「スハルト、君は一体…」

スハルト「俺のどうこうよりもユフィもだろ…？」

スハルトが指差した先にはユフィがいる。そのユフィは、タイガーベアーの死骸を
観察するように見ている。

マキアス「…まあ確かに…」

魔物の死骸をマジマジと見る女子も珍しいだろう。それにマキアスは入学式の後にあつたオリエンテーションでユファイが他の女の子と違う姿を見ているのでさほど驚きではなかった。

マキアス「：想定外で倒してしまったな」

スハルト「まあ：そうだな。本来なら全員で倒すことになってたしな：」

マキアス「とにかく、一旦は宿酒場（白の小道亭）に帰って報告しよう。話はそれからだ。あと領邦軍にも報告しないと」

スハルト「そうだな。今の俺達はそれしかないだろう」

スハルトは消え行くタイガーベアーを見ていたユファイに声をかける。

スハルト「ユファイ、パルムに帰るぞ」

ユファイ「パルムにですか？」

マキアス「宿酒場（白の小道亭）に帰って報告する。それからリイン達の事を情報収集しようと思う」

ユファイ「……わかりましたわ。まずは報告ですね」

そう言うのと、ユファイ、マキアス、スハルトの3人は、パルムの街へ戻り始めた。

ー南サザーラント街道↓パルム

ー1204・4・25・昼前↓昼過ぎ。

予定ならば、午前中昼前にみんなでタイガーベアーを倒して昼ご飯にする予定だった。だが予定の時間になってもリイン達は来ないし、南サザーラント街道を通っていた行人達が依頼魔物に襲われていたため、ユファイ、マキアス、スハルトの3人は行人達を守るために戦うことになった。

何とかタイガーベアーを倒した3人は、仕方がないので、パルムの領邦軍の詰所の兵士に報告し、宿酒場（白の小道亭）に帰る事にしたのだった。

ユファイ達は、マケインに自分達が受け持った依頼をこなしたことを報告した。

【とある薬草を採ってきて欲しい】

【魚釣りを教えて欲しい】

【南サザーラント街道の魔物退治】

この3つの依頼をこなして依頼者に報告済みである。最終的にマケインに報告して終わりであるが、まだリイン達が戻ってきていないし、依頼の達成にならない。

マケイン「とにかく、午後もあるわけだから、先に君たちは昼食を食べていてくれ」

ユファイ「わかりましたわ」

スハルト「ああ」

マキアス「ええ、頂かせてもらいます」

3人は、テーブルの上に並べられている料理を見る。どうやら中華料理のチャーハンのようだ。

基本的に、米・卵・食用油・調味料を用いる。

そのほか、チャーシユ、ハム、ウインナー、ベーコンなどの肉類、エビやカニなどの海産物、ネギやタマネギなどのか香味野菜、グリーンピース、ピーマンなどが使用される。タイのピナップル入りチャーハン、カーオパット・サツパロットのように果物を入れる場合もある。(Wiki参考)

スハルト「東方の中華料理のチャーハンか」

マキアス「チャーハン？」

スハルト「簡単に説明すると、米を油で炒めたものか」

マキアス「お米は、東方の国々の主食だったな」

スハルト「そのチャーハンを帝国で食べれるとはな」

ユファイ「それだけ、東方の方々が帝国に移り住まれたって事ですわね」

マキアス「そうなんだろうな」

スハルト「まあ、東方と言っても大陸の大亜……今じゃ東ゼムリアとかになつてゐるがな」
ユファイ「それじゃあ、頂きましようか」

3人は、テーブルに置かれてゐるスプーンを手に取りチャーハンを食べ始めた。

――

チャーハンを食べ終えたユファイ達は、スプーンを置いた。そして

ユファイ「こんな美味しいチャーハンを食べさせてもらつてありがとうございます」

マキアス「美味しいかったです」

スハルト「うまかつたな」

マケイン「お粗末様でした」

ユファイ達は、チャーハンの味を思い出しながら、今後の事を考え始めた。

ユファイ「マケインさん、リインさん達の班はまだ帰つて来てないんですよね？」

マケイン「ああ、まだ帰つて来てないな。どうしたのかね……」

スハルト「リイン達の依頼の中に日本人移民街に行くのがあつたはず……」

マケイン「確かにあつたが、それが何か？」

スハルト「いや……パルムの丘から日本人移民街を見てたんだが……」

スハルトは、エリン草を採取した時に、パルムの丘から日本人移民街を眺めたことを

説明している。その時に日本人移民街の違和感を覚えていたようだ。日本人移民街の兵士である自警団が街の中を搜索していたと。移民街から逃げた人間を探しているようではなかった。

日本人移民街の治めるトップも、帝国側に逃げた人間の搜索を伝えているあたり、そつちとは違う誰かが逃げたのではないかと。

そんな時、パルムに激震が走った。

第1章―19―17話―騒乱の足音と平和の使者。

―

パルムの街に激震が走る。1人の少女がパルムの街に逃げてきた。そう日本人移民街からである。

少女はすぐにパルムの元締めの家には運ばれ、礼拝堂からは、シスターマルチナが治療にあたる。

少女が意識を失う前に、元締めの手帳のようなものを渡した。

その手帳は、トールズ士官学院のVII組専用の生徒手帳である。元締めはすぐに使者に手帳を持たせ、宿酒場（白の小道亭）に送った。

―宿酒場（白の小道亭）

使者「マケインさん、VII組のみなさん！これを！」

マケイン「どうした！なんだ、その手帳は？」

ユファイ「あれは……わたくし達のVII組の生徒手帳ですわ！」

使者「日本人移民街から逃げてきた女の子が、君達に見せるように伝えたんだ」

スハルト「その逃げてきた女の子は？」

使者「今は元締めの家で休んでいる」

ユファイ「この生徒手帳、リインのですわ」

ユファイは、心でリインに頭を下げ、中身を見る。そこにはこう書かれている。

「ユファイ、マキアス、スハルト、済まない。日本人移民街のゴールド・マウンテン帝国支社の工場の連中に捕まってしまった。1人の女の子がある工場から逃げて来たのを保護したのが始まりだった……」

リインは、事の始まりからずっと書き記している。

そして女の子の仲間を救いだそうとして、とある工場に踏み込んだのは良いが、ゴールド・マウンテン帝国支社の人間に女の子の仲間を人質にされて、抵抗が出来なくなつて……捕まったようだ。

リイン達は、万が一のために女の子に自分の生徒手帳を渡していた。もし自分達に何かあれば、パルムの同じ制服を着た人間がいることを伝えていた。

ユファイ「みなさん、大丈夫でしょうか」

スハルト「向こうも下手な真似はできないはず……。向こうにはユーシスがいる。もし何かあれば、帝国と日本の外交関係にも影響する恐れがある。そのゴールド・マウンテン帝国支社の判断ぐらいでやれるものではないな」

マキアス「確かに……」

ユーシスは、四大名門のアルバレア家の二男である。ユーシスに危害を加えれば、帝国と戦争になる可能性も高い。日本側もそれはわかつている。日本の独立を保てているのは、帝国の手助けがあるからだ。もし帝国の手助けが無ければ、先の戦争で大亜連合や新ソヴィエトに潰されていただろう。

いくら十師族の援助があるゴールド・マウンテン社でも馬鹿な真似はしれないと思われていた。

マケイン「……うーん、君達を安全に帰還させるのが私の務めだったのだが、危険な目に合わせてしまったな……」

マケインが気を落としたようにユフィ達に言った。別にマケインのせいではないのだが、パルムにおいての特別実習の責任者は彼である。学院から委託を受けたのだが、引き受けた以上最後まで学院に帰すまでが、自分の責務だと考えてるマケインである。

そんな時である。宿酒場（白の小道亭）に1人の女性が入って来た。その女性は、西トウキョウウ駅で出会ったミサキであった。

11

時間は少し遡る。ミサキが何故紡績の街パルムの宿酒場（白の小道亭）に来たのかと

言うのと、とある人物から指令を受けていたからである。

ミサキがゴールド・マウンテン帝国支社の内部を調査をしている時に、ARCCUSに通信が入った。通信の送り主は、帝国政府代表であり宰相のギリアス・オズボーンからであった。すぐにミサキはARCCUSをホルダーから取り出して通話ボタンを押す。

ミサキ「はい、ミサキです、閣下」

オズボーン「首尾は順調かね？」

ミサキ「はい、調査は順調よお。ただゴールド・マウンテン帝国支社の連中は、日本のヤクザのみたい。一般の社員はいないみたいね」

オズボーン「ふふつ、なるほど、そういう事か…」

ミサキ「閣下？」

オズボーン「いや、続けてくれたまえ」

ミサキ「わかったわ」

ミサキは、オズボーンにゴールド・マウンテン帝国支社の内部資料や人身売買や結社の人形兵器群が帝国支社内部に配備されていたこと、監視カメラの映像から、幹部達らしき人物が、帝国支社から逃走する姿も確認したことも説明する。つまりミサキが踏み込んで来ることをわかった上で、行動をしている。

オズボーン「どうやら獅童やタヌキの七草に出し抜かれたようだな」

ミサキ「……つまり帝国支社の幹部達は部下達を見捨て逃げた？」

オズボーン「おそらくそういう事になるだろう……。ミサキ、ゴールド・マウンテン帝国支社の重要資料なんかを押さえたのだろうか？」

ミサキ「ええ、なんとか支社の人間に破棄される前に確保したわね」

オズボーン「そうか……。これで日本国政府、日本国首相の桐条にも恩を売れそうだな」
桐条政孝、かの桐条財閥の総帥である桐条武治の弟である。彼は先の大亜、新ソヴィエトとの戦いで多大な功績を受け、戦争終結後、軍を退役し政治家を目指した。そして七耀暦1203年春の総選挙にて政孝は絶大な人気と支持により内閣総理大臣へと選ばれた。内政にも力を注ぎ、外交は帝国を最重要相手国として、関係強化に計り、東ゼムリア共和国とも軍事同盟を締結、大亜、南中華国、新ソヴィエトへの牽制する形になった。

人身売買の件は、日本国政府も遊撃士協会もしつぽも捕まえることもできなかつた。その情報を日本国政府にちらつかせれば、結果的に新帝国派の桐条達を助けることにもなり、反帝国派の獅童、七草への牽制にもなるとオズボーンは判断した。

ミサキ「……日本国政府も今年の始め頃から国内問題ばかり抱えているから、少しでも問題を解決するために、私達の情報を欲しがると言うわけねえ」

今年に入ってから日本国政府、桐条内閣の閣僚の不正、与党民主自由党の議員の不正、

賄賂問題が明るみに出て、かなりの国民から批判されている。

オズボーン「ミサキ、お前にはこれからパルムにて、帝国政府代表として、日本国政府代表と会談を行つてもらおう」

ミサキ「日本国政府の代表とですかあ？」

オズボーン「ああ、日本国政府の代表も密かにパルムに来る手はずになっている。お前もわかつてるはずだ。人身売買の件で密かに日本国政府と交渉を重ねていた」

ミサキ「わかりました、閣下。それで日本国政府の代表とは誰ですかあ？」

オズボーン「日本国政府の代表とは、司波深夏という女性のようなのだ。リベールの方から来る。よろしく頼むぞミサキ」

ミサキ「わかりましたわ、閣下」

それだけ言うと、オズボーンの通話は切れ、ミサキはARCSをホルダーにしまった。

ミサキ「司波深夏…ねえ…。どんな女なのかしらあ？日本国本土からではなく、リベールからやって来る？パルムはリベールに近いから、在リベール日本大使でも派遣したのかしらねえ…」

ミサキは、ゴールド・マウンテン帝国支社の極秘資料を集めながら、司波深夏がどのような人物か考えていたのだった。

そんなことがあって、ミサキはパルムへやって来たのだ。日本代表の特使と会談するために。

ユファイ達もその空気の重さに緊張の汗が垂れるのだった。自分達は見守ることしか出来ないことに腹立たしさもあるが、士官学院の学生にどうすることもできないのは承知である。

ただ時間が流れていくだけである。

——リベール上空——中型挺アリストテレス

この中型挺は、リベールから帝国のパルムへ行くことになっている。

中型挺アリストテレス。何でも屋「エルフィン・スナイパー」のアジトのようなものだ。この中型挺アリストテレスは、カズヤが設計しリベールのZFCに作らせたオリジナル挺である。

何でも屋「エルフィン・スナイパー」は、ちゃんとした会社であり社員というクルー達がいる。名前のとおりには依頼の仕事なら引き受ける。遊撃士が引き受けない各国政府や機関、軍や猟兵からの依頼を引き受ける。ちゃんと報酬ももらう。エルフィン・スナイパーを設立して、一度も失敗はない。引き受けた仕事は必ずこなすがモットーであ

る。

そしてアリストテレスの艦長である、カズヤ・アレイスター、年齢は27歳。【容姿は光井和也を大人の青年にした感じである】

カズヤ「本当にすまないな。深夏」

司波深夏、黒髪ロングで、リベールのジエミス王立学園の制服を着ていて、出てるところは出て、14歳とは思えない色気も漂っている。そんな彼女が、何故何でも屋の艦船に乗っているのかは、深夏は四葉深夜の娘であり、四葉の交渉事には良く駆り出されるのだ。

今回の交渉は帝国政府との交渉。

簡単にはいかない相手である事は、百も承知である。

四葉家は、密かに革新派とは密かに同盟を結び、帝国内でも活動範囲も広がり始めている。

深夏は、10歳の時からリベール王国に留学している。もちろん四葉家とリベール王国との関係強化の意味合いもある。それに2度もリベール王国政府と日本政府の秘密裏の交渉も成功させている。

日、リベール通商航海条約締結。

日、リベール犯罪人引き渡し条約締結。

この2つ条約が締結された裏には司波深夏が秘密裏の交渉、根回しをしていたからである。

深夏「構わないですよ、カズヤさん。私は帝国政府との交渉は初めてですが、リベールでギリアス・オズボーンのやりとりは見ていたつもりですので」

カズヤ「……なるほどな。流星は「違う世界の俺が生まれ変わった」だけのことはあるな……」

深夏はちよつと不機嫌そうにカズヤを見る。

深夏「……確かにそうです。カズヤさん、貴方の言うとおりですわ。ですが、そういう事をあまり言わないで下さい。誰が聞いているかわからないですから」

カズヤ「すまない、配慮が足りなかったな」

ちよつと微妙な空気になった時、別の部屋から女性が入ってきた。マユミ・アレイスターの年齢は27歳、【容姿は七草真由美を大人の女性にした感じ】である。

マユミ「カズヤさん、今のは深夏さんのいうとおりよ。それに今は司波深夏さんとして生きてるんですものね」

マユミは、小悪魔の表情で深夏を見ている。深夏は呆れた表情で

深夏「はあくマユミさんはマユミさんですね……。私がまだ【光井和也】だった頃と……」

どの世界のマユミさんは、変わらないんですね…」

マユミ「私は私よ。どんな世界でも変わらないわ」

深夏「そうみたいですわね。それに幸せオーラが出てますし。…そ、そのカズヤさんと結婚して嬉しいんですね？」

マユミ「当たり前でしょ。私の初恋のカズヤさんと結婚できたのだから。貴女は違ったのね？」

深夏「はい…前世の私は真由美と雫、リーナの告白を断り深雪と恋人になりましたから」

カズヤ「…そうか…やはり同じように運命は働くのか…」

深夏「…カズヤさんも？」

カズヤ「まあな。そこに俺の場合は、エリカも加わるけどな」

深夏「エリカもですか…」

マユミ「どこの世界のカズヤさんは、モテモテなのね…」

マユミはジト目でカズヤと深夏を見ていた。

カズヤ「と、とにかく深夏を帝国政府代表が待つ帝国南部の街パルムまで届けないとな」

マユミ「深夏さん、緊張する？」

深夏「ええ、緊張しますわ。私の腕にかかっているから…交渉が成立するか…失敗するか」

カズヤ「なるほどな…」

深夏「今回は日本人の子供達を大量に帝国内に連れて来ていることの問題…」

カズヤ「そうみたいだな。日本の金城とかいう人身売買グループが、絡んでいるようだ」

深夏「ええ。お母様のお話では、金城潤矢が人身売買グループの元締めでその裏には獅童正義と七草家が付いてるんじゃないかと」

カズヤ「四葉家当主、四葉深夜…俺達の世界では、沖縄戦役で亡くなった、達也と深雪のお母さん…」

深夏「そうね、私の世界でも同じだった。この世界では、私達の世界とは違うようね。お母様の双子の妹の真夜は、帝国のギリアス・オズボーンと結婚したって聞かされてる…」

カズヤ「ギリアス・オズボーン、鉄血宰相か…」

マユミ「私達の世界の真夜様とは…歩んだものが全然違うわね」

カズヤ「そうだな」

四葉真夜は、台湾で行われた少年少女魔法師交流会で、当時12歳だった時に誘拐さ

れている。生体実験の被験体にされ、生殖能力を失い、その後救助され深夜の精神構造干渉魔法で経験を知識に変えられた。

四葉家は、真夜の誘拐に関わった人物、施設への報復活動を開始した。報復と言っても虐殺に近かったとされている。大漢の閣僚、官僚、魔法師、研究者などが大量に虐殺された。中国大陸における魔法成果を全て破壊された。

ながら四葉家を触れてはいけないもの。アンタツチャブルと。

しかしこのゼムリア世界でも、四葉真夜と七草弘一は、婚約をしていて、同じく台湾の少年少女のセレブ交流会が行われていた。東ゼムリアのオブサーバー梓で帝国とカルバードの少年少女も参加していた。

大漢軍が襲撃してくるところは同じであり、真夜も弘一も襲撃されている。同じように、真夜は大漢軍に誘拐されそうになった時、帝国の若き少年ギリアス・オズボーン（17）により救われた。

真夜は、ギリアスに一目惚れしてしまう。ギリアスは、真夜と七草弘一を避難させ、襲われている少年少女達を大漢から守った。

そして、ギリアスは、密かにエレボニア皇帝ユーゲント3世とルーク宰相に文を出し、大漢征伐の許可を許される。

そして四葉家と共闘し大漢に大ダメージを与える。その後カルバード共和国も大

漢に報復攻撃を開始し、台湾での少年少女達を襲撃の代償は大きかった。その後、新ソヴィエトの仲介もあり、日本、帝国、カルバードの間に休戦協定が結ばれ、大漢は多額の賠償金を払うことに。そういう重みから大漢は単独では、統治することができなくなり、朝鮮半島やその周辺の勢力と一つなり大亜が誕生する。台湾は大亜とはならず独立する。

独立後、台湾は、日本やエレボニアやカルバード、リベール、レミフエミア、アルテリア法国と国交樹立する。

第二次大亜戦役（沖縄戦役、北海道戦役）

大亜軍と新ソヴィエト軍が、宣戦布告無しに日本の沖縄諸島、北海道へ侵攻してきた。いち早く帝国は、日本側に立つて参戦。帝国正規軍を派遣し大亜本土に侵攻する。カルバード共和国も日本側に立つて参戦。カルバード共和国軍を派遣し新ソヴィエト、大亜本土へ侵攻を開始する。台湾も日本救援軍を派遣し沖縄救援部隊と正規軍が対岸側から大亜本土へ侵攻し始めた。日本軍も朝鮮半島の南端の釜山に上陸し進撃を開始した。

1ヶ月の戦闘により大亜は、首都北京を帝国軍に落とされ、カルバード共和国軍や台湾軍によって、主要都市は陥落していた。新ソヴィエトもカルバード共和国軍の機動力を防ぐことを出来ず、奥の方に追い込まれた。

アルテリア法国が日本側、大亜側の仲介に入り停戦協定が結ばれた。帝国占領地、カルバード共和国占領地は、大亜から切り離され、東ゼムリア、南中華国として分離独立した（両国傀儡）日本占領地の朝鮮半島は南半分を日本に併合。北半分は、東ゼムリアに併合された。

新ソヴィエトは、日本側に多額の賠償と千島列島、南樺太を日本に割譲することが決まった。日ソ東京講和条約締結。その後、関係国が大阪平和条約締結する。

台湾は、第二次大亜戦役後、エレボニア帝国から援助を受けて建国した東ゼムリア共和国と共和国から援助を受けて建国した南中華国とは国交樹立したが、大亜とは国交は無い。

――

台湾は、大亜自体を信用してはいない。力を失ってはいるが、また大国意識を復活させるかもしれないと警戒している。

話は元に戻すが、この世界の四葉家は、帝国と関係を強化し再び大亜や新ソヴィエトが攻めてこないようにしている。

帝国で平民として名を挙げていたギリアス・オズボーン。彼はみるみるうちに帝国軍内で出世していく。そんな彼に惚れた四葉真夜。

2人が結ばれるのは、必然的だった。

16歳になった真夜は、帝国のトールズ士官学院へと進学する。

真夜は、ギリアス・オズボーンがかつて通っていたトールズに行きたかったのだ。

真夜も国内で色々と苦勞していくことになる。

――

こちらの四葉真夜は、後々にギリアス・オズボーンと結婚し真夜・オズボーンになった。

ギリアス・オズボーンと真夜・オズボーンとの間に双子の息子が生まれる。

それが達也とリインである。もちろん深夏はカズヤから以前聞かされていた。

深夏「まさか……この世界で、達也さんと従兄になるなんて思ってもいなかったわ」

カズヤ「世間的には、真夜様と2人の息子は死んだとされているな」

マユミ「真夜様の息子さん……達也君とリイン君は、シユバルツァー男爵家に引き取られていたわね」

カズヤ「……2人が何故シユバルツァー男爵家に届けられたのかわからないが……」

何故シユバルツァー男爵家に達也達がいることがわかったのは、ユミルに新婚旅行に行った時である。

ユミルに達也とリインがいた。カズヤの目には、ギリアス・オズボーンと真夜の血を

ひいた命の炎が見えたからだ。妹との炎の色が違った。

深夏「2人のソレを見たのは、ユミルに新婚旅行に行った時にですよね…」

マユミ「そうよ、カズヤさんだけではなく、私の目にも見えたから」

深夏「私も見れば、おそらく分かると思います」

深夏も炎の力、炎の色を見ることがも見分ける事もできる。そして繋がりの方も見えることもできる。

カズヤ「いずれは、あの2人に出会おうと思うからね」

深夏「達也さんとリインさんにですか？」

カズヤ「自分の見える先に…自分達も含めて、無数の光の線で結ばれていくのが見えるから」

深夏「無数の光の線ですか…。私にはそんなのは見えませんが…」

カズヤ「深夏、君も前世では見えてたんじゃないのかい？」

深夏「はい、前世では見えてました…」

カズヤ「…そこはやはり…この世界に飛ばされた自分と転生して生まれ変わった君とは違うかもしれないね」

深夏「確かに…そうかもしれないですね」

マユミ「不思議よね…」

3人がそんな話をしていたら、操縦士のクルーのクルーガーがカズヤに対してクルーガー「社長！もうすぐ帝国領空に入ります！」

カズヤ「一応索敵してくれ。この会談は秘密裏にやるそうだからな」

クルーガー「イエッサー！」

カズヤ「こっちの方には対リベールに睨みを利かせているタイタス門がある。帝国軍のレーダーに引っ掛かるのは厄介だからな」

深夏「そうですね。会談が行われるのを知ってるのはごく一部の人間だけですもの……」

カズヤ「ステルスモードに切り替え！」

クルー達「イエッサー!!」

カズヤ「切り替えした後、進路を十二時の方向に進む！」

クルー達「イエッサー」

中型挺アリストテレスは、ステルスモードになり進路を真北に取りパルム方面へ飛び去って行った。

第1章-20-18話-さらわれた人達。

——日本人移民街・工場団地

ミサキから頼まれていたステイル達は、日本人移民街の近くにメルカパ漆号機を着陸させ、アクアエルを漆号機に残した。アクアエルには連絡係として残ってもらうことにした。万が一何かあった場合、アクアエルの座標移動（ムーブポイント）で漆号機ごと逃げるためだ。

ステイル、桜子、クラレットの3人は、ゴールド・マウンテン帝国支社の工場団地に入ってきた。

ゴールド・マウンテン帝国支社以外の工場からは、いろんな音が響いている。

ステイル「…何故、ゴールド・マウンテン帝国支社の工場から音が聞こえてこないんだ？」

クラレット「今日お休みってわけではないですよね？」

桜子「休みは無いわね、さつき帝国支社の掲示板を見たところ、工場が休みでは無いわね」

ステイル「俺達が乗り込んで来たことがわかったのか…あるいは…」

ステイルは、工場の入り口の扉に手をかけた。すると扉が開いたのであった。扉の横にはセキュリティを解除するための装置があるのだが、どうやらセットされていないようだ。

ステイル「……とにかく中を調べてみる必要があるな」

桜子「拉致してきた日本人や武器の密輸品が見つければ、良いけどね」

クラレット「気をつけて下さい、敵が隠れている可能性もありますから」

ステイルは、己の特殊な目である第3の眼を使って、先の通路や部屋の中身を歩きながら調べている。

第3の眼、ステイル（和也）の特殊能力の力の1つ。

施設の構造、配置人数、配置情報、予測行動、危険探知、未来予測、人の命の光など等も見える。

だがステイルは、第3の眼でこの辺りを見渡しても何も見えない。すると渡り廊下が見えてきた。ステイルは桜子とクラレットに合図を送り、警戒しながら渡り廊下を渡り隣の工場の方に移った。すると突然血の匂いがしてきた。

桜子「……！血の匂い……！」

クラレット「私達の他に誰かが侵入したってことですか？」

ステイル「……ああ、クラレットのいう通りにビンゴだ」

ステイルは、自分の第3の眼を駆使して、工場の様子を伺っている。

ステイル「…工場の働いてる連中は…いないな…猟兵やファイア、ヤクザの連中の死体が先には転がっている…その死体達の血の匂いつてことか…」

桜子「あたし達以外に誰がこんな事を…?」

ステイル「わからない…とにかく最大限に警戒しながら行くぞ!」

桜子「わかったわ!」

クラレット「了解しました!」

警戒しながら工場の中を歩いていくステイル達であった。ただ、1つ知った炎の光を放つ人の気配を感じ取ったが、ステイルは警戒を強めた。

——日本人移民街・ゴールド・マウンテン帝国支社・工場

静江は、表の見張り、巡回兵士達を片付けて工場内部へ侵入する。すると猟兵達が4人が静江を囲むように現れた。

静江「すんなり入らせてくれるとは思わなかったけど…」

猟兵1「侵入者か!」

猟兵2「うん? 帝国人ではなさそうだな」

静江「確かに帝国人じゃないわね。貴方達はゴールド・マウンテン帝国支社の社員

じゃ無さそうよね？」

静江はデスガンを構えながら獵兵達に問う。獵兵達がともに答えないことも想定済みである。

獵兵3 「女一人でノコノコと来るところではここは無いぞ」

獵兵4 「『トールズ士官学院』の生徒でも教官でもなさそうだな」

静江 「なるほど：トールズ士官学院の生徒達も捕まえたの：」

獵兵1 「おっとしやべりすぎたな。心配する必要は無い。どのみちお前もトールズの連中も死ぬのだからな」

獵兵達は、静江に向かって導力銃を撃ちまくろうとするが

静江 「死ぬのは貴方達の方よ：」

静江は、デスガンの引き金を素早く引く。デスガンの弾が獵兵達の心臓を貫いていた。獵兵達は、絶叫をあげることなく絶命し赤い鮮血の血溜りを作っていた。

静江 「……私に勝とうなんて100年早いわよ」

デスガンをホルダーにしまうと、再び工場内を歩き出す。歩きながらちよつと考える。

静江 「トールズ士官学院の生徒が捕まってる：」

静江は、フレデリック卿からトールズ士官学院の生徒達が、パルムの街に特別実習に

来てることを聞かされていた。彼女の脳裏にあの生徒達の顔が浮かんだ。

静江「パルムで会った子達か……。なんで捕まってるのかしら……」

普通にパルムで特別実習とやらをやっていたら、日本人移民街の自警団、ゴールド・マウンテン帝国支社の連中に捕まるはずがないと考えた。

静江「自警団の連中、ゴールド・マウンテン帝国支社の連中がパルムまで来るわけが無いし、あの子達が日本人移民街に入ったってことかしら……」

静江はちよつと考えたが、すぐに猟兵や日本のヤクザみたいな連中が現れた為、戦闘思考に切り替える。

猟兵1「いたぞ！ 侵入者の女だ！」

ヤクザ1「逃げられると思うなよ！」

猟兵2「お前か、仲間達を殺して回ってるのは？」

ヤクザ2「問答無用、やっちまえ！」

静江「……全くうるさいわね」

静江はすぐに物陰に隠れてホルダーからデスガンを取り出す。猟兵達やヤクザ達が一齐に銃を撃ち始めた。工場の窓ガラスや壁などに銃の弾が貫いている。静江はデスガンの引き金を引く。デスガンの弾が人数分発射され、猟兵やヤクザ達の心臓を貫き、叫び声もあげられずバタバタと倒れていった。

静江に撃たれた連中は全て死んだ。これが七草家の戦い方では無いが、静江と真由美がコンビを組んだら、普通の軍隊じゃすぐに全滅するだろう。

静江「猟兵やヤクザがこの先を守ってるようだけど、何かあるとふんだ方が良いかしら」

静江が視線を向けた先には、工場の最奥でありそこには頑丈そうな扉がある。何か隠されているような感じがするようだ。

静江「あんな頑丈な扉の向こうに何かあるのかしら？」

静江は、マルチスコープで扉の向こうを覗いた。すると中には、東方人がかなりの数で捕らえている。

静江「ビンゴって事ね。日本から連れ去られた高校生ってここかしら」

静江は、頑丈な扉に近付く。ちよつと触ってみたが、やはり扉には鍵がかかっている。

静江「当たり前と言えば、当たり前前か……」

デスガンの弾数は、限りがあるからあまり撃ちたくはない。かといって簡単に開けられるような扉でもない。

静江「なら、奥の手の原子崩し（メルトダウナー）を使うしかないわね」

静江が扉に向かって原子崩し（メルトダウナー）を使おうとした時、背後から足音が聞こえてきて

ステイル「待て！後ろ向きで、手を挙げる！ここまでに来るまでに転がっていた死体はお前の仕業か！」

静江は、ステイルに言われたとおりに、手を上に挙げた。静江は静江なりに背後から来た3人組の様子見ようと思つた。

静江「獵兵やヤクザのことかしら？」

桜子「貴女、ゴールド・マウンテン帝国支社の人間じゃなさそうね」

静江「私はゴールド・マウンテン帝国支社の人間では無いわね」

桜子「でしょうね。もし社員だったらこんなことをする理由がわからないわ」

クラレット「とにかく、話を聞かせてもらいます。おとなしくしてください」

クラレットがものを言い終える前に静江は動き、彼女の足をかけて転がした。桜子が木刀を取り出して、静江に向かって斬りかかる。だが静江は楽々と避けながら、桜子の背中を蹴り飛ばす。桜子は工場の機材の中に突っ込んでしまう。

ステイル「桜子！クラレット！」

静江「：貴方はかかって来ないのかしら？」

ステイル「貴女の挑発には乗るつもりはない」

ステイルは、鞘から太刀を取り出して、静江に向ける。

ステイル「貴女が何の目的でここに居るのかは知りません。俺達の目的は、ここに：

ゴールド・マウンテン帝国支社に捕らえられている日本の高校生と武器の密輸を見つけ出すこと……」

静江「へえーそうなんだね」

ステイル「邪魔をするつもりなら、俺は貴女を倒しますよ！」

静江「ふーん」

静江は、すぐさまステイルとの距離を詰める。ステイルも後方へ移動する。静江は、大胆にも思い切り蹴りを入れてくる。ステイルはギリギリの所で回避する。

そしてステイルが静江に対して攻めの姿勢に入る。太刀で静江を攻撃するが、肝心なところで避けられている。

そう思った時、静江が回し蹴りをステイルに放って来た。

――

静江が放って来た回し蹴りを地面を転がりながら避ける。

ステイルは、目の前の女を見たことがある。だがどこで見たのか記憶が無い。ただあの戦い方は、日本の九重寺の九重流派の戦い方だとステイルはわかった。

静江「さっきの回し蹴りも避けるのね」

ステイル「貴女は、九重寺の流派の者なのか？」

静江「へえー、貴方、日本の九重寺のことを知ってるんだ」

ステイル「まあね。九重寺に通う知り合いがいたものでね」

ステイルは、太刀をしまい静江と同じ素手に切り替えた。

静江「貴方も太刀だけじゃなく、格闘術も使えるんだ？」

静江はパンチとキックを組み合わせた格闘術を使ってステイルを翻弄する。ステイルもパンチとキックを組み合わせた格闘術を使い戦う。

ステイルも少しは九重寺の九重八雲から格闘術を指南されたことがある。藤林朱里や風間定晴が九重八雲の弟子でもあった。からである。

ステイル「衝撃波!!」

静江「甘いわね！」

静江は、ステイルの衝撃波を余裕でかわす。しかしステイルは次なる一手をうってでた。

ステイルは右手から、炎の刃を作り出し、静江に放った。静江は不意をつかれ、スカートの一部が斬られる。

ステイル「なるほど…先ほどの炎の刃も避けるわけか」

静江「中々、やるじゃないの」

静江も内心ビックリしている。自分の動きにここまでついてくる人間がいることに。おまけに炎の刃にてスカートの裾が斬られたこと。

ステイル「もう一度尋ねますが、貴女はここで何をしてるんですか？」

静江「質問を質問で返すようで悪いけど、貴方達こそ何者なの？ 帝国人では無さそうだけど日本人なの？」

ステイル「……！ 日本人では無い。俺達は……」

桜子「あたし達が何者だろうと関係ないでしょ？」

ステイルが何か言おうとしたら、桜子が口をはさんできた。どうやら桜子とクラレットが体勢を整えていた。

静江「……私の攻撃を受けて立つてられるなんて只者ではないわね」

クラレット「私は身体が丈夫なのが取り柄ですのよ」

静江はずっとステイルを見ている。静江はさっきのとっさにステイルが何を言おうとしたのか気になったのもあるが、昔自分を慕っていた男の子を思い出していた。

その男の子は、真由美がいつも連れていた。名前は「光井和也」という。彼は新ソヴィエト軍の北海道侵攻の際に死んだとされている。

【和也君は、新ソヴィエト軍の侵攻の際に死んだ】

真由美も静江も七草弘一の言葉を信用していなかった。和也は、侵攻の際の唯一の生き残りとして、言われていたのに突然死んだと言われて信用出来るわけが無い。

それは和也の妹であるほのか、妹分の雫も同じだった。両親や北山父から言われたとしても信用できなかつた。

なんで大人達は、和也を殺したがっているのかわからなかつた。

それは和也の頼みでもあつた。

世間を黙らせるには、和也自身も死んだことにしなければ、納得しないだろうと。

だから七草弘一、雫の父親、九島烈に頼んでそうしてもらつたのだ。

「光井和也は死んだ」と

この発表は、真由美やほのか、雫に深い傷を負わせることになつてしまった。静江もしばらくは落ち込んでいたのだ。

だが目の前にいるのは、死んだとされている「光井和也」に似ている。戦つていて彼のくせや仕草が、死んだとされている彼に似ているのだ。だから静江は真実を知りたくなつた。目の前の彼が光井和也なのかを。

静江「貴方、和也君じゃないの？」

ステイル「……!!!」

静江「やつぱり……和也君だね」

ステイル「ひ、人違いだ……静江”さん”」

ステイルはほろっと静江の名前を言つてしまい苦笑いを浮かべる。桜子とクラレツ

トも驚く。

静江「ほらっやっぱり和也君だね。貴方のその苦笑い、変わらないわね」

ステイル「ふっ、静江さんには敵わないな。桜子、クラレット、彼女は俺の知り合いだから、武器は収めて」

クラレット「ステイル卿の昔のお知り合いですか？」

ステイル「ああ、俺がまだ光井和也を名乗っていた頃のね」

桜子「知り合いなのはわかったけど、何故こんなところにいるのかしら？」

静江「ゴールド・マウンテン社が七草の支援企業なのよ」

静江は、ゴールド・マウンテン社を七草家が支援しており、ゴールド・マウンテン社が人身売買に関わっていて、日本国内から、多数の日本人を拉致にしていると情報を得ていた。

この事件を日本の警察やマスコミは動かずにいるため、真由美が独自に困っている人達のために行動を起こしているようだ。そのために静江を帝国へ派遣したことも話してくれた。

ステイル「なるほど、真由美らしいな」

静江「ええ、真由美はそういう子よ」

ステイル「それを聞いて安心したかな…」

静江「私は答えたわ。次は和也君、貴方が答える番。貴方は、死んだとされた後、どこに行つてたの？」

桜子「ステイルがどこに行こうが、貴女には関係ないでしょう？」

静江「私は貴女に聞いていないわ。和也君に聞いているのよ？」

クラレット「えーと、静江さんでしたっけ。ステイル卿のその事は、機密情報ですの
で、教えられません」

桜子とクラレットは、ステイルの秘密を知られまいとして断固拒否する。だがステイルは

ステイル「別に機密情報でもありません。俺が話したくなかったからだけです。静江さんなら話しても良いかな。そのかわり、真由美や妹達には言わないでほしい。それだけを約束してくれませんか」

静江「真由美や貴方の妹さん達も、生きてる事がわかれば、きつと喜ぶと思うわ」

ステイル「…今の俺は、真由美やほのか、雫に会う資格なんか無い」

静江「どうして？会う資格があるのよ？幼なじみと妹さん達でしょ？」

ステイル「俺は、"光井和也"という名前を捨てました。"弱かった自分"とおさらばしたんです。今の名前は、師匠の名前を受け継いだステイル・アレフガルドです。静江さんが七草家に所属してるように、俺も桜子もクラレットもみんな七耀教会・聖杯騎

士団に所属しているんです」

静江「聖杯騎士団!? 和也君が……! 魔法が使えなかった貴方が?」

桜子「ステイルに対して失礼なことを言わないで下さい。魔法が使えない? それは貴女達の国、日本での話でしょ?」

クラレット「ステイル卿は、聖杯騎士団の中でも指折りの中の強さを持つ一人なんです。総長や副長にもその強さを認められてるんです!」

静江「……ごめんなさい、和也君を馬鹿にするつもりじゃないのよ。私は素直にすごいなと思っただけ。日本人で聖杯騎士団に入るなんて凄いことだなんて……」

ステイル「俺は別に凄くはないよ。ただがむしやらにやっただけだから……」

静江「がむしやらにか……アハハ、和也はやっぱり和也君ね。例え名前を変えたとしても貴方は貴方よ。そこを覚えておいて。安心して真由美達には貴方が生きてるなんて言わないから」

ステイル「ありがとうございます。真由美達には、いずれ自分で会って説明します、だから」

静江「わかったわ」

この話を終えたステイル達と静江は、閉ざされた扉の中に入り、日本から拉致していた多数の日本人を保護に入る。ゴールド・マウンテン社と帝国支社は、タッグを組んで、

人身売買を行っていた事実が明らかになった。

保護した日本人達は、七耀教会の名の元に日本に帰国させようとメルカパで待機していたアクアエルを呼び出した。だがステイルの計画に待ったをかけた通信が入る。

第1章―21―19話―リイン達の救出。

――

入り口の方から一枚の紙の紙のようなものが飛んできた。おそらくただの紙ではない。術者が生み出した紙みたいな式神みたいなものか。この術者は連絡手段として使っているようだ。

?? 「待ちな、ステイル」

ステイル 「…!?!?…その声はハ、ハチマンか？」

ハチマン・ヒキガヤ。元はステイルと同じく、日本人であった。容姿は普通だが目が濁っているような、魚が死んだようにしているため、キモがられていた。日本の総武中学校の文化祭以降、学校中からいじめられ、教師や家族からも見捨てられ、自殺をしようとしていたところに、先代ステイルに拾われて、アルテリア法国に連れてこられた。

修業時代は、ステイルや桜子と3人ペアでやっていたが、ハチマンの才能を見出だしたトマス副長の試練を乗り越え、従騎士を飛び越え、正騎士に成り上がった実力を持つ。彼の2つ名は「雷神のハチマン」や「雷神ヴォルト」とも言われている。作戦時には、ハチマンの名を使わずエイトと名乗る。雷神と名前にあるように雷を自由自在に操れる。

とあるシリーズの御坂美琴みたいなあんな感じである。

ハチマンは、先代ステイル、トマス以外で、ステイル（カズヤ）、ケビン、ワジヤオリビエ、ロイドの事を認めている。4人はハチマンのしたことを褒めている。でも褒め称えた後にとあることも説明している。みんなを救うために、ハチマンが傷つくのはもつとダメだと。

でも何もしない連中よりは、百倍も千倍もハチマンの方がいいと言っている。これはステイルが行った言葉である。

ハチマンは、自分のために泣いたり笑ったり怒ったりしてくる人物がいてくれたのかと涙を流した。ステイルはハチマンの頭を撫でている。これに対しては、ステイルに女子にしろと言っている。

そうは言ってもハチマンは、そんなステイルに感謝している。もちろんオリビエやワジ、ケビン、ロイドにも。

過去話は、今は良いとして

ハチマン「ああ、ハチマンだが、ステイル、拉致されていた日本人を保護したんだろ？」

ステイル「ああ、なんとか保護したが？」

ハチマン「さすがだな、ステイル」

ステイル「まあ、俺だけではないがな。で何かあるんだろ、ハチマン？」

ハチマン「ああ。副長からの報告だが、保護した日本人をすぐに返さないで欲しいってさ」

ステイル「どういう意味だ？」

ハチマン「…どうやら、帝国政府と日本政府の代表が密かに会談するらしいな。それの交渉材料ってどこか」

ステイル「ちっ…交渉の材料って…何考えてやがる！」

ハチマン「俺もステイルと同感さ。上の考えることはわからん」

ステイル「副長が待ったをかけてるなら、従うしかないだろう」

ハチマン「済まない、ステイル。こつちも色々やっているから、帝国と日本の極秘会談の情報収集が遅れてしまった」

ステイル「そう言えば、ハチマン、お前確か副長とロジーヌと一緒にあの学院に通ってるよな？」

ハチマン「まあな。別に好きで言ったわけではない。副長が来て欲しいと頼んだから。学校はあのトラウマを思い出すから嫌なんだよ」

ステイル「済まないな、ハチマン」

ハチマン「別にお前に謝れてもな」

そしてハチマンが情報収集で得たことを話し出した。

帝国政府と日本政府代表は、極秘会談を紡績町パルムで行う。

帝国政府代表は、ミサキ・カミジヨウ。

日本政府代表は、司波深夏。

会談の内容は、おそらく日本人拉致事件、武器大量の密輸。

この2点が争点になるだろうと、ハチマンの考えのようだ。もちろんステイルも同じ考えである。

もちろん秘密裏の会談であるため、首脳会議のような大規模な警備などは敷かない。

警備を敷いたら何かをやつてることがバレるので、警備は敷かない。

ただ一般客のように、景色に溶け込むように会談は行われるだろう。

ステイルは、この会談に教会も1枚絡んでるのではないかと思つていた。

ハチマンとの通信が終わると、桜子、クラレット、静江が近づいてきた。ステイルは

軽くハチマンからもらつた情報を教えた。静江が

静江「日本政府代表に司波深夏……」

ステイル「知つてるのか、静江さん？」

静江「ええ、知つてるって言つてもリベール王国との交渉で全権を任されてたとしか」

ステイル「そうか」

桜子「で、帝国政府代表が、ミサキさん」

クラレット「今回のミサキさんの立場は、鉄血の子供達でしょうね」

ステイル「そうだな。さてと俺達は、日本人の高校生達をメルカパに連れ出す事が先決だな」

ステイルがそう言つて、桜子、クラレット、静江は拉致されていた日本の高校生、25名をメルカパへと連れていく。

日本の高校生達は、不安そうにしている。無理もないだろう、あんなところに閉じ込まれていたのだから。あんなところとは、コンクリートの壁に囲まれた明かりもほとんど無いような空間。扉が閉まれば、何もわからなくなるような空間である。

そして高校生達の1人がある事実を口にした。

【帝国の真紅の制服を着た学生さんが、工場の幹部らしき人物達に連れて行かれたと】

静江はあの連中が言つていた事は、本当だったと軽く舌打ちをした。

静江「その学生さん達はどこに連れて行かれたかわからない？」

女子高校生「わかりません」

静江「そうね……ごめんね。思い出させるようなこと言つてごめんね」

静江はそう言うと、不安がる女子高生を抱き締める。女子高生も静江に抱き締められ

安心したのか気持ちが悪く落ち着いたようだった。

すると1人の女子高生がステイル達に話しかけてきた。

「……」

ステイル達に話しかけてきた女子高生は、モブカットの茶つ毛の女性で日本のとある高校の制服を着ている。

ステイル「えーと何かな？」

???「真紅の制服を着た人達を探してるんですか？」

ステイル「ああ、そうだね。まさかその真紅の制服を着た子達の行方を知ってるのかい？」

???「はい、ゴールド・マウンテンの帝国支社の幹部の方々が、真紅の制服を着た人達を連れてきたかと思ったら、また別の場所へ連れて行きました」

桜子「別の場所ね。一体どこへ連れて行かれたのか」

クラレット「また違う工場へ？」

???「はい、なんか帝国政府と良い取引ができるとかなんとか言っていました」

ステイル「帝国政府と良い取引……」

ゴールド・マウンテン帝国支社の連中が、日本かあるいは第3国に逃げるために、真紅の制服の生徒達を人質に取って、帝国政府と優位に交渉を持っていく可能性もある。だがそれは真紅の制服を着た生徒達が身分が高い場合のみ。庶民なら帝国政府は交渉のテーブルにすら付かないだろう。帝国政府が交渉のテーブルに付ただけでも真紅の制服の生徒達の中に身分が高い生徒がいることになる。

??? 「あの、私の意見は役に立ちましたか？」

ステイル 「ああ、大いに役に立ちそうだ。君、ありがとう…えーと」

真 「真、新島真です」

ステイル 「新島真さん、ありがとう。クラレット、みんなを頼む」

クラレット 「わかりました。ステイル卿はどうするんですか？」

ステイルは、静江さんの方を見て何かを頷いた。

ステイル 「ちよつと気になることがあるんだ」

静江 「私もね」

桜子 「気になること？」

ステイル 「どうやら、真紅の制服を着た生徒達は、あの隠し扉の向こうに連れて行かれたのだろう」

静江 「そう考えるのが妥当ね」

桜子はポカーンとしている。ステイルの目と静江の目は、特殊な目である。隠し扉なんか簡単に見つけることも出来る。

ステイル「桜子、お前はクラレットの方を頼む。奴らが簡単に逃がしてくれるかわからない」

桜子「……わかったわ。人質の子達は無事にメルカパまで連れていくわ！ステイル、無茶をしないで！」

ステイル「わかった」

桜子「静江さん、ステイルの事を宜しくお願いします」

静江「わかったわ。終わったらちゃんと無事に桜子さんのところに送り届けるわ」

ステイル「…俺はモノかよ」

桜子は、ステイルと静江にそう言って元の道に戻っていく。

それを見届けたステイルと静江は、隠し扉の方を見る。そして隠し扉の前までやって来た。

ステイル「…隠し扉を開ける装置は無いのか」

ステイルが隠し扉を開ける装置がないか調べていると

静江「隠し扉の装置を探してる時間も惜しいわ！」

静江はそう言って自身の特殊能力である【原子崩し（メルトダウン）】を発動させる。

すると静江さんの回りに球状のものが現れる。彼女が右手を向こうに向けると、球状の
ようなものが一齐に隠し扉へ向かって爆発する。

物凄い地響きや爆発音がしたが、建物にはなんのダメージはないようだ。

ステイル「静江さん、ちよつとやり過ぎなんでは？」

静江「そうかしら？これぐらいは許されるでしょ」

ステイル「アハハ：静江さんは大胆ですね」

静江「和也君：それ褒めてるのかしら？」

ステイル「えーとどうでしょうか……。って先を急ぎましょう！」

ステイルは、壊れた扉の向こうへかけていく。

静江「ちよつと待ちなさい、和也君！」

先に行ったステイルを追っかける静江であった。

――

隠し扉を抜けて奥へと続く通路をひたすら走るステイルと静江。

これまでに何回か敵に遭遇している。猟兵というよりは、ヤクザのような連中だつた。そんな連中もステイルと静江の連携プレイですぐに片付けられた。

奥へと走り続けるステイルと静江であった。

――

ゴールド・マウンテン帝国支部の秘密工場最奥

ゴールド・マウンテン帝国支部の秘密工場最奥まで連れてこられていたリン、ユース、エマであつた。

最奥には、帝国支部の幹部だけではなく、本社の幹部らしき人物がいた。帝国支部の幹部の何人かはミサキや静江が工場襲撃の際に逃げ出している。本社の幹部である多村がリン達に話しかける。容姿は魔法科高校のブランシユの日本支部の司一みたいな感じだ。

多村「君達が我々の計画を邪魔してくれた連中かね？」

リン「人さらいや武器の不正な横流しの事か！」

多村「やはり知られたか……。帝国支部の支部長の山中は使えん奴だったか」

ユース「ふつ、部下を使えん呼ばわりとはな」

多村「使えんから使えんと言ったまでだよ、帝国の貴族のぼっちゃんさんよ」

エマ「貴方は、日本の高校生を使って何をしてるんですか！武器もあんなに集めるなんて」

多村「それは言ったでしょう……。我々の計画のためだとね」

リイン「その計画とはなんだ！」

ユース「是非、教えてもらいたいものだな」

多村「なぜ、君達に教えなきやならない？君達は賛同者でもゴールド・マウンテン社の社員でもない…君達に!!」

リイン達は、多村達の雰囲気さがつきままでと違うことを感じ取った。

多村「君達は、邪魔した罪で素材になるのは決定しているのだよ。帝国政府との交渉材料？何を言ってるんだ？そんなのは無能者がするものだろう！」

多村は、突然として体が膨らみ始める。すでにその時点で、人間の姿は保てていなかった。人間と獣を合わせたような姿をしているのだ。帝国支部の幹部達は、それを見て恐れて逃げ出そうとしている。

しかし多村はそれを見逃すつもりはなく、帝国支部の幹部達を衝撃波で風ぎ払う。

その衝撃波は凄まじく、リイン達は吹き飛ばされないようにするのが精一杯だった。リイン「くそつ武器さえあれば！」

ユース「そうだな」

エマ「……」

エマは、この状況をどう打開するか考えていた。今は魔導杖がない。魔導杖やARC USが無いと導力魔法が使えない。だがエマは、奥の手を隠している。

それは、とある人間にもらった銀色のCADと呼ばれるものである。その人物は、エマのお婆ちゃんと同じ合いである。そういうことで、その人物とも仲良くしてもらったのだ。

???「この銀色のCADは、エマが危険な状況に置かれた時に使うのだよ。そうじゃないときは、何の意味もないからね」

エマの頭の中に響くその人物の言葉が。今がその状況だとエマは固く決意する。懐にしまっている銀色のCADを出そうとした時、頑丈な扉が爆発と共に吹き飛ばされていた。

リン「なんだ？」

ユース「今度はなんだ？」

エマ「……え？」

ステイル「待たせたな、学生さん達！」

静江「あれは何なの！」

ステイル「グノーシスを使った成り果てか…そんなもので力を得ても化けモノになるだけだろ！」

多村「グノーシスを知っているか…これは最高だ！何者にも勝てる気がするぜ！」

再び化けモノになった多村は、衝撃波を繰り出してくる。しかしステイルは太刀を取

り出して、同じ衝撃波で返す。衝撃波同士がぶつかり合って爆発を起こす。爆発のせいで、地面が揺れる。

リイン「貴方は…八葉の方ですか？」

ステイル「ああ、俺は八葉一刀流…九島流派…最終的にはユン老師に指南を頂いたが…君も八葉の者か？」

リイン「ええ！老師の最強の弟子の一人のレツ、クドウのお弟子さんと出会えるとは…」

ステイル「まさか兄弟弟子にこんなところで、出会えるとは夢にも思わなかったが…」
多村「何をごちゃごちゃと言ってるやがる！」

再び多村は、衝撃波を放とうとするが

静江「させるわけがないでしょう!!」

静江の周りに原子崩し（メルトダウン）の球体が何個もあり、彼女が多村の方へ右腕を向けると、一齐に球体は多村へ向かっていき、身体を貫通し爆発を起こす。それだけではない、日本のCADを取り出して、魔弾の射手を使う。多村の身体を無数のドライアイスの刃が降り注ぐ。

ステイル「まだ続くぞ！」

ステイルが指をパチンと叩くと炎の刃が雨のように多村へと降り注ぐ。静江の攻撃

でダメージを食らっていて、ステイルの炎の刃の雨は、致命傷のダメージを与えていた。ステイルはリンに対して

ステイル「君、八葉の技：使えるな？」

リン「は、はい！」

ステイル・リン「八葉一刀流、弐の型：W疾風!!」

ステイルとリンのコンビネーションが決まり、化けモノになった多村は、脚から崩れ去った。

崩れ去った中に多村の生身の身体があつた。

静江「ステイル君、アレ生きてるの？」

ステイル「生きてますよ。あくまで俺の炎は、浄化の炎ですから。悪魔に堕ちた多村を炎で浄化したことになりませんが……」

ステイルはリンの側までやってくる。

ステイル「即席だったけど、上手く合わせてくれて感謝する」

リン「いえ、貴方が上手く合わせられるようにしてもらえたから」

ステイル「そう言って貰うと嬉しいが、君も中々なものだった。自己紹介がまだだったな、ステイル・アレフガルトだ」

リン「リン・シュバルツァーです、ステイルさん」

ステイル「ステイルで構わない、歳もそんなに変わらないだろうし、八葉の兄弟弟子だし。呼び捨てで構わないよ」

リイン「わかりました、ステイル」

ステイル「ああ、これから宜しく頼む」

ステイルとリインは互いに握手をかわした。

静江「八葉の者同士の通じ合いかな」

ユース「そうかもしれないな」

エマ「……」

ユースは先程からしゃべっていないエマを見た。するとぼおーとしていたので、ユースは話しかけた。

ユース「うん？どうかしかのか？」

エマ「いえ、何でもありません」

エマはステイルを見て何かを感じていたが、ユースの問いには答えなかった。エマの知っている彼は、青年であり少年ではない。

そうエマが知っているのは、緋色の銃と銀色の銃を持った青年、カズヤ・アレイスターなのだから。このあと、ステイルとリイン以外の自己紹介をするのだった。

――

ステイルと静江に救われたリン達。リン達と共にここに連れてこられた日本の高校生達は、助け出したことを説明した。

リン「そうですか、あの学生さん達は先に助け出されたんですね」

ステイル「ああ、俺の仲間が救いだした」

エマ「そうですか」

静江「3人は危害は加えられていないのよね？」

ユーシス「そうだな」

ステイル「なるほど、ユーシス、君がいたからか」

静江「君を交渉材料に帝国政府と交渉しようとしてたわけね」

ユーシス「俺を交渉材料に？笑わせてくれる。俺を使っても何の足しにもならないものを」

ステイル「ユーシス、君は帝国の四大名門のアルバレア家の御息だろ？」

ユーシス「俺はアルバレア家の二男だ」

静江はユーシスの発言からピンときた。何故、四大名門の貴族の家の二男だからと言つてそうは無下にはしない。それでもユーシスは、自分自身を交渉材料にすらならな

いと。静江はもしかすると、貴族や金持ちにありがちなことを思った。愛人との子供ではないかと。

静江は自分自身が愛人の子だから、そういうことには敏感である。だからと言ってそれを指摘するようなことはしない。彼女もそうことを詮索されたくはないのだ。

静江「とにかく、ここから出ましょう！」

ステイル「そうだな、ここから出て……」

ステイルがそう言いかけた時、ARCUの着信音になる。先ほどのようなハチマンが使った呪符の印ではない。ちゃんとARCUの着信音になっている。

ステイル「はい、こちらステイル……」

アクアエル「ステイル卿！今私達は襲撃を受けています。メルカパ第漆号機は結界を張り、桜子さんとクラレットさんが、表で襲撃犯と戦っています！」

ステイル「やはり襲撃されたか！桜子とクラレットが……で状況はどうなってる？」

アクアエル「なんとかなってる状況でしたが、ハチマンさんが救援に来てくれたようです！」

ステイル「あいつが来てくれたのか！ありがたい」

アクアエル「それでステイル卿の状況はどうになりましたか？」

ステイル「ああ、助け出したよ。これから俺達もメルカパに帰還する」

アクアエル「わかりました！」

ステイルはARCSの通話を切る。そして静江、リン、ユース、エマにここから脱出してメルカパ第漆号機に避難することを説明する。それと自分が七耀教会の間であることも説明した。

リン「ステイルは教会の人間だったんだな」

ユース「フン、何故教会の人間が助ける？」

ステイル「教会の人間が助けちゃいけないルールなんてないだろ？」

静江「私は、とある人の命で日本の高校生を救い出すことを言われたからね」

ステイル「……俺は2度と誰かが泣いてほしくはない。俺が目の前に見えてる範囲の……誰かが、助けて」と言ったら必ず俺達……ラリクマは駆け付ける……」

ステイルは、真つ直ぐな視線をリン、ユース、エマに向けていた。それを見た静江は、ステイル（和也）は、やっぱり変わっていないと改めて感じた。

まだ真由美と一緒にいた頃の和也（ステイル）と同じだと。強くなっても、根っこの部分は、昔の和也（ステイル）と変わってないと。

ステイル「本来なら、アクアエルに座標移動（ムーブポイント）で、一気にメルカパつて行きたかったが、敵襲でそれが出来ない。悪いが走ってもらおうぞ」

リン「はい！」

ユーシス「フン、構わん」

エマ「ええ、わかりました」

静江「それじゃあ、戻りましょうか！」

静江は密かにマルチスコープを使い、隠し扉を発見する。

静江「みんな、あつちに隠し扉があるみたい。それは日本人移民街の外に繋がる隠し通路みたいね」

ステイル「そうみたいだな」

リイン「お二人はわかるのですか？隠し扉があるって」

ステイル「まあね。俺や静江さんの目は特殊な目なんだ。それで見えるんだ。でリインも何故隠し扉を？」

リイン「なんとなくですが、この部屋風の流れているんですよ。扉の無い最奥なら風の流れるは止まるはず。なのに風はどこかから流れていると」

ステイル「なるほど……」

ステイルはリインをさすが八葉の者だと感心した。

静江「急ぎましょう！ただみんな下がっていて！」

静江は再び原子崩し（メルトダウン）を発動させ、隠し扉をぶち抜いた。

静江「ほら、みんな行くわよ！」

静江は先に走っていく。ステイルは苦笑いするしかなかった。

ユーシス「全く騒がしい女だな」

エマ「アハハ、みなさん、行きましようか」

ユーシスとエマは、先に歩き始めた。ステイルは行こうとするリインを止め

ステイル「リイン、こいつを運ぶのを手伝ってくれないか？」

リイン「ええ、構いませんよ」

ステイルとリインは、氣絶して拘束されている多村を抱えて最奥の部屋から脱出する。

第1章―22―20話―燃えるパール。①

――紡績町パール

1204・4・25・昼↓夕方―元締めの家にて。

昼から夕方に陽が傾き始めていた。15:00から始まった帝国政府代表と日本政府代表の会談は続いていた。

帝国の代表のミサキと日本の代表の深夏は互いに意見を述べ、一步も譲歩するつもりはない。

当たり前だろう、互いに国のメンツを絡んでいるからだ。ここで弱みを見せれば、そこをつかれ、防戦一方に成りかねない可能性を秘めている。

互いに油断ならない相手だと、ミサキも深夏も感じ取った。

ただ絶対的な対立は避けたい両者でもある。カルバード共和国である。

帝国にしても日本にしても、東ゼムリアでカルバード共和国の影響力がこれ以上大きくなることは避けたいからだ。

そんな中、机を中心にして、ミサキと深夏が両端に座っている。

ミサキ「私達帝国も日本と対立するつもりはないわ」

深夏「それは私達日本だって同じです。ただ、帝国軍情報局の人間を日本国内で自由に捜査させる権利を与えることはできません！」

ミサキ「どうしてかしら？ ゴールド・マウンテン社は日本企業でしょう？ その企業が帝国国内で悪さしてるのだから、私達に捜査する権利はあるでしょ？」

深夏「な：何を仰られるんですか？ 日本は独立国家です。帝国軍情報局が捜査するとは認められません！ 議会も野党も国民も納得できるわけがないです！」

ミサキ「まあ、それはそうでしょうね…。簡単に認められるわけがないわよね。日本の警察が信用できるのなら、捜査は日本側に任せることもできる。でもね」

ミサキは小悪魔な表情を浮かべながら深夏を見る。深夏も普通の顔してミサキを見る。据える。普通ならここで落ちるのだが、深夏は落ちなかった。リベールとの交渉や他の事でも踏んできている。だが深夏が相手にしてるのは、どんな相手よりも厄介な相手であるのは変わらない。

深夏「確かに日本の警察は、日本の高校生の拉致事件を捜査することはしなかった。現場の人間達は捜査をしようとしていたようです。ですが警察トップは、獅童や七草の圧力によって動かなかった」

ミサキ「それで、まともな捜査ができるのかしら？」

深夏「まともな捜査はできないでしょうね。七草家は国防軍以外には、かなりの影響

力がありますから、きちんとした捜査はできません」

ミサキ「まあ、そう落ち込まないで。これは、ゴールド・マウンテン帝国支社の裏の資料よ」

ミサキは鞆から、ゴールド・マウンテン帝国支社の内部から押収した資料のレプリカ。本物は帝国政府代表、ギリアス・オズボーンの手元に送られている。そのレプリカ資料を深夏に見せる。

レプリカ資料の中身は、ゴールド・マウンテン帝国支社が密かに行っている事がかかっていた。

日本国から帝国への武器の密輸。運んできた武器を、帝国の貴族派、クロスベルのヴァーチェ商会、カルバード共和国の移民反対派、猟兵団などに売りさばく。

ルバーチェ商会やD∴G教団から密かに得ていたグノーシスを日本国内に回すことや教団が行ってきた実験を引き継ぎ、日本の高校生や一般人達で実験していたと書かれている。

○年○月○日、536回実験をし、生存者は0

帝国支社の支社長の佐藤が、金城にもっと実験体を増やすように通達している。

○年○月○日、新たに金城より、125名の実験体を手に入れ、実験を始めた。

○年○月○日、何度も実験をするが、一回とも成功はしなかった。

1204・4・30、125体の実験体を実験失敗し、再び金城に依頼を出す。

1204・4・20、新たに25名の新しい実験体を得た。金城には感謝しなければならない。だが妙な連中がかぎ回り始めている。気をつけて続けなければならない。

レプリカ資料は、ここまでしか書かれていた。深夏は、プルプルと震えている。おそらく資料の内容を見てのことだろう。

深夏「…これがゴールド・マウンテン帝国支社の内部資料なんですよね？」

ミサキ「そうね。それを破棄しようとしていた連中をねじ伏せて得た資料だからね」

深夏「…なるほど」

ミサキ「深夏さん、これを踏まえての意見です…」

ミサキがその先を言おうとした時、深夏が口を開いた。

深夏「ミサキさん、貴女が帝国軍情報局の代表ならば構いません。国内の十師族の連中を何とか説き伏せます」

ミサキ「深夏さん、貴女」

深夏「日本国首相の桐条や内閣関係者からは、私に全権を任せられているので」

深夏は、リベールにて在リベール日本大使館にて、日本の首相である桐条と十師族の

四葉、一条、五輪、九島、十文字の当主と通信会談を行つて了承を得ている。十師族の五家が了承しているし、日本国首相の了承を得て、日本国全権を持った人物である。ミサキは

ミサキ「わかつたわ深夏さん。そこは帝国政府、オズボーン宰相にも伝えるわ。それと、これは内密にだけど、金城潤矢の搜索を合同にやらないかしら？」

深夏「金城潤矢を捕まえるための合同搜索ですか」

ミサキ「そうね。私は金城を捕まえない限りは、また再び起こると思つてるの。高校生を拉致事件はね」

深夏「……」

ミサキ「難しいのはさつきも言つたとおりなんだけど、四葉家が黙認してくれれば、帝国政府は関与しないし、日本政府に対しても拌め無くすこともできるわ」

深夏「認めるのは簡単にはいかないです。金城潤矢には、七草家や獅童一派がいます。強引にやれば、カルバード共和国派の連中がさらに勢いつきます」

ミサキ「まあ、そうなるでしょうね。日本がカルバード側につけば、帝国が東ゼムリアに置けるものが全て失われてしまうわね」

ミサキはそう言つたため息をはいた。そして髪を毛をかきあげて、愚痴を喋りだした。

ミサキ「私、いじわるな事を言ってるわね。鉄血の子供達の立場でいる私だから。遊撃士やあの人の意思を継ぐものの立場なら、深夏さんの味方になるわ」

深夏「遊撃士はわかりませんが、あの人の意思を継ぐものとは…なんでしょうか？」

深夏があの人をの意思を継ぐものとは何なのか聞こうとした時、外から爆発音が聞こえてきた。それだけではない、銃撃や車両の音も聞こえてきた。

ミサキ「ば、爆発!？」

深夏「何が起きてるの!？」

深夏はとっさに自身の目がすぐ先にの未来を見せる。つまり未来予測と危険探知が両方が働いたのだ。

日本人移民街の方から車両がパルムの町に入ってきた。車両が停まると同時に武装した連中が降りてきて、銃撃を始めたのだ。

そして会談をしていた元締めの家にも襲撃犯が突入してきた。それも突然部屋の中に現れた。

襲撃犯「ミサキ、カミジヨウ! 死ぬ!」

深夏「させないわよ!!」

深夏は制服の懐から出した緋色のCADみたいな導力銃を襲撃犯に向けて撃つ。深夏が撃った弾丸は、襲撃犯の心臓を貫いていた。赤い鮮血がその辺りに飛び散った。

深夏「大丈夫ですか、ミサキさん！」

ミサキ「大丈夫よ、さすがは四葉のエージェント：四葉深夜の娘さんね」

深夏「はあ、先程から四葉がと仰っていましたものね。私が四葉深夜の娘だと見抜いて：ミサキさんには隠しとおせませんね」

深夏は苦笑いを浮かべながらミサキを見る。

外では銃撃戦が始まっているようだ。ミサキと深夏は外に出ようとしたが、再び襲撃犯が襲ってくる。ミサキと深夏は背中合わせになり

深夏「ミサキさんやれますね？」

ミサキ「深夏さん、貴女もね」

ミサキは、持ってきていた袋から何かを取り出す。それはクロスベル製のトンファーだった。トンファーのある部分に「ミサキ・K・バニングス」と書かれていた。

このトンファーは、ガイ・バニングスがミサキへのプレゼントだったのだ。ガイは、ミサキを正式に自分の妹として受け入れるつもりで、クロスベルの役所に届けるはずだった。ガイが死んでうやむやになっていたが、セシルから渡され、その事を聞かされたのだ。

ミサキは大粒の涙を流しながらありがとうと言ったのだ。

ミサキ「もう誰も悲しませない。ミサキ・K・バニングスがさせはしない！」

深夏「えええ！」

ミサキと深夏は、襲撃犯達との戦闘になった。

——

帝国政府代表のミサキと日本国政府代表の深夏がパルムの元締めの家で会談を行っているとき、ユファイ達は宿酒場（白の小道亭）で待機していた。ユファイ、マキアス、スハルトは別々のテーブルについていた。

スハルト「まさかあの女が帝国政府代表とはな」

ユファイ「ミサキさんの事ですか？」

マキアス「ミサキさんはできる女性だからな。父さんも褒めていた」

スハルト「あの女：ミサキ・カミジヨウを敵にしたくはないな」

ユファイ「どういうことですか？」

スハルト「色々あるんだよ、色々」

スハルトはそう言うと、自分の得物の手入れをし始めた。スハルトは、ミサキと何回か戦っているのだ。依頼主が敵対関係の時に戦っただけだが。いずれの戦いも決着はしなかった。

ユファイ「ミサキさんに託さないといけないなんてもどかしいですね」

スハルト「そうだな」

マキアス「仕方がないだろう。あいつも言っていたが、僕達は学生なんだ。何かができるわけでもない」

ユファイ「確かにそうですが」

宿酒場（白の小白亭）には、パルムの人達が集まって来ている。それもそのはずだろう、陽は西に傾き夕方になっているのだから。

リイン達が逃がした女の子は、ヴァンダール流の道場の方々に保護してもらっている。ミサキが万が一の事を考えてそうしたのだ。

スハルト「マキアス、レポートはなんて書くんだ？この一連の事を書くのか？」

マキアス「ぼ、僕に聞かれても困るんだが……。そもそも書いて良いのか？」

ユファイ「わたくしは、書きますわ。洗いざらい今回の事件を」

マキアス「ユファイ君、本気で書くつもりなのかい？」

スハルト「ユファイは、真面目だな」

ユファイは、今の帝国で何か起きているのか、自分達の目で感じたこと、思ったこと、考えること……それを養うための特別実習だと考えていた。ユファイの意気込みを聞いたマキアスは

マキアス「ユファイ君が書くなら僕も書こう」

スハルト「カッコつけが。まあそうだな。ユフィが書くなら俺も書くか」

マキアス「スハルト、君もそうじゃないのか？」

スハルト「はあく俺はムツツリメガネとは違うが？」

マキアス「だ、誰がムツツリだ!!」

スハルト「すぐ怒るところがそうじゃないか！」

ユフィ「マキアスさん、スハルトさん、静かにしてください。恥ずかしいですわ」

ユフィに怒られ、ケンカをやめるマキアスとスハルト。

そんな感じで時間は過ぎていく。しかしその静寂の時間は終わりを迎える。それは日本人移民街からパルムに複数の車両が入ってくる。そしてすぐに武装した連中が銃を撃ち出す。

逃げ惑うパルムの人達。夕方から夜に変わろうとしていた時間帯の襲撃である。近くの領邦軍の詰所は襲撃され、領邦軍の兵士達は絶命していた。

夕食の準備をしていたこともあり、住宅から火の手が上がる。

そして宿酒場（白の小白亭）にも襲撃犯達が襲撃してくる。

襲撃犯1「おとなしくしろ!!」

襲撃犯2「騒ぐと撃ち殺すぞ！」

スハルト「撃ち殺せるもんなら、やってみな！」

ユファイ「何なんですか、貴方は！」

マキアス「貴方達はこんなこととして許されると思っているのか！」

襲撃犯1「許すも許さないも関係ない。主の命でこの町を襲撃しているのだからな
！」

襲撃犯2「そうだ、我々にはもう帰る場所もねえ！だったら最期に帝国と日本の間に
亀裂を入れ戦乱を起こすようにするだけだ！」

マキアス「何だって！」

スハルト「主に：主って誰だ？日本人移民街のトツプか！」

襲撃犯1「貴様らが知る必要がない！死ね！」

ユファイ「マキアスさん、スハルトさん！やるしかありませんわ！」

スハルト「それしか俺達の生きる道は無いだろうな！」

マキアス「ああ、当然だ。こうなることを見越して、みんなには2階の部屋に避難し
てもらって正解だったな」

スハルト「あれはユファイのおかげだな。これで、快き戦える！」

スハルトは己の武器を構える。ユファイも太刀を鞘から出して構える。マキアスも導
力銃を持ち構える。

ユファイ「マキアスさん、スハルトさん、無茶だけはしないでください！」

マキアス「君もな、ユファイ君！」

スハルト「わかつてるさ！」

ユファイ「トールズ士官学院特科クラスⅦ組B班、ユファイ組、これが最後の実習の課題のそう仕上げですわ！」

マキアス「了解！」

スハルト「了解!!」

ユファイ達と襲撃犯との戦闘が始まった。

——

襲撃犯達がパルムを襲撃するきっかけになった出来事があった。

それは、日本国内で、とある週刊誌にゴールド・マウンテン社が裏で武器を不正に輸出していることや日本の高校生を拉致して生体実験をしている等がすつば抜かれていた。

金城達一派から、ゴールド・マウンテン社との契約を破棄され、七草家から協力体制を破棄された。最後の頼みの綱であった獅童一派からも

明智「ゴールド・マウンテン帝国支部の支部長の山中さん、あの人も金城達や七草家のように、関係を破棄したいってさ」

山中友晴、ゴールド・マウンテン帝国支部の支部長である。これまで出世街道を歩んできたが、今回の失態でエリート人生も終わりを迎える。

山中「この私の…私だけの失態だと仰るのですか？」

明智「お前の責任じゃなくて誰の責任だといふのかい？」

山中「それは…無能の部下が研究体を逃がしたばかりに」

明智「無能って…部下を切り捨てるか…。あんたさ自分が無能だつてこと気がつかないの？」

山中「え…?」

明智「お前の工場にいろんな連中が入り込んでるみたいだけど？それにも気がつかないなんて、それを無能と言わずしてなんと言うのか」

山中は驚いて監視カメラを見る。そこには、ステイル達が侵入している映像や、誰もいない工場などが映し出されている。

山中「な、何なんだこれは…」

明智「まあ、そういうことさ。わかる、お前は誰からも見捨てられたんだよ」

山中「……」

明智「さてと僕もこれにて引き上げるとするか」

山中「ま、待って下さい！明智さん！助けて下さい！」

山中は、明智にすぐる思いで食らいつく。だが明智は山中を蹴り飛ばす。

明智「ええい、触るな!!」

山中「助けて下さい：お願いします」

明智はポケットから何かを取り出す。何かとは、グノーススである。だがクロスベルでD∴G教団の生き残りであるヨアヒムが持っていた青や赤出はない。

黒色のグノーススである。これは獅童一派がグノーススを回収して、獅童一派の研究所で作らせたものである。効果がどんなものかはわからない代物である。

明智「それが最後の土産さ。最後のね。死にたくなければ使うといいさ。残念だけどあの人も協力体制は切るみたいだからさ」

山中「こ、これは……」

山中はこれを使えばどうなるかはわかる。日本人の高校生達を使い実験をしていたのだから。明智は何も言わずに薄ら笑いをしながら去っていく。

明智が去っていくと、1つの監視カメラがパルムのとある家の画像を映し出す。それはパルムの元締めの家の中であつた。

そこには帝国代表のミサキと日本国代表の深夏が映し出された。

山中「こいつらは、ミサキ・カミジヨウと司波深夏……なんでこいつらが……。そうかこいつらが……くくくつならば……」

何かのスイッチを押す。工場自体に非常ベルが鳴り出す。

非常ベルが鳴り響く中、山中は、残存している工場の人間と雇っていた猟兵団とヤクザを使い紡績町パルムを襲撃をすることを考える。

山中「ミサキ・カミジヨウと司波深夏の首を手土産になんとか……」

山中は、残存する工場にいる者達に命令を下す。

山中「……今からパルムを襲撃する。七草も獅童も金城も私達を見捨てた。ならば最期にすることは、奴等を一人でも多く道連れにすることだ！」

最悪の事態がここに動き出した。

第1章—23—21話—燃えるパルム。②

——パルム郊外……メルカパ第漆号機周辺。

メルカパ第漆号機に日本から拉致されていた日本の高校生達25人を乗せていた。桜子とクラレットは、心配しそうに工場の方、日本人移民街の方を見ていた。

桜子「……ステイル……」

クラレット「心配ですよね」

桜子「心配だけど……今は信じるしかない。あたし達はステイルから頼まれたあの子達を守らないといけない!」

クラレット「そうですね」

桜子とクラレットがそう言つて後に日本人移民街の方から車両が複数、上空から以前ユファイ達が戦つた魔物も襲来してきた。

桜子「な、何なの!」

クラレット「大きな蝶々?」

桜子「それだけではないわ、猟兵達がやってくる!」

桜子とクラレットが戦闘体勢に入る。猟兵達は無言で桜子達を撃ってくる。桜子は

メルカパのクルーに連絡を入れる。

桜子「アクアエル、ムラマサ！ 出入口を閉めて、結界が入って!!」

アクアエル「わかりました！」

アクアエルは、ムラマサ以下クルーに通達した。メルカパ第漆号機は、出入口を閉めて、結界を張った。

桜子「結界も張ったし：後はこいつらを片付けるだけ！」

クラレット「そうですね。結界があるとはいえ長くは持たないですよ」

桜子「わかってる。だから早く片付けるだけよ!!」

桜子は銃撃をしてくる猟兵達に向かって走る。

桜子「終わりよ！」

桜子が振り下ろした木刀は、猟兵の身体を切り裂いた。切り裂かれた猟兵は、まっ二つになって倒れていった。銃撃を続ける猟兵達には、手を広げて、氷の刃を飛ばす。猟兵達の銃ごと氷の刃が猟兵達の身体を貫く。

一方のクラレットは、格闘術と己の身体を硬化させて猟兵達が乗り捨てた車両を巨大な蝶々へ向けて投げつける。

投げつけた車両がそのまま蝶々に当たり爆発する。巨大なメクジも同じようにして爆発を起こして倒していく。

しかし倒しても倒しても次から次へ、魔物や猟兵達が現れる。

桜子「何なの！倒しても倒しても、猟兵達の数が減らないわ！」

クラレット「同じく、巨大な魔物達もわんさか増えてます！」

桜子「日本人移民街にそんなにいたっけ？」

クラレット「いないと思います。おそらく自警団も来てる可能性もあります！」

桜子「自警団、日本人移民街を守る治安組織か」

桜子は、木刀を空に向けて

桜子「降り注げ！氷の槍よ！【アイススピア！】」

桜子がそう言うと、空から氷の槍が猟兵達に降り注ぐ。降り注いだ氷の槍は、猟兵達の身体を貫いていて、そのまま突き刺さって絶命している。

クラレット「流石は桜子さん。なら私も！」

クラレットは目をつむり、右手に神経を集中させる。右手に気が溜まっていく。そして

クラレット「【気功衝撃波！！】」

クラレットの放った気功による衝撃波が巨大な魔物群を粉碎していく。

しかし再び猟兵達が現れ、巨大な魔物群も現れる。

桜子「どうなってるのよ！ どんだけ獵兵達を雇ってるのよ！」

クラレット「このまま消耗戦になったら私達が不利ですよ！」

桜子「工場の方のステイルは大丈夫なのかしら？」

クラレット「もしかしたら、ステイル卿の方もこんな感じに襲われてるかも」

桜子「そうだったとしても、ステイルとあの静江という女性を信じるしかないでしょう！」

クラレット「愚問でしたね。また獵兵達と大型魔物がやってきます！」

桜子「本当にきりが無い。どうすれば……」

桜子がいろんな策を考える。能力を暴走させて倒す方法もある。でもそれは己の命と引き換えの能力。そんなことをすれば、悲しむのはステイルだ。ステイルは、一度心が壊れるほどの傷を負った。桜子はそれを一番知っている。だからステイルに再び傷をえぐるようなことはしない。

だが今はどんな状況は悪化していくばかりだ。桜子はクラレットも同じような事を考えてると思った。クラレットも桜子も見て、何をしようとしているのか手に取るように分かるのだ。だからこそ

クラレット「桜子さん、貴女はステイル卿の事をお願いしますね」

桜子「クラレット、まさか貴女！」

クラレット「私の能力を暴走させて…何とかして見せます!」

桜子「クラレット、やめなさい!」

クラレット「…」

クラレットは己の身体を極限まで硬化させようとした時、上空に3つの光線が通り過ぎていき、近くで大爆発を起こした。

桜子「…!!?!えっ!?!」

クラレット「い、今のは…? 猟兵達や大型魔物が消えた…?」

桜子とクラレットはキョロキョロとしている。当たり前だろう、猟兵達と大型魔物が突然消えたのだ。そして足音が聞こえる。桜子とクラレットは足音のする方を見ている。

だんだんと姿が見えてくる。黒髪で、目がちよつと死んだような感じで緑の服装である。それは桜子もクラレットも知っている。副長の正騎士であるハチマン・ヒキガヤである。ハチマンは、副長トマスに頼まれて、パルムの方へやって来た。ステイルと通信していたのも実はセントアークからしていたのだ。だからこんなに早くこれなのだ。

???「お前ら、簡単に自爆とか言うなよ。ステイルが悲しむだろう」

桜子「…!!?!ハチマン!」

クラレット「ハチマンさんどうして?」

ハチマン「まあ色々な。お前達が戦ったのは、幻…幻術だな」
クラレット「さっきの3つの光線って！」

ハチマン「ああ、この辺りに変な幻術を作り出す兵器があったからぶち抜いただけだ」

桜子「あんたの十八番で雷撃…それもさっきのは、超電磁砲（レールガン）」

クラレット「…戦車や軍用挺とかも一撃で撃破できるといふ…」

ハチマン「ふっ、これでも魔女狩りの王のステイルが上だ」

桜子「あんたも雷神ハチマンって二つ名があるでしょうに。ステイルはあんたが強いって言ってたわ」

ハチマン「よせ、あいつが強い。…やはり、本物達が現れたな…」

ハチマンが言ったとおりに、猟兵達と大型魔物が現れる。先程とは違い生気を感じるようだ。

猟兵1「くそっ！まさか幻術が見破られるとは」

猟兵2「見破られたのなら、直接手を下すしかあるまい！」

ヤクザ1「主…支部長の命だ、やるしかないぞ！」

ヤクザ2「わかってます！」

ヤクザ3「若、やってやりましょう！こいつらの首を手土産に日本に帰りましょう！」

桜子「本当が出てきたのなら、こつちも相手になつてやるわ」

桜子は、能力を解放した。彼女の木刀が氷に包まれていく。木刀が氷刀に変わる。クラレットも能力解放し、身体全体が硬化させる。

ハチマンも能力解放をする。すると周りがバチバチとし始める。右手に雷の刃が作り出される。

ハチマン「俺は大変機嫌が悪い。手加減なんかするつもりはない」

桜子、クラレット、ハチマンと猟兵達と大型魔物達の戦闘がきつて下ろされた。

——パルム郊外—中型挺アリストテレス周辺

やはりパルムに襲撃してきた連中や、桜子達を襲撃してきた連中と同じ連中が、カズヤ・アレイスターやマユミ・アレイスターにも襲撃してきた。

カズヤは、緋色の銃と銀色のCADを両方を持ち、猟兵達や巨大な魔物達に向けて撃っている。マユミも同じように緋色の銃と銀色の銃を持ち、猟兵達と大型の魔物に向けて撃っている。カズヤとマユミが撃った弾丸は、猟兵達、巨大な魔物の急所を撃ち抜いているから、そのまま絶命している。

猟兵だけではなく、日本人移民街の自警団まで来ている。自警団は、ラインフォルト社製の戦車や日本のFLT社の戦車まで持ち出している。

カズヤ「マユミ、嫌だろうけど、君は大型の魔物を頼む！」

マユミ「大きな蝶々やともかく大きなナメクジはちよつと…」

カズヤ「後でご褒美をプレゼントするから頼む！」

マユミ「プレゼント！別にそんなつもりで言ったわけじゃないけど…」

カズヤ「マユミに日頃の感謝を込めてさ」

マユミ「カズヤさん…」

カズヤとマユミのイチャイチャぶりを見た猟兵達やヤクザ達はキレ気味でカズヤに向けて銃撃を開始する。

カズヤ「無駄な事を…」

カズヤは、緋色の銃を空に投げると、銀色のCADを起動する。起動した銀色のCADは、猟兵達の銃、車両、戦車を一瞬にして分解された。分解、これは友である司波達也の能力である。彼の目は、第3の眼（神々の眼）という不思議な目であり、相手が使った魔法、魔術、能力、技なども自分のモノにできるのだ。ただ危険探知、未来予測だけではないのだ。

カズヤは分解したところに、

カズヤ「フレームプレス」

カズヤの片手からドラゴンの吐いた炎の如く分解された車両、戦車はあつという間に溶けてなくなった。フレームプレスが終わったと同時に空に投げていた緋色の銃がカ

ズヤの手に収まる。

カズヤ「ライジンクシヨット！」

雷が弾丸の弾になったように、高速に発射される。猟兵達やヤクザ達を次々とぶち抜いていく。

雷の弾丸が身体を貫通しても死んではない。ただ雷でシヨックを与えて気絶させてるだけ。初めからカズヤ達は殺すつもりはない。こいつらを生け捕りにするようにとある人物に依頼されたのだ。

それは帝国宰相ギリアス・オズボーンと四葉家当主四葉深夜の2人である。

オズボーンや深夜に何か考えがあるのは、カズヤはわかっている。自分達は、遊撃士がやらない裏の仕事もやる。請け負った依頼は、必ずこなすがモットーである。それがカズヤとマユミが決意してやり出したことだから。

マユミも大型魔物を自分の十八番の魔弾の射手で片付けている。

カズヤ「マユミ、大丈夫か！」

マユミ「大丈夫よ！」

カズヤ達に猟兵達と大型魔物が倒された後、すぐに再び現れる。

カズヤ「しつこい連中だな」

マユミ「ええ、しつこいわね」

マユミは、緋色の銃を猟兵達へ向ける。すると無数のドライアイスの塊が弾丸となつて、猟兵達、巨大な魔物が貫かれていく。カズヤは、連中が乗つてきた車両を徹底的に分解していく。

そして幻術を生み出している兵器に向かつて

カズヤ「そんなものが俺達に通用するとも思つてるのか!!」

カズヤは、緋色の銃と銀色のCADを兵器のある方に向ける。

カズヤ「サン・フオール!!」

幻術を生み出す兵器とそこにいる猟兵達やヤクザ達に対して、夕陽が突然として牙を向く。夕陽の光が燦々と兵器と猟兵やヤクザ達の頭上から降り注ぐ。

兵器はみるみる内に夕陽の光線を浴びて溶けていく。それは人間として例外ではない。猟兵達もヤクザ達も悲鳴をあげながら溶けていく。

カズヤ「生け捕りにするのは：1人でいいだろう。なあ、マユミ?」
マユミ「ええ、カズヤさんに任せますわ」

カズヤとマユミがそう言つてるのは、訳がある。兵器群と一緒に死んだと思われた猟兵の1人が、2人の側で倒れているのだ。カズヤが、サン・フオールで溶けそうになつた時に1人の猟兵だけ、座標移動(ムーブポイント)で回収したのだ。

カズヤ「まずは、こいつが抵抗できないようにしないとな」

カズヤは指をパチンとならすと、炎のヒモみたいなのが、猟兵を縛る。

カズヤ「いっちょあがり」と

マユミ「お疲れ様、カズヤさん」

カズヤ「ありがとう。だが、マユミまだ終わってない」

マユミ「ええ、わかってるわ」

カズヤとマユミは、煙が上がるパルムの方を見ている。

カズヤ「やはりこいつらの本当の狙いは、パルム……」

マユミ「パルムでは深夏さんが！」

カズヤ「わかつてる」

カズヤは、アリストテレスのクルーの1人を呼び出して説明をする。

クルーガー「わかりました。社長も副社長もお気をつけて。この猟兵は、責任を持つ

て管理致しますので」

カズヤ「ああ！」

マユミ「クルーガーさん、私達の留守中、アリストテレスをお願いします」

クルーガー「社長と副社長の留守中、アリストテレスは自分が命をかけてお守りしま

す！」

カズヤ「ヤバくなったら、逃げろ！いいな！」

クルーガー「はい！」
カズヤとマユミは、そう言うと。パルムの町の方へ走り出した。

第1章—24—22話—導かれる者達、パルム決戦。

——紡績町パルム

パルムの町は、日本人移民街から襲撃してきた連中のせいで燃えている。

パルム襲撃の報は、セントアークのハイアームズ公爵家にも入り、二男のフレリック卿が領邦軍を率いてパルムに向かってくることになっていて、クロードは、鉄道憲兵隊を率いて日本人移民街へ侵攻を開始していた。

タイタス門の帝国正規軍も日本人移民街とパルムに部隊を向かわせていた。

そんな中、パルムの町を必死で守っている若者がいた。それを目撃しているとある新聞記者である。パルムの町にプライベートで来ているだけだったが、スクープだと思いかメラを回している。

ユフィ、マキアス、スハルトの3人。この3人は、トールズ士官学院の生徒達である。それも今年出来たばかりの特科クラスVII組。その真紅の制服を着た生徒達がパルムの町を必死に守っている姿をかメラにおさめた。後々にユフィ達は各世界の新聞紙を騒がせることになる。

スハルト「ユファイ、マキアス！大丈夫か？」

ユファイ「ええ、大丈夫ですわ」

マキアス「僕もだ！だが…僕の弾薬がつきそうだ」

スハルト「無茶はするな、マキアス！」

ユファイ「マキアスさん、後は私達に…！」

ユファイがそう言ったと同時に何か上からやって来て、3人は吹き飛ばされた。砂埃が回りを覆う。

スハルト「くそつ、なんだ？ユファイ、マキアス！大丈夫か？」

マキアス「ぼ、僕は大丈夫だが…ユファイ君？ユファイ君、返事をしたまえ！」

ユファイの返事はない。マキアスとスハルトは、不安に思いユファイと何回も呼ぶ。すると砂埃が取れてきたのと同時に、薄気味の悪い笑い声が聞こえる。それはゴールド・マウンテン帝国支部の支部長の山中である。山中はグノーシスを使い悪魔へと堕ちていた。悪魔と化した山中は、その右腕で、ユファイの身体を掴んでいた。ユファイは先程の衝撃で気絶していた。

山中「クククツアハハ…！私は絶対的な力を手に入れた…。この娘…中々の力を感じるな…！」

マキアス「ユファイ君!!なんだ！お前は！ユファイ君を離せ！」

スハルト「そんな穢れた身体でユフィを触ってんじやねーぞ！」

マキアスとスハルトは、ユフィを救い出すべく動こうとしたが

山中「おつと動くなよ……！ 動けば……この娘の身体を引き裂くからな」

マキアス「ひ、卑怯者め！」

スハルト「くそっ……」

山中「……そう動くなよ……グフフフツ」

山中は、マキアスとスハルトを睨み付けながら、ユフィの身体を堪能している。マキアスのボルテージは、徐々に上がっていく。

山中「クククツ、帝国の女は、日本の女と違い……成長が早いものだな」

山中は薄気味悪い表情で、ユフィの胸を鷲掴みしている。まだ誰も触れたこともないユフィ胸を惜しみもなく触っている。マキアスのボルテージ……怒りのゲージはすでにMAXに届いている。

マキアス「いい加減にしろよ……お前！」

スハルト「マキアス？」

山中「なんだ、お前？ そんなに私がこの女の胸を触ってから、怒ってるのか？ ならよ……この女の生乳を堪能させてやるからよ……それでも見てな！」

山中はユフィの制服を真正面から引き裂いた。引き裂いた事で、白の薔薇模様のブラ

が丸見えになった。

山中「白の薔薇模様のブラか：今度は、下に行くか：下も同じか！」

山中がユフィのスカートを引き裂こうとしたら、突然山中の両腕が消えた。山中は苦しみや痛さが頭の中を走る。わめきだした。そして山中の両腕が無くなったことで、ユフィは空中から地面に落ちることに。慌てて落ちてくるユフィをマキアスは抱き抱えた。

ミサキ「ナイスキャッチよ、マキアス君！」

深夏「本当にあの男性がキャッチしましたね」

ミサキ「私の言ったとおりになるって言ったでしょ」

マキアスは自分の上着を脱いでユフィに着せた。普段ならユフィの白い薔薇模様のブラを近くで見たりしたら、鼻血を出さだろうが今は怒りでそれどこではない。ユフィが目が覚めたようで

ユフィ「ま、マキアスさん？」

マキアス「ユフィ君、目が覚めたか：」

スハルト「大丈夫か、ユフィ？」

ユフィ「わたくしは別に：なんとも：!?」

ユフィは、マキアスの上着を着ているのか、しばらく時間がかかったが、すぐに自分

自身がどうなってるのか理解した。ユフィの顔が真っ赤になりながら、落としていた緋い太刀を手を持つ。

マキアス「ユフィ君、大丈夫なのか？」

ユフィ「大丈夫ですよ、マキアスさん。ダメージは無いですから」

ミサキと深夏は、山中を挟むようになっていた。山中は両手が無くなりわめいていたが、すぐに両腕が再生する。

深夏「やはりただのグノーシスじゃないわね？」

山中「当たり前だ！D∴G教団が開発したものの改良版だからな！」

山中は深夏やミサキに自身の腕を振りかざした。しかし深夏やミサキには避けられてしまい、体勢を整えたミサキからは脳天に踵落としを食らう。

深夏「隙だらけね！」

深夏は緋色の銃で何回も山中に攻撃する。弾丸が当たった場所から紫色の血液が流れている。

ミサキ「……ゲスが……！」

ミサキは、弾丸を浴びて傷が開いた場所に衝撃波を放つ。山中は、真後ろに吹っ飛んだ。
だ。

深夏「ミサキさん……」

ミサキ「ごめん、みんな。私、グノーシスや教団のことになると…」

ユフィ「ミサキさん、1人で抱え込まないで。わたくし達もいますわ!」

深夏「グノーシスやD∴G教団のことは、私も許せませんね。だからミサキさん、1人で抱え込まないで下さい」

マキアス「僕達も手伝います!」

スハルト「まあ…俺が言えた柄では無いが、あまり1人で抱え込むな」

ミサキ「みんな…。ありがとう!」

山中「ぶざけるな!お前ら人間ごときが…力を手に入れた私に勝てると思ってるのか!」

ユフィ達は山中の攻撃に備え防御体勢を取る。山中は、両腕を広げて攻撃をしようとする。だが弾丸の音と四方八方からのドライアイスの攻撃を受ける。

カズヤ「悪い、待たせたな、深夏!」

マユミ「私達も外で襲撃を受けたから遅れちゃった」

深夏「やはりそうでしたか」

スハルトは、カズヤとマユミの姿を見て驚く。

スハルト「……!!!エルフィン・スナイパーのカズヤ・アレイスターとマユミ・アレイ

スター!」

カズヤ「スハルト・オルランド…か。久しいな…」

マユミ「風の噂で聞いてはいたけど、スハルト君、貴方、学院に通うようになったのね」

スハルト「まあな。それが…」

スハルトはぶつぶつと言っているが、ユフィとマキアスには聞こえない。ミサキと深夏には聞こえているが、彼女達がそれを言うはずもない。

スハルト「だが、エルフィン・スナイパーのあんた達が来てくれたのなら、100人力だ」

カズヤ「100人力かどうかはわからないが、受けた依頼は必ずこなすのが、エルフィン・スナイパーのモットーだからな！」

カズヤは、緋色の銃と銀色のCADを構える。

マユミ「そうね、それが私達の生き甲斐だもの。貴女もそうでしょ？ ガイさんの意思を継いだ、ミサキ・カミ、ジョウさん？」

マユミはそう言つて、緋色の銃と銀色のCADを構える。

ミサキ「マユミさん…貴女…ガイさんを知っているの？」

カズヤ「知ってるものにも、ガイさんと何度が一緒に仕事をやってな。その時に自分には、可愛い弟と可愛い妹と綺麗で優しい婚約者がいるって話してくれたから。可愛い

弟は、クロスベルで会ったし、またまた一緒に依頼をこなしたかな。彼もまたガイさんの意思を継いでる」

ミサキ「(だからか…あのときロイドが言っていた人達って、こっちのカズヤさんか…。私はてつきりステイル(和也)君の方と思ってたけど)」

ミサキは小声でそう言った。

カズヤ「…ミサキさん、貴女もガイさんの意思を継いでるように見える。そのトンファーが何よりも…」

ミサキ「それ以上は言わないで下さい。それ以上言われると、涙が…」

カズヤ「ラリクマ…777…その涙を力に変えて！」

「ラリクマ777…その涙を力に変えて」とは、カズヤの魔法名。禁書世界で得た魔法名。

するとユフィ達の身体から何やら燃え上がる力が湧いてくる。

ユフィ「この感じは」

マキアス「何だか力が湧いてくる感じだ」

スハルト「そうか…これがあんたの」

ミサキ「………ガイさん…」

深夏「(やはり私と同じ…この力…)」

山中「貴様ら、この私を無視をするな!!」

山中は、両手を天に上げ、そこに何やらのエネルギーを溜めて

カズヤ「あの野郎!みんな俺の回りに集まれ!」

カズヤは防御魔法を発動させる。山中も何かエネルギーを放とうとするが、正反対の方から、超電磁砲(レールガン)と原子崩し(メルトダウン)が悪魔の姿の山中の身体を貫いていた。

山中「ぐはあ…!!今度はなんだ!」

一同がそちらを向くと、リイン達がそこにいた。リイン達はすでに臨戦態勢に入っている。

エマ「リインさん!」

リイン「任せろ、疾風!!」

エマの導力魔法の援護とリインの攻撃により、山中の体勢が崩れ出した。

静江「ユーシス君、その剣でヤツの身体は斬れるわ!」

ユーシス「ふっ…!!」

ユーシスの剣は、静江の原子崩し(メルトダウン)の力を得て、ビームの剣のようになつており、悪魔の身体になつていようが関係なく横に切り裂かれた。

山中「ぐはあ…!!」

山中は口と切り裂かれた腹から血を流し始めた。

山中「おのれ……!!」

エイト「やめておけ……それ以上何かやれば、お前死ぬぞ？」

山中は突然自分の肩に仮面を着けた人間が乗ってるのだから驚いた。

山中「俺はまだ終わらんぞ……!」

エイト「はあくそうかい……なら仕方がないな……この憐れな者にエイドスの裁きの一撃を……神の雷（エイドスの怒り）を！」

エイトがそう言った瞬間、一瞬雷がなつたと思つたら、悪魔の身体になつた山中の身体が焼かれた。エイトはスタイルの方に行き

エイト「スタイル！あいつの再生する力は削いだ。後は全員でやれば楽に勝てるだろう！」

スタイル「わかった。お前も事後処理が大変だな」

エイト「ああ、大変だ。わかったなら言わないでくれよ。じゃあ俺は行くわ」

エイトはそう言つてどこかへ消えた。ただ、カズヤ、マユミ、深夏、静江には消えた後も見えていた。スタイルはカズヤ達に

スタイル「最後はみんなでやりましょう！そちらの方々もよろしいでしょうか？」

カズヤ「ああ、俺達は構わないよ」

深夏「私は、構いませんよ」

ステイル「トールズ士官学院の君達も構わないかい？」

ユファイ「はい、構いませんわ」

ステイル「ミサキさんも構いませんよね？」

ミサキ「私も構わないわ」

山中「…再生能力を失つても…私は…！」

山中が最後の力を振り絞り戦いを挑んで来た。

ステイル「みんな、行くぞ！」

カズヤ「だが無理はするなよ」

ユファイ「みなさんの力を合わせれば、必ず勝てますわ！」

ミサキ「そうね、今の私は強いから！」

深夏「色々と仕事は増えたけど、まあ私は身体を動かす事が好きだし、やってあげますわ」

ユファイ達は山中との最後の戦いが始まった。

——紡績町。パルムにて。

ユファイ達と山中との戦いが切って落とされた。

ユファイ達、トールズ特科クラスVII組、カズヤとマユミのエルフィン・スナイパーのコンビ、ミサキと深夏のコンビ。そしてステイルと静江のコンビである。

それぞれの特色を生かしての戦い方をしている。

山中「ごさかしい連中だ！ならばこれならどうだ！」

山中はそう言うのと、分身の術みたいなのを使う。悪魔型山中が、3体になった。カズヤが

カズヤ「ヤツが分身したとなると、3チームに分かれて戦おう！」

ステイル「それしかないですね」

ユファイ「わかりましたわ」

ステイル「チーム分けは、トールズ士官学院のみんなと俺と静江さんとミサキさん、そちらの2人とえーと……」

深夏「司波深夏ですわ、ステイルさん」

ステイル「司波さんね、司波さんは、あっちの2人の方に加勢して下さい」

ユファイ達、ステイルと静江、ミサキ、カズヤとマユミと深夏に分かれて戦うことになった。

——南サザラント街道の外れ。

ユフィ達やカズヤ達と離れて、ステイル、静江、ミサキは、悪魔の身体して焼かれた匂いがする山中と対峙する。

山中「分かれて戦うとは甘い連中だな！」

ステイル「再生能力の無いお前なんぞ相手にもなるかよ！」

静江「そうね」

ミサキ「ステイル君と日本の七草家のエージエントさんと一緒に戦えるなんてね」

ステイル「俺はともかく、静江さんの素性までわかってらっしゃるんですね…ミサキさんは」

ミサキ「まあね、私は帝国軍情報局は人間よ。これぐらいは知ってて当たり前」

静江「そんなことをしゃべっても良いんですか？私は七草家のエージエントですよ？」

ミサキ「別に構わないわよ、貴女からは、嫌な感じのオーラは感じないし。それに別の思惑で動いているんでしょ？」

静江はビックリしていた。初対面のミサキにそこまで見抜かれてしまったからだ。別に隠すほどではないが、敵に回すと厄介な人物になるなど静江は思った。

静江「まあ、そういうことにおきましようか」

山中「ごちやごちやとうるさい連中だ！」

ミサキ「ごちやごちやとうるさいのは貴方の方よ！」

硬化魔法で固くなったトンファーで、悪魔山中の脚を攻撃する。脚と言っても膝の部分を攻撃する。

山中「ぐおつ…！小賢しい真似をする！」

山中はミサキを掴み取ろうとして、右腕を伸ばしてくる。だが

ステイル「八葉…：忒の型裏疾風!!」

裏疾風を食らい、山中は体勢を崩し地面に倒れ込む。すかさず静江が跳躍でジャンプする。

静江「私のこれはあまり他人には見せたくはないのよね」

静江はそう言いながらも、原子崩し（メルトダウナー）を山中に撃ち込む。撃たれてもがき苦しむ山中。ミサキも跳躍で空へジャンプしてから、山中の腹に重い一撃を入れる。山中の口からどす黒い血が流れ出す。

ステイル「もういいかい？最後に俺が決める！」

ステイルは、指をパチンとならす。すると山中に向かって炎の刃の雨が降り注ぐ。

山中「ぐあつ!!!」

雄叫びを上げながら山中は消えていく。どうやら分身だったようだ。

ステイル「消えたか…」

静江「さっきのヤツは消えなかったけど、ステイル君…山中は何故消えたの？」

ミサキ「分身…私達が戦った山中は、本体ではなく、分身だったってことかしら？」

ステイル「そうなりますね。本体はリイン達の方か、あちらの方か…」

ステイルはリイン達の方とカズヤの方を見てそう思った。

——パルム近郊の森

カズヤとマユミと深夏は、山中と死闘を繰り広げていた。

カズヤ「なんだ、もう終わりか？」

山中「こ、小賢しい連中め！それでも喰らえ！」

山中は、そこらの木々を根こそぎ抜いてそれをブンブンと振り回す。カズヤ、マユミ、

深夏もそれぞれに避ける。

山中「どうした？逃げてばかりじゃつまないだろ！」

山中は、振り回していた根こそぎ抜いた大木を深夏の方へ投げ飛ばした。

山中「さあどうする？お嬢ちゃん？」

深夏「どうもしいわ」

深夏は、飛んできた大木を右手で簡単に受け止めていた。

山中「な、何？何だそれは…！」

深夏「ふっ…私の生まれ持った能力…ううん…前世のアイツから授かった力よ!!」

深夏が受け止めていた大木は、山中に勢いよく激突しそのまま貫通する。

山中「ぐはっ…なんだ…さっきの力は…」

深夏「貴方が知る必要はないわ！分身さん！」

深夏は懐から緋色の銃を取り出して、山中に弾丸を撃ち込む。山中は絶叫して消えていく。

深夏「こんなものね…」

カズヤ「お疲れさん」

マユミ「お疲れ様、深夏さん」

深夏「どうやら、私達やミサキさんの方は違ったみたいだから、トールズの学生さん達の方が本物かな」

カズヤ「そうみたいだな…」

マユミ「助けに行くの？」

カズヤ「いや、彼らならやるだろう。そんな気がする」

深夏「私もそう思います」

カズヤ、マユミ、深夏は、ユファイ達の健闘を祈った。

「……パルムの街の中で。」

ユファイ達は、Ⅶ組B班総出で悪魔になった山中と対峙している。

エマの導力魔法、マキアスの導力銃の援護射撃をやりスハルトは遊撃に撤しユファイ、リイン、ユーシスは、2人、1人に分かれて、悪魔の身体の山中と戦う。

山中「お前らのせいで、全てが終わりを迎えた……。許さないお前達を……！」

スハルト「どういう許さないんだ？」

山中「お前達が来なければ、こんな事には……！」

山中は両手を振りかざして、ユファイ達に対して振り下ろす。ユファイ達は全員避ける。

スハルト「足下がおろそかだぜ！」

スハルトは、悪魔の身体の山中の両膝を攻撃した。山中は痛みで絶叫を上げた。だが山中は即座にスハルトに対して蹴りを入れる。スハルトは間一髪に避ける。

ユーシス「リイン、そっちを頼む！」

リイン「わかった！」

原子崩し（メルトダウナー）の効果を得た剣を山中に振り下ろす。山中は左腕を斬り落とされる。

山中「ぐはっ!!このくそガキどもが！」

山中が右手から何かを放ってくる。それは闇の波動、食らえばただでは済まない。ユイ達は真横に避ける。闇の波動が衝突した木々は簡単に薙ぎ倒され、そして枯れていった。土は痩せて木々を枯らしていく。

ユフィ「な、なんなんですのアレは!?!」

スハルト「木々を枯らす…攻撃だ?!」

エマ「みなさん、気をつけて下さい。アレは、*“闇の波動”* というもののようなです!」
マキアス「闇の波動、調べたんだな、エマ君!」

リイン「でもどうする?アレを何発も放たれては、こちらは防戦一方にしかならない」
ユーシス「なら、あの闇の波動さえ何とか出来れば、勝機があるのだな?」

ユフィ「近くに行けば、八葉の一撃を入れられますわ」

リイン「そうだな」

マキアス「そうか。なら僕は援護射撃で協力する!」

エマ「私も援護射撃は任せて下さい」

ユーシス「俺も最大限に協力させてもらおう!」

スハルト「俺もちよつとはやるとするか…」

山中「小賢しい真似を…!」

スハルトは、合体させている得物を分解し2丁銃に変化させる。

スハルト「いいか！ちよつと俺は本気を出す。ちゃんと目に焼き付けろ！」

スハルト跳躍して山中の背後に回る。山中は直ぐに背後を向くが、そこにはスハルトはいない。

スハルト「どこを見ているんだ？俺は真正面だぜ？」

山中「な、何!？」

スハルト「気づいても遅い！目だけで俺を捉えきれるかよ!!」

スハルトは、高速に動き山中を切り裂いている。山中を空中に吹き飛ばして

スハルト「冥土の世界へ消えな！エアロクロス!!」

スハルトの放ったスクラフト、エアロクロス。風の刃が十字のように切り裂く。

山中「ぐおお……!!」

スハルトのスクラフトを受けて、地面に叩きつけられる、山中。山中の腹の部分には十字の傷が刻まれていた。すかさずユーシスが掛ける。ユーシスの特殊スクラフトが炸裂する。

ユーシス「ふつ、これで終わりだ！クリスタル・メルトダウンーセイバー！」

ユーシスの特殊スクラフトで、悪魔の身体の山中の両足が切断された。

体勢が崩れたところにラインが駆け出す。

リイン「蒼き炎よ！我が剣に集え！はあ！！斬！！」

リインのSクラフトである、蒼焰ノ太刀をまともに喰らう山中。身体中が炎に包まれていく。リインからバトンを渡されたユファイは、一人で駆け出す。

ユファイ「八葉一刀流、弐の型、裏疾風焰！！」

ユファイの奥義が決まり、悪魔の身体の中は、動きが止まる。ただパチパチと炎が音を立てている。

ユファイ「ゆつくりとお眠りなさい」

ユファイが太刀を鞘にしまう音と共に悪魔の身体の中はそのまま崩れ落ちた。

ユファイ達が山中を倒したのは、すでに日付けが変わる頃である。

ここにパルムの騒乱は静かに終わるのだった。

第1章—25—23話—全て終わったあとで。

—1—1204・4・25↓4・26

パルムの騒乱は、ユフイ達、ミサキ、深夏、ステイル達やハチマン、カズヤとマユミによつて鎮圧された。

日本人移民街は、鉄道憲兵隊と領邦軍によつて占領された。正規軍も駆けつけたが、ミサキの提案によつてパルムの周りの巡回を命じた。

日本人移民街のトップは、今回の事件を黙認していたようで、鉄道憲兵隊が拘束した。パルムの損害は、結構被害を出してしまつたが、住民から死亡者が出なかつた。住民達は、先のリベールとの戦争の時に地下のシェルターを作つていたため、万が一の時は地下に避難する訓練をしてるようだ。

パルムの人間は、どの帝国の地域よりも戦争の悲惨さを知っている。だから今回の事件の日本人移民街が起こした事件もあそこで暮らしている日本人の方々が差別されるのではないかと心配している。

深夏が日本国代表として、パルムの街の方々に謝罪し、日本国からの復興支援をすることをその場で決めた。

ミサキも帝国政府代表として謝罪し、帝国政府からの復興支援をすることを決めた。後々にフレデリック卿もハイアームズ候爵家として、パルム支援を行うことになる。

だがこれが、この事件がサザーラント州内の貴族派の勢いをつけることになる。

ユファイ達は、山中を倒した後、鉄道憲兵隊や領邦軍からの取り調べがあり、そこで色々と説明していた。取り調べが終わったのは、日付けが変わり、朝を迎える頃であった。ユファイ達は、この日の朝にパルム駅を出発しなければ、その日の夜にトリスタに到着できない。学院が用意しているのは、今日の朝のキップ予約であり、爆睡中のユファイ達は気づくはずもなかった。

今回の件は、トールズ士官学院にも報告は入っており、何でも屋「エルフィン・スナイパー」がユファイ達をトリスタ近郊まで送る手配になった。どうやらケルディックに行っているA班達也達も面倒事が起こり、鉄道憲兵隊が出ることになったようだ。

ステイル達は、帝国政府、日本政府、教会の了承を得た後、拉致された日本人を連れて日本を訪れることになっている。静江もステイル達と帰ることに。おそらく真由美に報告するためだろう。深夏も留学先のリベールに帰国するのではなく、母国の日本へ一時帰国するようだ。深夏もミサキから情報提供されたものを日本政府や四葉家に報告があるのだろう。

ミサキも今後のために、ステイル達と日本へ行くことにした。やはりゴールド・マウ

ンテン社や日本人移民街のことについて、話し合いが秘密裏に決定されたのだ。そのためにカズヤ達が拘束した猟兵を回収したのだろう。

ハチマンは、すぐにトールズ士官学院に帰り、トマスに報告した。ゴールド・マウンテン帝国支部が持っていた幻影のアーティファクトを回収したこと、パルムの礼拝堂の教会関係者にも事情を説明をしたことも報告して、いつもの日常に戻る事にした。

だがそんな日常は、ハチマンには訪れない。

11204・4・26・夕方ーサザーラント州上空。中型挺アリストテレス内。

昼過ぎに起きたユファイ達は、慌てて帰る準備などをしていた。彼女達は列車で帰るつもりでいたからである。カズヤはユファイ達に学院から自分のところに依頼があったことを説明した。

何でも屋「エルフィン・スナイパー」だと。

スハルトは、カズヤ達の事を知っていたようだ。ユファイ達も色々聞きたかったが、疲れてそんなことは聞けなかった。そしてしばらく空の旅を楽しむ事にした。

ラインもユーシス、スハルト、エマも疲れて座席で寝ている。ユファイは座席から立ち上がって外を見る。夕陽に雲が照らされて、綺麗に見える。それを見たマキアスが

マキアス「ユファイ君は眠れないのかい？」

ユファイ「マキアスさん、わたくしはたつぷりと寝ましたから。マキアスさんはよろし

いんですの？」

マキアス「僕はもう大丈夫さ。その：ユファイ君は身体の方は大丈夫なのか？」

マキアスは、ユファイが身体が心配しているのだ。仮にも悪魔の身体の山中に捕まってしまい、制服を破れたのだから。それだけではない、山中はユファイの胸を鷲掴みしたのだ。そのことは許せなかった。自分自身の不甲斐なさを知ってしまった。リン、ユースやスハルトより、力がないことを痛感してしまった。

マキアス「本当に済まない。君が山中に捕まった時、何もできなかった：」

ユファイ「……マキアスさん：」

マキアス「ぼ、僕は：スハルトやリン、あいつは：やれたのに僕は：」

ユファイ「マキアスさん：ありがとうございますわ。貴方は、わたくしが捕まった時、怒ってくれたのでしょ？」

マキアス「……」

ユファイ「マキアスさん、貴方には貴方の役目があるはずです。それも貴方にしか出来ないことが……。今は分からなくても、必ず答えが分かる 때가 来ますわ：だから：」

マキアス「ぼ、僕にしか出来ないことがある：か」

マキアスはその言つて外を見る。そしてユファイに頭を撫でられた。それとユファイはユファイ「それとマキアスさん、制服の上着、ありがとうございました。制服の上着は

必ず洗って返すので」

マキアス「あれ？制服の方はもう直ったか？」

ユフィは、破かれたブラウスと制服の上着は破られが、カズヤの再成により、ブラウスと上着は復活した。だがカズヤに口止めされているから、詳しくは喋らなかつた。

ユフィ「ええ、エルフィン・スナイパーのカズヤさんに直してもらいましたわ」

マキアス「そうなのか。あの人は何でもできるのか…」

ユフィ「そうみたいですわ」

マキアスは、夕陽で照らされるユフィを見て、心が落ち着かなかつた。ユフィはそんなマキアスを見てニコニコと笑っていた。

そんな姿をカズヤとマユミは、微笑ましく見守っている。スハルトとリインは、温かく見守ることにしていた。ユーシスは、何も気にせず、エマは、ユフィ達に気がつかれないように、密かにカズヤ達と会話していた。

カズヤ「久しいね、エマ」

エマ「ええ、約1年半ぶりですか」

マユミ「ごめんなさいね、エマさん」

カズヤ「みんなの前では話しくかつたからな…」

カズヤとマユミとエマは、以前からの知り合いである。カズヤ達はエマの故郷の長と

知り合いであり、その長はカズヤの師匠でもあるのだ。

カズヤ「今はゆつくりと話してる時間は無いな。時間がゆつくり出来た時、話そうか」
エマ「ええ、それが良いと思います」

マユミ「学院生活、頑張つてね」

エマ「はい」

中型挺アリストテレスは、サザラント州からクロイツエン州に入った。帝都近郊都市トリスタは、すぐそこである。エマは、みんなのところへ戻った。

パルムで起きた事は、これから帝国で起きる事的一幕でしかない。

ユファイ達、ツールズ士官学院VII組。

ステイル達、何でも屋「ラリクマ」。

カズヤとマユミの何でも屋「エルフィン・スナイパー」。

ミサキ・K・カミジヨウと司波深夏。

日本の心の怪盗団「ウロボロス」

それらが互いに運命という線に絡み付いて行く。

物語は、少しずつ歩み出していく。

第1章ー初めての特別実習編ー闇は動き出す編
第2章ー白亜の旧都編ー騒乱の足音編

完

第2章―白亜の旧都編く騒乱の足音編く

第2章―白亜の旧都編―26―1話―5・04↓5・05

↓5・22―いろいろな出来事。

―第2章―白亜の旧都編く騒乱の足音編く

―1204・5・04―東ゼムリア海上空―

―日本護送挺〔暁〕

日本のFLT社が作った高速護送挺である。今では政府専用挺としても活躍している挺である。

しかし今は、政府要人や外国の要人が乗っているわけではない。

ゴールド・マウンテン帝国支部の人間が乗せられている。

彼らは、帝国の南部の都市パルムで、騒乱の罪、高校生の集団拉致、殺害、武器の不正密輸などの罪で逮捕され、帝国で取り調べられた後、日本へ強制連行され、日本にて再び逮捕されることになっている。

このニュースは、世界を駆け巡った。だが日本ではほとんど報道されていない。

日本の首相の桐条は、帝国に対して公式に謝罪をした。だが首相が謝罪したこともほとんど日本では報道されていない。三流週刊誌や三流新聞社、海外の報道機関の支部は、獅童一派、十師族の圧力に苦しめながらも、何とかしようとしている。

桐条政権は何とかしようとしているが、報われずに、批判ばかりされている。それは、年明けからの不祥事で謝罪の連続となっていて、支持率も下がる一方である。

だがマスコミは、政府に対するバッシングから、とある高校の教師のバッシングへ変わった。とある教師が、日本警視庁に出頭してきたことから始まった。

スポーツの世界大会のメダリストの教師が、自分の教え子に対してセクハラ、パワハラ、モラハラ……を繰り返していたと。

ある女子生徒に対しては、毎日朝の列車の時間を調べて、一緒に列車に乗り込んだ。そしてその女子生徒に痴漢を繰り返していたと。

ある生徒に対しては、肉体関係まで迫ったと。それを断れると、その女子生徒の親友を呼び出してレイプをしたと。

本人が供述している。他にも自分に逆らう生徒達も辞めさせたり、怪我を負わせたりした。

この教師がやったことも、世界を駆け巡った。

話は、ゴールド・マウンテン帝国支部の話に戻そう。

帝国支部の生き残りが、この護送挺〔暁〕に乗せられている。彼らは、死んだようにしていた。日本の裁判だつて彼らがやったことは、死刑になるのは間違ひではない。

山中「……死刑は確實……はあくあのガキども……情けなどかけやがつて……」

多村「……覚悟を決めたらどうですか？元支部長の山中さん？」

山中「多村……お前……」

多村「まあ、貴方が無能だつたから、こうなつたんですよ？」

山中「な、何だと多村！」

すると突然護送挺の警告音が鳴り響く。

山中「な、なんだ？」

多村「警告音？何が起こつた？」

明智「君達は死に行くときにさえ、見苦しいな！」

明智が護送挺の横を生身で飛んでいる。ロビンフットに捕まって飛んでいる。

山中「あ、明智さん！飛んでいる？」

多村「明智！」

明智「君達を日本に入国させるつもりは、あの人には無いよ。だからここで死ね！クズども!!出でよロキ!!」

日本の護送挺〔暁〕は、ロキによつて粉々に切り裂かれた。もちろんゴールド・マウ

ンテン帝国支部の生き残りのメンバーもロキによって切り裂かれた。

暁の残骸は、東ゼムリア海へ落下して海底へと消えて言った。

明智「ふっ、ゴミの片付けも終わったし戻ることしよう」

明智は、ロビンフットに捕まりながら、自分の国、日本へ帰る。

このニュースは再び世界を震撼させることになる。

11204・5・04・午後・クロスベル空港

5月のクロスベルのクロスベル空港にエルフィン・スナイパーの中型挺のアリストテレスは補給をしていた。

——中型挺アリストテレス内

アリストテレスの従業員達が右に左に動き回っている。アリストテレスは、帝国と日本の問題に巻き込まれる形で、補給も出来ずに事件解決のために動き回っていたのだ。

やっと解放され、クロスベルにて補給をやっているのだ。

カズヤ「全く、帝国軍情報局の連中は人使いが荒いな…別にクロードが悪いってわけじゃないが」

マユミ「ふっ、それだけ、帝国も人手が足りないのか…はたまた別の問題があるのか。まあ両方って可能性もあるわね」

カズヤ「大有りだろうな。ユファイ達のパルム問題の他にケルディックでも問題が起こつてるからな……」

マユミ「ケルディック問題、税の増税ですか……」

カズヤ「こればかりは、俺達にはどうすることもできないからな」

マユミ「そうね……」

1ーリベールから司波深夏を帝国、パルムに護送。四葉家から報酬はもらった。

2ー帝国軍情報局の手伝い。帝国軍情報局から報酬はもらった。

つまり報酬はもらったので、文句はそうそう言えないのもある。カズヤはクロスベルの様子を見て

カズヤ「大分、クロスベル騒乱の時の混乱は無くなってきたな」

マユミ「そうね、一時期はかなり混乱してたし、帝国、共和国に侵攻されかねなかったわね」

カズヤ「そうだな。帝国に関しては、あのミサキさんが、なんとか鉄血宰相を説得したつてステイルが言っていたな」

マユミ「ステイル・アレフガルド……この世界の和也さん……」

カズヤ「そうだな……。まさかこの世界の俺が七耀教会に入っていて、ステイルつて名乗ってるなんて思わなかったが」

カズヤは、北海道にて新ソヴィエト軍の侵攻により、クラスメイト、恋人、親友、恩師を失っている。これはこの世界のステイル（和也）と同じ境遇である。その後和也は、司波龍郎と共に禁書世界へ行き、学園都市製の能力を身につけ、能力者が使うことが出来ないといわれていた魔術も扱ってしまう。

そして、和也は、ステイルや神裂火織、土御門、八代綾奈、六塚孝宏に看取られながら、イギリス清教に改宗した。

改宗した理由は、恋人の朱里や親友の定晴、恩師の大久保、クラスメイトの魂を天国に召させてやりたい一心だった。

マユミは、この世界のステイル（和也）もそんな気持ちでいるのではと思っている。深夏からもやはり同じ事を聞いていたから、こんなことを思うのであった。

カズヤ「俺としたら懐かしさすらあるがな」

マユミ「ふふっ、嬉しいんでしょ、カズヤさん？」

カズヤ「まあな」

カズヤは、今更七耀教会に入るつもりはない。ただ七耀教会、星杯騎士団からの依頼などは受けたことはある。アイン総長、トマス副長、ケビン、ステイル、バルクホルン、ワジとも交流をしている仲間もある。

アイン総長が自らカズヤをスカウトをしてきたこともあったが、マユミと結婚してい

ることや自ら設立したエルフィン・スナイパーを置いてはいけなかったからである。そんな過去話をしていたら、灰色の髪の色のマシユマロヘヤーの男性が話に入ってきた。

??「カズヤさん、マユミさん頼まれてたもの終わりましたよ」

カズヤ「流石、悠だな。これならなんでも任せられるな」

悠「たまたまですよ、カズヤさんやマユミさんが教え方が上手かったからですよ」

マユミ「まあ、悠君ったら！」

カズヤ「悠、お前は筋がいい。本来なら、社長としてエルフィン・スナイパーに採用したいくらいだ」

悠「すいません。俺にはやりたい事があるんで。でも俺がそうなりたいと思ったのは、カズヤさんのおかげですよ」

カズヤ「俺のおかげ？」

マユミ「カズヤさんのおかげって？」

悠「それは…」

カズヤと悠は、日本のとある地方都市、稲羽で出会っている。その時、稲羽市では殺人事件と霧、マヨナカテレビなるものがあつた。

悠は、両親がレミフェミアに仕事で赴任することになり、稲羽に住む母方の叔父宅に預けられた。

カズヤは、エルフィン・スナイパーに稲羽の八十神高校から用務員怪我のため、臨時用務員募集の依頼が来ていたので、それを受けたのだ。

カズヤも悠も稲羽の地で大事件に巻き込まれる。大事件とは殺人事件から始まる。

悠率いる自称特別捜査隊が、事件解決に動いていく。

カズヤが直接悠達に関わり出したのは、八十神高校の教師である諸岡が殺された時だ。その時に悠達と初めて接点を持ち、彼らも情報提供を受ける。

それから色々あつて、カズヤは最後まで面倒を見たのだ。少なくとも、悠や千枝（里中）や直斗（白鐘）には影響を与えている。悠は、遊撃士、千枝は警察官、直斗は、探偵を辞めて警察の公安に入っている。陽介や雪子、完二、りせは、それぞれの道のために頑張っている。

カズヤ「ふつ、堂島さんから話は聞いている。お前が遊撃士になったってことをな」

悠「お、叔父さんが!？」

カズヤ「まあ、たまたま、堂島家に用があつて行つたときに聞いた」

悠「そうですか、で、堂島さんは何て…?」

カズヤ「喜んでいたよ。悠、お前が決めた道だ、ちゃんと諦めずに頑張れよつてな」

悠「堂島さん…」

カズヤ「菜々子ちゃんもお前の事応援してたぜ。いつか菜々子ちゃんにも会つてや

れ」

悠「カズヤさん」

マユミ「本当にごめんね、悠君。人手が足りないからって頼んじやつて」

悠「いいですよ、カズヤさんとマユミさんは、恩人なんですから」

カズヤ「言うようになったな、悠」

悠「俺は、カズヤ・アレイスターの弟子でもありませんから」

カズヤ「そうだ、そんなお前にプレゼントだ、受けとれ」

悠「はい、プレゼントか、なんだろうか」

悠は、カズヤから箱に入ったものを受け取る。中身を見てみると、中には導力腕時計が入っていた。この導力腕時計は、カズヤが作ったもの。悠が遊撃士になったお祝いにカズヤが作ったのだ。ちゃんと時計の裏側には、「Y・N」と彫られている。

悠「ありがとうございます、カズヤさん！」

カズヤ「喜んでくれて良かった。社会人として、時間は守らないといけないからな」

悠「はい、わかっています」

カズヤ「明日は、いよいよ帝国入りか。誰かに会うんだつたな」

悠「ええ、オリビエという方から依頼を受けまして。まずは帝国の帝都のヘイムダルへ来てくれと」

カズヤ「オリビエから！」

マユミ「オリビエさんからの？悠君！」

悠「お二人はオリビエさんをご存知で？」

カズヤ「オリビエは俺達の親友さ」

カズヤとマユミは、オリビエとのことについて話し始めた。

——1204・5・04・午後・クロスベル空港

——中型艇アリストテレス内

悠から、オリビエの名前が出たからカズヤとマユミは驚いている。悠も驚いている。

そしてカズヤとマユミの2人は、オリビエの事を話す。

オリビエ・レンハイムとは、一番の親友であり、色々語り合った仲だと。リベールで、

リベールの異変と一緒に戦った仲間の1人だと説明をした。

カズヤは気づいていないかも知れないが、オリビエが第3の風を起こそうとしたの

は、カズヤの話しからである。

カズヤが話していた中の、どの国、どの組織に所属しない部隊

〔トリニティ・セブン〕

トリニティ・セブンとは、カズヤとマユミが元いた世界の遊撃部隊なものである。

その部隊のリーダーがカズヤであった。

カズヤとその6人の仲間は、世界のために戦った事をオリビエは真剣に聞いていた。

そして世界を危機から守るため、カズヤとマユミは命をかけたこと。

こつちの世界に飛ばされ、右も左もわからないカズヤとマユミをオリビエとミュラーは世話してくれたこと。

カズヤ達は、自分達の世界の事やオリビエが皇族であることは伏せておいて大体を話したのだった。

悠「なるほど」

カズヤ「悠も遊撃士なったんだから、いつかはリベールを訪れるといい。良き先輩遊撃士がいるからな」

マユミ「エステルさんやヨシユア君：元気にして安心したわね」

カズヤ「あのエステルだからな。ヨシユアが振り回されてるようだが、上手くいってるようだし」

マユミ「そうね。苦難を乗り越えてカップルになったんですもの。私達みたいにね、カズヤさん」

カズヤ「そうだな、俺達も苦難の連続の中でだったな」

悠「苦難を乗り越え…契りあった絆は何者にも劣らない力と成す…つて事ですよね？」

カズヤ「まあ、そうだな。縁は時には、己の力の限界以上の力を引き出してくれる」その事は、カズヤも稲羽市で神と死闘を繰り広げた悠も感じている。

カズヤ「とにかく、遊撃士になったんだから、まずは縁をたくさん作る事だ。その縁が後々に己の助けになるはずだ」

悠「はい！」

このあと、ささやかだが悠の遊撃士になったお祝いをアリストテレス内でやることに。

もちろんクロスベルを離れて、クロスベル上空から帝国上空へ入っていく。

11204・5・04・夕方↓夜↑お台場海浜公園と呼ばれていた場所

ここは昔は、港区お台場海浜公園と言われていた場所。この場所は、先の大戦にて大漢軍に奇襲上陸を許した場所でもある。今では廃墟であり、誰も近づかない場所になっている。

警察の見回り外なのを、良いことに、不良少年グループや、ヤクザや猟兵団もこの辺りをうろついているのだ。

そんな中、元々警備会社が入っていた建物の中に不良達がたまっていた。

どうやら高校生の集団のようだ。休みだということもあり普段着でいる。ただ一人だけ制服を来た人間がいた。その高校生とは秀尽学園の制服を着ている。つまりは秀尽の生徒である。

不良1「どうするつもりだ？ 鴨志田が捕まってしまつてやつが喋りでもしたらどうするよ！」

不良2「俺達もお縄つてことだよな」

不良3「つたくなんでこうなつたんだ！ 答えろ、北沢！」

北沢康宏。秀尽学園の通う2年生。新聞部の部員で、鴨志田に色々と情報を教えていた人物である。

北沢「俺に言われても困るな。鴨志田が勝手にゲロつただけだろ。全校集会時に俺達の名前は出さなかつた。まあ出したとしても、あの方に頼んで消してもらっただけだが……」

不良1「大丈夫なんだろうな、そのあの方は」

北沢「大丈夫だ。警察の横流しの情報でもヤツははいはいないようだ」

不良2「そもそも、その鴨志田はゲロつたんですか？」

北沢「わからん。だが……あの連中……前科持ちのヤツと坂本が何か鴨志田にしたんじや

ないかと言われているな」

不良3 「前科持ち？秀尽にはそんなヤツが通つてんのか…どんなヤツなんだそいつは？」

北沢 「とても前科持ちには見えないな。もっともトゲはかくしてるのかもしれないが」

不良2 「とにかく俺達は、警察に見つかからないようにする必要があるよな？」

北沢 「まあ俺達は捕まった鴨志田の尻拭いをしているものだ。ヤツの不祥事を今まで片付けてきた」

不良1 「そうつすね。ただ鴨志田以外の何の報道もないけどな」

北沢 「まあ上のお偉い方も鴨志田もゴールド・マウンテン社も両方つぶしたいんだろう。そんな気がしてきたぜ」

北沢 は、ゴールド・マウンテン社を潰すため、あえて報道を控えてるのではないかと思っている。今の状態で損得勘定をするなら損害が大きい。だから庇えば庇うほど損害が出る。だから捨てる時期を見極めていると感じとった。

北沢 「とにかく、お前達には、ゴールド・マウンテン社の後を引き継いでもらう。金城達にも援助してもらうことになっている」

不良2 「オレ達が会社経営をですか？無茶ですよ！」

北沢「バカか、誰がお前達に経営をさせるか。ちゃんとあの方から指示を受けた人物が社長になっている。お前達はその新社長の指示に従え」

不良1「わかりました。それで北沢、あんたは？」

北沢「しばらくは、おとなしいしてるさ。秀尽の周りには刑事や公安が居やがるからな」

不良1「わかりました。それじゃあ、俺達は行きますんで」

そう言うくと不良3人組は、廃墟のどこかに消えていった。

北沢「さてと…俺は俺の仕事があるんでね…」

北沢はそう呟くと廃墟の闇に消えていった。

——山本エリア。

北沢と違う場所では、秀尽の不良達がたむろしていた。廃墟の箱の上に座っているのが、この不良グループのリーダーである山本である。容姿はイケメンの分類に入る顔立ちをしている。副リーダーの川澄は、インテリ系のイケメンの顔立ちをしている。手下達はどこにでもいる顔立ちが多い。

副リーダーの川澄は、下っぱの高杉の腹を蹴った。

川澄「なんだ、なんだ…高杉君…稼ぎが悪いですよ？もつと盗んでこいよ！」

盗むとは、秀尽学園の女子生徒達の下着を盗めと言つて

再び川澄は、高杉の腹を蹴った。苦痛で痛がる高杉。

高杉「ぐはあ…む、無茶を言わないで下さい…鴨志田事件で…警察やらが沢山いて盗めるような状況じゃ…ないですよ…」

川澄は高杉の髪を握つてから、吹き飛ばす。吹き飛ばされた高杉もすぐに起き上がつて

高杉「なら、川澄さんがやればいいじゃないですか？なんで僕が…」
すると今まで黙っていたリーダーである山本が喋り出す。

山本「川澄、高杉が言つてることも一理はあるだろう。そいつが捕まつてゲロられても困るな」

高杉「山本さん…」

山本「川澄、そんなに女子のパンツが欲しいのなら、やるよ!」

山本は制服のポケットに入れていたピンクのパンツを川澄の方に投げた。

山本「川澄、やるよ。女子のパンツが欲しいんだろ?」

川澄「…:…:…:誰の…:??」

山本「お前が気に入っていた1人、第1高の女子の三丸だよ」

川澄「三丸…:!!」

山本「安心しろ。別にお前の手前、やってはいない。お前のパンツが欲しい。って
言っただらくれたんでな」

川澄「……ありがとうございます、山本さん……」

山本は、高杉の方にやって来て、

山本「高杉……お前も怪しまれずにやれよ。鴨志田がいなくなつて、支配体制も揺らぎ
始めているようだからな。誰が何をしてくるか、わからないからな」

高杉「わかつてます、山本さん」

川澄「……………」

山本「今日はこれで解散だ。せつかくのゴールデンウィークなんだからな、お前達も
楽しんでこい」

山本はそれを言うと、廃墟の暗闇に消えていく。山本のグループの人間達も副リー
ダーの川澄に挨拶をしてから帰って行く。

そこに1人残った副リーダーの川澄は、水辺のところまで来て

川澄「山本……いつまでもいい気になるなよ！この俺が……強くなつて……テメエをひざ
まつかせてやる!!」

川澄は、山本からもらった三丸のピンクのパンツを水辺に捨てた。

川澄「ふふつ、とある筋から手に入れたこのグノーシス……ふふつ……」

暗闇の中に不気味な笑いを浮かべる川澄がいた。その姿を見たものはいない。

鳴上悠 side (1)

11204・5・05・午後・14:20・バルムフレイム宮にて。

悠は、バルムフレイム宮のとある人物から呼ばれている。そのとある人物とは誰であろうか。悠が呼ばれた個室はかなりの立派なもので作られており、古さも感じられる。

オリヴァルト「悠君、お久しぶりだね」

悠「オリヴァルト皇子、お久しぶりでございます」

悠とオリヴァルト皇子とは、ちよつと前に会っている。彼がツールズ士官学院特科クラスVII組設立のために奮闘していた時に悠に会ってアドバイスを貰っている。それ以来ぶりである。

オリヴァルト「かしまらなくて良いよ。僕と君の仲ではないか」

悠「いえ、流石にバルムフレイム宮内で無礼講は…」

悠が戸惑っている、後ろから話しかけられる。オリヴァルトの護衛役兼親友のミュラー・ヴァンダールである。

ミュラー「悠、コイツが気楽に話そうと言ってるからそうしたやつてくれ」

悠「ミュラーさん、良いんですか？」

ミュラー「構わんさ」

悠はミュラーにそう言われて、ちよつと考えた。そして彼はこう導き出した。

悠「オリビエ、これでいいか？あくまで俺は、エレボニア帝国皇子オリヴアルトではなく、旅の吟遊詩人であるオリビエ・レンハイムとして接していると」

オリヴアルト「悠君、まあそれでも構わないが、君も真面目だね」

ミュラー「私としたら、悠の真面目さを少しは見習つてほしいがな」

悠「ミュラーさん、一応はバルフレイム宮に入るから真面目にしますが、外に出れば冗談も言いますよ」

ミュラー「悠、そうやってお前は弁えているが、アイツはそれがなっていない」

オリヴアルト「ミュラーと悠君は何ココソコソしてるんだい？」

悠「オリビエ、世間話をだな……」

オリヴアルト「コホン、悠・鳴上、5月23日付けで、トールズ士官学院の教官になってもらうよ」

悠「トールズ士官学院の教官!? トールズ士官学院って帝国では名門の士官学院じゃないか? そんなおいそれた士官学院の教官ってどういうことだよ?」

オリヴアルト「前にも説明したと思うんだが、忘れたかい?」

悠「いいや覚えてる。オリビエが真剣に話してくれたからな、特科クラスⅦ組の事、帝国に新しい風を起こしたい事も」

悠は、日本で培った知識や価値観等をオリビエにアドバイスをやってオリビエ自身で考え抜いて作られたのが、自分を超えた教育方針である。

悠「教員免許は、レミフェミアで取得しましたが、帝国の士官学院の教官をやるような資格は…というか俺は遊撃士なんですが！」

オリヴァルト「今の帝国では、遊撃士は生きづらいと思う例の件でね」

帝国において遊撃士協会の支部は、レグラムを除いて全て閉鎖されている。全ては数年前の爆発事件から始まっている。

悠「そのことは、共和国の遊撃士の先輩方達から聞いている。だからオリビエは、士官学院の教官：サラ先輩みたいにやってくれと言うんだな？」

オリヴァルト「飲み込みが早くて助かるよ」

悠「1つ良いか？」

オリヴァルト「なんだい？」

悠「トールズ士官学院という名門士官学院が、俺みたいのを採用すると思うか？」

オリヴァルトはニヤニヤと笑いながら悠に答える。

オリヴァルト「トールズ士官学院の理事長は、この私だ。私の推薦状とカズヤ君の推薦状もある。それに3人の理事の承諾もある。つまりなんの障害もないというわけだ」

悠「カズヤさんまで…」

ミユラー「悠、頑張れ。私も応援している」

こうしてトールズ士官学院の教官を務めることになる。彼自身もⅦ組の運命に巻き込まれ、もがいていくこととなる。

11204・5・22・朝・第3学生寮・306号室―ユフィの部屋。

朝早く起きて、達也やアリサ、ラインにラウラ、アンジェリナと朝練をしていたが、いつしかマキアスやスハルトが加わっていたのだが、ある時達也とラインが自分の身の話を話したのだ。

達也とラインは、マキアスに自己紹介をした時、貴族ではなく平民だと答えていた。達也は、先にA班に自分の身の上話をしていたらしい。A班のみんなにB班、ユフィ達にも話すように言われたのだ。

そして達也とB班だったラインと一緒にユフィ、マキアス、スハルト、ユシス、エマに話したのだ。

スハルトとユシスはさほど気にする様子もなく、ユフィとエマは自分達にも秘密があるのだ、何も言わなかった。だがマキアスは「嘘をつく人間は信じられない」と切り捨てたのだ。ただそれだけではない、再びⅦ組に新たに加入する生徒がいるのだ。

114組―カトリーナ・クラリス。

1—4組—ハチマン・ヒキガヤ。

この2人が、5月の学院理事会でⅦ組への移籍が正式に決まり、5月の初頭にⅦ組へ編入した。

Ⅶ組男子—達也、リイン、エリオット、マキアス、ユーシス、スハルト、ガイウス、ハチマン。

Ⅶ組女子—ユファイ、アリサ、ラウラ、ファイ、エマ、アンジェリナ、カトリーナ
の15人となる。

女子の新加入のカトリーナは、すぐに女子陣に溶け込んだ。ユファイと友達であったこともプラスに働いた。

男子の新加入のハチマンは、普段は1人で本を読んでいる。エリオットやリイン、ガイウスが話しかけると、話す程度か。ただ、ラウラがハチマンのことを知っているようで、2人で何か話してる時もある。

そんな感じで、1204・5・22・自由行動日前日が始まるのである。

第2章―白亜の旧都編―27―2話―5・22(07:
20)―悩みと新しい仲間。

ユフイ side

11204・5・22・朝・07:20・第3学生寮・306号室・ユフイの部屋。

ユフイは、色々考えていたのだった。だが良い考えが浮かんで来る訳でもなかった。自分自身でも正体を隠しているのだから。

皇女であることを隠している。

マキアスに嫌われたくない。

真実を話せば、マキアスに嫌われるのではないか、そんな不安がユフイの心が支配する。

ユフイは、モヤモヤの気持ちの中、いつもの帝国時報とクロスベルタイムズ、今回から日本の新聞、東京タイムズの新聞を取り寄せてもらっている。

パルムの事件以降、日本の情勢が気になるようになったし、静江や深夏の国が気になるようになったから。

帝国時報は、パルムの事件を大きく取り上げている。

【紡績町パルムの復興資金、帝国議会により承認される】

【ハイアームズ侯爵家、パルム資金援助、パルムの市民1人1人に】

パルムの東にある日本人移民街の新トップ、自治権をハイアームズ侯爵家に返上。自警団の解散。日本人移民街、パルムへ編入される。サザーランド州へ編入され、サザーランド州領邦軍が移民街の治安維持にあたる】

【東ゼムリアの大国である日本にて、教職員による不祥事が発覚】

【第4回世界スポーツ Heimdal 大会の金メダリストが、教え子に対してセクハラ、パワハラ、レイプなどをしていた事が発覚】

【世界スポーツ協会は、この金メダリストのメダルを剥奪することを決定】

ユフィは、日本の東京タイムズの記事を読む。帝国のパルムの事も書かれている。

【桐条政権の支持率低下、桐条首相の支持率も低下。不支持率は上昇】

【精神暴走事件、今年に入って立て続けに6件、警察、解決の見通し立たず。】

【秀尽学園の鴨志田教諭、教え子を犯罪組織に売買。他に武器不正密輸にも関与か?】

【全員死亡したゴールド・マウンテン帝国支部の人間が乗った護送艇【暁】は、エンジントラブルか?】

市民の声

【噂によると、心の怪盗団（ウロボロス）が、秀尽学園の鴨志田の悪事をばらしたらしいぜ！】

【金メダリストだからってやって良いことと悪いことがあるだろうに。鴨志田は、金城と繋がっていて、帝国の犯罪組織に自分の教え子を売買していたみたいだぜ！】

ユフィは、日本の教職員の不祥事の記事を読む。そこに気になる記事を見つけたのだ。そこにはゴールド・マウンテン社の不祥事の記事が乗っていないことに気づく。

ユフィ「おかしいですわ！あれだけの問題を起こして、何も書かれていないなんて。それにこの鴨志田って方に全てを押し付けようとしていますわ！」

鴨志田がしたことは、ユフィだつて許せない。だがパルムで騒乱を起こそうとしたのは、ゴールド・マウンテン社であり、秀尽学園の教諭鴨志田卓ではない。

ユフィ「それにこれもですわ。エンジントラブル？これもおかしいですわ！」

ミサキ達、帝国軍情報局と静江達七草家主導で、事故原因調査委員会を設置して調べてたはず。

ミサキは、ユフィに「あれは事故じゃないわ、何者かが外から襲撃したものかな」と説明していた。だから日本の新聞の東京タイムズの記事を疑った。

ユフィ「はあく、ケルディック問題、マキアスさん問題、パルム問題：頭が痛いです

わ」

ユフィは、新聞紙を新聞置きに片付けて、身仕度を始める。

まだモヤモヤしているから、顔を叩いて気合いを入れる。

ユフィ「明日は、2回目の自由行動日、こんな気持ちじゃ、達也さんに迷惑をかけてしまいますわ！」

ユフィは、そう言つてARCSのホルダーを身につけて、得物の緋い太刀を装備して、自分の部屋から出るのであつた。

ユフィ（ハチマン） side

11204・5・22・朝・07:50・ツールズ士官学院・本校舎屋上

5月の初旬にハチマンは、114組から特科クラスVII組に編入することになった。

トマス副長の命で編入することになったが、VII組は良いも悪いも目立つクラスなのだ。ハチマン的には、平穩に暮らしたいだけなのだ。学生生活は、昔のトラウマを思い出してしまうのだ。

ハチマン「昔みたいに吐くとか、ジンマシンが出ないだけでもマシになったわけだが」朝日が昇る方を見て、ため息を吐く。春先から夏に向けての風が屋上を吹き抜けて行く。

ハチマン「先月は仕事でセントアーク、パルムに向かったが…」

今回は、ハチマン自身も特別実習に参加しなければならない。めんどくさいこの上なのだ。1人で依頼や仕事をこなす分はなんの問題でもないので。だが誰かと組んだりすると、その人間と合わせなければならないし、気を使わないといけないのが嫌なのだ。

ハチマン「ふう〜あんな修学旅行や文化祭はごめんだぜ」

???「そなたは、何がゴメンなのだ？」

ハチマンは、声のした方を向く。朝日に青色の髪でポニーテールが照らされていて、風にスカートがヒラヒラとなびいている真紅の上着を着た女子生徒が屋上のドアの前に立っていた。そうラウラである。

ハチマン「ラウラか、何の用だ？」

ラウラ「別に用は無いが、用がないとそなたに話しかけてはダメなのか？」

ハチマン「ダメでは無いが：ラウラ、こんな俺と話していて楽しいか？」

ラウラ「そなたが、以前話してくれた話は楽しかったぞ」

ハチマンは、トマスの修業で色んな場所を訪れている。ラウラの故郷である、レグラムも訪れている。レグラムのローエングリン城は修業に手取り早かったのだ。

ハチマンは、雷撃の大剣を振り回す。だが法剣は普通は使わず、ただの大剣にカモフ

ラージュしているだけだ。

ラウラの父親のヴィクターから指南も受けている。ヴィクターは、ハチマンの剣の筋は良いと判断している。ただ本人はお世辞としか受け取っていない。

そんなハチマンにラウラは、付いて回っていたのだった。最初は避けていたが、ハチマンもラウラに根負けして話すようになった。

ハチマンが体験したことを面白可笑しく話したのだ。それをラウラは笑ってくれたのだ。ラウラにとって初めて興味を持った異性でもあった。他の男達とハチマンは、何が違うと感じとっていたのだ。それが恋と気づくのは、そう時間もかからないだろう。

ユフィやアリサ、アンジェリナやカトリーナが恋ばなをしているのをラウラも聞いている。

ハチマン「まったく、俺の話を真面目に聞くななんて、ラウラが初めてだよ」

ハチマンは、修学旅行以来不仲になった小町でさえも、ラウラのように聞いてはもらえなかった。だから変わった女子だと思った。

ラウラは、自分の胸にある感情が恋であることを自覚する。だがそれをどう表して良いのかわからない。なにせ色事よりも剣の修行に明け暮れていたのだから。それでもラウラは、少しずつ努力している。

ラウラ「私は、ハチマンと一緒にのクラスになって嬉しいぞ。ハチマンはどうなんだ？」
ハチマン「まあ：俺もラウラと一緒にって嬉しいかな…」

ハチマンも何を言ってるのかと思っていた。自分自身でもそんなことを言ってるかと思っ
かしいと思っただ。

ラウラ「そうだ、今日の午後Ⅶ組女子は、調理学、栄養学でクッキーを作るのだが、ハ
チマン食べてくれるか？」

ハチマン「ああ、それぐらいなら良いぞ」

ハチマンは、ラウラが作ったクッキーを食べる約束をした。下の方から登校してくる
学生達の声がしてくる。それくらい時間が経過しているのだろう。

ハチマン「そろそろ、教室へ戻ろうぜ」

ラウラ「そうだな」

ハチマンとラウラは、教室へ戻って行った。

ユフイ side

11204・5・22・朝・07:55・第3学生寮↓ツールズ士官学院へ。

第3学生寮から学院の方へ歩くユフイ。モヤモヤした気持ちは、そう簡単にはとれる
はずもない。下を向きながら歩いていると、とある人物から後ろから胸を鷲掴みされ

る。

カトリーナ「ユフィ、おはよう！背中が寂しそうだよ？」

ユフィの胸を驚掴みしたのは、カトリーナである。カトリーナとは、クラスが違う時からの友達である。

ユフィ「か、カトリーナさんですわね。背中ではなく、胸を揉んでますわよ？」

カトリーナ「だって、ユフィの胸が一番あたしの手に合うと言うか…揉み応えがあると言うか…アハハ…そういうこと？」

ユフィ「そ、そういうことではありませんわ！」

カトリーナは、ユフィの胸から手を退ける。

カトリーナ「あたし、特別実習って楽しみにしてるんだ」

ユフィ「別に遊びに行くわけではないですわ」

カトリーナ「わかってるわよ。達也君達は、ケルディックでユフィ達はパルムで活躍したんでしょ？世界のニュースで取り上げられてたし」

ユフィ「わたくし達だけで解決したわけじゃありません。協力者の方々もいらつしやいましたし」

帝国時報、クロスベルタイムズ、東京タイムズにVII組は取材を申し込まれたが、学院側が学生ということもあり、断っている。

それで色々と憶測も飛び交っているのだ。

カトリーナ「今日の午後の調理学、栄養学でクッキー作るみたいだよ！」

ユフィ「クッキーですか」

カトリーナ「ユフィ、もしかして!?!」

ユフィ「な、何なんですその表情は？」

カトリーナは、ちよつと馬鹿にした表情でそう言った。ユフィが不安そうな表情をしたからであるが。カトリーナは実家では、料理をしていたわけだから、クッキー作りも朝飯前なのだ。

ユフィ「カトリーナさん、わたくしもクッキーぐらい作れますわ！」

カトリーナ「ふふつ、ムキになっちゃって……」

ユフィ「ほらっ、カトリーナさん、行きますわよ」

ユフィは、先を歩き始め、カトリーナはその後ろを追っかけて行った。

5月下旬、ライノの花が完全に散り新緑薫る風がトリスタの街を吹き抜ける季節の中、ユフィ達の運命は少しずつ動き出していた。

そしてユフィ達の今日が始まる訳である。あの4月の特別実習を終えたユフィ達は、

再び忙しい学院生活に追われていた。

武術訓練に加え高等学校の一般授業も本格化する中、士官学院ならではの専門的な授業も始まっていた。

111204・5・22・午前中・10:25・2時限目1

今ナイトハルト教官による軍事学の授業中である。今日の授業の範囲は導力革命によつて、戦場が兵器群がどのように変化していったかの授業である。

ナイトハルト「……50年前の導力革命以降戦場の常識は根本的から変わっていった。変化をもたらした代表例は4つある。まずは導力銃、導力砲に代表される。〔導力兵器〕の発明だ」

それよりも以前は火薬式なるものがあつたのだが〔生産性〕・〔命中精度〕・〔整備〕の面にて導力兵器に比べて劣るので取つて変わつていった。

ナイトハルト教官の話しはまだ続いている。Ⅶ組の中でもそれぞれの特徴はある。この授業を興奮して聞いているのは、達也、アリサくらいか。カトリーナやエリオットは眠そうにしている。ハチマンは、窓の外を見ていて、ラウラがそれを見ている。ユフィはマキアスが気になりチラチラ見ている。

ナイトハルト「2つ目—それに関連する〔軍の機甲化〕だ。戦車や装甲車に代表され

る導力車両で編成された【機甲師団】―【高い機動力】―【防御力】と三拍子揃ったこの戦術単位は正に戦場に“革命”をもたらした」

こう言う専門用語を覚えるのはよほど好きな人間しか覚ええない。達也やアリサのような感じではないと、覚えないだろう。あの2人は、よくARCSの話をしている。ナイトハルト教官はまだまだ話しは続いている。

ナイトハルト「3つ目は、飛行船―飛翔機関による重力制御によって空を翔ける艦艇の発明だ。それは空中をも視野に入れた立体的な戦術、戦略を可能にした」

飛行船―飛行船のおかげで鉄道よりも早く目的地まで着くことができるようになった。西ゼムリア、東ゼムリアを簡単に行き来もできるようになった。便利なことになったが、それだけではない。戦争の兵器とされることにも繋がる。

ナイトハルト「4つ目。導力技術の進歩によって戦場に大きな革新をもたらした新たな分野が存在する。達也・シユバルツァー―それが何であるか分かるか？」

ナイトハルトが達也を指名した。達也は直ぐに立ち上がり

達也「導力通信です。ナイトハルト教官」

ナイトハルト「正解だ、達也・シユバルツァー」

達也にとっては、朝飯前の問題である。

ナイトハルト「達也・シユバルツァーが答えた通りに【導力通信】だ。導力波を使っ

た無線通信技術だ。これによって、指揮官は戦場において、正確な情報を得ることが可能となり、的確に部隊に動かせるようになった。もともと通信傍受や通信妨害などの、対抗技術も生み出されたのだが」

達也とアリサの話し声がする。

アリサ「良かった〜正解で…」

達也「当たり前前だ。アリサのおかげで専門の言葉も覚えられたな」

アリサ「(お互いに頑張っていきましよう達也)」

達也「(そうだな。互いに頑張っていこう)」

達也やアリサの言う通りに、クラスのみんなが、お互いに頑張っっていくしかない。

何だか達也とアリサの距離が更に縮まったような気もするユフィでもあった。

第2章―白亜の旧都編―28―3話―5・22（13・25）―Ⅶ組女子の手作りクツキ―。

ユフイ side

111204・5・22・昼過ぎ・13：25―女子―調理学・栄養学―

5限目の授業は男女別の授業になり、但しⅠ組と合同授業である。男子は端末室で導力端末学の授業で、Ⅶ組女子は家庭科室にて「調理学・栄養学」授である。ただⅠ組の貴族生徒達がヒソヒソ話をしている。

貴族生徒1「ラウラ様にアンジェリナ様…どうしてあんなクラスに行つてしまわれたのかしら？せつかくご一緒できると楽しみにしてましたのに」

貴族生徒2「でもあの眼鏡の子、入学試験で首席ですって？」

貴族生徒3「ええ、辺境出身の平民と聞いていますけどね」

貴族生徒4「しかしあの銀髪の子は見ていて和みますわえ」

貴族生徒1「うふふ、ちよつと撫でさせてもらえないかしら？」

フェリス「―皆さん、そのくらいにしておきなさい。わたくしたちは誇り高きⅠ組。

料理如きとはいえ、あのような寄せ集めクラスに負けるわけにはいきませんわよ？」

貴族生徒2「そ、そうですね。…ですが、いつも料理人任せなのでなかなか勝手がー」

Ⅰ組女子が作業している反対側にⅦ組女子が作業している。ただⅠ組女子のヒソヒソはなしにアリサが

アリサ「まったくヒソヒソ感じが悪いわね」

ラウラ「まあ、我らのことが気になって仕方がないのだろう」

アリサとラウラがⅠ組の生徒達の陰口？に対してアリサが文句を言っている。アンジェリナはユフィに話しかける。

アンジェリナ「ユフィは、そのお料理とか…されたことありますか？」

ユフィ「わたくしですか？まあわたくしは人並みに出来るほどでしょうか…」

バルフレイム宮にいるときは、お付きの者達がやってしまうから、やる機会がなかったユフィ。だけど兄オリヴァルトとの冒険の時は、料理をしていたこともある。ユン老師との修業するときも自炊をしたから、料理はできる方にユフィは数えられても良いだろう。

アンジェリナ「…私も実家の方の調理場で何度か料理長にお願いをして、作らせてもらいましたの。ですが…料理長や他の料理人の方々が、陰ながらアドバイスやお手伝いをなされよう」とー」

ユファイ「うふふ、アンジェリナさん、料理長や料理人の方々に大切にされてるんですね」

アンジェリナ「ええ：姉はもちろん：料理長や料理人の方々：執事やメイド方々は私にとつて大切な方々ばかりです。ただ……父を除けば……」

アンジェリナは、父親のこと大嫌いだ。アンジェリナを政略結婚の道具してしか見ていない。過去に達也にある言葉を言われていた。それからアンジェリナ自身は自分を必死に磨くことを決意した。そう達也を振り向かせる為に。

カトリーナ「さあⅦ組男子諸君に美味しいクッキーを作つて届けましょう。Ⅰ組女子なんかに負けるつもりはないですから!!」

フィー「ラジャー、カトリーナ!」

エマ「アハハ：気合い入ってますね……。カトリーナさんもフィーちゃんも」

カトリーナ「あんなこと言われて：あたしはイラつてきたからね。売られたケンカは買うしかないからね」

カトリーナは、完全にスイッチが入ってしまった。それは、ラウラ、アンジェリナに、彼女達が向けてないにしても、それはⅦ組女子全員に言つて事と同じ気持ちである。

ユファイ「わかりましたわ、カトリーナ。私もやりましょう。みんなでギャフンと言わ

せてあげしようね」

カトリーナ「そうねユフィ。Ⅰ組女子なんかに負けてるもんですか！」

ラウラとアンジェリナもその意気込みに

ラウラ「勝負と言ふことならやるしかあるまい」

アンジェリナ「これも鍛練だと思いやらせて頂きますわ」

これでⅠ組対Ⅶ組の構図になり、アリサとエマも参加することになり完全に、Ⅰ組女子対Ⅶ組女子になった。

しかしⅠ組も女子もそうだが、Ⅶ組女子も苦戦中である。料理の得意なユフィやカトリーナとエマとまあまあできるアンジェリナと、料理の苦手なラウラ達を手伝ってやっている分、失敗続きでしたがなんとか時間内でできたということになった。

HRに達也達Ⅶ組男子は、ユフィ達Ⅶ組女子が作ったクッキーを、食べる事になるとは彼ら（ハチマンは知っている）まだ知らない。

達也 side

1-1-1204・5・22・昼過ぎ・13：30・5限目—導力端末室

達也達Ⅶ組男子は、Ⅰ組男子と共に導力端末室で、導力端末を学んでいた。そして達也とリンエリオットとガイウス話していた。

リイン「なんとかサマにはなっているかな」

ガイウス「ああ最初はこういうものかまるで見当もつかなかったが」

達也「まあこういうのは、慣れだと思いがな」

マキアスやユーシスは優秀だとして、達也は、ユミルに来ていた、RF社の技術者の方から、教わったことが始まりであり、それからは、達也がRF社に向向っていたのだ。

達也「俺の場合は、昔の知り合いに教わったことが、あるからなんとか出来たんだ」

リイン「だよな、達也は。昔からなんでもこなすし。うらやましいくらいだ」

エリオット「そうなの？リインだって、それにしても手慣れる感じがするけど。でもユーシスは、興味がなくても、軽々とこなすしちゃう感じだよな。そういうところが、マキアスには面白くないんだらうけど？」

達也「……だらうな」

リイン「イケメンでアレだと文句の言いようもないだらうからな」

ユフィ達B班の特別実習中は、ユフィ班とリイン班に分かれて、邪険になることは、なかったし、そんなことをしている暇もなかったからである。

しかしユーシスとマキアス……どうしたら仲良くできるんだらうかと悩むリインであった。

エリオット「はあ……どうしたもんだらうね」

エリオットも、リインと同じこと考えていたようだ。だが突然、エリオットやガイウス、リイン、ハチマン、マキアス、ユーシスのⅦ組のクラスメイト以外の生徒—I組の男子生徒に話しかけられた。

??? 「達也・シュバルツァー、リイン・シュバルツァーか？」

達也 「パトリック・T・ハイアームズ：」

リイン 「?—うん? 確かパトリックだったか？」

パトリック 「ああ、その通りだが、1つ補足しておいてあげよう。僕のフルネームは、

「パトリック T ハイアームズ」—そう言えば流石に分かってもらえるかな？」

エリオット 「えええっ!!」

エリオットは、驚いているが帝国に住んでる者なら知らないわけがない【四大名門】の1つであるハイアームズ侯爵家である。パトリックは、確か今のハイアームズ侯の三男だと聞いた。

ハイアームズ侯の二男—「フレデリック T ハイアームズは、ユファイ達B班が

パルムの件で間接的に関わっているのである。貴族の大物の1人だが、貴族派には属さず、革新派に属することなく、あくまでも第3勢力であることは間違いないようだ。ガイウスが

「ガイウス—有名な家柄なのか？」

エリオット「ゆ、有名も有名！ハイアームズ侯爵家と言えば〔四大名門〕の一つだよ。まあユースシヤアンジェリナの実家よりは、格でちよつと落ちるんだげど」

エリオットの話しにパトリックが睨みつけてきた。

エリオット「あわわつ……いえ、何でもありません！」

そんなエリオットの姿を見てスハルトは自分の席をたつて

スハルト「あまりかつかすんな、パトリック。みつともないぜ」

パトリック「フン！平民や外国人には用はない。――シユバルツアー、喜びたまえ。僕の紹介で学生会館の3階に招待してあげようじゃないか」

学生会館の3階、貴族生徒専用のサロンがある……。達也やリインが貴族であることを告白したため、仮にも貴族だからと勧誘しに来たと言うことになる……。

パトリック「たかが男爵とはいえ貴族は貴族。〔VII組〕などという烏合の衆のクラスに所属してしまつてゐる君達だが、ハイアームズ家の人間たるこの僕が口を利いてやつたら、サロンの使用許可が下りるだろう。フフ、感謝したまえよ？」

達也は鬱陶しと思つており、リインは、どうやって断るか悩んでゐる。

達也「勝手に決めないでほしいものだな」

リイン「そうぞぞ」

達也とリインがそう言つた横から、パトリックとは違ふ声の生徒が、中に入つてきた。

ユーシス「やれやれ…こんな場所で勧誘とは」

エリオット「あー」

達也「ユーシス…」

リン「ユーシス」

スハルト「ユーシス」

パトリック「ユーシス・アルバレア！」

パトリックは、ユーシスを睨めつけているが、対してユーシスは涼しげな顔をしながら、呆れた表情で

ユーシス「ハイアームズ家の三男殿は派閥ゴツコがお好きらしい。そういう話しは、まず最初に俺に声をかけるのが筋じゃないのか？」

パトリック「くっ！…：…君は好きでサロンに来ないだけだろう!?あれほど2年の先輩たちから、熱心に誘ってるのにも関わらず！」

ユーシス「そういうことには興味がないからな」

パトリックは、これ以上議論にならないとわかり

パトリック「——もういい！シユバルツァー！とにかく覚えておきたまえ。誰につくのか、君達の将来にとってプラスになるのかを」

それだけ言うと、パトリックは自分の席に戻っていった。

エリオット「はああ……」

ガイウス「随分賑やかな男だったな」

スハルト「まあ、賑やかなのは確かだが。達也、リイン、お前達、ヤツの誘いを乗るのか？」

リイン「俺は別にそんなものには興味もないけど、どう断ろうかと迷っていたから：ユーシス、正直助かった」

達也「俺は断るつもりだったが、助かった」

ユーシス「フン：別にお前達を助けたわけじゃない。ーただ先月の実習では手間をかけたみたいだからな。それだけだ」

それだけ言うと、ユーシスも自分の席に帰って行った。ユーシスは、ああいう言い方をしているが、改めてお礼が言いたかったのだらうとリインは思った。ただ先程から、マキアスに睨まれるのが心に悪いとも思った。

達也は、パトリックが何かを焦ってるようにも見えた。それが何なのかは、まだわからなかった。

ユフェイス

11204・5・22・夕方・15：30・VII組教室

ユフィ達は、悪戦苦闘の末に、クッキーを作り上げたのである。何とかユフィやエマ、

カトリーナのカバーで何とかなった。

ユフィ達を作ったクツキーは、放課後に達也達に食べてもらうことになっている。そしてその時が来たのである。カトリーナが最初の掛け声を上げる。

カトリーナ「男子諸君！あたし達が5限目の授業で、クツキーを作ったので是非食べて下さいね！」

スハルト「クツキーか。なら戴こうか」

スハルトが最初にユフィのクツキーを食べた。

スハルト「……中々旨いんじゃないか。ほら達也達も食べてみるよ」

リン「ああ、もらうよ」

エリオット「なら僕も食べてみようかな」

ガイウス「オレも食べるとしよう」

達也の前には、アリスとアンジェリナがいる。スハルトに最初に食べさせたユフィは、マキアスに食べてもらうこととする。カトリーナは、ユーシスに食べさせてるようだし、フィーもエマもスハルト達に食べさせていた。ラウラは、ハチマンにクツキーを食べてもらふことにする。

アリス「達也……良かったら食べてみて」

達也「わかった」

達也は、アリサにクッキーを差し出される。形は色々突っ込みたいところはあるだろうが、アリサが一生懸命作った証のクッキーである。

達也「ありがとう、アリサ」

達也は、アリサの作ったクッキーを口の中に入れた。達也は、すぐに水を要求しそうになったが、アリサにずっと見つめているから、そんなことは言えない。

アリサ「どう…おいしくなかった？」

達也「…いいや。不味くはないな」

アリサ「…我慢しなくてもいいわよ。正直に言ってくれても。私は怒らないから」

達也「アリサのクッキーは、まだまだな感じはあるが、必ず上手くなると思う。アリサは頑張りさんだからな」

アリサ「なっ…何言ってるのよ、達也は…。と、とにかくアンジェリナのも食べてみなさい」

アンジェリナ「あの…どうぞ」

アンジェリナからクッキーの入った袋を差し出される、達也。アンジェリナのクッキーを袋から取り出して食べてみる。アリサの時とは、違い表情が明るい。それはそうだろう。それは達也好み（フルーツ味）に味付けをされている。アンジェリナは、達也

との出会い時のことを覚えていらっしゃるらしく、その時に達也の好物を知った。

達也「アンジェリナ：ありがとう。旨かったというより俺好みの味で大変良かったよ」

アンジェリナ「達也さん：ありがとうございましたわ」

アリサ「じいゝゝゝゝ」

嬉しそうにしているアンジェリナと、何故だかアリサにめっちゃ睨まれている。達也は、アリサが怒っているのは、アンジェリナのクッキーで喜んだから怒ってるんだろかなど。ここがモテる男の辛いところだろう。

アリサ「もう、達也にはあげない。あげないんだから」

達也「俺はアンジェリナも褒めたが、アリサのクッキーも褒めたじゃないか？」

アリサ「ふ〜んだ」

スハルト「達也：お前：女心をわかっちゃいないだろ？」

達也「：？心が何だ？スハルト？」

スハルト「はあくお前なあ〜達也：」

そんな話をしながら男子達は、クッキーを食べている。

ハチマンは、約束とおりにラウラのクッキーを食べている。

ラウラ「ハチマン、どうだクッキーの味は？」

ハチマン「……………」

ラウラ「ハチマン…不味かったか？」

ハチマンは、ラウラの問いには答えずにラウラの作ったクッキーを食べている。ラウラはそれを黙って、ハチマンが食べ終えるのを待つ。

ラウラ「どうだったんだ？」

ハチマン「いや…驚いたんだ。俺の大好きだったマツカンの味が、クッキーからしたからさ」

ラウラ「ああ、以前ハチマンから聞いていたからな。それで学生食堂のラムゼイに頼んで特別に日本から仕入れてもらったのだ」

ハチマン「そうだったのか、ありがとうな」

ラウラ「うむ…こちらこそ、ありがとう」

VII組の中で、カップルの卵が出来つつあった。

達也とアリサはもちろん、ユフィとマキアス。スハルトとフィー、ラウラとハチマン。まだ卵であって成立したわけではない。これからは、本人次第であろう。

こうしてクッキータイムは終わりを迎える。

第2章—白亜の旧都編—29—4話—5・22（15：45～）—それぞれの放課後。

ユフイ side

—11204・5・22・夕方前・15：45—Ⅶ組教室。

ユフイの作ったクッキーは、旨い方に入るようで、「上出来」判定をもらった。一番旨いと判定されたのは、エマで同率でカトリーナも旨かったと男子達に言われる。3位がユフイで4位がアンジェリナのように。ただ普段から家事をやっているユフイ達には勝てないと、誰かが言っていた。達也が先程ラウラ達に言っていた言葉——【料理の道も剣の道と同じ】—強いやつがいてそいつに並び立ちたい、追い越したいとか考えたりするのは当たり前だろう。

それは、料理においても不味いとか言った人間とかに、必ず旨いと言わせたくなくなるような感じだろう。そんななかんでサラ教官やってきてHRが始まったのだった。

サラ「良かったわね、男子は。女子の手作りクッキーを食べたんですってね」

スハルトとユースが

スハルト「旨いクッキーと食べないクッキーが存在したのは確か……」

ユーシス「なんで俺が、こんな事につき合わなくてはならないのだ。ちゃんと意見を述べたのだ。これでいいだろう」

ラウラ「まあ、ハチマンはともかく、スハルトとユーシスは、不味いと素直に言ってくれたおかげで、上手くなるうと思つたからな。最後まで付き合ってもらうぞ」

さすがラウラらしい答えだ。サラがしびれをきらしたのか

サラ「はいはいクツキーの話は、それぐらいにしてHRを始めたいのよね」

サラの一言でみんなは、席に着席する。

サラ「今日のお勤めゴクロー様。明日は「自由行動日」だから存分リフレッシュするといいわ。ただし来週の水曜日には「実技テスト」があるんだけど」

そろそろ実技テスト&特別実習があるとは誰もが思っていたことだ。アリサやエマが

アリサ「はあ…そろそろとは思ってましたけど」

エマ「えつと…次の【特別実習】に関する発表もあるんですか？」

サラ「ええ、来週末にはまた実習先に行つてもらおうわ。楽しみにしてらっしゃい」

マキアスとユーシスは、それぞれの反応し、ラウラは前向きな考えをもつて、ハチマ

ンと一緒にやりたいようだ。サラが

サラ「それと来月の半ばには—各種、高等教育授業の「中間試験」ってのがああるから」
 エリオット「そ、それもあつたつけ……」

フィー「中間試験：めんどくさそうな響き」

ハチマン「試験はいつもめいどいだろ」

スハルト「そうだよな」

エリオットは、そんなものがあつたような感じなふりだし、フィーとハチマン、スハルトは中間試験もめんどくさそうな感じである。一方ガイウスは

ガイウス「日頃の学習の成果が試されるといふとか」

サラ「まっ大変だとは、思うけどせいぜいぜい学業も頑張りなさい。あたしがハイน์リツヒ教頭に、イヤミを言われない程度にね」

スハルト「：はは：サラ：本音は後者だな……」

スハルトの言う通りに、後者だと誰もが思った。アリサが

アリサ「その：分らない所を教えてくれたりとかは？」

サラ「あ——無理無理。そういうのは専門外だから。HRは以上。マキアス挨拶して」

マキアス「——はい。起立—礼」

そしてユフィ達の after スクールが始まるのである。

ユフィ side

111204・5・22・夕方・16:15・トールズ士官学院・本校舎屋上。

VII組教室で、みんなと分かれたユフィは、屋上に来ていた。夕陽が校舎に反射しより黄昏さを醸し出していった。

理由は簡単だ、朝言っていた問題をどう片付けて良いものか迷っているというか考えが浮かばないのである。国の抱える問題ではなく、身近な問題、マキアス、ユーシスにマキアス、達也、リン問題にまで広がった。

カトリーナは、“それは本人達の問題”だと言ってくれたが、ユフィにはそんな風に思うことが出来ない。

ユフィ自身も“皇女”であることを隠している。みんなに嘘をついていることに後ろめたさもある。

夕陽に照らされたユフィは、何だか妖艶にも見えるが、生憎マキアスも他の男子達もいない。そして北の方からひんやりとした風が吹き抜けていく。吹き抜けた風がユフィのスカートヒラヒラと揺らす。別に捲りあげるような風ではない。

ふと下を見ると、カトリーナが花壇に水をかけているのを見る。

ユファイ「カトリーナさん、真面目に園芸部に行つてらっしゃるんですね」

普段のカトリーナは、はちゃけたようにも見えるが、ちゃんとやるときはやると今日のクッキー作りでわかったことだ。彼女はしっかり者だと、ユファイは感じたのだ。

そんな感じでユファイはしばらく屋上にいるのだった。

達也 side

—学生会館・学生食堂

ユファイと同時刻、学生食堂、学院生が学生寮に帰る前に、ここで夕御飯を食べていくか、一息をいれるために飲み物を飲むために訪れる場所なのだ。

達也はアリサと共に学生会館の食堂にいた。アリサはラクロス部に行く前に達也と話してきたかった。もちろんマキアスの件で。お互いに紅茶を飲みながら話している。

アリサ「達也、本当に大丈夫なの？」

達也「大丈夫だ。何とかなるだろう」

達也は不適な笑みを浮かべながらアリサにそう言った。

アリサ「そんな笑みで言われても…」

達也「まあ、アリサに心配かけたことは謝る。クッキーのこともだが」

アリサのクツキーも褒めたが、アンジェリナのクツキーも褒めたため、彼女の嫉妬を買ったのだ。それをスハルトから指摘されたのだ。それで達也も考えを改めた。

アリサ「まあ、クツキーのアレは：ちよつと大人げないと言うか：その」

達也「俺はアリサのクツキーが一番だ」

アリサ「な、何を言ってるのよ、達也は。は、恥ずかしいじゃない！」

アリサは顔を赤くしながらも嬉しくもあつた。

達也「アリサの方こそラクロス部は大丈夫なのか？先月はあだつたから」

先月のラクロス部の活動、I組のフェリスとの問題。VII組の達也達とマキアスの問題のようなものだ。ただアリサはフェリスとも仲良くしたいのだが、彼女がその気がないようだ。アンジェリナは、困惑状態である。

アリサ「うーん、それを言われると私もね」

アリサは苦笑いをして、達也から視線を外した。

達也「エマが言っていた。俺達の問題やアリサの問題もきつかけがあれば、解決できるんだつてな」

アリサ「きつかけ：か：。そうなのかもしれないわね」

達也「まあ、きつかけが何なのかはわからないが：」

達也は紅茶を飲みながら考えるが、わかるはずもない。次の特別実習がそのきつかけ

があるのだが、まだ達也やリインが知るよしもなかった。

アリサ「それじゃあ、私は部活に行くわね」

達也「ああ、俺からは頑張れとしか言えないが…」

アリサ「ありがと、達也」

アリサはそう言うと、学生会館の出入口の方へ向かい、グラウンドの方へ向かった。

ハチマン side

111204・5・22・夕方・16:20・図書館。

図書館、ここでは学院生が勉強や本を読んだりするところである。真面目な学院生達がよく図書館で勉強をしていくのである。

ハチマンとラウラは、図書館で勉強をしている。ハチマン的には、さっさと第3学生寮に戻りたかったが、ラウラが勉強を教えてほしいと頼まれたから教えることにした。

ハチマン「歴史…帝国史の他に選択するのって、大体はリベールかガルバードじゃねーのか？なんで日本史なんだ？」

ラウラ「私はハチマンの国の日本の歴史が知りたい」

ハチマン「…まあ、ラウラがそう言うなら教えてもいいが」

ラウラ「ああ、教えてくれ」

ハチマンは、ラウラに簡単に日本史を教えることにした。

ハチマンは、まだ日本の学校に通っていた頃は、休み時間になったら歴史の本を初め色んな書物を読んでいた。友達もいるわけでもなく、誰かと話したいわけでもなかったから、ずっと書物を読んでいたのだ。それが今、役に立っていることに気がつく。

アルテリア法国はもちろん、帝国、クロスベル、リベールは、お節いなヤツが多いと思っている。日本では、ハチマンのことなんて無視している人間がほとんどだが、こちらでは違った。家族でさえ見捨てたハチマンを赤の他人達がそっと抱き締めてくれる。そんなヤツばかりだ。そう目の前のラウラもそうだ。

ラウラ「どうした、ハチマン？ 遠い世界を見ているような表情をして？」

ハチマン「おっ!? そんな表情してたのか俺？」

ラウラ「してたぞ。なんか考え事か？」

ハチマン「いや、考え事というか昔の事を思い出しただけさ」

ラウラ「:!? 日本史: そうだな: ハチマンにとつては思い出したくもない: ことだったよな: :すまない」

ラウラは立ち上がって、頭を下げた謝罪した。ハチマンも慌てて

ハチマン「ラウラのせいじゃない。俺の弱い心のせいだから。でもアイツもトラウマと戦ってるんだ。だから俺も:」

ラウラ「アイツ？」

ハチマン「さつきも言ったけど、お節介なヤツの男の1人さ。ヤツの胸で大泣きしたこつば恥ずかしいエピソードもあるけどな」

ラウラ「友か：それってユファイ達を助けてくれた、教会のステイルって人間か？」

ハチマン「ステイル……。そうだな、俺はヤツの背中を追ってる気がする：目指す目標みたいな……ものかな」

ラウラ「：目指す目標：背中：私にはわかる。ハチマンの気持ちがよくわかる」

ハチマン「ヴィクターさんか：光の剣匠って2つ名があるからな」

ラウラ「ハチマン、お前にも2つ名があるだろ。雷神のハチマンや雷神ヴォルトという……」

ハチマン「大袈裟だな……。別にすごくはないさ……」

ラウラ「別に謙遜は要らないぞ」

ハチマン「別に謙遜なんかしてない。ラウラだって十分に強いだろ？」

ラウラ「いいや、私はまだまだだ」

ハチマン「何だか暗くなつちまったな……。もつと明るい話でも……」

ラウラは何かを決意したかのようにハチマンに向かって

ラウラ「私は、ハチマンと共に強くなりたい、ハチマンの隣に並び立ちたい」

ハチマン「ラウラ……」

ラウラの真剣な表情を見て、ハチマンは目をそらして顔を指でかいていた。ハチマンも女子にそんなことを言われたことがないからなんて答えて良いのかわからないのだ。だからハチマンなりの言葉で

ハチマン「俺は、そんな立派な人間じゃない。誇れるようなヤツでもない。それでも俺を目標にしてくれるのか？」

ラウラ「私は、そなたと出会って、色々わかったのだ。だからその……」

ハチマン「わかった」

ハチマンの中にある不安。それは雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣の事である。

ハチマンは、雪乃と結衣のことを信頼し始めた頃に起こった裏切り。男の依頼を2人が受け、女の依頼をハチマンが受けた。

これが運命の歯車が狂いだした始まりだった。

簡潔的に言えば、ハチマンがしたことは、2つの依頼を破綻させずに解決できる方法だった。2人を気まずい関係にしないために撃って出た作戦。この2つの依頼は、2つを達成させることは不可能に近い。

だからハチマンは、とある男の告白を邪魔し彼に恥をかかせないようにした。

だがこれがイジメという悪夢の始まりでもあった。

学校中からイジメられていた。

家でも地獄だった。妹の小町が雪乃と結衣に謝るまで口を聞かないと言った。両親もハチマンに対して厳しかった。特に父親は、ボクシングのようにハチマンの顔を避け身体中を殴り続けた。顔面は傷が出るからと避けただけだ。

両親は自分達の子供は、小町だけでも言っている。

だからハチマンは、自殺未遂：日本では、死んだことになっている。アルテリア法国にハチマンの墓があることになっている。

日本の東京タイムズの隅の記事に、日本海の海岸に男子高校生の遺体上がる。亡くなったのは、「比企谷八幡君」と載っていた。

総武中学校では、死んでくれて精々したと言われている。

ただ、依頼をハチマンに依頼した女子。ハチマンの告白で恥をかなかった男子、ハチマンの友達と自負していた男子2名。ハチマンの事を気になり初めていた女子。

彼らは、影でハチマンが死んだことをとても悲しんでいた。

比企谷家は、ハチマンの位牌を受け取りを拒否。教会は、ハチマンのお墓の中に位牌を入れた。まあ位牌は偽物だが。

もちろんハチマン本人もお墓があるのは、自身も知っている。だからと言ってハチマ

ンは何とも思っていない。

比企谷八幡は死んだ。今ここにいるのは、ハチマン・ヒキガヤというアルテリア法国の教会関係者つてだけだ。

しばらくそうやって、ラウラに勉強を教えるハチマンであった。

ハチマン「結構、時間が経ったが、部活は良いのか、ラウラ？」

ラウラ「……!?!? そうだったな……。もう時間だな。楽しい時間だとあつという間に過ぎるものだな」

ハチマン「確かにそれは言えてるな」

ラウラ「ハチマンは何か部活に入っているのか？」

ハチマン「いいや、入ってないな」

ラウラ「何か入りたい部活はなかったのか？」

ハチマン「……まあ、そうだな……。俺は帰宅部専門みたいなものだからな」

ラウラ「ならば、水泳部はどうだ？」

ハチマン「水泳部か……ラウラも水泳部だったな」

ラウラ「そうだ。水泳部は鍛錬にはもってこいのものだからな」

ハチマンは、本来なら部活なんかお断りだが、ラウラの頼みであるし、彼女のスクール水着が見たい気持ちもあるのだ。

ハチマン「レグラムの湖で泳いでいたよな」

ラウラ「ああ、そうだな。エベル湖で泳ぐのは最高だ、ハチマンもそう思うだろう？」

ハチマン「確かに最高だったな」

トマス教官の修行の一環でレグラムの湖で泳ぎまくった経歴がある。ハチマンは、その時のエベル湖に沈む夕陽が最高だったことを覚えている。

ラウラ「いつか、また一緒にエベル湖で泳ごうじゃないか」

ハチマン「まあ、いつかな」

ラウラ「約束だぞ。それじゃあ、水泳部が活動するジムナジウムに行くぞ」

ハチマン「：わかった」

ラウラが笑顔で言ったため、ハチマンは断ることが出来ずに、水泳部にいく事になった。

ユフイ side

11204・5・22・夕方・16：30・本校舎・屋上

ユフイは、しばらく本校舎屋上から夕陽に染まる空や北の山々をぼーとして眺めていた。

考える許容範囲を超えたため、思考停止状態になっていた。

ユフィ「…わたくしは、一体どうしたらいいのでしょうか……」

部活動の水泳部の活動時間が近づいているのだが、行く気持ちがあわかない。色んな問題が、ユフィの思考を鈍らせているからだ。

だがユフィの問いに答えてくれる人物はここにはいない。

ただ自問自答だけが続いているだけだ。

そんな時、北の山々の方から強い風が吹いた。ユフィの金髪ロングをなびかせ、スカートを巻き上げた。彼女は慌ててスカートを押さえようとしますが、中々風が強く押さえられない。

ピンクに白の薔薇模様が入ってパンツがモロに見えたが、誰も見てはいないし誰もいなかった。しばらくして風は収まった。

ユフィ「い、一体さっきの風はなんですか？」

ユフィはカトリーナから言われたことを思い出す。「夕方の屋上は、たまに北の山々から強い風が吹くから気をつけてね」と。

ユフィ「…カトリーナさんの仰つてたことは、本当だったんですね」

ユフィは、カトリーナの言つたことは半信半疑だった。ただ信じていれば、ちゃんとガードをしていたのにと、悔しがるのであつた。するとユフィは何か気づく。

ユフィ「あれ？何やら旧校舎の方角から光つた気がしましたか？」

旧校舎方面。普通は誰も立ち寄らない場所である。Ⅶ組メンバーかサラ達のような教官でしか近づかない。

ユフィは気になったので、旧校舎の方へ行ってみることにする。

旧校舎の方は屋上の風と違い、風がひんやりしていて肌寒いくらいである。ユフィは、一瞬ブルつとなった。

ただ相変わらずシーンとしていて不気味な感じがする場所である。そして旧校舎の場所に何故かベンチがある。そしてそこに誰かが寝ているようだ。どうやらユフィがベンチに寝ている。

ユフィは隣に座り、自身の上着をフィーにかけてあげた。何故ならスカートが捲れて、黒のパンツが丸見えになってたからだ。ユフィはちよつと赤くなる。フィーでさえ、大人っぽいパンツをはいていて、自分自身のパンツは子供っぽいと思ってしまったのだ。すぐに頭をブイブイと振り、辺りを見渡す。

ユフィ「それにしてもこの旧校舎の近くに来てしまいますと、益々不思議な感じがしますわね」

前にも説明をしたが、ドライケルス大帝がトールズ士官学院を設立する前から、この地に存在すると言われている。

それは本当になのだろうか？とユファイは考える。今まで誰もわからなかったものが、これから先自分達Ⅶ組が、調べていつて…分かる日があるのかなと。そんなことを考えていたら、ファイが起きたようだ。

ファイ「ん…ふわあぁ——ユファイいたんだ」

ユファイ「うん。ちよつとぶらぶらとしていましたら、ファイさんが旧校舎の方のベンチで寝てらっしゃいましたから」

ファイ「あつ…そうだった。エマから勉強を教えてもらはずだった…。それじゃユファイ行くね。それと上着をかけてくれてありがとうね」

ユファイ「ううん、どういたしまして。でもファイも女の子なんですから、あまりこういう所で寝たらダメですよ。どうしてもダメなときは保健室のベッドで寝てくださいね」

ユファイが保健室のベッドで言っただが、すでに保健室のベッドは使用しているとファイが言った。

ベアトリクス教官、トールズ士官学院の保険室の先生である。元々は帝国軍の衛生兵師団のエキスパートだった人物である。今は退役されている。ファイがユファイのブラ

ウスの袖をくいくいとする。

ファイ「それより…ユファイ気づいてる？」

ユファイ「気づくとはなんでしようか？」

ファイ「この建物。先月からまたかなり構造がかなり変わってるよ」

ユファイ「え!？」

ファイ「じゃーね、ユファイ」

ファイはそう言うのと走って行ってしまった。

ユファイ「かなり変わってる…?」

ユファイは旧校舎の扉の方を見たが、今日は遅いし、明日改めて、達也と入って見る必要があると考えた。

ユファイ「それにしてもファイーさん、旧校舎を1人で調べていらつしやいましたの?でも扉には鍵が閉まっていますし、まさかですわよね?」

そう考えながらユファイは旧校舎から出ることにする。

第2章―白亜の旧都編―30―5話―5・22（16・50）↓5・23（07：15）―自由行動日①

ユフイ side

―11204・5・22・夕方・16：50・本校舎↓キムナジウム

ユフイ「日も暮れてきた事ですし、ギムナジウムに向いましょうか」

ユフイは、旧校舎方面から出て、ギムナジウムへ向かおうとしたら、誰かに後ろから呼ばれた。

クロウ「よっ…後輩ちゃん！」

ユフイ「貴方はスケベ賭け事大好き先輩さんですね」

クロウ「えらい…言われようだな…おい…。で…VII組は中々の活躍をしたそうじゃねーか」

クロウは、ケルディックやパルムの件の事を言っているのだろう。別にユフイだけが活躍したわけではない。みんなが活躍したおかげであるのは変わらない。

クロウ「VII組が活躍してくれれば…よ。俺達も苦労したかいがあるっものだぜ」

ユファイ「俺達の苦勞、ですか？」

クロウ「いやいやこれは気にしないでくれ…」

???「——また君は幼気な後輩ちゃんからたかろうとしてるのかい？」

背後の方から聞き覚えの声が聞こえてた。ライダースーツを着た紫色の髪の女性がやって来た。

クロウ「おっと。現れやがったな」

その女性はアンゼリカ・ログナー。現ログナー侯の長女であり、アンジェリナのお姉さんでもある人物である。

アンゼリカ「ユファイ君…先月の【特別実習】でも見事活躍したそうじゃないか」

ユファイ「あれはみんなの力があつての事ですから。わたくし一人の力ではありませんわ」

アンゼリカ「全く…謙遜しなくてもいいのに。まあそこがユファイ君の良いところだろうけどね」

アンゼリカ先輩に言われると何かと嬉しい気持ちになってくるユファイ。

アンゼリカ「本当ならもつとユファイ君とは話したいことがあるが、そうも言ってもらえないからね。帝都にいかないかね。行くと言つてもこの導力バイクでだけだね。ジョルジュに頼んでいた【導力エンジン】の強化が終えてね。帝都辺りまで走らせるつもり

だがね」

アンゼリカは、気ままに生きているだと、バルムフレイム宮にいるときも、風の噂で聞こえてきていた。ユファイ自身も人のことは言えないが。そのアンゼリカ先輩が、押し持ってきた自転車みたいなのは、導力バイクと言う乗り物である。日本の大型二輪みたいな姿をしているが、エロ先輩ことクロウやトワも、製作は手伝ったようだ。肝心な資金は、アンゼリカ先輩が提供したようだ。元々はルーレ工業科大学の試作品だったが、アンゼリカ達が引き取った。

アンゼリカ「それとユファイ君：以前も言ったと思うが、君と私の仲ではないから先輩はつけなくても良いってね。知らない仲ではないからさ」

ユファイ「アハハ：わかりましたわ。アンゼリカさん」

アンゼリカ「フフ：それでは、いずれ依頼を出すから、ぜひ応えてくれると嬉しいな、それと達也君にもよろしく言ってくれ」

それだけを言うとアンゼリカは、導力バイクに跨がって行ってしまった。やはり大型二輪のようなものである。そしてもう一人の先輩であるクロウが自己紹介を始める。

クロウ「：さてと俺も思い出したが：もう一度言わないといけないかな。2-V組 | クロウ・アームプラスだ。じゃーなユファイ後輩ちゃん。じゃーな。お先に」

エロ先輩ことクロウ先輩は、ユファイに挨拶してから第2学生寮へと帰っていった。彼

女もギムナジウムの方へ歩いて行った。

ギムナジウムに到着すると、女子更衣室で水着に着替えると、プールサイドへ向かった。

11204・5・23・朝・07:15・第3学生寮・306号室にて——

ユフィはいつものとおりに起きて、ラウラ達と鍛練をやつて、シャワーを浴びてから自室に戻っている。

今日は5月に入ってから自由行動日である。他の人間はクラブ活動に励んでいるだろうが、ユフィと達也は今月から正式に生徒会の仕事(依頼)をする事に決まったのだ。誰からも言われたことではない、自分達の意志で決めたことなのだから。

昨日の夜にユフィは、シャワーを浴びて自室に戻るとき、リインが明日の方角を見ながら沈んだ表情をしていたのを見た。彼女には直ぐにわかった。「マキアスとユース」の問題ではなく「リイン・達也とマキアス」の問題が原因だと思つた。その問題には自身も含まれるだろうとユフィも考えている。

決して「マキアスとユース」が問題ないわけではなく、自分の問題も解決してないのに人の問題が、解決できるわけがないと考えている達也もいる。それはそうなんだとユフィも思っている。

見て分かる通り、マキアスから言われたこと、達也よりリイン自身は結構こたえてる。みんなの前では元気に振る舞ってるように見えても、ユファイには無理やり笑顔を作ってるようにしか見えない。彼女が、リインに何かしてやれないかどうか言ってみただ、自分で解決すると言われたのだ。

ユファイ自身も、マキアスとの問題を解決できていないのに、リインやタツヤの事まで、手が回らないのだ。

ユファイ「つまり、時間の経過を待つしかありませんわね」

とにかく今は生徒会からの依頼をこなすことに専念するユファイであった。

ユファイが準備を整えて、1階の郵便ポストまで来てみたら、既に達也は来ていて依頼書を見ているようだ。ユファイは達也に

ユファイ「おはよう達也。相変わらず早いのですね。鍛練もしていらつしやるのに」

達也「ユファイか、おはよう。鍛練はいつものことだからな。それとリインから言付けをもらっている」

ユファイ「リインからの言付けですか？」

達也「ああ、ユファイ、心配してくれてありがとうって」

ユファイ「そう、リインが：ねえ、達也、貴方は気にしてないのですか？」

達也「…俺はリインほど気にはしていない。俺もリインも生まれを偽りを言ったから、マキアスに嫌われたのだからな」

ユフィ「嫌ってるって…」

達也「こういうのは、時間の経過がなんとかしてくれのを祈るしかない。俺もアリサやエマにそう言われた。何かきっかけがあれば…」

ユフィ「時間の経過ですか…」

達也「ユフィ、今は生徒会からの依頼をかたすのが先だ」

ユフィ「そうですね」

ユフィは達也から依頼の紙を渡してもらい依頼の内容を見る。

—— 依頼の紙の内容 ——

【旧校舎地下の調査②】

【代理教師の要請】

【教官用図書の配達】

【1】

【件名—旧校舎の調査②—必至】

【依頼者—ヴァンダイク学院長】

先月に引き続き、旧校舎地下の調査を特科クラスⅦ組に依頼する。かの場所で起きている、多くの不可思議な現象について調べてほしい。万全に準備を整えて上で諸君らの判断で始めてくれたまえ。

———
 《ヴァンダイク学院長》
 ———

〔2〕

【件名—代理教師の要請】

【依頼者—クレイン】

急用ができたので、できれば家庭教師の仕事を代わってもらいたい。第2学生寮に待っているので詳しくはそちらまで———

〔2—Ⅴ組、クレイン〕

〔3〕

【件名—教官用図書の配達】

【依頼者—ケインズ】

士官学院の方から注文を受けた教官用図書を入荷したのでそれぞれの個別の配達をお願いします。詳しくは《ケインズ書房》のケインズまで。

ケインズ

ユフィと達也は、5月の依頼を開始することにした。

11204・5・23・朝・07:25・第3学生寮↓第2学生寮

ユフィは、達也と第3学生寮から出て、依頼主の水泳部部長のクレイン先輩がいる第2学生寮の前までやって来た。ここは平民の生徒達が住んでいる寮である。そして、あちの高台に見えるのが第1学生寮、貴族専用学生寮ってことになる。

ユフィ「クレイン先輩は、家庭教師の代役を努めてほしいと仰ってますわ」

ユフィはセドリックやアルフィンに勉強は教えてたからなんとかなると思っているが、期待と不安がある中で第2学生寮に入った。

ユフィが第2学生寮に入ると、周りの一般の生徒達まで見てくる。やはり特科クラスⅦ組は注目的であると、彼女は再認識させられた。ユフィはクレイン部長が、第2学生寮の2階へ上がる階段横の掲示板が立っているのを見て、さっそくクレイン部長に話しかけることとした。

ユフィ「クレイン部長、ちよつとよろしいでしょうか？」

クレイン「うん…? ユフィ君…キミがきてくれたのだな」

ユファイ「はい。依頼内容は確か家庭教師のお仕事を変わってほしいと聞いて参りましたか？」

クライン「ああ、普段俺がやっているアルバイトになるんだがー」

クライン部長は、ユファイにワケを話してくれたのだ。昨日の夜に御実家から、導力通信で連絡があり、お母様が突然倒れられたと。急遽午後の列車で田舎に帰郷するということだ。クライン部長のお母さんに何事もなければいいなと思うユファイ。

ユファイ「…クライン部長：お母様を…大切になさって下さいね」

クライン「もちろんだとも。で家庭教師の仕事の場所はこの第2学生寮のすぐ南にある川沿いの邸宅だ」

教える相手はエミール君で、窓口になるお母様の名前はメリツサさんである。後はユファイが、やるかどうかの判断は任せるとクライン部長が言ってくれた。今回の事情のことはメリツサさんにも、話しはつけてくれたみたいである。さっそくユファイは、川沿いの邸宅に向かうことにした。教えるところは「導力学」。ユファイ自身もなんとか教えられるところでほっとしていた。

川沿いの邸宅にたどり着き、玄関のチャイムを鳴らした。中からお母さんと思われる女の人、メリツサさんが出て来られた。

ユフィ「すみません、クラインぶ、クライン先輩の御紹介で伺ったのですが？」

メリツサ「まあ、それじゃ貴女が代理で教えて頂けるのね。クラインさんには気を遣わせちゃったけど、本当にありがたく思ってるわ。まさか女の子が来てくれるなんて考えてもいなかったわ。本当にありがとう。ではすぐに始めてもらって構いませんか？」

ユフィ「ええ、よろこんで」

ユフィはメリツサさんに連れられ、エミール君のお部屋まで案内される。ユフィは深呼吸を一回してからエミール君の部屋に入る。

ユフィ「エミール君、こんにちは。自己紹介をさせてもらいますね。わたくしはトルズ士官学院1年VII組のユーフェミア・レンハイムです。エミール君、今日はよろしくね。後、わたくしのことは、ユフィで構いませんわ」

エミールは、ユフィを見てソワソワしている。男子特有の思春期である。自分の部屋に女性が来たから緊張しているのだ。

ユフィ「エミール君、どこか具合でも悪いのかな？」

エミール「たたか…い、いえ…何でもありません。あの女性の方が来てくれるなんて、思ってもみなかったのので驚いてるだけです」

ユフィ「…そうなのですか…？」

やはりそうである。男子特有の思春期で間違いないのだ。しかしこればかりは、深

く追及してはならない。

エミール「先生、ごめんなさい。始めてもらって結構です」

ユフィはエミール君に言われて、我に返り家庭教師の授業を始めることにした。

ユフィ「——参考書の40ページ：なるほどですわね。この辺りは技術というよりは、歴史関係ですわね」

エミール「はい、ちなみに前回の『導力革命』の起源について勉強したんです。それまでの人々の生活を瞬く間に変えてしまった。まさに革命と呼ぶべき技術革新：その始まりについてはユフィさんも知ってますよね？」

ユフィ「それはもちろん約50年前のことですわね」

エミール「えへへ、何だか常識って感じですね。流星に士官学院に通ってる方は違いますわね」

ユフィ「うふふ、別にそこは関係ないと思いますよ」

エミール「ちなみに導力器を最初に発明した人についてもご存知ですよね？」

それはもちろんあの方しかいないだろう。

ユフィ「エプスタイン社ですわね。博士が亡くなった七耀暦1155年—あとに遺されたお弟子さんのみなさんと、エプスタイン財団を設立されたのですよ」

エミール「わわっ、博士の名前から一気にそんな情報まで——えへへ、やっぱりユフィ

さんはすごいですね」

ユファイ「…あつごめんなさい。今のじゃあ説明がわかりづらいですよ。とりあえず、今日のこの辺りまでの知識を改めておさらいするとしましょうか」

ユファイとエミール君はおさらいをやった後に、1170年代まで進めることにした。

ユファイ「—というわけですね。ここまでは理解できましたか？」

エミール「そうですね。一応大丈夫です。…ですが驚きました。あの巨大重工業メーカーラインフォルト社が昔はひとつの工房だったなんて」

ユファイ「そうですね。中盤で触れた「ラインフォルト工房」ですね。導力革命というものがもたらした様々な変化…その中では最も大きなものの一つと言えるでしょうか」

エミール「確かに色んなところに影響を及ぼしていますからね。ちなみにこの参考書には書かれていないようですがちなみに、「ラインフォルト工房」は元々どういう物を専門に作っていた工房でしょうか？」

ラインフォルト工房、火薬式の銃や大砲などを製造してたのが最初の頃である。

ユファイ「そうですね。火薬式の銃や大砲を製造してたのですよ。武器を作ってるのよ。歴史はかなり古くて、中世時代まで遡りますね」

エミール「へえ：そんなんですか。どうもありがとうございます。ユフィさんは物知りですね」

ユフィ「ありがとうエミール君。わたくしなんかでもお役に立てて」

ユフィがそう言った途端に、時計のアラームがなり、家庭教師の時間が、終了を告げられた。少し名残惜しいかもとユフィは思った。

エミール君の部屋から、玄関までやってきて、ユフィとエミール君とメリツサさん。メリツサさんはユフィに労いの言葉をかけ、彼女も正直ほっと安心したのだった。エミール君にもクライン部長と同じように教えるのが上手いと逆に褒められてしまったユフィであった。

メリツサ「：ふふ息子も喜んでいようで何よりです。それでは、こちらが今日の謝礼となりますわ」

ユフィは謝礼のミラを受け取る事はできないと、言ったが、エミール君に御仕事なんだから、当たり前だと言われたので素直に受け取ることにしたのだった。

ユフィ「ふふっ、どういたしまして」

エミール「改めて、今日は本当にありがとうございます」

ユフィは、二人に挨拶を交わして邸宅を後にしたのだった。

第2章―白亜の旧都編―31―6話―5・23（09：40～）―自由行動日②

1―1204・5・23―09：40―川沿いの邸↓本校舎へ向かう途中。

ユフィは家庭教師の依頼を終わらせて、学院の方に戻る最中に、ある緑色の制服の生徒に話しかけられたのだった。

セリス「あなたⅦ組のユフィさんよね？」

ユフィ「ええ、そうですが、貴方は？」

セリス「あたしは、Ⅳ組のセリス・レインバード。よろしく！」

赤色いや深紅の髪の色にツインテールに結んでいて、なんだか人懐っこい感じの子だとユフィは思った。

ユフィ「知ってらっしゃるかと思いますが、改めて自己紹介をしますわ。わたくしはユフィ・レンハイムと申しますわ。ユフィで構いませんわ」

ユフィとセリスは握手を交わした。

ユフィ「セリスは、サザーラントから参られたのですね」

セリス「そうだよ。あたしには、帝都の方が羨ましいかな」

ユファイ「どうしてかしら？」

セリス「…そりやあたしは、都会が大好きなもの。色々手に入るでしょ？」

確かにサザラントよりも帝都が良いと思える時もあるだろう、サザラント以外の地域の人も帝都が良いと褒めるであろう。これも内から出てないと分からない感覚だっただろう。セリスが言う女の子の流行物は、帝都にしか置いてないものが結構あるから、帝都に憧れる女子は多いだろう。

セリス「話は変わるけど、ユファイって、生徒会役員なの？」

ユファイ「え!？」

セリス「生徒会の依頼みたいなのを、4月からやってない？」

ユファイ「やってますわ。トワ生徒会長から依頼されました。それに私1人でやるわけじゃありません。同じクラスの男子と一緒にやってますからね」

セリス「ふーん…そうなんだね。でも嫌じゃないの？自由行動日に自由じゃないの?」

ユファイ「嫌ではありませんわ。わたくしは好きでやってることですし」

ユファイは好きでやってることなのだ。兄や弟の手伝いをしていくうちにこう言うことが、好きになっていった。そのおかげで人脈にも幅広くなったのは言うまでもない。

そしてトールズ士官学院に入学して、みんな成長している。ユファイ達B班は、パルムで、テロリスト達と戦い、達也達A班もケルディックで帝国の内情を知ること出来た。だがこれは今から起きるであろうことの一旦しかないのだから。

ユファイのことも、オリビエと誰かがこんなことを言っていた。

「ユファイは、ユーフェミアは、この国の…いや西ゼムリアの英雄になるかもな」

その後、ユファイが入ったので、冗談冗談つての笑つて誤魔化し、彼女は一瞬オリビエの表情がそうであつてほしいとしていたのを見た。そんなことを思い出していたらセリスがユファイの顔を覗きこんでいて

セリス「あのユファイ? どうかしたの急に黙りこんで?」

ユファイ「ううん…何でもありませんわ。ただ今月の実習先はどこかしらつてね」

セリス「あつそう言えば、VII組には特別実習があるのよね。確か現地まで行つて実習をするんだよね?」

ユファイ「そうですね。学院にいるだけではわからないことなどわかるようになることかしら」

セリス「ふーん…」

ユファイの説明ではわかりずらいかもしれない。エマやマキアスなら上手く説明でき

るだろうがユフィにはちよつとそれがない。

?? 「セリス!どこにいるの?呼びだしのはセリスでしょ?」

学院の方からセリスを呼ぶ声がある。3人の女の子のグループからだ。

セリス「ユフィ…ゴメンね。続きは次回に。クララ…ごめんちよつと……」

セリスはそう言いながら、3人の女の子グループの方へ歩いていき学院の方へ歩いて行った。

ユフィも学院の方へ歩いて行くことにした。

ユフィは、ふと本校舎の2階の美術室の側を歩いていたら、ガイウスが真剣に考えていたので、話しかけるか迷ったが、結局は話しかけることにした。

ユフィ「ガイウスさん、やはり迷惑でしたか?」

ガイウス「いやユフィ、気にしないでくれ。今は部長の指示でデッサンをやっている。枚数を描いて、少々疲れたから休んでるだけだ」

ユフィ「ウフフ…ガイウスさんは頑張ってるんですね」

この際だからとユフィは、ガイウスが絵を描いてるところを見てみたいと思いガイウスに聞いてみた。

ユフィ「ガイウスさん、隣で見てもよろしいでしょうか?」

ガイウス「ああ、構わないぞ。良かったら色々アドバイスでもしてくれ」

ユフィはあまり絵のことはあまりわからないが、素人目で見てわかるものなのかと思った。だが素人目ユフィでもガイウスの絵が上手いことは歴然だった。それでもガイウスの絵には何が足りないような気はしたが、ユフィにはそれがわからないかった。

ガイウス「少しは上達していると嬉しいんだが。おかしなところがあつたら遠慮なく指南してくれ」

ユフィ「はい、わかってますわ。それでガイウスさんは故郷を絵にかいてらっしゃるのですよね？」

ガイウス「ああ、独学で風景画などを描いてしまった。ここの部長には一蹴されてしまったが」

ユフィ「どうしてまた？」

ガイウス「部長が言うには、俺は「感覚」だけで絵を描いていて基本がなっていないらしい。見たままを自分のものにしてとアドバイスをもらって、先月から、ひたすらデッサンをつづけていく。この間100枚くらいに到達したところだったか？」

スゴイと言う言葉しかないと感じるユフィ。それにあれを黙々とこなすガイウスはスゴイの一言だと思った。

ユフィ「でも、大変なんじゃありませんか？」

ガイウス「ああ、苦にはならないな。【見たまま】を自分のものする。それにこの国でやりたい事でもあるからな」

ユファイ「ガイウスの故郷ですか？」

ガイウス「ああ、言つてなかつたか？俺の故郷は帝国の北方ノルド高原という場所だ」

授業でも出てきたノルド高原、アルノール家皇族にとつて大切な場所だとされている場所だ。そしてノルドの民は帝国の友、ドライケルス大帝の挙兵に応じて、共に戦つてくれたノルドの民の人達。

ユファイは、一度兄であるオリビエやカズヤ・アレイスターに連れて行つたことがあるのだ。もちろんお忍びで、旅の演奏家の兄妹という設定で。

ユファイ「ノルド高原…また行つてみたいですね」

ガイウス「そうか、ユファイは一度、オリビエさんやカズヤさんと来ていたな。機会があればみんなをノルドに招待したいものだ」

ユファイ「その時はよろしくお願いしますわ。それと絵が描けたら、わたくし、見てみたいですね」

ガイウス「フフ、分かつた。良いものを描きあげると約束しよう」

しばらくガイウスと話していて、ガイウスが再開すると部長さんにも一礼をやって、

ユフィは美術室から出たのだった。

—11204・5・23・10:45・本校舎の外

ユフィが、学院の本校舎の外に出て達也を待っていたら、ある男性に話しかけられた。その男性は、灰色の髪の色でマシユルムカット姿であり、それも格好はリクルートスーツ姿である。

悠「君、ちよつと済まないがサラ・バレスタイン教官はどちらにいらつしやいますか？」

ユフィ「サラ・バレスタイン教官ですか？」

ユフィは、今話しかけられている男性は初めて見るが、何だか他人という感じでは無い。それがなんでなのかわかるのは、ちよつと先になるのだが。今はわからないユフィである。

悠「お、コホン、私は、悠・鳴上と言う者だが、サラ教官を探しているんだが、君は分かるかい？ どうやら教官室にはいないみたいで探してるのだよ」

悠・鳴上と名乗った男性は、サラ教官をお探してるようだ。確かサラ教官は今日は第3学生寮にいるとか言っていたはずだ。

ユフィ「サラ教官なら多分、第3学生寮にいらつしやるんじゃないかかしら」

悠「第3学生寮か。でも俺、第3学生寮とか知らないぞ」

ユフィは サラが第3学生寮を知らないと言った悠を見て、トリスタでは初めてののりアクションをやってくれた。

トリスタの人は、駅の側の建物が第3学生寮であることはご存知の方が多い。だからユフィは悠に教えてあげることにした。

ユフィ「悠さん、私が第3学生寮までお連れ致しますでしょうか？」

悠「連れてってくれるのか？ ありがとう、えーと」

「ユフィ、わたくしの名前は、ユフィ・レンハイムですわ」

悠は、ユフィの名前と容姿を見てピンときた。オリビエの妹であることも。だが悠は言わなかった。そしてユフィは悠を第3学生寮に連れて行った。

ユフィ「ここが第3学生寮ですわ。3階建ての2階が男子エリアで3階が女子エリアです。それとサラ教官は301号室ですわ。一緒に行きましますか？」

悠「いや、気持ちはありかたいが、ここまでいいよ。ありがとう、ユフィ」

ユフィ「別に構いませんよ」

そう言う悠は、第3学生寮の中に入っていった。ユフィはそれを見送った後は、再び学院の方へ歩き始めた。

ユフィは歩きながら考えていた。悠と名乗った遊撃士は、サラ教官となんの話をする

ユフィ「…コホン…：そんなことより、先輩は誰かと待ち合わせしてるのでしょうか？」

クロウ「ビンゴ。そう…：待ち合わせてる途中でね。つーかアイツら時間くれー守れつての」

ユフィ「…でも時間にルーズなのは、先輩の方だと思われませんが？」

クロウ「あんだとくユフィ！…：まあ否定はしねーけど」

ユフィは、クロウが誰と待ち合わせてるのか気になっている。まさか彼女と待ち合わせ？彼女はナイナイって首を横に振る。だが気になる性分であり、ユフィもご一緒させてもらうことにする。

ユフィ「クロウ先輩、迷惑ではありませんなら、わたくしもご一緒させてくださいませんか？」

クロウ「…：ん？別にいいぜ。そうだなあ、せっかくだし、ユフィも混ぜてやっか」
クロウがそう言った直後に、トリストアの街の子供である男の子2人がやって来たのだ。クロウは遅刻だと言ってるし、男の子達は謝っている。遅刻した理由は男の子達は、よそ見をしていて遅刻してみたんだ。

クロウ「つたく次からはペナルティな」

カイ「へへ、分かってるって。そんなことよりさっそく始めようぜ」

そう言つてクロウと子供達が、ブレードを取り出してから遊び始めた。

ブレードかあ、4月の特別実習に行くときにブレードをやっていたユフィ達。彼女が懐かしいなと思ひ出していたが、どうやらブレードの方が盛り上がつて来た！。

クロウ「喰らいやがれー！」

カイ「むむ！やつたな！」

子供②「カイ、頑張つて！」

なんだかんだ言いつつも、クロウつて面倒見がいいようだ。少し見直すユフィであつた。

クロウ「よかつたら、ユフィもやつていくか？賭け（B F T）は3からだぜ」

前回撤回、子供相手に賭けてるなんて最低なことである。

クロウ「なに睨んでるんだよ？賭けてるつても飴玉とかだぞ」

クロウ曰く飴玉を賭け事に使っているようだ。

ユフィ「それにしたつて子供相手に大人気ないでしょう」

クロウ「はっ！甘いユフィ…。大人も子供も関係ねえ。こいつは真剣勝負なんだからよ」

真剣勝負。ユフィがいつも兄オリヴァルトに勝負をしかけて、負けてもう1回つて繰り返していた。今の男の子は、昔の自分のようだと言ふ姿を重ねていた。そして勝負は佳境

に。

攻勢をかけたつもりクロウは、カイの罠に引つ掛かり試合終了した。

子供②「わーいカイ！勝った」

カイ「へへん！どんなもんだい！」

クロウ「うえ……。また負けちまったよ！」

カイ「兄ちゃんのおかげで、おやつには困らないからね」

クロウ「にやろろ！これ以上負けてたまかつよ！」

どうやらクロウとカイとは、強さが真逆だった。クロウが子供達に巻き上げられてるという構図。ブレードに年下も年上も関係ないようだ。

なんだかユファイもオリヴァルトとやってたころを思い出してブレードをやりたくなってきた。

ユファイ「クロウ先輩、今度は私がお相手を努めましょうか？」

クロウ「よしユファイ、やろうじやねーか。泣きべそかいても知らねーぞ？」

ユファイ「そっくりそのお言葉をお返しして差し上げますわクロウ先輩？」

そしてユファイとクロウのブレード勝負が始り、真剣勝負名のもとに白熱していき、10戦対戦してユファイの8勝2敗で圧勝という結果に。

対戦後のクロウは、何かの抜け殻のようにイスに座っていた。ユファイは大丈夫かと心

配になったが、子供達はいつも感じでかかなり落ち込んでるようにも見えるが、明日になれば、すぐに元気になります、と子供達言われたのだ。

ユフィはそれを聞き、苦笑いをしながら、キルシエから、外へ出ていった。

第2章―白亜の旧都編―32―7話―5・23 (12:i 5)―自由行動日③

111204 ・5・23・12:15・旧校舎の外。

ユフィと達也はすべての依頼を終わらせ、学院長の依頼である旧校舎の依頼をするために、ユフィと達也は、旧校舎入口で一緒にやってくれるクラスメイトを待っている。達也がユフィに

達也「:とところでユフィ、家庭教師の方はどうだったんだ？」

ユフィ「とてもわたくしの為になりましたし、それにエミール君もとても良い子でしたわ」

達也「そうか。なら良いんだ」

ユフィ「なぜそんなことをお聞きに？」

達也「別に大した意味はないさ。ただ報告書がトワ会長のところに来ていて、家庭教師先の奥様や子供さん達が、ユフィのことを褒めてたからね」

ユフィは、正直不安だった。代理で来るとはいえ、クライン部長の顔に泥をぬるわ

けにはいかない。セドリックやアルフィンの勉強を教えた教訓が、生かされたことになる。

ユフィ「ところで、達也の方はどうだったんですか？」

達也「俺の方はよくあるパターンだな。遊撃士みたいな依頼だな」

ユフィ「そう遊撃士みたいですか。おそらく今月の特別実習も」

達也「俺も多分そう思う」

ユフィと達也と世間話をしてたら、アリス達がやって来たので、話をやめて、旧校舎の方へ向き気持ちを引き締めて入ることした。

今回、ユフィ、達也の呼び掛けで来てくれたのは、リン、ハチマン、エリオット、スハルト、アリス、ラウラ、カトリーナである。

エリオット「ここに来るのはだいたい1ヶ月ぶりかあ。ちよつと怖いけど…やつぱり放っておけないよね」

エリオットが開閉一口目でそんなことを言いだした。みんな少なからず怖い気持ちはあると思うけど、みんなと一緒にだからなんとかなるってユフィは思っていた。達也が2番手に口を開く。

達也「ああ、学院長の依頼でもあるし、少しずつ調べを進めないとな。みんなまたよろしく頼むよ」

ラウラ「ふふ、心得た。《Ⅶ組》メンバーとして、しかとハチマンと共に協力させてもらおう。『魔物』とやらが現れても相手にとつて不足はない」

ハチマン「まあ、ラウラと共に頑張らせてもらうさ」

カトリーナ「ユファイ、達也さん、任せて下さいね」

ラウラとハチマンの言葉は安心をくれるとユファイは思った。もちろんカトリーナもだが。

アリスが建物の構造がかわるなんてあり得ないみたいに、話していて、ハチマンが直接自分で見た方がいいと、言った。確かに自分達の目で見るのが一番早いし、説明をするよりは断然良いだろう。

ユファイ達は扉の向こうに行ったら、4月の時と再び構造が変わっていることに、アリス、ラウラ、カトリーナ以外のメンバーも驚いている。ですら驚いてますからね。達也やハチマンは

達也「2日前にサラ教官が入って調べてたらしいが、その時は何も異常はなかったみたいだが……」

ハチマン「何者かが侵入して、仕込んだにしては大掛りすぎるな。再び構造が変わったと考えるのが妥当か」

リン「そうだな、誰かが侵入すれば何かしらの痕跡が残るはず。だけど、そんな痕

跡すらない」

サラ教官が2日前に旧校舎に入ったときは、まだ構造が変わっていない。昨日そう言えればフィーがこんなことを言っていた言葉をユフィは思い出す。

フィー「この建物。先月からまたかなり構造がかなり変わってるよ」

フィーの言葉を当てはめて考えれば、サラ教官が出た後から、フィーが入るまでの間に構造が変わったということになる。ラウラが

ラウラ「なかなか興味深い場所のようだ」

ハチマン「ラウラは、こういうの好きだからな。まあとにかく調べるしかないだろう」
達也「そうだな、ここで立ち止まっても、仕方がない。まずはあの台座のような装置がなんなのか調べて見るとしようか」

達也の一声でみんなが、台座のような装置に近付く。これは昇降機か何かに見えるが、アリサだけが何やら頭をひねって何かぶつぶつと言っている。

アリサ「ええっと……ちよつと待ってて。……うんやつぱりここから第2層まで降りれそうよ。まだ下がありそうだけど、その先はロックされてる見たいね」

達也「確かにアリサの言うとおりだな。しかし、随分と下位下層まであるな」

ハチマン「……なるほどな」

スハルト「ハチマンもわかるのか？」

スハルトがハチマンにそう聞いている。ユフィも達也、アリサもいやリインやエリオツトも驚いてるようで

ハチマン「何？この空気？俺が機械系に強いのが可笑しいのか？」

みんなが驚いている中、ラウラだけは当然の反応で

達也が台座のような装置を隅々まで調べながら

達也「いや、おかしくはないさ。アリサもカトリーナもユフィも女子としては上出来だからね。それにこの昇降機、型番、製造年月日も記載されてないし、ただ2つだけ言えるのは、旧校舎自体とこの昇降機は同じ中世だと言えることと4月に探索した場所が第1層と言うことか」

アリサ「わ、私もよりもリインの方がすごいと思うけど？」

達也「俺は、アリサの説明から導きただけだ」

アリサ「私は、別に：達也のために：」

そんな2人を見て、スハルトが笑いながら

スハルト「：達也にアリサ：イチヤイチャするつもりなら俺達がいなくてよろしくよ」

アリサ「べ、別にイチヤイチャなんかしてないわよ！さあそんなことより下に降りるわよ！」

アリサの操作により昇降機は下に降りて第2層にたどり着いた。ただ扉だけは先月と同じように見える。ただおそらくはあの奥には「魔獣」がいるのだろう。そんな気配を感じているユファイ達。達也はみんなに

達也「みんな、決して無理はするなよ」

アリサ「ええ、いきましよう」

アリサがそう答えて、ユファイ達は第2層を探索開始する。

第2層は第1層よりも、魔物が強く構造も多少は複雑になっている。戦術リンクを駆使して魔物を倒していく。再び最奥の方でボス、第2層の番人みたいなものと戦闘になり、前線組は、達也、ユファイ、ライン、ラウラで後方組がハチマン、アリサ、エリオット、カトリーナである。遊撃にスハルトが当たる。

達也とアリサで戦術リンクを組み、ラウラはハチマンと組み、ユファイはエリオットと組み、ラインはカトリーナと組んだ。

ユファイはエリオットの援護射撃をもらいながら、接近戦で攻撃を仕掛ける。一番息が合ってたのはラインとアリサである。しかし達也は何かずっと考えているようで

ユファイ「どうかさされましたか、達也？」

達也「うん？ユファイか。いや気になったことがあってね。4月：1ヶ月前と同じだな

と。前回も最奥でボスが現れたが今回も：最奥でボスが現れた：」

ユフィ「そう言われれば！」

エリオットが、だけの言ったことに思い出したように言つてハチマンはハチマン「単なる偶然じゃないのか？」

達也はまだ確証はないから何とも言えないらしい。とにかく、これ以上は探索不可能のようですので、ユフィ達は地上に戻ることにした。

111204・5・23・16：30・本校舎・学院長室

そしてユフィ達は、この事を学院長に報告するため学院長室に行くことにした。

ヴァンダイク「更なる地下へと降りる昇降機、まさかそんなものが現れるとはのう」

サラ「あたしが2日前、1週間前に調べてたときには確かにそんなのはなかったのに……むむむ……狐につつまれた感じだわ」

ユフィはフィーとの会話の時の事を言つた方が良いと思ひ話し出す。

ユフィ「サラ教官、わたくしから宜しいでしょうか？」

サラ「ユフィ、何かしら？」

ユフィは例の事を言つて見ることにする。

ユフィ「2日前にもサラ教官は、旧校舎に入られたんですよね？」

サラ「ええ、そうよ」

ユファイ「実はファイが、昨日1人で旧校舎に入ってたみたいなんです。その時はすでに構造が違うと言っていましたわ」

ファイが1人で言ったが、達也やハチマンとスハルトはファイは強いから大丈夫だろうと。サラ教官は1日で構造が変わるとはびっくりしていて、ヴァンダイク学院長も。

まだ答えを導き出すにはまだ早いし結論にはいたらない。

ただユファイ達が、入学式でオリエンテーションをやったときまでは、ユファイ達がサラ教官に、落とされた階までしかなかったみたいだ。

そしてヴァンダイク学院長は、もしかすると「ドライケルス大帝」に関係するかも知れないと話してきた。それを聞いてアリサが

アリサ「獅子心皇帝が？」

ヴァンダイク「うむ、学院が設立されてから、歴代の学院長には大帝からの『ある言葉』が伝えられている。あの建物：旧校舎を『来る日』までしかと保存するようにと『な』

エリオット「来る日とはなんですか？」

来る日ってなんだ？ユファイもエリオットと同じ事を思っていて、ハチマンは何かを考

えている。ヴァンダイク学院長は続けて

ヴァンダイク「その言葉の意味するところは未だに分かっておらん。250年前の【獅子戦役】そして聖女【サンドロット】にまつわる話だという説もあるからのう」

アリサやラウラやカトリーナが

アリサ「聖女サンドロット」

ラウラ「槍の聖女ーリアンヌ・サンドロット…【獅子戦役】の時代、大帝と共に【鉄騎隊】を率いて戦場を駆け抜けた救国の武人」

カトリーナ「聖女サンドロットの話は小さい頃よくお父さんに聞かされたな」

後は七耀教会にも聖女として設定されていますし、帝国の人間なら誰でも知っていますよ。ガイウスも

リイン「俺達の故郷のユミルにも聖女の話は伝わっているからな」

アリサが

アリサ「聖女には確かに、様々な伝承やミステリアスなエピソードがありますけど…それもあの旧校舎に関係があるということですか？」

ヴァンダイク「確かなことは言えんのう。確かに最近になって起き始めた異変…かの大帝の言葉が全くの無関係ともおもえじやろう」

達也「そうですね。来る日」が一体何なのか…わからないことには…」

達也がそう言った後に、ユフイと達也の頭が急に痛くなりました。それはリインも同じで、エリオットにつかまってるようだった。達也はアリサに捕まっていた。ユフイはカトリーナの肩につかまっている。

カトリーナ「ユフイ！大丈夫なの？」

ユフイ「ええ、大丈夫ですわ。ただ頭が痛いだけで……」

エリオット「リイン、大丈夫なの？なんだか具合が悪そうだよ？」

リイン「大丈夫だ。ただ目眩がしただけさ。もう大丈夫だから」

アリサ「大丈夫なの、達也？」

達也「大丈夫、すまないな、アリサ」

スハルト「達也、リイン……お前ら、ユーススやマキアスの事でかなり悩んでるだろう？」

達也「スハルト……まあな。だが自分達とマキアスの事もあるからな」

リイン「マキアスの事で色々考えてはいるんだけど、中々解決策がわからなくてさ」

達也とリインは、そこまで悩んでいた。達也、リイン自身は自分の問題は自分で解決しないとて言われているユフイだから見守るしかできない。達也達のは疲労で、ユフイの頭痛は一体なんだろう？同じく疲労なのか？

そうユフイが思った時、ふと彼女の頭の中に何かが流れた。

「来る日……流星が流れし時……緋に生まれし者……灰に生まれし者……、翡翠に

生まれし者、七の縁者の者共に運命の壁打ち破らん……」

ユフィは、それ以上は読み取ることが出来なかった。緋、灰、翡翠がなんのことを言っているのか、七の縁者達というのは、トールズ士官学院特科クラスⅦ組のことを指しているのかは、誰もわからない。具合が悪そうにしている3人を見て

サラ「ユフィ、達也、リイン、あなた達は、今日は早く休みなさい」

ユフィ「サラ教官、はい、わかりましたわ」

リイン「はい」

達也「…いえ、まだやることが…」

アリサ「達也、残りは私がやっておくから安心して休んで」

達也「アリサ…わかった、頼んだぞ」

アリサ「任せておいて」

サラ教官やⅦ組の仲間から休めと言われたユフィ、達也、リイン。彼らの仕事は、アリサやハチマン達に引き継がれて終わらせたのだった。

111204・5・23・夕方・18:10・ジムナジウム

ハチマンとラウラは、ジムナジウム内のプールで泳いでいる。30分前までユフィ達の仕事をやっていたのだ。もちろんアリサも手伝ったのだが。アリサは達也の残した

仕事を片付けて、再びラクロス部に戻って行ったのだ。ハチマンとラウラは、ユフィの仕事の残りを片付け、リンデ&ヴィヴィの依頼もこなしたのだった。

ラウラ「まさかあの2人が双子だったとはな」

ハチマン「見た目は、リンデとヴィヴィ共に似てるが、性格は違うみたいだな」

ラウラ「そうだな、ハチマンにも妹がいたんだったな」

ラウラはハチマンの方を向いて聞いてくる。ハチマンは突然にそんなことを聞かされたためビツクリする。

ハチマン「いきなりだな。前にも言ったかもしれないが、妹は1人いる。だがアイツは、俺を見捨てたんだ。だから俺には妹なんかいねえーな。兄貴分や姉貴分ならいることになるのか」

ハチマンの兄貴分、姉貴分、それは守護騎士の彼らのことである。彼らはハチマンのことを弟分だと認識している。

ラウラ「教会の人達だな」

ハチマン「まあな。ステイルを含めお節介焼きが多いんだよな。でもそれがあのときの俺は嬉しかった。だから褒められもせず、認められなかった俺は、あいつらの前で大泣きもしてしまったが…」

ラウラ「ハチマン、私は何があるともそなたと共にありたいと思っている。まだ腕

は、そなたにも及ばないが、いずれはそなたと共に並びたいと思っている」

ハチマン「ラウラ……ふつ、ありがとな」

ハチマンはラウラに感謝している。彼女の叱咤激励で、今までやってこれたのもある。過去の事を思い出し、恐怖したこともあるが、ラウラとなら乗り越えられるかもしれないと思えるぐらいまで成長したのかもしれない。

ラウラ「さて、もうひと泳ぎするか」

ハチマン「そうだな」

ラウラは先に泳ぎ始める。それを見送ったハチマンは、ラウラのスクール水着を拝んだ後、彼も泳ぐのであった。

111204・5・23・夜・22:30・第3学生寮・202号室

アリサは、ラフな格好で達也のレポートを変わりに書いている。夕方、ハチマン達とユフィや達也の残り仕事の分担をやってなんとかこなしたのだった。あとは達也が毎回付けているレポートを書き終われば、終わりである。

アリサ「達也は毎日こんなレポートを書いているの！」

達也のレポート、それはラインフォルトの開発部、それもイリーナ・ラインフォルトの直属の部下としてのものである。彼の机には、導力銃の設計図やら導力車の設計図な

どもあつたのだ。

アリサ「達也は、私よりも先に進んでいる。なのに私は、まだ母様に反発しているだけ：ねえ、達也、私は貴方と同じ道に立てるかしら：」

アリサは机から窓を開けて、星空が照らす外を見る。まだ5月だけあつて、風はひんやりとして気持ちがいい。

アリサ「ううん、達也とツールズを受験するときを決めたはずよ。困難な道であつても達也と共に歩むと」

母親であるイリーナに反発しているのも事実。だけど達也と共に歩みたいのも事実。だからこそ隣に立てるように立派になると決めたのだ。だから諦めるわけにはいかない。

アリサ「よし、頑張るぞ」

そう決意して達也のレポートを書き始めたのだった。

第2章―白亜の旧都編―33―8話―5・26（10：00～）―5月の実技テスト。

― 1204・05・26・午前・10：00―グラウンド。

5月の実技テスト

再びユフィ達は、グラウンドに出された。先月に続いている実技テストである。不安がっていたエリオットやエマに対して、スハルトは、いつも通り平常心でやればできると言っておかげか、少しは楽になったと言ってる。

しかし昨日と違うのは、サラ教官がとある男性を連れてくる。その男性とは、マシユルームヘアーのリクルートスーツを着こなしている。この人物は鳴上悠である。

サラ「さあ先月に続いて《実技テスト》のお時間なんだけど、ちよつと説明する時間を頂戴。彼は今日からVII組の副教官に就任した、悠・鳴上よ。みんなよろしくしてあげてね」

悠「サラ教官から、ご説明があつた悠・鳴上だ。まだ就任しホヤホヤで、至らないと

ころもあるかもしれない。みんなと一緒に成長していきたいと思うからよろしく頼む」
Ⅶ組全体から拍手が上がる。すでにユフイやカトリーナ、ハチマンは知っているように、スハルトとフィーは別口で知っているようだ。すぐに悠はⅦ組に溶け込んでいる。
リイン達が悠の得物に

リイン「悠教官も太刀なんですな」

悠「ああ、太刀だな」

達也「太刀ということは、悠教官も八葉ですか？」

悠「八葉一刀流、カズヤ・アレイスター流派かな」

リイン「カズヤ・アレイスター、あの人のご指導を！」

リインはパルム事件で出会ったカズヤ・アレイスターやステイル・アレフガルドに強い憧れを持つようになった。だから目の前の悠がその憧れの人の弟子だと分かり、益々興味が出てきた。ハチマンは、ステイルから悠がやってくることを知らされていたし、ユフイは悠がトリスタを初めて訪れた時に第3学生寮まで案内したし、カトリーナは第3学生寮に荷物を運んでいる時に悠が手伝った経緯がある。

サラ教官は話が関係ない方に盛り上がりを見せ始めたので、手を叩いて実技テストという現実にⅦ組メンバーを引き戻す。

サラ「悠と話したかったら実技テストが終わった後にして頂戴」

Ⅶ組メンバーは、渋々承諾し実技テストが始まる。

サラ教官は、先月と同じく？の摩可不思議なモノを出してきた。ユフイやスハルトはユフイ「サラ教官：なんだかソレ：先月と色や形が違うんじゃないですか？」スハルト「ユフイもそう思ってたか。つーかそれってなんだんだ？」

サラ教官は、いつも通りに笑って誤魔化して、仕組みやどうやって動いてるかはわからないって言ってるし、なんだか不安になるってみんなが言っている。

サラ「ほ、ほらさっさと始めるわよ。達也、ユフイ、アリサ、ラウラ、ハチマン、カトリーナ：前へ」

名前を呼ばれたユフイ達は、前へ出る。摩可不思議なモノはユフイ達を見てるのか、見えないのかわからないまま己の武器に手をかけた。

サラ「始め!!」

サラ教官の掛声と共に、ユフイ達の実技テストは始まった。ユフイ達は、戦術リンクを上手く使い分けて、見事に倒せた。サラ教官が

サラ「お見事：先月よりも息が合ってるわね」

ユフイ達は、サラ教官に褒められ、ナターシャやアリサは照れている。ハチマンとラウラが何か話しているな。

エリオット「なんとかね」

エリオットとスハルトの会話は、実技試験中にマキアスとユーシスのいがみ合いのせいで、マキアスは確かめもせず引き金を引いて、エリオットに弾道が向かったが、スハルトがうまく弾道を弾いた。スハルトはマキアスに危ないだろうかと怒り、お互いに連携をするような状況でもなかった。サラ教官も今のは酷いと思

サラ「分かっていたけど、ちよつと酷すぎるわね。まつそつちの男子2名はせいぜい反省しなさい。この休たらくは君達の責任よ」

達也とアリサがこそこそ話していますね。

達也「今回はいつも以上に手厳しいな」

アリサ「今回ばかりは仕方がないしれないわね」

サラ「今回の実技テストは以上。続けて今週末に行う【特別実習】の発表を行うわよ。さつと受け取って頂戴」

5月の特別実習

【A班】達也、リイン、エマ、マキアス、ユーシス、ファイ、アンジェリナー】副教官の悠も同行。

(実習地↓公都バリアハート)

【B班】ユフイ、アリサ、ラウラ、ハチマン、スハルト、カトリーナ、エリオット、ガ

イウス」

（実習地↓旧都セントアーク）

今回は達也、リインとユファイを分けて、班決めを行ったようだ。ただA班は、問題がありすぎるような気もするが、するとガイウスが

ガイウス「バリアハートとセントアーク：どちらもよく聞く地名だな」

スハルト「バリアハートってのは東部にあるクロイツエン州の州都だな。俺個人では嫌いな街だがな」

スハルト、ユースイスがいるのにそんなこと言わなくていいことを言ってしまう。ユースイスもそっぽ向いているが、アンジェリナが話し出す。

アンジェリナ「セントアークはですね。南部にあるサザラント州の州都になりますね」

ラウラ「そういう意味合いでは、釣り合いはとれてるはずだが」

エマ「はい、そうですか」

ラウラやエマもそう言ってる。ただマキアスとユースイスは、この班分けを認めていないようで、異を唱える。

マキアス「…冗談じゃない！サラ教官！いい加減にしてください。何か俺達に恨みで

もあるんですか？」

ユーシス「茶番だな。こんな班分けは認めない。再検討をしてもらおうか？」

サラ教官は、悩んだ表情で2人の提案を拒否をする。バリアハートからユーシスは外せない。何故ならユーシスの故郷であるため。マキアスは自分を外せとサラ教官に嘆願しますが、だからこそマキアスもいれてると拒否される。

サラ「ま、あたしは軍人じゃないし、命令が絶対とは言わないわ。ただⅦ組の担任として君達を適切に導く使命がある。それに意義があるなら良いわ。2人がかりでもいいから力づく言うことを聞かせて見る？」

サラ教官が、そんな事を言ったものだから、マキアスとユーシスがその挑発にのり

スハルト「2人共よせ！サラに2人がかりでも無理だ！」

スハルトが2人の中に入るが、2人共聞く耳持たずって感じですね。

サラ「フフツ、そこまで言われたら男の子なら引き下がれないか。そういうのは嫌いやないわ」

そういうとサラ教官は自分の得物をとり出し、2人の前に対峙しました。みんな、サラ教官の武器に驚いている。スハルト、ファイ、ハチマンを除いて。マキアスとユーシスも得物を構える。しかし異議を唱える人物がいた。それは副教官である悠である。

悠「サラ教官、まずは俺が彼らの相手をしますよ」

「フフツ、悠、のつてきたわね。まあ良いわ、ついでに達也、リイン、あんたも入りなさい。まとめて悠に相手してもらいなさい！」

リイン「…え!?俺もですか…。…わかりました。実は悠教官と戦えて嬉しいですよ」

達也「ああ、俺もだ。八葉の使い手である以上気は抜けないぞ！」

達也とリインは指名されたが、嫌な感じではなく、むしろ嬉しい方が勝っているようだ。だからこそ自身の得物を抜いて構える。

スハルトとフィーが何やら話している。

スハルト「カズヤ・アレイスターの一番弟子の悠・鳴上相手に1分持てば上出来だろう」

フィー「だね。悠とは何回か戦ったけど、なんだかひかれるのはあつたな」

スハルト「フィー…お前もか。俺もなんだよな。言葉には言い表せない何かがあるんだよな」

スハルトとフィーはなんの話をしているかと思えば、過去話をしているようである。最初に悠が啖呵を切る。

悠「トールズ士官学院戦術副教官悠・鳴上…参る！」

達也「特科クラスVII組、達也・シユバルツァー、参る！」

リイン「リイン・シュヴァルツアー参ります！」
リインがそう言った瞬間に、戦いの火ぶたが切って落とされた。

しかしすぐにマキアスとユーシスは、悠に倒される。何故なら氣迫に戦う前に氣持ちで負けていたからだ。

リイン「紅葉切り」

リインが放った一撃を、悠は太刀の鞘で受け止めていた。

悠「…リイン、ユン老師に直接指導を受け賜ってるだけはあるな！」

リイン「ありがとうございます。ただ悠教官の一撃一撃を受けるだけで、精一杯ですけどね」

達也「疾風!!」

達也はリインの背後から悠に疾風を仕掛けるが

悠「達也、リインとの連携は中々のものだが」

リインを鞘で押さえながら太刀の方で達也の太刀と交差しカキーンという衝撃音になるし衝撃波も起こる。

アリサ「達也！」

スハルト「リイン！」

達也とリインは、悠から距離を取り様子を見る。

悠「達也、リイン、君達とはいつまでも戦いたいが、そうも言ってられないな」

悠は太刀を鞘に収める。ユフィはあの構えが何なのかわかった。おそらく達也もリインも分かっているはずだ。

達也「あれは、八葉の伍の方！」

リイン「まさか！」

悠「八葉一刀流、伍の方、雷月！」

達也とリインは、雷光の光に包まれた。

第2章―白亜の旧都編―34―9話―5・26〜5・29 (08:20)―列車内のアクシデント。

11204・5・26↓5・29・朝・08:20・トリスタ駅

悠と達也、ラインの一戦は、悠の勝ちだった。まあ当然の結果だろう。仮にも悠は、カズヤ・アレクスターの一番弟子であるのだから。達也、ラインは2人で、連携善戦していたのだが、マキアスとユースイスが足の引つ張り合いをしてから、余計にひどい試合になってしまつて見えたかもしれないが、その通りである。誰が見ても、惜敗どころがボロ負けである。

事の発端となつたマキアスとユースイスは、悠に負けたので何も言えなかつたようだ。ユフィ達は重苦しい中、5月の実技テストを終えたことになる。ただ達也やラインなら、あの2人の間をなんとかできるんじゃないかと、ユフィはそのとき思ったわけだが。そしてユフィ達は、5月29日になり2回目の特別実習になり、ユフィ達B班は、第3学生寮の入口に集合して、トリスタ駅に向かうことにした。

ユフィ達は、セントアーク行きの切符を買い、セントアーク行きの列車が来るのを待っていると、A班の達也達もトリスタ駅に入ってきた。ガイウスやアリサが、最初に

話しかける。

ガイウス「来たか」

アリサ「達也達、おはよう」

達也もユフィ達に

達也「おはようみんな。もう出発するのか？」

ガイウス「おはよう。そっちももう出発か？」

達也「…まあな。バリアハートには、少なくとも昼前には、到着しておきたいからな。

B班のみんなは、もう切符を購入したんだな」

アリサ「ええ、帝都方面の列車がちよつど来る頃合みたいだし」

アリサがそう言った。セントアークに行くには、帝都を經由しなければならぬ。セントアークとバリアハートの距離は、トリスタからは同じぐらいの距離だったはずだ。

両班共、特急を使えば5時間くらいで着く距離にある。エリオットが

エリオット「うくん、そんなに長い間、列車に乗ったことなんてないからちよつと楽しみだけど。先月のB班は今回の時間より長かったね」

エリオットの言ったことにスハルトが

スハルト「まあな。というか遠足じゃねーだろエリオット。つーか、マキアスとユーシスは鬱陶しいな…」

スハルトが、マキアスとユーシスの事を言い出したので、みんなも気になるようにカトリーナ「(やつぱり今朝も：そんな調子みたいだね：)」

アリサ「(ふう、よくも飽きずにいがみ合えるもんだわ)」

フィー「(正直、ウザったい)」

フィーが言ったことにエマが

エマ「(フィーちゃん、フィーちゃん：)」

ガイウスやハチマンが達也やリインに、お前ならできると励ましている。ガイウスもガイウスなりに、達也達のことを気にしている。元氣つけるために達也、リインならばやれると言ってみたいだ。ガイウスが言い終えるのと同時に、ユフィ達が乗る列車が、トリスト駅に到着した。ユフィは、達也達A班に

ユフィ「では私達B班は行きますね。A班、そしてB班に女神の加護がありますように」

アンジェリナ「お互いに頑張りましょう。達也、頑張ってくださいね」

ユフィの後に、先程まで黙っていたアンジェリナが、達也にそう言ったのだった。達也もアンジェリナに

達也「ありがとう。お互いに頑張って行こうか」

エマ「ユフィさん、そちらも気を付けて」

ファイ「じゃね、ハチマンもガンバ」

ハチマン「お、おう、ファイ。互いにな」

エマやファイ、ハチマンも挨拶をした。

カトリーナ「エマもファイ、悠教官も頑張つてね。帰ってきたらバリアハートこと教えてね」

悠「ありがとう、カトリーナ。そつちも気をつけるようにな」

カトリーナが、聞きたい事つて恋バナの話のことだろう。まあそれは置いて、ユファイ達は駅のホームへ向かうことにした。セントアークにて、彼女達を巻き込む何かがあるなんてまだこの時のユファイ達は知るよしもなかった。

11204・5・29・午前中・10：50・セントアークを目指す列車内の中で。

ユファイ達は、トリスタから帝都経由で、セントアークを指しているところである。

帝都を通り過ぎて一時間半が経過した時に、ユファイ達を乗せた列車にアクシデントが起きたのだ。

それは列車の爆破予告だった。内容は

「〜時？分発〜帝都経由のセントアーク行きの列車に爆弾を仕掛けた。鉄道憲兵隊に知らせれば即時に列車を爆発させる。用件はまた連絡をする」

と置き手紙が置かれていたようだ。ユファイ達が気づいたのは、列車の乗務員達が、慌てて何かを探していたので、話を聞いて初めて列車に、爆弾が仕掛けられたことをユファイ達は知ることになった。

ユファイ達は、すぐに列車の乗務員達に事情を説明して、手伝うことを申し出、一旦は断れるが、彼女達がツールズ士官学院の学院生だと分かると、逆に協力を要請された。スハルトも何やら乗務員に説明をしている。それで乗務員達が協力を申し入れてきたのか？そこはわからないが。

ユファイ達は、他の乗客の方々に気づかれないように、静かに調査を開始した。これもみんなが、引き受けたのは、こういうアクシデントも、前回のパルム実習同様に特別実習の一部としてやろうということとやることにしたわけだ。

しばらくするとある席の下から、爆発物と思われるものをエリオットが見つけた。乗務員の方々に協力をしてもらい、一般客の方々を後方に退避させ、ユファイ達が、爆弾処理を任せましたが、ユファイ達は爆弾処理とかやったことないのだ。そんな中、アリスとスハルト、ハチマンがやると言い出した。

アリス「スハルト、あなた爆弾処理とかやれるの？」

スハルト「まあな。昔、団にいたときは設置から解体までやっていたからな。というかハチマンお前もやれんのかよ？」

ハチマン「やれて悪かったな。しかしこれはあまり見ないタイプだぞ」

スハルトは自分の小道具を取り出して、すぐにでも箱を開けている。

スハルト「…まったく複雑な配置だぜ。爆発時間まで1時間を切ったな…。速度をあげるか」

スハルトは速度をあげて、解体作業をやっている。しかし解体作業の最後の部分、最後の導線の部分でスハルトの腕がが止まる。爆発時間まで30分を切ったところで。

スハルト「な、なんだこれは？」

色んな色の導線がいっぱい張り巡らされている。先程までは、2種類の色しかなかったが、5種類になっている。スハルトはかなり悩んでいる。

スハルト「くそ、こんなの初めてだぞ。赤、青、黄色、紫、ピンク…どれを切ればいいんだよ？」

制限時間が5分を切り、スハルトはかなり悩んでいてアリサやハチマンに聞いていてる。

スハルト「…アリサはわかるか？」

アリサ「私もわからないわ。こんなタイプ初めて見るわよっ」

ハチマン「…これって、まさか」

スハルト「何かわかったのか、ハチマン？」

ハチマン「俺の記憶が正しければ、日本の…とある犯罪者が使った起爆装置に似ている」

スハルト「解除方法までわかるのか？」

ハチマン「確証は持てないが、おそらくはピンクだ。ピンクを切れば止まるはずだ」
スハルト「わかった、ハチマンのその記憶を信じるぜ」

残り時間が3分を切り、ハチマンがピンクの導線を切れば止まると言い出し、スハルトはそれを信じる。エリオットやガイウスが

エリオット「大丈夫なのスハルト？」

ガイウス「エリオットの言う通りだ。もし外してもすれば…」

スハルト「…みんな…ハチマンの記憶と俺の腕を信じる。それでも爆弾処理に関しては外したことはない」

ユファイ達はスハルトとハチマンを信じることにした。他にやれることは何もないから見守ることしか出来ない。もし光井和也いて、彼の能力を使えば、爆弾処理も簡単にいくはずだが、彼はいない。ユファイ達はただ見守ることしか出来ないのだ。

するとスハルトが何かユファイに聞いてきました。

スハルト「ユファイ…お前今日は何色だ？」

ユファイ「え!?スハルト、貴方は何を……!」

スハルト「いいから早く」

ユファイ「……………ピンクです……………」

何故、俺が下着の色を教えなきゃいけないのとかと、ユファイは思いましたが、スハルトが真剣に聞いてきたので、言うしかないかと、ピンクとスハルトにひそひそと答えた。

スハルト「わかった」

それを聞いてスハルトは、ピンクの導線を切る。するとカウントダウンしていた起爆スイッチが、残り33秒で止まった。ユファイ達や乗務員の方々は安堵に包まれることになった。

その後、ユファイ達は、爆弾を乗務員さん達に渡して、セントアークまで、ゆっくりすることにした。特別実習の出鼻から、こんなことが起きるなんて、ケルディックやパルム以上なことが、起きるんじゃないかと不安になってしまっただけで済むB班一行であった。

ミサキ・カミジヨウ編【鉄血の子供達】

1-1話ーミサキ・カミジヨウ

ユファイ達が、元凶へかけて行つた同時刻、東の方では、クロスベル自治州クロスベル市のある喫茶店でミサキは、とある人物とコーヒーを飲んでいた。

ミサキは、本来なら紅茶派なのだが、何故コーヒーの飲んでいるのか。

それは、彼女を救ってくれた人物

【ガイ・バニングス】

彼女を救つたガイが、ミサキに最初にコーヒーを奢つてたのが始まりだった。

ミサキにとって、コーヒーの味は初恋の味。

でも同時に失恋の味でもあるのだ。ガイには、婚約者のセシルがいたからだ。

ミサキは、ガイさんが幸せになってくれるのを陰から見守るつもりで、遊撃士になつたのだ。

遊撃士になって、2度だけガイとコンビを組んだ事がある。

主にD∴G教団事件であるが。

ミサキは、ガイやセルゲイ達、他の遊撃士、各国の協力者達と協力して、教団のロツ

ジを片っ端に潰してきた。二度と自分と同じ運命を辿る子達を生まないためにと。

そんな中、救い出されたのが、ティオである。

ミサキは、ティオを救い出すとその体を抱きしめて泣いていた。

さらわれた我が子を抱きしめる家のように。

かつて、彼女がガイに抱きしめられたように。

D：G教団事件からしばらく経って、遊撃士クロスベル支部から訃報が飛び込んできた。

「ガイ・バニングス」の死亡の訃報が。

訃報を聞いたのは、遊撃士の仕事の終わり、レミフェミアからの飛行船の中だった。

彼女はいち早くクロスベルへ降り立ち、クロスベル警察、遺体安置場所へ急いだ。

急いだ先には、泣き崩れるセシルと弟のロイドがいた。他にセルゲイ、ダドリー、そして同僚のアリオスがいた。

遺体安置場所に入ったミサキは、アリオスに詰め寄った。それも怒りに満ちた表情で

ミサキ「…貴方も一緒にいたんでしょ!!」

アリオス「ミサキ、済まない。自分が駆けつけた時には、もう……」

アリオスは申し訳なさそうに下を向いた。セシルさんは、ずっと泣いていて、弟の口イド君はセシルさんの横で泣いていた。

ミサキ「…駆けつけたって…ガイさんと分かれて行動をしたの？」

アリオス「ああ、ガイは何者かに呼び出されたようだった」

アリオスは、一枚の濡れた紙切れをミサキに見せた。

「クロスベル警察所属、ガイ・バニングス、話がある。オルキスタワー建設予定地まで来てもらおうか……」

それ以上濡れていて文字が読めない。

ミサキ「これって……呼び出し……」

ダドリー「しかし、バニングスは何故一人で行ったんだ？」

ミサキは、ちよつと考え事をしていた。ガイが相手していたのは、小物の悪党ばかりではない。クロスベルに住み着く、マファイア、カルバードから入り込んできたマファイアである【黒月】、帝国派議員、共和国議員、その他…とも相手にしていた。少なくともこいつらにもガイを殺害する動機もある。

だがこいつらが、ガイ一人を殺すためにこんなことをするだろうか？

こんな呼び出し状を使ってまで？

ガイ本人が一人でノコノコと誰にも告げずに行くだろうか。

ミサキ「……いや、いけない……」

ミサキが突然そんなことをしゃべったのでセルゲイが

セルゲイ「どうした、ミサキ？」

ミサキ「セルゲイさん、ちよつと……」

ミサキは、セルゲイさんに外で話そうと促した。ダドリーとアリオスも一緒に遺体安置場所から出た。

遺体安置場所から、階段の踊り場までやって来て、人がいないか確認してから話し出した。

ミサキ「……ガイさんが何故一人で行ったのか……そこが引つ掛かるんです」

ダドリー「一人で来いと呼び出されたからじゃないのか？」

ミサキ「確かに一人で来いと書かれています。でも本当に一人でいきますか、ダドリーさん？ 私なら絶対に行きません。一人で行くとしても、みんなに話します」

ダドリー「確かに、カミジョウの言うとおりでだな……バニングスのヤツ何故……」

ミサキ「アリオスさん、何か心当たりあるんですか？ さつきから黙ってますけど？」

ミサキは、アリオスが一言も話さないの、何か知ってるのではないかと話しかけたのだ。

アリオス「ミサキ、すまない。突然の事で驚いている」

アリオスは、窓の外の空を見ながらそう言った。ミサキもそれ以上は追及はしなかった。アリオスも奥さんを失い娘の視力を失わせてしまった事を悔いてるのを知ってるからだ。そして相棒のガイまで。

クロスベルの理不尽さと、人一倍戦ってるのも知っている。それがアリオスの強さである。

でもミサキは、ミサキのやり方でやる決意をした。

初恋の相手、ガイ・バニングスを殺した事。

姉のように慕っていたセシルの婚約者を殺した事。

弟のように見ていたロイドの兄を殺した事。

全部この手で捕まえてやると、心の炎を燃え上がらせた。

ミサキは、セルゲイやダドリーに一礼するとクロスベル警察署から出た。

そしてどこへともなく走り出す。走り出した彼女の頬には大粒の涙が零れ落ちていた。

ミサキは、遺体安置場所では、涙を見せることはなかった。歯を食いしばって涙が出るのを押さえ込んでいた。

誰にも見せたくはなかった。自分自身が泣いている姿を。

泣いてる姿は、ガイ・バニングスしにしか見せてない。

ミサキは、ひたすら走る。クロスベル市内から、マインツ方面の山を走る。何も考えずに。

頭に浮かんでくるのは、ガイと冒険した時の思い出が走馬灯のように流れてくる。

D∴G教団のロツジから、ガイによって救われたあのときから、ミサキはガイの背中を追って強くもなつたし、遊撃士にもなつた。

例え恋が成就しなくても、仕事上のパートナーにはなり得ると信じて頑張ってきた。ガイと一緒にクロスベルを守っていきたかつた。

それが、ガイの死によつてミサキの信念、存在意義が揺らぎ始めていた。

ミサキの心に、【復讐】の炎が灯り始めていた。

ガイ・バニングスの死亡事件から、しばらくして裏通りのルバーチエ商会のある建物の玄関先で戦闘が起こっていた。

ミサキとルバーチエ商会の若頭のガルシアがぶつかりあっていた。

2人の戦闘を周りで見ているルバーチエ商会の構成員。そのほとんどは傷を負っていた。ミサキの襲撃によって付けられた傷だ。ミサキは怒りに任せて、ルバーチエ商会を襲撃していた。ガイを殺したと思ひ込んで。

戦いは五分五分から徐々にガルシアが押し始めていた。

ガルシア「おらおらっ！どうした？さっきまでの勢いは？」

ガルシアは、蹴りの連続攻撃を加える。ミサキはガードしているが、いつ破られてもおかしくない。そして重い一撃をミサキの身体に加えた。

ミサキ「……かあっ!!」

ミサキの身体は、数メートルも吹き飛ばされ荷物置き場に突っ込んだ。

「ミサキ・カミジヨウ！てめえ……怒りの感情で何を見失っている？てめえの冷静な判断なら、こんなバカをするわけねーよな。ガイ・バニングスは、確かに厄介な人物だった……てめえもそうだが……。厄介だからと言って、殺して何の得がある？捜査官1人殺して、状況が変わると思うか？」

ガルシアは、荷物置き場に突っ込んだミサキに言い放った。

ルバーチエ商会にとってガイ・バニングスを殺して何の得があると。

ミサキも冷静な判断が出来ていた時には、そう判断していた。

だが復讐の気持ちにかられ、冷静な判断すら出来なくなっていたのだ。

ルバーチエ商会の構成員達がガルシアとヒソヒソと話している。

ガルシア「ほつとけ：それと後でルバーチエ商会の医者がくる手配になっている。怪我を負ったやつは、見てもらえ」

ガルシアとルバーチエ商会の構成員は、ルバーチエ商会の屋敷に入ってしまった。ミサキはそのまま気絶していた。

そしていつしかクロスベルに雨が降ってきた。もちろん気絶していたミサキがいる裏通りにも雨が降っていた。

雨にうたれたことにより、目が覚めたミサキ。

ミサキ「……いたっ……」

ミサキの痛みは、ガルシアとの戦闘によるものだ。怒りに任せて戦った結果がこれだ。ガイに教えられた事の1つに、「怒りで我を忘れて戦うな。常に冷静になおかつ熱くなれ」

ミサキ「：アハハ：ガイさんの言い付け：破っちゃった……」

傷だらけになった手の甲や手のひら。両足もあちらこちらから擦り傷、切傷があり血が滲み出ている。服もあちらこちらに破けており、ミサキの白い肌が見えている。

おまけに雨に濡れて、中の白いブラまで透けて見えていた。

ミサキ「…さっさと…こんなところから出ないと…」

ミサキは痛みを堪えながら、ルバーチエ商会の屋敷がある場所から裏通りを抜けて、西通りの自分のアパートまで帰った。

そしてしばらく時が経った。ミサキは、ルバーチエ商会からクロスベル遊撃士支部に苦情の連絡があると思っていたが、何もなかった。襲撃をかけたのに、何も無いのはおかしいと思っていた。

ミサキは、ルバーチエ商会がクロスベル遊撃士支部に何もしないはずがないと思っていた。支部の受付のミシエルにも聞いてみたが、抗議の文句は入ってないと言われた。

ミサキ「……ルバーチエ商会…ガルシア…アイツは…私を…いつでも殺れる…そう思つて…！」

いつでもお前のような輩は殺せる。そんな事を言われたような気がしたミサキは、腹が立ったが、前みたいに暴走はしなかった。

ミサキは、あるときぼろぼろになって帰った後に、様子を見にきたセシルによつて看病されていたのだ。

セシルは、ミサキを本当の妹のように可愛がつてきたのだ。ガイが助けて連れ帰ってきた時からずっと。

ガイを失つて悲しいはずなのに、ミサキに笑顔を見せ続けていた。

それがミサキにはつらかった。胸がはち切れそうになるほどつらかった。罵倒される方がまだ楽だと思ふこともあった。それでも前を向くことを決めたミサキだった。

そしてまた月日が流れ、ガイのを殺した犯人捜索が難航する中、1枚の手紙がミサキ宛てに届いた。

手紙の送り主は、帝国政府代表ギリアス・オズボーンと書かれていた。

ミサキ「帝国の宰相がなんで私に？」

ミサキは、恐る恐る手紙を取り出して、読み始める。

オズボーン「ミサキ・カミジヨウ殿。突然の手紙にさぞ驚かれてるだろう。クロスベルで起きた貴殿の不幸な事件の事も把握している……」

ミサキ「……ギリアス・オズボーン……そんなことまで……嗅ぎ回って！」

オズボーン「貴殿の大切な人間の殺した犯人の捜索は難航しているようだ。現状のクロスベル警察では、一生かかっても解決はできないだろう」

ミサキ「……………」

クロスベルの現状。帝国派、共和国派、地元のマフィアに牛耳られてるクロスベル警察では、犯人を特定するのは難しい。いやギリアス・オズボーンが言っていることが正し

く聞こえてくるミサキであった。

オズボーン「貴殿が私の元に来るなら、君の大切な人間を殺した犯人を特定、逮捕することを協力することを誓おう」

ミサキは、静かに深呼吸をしてそつと決意した。クロスベルを出て帝国へ行くことを。セシルには置き手紙を書いた。

前にガイに言われたことがある。

ガイ「ミサキ、一度でいいからクロスベルを外から眺めるのも良いぞ」

ミサキ「外から眺める？」

ガイ「そうだ。クロスベルの中にいたらわからないことも有るが、ふと外から眺めるんだ。するとわからなかった事がわかることもあるんだ」

ミサキ「ガイさんもやったの？」

ガイ「アハハ…そうだな。俺はいつも壁にぶつかってばかりだが、セシルやロイド、そしてミサキがいるこのクロスベルが好きだし愛してる。だから何度くじけそうになっても立ち上がることができるのさ」

ガイの事を思い出しながら、涙を流しながら

ミサキ「…ガイさん、私、帝国に行くわ。帝国からクロスベルの現状をしてみる。そ

してクロスベルをいずれ変えて見せるわ」

そうしてミサキは、帝国のギリアス・オズボーンを訪ねて、鉄血の子供達の仲間入りをした。コードネームはクイーン。

鉄血の子供達入りした後も遊撃士の仕事はやっていった。あくまでもミサキは隠密的な役割りであり、遊撃士協会を通じて情報収集をしやすいのもあった。その後、セシルから一通の手紙が来て、ガイの弟のロイドはカルバード共和国の親戚に預けられたことをミサキは知った。

そして再びクロスベル入りするのは、約3年ぶりだった。

ギリアス・オズボーンの命で、レクターとカツプルのふりをして、黒の競売会が行われるミシユラムのハルトマン議長宅へ潜入するのがミッションだった。

そんな中、くしくも同じように潜入する男女がいた。ミサキは、その男性が誰かの面影が重なった。すぐにわかった。

ガイ・バニングスの弟のロイド・バニングスだと。

クロスベル警察の中に特務支援課が出来ていたのは、遊撃士や帝国軍情報局から情報を得ていた。

クロスベル警察にガイの肝いりの部署が出来た事は誇りに思っていた。

ロイド達が謎の少女をかばいながら、ルバーチエ商会の構成員やガルシアから逃げている時、ミサキはロイド達を援護した。レクターの静止を無視をして。

ミサキ「…セルゲイさん、ロイド君！ここは私に任せて行ってください！」

セルゲイ「ミサキ、お前…」

エリイ「ミサキさん、貴女は一体…？」

ミサキ「私は、鉄血の子供達でもあり、遊撃士であり、ガイ・バニングスの意志を継ぐ者でもあるわ」

ロイド「やはり、あのミサキさんだったんだね…」

ミサキ「…ロイド君、カツコよくなつたわね…。何だかガイさんがいるようだわ」

ロイド「アハハ…兄貴にはまだまだ追い付けないけどね」

話しているうちにルバーチエ商会の構成員がどんどん集まってくる。

ミサキ「セルゲイさん、ロイド君達を頼みます！」

セルゲイ「そっちこそな、ミサキ」

セルゲイが操縦するボートは、ミシユラムから離れていく。それを見届けた後ミサキは、

ミサキ「ガルシアさん、お久しぶりですね」

ガルシア「ミサキ・カミジョウ……。へえーあの時よりもマシな表情になってんじやねーか？」

ミサキ「それはどうも……。私にも色々ありましたからね」

ミサキはそつとガルシアを見据えて構える。ガルシアもまたミサキを見据えて構える。

そして両者は激しく激突した。

ボートで逃げるロイド達からも閃光の光が見えた。

ロイド「ミサキさん!!」

テイオ「ミサキさん！」

セルゲイ「ミサキ、お前つてやつは……」

そして数日が経ち、ルバーチエ商会のことや黒の競売会などが表に出ることになった。ルバーチエ商会は、人身売買までやっている烙印を押されて、急速に勢いが衰えていく。

ミサキは、レクターからなんで手を貸したかは追及しなかった。オズボーンから、クロスベルでの件では、ミサキの好きにさせてやれと言われていたからだ。

ミサキは、あの日ルバーチエ商会の若頭のガルシアを倒したのだった。3年前は倒さ

れ苦汁を飲まされたが、今度は倒した。その後、クロスベル市内に戻って高級ホテル内にいたのだった。

クロスベルの高級ホテルの一室にて。

レクター「気がすんだのか？」

ミサキ「あの時の借りを返しただけ。根本的なことは何もできてないわ」

レクター「そうか……」

そしてレクターは一度クロスベルから、帝国へ戻りミサキはクロスベルに滞在するこ
とにした。気になることが数個あったからである。

そして七耀暦1204・3・31・昼間

ミサキは、ロイドと共に喫茶店でコーヒーを飲んでいた。ミサキは資料をロイドに渡
す。

ミサキ「ロイド君、セルゲイさんから頼まれていたやつね」

ロイド「セルゲイ課長が？」

ミサキが調べていたのは、近頃発生している暴走事件のことについての資料である。

ミサキ「セルゲイ課長から依頼が来てね。まあ、私自身も気になってたから調べてた
の」

ロイド「…ミサキさん…」

ミサキ「なんで、鉄血の子供達である私が貴方達に協力的かって気になってるの？」

ロイド「…それは……」

ミサキ「私はクロスベルには、鉄血の子供達は持ち込まないようになっているの。クロスベルでは、ガイ・バニングスの意志を継ぐ者でいたいから…」

ミサキは、前を見据えてロイドと話している。それがロイドには真っ直ぐ眩しく見える。

ロイド「ミサキさんの中では、兄貴が生きてるんだな」

ミサキ「…ロイド君、君の中にもガイさんは生きてるわ」

ロイド「どうでしょうね。それと俺の事はロイドでいいですよ」

ミサキ「じゃあ、私の事もミサキって呼んでね」

ロイド「わかりましたよ、ミサキ」

ミサキ「うん、よろしい…あっ」

ミサキはハンカチをテーブルの下に落としてしまった。ロイドがすぐに

ロイド「俺が拾いますよ」

ロイドはすぐにハンカチを手に取り何気にミサキの方を見た。するとミサキは、足を開いてパンツを見せていた。ロイドは、テーブルに頭をぶつけて

ロイド「み、ミサキ、何してるんですか？」

ミサキ「何って何？」

ミサキは小悪魔的な笑みでロイドを見ていた。3年間で色々成長していったミサキ。

ロイドもドキドキしていた。ミサキの白のパンツをちよつと見ただけなのに、その光景が目に焼き付いていたのだ。

そんな日常が、ユファイ達オリエンテーションが行われている時にクロスベルではあったのだ。

2-2話-4・24・悪魔の薬、再び。

111204・4・24 白亜の旧都セントアークー夜

ステイル達と通信を終えたミサキは、クロードを連れて、セントアークの鉄道憲兵隊の支部にいた。帝都の帝都憲兵隊本部や帝国軍情報局へ対しての報告もあつたからである。

パルムの東にある日本人移民街からの逃走犯は、見事ミサキとクロードの連携プレイで確保することが出来た。

だが問題がある。確保したのは良いが、とても取り調べができる状態ではない。そのまま、帝国からクロスベルのウルスラ病院へ搬送したのだ。クロスベルは、レミフェミアや日本と医療協力協定を結んでおり、最新の医療システムが拡充してるのだ。それに先のクロスベル騒乱の件で、ウルスラ病院はフル活動でグノーシス患者の治療に当たつたのだ。夜に染まっついて、明かりによって照らしている姿を見ながらミサキは話し出す。

ミサキ「さて、どうしたものかな…？」

クロード「そのまま、報告すればいいのでは？」

ミサキ「うーん、そうもいかないのよ…。あれは間違いなく、グノーシスを射たれるわね」

クロード「グノーシス：ミサキ先輩がさつき、話していた事です。あのD：G教団が作り出したという：悪魔の薬とか」

ミサキ「そうね、言葉通りの悪魔の薬：あんな薬を作り出すために：何人も子供が犠牲になった…」

ミサキは思わず握りこぶしを作っていた。せつかくヨアヒム・ギウンターを倒し、教団の残骸その物を葬り去ったと思ったら、今度は日本の方にグノーシスが渡り改良されているということになる。

ミサキ「：クロスベルの誰かが、日本の金城達に渡したのは明白…。だけど誰かまではわからないし……」

クロード「日本人移民街にある工場を査察するという目的で踏み込めば…」

ミサキ「無理でしょうね：確たる証拠も無いまま、踏み込めば外交問題になるわね：その辺りは…：帝国政府も…：あの人も黙認してる可能性もあるか」

クロード「人身売買をですか：!？」

ミサキ「貴族派達が金城達と繋がりがあるのは、前々の調査でわかってたけど、完全に貴族派を潰すために、わざとやらせてる可能性はある」

クロード「でもそれはリスクが高いのでは？下手をすれば、国際的な批判は避けられないのでは？」

ミサキ「まあ、その辺りの計算は、クレアが導き出した答えでやってるんでしょうけど」

クレア・リーヴェルト。出向先の鉄道憲兵隊のクロードの直属の上司であり、階級は大尉である。ミサキと同じく鉄血の子供達の一員。導力演算機並みの処理能力を持っている。ミサキは、クレアを姉的存在で見ているし、クレアもミサキを妹のように接しているのだ。

クロード「へえーちよつとわからない世界ですな」

ミサキ「まあ、そうだよな。普通の人からはわからないでしょうけど…」

クロード「それだけすごいつて事がわかりますよ、クレア大尉もミサキ先輩も」

ミサキ「クレアさんはともかく私はそんなに凄くないから」

クロード「ミサキ先輩も凄いですから」

ミサキ「…褒めても何もでないわよ？」

クロード「別に褒めてもらうつもりで言ってますんよ」

クロードはそう言うと、鉄道憲兵隊本部に報告する資料を作り始めた。

ミサキは、ステイルからの情報と自分の得た情報をまとめあげていく。

帝国南部のパルム近郊の日本人移民街の工場団地エリアのどこかに人身売買のためのアジトがあること。人身売買とは別に日本製の武器をどこかに売りさばく拠点があること。

それが帝国のパルム近郊の日本人移民街か西トウキョウ街か。それは明日から調べることになっている。

クロードは、西トウキョウ街をミサキは日本人移民街を調べることにしている。西トウキョウ街なら鉄道憲兵隊も介入できるが、東の日本人移民街は鉄道が来ていないため、鉄道憲兵隊が介入できない。だからミサキが自ら調べに行くことにしているのだ。

クロード「ミサキ先輩、本当に一人で大丈夫ですか？」

ミサキ「あらっ心配してくれるの？」

クロード「そりゃあ、心配しますよ。日本人移民街の工場エリアって治安が悪いって評判ですから。領邦軍だって手を焼いてるんですよ。心配するなって言う方が無理ですよ」

ミサキ「まあ、そうみたいね」

クロードが言ってるのは、日本人移民街の自警団のことを言ってるのだ。日本人移民街は、サザーランド州に属しているが、自治が認められているのだ。あくまでもパルムの東にある日本人移民街だけだ。西トウキョウ街は、サザーランド州にちゃんと属して

いる。

ミサキ「まあ、何とかなるでしょう」

クロード「何とかって…」

ミサキとクロードがそんな話をしていると、帝国軍情報局と鉄道憲兵隊からの通信が入る。

それは帝国軍情報局と鉄道憲兵隊のクレアが、ミサキ達の情報を元にして導き出されたのは、

西トウキョウ街の【ウエスト・ジャパン商会】と日本人移民街の【ゴールド・マウンテン】という企業が、裏では人身売買や武器不正輸入や輸出に関与していることがわかった。

クレア自身もケルディックでの問題で直接出向いているようだ。ケルディックでは、パルムのように日本と帝国の問題ではなく、帝国自身の問題である。

ミサキ「クレアのおかげで、的を絞れたし、日本人移民街の【ゴールド・マウンテン】という企業か」

クロード「西トウキョウ街の【ウエスト・ジャパン】…確かこの企業は、食料品を扱う企業だったはず…」

ミサキ「まずは、現地に行ってみないと…クロード君、君も気をつけて」

クロード「本当に大丈夫なんですか？」

ミサキ「なーに、さつきちゃんと助っ人は頼んだでしょ？」

クロード「……え!?まさか何でも屋の彼らに?」

ミサキ「ご明察。だから安心してちょうだいね」

クロード「わかりました。あのステイルさんなら、安心できます」

ミサキ「へえー、クロード君もステイルさんと仕事したことあったっけ？」

クロード「ええ、何度か。若いのに……なんと言うか……すごいなって」

ミサキはクスクス笑いでした。

クロード「……笑うところですか？」

ミサキ「ううん、何でもないわ……。さてと夜の内に侵入しないとね」

クロード「わかってますよ……。それじゃ俺は鉄道憲兵隊の何人かと西トウキョウ街

に向かいます。ミサキ先輩も気をつけて」

クロードはそう言うと、会議室から出ていった。ミサキはそれを見て

ミサキ「フフフ、クロード君、貴方も和也さんと同じってことよ。根っここの部分は、”

妹さんを守ること”だからよ……。だから……羨ましくも思えてくるのよ……」

ミサキは、ちよつと前にキーアに言われたセリフを思い出した。

キーア「ミサキも、キーアの大切な家族だよ！」

ミサキ「家族か……」

ミサキは一度深呼吸をして、落ち着かせた。

ミサキ「：センチメンタルに浸る場合じゃなかったわね。今は与えられた任務を遂行するだけ」

ミサキはそう言うと、会議室から出ていく。目的はもちろんパルムの東にある日本人移民街だ。その「ゴールド・マウンテン」という企業を調べに行くのだった。

3-3-5・08 (13:25) - 東ゼムリア海の捜査。

111204・5・08-13:25・東ゼムリア海海上

昼過ぎの東ゼムリア海海上に、ミサキ・カミジヨウ（バニングス）に姿はあった。バニングスとはまだ名乗りたくはないのだ。帝国以外なら名乗っても良いかなと思っ
ているが、帝国軍情報局の人間として来ているからそこはわきまえている。

何故、帝国からかなり離れた東ゼムリア海にミサキ達帝国軍情報局が、こんなところ
に来ているのかと言うと、先週ゴールド・マウンテン帝国支部の人間を乗せた飛行船が
このあたりに粉々になって墜落したのだ。

世間では、エンジントラブルによって墜落したことになっている。だが帝国も日本側
も納得できるものではない。

獅童一派の警察や検察庁が事故と発表している。七草家も獅童一派のこの発表に不
信に思っている。だから七草家主導の捜索班も派遣された。その捜索班のリーダーは、
静江である。

帝国軍情報局と七草家は、密かに協力してこの件の事件解決のために動くことになっ
た。

今現在、ミサキと静江は、海に潜るために準備をしている。

正式に言えば、帝国軍情報局の海上挺「ミラデイ」の中にミサキと静江がいる。ミサキが静江をミラデイに呼んだのだ。色々と話がしたかったのもあるが、四葉家以外にも七草家ともパイプを持つ必要があるのだ。

静江「…あのタヌキジジイには、ちゃんとお灸は据えたわ。ちよつとは反省してくれ
ると良いんだけど」

ミサキ「アハハ、タヌキジジイなのね、ミスター弘一は」

静江「良いのよ、タヌキジジイで。ミサキもタヌキつて言つて良いのに」

ミサキ「それは流石に：七草家の当主様に呼び捨てはできないでしょ」

ミサキと静江が、名前で呼び合うようになったのは、ゴールド・マウンテン帝国支部やゴールド・マウンテン本社のことについて、七草弘一と話し合った時、色々ミサキは静江に手助けをしてもらったわけだ。

だからこうやって、合同の捜索することになったのだ。

今は、ミラデイ内の女子更衣室で潜水するために、着替えている。

ミサキは、静江の着替えを見ていた。OLSーツから、下着姿になった時に驚いた。彼女が身につけたことの無い黒色のブラジャーと同じ色のパンツだった。

ミサキは黒など身につけたことはない。白系統しか持つてないのだ。色気ものより

も動きやすさとかを重点にしているためである。

静江「何？ミサキ、さつきからずっと見て？」

ミサキ「いや、静江って黒の下着とか身につけるといふか……」

静江「ミサキは……何だか色気の無いものを身につけてるわね？」

ミサキ「私は動きやすさを重視するんで……一応……白のレースとか持ってますよ！」

静江「白のレースか……。彼氏とかに見せるのかしら？」

ミサキは顔が真っ赤になっていく。今までに彼氏が出来たことはない。告白は今までにされたことはある。でも全て断った。誰かと付き合うにしても、ガイを殺した犯人を捕まえるまでは、色恋沙汰はしないと墓標の前で決意したから。

ランディからロイドはどうだと言われたこともあるが、ミサキはロイドのことは弟としてしか見れない。からかいの対象ではあるが、異性としての恋愛対象にはならないのだ。

ミサキ「彼氏とか、私にはいませんよ！そういう静江はどうなの？」

静江「ちよつと前までいたわね」

ミサキ「ちよつと前まで？つてことは別れたの？」

静江「そうね、こつちから振ってやったわ」

ミサキ「別れたのにはワケがあるんですよね？」

静江「ええ、最低なヤツだったわ」

静江には元々彼氏と言われていた人物がいたのだ。

元カレの名前は、雪ノ下降信。雪ノ下家とは、千葉県では有名な一族あり、七草家の裏を守っている一族。雪ノ下降信は、雪ノ下家の分家の嫡男である。そもそも雪ノ下分家が七草家へ持ち込んだ縁談であり、雪ノ下本家よりも権力を持ちたいのが見え見えであつた。

静江と真由美の父親である七草弘一は、この縁談を断るつもりだつた。

愛人の子とはいえ、弘一は静江を突き放すことはしなかつた。むしろ余計に愛情を注いだのだ。

しかし弘一が反対しても、周りがそれを覆し雪ノ下分家の雪ノ下降信との縁談を決めた。弘一も拒否できなかつたのだ。静江がダメなら真由美を差し出せみたいになつたからだ。

弘一は苦汁の決断、断腸の思いで静江と隆信の婚約を認めた。

だが、光井和也が死んだとされた辺りから雪ノ下降信が豹変したのだ。

静江が密かに和也を思つてたことがわかり、性の捌け口としか見なくなつたのだ。抵抗すれば、妹分の真由美にまで手を出すと言われ、我慢していた。

そんなことになつても、静江は七草家のエージェントとして、不安や悲しみを表情に

出すことはなかった。

今年の2月、雪ノ下隆信は、自身の経営する会社のお金を不正に流失させたり、不正に個人情報流しさせたりして、逮捕されている。

七草弘一が裏で動いて、雪ノ下隆信を逮捕に持っていった。静江を傷物にしたことは、雪ノ下家を潰してもおかしくなかったが、雪ノ下分家が、雪ノ下隆信を勘当しその父親が雪ノ下分家の当主を辞めた。雪ノ下本家も七草家に謝罪している。

ミサキ「うわっ：最低な男ですね。私なら一発や二発じゃすまないかも」

静江「私も雪ノ下の息子じゃなかったら、吹き飛ばしてるわよ。真由美や後の事を考えてね：」

ミサキ「そうですね、人質を取られてるようなものだったんですね：」

静江「今は、恋人作るよりかエージェントとして活動してる方が楽しいし」

ミサキ「確かに私もそうですね」

そんなことを話しながら、静江は袋から紫の競泳水着を取り出す。ミサキも袋から取り出す。普通の競泳水着を入れていたはずなのに何故かトールズ士官学院のスクール水着に変わっていた。ミサキは、目を疑った。自分は、紺のスクール水着なんか持っていないのに何故、この袋に入っているのかと。

ミサキ「(あの時か：レクターめ!!)」

ミサキは、一度日本、朝鮮釜山市でレクターと会っている。その時にミサキは、レクターも袋を持っていたのを知っている。その時にミサキの袋とレクターの袋が入れ替わった。それしかない。そうミサキは思った。帰ったらレクターを締め上げようと考えたのだった。

ミサキが悶えていた間に静江は既に紫の競泳水着に着替えていた。出るところは出て引き締まる場所は引き締まっている。つまりボンキュンボンスタイルである。

静江「ミサキ：まだ着替えてなかったの？」

ミサキ「あ、いや、すぐに着替えます！」

ミサキは、すぐにスクール水着を取り出して、着替えることにした。ミサキは、レクターに対して、怒り心頭であった。

ミサキは、スクール水着を着たのはいいが、サイズがちよつと小さいときた。

ミサキ「(ち、ちよつと本当にありえないんですけど！)」

胸やお尻がキツキツビチビチで、油断すると、ある部分が食い込みそうでたまらない。頭の中では、レクターに対しての怒りで何とか平然を保つ事にしたのだ。先に外へ出ていた静江が、ミサキに声をかけた。

静江「ミサキ？大丈夫？船酔いとかしたの？」

ミサキ「船酔いとかはしてません。すぐにいきますから！」

ミサキは、一回気合いを入れてから外へ出た。

その後、静江と共に海底まで潜り、ゴールド・マウンテン帝国支部の人間を乗せたFLT社製の護送艇の残骸を拾うことに。

静江の目とミサキの計算された数字を元に海底を隅々まで調べていく。

それから3日でほぼ全ての部品や貴重品を拾い上げた。それらは、帝国軍情報局と七草家を主体とする原因究明班とで共同で扱う案件となった。

帝国軍情報局の男の局員と静江の部下達は、ミサキの紺スクール水着と静江の紫の競泳水着を目に焼き付けたことだろう。そのうちの何人かは…夜な夜な…。

4-4-5・16-日本へ。

ミサキ side

11204・5・16・昼・日本国成田国際空港

ミサキは、再び日本を訪れている。東ゼムリア海にて墜落したFLT社製の高速護送艇「暁」の調査資料などを帝国政府、帝国軍情報局に報告をかねて、帝国へ一度は戻っていた。

少し前：

帝国軍情報局の自分の机で、資料整理や日本政府要人や七草家とのパイプ作りをやったことを資料として残すために紙の報告書もまとめていた。そんなときレクターから話しかけられた。

レクター「ミサキ、オヤジが呼びだぜ？」

ミサキ「閣下が？」

レクター「ああ。お前に何か言うことがあるそうだ」

ミサキ「報告書がどこか間違えたとか？」

レクター「知らん、自分で聞いてろ」

ミサキ「ノリが悪いわねえ、レクターは」

レクター「あのな、俺も忙しいんだよ」

ミサキ「へえー、レクターが忙しいんだあ…」

レクター「あのな、ミサキ…。まあいいや。とにかく伝えたからな」

そう言うとレクターは、帝国軍情報局の入る部署から出ていく。レクターもレクターで、オズボーンの命により別の案件のため帝国を出るようだ。

ミサキ「…レクター…西ゼムリアの端…中東ゼムリア…カルバード共和国とサウジアラビア連邦内のエルザウム公国の間にあるあの鎖国エリアに行くのかしら？」

カルバード共和国とサウジアラビア連邦の間にある砂漠化する中に城壁みたいな壁で囲まれている都市がある。ずっと鎖国状態が長年続いていた。

だが、あのD∴G教団壊滅作戦の時に、城壁の中の人間達が協力を申し出てきた。

彼らは、自分達のことを「学園都市」の人間であると名乗った。

カズヤ・アレイスター、マユミ・アレイスターとガイ・バニングスとそれと学園都市を掌握して間もないアレイスター・クロウリーが会談を行っている。学園都市は、長年D∴G教団を潰すために、息を潜めて機会を窺っていた。

学園都市は、D∴G教団に対しての情報を各国に渡す。各国は、学園都市の技術を提供する取り引きを決めた。

そして、クロスベル、リベール、レミフェミア、ローザンブリア、アルテリア、サウジアラビア、日本、台湾などとは直ぐに国交樹立するが、帝国やカルバードとは交渉が難航し、帝国とは今年の1月に国交樹立。カルバード共和国とは、先月国交樹立したばかりである。

学園都市は、クロスベル、レミフェミア、日本とは、医療協定条約を締結している。

ミサキ「レクターは、学園都市との通商会議のための地ならしつてとこかしら……。つて私も閣下に呼ばれてるのだったわ」

ミサキは軽くウインクして舌を出した。まあ誰もいないから、ミサキは悪ふざけをやっただけなのだ。帝国軍情報局内には、人がいっぱいいるのだが、ミサキは部屋を与えられており、今はその部屋にいるのだ。

ミサキは、自分の机を片付けた後、オズボーンの元へ訪れるのである。

――帝国政府宰相執務室

帝国政府宰相執務室は、帝都ヘイムダルのバルフレイム宮の中にある。もちろん帝国議会もあり、ここで帝国の政治が行われる。

ミサキは、宰相執務室の扉を叩く。すると中から

オズボーン「ミサキか？ 入りたまえ」

ミサキ「はっ、閣下、ただいま参りました」

ミサキは敬礼をかわす。今のミサキの鉄血の子供達の立場である。

オズボーン「改めてになるが、東ゼムリア海での海底調査は、ご苦労であった」

ミサキ「はい、ありがとうございます」

オズボーン「ミサキ、君はどう思うのかね？日本の高速護送艇【暁】が粉々になつて東ゼムリア海海底に沈んだ件についてだが？」

ミサキは、七草家の麦野静江と一緒に色々調べ尽くしたのだ。あらゆる確度から見て判断したのが、事故で墜落したのではなく

人為的な原因で墜落したと判断。

なら内部のゴールド・マウンテン帝国支部の人間が、護送艇を乗っ取るうとして、それが原因として墜落したのか？

それも違うと判断。

内部の人間が外からどうやって護送艇に傷つけるかが問題である。

外に仲間がいて、護送艇の中の間人を助け出そうとして、誤つて墜落させたからなのか？

それも違うと判断。

ゴールド・マウンテン帝国支部の人間の遺体から判断するにそれは無いと判断。何故

ならば、助けが来たのならあのような表情にはならないと。

彼らの表情は、絶望に満ちた感じであった。

どうして、そうなったのかは、検討もつかなかった。

ただ外から護送挺が切り裂かれたとしかわからなかった。引き続き七草家は、調べると連絡はあった。ミサキも納得はしていない。護送挺の事は、静江に任せて、帝国へ帰還したのだ。だからミサキは素直な今の気持ちで答えた。

ミサキ「護送挺の件は、私は疑問だらけですから。日本当局の発表は隠蔽工作ってことはわかってますから」

オズボーン「なるほど、資料を見て判断したが、私もそう思っている」

ミサキ「閣下もですか？」

オズボーン「そうだ。帝国政府と日本政府の犯人引き渡し条約の協定とおりにゴールド・マウンテン帝国支部のマフィア、猟兵団の団員を日本政府に引き渡すことになっていた」

ゴールド・マウンテン帝国支部の人間が日本政府に捕まることを良しとしない連中、それは獅童一派でることになる。七草家もゴールド・マウンテン社に支援もしていたが、人身売買などをやっていることが明るみに出た為、手を切ることになった。

ゴールド・マウンテン帝国支部の人間が逮捕され、真実を話されて一番不味い連中、金

城達の人身売買組織、獅童正義一派だろう。だから支部の人間を亡き \square したのではないかとミサキは仮説を立てた。

ミサキ「ゴールド・マウンテン帝国支部の人間が日本政府に情報を売る可能性もあったから、金城達か獅童一派に消されたと考えているわ」

オズボーン「ああ、そう考えると、筋が通るな。だが金城達や獅童一派が手を下したという証拠は無いが、どうする？」

ミサキ「難しいところでしょね…。連中がおいそれとしつぽを掴ませてくれるはずもないし」

ミサキは、あごの下に手を置いて考える。

オズボーン「鴨志田卓…ミサキ、この人物がなんなのか分かるだろう？」

ミサキ「ええ、わかりますよ、日本の金メダルリストで、高校教師の鴨志田卓ですよ。教え子に手を出した教師…」

オズボーン「そうだ。日本政府もゴールド・マウンテン帝国支部の件があるのだろう。帝国政府と協力して事に当たりたいと桐条から打診があった。帝国政府の代表として日本へ行ってくれないか？四葉、七草とパイプを持っている、ミサキしか出来ないと思っている。日本に行き、日本の警察組織の特殊捜査班を訪れてくれたまえ」

ミサキの回想はそこで終わり、意識は再び成田国際空港に戻ってきた。

ミサキ「まずは：日本の警察組織、警視庁を訪れないと」

ミサキはそう言う成田国際空港内を歩き出す。

ミサキ side

111204・5・16・13：45・警視庁

1 成田国際空港↓警視庁

警視庁、日本の東京都を管轄する警察組織である。

桐条首相が半年前に作り上げた警察組織である。国内にて、犯罪等に迅速に解決できる部署を作るのが目的であった。これは表向きで本当の目的は、遊撃士の少ない日本での代わりの組織が欲しかったものもあるが、クロスベルの特務支援課のようなものになつてほしい期待を込めてもあるのだ。

そんな警視庁は、東京都千代田区霞ヶ関2丁目1-1にあるのだ。

ミサキは、警視庁の建物を見上げている。カルバートの警察の建物と同じくらいだなと考えていた。

ミサキ「ここが警視庁、向こうに見えるのが、警察庁だったかな」

ミサキはARCSUSを操作しながら確認する。日本に何度も来ているとはいえ、警察

組織を訪れるのは初めてである。

オズボーン宰相に警察組織の特殊捜査班を訪れよと言われたミサキは、意を決し警視庁の中に入る。

中に入るとすでに、出迎えの人間がいたのだ。

?? 「これはこれは、遙々帝国からいらつしやいました。ミサキ・カミジヨウ特務少尉」

?? 「彼女が帝国の情報局から来たカミジヨウさん」

出迎えてきた人間、相棒の杉下右京みたいな感じな男性と亀山薫みたいな男性である。

ミサキ「はっ、エレボニア帝国から参りました、ミサキ・カミジヨウであります。今後ともお見知りおきを」

?? 「丁寧な自己紹介、ありがとうございます。警視庁特命係の杉下左京と言います。そう硬くならずにはじめに気楽で構いませんよ」

?? 「同じく特命係の亀山徹です。宜しくお願いしますね。硬くなくていいよ」

ミサキ「警視庁特命係の杉下さんに亀山さん、わかりました」

ミサキはそう言つて杉下と亀山と握手をかわす。今までも日本の関係者とは握手をやつてきた。その国その国の挨拶方法も違うからちゃんとは勉強をしていなければならぬ。

ミサキ「お互いのトップから聞いてると思えますが……」

左京「鴨志田卓、もしくはは、ゴールデンマウンテン帝国支部の幹部を乗せた護送艇が東ゼムリア海上で沈んだ件：色々と帝国と我が国とは問題を抱えているようですから」

ミサキ「アハハ、まあそうですね」

左京「とにかく、話は別の場所でしましょうか」

ミサキ「そうですね」

警視庁にミサキがいること自体が目立つのだ。西ゼムリアで目立たなくても東ゼムリアではどうしても目立ってしまう。

徹「いきましよう、いきましようか」

ミサキ、左京、徹の3人は警視庁から出て話せる場所へ移動することになった。

——警視庁・刑事部長の部屋。

そこには、刑事部長の中村と参事官の神園の2人がいた。刑事部長の中村完二は、相棒の内村刑事部長、参事官の神園輝明は、中園参事官の容姿である。性格も似たり寄ったりである。

この2人は何かこそそと話していた。

神園「刑事部長、帝国からの使者を特命係に預けて良かったのでしょうか？」

中村「良いも悪いも、上からの命令だ」

神園「大神官房長官からでしょうか？」

中村「馬鹿者、我妻副官房長官からだ。考え見たまえ、大神が依頼してくるなら特務課に回してくるはずだろう。上もオズボーンからの依頼を疎ましく思っているのだろう。だから特命に回せなどと言って来てるのだろうな」

大神武夫官房長官、首相の桐条の片腕、1人。容姿は、サクラ大戦の大神一郎みたいな感じである。

我妻拓郎副官房長官。彼も桐条の片腕の1人であったが、彼に見切りを付け獅童に近づいている。そのため大神とちよくちよくと対立している。容姿は、インテリ風のメガネをかけた青年である。

神園「特命の2人に任せて大丈夫なんでしょうか？後で帝国から何か抗議でも来たらどうするんでしょうね……」

中村「何か帝国からあれば、特命に責任を取らせればいいのだ。我々が責任を取る必要はないのだよ」

神園「はい、仰るとおりです」

中村「我々も忙しい、帝国からの要望など聞いている暇は無いのだよ」

そんな話をしばらく続ける中村刑事部長と神園参事官であった。

5-5-5・16 (14:30) 一調査。

ミサキ side

111204・5・16・14:30・駒鳴喫茶店

警視庁↓駒鳴喫茶店

ミサキ、左京、徹の3人は、警視庁の近くの喫茶店にやってきた。

ミサキ「ここは、喫茶店ですね」

左京「ええ、ここならば安心して話せますからね」

ミサキ「安心してつて、警視庁内では安心出来ないつて意味にとれますけどお？」

左京「無論です。我々警察のトップは、貴女、帝国政府の使者を迷惑がつているよう

ですからね」

ミサキ「えっ!?!」

徹「驚きますよね。上層部は帝国政府の使者を軽々しくしてますから」

ミサキ「……………」

左京「本来なら、特務課に送られるはずだったようですしね。大神官房長官や小野寺官房長の指示が、我妻副官房長官によつてねじ曲げたとしか考えられませんね」

ミサキ「……十師族、七草家や四葉家の許可はもらっています。その我妻つて人は何を考えて……」

左京「我妻副官房長官、元々は桐条首相の片腕だった人物です。しかし約半年前から獅童正義に付き始めたのではと噂があるのも事実なんですが……」

ここで、飲み物の注文をする。ミサキと左京は紅茶、徹はブラックコーヒーを頼み、店員が持ってきたものを一口飲む。

ミサキ「……杉下さん、亀山さん、貴方は特命係だと名乗ったではないですか？」

左京と徹は、顔を見合わせながら苦笑いをしながら答える。

左京「特命係というのは、名ばかりなんですよ」

徹「警視庁で特命係は、人材の墓場と言われてまして、捜査権も逮捕権もありませんからね」

ミサキ「……なるほど。人材の墓場……。私から見れば……宝をどぶに捨てる行為にしか見えませんか。杉下さんの能力、亀山さんの暑き刑事魂のようなものが見えますよ」

左京「お褒めに頂き恐縮です」

徹「暑き刑事魂……そんなこと初めて言われた」

ミサキ「そうだ、杉下さん、亀山さん、私達、協力しませんか？」

左京「協力とは……どのようなことでしょうか？」

ミサキ「私は本来なら鴨志田問題とゴールデン・マウンテンの帝国支部幹部達を乗せた護送艇の墜落原因などの追加調査のために来たのです。私が見る得る情報を杉下さん達の渡します。そのかわり……」

左京「その代わり、鴨志田卓元教諭の情報を教えてくれ、と言うわけですね」

徹「え？左京さん、今の会話でわかつたんですか？」

徹は、ミサキと左京の会話についていけてなかった。彼は続けて話続ける。

左京「亀山君、ゴールデン・マウンテン帝国支部の幹部を乗せた護送艇の墜落の事は、日本内外にも発表されてますからね。ただ鴨志田卓元教諭のニュースは、日本内外では、罪状の発表され方が違うのですよ。そうですね、ミサキさん？」

ミサキ「ええ、違うわね。日本国内では、彼が教鞭を取った秀尽学園内で、体罰、セクハラ等をやっていたことを、とある日に全校集会で自ら暴露したんですっけ？」

左京「ええ、間違いはないですね」

ミサキ「でも日本国外だと、鴨志田は秀尽学園で、体罰、セクハラ等以外に生徒を外国に売買、武器の不正輸出等まで関わっているとされているわね」

徹「何だつて……それって一体……」

左京「誰かが、彼だけに責任を押し付けようとしてるんじゃないかね」

ミサキ「そう見るのが妥当でしょうね」

徹「それって誰なんですか？」

左京「それはまだわかりませんが、ミサキさんの情報で噂の領域から確実にいることがわかりましたよ」

徹「そうなんですか？」

左京「とにかく、まずは彼に会いに行きますよ！」

ミサキ「彼というのはまさか…？」

左京「そのまさかですよ」

左京は、レジで会計を済ませる。徹とミサキの分のミラまで支払っている。駒鳴喫茶店から警視庁へ戻る途中に

ミサキ「杉下さん、支払ってもらってすいません」

左京「構いませんよ。情報提供の報酬とまではいきませんが、鴨志田に会える口実を作れたのは間違いありませんからね」

徹「鴨志田に会うんですか？うちの一课の連中が連日取り調べてるんじゃないや…」

左京「お邪魔するだけです、亀山君」

左京は、駒鳴喫茶店から警視庁へ戻り始める。徹はミサキに

徹「左京さんは、いつもあんな感じなんだ。驚いたよね？」

ミサキ「別に驚は無いですよ。変人系は帝国やクロスベルなんかで慣れてますし」

徹「へえーそうなんだ：」

ミサキと徹はそんなことを喋りながら警視庁へ向かうのだった。

ミサキ side

11204・5・16・14： 55・警視庁第3取調室。

警視庁内のある場所にある取調室。複数の取調室があり、その中の一つで鴨志田の取り調べが行われている。

取り調べを行っているのは、警視庁捜査一課の伊丹班である。その班の班長は伊丹憲二 巡查部長。容姿は、相棒の伊丹憲一 巡查部長の感じである。

伊丹「今日もしやべってもらうぞ」

鴨志田「も、もう全て話したはずです」

芹澤「まだしやべってないことがあるでしょう？」

伊丹の後輩である芹澤慶三 巡查部長。容姿は、相棒の芹澤慶二 巡查部長のようである。

鴨志田「え？しやべってないこと？そんなわけあるわけがないでしょう！私はちゃんと全て話しましたよ！」

鴨志田が自供したのは、あくまでも秀尽学園内の話、セクハラ、パワハラ、鈴木志帆

に対してのレイプ行為などである。伊丹達がはかせようとしているのは、秀尽学園の生徒を人身売買してるとか、武器を不正に輸出してるとかである。

芹澤「話していないから、こうやって話を何度もしているんでしようが」

伊丹「お前をもっと取り調べると上層部は言ってきたている。根比べなら付き合っつてやってもいい。時間はたっぷりとあるしな」

鴨志田「貴方達、警察はこの私に何を言わせようとしているの！秀尽のことしかかわからない」

すると取調室のドアがコンコンとノックがされ、とある人物達が入ってくる。

伊丹「杉下警部、勝手に入って来ないで下さい。我々は取り調べの最中ですから」

左京「伊丹刑事、今日は我々と…」

左京に紹介される前にミサキが前へ出て懐から帝国軍情報局の手帳を出して

ミサキ「エレボニア帝国軍情報局、特務少尉のミサキ・カミジヨウと申します。帝国政府と日本政府の捜査協力の協約に基づき、鴨志田卓氏の事情聴取を求めます」

伊丹「帝国軍情報局だ?!」

芹澤「帝国軍情報局の人間って初めて見た」

左京「ミサキさんと我々特命係は、捜査協力をすることにしました」

伊丹「何を勝手なことを……」

徹「伊丹、別に勝手ではないんだよ。上層部が特命係に回してきたんだよ！」

伊丹「つたく、上層部は何を考えてるんだよ……。わかりました、カミジヨウ特務少尉、我々も協力します。特命係だけに任せられませんから」

ミサキ「ふふつ、ありがとうございます、伊丹捜査官」

伊丹は取り調べている机の椅子から立ちあがり、そしてミサキが座り取り調べの再開となった。

ミサキ「はじめまして、私は、帝国軍情報局のミサキ・カミジヨウというものです」

鴨志田「……？何故、日本の警察の取り調べで帝国軍情報局の人間が取り調べに？」

ミサキ「帝国政府と日本政府との間に捜査協力という形になりました。貴方の件は、帝国まで関係しているのですよ」

ミサキは、自分の鞆から帝国で集めた証拠を鴨志田に突きつけた。資料や導力写真である。

ミサキ「これらに覚えはあるかしら？」

鴨志田「な、なんなんですか？これは一体……」

ミサキ「貴方が日本で高校生を人身売買や武器を不正に輸出しているという証拠ね」

伊丹も芹澤もビククリしている。秀尽学園の問題しか扱っていなかったのだから。

ミサキは鴨志田を見ながら取り調べている。

ミサキ「果たして貴方は、そんなことしていたのかしら？」

鴨志田は、ミサキを見ながらこう言った。

鴨志田「この私が人身売買？武器を不正に輸出…？私はそんなことやっていない」

ミサキ「本当に？」

鴨志田「私にそのような権限はない。他の誰かだろ。この私を嵌めようとしている…。これは本当だ！信じてくれ！」

鴨志田はミサキに懇願してきた。彼女が鴨志田の目を見る限り、嘘を言ってるようには見えない。

芹澤「鴨志田、今度は泣き落しか？」

左京「貴方は、秀尽学園の事件は認めるが、人身売買、武器の不正に輸出したことは認めないと？」

鴨志田「やっていないことは認められるか！」

左京「ミサキさん、彼は嘘は言っていないようですね」

ミサキ「ええ、私も杉下さんの見立てとおりですね」

伊丹「それでは、人身売買や武器の不正に輸出した犯人は別にいると言うことですか？」

ミサキ「そういうことになりますね、伊丹捜査官」

伊丹「人身売買と武器の不正に輸出に關しては振り出しか！」

イライラが募る伊丹。怒りを表面に出す芹澤。それもそうだろう、鴨志田が全てを担っていたと判断し動いていたのだから。

ミサキ「伊丹捜査官、芹澤捜査官、私が調べあげた情報を教えます。日本の警察上層部にも報告していないものですが」

伊丹と芹澤は驚く。もちろん亀山徹もだが。

左京「ミサキさんしか知り得ていない情報、興味がありますね」

伊丹「上層部にも言っていない情報：そんなものを俺達に教えるつもりだ？」

ミサキ「伊丹捜査官、芹澤捜査官、貴方方は信用に足る人物だと私が判断しました」

左京「なるほど」

ミサキ「日本の警察上層部は信用出来かねますが、特命係のお二人や捜査一課の伊丹班なら信用できると。私は判断しました」

徹「日本の警察上層部が信用できない理由とは？」

ミサキ「貴方達を前にしてこんなこと言うのはあれですが、彼の件もですが、金城潤矢の件もちゃんと捜査しているようには見えないのですよ」

ミサキは鴨志田や左京、徹、伊丹、芹澤を見据えながらそう言った。

伊丹「確かに捜査3課は金城の件で動いてはいるが、動きが鈍いのは確かかな」

芹澤「確かに、金城潤矢の人相すらわかってませんからね」

ミサキ「金城は、政治家や日本経済界に深く食い込んでいるわ。だから警察上層部も金城にミラをもらってるんじゃないかと思ってるわ」

左京「ミサキさんの考えは、ハズレではないでしょうね……ちよつと前にとある企業に捜査2課が家宅捜査に入ったようですが、なんといなくなっていたようです。家宅捜査は秘密に決まったことなのに、とある企業に情報が漏れていた」

ミサキ「それはもう……」

もう言わずもがなということになる。警察上層部は、もう金城の手に落ちていると言つても過言ではない。

ミサキ「……警察内部でする内容ではありませんねえ」

ミサキは、取り調べの可視化による導力カメラの向こうで観ているであろう人物に言っている。見ているであろう日本の警察上層部に対して。

ミサキ「彼から聞けるのは、これだけでしょね。後は検察に任せて裁判つてとこでしようが……」

ミサキは警察上層部がこんな感じだと、検察上層部も似たような感じではないかと考えた。

徹「鴨志田を送検するつてことですか？」

ミサキ「普通なら送検でしょうけどお…検査もあまり信用が出来ないのよねえ」

左京「確かにミサキさんの仰られたとおりですね…」

ミサキ「伊丹捜査官、芹澤捜査官、鴨志田のことは任せましたよ。杉下さん、亀山さん…行きましょう」

そう言うときミサキは、取り調べ室から出ていく。左京と徹も彼女を追って出るのであつた。

ミサキ side 警視庁↓秀尽学園

111204・5・16・15:20・秀尽学園へ。

警視庁を飛び出した、ミサキ、左京、徹の3人は、秀尽学園へと向かう。どこに向かうかと言うと鴨志田の元の勤め先である秀尽学園。彼はこの学園で独裁者の如く権力を振りかざしていたのだ。

だが、その独裁者鴨志田も謎の怪盗団によって終わりを迎えた。警察の事情聴取の資料の片隅に書かれてあつた事をミサキは見つけていた。

《怪盗団ウロボロス》

鴨志田に送りつけた予告状が、秀尽学園の掲示板に張られていたと証言などあり、怪盗団が彼になんなかの接触があつたのではないか。だが彼と怪盗団が接触している物

的証拠は何もない。

身喰らう蛇（ウロボロス） 国際指名手配組織。 危険度SSS認定。

身喰らう蛇と繋がりがああるのかも不明。

改心とはなんのことか。 鴨志田本人からも聞き出すことも出来ていない。

これが警察内部で秘匿とされているものである。 それらを左京と徹にミサキは話したのだ。

左京「怪盗団：ウロボロス。 ウロボロスと聞くと身喰らう蛇の事を考えますが、果たして怪盗団ウロボロスは偶然なんでしょうかね。」

徹の運転する導力車で秀尽学園までいくつもりである。 助手席には左京、後ろにはミサキが乗っている。 もちろんこれから秀尽学園へ行くことは学校の校長に連絡してある。

ミサキ「たまたまなのか、偶然なのか、必然なのかはわかりませんがねえ」

徹「もしその身喰らう蛇と同じ連中だとして、秀尽学園の生徒を救う理由なんて無いと思うんですね。 あの連中がボランティアでやるとは思えませんし」

左京「確かに：」

ミサキ「あの連中は、自分達の目的のためならば、冷徹と任務を遂行しますよ。 私は何度も執行者と戦いましたから」

左京「執行者…身喰らう蛇の実行部隊ですよね」

ミサキ「そうですね。執行者には自由が認められていますし…色んなのがいますしね」

ミサキも身喰らう蛇の執行者とは何度もやりあっているため、ボランティアでは人助けとかなしいことはわかっている。

徹「執行者ついているんなヤツがいるんですか？」

ミサキ「いますよ、色んなのがね。まあ抜けた執行者もいますし」

徹「そうですね」

そんな会話をしながら秀尽学園を目指している3人であった。

3人は、秀尽学園の正門をくぐり抜け校舎前までやってきた。

ミサキ「ここが秀尽学園か（以前帝国に連れ去られた女子学生の新島真さん、お助けチャンネルの芳澤すみれさんも秀尽学園の生徒だったわね…。会えるかはわからないけどお）」

左京「まずは、鴨志田に対して予告状が張られていた掲示板がある場所に行きましょうか」

徹「そうっすね」

ミサキ、左京、徹は、予告状が張り付けられていたという掲示板のところへ行く。

——同時刻、秀尽学園の校長室では、校長がとある場所へと通信をしていた。

校長「警視庁から、秀尽学園にまた捜査が入るようですが、どういうことでしょうか？」

??「警視庁からだとは……なるほどエレボニアからの人間が来ていたな」

校長「エレボニア帝国から？何故です？何故エレボニアから捜査されなければならぬのです？明らかに内政干渉ではありませんか？」

??「日本政府と帝国政府の捜査協力、お前は自分のとこの生徒がゴールド・マウンテン帝国支部に誘拐されたことを知らないはずないよな？」

校長「覚えてますよ、秀尽の生徒が何人か誘拐されました」

??「それを盾に帝国政府が横槍を入れてきたようだな」

校長「横槍ですか。??様、私めはどのように対応すれば？」

??「普通とおりにしておけば良いだろう。決しておかしなことは言うなよ」

校長「わかりました、??様」

校長がそう言うと、通信が切れた。校長は

校長「普通とおりにやるのが一番難しいだが……」

そう言うのとミサキ達の対応をするため、校長室を出るのであった。

6-6-5・16 (15:40~) 一警視庁特務課。

ミサキ side

11204・5・16・15:40・秀尽学園の掲示板にて

掲示板の前にミサキ、左京、徹の3人がいる。

左京「ここが…予告状が張られた現場ですか」

徹「ここが…ですか」

ミサキ「資料のとおりなら、ここですね」

左京「なるほど。正門からここまでの距離でしたら外部の人間でも可能ですね」

ミサキ「確かに、朝早くなら誰にも気づかれずに予告状を張ることが出来るでしょう

が…」

ミサキは、生徒達の教室の方を見ている。

左京「ミサキさん、どうかしましたか？」

徹「教室の方を見てどうしたんですか？」

ミサキ「外部犯なら、逃走経路の安全までの多少のリスクはありますが、もし内部犯なら怪しまれずに校舎内に残っていても不自然じゃないですよね？」

左京「ミサキさんは、怪盗団のメンバーは、秀尽学園の生徒だと？」

ミサキ「断定はしませんよ。ただ：その可能性があるってだけですのうでえ」

徹「怪盗団のメンバーが高校生？ミサキさん、それって考えすぎじゃ？」

左京「亀山君、ミサキさんが言っていることも間違えではありませんよ。我々日本にいてはわからないこともあります。この僕がカルバードに留学していた時でしたか。高校生よりも年下な子供達が導力銃を持って戦ってましたからね」

ミサキ「カルバードの反移民体制派のテロですね。反移民体制派の連中が、達の悪い猟兵団にテロの依頼を出し、依頼を承諾した猟兵団がテロを行う。なかには、12〜13歳の子供達がそれを行います……」

徹「……そんな……」

左京「それが現状のカルバード共和国ですか。我々の祖先が多く関わってますからね」

ミサキ「日本は、帝国よりも共和国との付き合いが長いんですね。歴史的にですけどねえ」

左京「そうですね……まあ共和国との深い繋がりがあつたのは、徳川幕府というべきでしょうかね」

ミサキ「でしょうね。徳川幕府の人々は、日本からカルバードに亡命されてるみたい

ですしねえ。当時はまだ王国ですが」

左京「女性革命家シーナ・ディルクによる民主化革命、いわゆるカルバード革命ですね。彼女らは、日本の十師族維新をモデルにしたとも言われてますね」

ミサキ「日本の十師族維新が約150年前、カルバードの革命が約100年前」

徹「あのくその話と怪盗団と何か関係でも？」

左京「亀山君、カルバード革命は有名どころですよ。日本の十師族維新がモデルになっていると」

ミサキ「亀山さんは、歴史系とか苦手ですか？」

徹「いやあ：苦手とかじゃないんですけどね…」

ミサキ「話は戻しますが、西ゼムリアでは、少年少女を猟兵として訓練し実戦投入するのは、ざらりとありますから。東ゼムリアでは、そんなことはあまりないでしょうが」

西ゼムリアは、エレボニア帝国とカルバード共和国との対立により、不安定な部分も多い。それに帝国も共和国も内部にも爆弾を抱えている。それがいつ爆発してもおかしくはない。それに比べて東ゼムリアは、日本を中心に成り立っているため混乱は少ないが、日本国内にも反十師族勢力がいるため、完全な安全とは言えない。ちよつと前にそういう関係の反乱が起きたばかり。

左京「日本国内でも今は爆発を抱えています。先の反乱分子の生き残りが、テロ活動な

ど犯罪活動を行っていますからね」

徹「そうでしたね」

左京「渋谷のセントラル街の裏は、外国から入ってきた者達が取り仕切っていると聞きます。そのような者を取り締まるのが警視庁特務課ですね」

ミサキ「警視庁特務課……」

左京「一説に言えば、クロスベルの特務支援課をモデルに作つたらしいですが」

ミサキ「特務支援課……ロイド達の」

徹「どうかしましたか、ミサキさん？」

ミサキ「え……いえ……ちよつと昔を思い出して……」

ミサキは特務支援課と聞いてちよつとウルツときてしまったのだ。特務支援課は今亡きガイの思いと意志が詰まったものなのだから。だからこそガイの思いと意志が日本でも根付きはじめていることにウルツときてしまった。

そんな感じでやっていたら秀尽学園の校長がやってきた。

校長「警視庁の皆様、よくぞおいでになされました。ここで立ち話をなんですから、会議室へどうぞ」

校長は、ミサキ達を会議室へ連れていく。なるべく人気の無いところへ彼女達を連れて出したかったのだ。そんなことはミサキも左京も気づいてるのである。

ミサキ side

11204・5・16・17:20・秀尽学園↓渋谷セントラル街↓斑目邸(付近
導力車の中)

ミサキ達は、徹が運転する導力車で渋谷セントラル街の先にある斑目邸を目指していた。だが渋谷セントラル街の入り口付近で、交通事故が起き大渋滞を起こしたため、遠回りをして斑目邸にやってきた。

斑目邸:回りの近代的に建物に対して、斑目邸はあばら家という風貌である。

ミサキ:…盗作をしているにしては、あばら家ってどうなのかなって思いますが…」

徹「イメージとしては、大豪邸って感じですよ」

左京「そんな画家ばかりではないと思いますけどね」

ミサキ「さて、どうしましょうかねえ。令状なんか持ってないから、いきなり踏み込むのも問題だらけですし…」

ミサキ達は、斑目邸の玄関を見ながら会話をしている。玄関先は何も変化があるわけではない。するとミサキの目には、男女の4人組が突然現れたように見えた。

ミサキ「え:!?」

左京「ミサキさん、どうかしましたか？」

ミサキ「あの男女の4人組、突然現れませんでした？」

徹「え？普通に向こうから歩いて来てましたよ？」

ミサキ「……そうですか……杉下さんは？」

左京「……ええ、突然のような揺らぎのようなものが一瞬や見えたような……そんな感じが見えました……」

ミサキ「私もそのようなものが……それにあの4人、秀尽学園の生徒ですよねえ」

左京「確かに秀尽学園の生徒ですね」

徹「秀尽学園の生徒は、この辺りにも来るんですかね、あまり治安は良くないと聞きますけど」

左京「ええ、昨日も渋谷のセントラル街で秀尽学園の生徒を狙った事件も起きてるよ
うですよ」

ミサキ「昨日、そのような事件が……。あの校長……そんな事件が起きてるのに、注意喚
気も生徒達に言わないなんて……」

左京「……秀尽学園、思っていたよりも闇が深そうですね。ちなみに昨日の秀尽学園の
生徒を襲ったとされる被疑者は特務課が取り調べてるはずですね」

ミサキ「特務課がですか……」

するとミサキのARCSに着信が入る。日本では普通に帝国製が使えるのも、RF

社とFLT社が導力通信網を急速に進めたからである。通信してきた人物は、静江である。

ミサキ「静江さん」

静江「ミサキ、貴女、また日本に来てるのね」

ミサキ「静江さん、東ゼムリア海での捜索以来です」

静江「ミサキ、鴨志田の事を調べてるのよね。警視庁の特命係と一緒に」

ミサキ「…やはりあの校長、帝国に抗議を？」

静江「帝国には抗議をしていないみたい。ただ警察の上層部には抗議をしたみたいね。それとある議員から警視庁のお偉いさん達がお叱りを受けて、イライラがつっているみたいだし…」

ミサキ「とある議員つてのは、獅童正義…ですよ？」

静江「ええ、そうね。あの男はどういう手を使って警視庁に圧力を加えてきたのか、わからないわ」

ミサキ「…獅童は、帝国でも貴族派に接近していて、帝国でも勢力を伸ばそうとしてるみたいですね」

静江「今は獅童は置いて、まだ鴨志田を調べているの？」

ミサキ「いえ、今は鴨志田じゃなく斑目を調べてるんです」

静江「斑目画伯を？……うーん、ミサキ、ARCCUSでは話しづらいわね、警視庁特務課が来てくれないかな」

ミサキ「警視庁特務課にですか？」

静江「特命係と一緒に来ていいから。私は特務課で待ってるから」

そう言うのと静江はARCCUSの通信は終わり、ミサキも通信を切り左京と徹にいま話した内容を説明した。

左京「なるほど、麦野静江、七草家のエージェント…」

徹「彼女って大学生なんじゃ…」

左京「十師族となると、高校生、早くては中学生でエージェントで活動してるようですよ」

ミサキ「そうみたいですよね」

徹「今度は特務課に行くんですけどね。特務課は同じセントラル街にありますしね」

ミサキ「そうだったですね」

左京「それでは、警視庁特務課にいきましょうか」

ミサキ達は渋谷セントラル街にあるという警視庁特務課を目指すことになる。

ミサキside

111204・5・16・18:00・斑目邸↓警視庁特務課が入るビル

警視庁特務課、本来なら警視庁の内部に作られるはずの部署。だが警視庁の上層部は、外部に警視庁特務課を設立したのだ。つまり自分達に逆らうような人間を警視庁内部に置きたくはないのだろう。ただでさえ杉下達特命係があるのだから。

ミサキ達は、警視庁特務課があるビルに到着した。警察の組織のビルだけあつてもものしい感じはする。導力車から降りて特務課と書かれたビルを見上げる。

ミサキ「ここが、特務課が入つてるビルなんですねえ」

左京「本来なら警視庁内部に設立されるはずだった部署ですね」

ミサキ「やはり警察上層部や警視庁の上層部が嫌がつたつてことですよねえ？」

左京「そうですね」

ミサキ「警察内部で争つてる場合じゃないと思いますけどねえ」

左京「ごもつともですね」

3人はそんな話をしながら警視庁特務課の入るビルへ入る。

入つて受付より課長室まで行くように言われ課長室へ。課長室の扉をノックした。

御坂「入りましたえ」

ミサキ「初めまして。御坂雅孝警視庁特務課課長」

御坂雅孝の隣には、もう1人いたのだ。それは麦野静江である。

御坂「帝国軍情報局所属ミサキ・カミジヨウ特務少尉殿と警視庁特命係の杉下左京警部と亀山徹巡查部長」

静江「ふふっ来たわね」

左京「御坂特務課課長、初めましてでしょうか」

徹「初めまして、御坂特務課課長！」

御坂「形式はここまでにしてと。そう固くなる必要はないかな。ミサキさん君の活躍は耳にしてるよ。もちろん杉下さんや亀山さんの事もね」

ミサキ「ありがとうございます」

左京「恐縮です」

徹「ありがとうございます」

静江「本題に入る前に聞くけど、鴨志田から聞けたかしら？」

ミサキ「ええ、まあ：そうですね、わかったことと言えば、鴨志田は、武器不正輸出や人身売買には関わっていないって事がわかつたくらいかな」

静江「やはりね」

左京「やはりとは、一体どういう事でしょうか？」

静江「七草家でも鴨志田事件は扱っているのよ。鴨志田の住んでる場所、実家、秀尽学園の彼の使っていた部屋なんかを調べたけど、武器不正輸出や人身売買に関する証拠

はなに1つ出てこなかったのよ……」

ミサキ「静江は、流石は七草家のエージェントですね」

静江「まあ、エージェントとして小さい時から育つて来たからね」

左京「麦野さんの話しと鴨志田の話を含わせると、彼は武器不正輸出や人身売買には関わっていない……他の誰かが彼に罪を押し付けようとしているってことですかね」

徹「それが、斑目ってことですかね？」

ミサキ「まだ斑目がそう言うことに関わってるかはわからない。ただカルバードで彼が贗作や盗作しているのではという密告があったみたい。カルバードもCIDが動きだしてみたいだし」

御坂「カルバードの中央情報省……CID」

ミサキ「自分達帝国軍情報局が動いていることもあちらさんはわかってるでしょうしねえ」

徹「カルバードも動いてるんですか？」

左京「そうですね。斑目画伯の事を密告したのは、カルバード人、斑目の弟子だった1人みたいですね」

ミサキ「杉下さん、知ってたんですか？」

左京「ええ、カルバードに留学してたことから縁がありましたね、それからカルバード」

ドの情勢が載っている新聞も購入してますね。いつかの新聞にて告発状が載っていたのを思い出しましてね。そのカルバード人のお弟子さんは、日本の警察、裁判所に訴えを起こしたらしいのですが、受理されなかったと書かれてましたね」

徹「警察も裁判所も…司法が握り潰したんですか！」

御坂「残念だがそう言うことになる」

ミサキ「司法の世界まで…斑目は獅童と繋がりと見た方が言いかもねえ、御坂さん」

御坂「私もそう思っている。斑目の件で調べたいが、官邸…の方から斑目よりも秀尽に現れた怪盗団を調べろと御達しが来たんだ」

ミサキ「大神官房長官がですか？」

御坂「副官房長官の方ね。我妻の方…あいつは大神の部下だったくせに、獅童に鞍替えした愚か者だよ」

左京「本来ならミサキさんは、こちらの特務課にだったのですが、我妻副官房長官の横槍で、我々特命係に来てしまったわけですが…」

ミサキ「別に構いませんよ。特命係に回されたお掛けで杉下さん、亀山さんと出会えましたから。結果オーライですよお！」

左京「そう仰って下さって、本当に恐縮です」

ミサキ「私は出会いと縁を信じてますからねえ。えーと話は変わりますが、先日の渋谷セントラル街の事件について話を聞きたいのですか、宜しいでしょうか？」

御坂「渋谷セントラル街の事件、秀尽の生徒が襲われた事件ですよね？」

静江「新聞記者崩れが3人、特務課が逮捕したヤツね」

ミサキ「鴨志田事件、セントラル街の事件つて繋がってないように見えるけど、裏では繋がっている可能性があるんじゃないかしらあ？」

左京「キーになるのは、秀尽学園ですか……」

御坂は、何かの資料を取り出し、ミサキ達に見せた。

御坂「それは、昨日特務課のエース達が新聞記者崩れの3人の取り調べて自供した内容だな」

七耀暦1204・5・15の渋谷セントラル街の裏側にて起きた事件

新聞記者崩れ3人が、渋谷セントラル街の裏方で秀尽学園の生徒達を絡んで襲撃していた。助けに入った秀尽学園の生徒2人にも絡んだ模様。

突然コスプレを着た女性が、新聞記者3人を撃退しそのままいなくなつた。

コスプレの女性の正体はわからない。

引き続き調査を続行する。

そう書かれた資料をミサキ、左京、徹の順番で見っていく。

静江「それとミサキ、貴女には言って起きたいことがあるわ」

ミサキ「言って起きたいこと？」

静江「カルバードのC I Dも日本に来てるわ。斑目の件で来てるわ。出会うかも知れないけど、穏やかにね」

ミサキ「わかりました。私も共和国のC I Dと日本で争うつもりはないですよ」
こんな感じでこの日のミサキの日本での1日は終わった。

7-7-5・16 (21:30) (5・19 (11:30
) -ジェラール・ダンテス。

ミサキ side

1-1-204・5・16・21:30・花の里

ミサキは、左京と徹ととある場所に連れて来られた。とある場所とは、2人の行き着
 け場所である小料理亭である。ミサキを歓迎のつもりで、連れてきたのだ。

女将の陽本幸子は、ミサキを快く歓迎したのだ。その陽本幸子は、相棒の月本幸子の
 ような感じである。

陽本「ミサキさん、これからよろしくお願ひしますね」

ミサキ「はい、こちらこそよろしくお願ひしますねえ」

陽本「ミサキさんは、まだ未成年でしたよね？」

ミサキ「はい、まだ19歳ですねえ」

徹「ミサキさんってまだ19歳だったの？」

ミサキ「そうですよ。私って老けて見えるのですか？」

陽本「亀山さん、あまり女性に年齢の事を言っってはいけませんよ」

左京「亀山君は、ミサキさんは若いのに立派なお仕事をしてらっしゃるって言いたかったのでしょうか」

徹の失言に左京がフォローを入れた感じになった。徹もミサキに謝る。

ミサキ「別に怒ってはいませんよお」

ミサキは、そう言っただけで陽本が作った小料理を食べている。

陽本「ミサキさんのお仕事は、帝国軍情報局ってところで働いてるんですね？情報局って言うのだから、この国で言えば公安みたいなものですか？」

ミサキ「まあ、そんなところですねえ」

ミサキはそう言っただけでノンアルコールの飲み物を飲み干す。

ミサキ「杉下さんや亀山さんの目の前で言うのは、気が引けますが日本の警察の腐敗は、私の想像以上に酷いですねえ」

左京「面目ないです」

徹「ミサキさんの言うとおりです」

ミサキ「でもその腐敗で、杉下さんや亀山さんの特命係、御坂さん達の特務課に出会えたから一概には言えませんけどねえ」

前にも言っただけでミサキは、縁を大事にする性格であり、そこで出会った人間との繋が

りを大事にすると。

左京「僕もですよ、ミサキさんという人間と出会えたのは、光栄ですよ」

徹「俺もですよ」

ミサキ「そして、花の里という小料理屋と陽本さんという女将さんとお出合えたことは、嬉しい限りですよ」

陽本「私もですよ、ミサキさんという女性とお出合えたのは、嬉しい限りです」

ミサキ、左京、徹、陽本幸子の4人はそんな会話をしながら楽しんでいた。

ミサキ side

111204・5・19・11:30・港区のとある廃工場跡

この日のミサキと左京と徹は、港区のとある廃工場跡で、暴力団とある組織が麻薬の密売を行うというタレコミがあり、今現在組織犯罪対策課の五課に協力をしている最中である。

第五課の墨田課長が特命係に朝方協力依頼してきたため、左京達は協力をすることになった。ミサキも左京達に協力する形で参加することに。ミサキ、左京、徹も物陰に隠れて様子を見ている。今のところは変わりはない。

ミサキ「暴力団とある組織ですか」

左京「暴力団の方は、指定暴力団の〔鞍山組〕と新興勢力の闇組織ですね。こちらの名前まではわかりませんが、近頃犯行を行っているようですね」

徹「鞍山組とその新興勢力を組織がクスリを取り引きするとは、鞍山組も資金繰りに苦しんですかね」

左京「暴対法で資金稼ぎ等が封じられてますからね。それに外国勢力にも押され気味でしょうからね」

ミサキ「なるほどお」

すると、墨田課長から無線連絡が入る。

墨田「マルジー達が廃工場跡に入って行く。マルYも一緒にそちらに向かっている」
左京「了解」

どうやら鞍山組の構成員と新興勢力の構成員がミサキ達が息を潜めているエリアへやって来てるようだ。鞍山組の構成員と新興勢力の構成員が廃工場に入るのを確認後、組織犯罪対策課五課の刑事達が周りを取り囲む。

ミサキ達の前で鞍山組の構成員と新興勢力の構成員の計10名が取り引きを開始した。鞍山組5人、新興勢力の構成員5人。2勢力のリーダーが喋り始めた。

鞍山組構成員リーダー「我々のブツを本当に買ってくれるのか？」

新興勢力構成員リーダー「ああ、心が広いマスターに感謝することだな」

鞠山組構成員リーダー「ああ、そちらのマスターに感謝する。暴対法のせいで我々の活動が狭くなるばかりだからな」

新興勢力構成員リーダー「なるほど。こちらとしては、鞠山組のブツは、西ゼムリアで高く買ってくれる方々がいるから、良いんですがね」

鞠山組構成員リーダー「お褒めに頂きありがとうございます。これからもご臍尻に」
新興勢力構成員リーダー「こちらこそ」

鞠山組構成員リーダーは、黒のトランクを新興勢力のリーダーに渡す。新興勢力の構成員リーダーは、紺のトランクを鞠山組構成員リーダーに渡す。そして互いのトランクの中身を確認して

鞠山組構成員リーダー「それでは」

新興勢力構成員のリーダー「ああ」

二組の構成員のリーダーが互いのトランクを受け取ったのを確認すると、組織犯罪対策課五課の刑事達とミサキ、左京、徹は一気に二組の構成員達をも囲む。

ミサキ「そのまま帰れないですよ。大人しく捕まって下さいねえ」

鞠山組構成員リーダー「なんで、警察がこんなところに？」

新興勢力構成員リーダー「警察がこんなところまで来るとはな…。そちらが付けられてたのでは？」

鞠山組構成員リーダー「そんなわけがあるか！」

墨田「お前達がここで取り引きをするのは、タレコミからの情報だ」

新興勢力構成員リーダー「タレコミですか、なるほど……」

鞠山組構成員リーダー「タレコミだと、誰かが俺達を売ったやつがいるって事かよ！」

墨田「大人しくお縄になってもらおうか！」

墨田達組織犯罪対策課五課の刑事達は、構成員達に手錠をかける。鞠山組構成員リーダーも手錠をかけられたが、新興勢力構成員リーダーは、ニヤニヤとし始める。

新興勢力構成員リーダー「日本の警察は腐つてると聞いていたが、まだまともに動いている連中もいるわけか」

ミサキ「日本の警察がみんな腐敗しきつてるわけじゃないわよお！」

新興勢力構成員リーダー「なるほどな、ちよつとは甘く見ていたと言うことかな」

新興勢力構成員リーダーは、指をパチンと鳴らす。すると廃工場の奥から人形兵器がぞろぞろと出てくる。

ミサキ「人形兵器！そんなものを持ち込んでいたのねえ！」

ミサキは、隠し持っていたトンファーを取り出して構える。

左京「ミサキさん！」

徹「な、なんですか、あれは！」

墨田「人形兵器って…まさか！」

ミサキ「人形兵器、結社…身喰らう蛇が使っているものです！リベールの異変、クロスベル騒乱、帝国のパルム騒乱で何度も使われてきたヤツですよ！」

新興勢力構成員リーダー「そうか、あんたは、クロスベルの英雄の一人、ミサキ・K・バニングスカ。どおりで見たことあるなと思ったわけだが！」

ミサキ「私の本名…を知っているなんてえ…貴方、クロスベル人なのかしらあ？」

新興勢力構成員リーダー「確かに俺はクロスベル人だった。だが今となつては、そんなことでもいい。力が手にするためにお前達には犠牲になってもらうがな！」

ミサキ「杉下さん、亀山さん！この場から逃げて下さいねえ！」

ミサキは、懐から何かを取り出して、腕に付けた。その腕に付けたものをカチャカチャと操作する。すると何かの魔法が発動する。彼女が腕に付けたのは、CADであった。

左京「魔法ですが、やはりミサキさん貴方も魔法が使えたんですね」

ミサキ「ええ、何とか魔法は使えますよお」

徹「魔法って十師族の血筋しか使えないんじゃない？」

ミサキ「確かに日本の魔法はそうかもしれませんが、西ゼムリア…導力魔法は、血筋とか関係ありませんからねえ。才能ももちろんですが、努力次第でも大いに化けますか

らねえ」

新興勢力構成員リーダー「まあ、導力魔法は、日本の東方魔法よりかは、マシだよな！」

ミサキ「貴方が持っているのは、エニグマ！」

新興勢力構成員リーダー「御明察だよ、ミサキ・カミジヨウ・バニングス。」

新興勢力構成員のリーダーは、導力魔法を使い、風の魔法を発動させてきた。向かってきた風の刃をミサキは右に避けて体勢を整う。新興勢力構成員リーダーは、簡単にいかないことは、身体で身にしみている。

新興勢力構成員のリーダーは、風の刃を盾に逃げる体勢に入っている。騒ぎで外の待機部隊が、工事内に入って来ている。

新興勢力構成員リーダー「外の待機部隊か！まあ、それも計算の内だがな」

新興勢力構成員リーダーは、外の待機部隊である警官隊を簡単に制圧していく。

左京「やはり、警官隊くらいでは、確保するのは難しいでしょうね」

徹「左京さん、涼しい顔で言われても困りますよ」

左京、徹がそんなことを言っている時、ミサキは、トンファーと格闘術で、人形兵器群を破壊していた。新興勢力構成員リーダーを確保しに行きたいが、人形兵器群をほととく訳にはいかない。

ミサキ「あつ！もう、!!」

ミサキは跳躍を利用して新興勢力構成員リーダーの前に着地する。

新興勢力構成員リーダー「流石だな、ミサキ・カミジョウ・バニングス！簡単には逃がさせてはくれないか！」

ミサキ「当たり前でしょう。犯罪者は逃がさないわよお！」

新興勢力構成員リーダー「逃がさないか……。国家権力の犬共に捕まるわけにはいかないんだよ！」

新興勢力構成員リーダーは、そんなことを突然言い出した。雰囲気もどんどん変わっていく。

ミサキ「なに、この感じ……嫌な感じが膨れ上がっていくわねえ……」

新興勢力構成員リーダー「ふふつ、俺の名前は、ジェラール・ダンテス。新興勢力……アルマータをいずればビツクになる男よ。ミサキ・カミジョウ・バニングス、覚えておけ！」

ミサキ「ジェラール・ダンテス。アルマータ……貴方、カルバードの人間ねえ？」

ジェラール「そうだな」

左京「ジェラール・ダンテス、アルマータ、貴方は、カルバード北部の都市オラシオンに居城にしているマフィア組織ですね？」

ジェラール「ほおー日本の警察でも俺の事を知っている人間がいるとはな、警視庁特命係の杉下左京……」

徹「ジェラール、なぜ左京さんを知っている？」

ジェラール「俺達の組織の情報網を甘くみてもらっては困るな。まあ今回は顔見せ程度のもりだったわけだ」

ミサキ「顔見せ程度ですってえ！ジェラールは貴方は何を企んでいるのぉ！」

ジェラール「何を企んでいるのぉかって。愚問だな、ミサキ・カミジヨウ・バニングス！俺はただ、この国に生息しているゴミを排除してきただけさ」

徹「生息しているゴミを排除だと？」

ジェラール「そうだ」

ミサキ「ジェラール、貴方、まさか獅童達と!？」

ミサキはジェラールに対してそう言った。ジェラール達と獅童達が手を組めば、最悪なパターンが出来上がるからだ。だがジェラールは、ミサキの問いを否定する。

ジェラール「獅童正義と組んでるのぉか？それはNOだ。奴等と何故組まなくてはならない？奴等と俺達が目指してる先は違うのぉな。むしろ獅童達は邪魔な存在と言えるがな」

左京「なるほど」

ジェラール「少々しやべりすぎたかな。それでは失礼させてもらおうか」

ミサキ「待ちなさい、そのまま行かせるわけにはいかないわ!」

徹「ミサキさんの言うとおりで! 行かせるわけにはいかないな!」

ジェラール「顔見せだけだと言ったはずだが?」

ジェラールは、ミサキと徹を睨めつけた。ミサキと徹は、背筋がゾクツと走る。

ジェラール「立ちふさがらなければ仕方がない、ちよつと力を見せてみるかな!」

ミサキ「ちよつと力をですつて!」

ジェラール「これぐらいで死ぬなよ、ミサキ・カミジヨウ・バニングス!」

ジェラールの回りから何かざわめきに近い力が動き出している。それが何なのかは

ミサキはわからない。もちろん左京も徹も組織犯罪対策課の五課の人間達も。

ざわめきから空気が一気に膨れ上がり、膨張爆発が起ころうとしている。それに気が

ついたミサキはここにいる人間達に逃げるように

ミサキ「みんな、ここから逃げてえ!!」

大声で叫んだ。するとここにいる人間達は、海の方に走り出してそのまま飛び込む。

ミサキ、左京、徹も海の方へ走り出している。

ミサキ、左京、徹が海に飛び込んだのと同時に廃工場跡の場所が、膨張爆発したのだっ

た。廃工場跡は木端微塵に吹き飛び、回りに凄まじい衝撃波を撒き散らすのであった。

この日のニュースの一面は、【廃工場跡で謎の大爆発、廃工場跡に大きなクレーターができる】と報道されるのだった。

ミサキ side

11204・5・19・13:20・東京湾の漁船にて。

ジェラルルが起こした膨張爆発によって東京湾に飛び込んだミサキ、左京、徹。凄まじい衝撃波を海に潜ることによって回避出来た3人であったが、さすがに岸まで泳いでいく体力は残っていないかったので、沖から帰ってきた漁船に助けてもらったのだ。

漁船の船長も衝撃波に襲われたが、なんとか耐えしのいでいたようだ。よくみれば、船の窓は衝撃波によって粉碎していた。

徹「なんとか、なりましたね、左京さん、ミサキさん」

左京「ええ、なんとかなりました」

ミサキ「まさか、ジェラルル、あんな隠し技を持つてるなんてえ…迂闊だったわねえ…」

ミサキは、びちよびちよになった上着を脱いで絞っている。もちろん左京や徹も上着を絞ったが、濡れていることには変わらない。さっさと着替えたいのは本音だろう。

ミサキ「ジェラルルはもう日本にはいないでしょうねえ…海の中で衝撃波を避けた

後、成田空港方面から西ゼムリアへ飛んでいく高速艇がありましたし」

左京「あの状況下での観察力、素晴らしい能力ですね」

ミサキ「そう杉下さんもわかってたんでしょ？」

左京「ええ、なんとかでした」

徹「よくあの状況下でそんなこと、出来ましたね」

ミサキ「どんな状況下におかれても、頭は冷静さを保って、心は熱く事に当たれ」
 ……ガイさんの言葉ですねえ。私はこの言葉とおりにやっていますが、中々と上手くいきませんねえ……。肝心なところで熱くなってしまうし」

徹「わかっている中々できないものなんですよ。俺もそう決意していても、ついつい熱くなってしまう……」

左京「僕は熱くても構いませんよ。それが亀山君やミサキさんを動かす原動力なんですからね。かのガイ・バニングス氏も仰っていました。〔後輩や弟や妹には、頭は冷静さを保って、心は熱く事にあたれ〕とか言ってるのに、俺自身が一番出来ていない」
 て仰っていましたね」

ミサキ「ガイさん……」

徹「ガイ・バニングス捜査官……」

左京「しんみりになってしまいましたね。とにかく今は、陸に戻り警視庁に戻ること

が先決でしょうね」

ミサキ「組織犯罪対策課第5課のみなさんと墨田課長は大丈夫でしょうかねえ？」

左京「あの人は大丈夫でしょう。何度も修羅場を潜り抜けてきた方々ですから」

徹「怪我とかしてなきやいいですけど」

そしてミサキ達を乗せた漁船は、とある港に帰港し3人を降ろした。船長もさすがにすぐに漁には出れないと話した。何故なら衝撃波を受けた船の船体をドツグに出さなくてはならないと。

そしてミサキ達は、港から警視庁へ向かうことにしたが、途中で警視庁特務課の課長である御坂から、ミサキのARCSに着信が入る。

ミサキ「はい、ミサキ・カミジョウですが……」

御坂「ミサキさん、突然の連絡だが、君達はどこにいるんだ？」

ミサキ「どこにいるって、東京湾から、23区内に入ったわよお」

御坂「お前達、特命係と組織犯罪対策課5課が、とある港区の廃工場跡の謎の爆発に巻き込まれたと報告が上がってきたんだが。5課の面々は、海から救出された後、病院に運ばれたみたいだな」

ミサキ「……墨田課長は、大丈夫なんでしょうか？」

御坂「墨田課長は、大丈夫だ。怪我一つもしていない。ピンピンとしているよ。とに

かくカミジヨウ達は、特務課まで来てくれ。話はそれからだ」

ミサキと御坂の会話は終わり、一通りの説明を左京と徹に話した。

左京「墨田課長、大丈夫だったんですね」

徹「これで一安心ですかね」

ミサキ「とにかく、特務課までいきましようかあ」

ミサキと左京と徹は、導力タクシーを広い特務課がある場所まで行くことにした。

ミサキ side

11204・5・19・14:30・警視庁特務課が入るビル。

ミサキ達は、警視庁特務課が入るビルへやって来た。御坂課長が海に落ちた汚れを取って良いと言われ、特務課のシャワー室を借りるミサキ達。

約1時間の休憩の後、ミサキ達と御坂達のはなしが始まった。

11204・5・19・15:30・御坂課長の執務室。

御坂「改めて言おう、港区の事件、お疲れ様でした」

ミサキ「私達、褒められるような結果は残せてないと思いますが？」

御坂「いや、それでもないのだよ、ミサキさん達のおかげさまで、別の組織犯罪対策課の班が、新興勢力のアルマータと取り引きをしていた指定暴力団の鞠山組の建物に強

制捜査が入っている。強制捜査と言ってもさっき入ったばかりだからな。あいつら
鞠山組とアルマータが取り引きしていたものは、大麻と合成麻薬だったそうだな」

ミサキ「合成麻薬とは、クロスベル騒乱の時、ヨアヒムが使ったグノーシスなのでは
？」

御坂「ああ、ビンゴだ。〔クロスベル↓共和国↓日本〕、〔クロスベル↓帝国↓日本〕こ
の2つのルートがあるみたいだが、この経由で日本に流れたのは間違いないだろうな」
ミサキ「帝国経由は、あのゴールド・マウンテン帝国支部経由で日本に入ったと断言
できますよお。ゴールド・マウンテン帝国支部の幹部達は、みんな死にましたが、帝国
で事情聴取は取りましたから。彼らも自白しましたし」

左京「先の東ゼムリア海上で墜落した護送艇に幹部達を乗せてたんですよ」

ミサキ「ええ、護送艇の探索も七草家と四葉家の協力の下で東ゼムリア海の海底の探
索もやりましたよお。そこには海に沈んでいる護送艇がありました。沈んでいる護送
艇を引き上げて調べたんですが、とても導力エンジントラブル系統では無いことがわ
かったんですよ。あれは、護送艇が飛行しているときに、外から攻撃を加えられた後
がありました」

御坂「一応、七草家から報告は受けているが、なるほど…外からの攻撃か。対艇攻撃
か何かか…」

ミサキ「いえ、あれは：対挺攻撃ではありませんよ。剣で外から斬り裂いたような感じでしたよお」

御坂「剣で斬り裂いたような跡があつたのは、報告書で確認済みだが……。改めてミサキ君に聞いてあれが本当だと確信したよ」

左京「その言い分だと七草家の報告書を、完全には信用していないように聞こえますが？」

左京は自らの疑問を簡単に何度も聞く。それが相手がどうとるかは相手次第になる。

御坂「まあね。あの七草家だからな。ちよつと前までは、全面に獅童正義達を支援していたわけだから。今は距離を取り始めたと言われてるが、正直どうなってるのかわからないと言った方がいいかな？」

ミサキ「七草家はともかく、麦野静江は別ですよ。彼女は、七草家のエージェントですが、ちゃんとわかってくれる方ですから」

御坂「それは知っているさ。彼女は、七草家の内部情報も教えてくれたからな」

七草家の内部情報。ゴールド・マウンテン社が、人身売買や武器の不正輸出に関わっている可能性が高い。

獅童正義達がそれを支援しており、七草家としては、獅童一派とは手切れにして、帝国にパイプを持っている四葉家と協力することで、帝国との関係や共和国との関係強

化。

共和国の元日本人である徳川家との関係改善。

クロスベルのマクダエル家との関係改善、強化。

等々。

ミサキ「なるほどお、静江がそれを教えてくれたんですね。私も獅童一派との手切
れの話は聞きましたけどねえ」

御坂「今の獅童一派は、今さら七草家の支援など要らないと言うことか」

左京「獅童一派は、帝国の貴族派、共和国の反移民派とも繋がりと噂がありま
すが、ミサキさんどうですか？」

ミサキ「……杉下さんの言うとおりですねえ。獅童正義は、帝国の貴族派、共和国の
反移民派と協力体制を築いていますしねえ。表立っては、見れないですが」

徹「隠れてこそこそとしてるってことですよね？」

ミサキ「簡単に言えばそうですねえ。ただあの『悪魔の薬』が、日本にかなり流れ
てると考えると、申し訳ない気持ちがいっぱいですよお」

御坂「グノーススか……。ミサキさんが、気に病む必要はないさ。ヨアヒムに買われた
連中が悪いのだから。それに特務課と組織犯罪対策課と協力体制で事に当たるのでな」

左京「御坂課長、なるほど、良く警察のトップが許可を出しましたね」

御坂「官房長官である大神の勅命で言うことを聞かせたさ。我妻の方は、七草弘一氏に圧力を加えてもらつたがな」

ミサキ「なるほどお！」

左京「圧力には圧力ですか」

徹「それで、獅童達が黙りますかね？」

御坂「黙らないだろうな、あの手この手で妨害活動はしてくると思つた方がいいだろうな」

ミサキ「でしょうねえ、日本政府に対しての妨害も活発になってきてますしねえ」

御坂「ああ、今年になってから獅童一派が活発に動き出している。与党に所属しながら野党側の意見を述べているからな」

左京「そのようですね。野党と共同歩調を取つてるようにも思えますが、真意のところはわかりませんが」

ミサキ「……西ゼムリアも不安定さが増して、東ゼムリアの日本も不安定さが増しつあります……。激動の時代がやって来つつあります」

御坂「確かにな。日本内部で幕末以来の紛争まで起きるのだからな。激動の時代が始まつてるかもしれない」

ミサキ、御坂、左京、徹は、それぞれ考えていた。これから先どうなつて行くのかを。

日本、世界とどう変化していくのか。

まだ誰も予想の付かない激動の時代の入り口でしかないのだから。

ミサキ達は、そんな否応なしに激動の時代にすでに飲み込まれているのだから。

シエルファニール編【貴族派】

1-1-04月〇〇-平塚春雪。

1-1-204・4月上旬・日本・千葉県とある市-平塚家

千葉県とある市に陰キャラと言われる男がいる。その男の名前は、平塚春雪という。容姿は陰キャラキモキャラとしてクラスでは認定されている。本人もブサイクだと認知している。頭は優秀の方だが、妹の小雪が可愛いため、両親は小雪に愛情を注いでいた。

家族構成は、父、母、姉、春雪、妹の5人家族である。姉は優秀で、クロスベルに留学している。春雪は普通で妹もまた優秀であるため、父親と母親は春雪のことは疎ましく思っているのだ。春雪の母親は3姉妹であり、母親は二女であり、三女はあの平塚静である。長女は、カルバード共和国の男性と結婚しカルバード共和国へ移住していった。

姉の名前は、雪子。妹の名前は、小雪。

特に妹の小雪は、兄である春雪を嫌っている。嫌ってる理由は簡単、ブサイクであるから。姉、雪子がいるときは、両親は大人しくしていて、小雪も無視をしていたぐらい

か。周りや家族（雪子以外）からブサイクと言われ続けた為、本人もそう思った。彼は黒髪で髪もボサボサ、厚底メガネをはめている。だから陰キャラと言われている。

だが、姉、雪子がクロスベルへ去年留学してから、春雪に対してのイジメが酷くなっていく。

元々は八幡と同じ学校、総武中学に通っていた。彼がイジメられていた時に、彼もイジメられていた。いや八幡がイジメられる前から、春雪が家族、学校でイジメられていたのだ。

彼がイジメを苦に自殺をしたが、何もなかったように学校ではなっていた。

全ては十師族の体制であるこの国の現状だと春雪は考えていた。

だから勉強をして、日本を変える事を夢見ていたが、春雪自身の精神が持たなくなりつつあった。

春雪が通う高校は、魔法科高校を除けば、最高の学校である私立の高校である十文字千葉高等学院である。

普通の親なら喜ぶはずだが、両親は喜ばなかった。すでに妹の小雪が魔法科高校：第1高校に来年から入る事が決まっているからだ。平塚家は、十師族の十文字家を陰で支える一族である。だから小雪に魔法の才能があるのは当然。姉の雪子も第1高校を卒業して、クロスベルへ留学している。

春雪は寂しく冷えた晩御飯を食べて、自分の食器類を片付けて、自室に戻る時、小雪に出会す。

小雪「うわっ、ブサイク…ご飯食ってたのかよ。てかつ、くさっ…近づくな！」

春雪「…臭いつて…ちゃんと風呂も入ってる…」

小雪「バカ、しゃべんな、キモいのが移る！」

そう言うと、春雪に対して弱い魔法を放つ。その魔法が春雪の身体を切り裂く。

春雪「うっ…小雪…魔法は…家庭内では使用は禁止されてるだろ？」

春雪は、傷口から血が滲み出る。痛みを堪えながら、小雪に問う。

小雪「はあ？何を言ってるの？それは人間に対してでしょ？ブサイクは人間じゃないもの…だから魔法の使用も許されるでしょ？」

小雪は悪魔の笑みで春雪を見ている。狂喜の目で春雪を見ている。春雪は急いで自分の部屋に入る。

部屋の布団の中に潜り込んだ春雪は、震えながらスマホを見ていた。ローゼンシルに助けを求める事はできる。だけど立派な迎えに行くと言った以上、彼女を頼るわけにはいかない。ローゼと一緒に写った写真を見た。彼女に会いたい気持ちを押さえ込み、そ

して色んなサイトを見回った。

そして色々見ていたら、お助けチャンネルというサイトを見つかる。

震えながらお助けチャンネルに書き込んだ。

【平塚春雪は、学校、家族からのイジメから助けてくれ】と

【お願いします、ヴァイオレット様…助けて下さい】

春雪「ローゼ、僕はどうしたら良いのかな？わからないよ…」

しかし、このSOSはヴァイオレット事、すみれには届かなかった。この頃は、すみれ自身も母親と姉のかすみを失った悲しみ、鴨志田問題もあったから、チャンネルを隅々まで見れていなかった。

そして……

11204・5・05・昼間・千葉、千葉の廃工場跡

廃工場の中、罵声と殴る蹴るの音が聞こえていた。

モブ1「今日も楽しくモブ雪をボコりましょう！」

モブ2「今日も仲良くボコりましょう！」

モブ3「今日も仲良くボコりましょう、モブ雪!!」

モブ4「今日も春雪をボコれるのは嬉しい限りだな」

山田「春雪、素直にボコられに来たな。偉い、偉い」

5人のメンバーは、春雪をボコボコに蹴るは殴るはでいつも以上にやり続けていた。春雪の絶望の声だけが、工場内でこだまする。

春雪は、心の中でヴァイオレットに助けを求めた。なのに何で助けられないんだ、と。

神、エイドスは、何故自分を救ってくれないんだと。

こんなに助けてと叫んでるのに何故…

助けてくれないのか…。

エイドスもヴァイオレットも…

春雪「…僕は…：いない存在なのか…アハハ…ローゼ、ごめん…君を迎えに行けそうにない…ごめん」

春雪の心が壊れ掛けていた。そんな彼に5人のメンバーは、一斉に蹴りを入れ、鉄パイプで殴り付けていた。

そんな暴行は夕方まで続き、春雪はピクリとも動かない。

モブ3「モブ雪のヤツ全然動きませんね？」

モブ4「まさか、死んだんじゃないのか？」

モブ1「…：息してませんよ！死んでる」

モブ2「どうするんですか！」

山田「仕方がない、この廃工場に火を付けるぞ。廃工場事燃やして、春雪ごと燃やせ！」
リーダーの山田は、手下共に火をつけさせた。火の回りが早くなるように油もまいた。

みるみる廃工場内に火の手は上り真つ赤に燃えていく。

パトカーや消防車のサイレンが聞こえてくる。火の手が上がったのを誰かが見ていて通報したのだろう。

春雪を殺した5人組は、この廃工場跡から逃げた。なんの罪の意識も微塵にも感じさせないままに……

燃え盛る炎の中で、息を吹き返した春雪。だが起き上がるだけの力もない。身体のあらゆる骨が折られ、立てる力すら残っていない。

春雪「……アハハ……炎に巻かれて死ぬのか……。どうせ僕が死んだとしても誰も悲しみはしない……。ローゼ、ごめん、こんなところで死ぬ僕を許してください。コホコホ……今度生まれ変わるなら、イケメンで生まれてきたい……ローゼともう一度会って、ちゃんと……こ、告白……を………た……い」

身体の痛みすら感じなくなってきたと思う春雪。廃工場の鉄骨のヤツが崩れ落ち始

めていた。

鉄骨に下敷きになり死ぬのか

火に巻かれて死ぬのか…

2 択しか残っていない…。

春雪は痛いのは嫌なので、目を瞑ることにした。眠ったまま死ぬようにと…春雪が意識を失った後、炎で燃え盛る中、くたびれたスーツを来た青年が立っていた。黒のアルベリヒという帝国の地精の長である。

黒のアルベリヒ「全く酷い事をする。同じ人間のすることかね」

黒のアルベリヒは、春雪を見ている。すると、もう一人がこの場所までやって来た。金髪のロン毛の貴族の服を着た男である。名前はルーファスという。

ルーファス「フツ、何故、私をこのような場所に呼び出したのか、説明を願いたい
が…うん？その少年は？」

黒のアルベリヒ「あれが、イジメというものか。全く酷い事をする連中だな…」

ルーファス「イジメ？この少年は、誰かにイジメられていたのか…。うむ…酷いことをするものだ…。うん？」

黒のアルベリヒ「どうかしたのかね？」

ルーファス「いや、なんでもない」

ルーファスは何かに気がついた。目の前の少年が、自分に似ているように見えたのだ。生まれも国籍も育った環境も違う。なのに自分に似ているとそう思えるのだ。

黒のアルベリヒ「…何かの利用価値があると思っただが、無駄足だったようだ…」
ルーファス「いや、彼を治療してやってはくれまいか？」

黒のアルベリヒ「ほおう？」

ルーファス「彼もこんなところで、死ぬなんて不本意ではないかね？」

黒のアルベリヒ「…まあ、良いでしょう…ただ肉体の方は……。黒の工房の方に帰って何とかしましょう」

ルーファス「ああ、頼む」

廃工場が完全に崩れ去る前に、黒のアルベリヒは、春雪を連れて転移した。ルーファスも光輝く日本の都市を見て、そして転移したのだった。

春雪の鞆とスマホは、火の中に消えて行った。

2-2-5・07-禁忌の術。

1-1204・5・07・昼・???・黒の工房

黒のアルベリヒは、持ち帰ったサンプル、いや正式にはルーファスに頼まれた春雪の蘇生実験をやっていた。

アルベリヒ「うむ、どうしたものか。中々蘇生はできないな」

蘇生：本来なら亡くなった人間を蘇生すること自体そのものが、禁忌に値する。しかし黒のアルベリヒは、女神エイドスなど信じていないため、こんなことは平気である。

アルベリヒ「さてよ…あの計画のやつを参考にすれば……」

アルベリヒは何かを閃く。

アルベリヒ「平塚春雪という人物は死ぬことになるが、新たな生を与えればいいだけのこと……くくく……」

アルベリヒは、例の計画の予行練習を始めることにした。

1-??・??・??

ここは、春雪の深層心理。彼の記憶から読み取った世界。

そしてここが、春雪の中学時代：これは中学3年の時

八中原「キモ春、早く昼飯のパン買ってこいよ…」

山川「アハハ、あたしの分も買って来い！」

松浦「私も!!」

原西「私もお願いね！」

八中原、山川、松浦、原西は、ギャルグループではないが、美人に入るグループであり、上位カーストに位置するグループである。

八中原は、スタイル抜群、黒髪ロングの真ん中パツつんである。スカートは、短め。

山川は、黒髪短髪でギャルに近い格好している。スカートは、短め。

松浦は、ミント色の短髪であり、普通の体型。

原西は、金髪に染めており、不良娘である。

この5人は、春雪をいじめる筆頭グループ。何かといつては春雪をいじめる。彼女達が春雪をいじめていたわけではない。最初の標的は、ローゼンシル・イーグレットというミント色のみつあみのメガネっ子であった。彼女は帝国からの留学生だった。そのローゼンシルをいじめていたのだ。

キモイ、メガネ、臭い、その他諸々をいって…

そんな中、ローゼンシルをいじめていた八中原達をとめに入っただのが春雪だった。

春雪「おい、彼女、泣いてるだろ！そんなことして、心が痛まないのか？」

八中原「はあ？何、平塚のくせに指図すんの？」

山川「ぶっつ、モブの陰キャのくせに八中原にバカな事を言ってる！」

松浦「キャハハ、もしかして、モブーゼンシル、クソーゼンシルの事を好きなんじゃない？」

山川「ぶっつ、マジで！」

春雪「俺はそんな気持ちはない！イーグレットさんを泣かせるなど言っているだけだ！人としてやって良いことと、悪い事があるだろ！そんなのも分からないのか！」

八中原「平塚、言わせておけば……！」

春雪は、八中原にぐうで殴られた。女のパンチだったが、ローゼンシルのいる方へ吹き飛ばされた。

ローゼンシル「ひ、平塚君、大丈夫ですか？」

春雪「大丈夫だから、君は心配しないで」

春雪は、ローゼンシルを庇うように立ち塞がる。すると八中原達は白けてどこかに行ってしまふ。

春雪「ぶっつ、行ったか……」

ローゼンシル「ありがとう、ございます、平塚君」

春雪「お礼を言われるほどじゃないよ、ちよつとびびったけど……」

ローゼンシル「平塚君、唇が切れて血が出てる」

ローゼンシルは、そう言うと、制服からハンカチを取り出す。そのハンカチはとて高そうだ。白の薔薇が画かれた絹のハンカチのようだ。そしてそのハンカチでそつと垂れている血を拭う。

春雪「そんな高そうなハンカチを僕の血で……ごめん、イーグレットさん」

ローゼンシル「なんで、平塚君が謝るのですか？」

春雪「……高価なハンカチを汚すのはやっぱり……」

ローゼンシル「心配はいりませんの。このハンカチは実家にも沢山ありますから」

それから春雪は、八中原達からの嫌がらせを受けるローゼンシルを庇い続けていた。だがそれから3ヶ月が過ぎたある日、ローゼンシルから春雪はあることを告げられた。

ローゼンシル「春雪君、今日貴方に告げなければなりません」

春雪「ローゼ、告げなくてはならないことって？」

ローゼンシルは、真剣な表情で春雪を見据える。放課後の屋上で、夕日に照らされた2人は神秘的に見える。

ローゼンシル「わたくし、明日で留学期間は終わりです」

春雪「明日……」

ローゼンシル「学校に来れるのは、今日までですわ。明日は帰国するための引越し作業がありますからね……だからわたくし、春雪君に伝えることがあります」

春雪「伝えたいこと？俺に？」

ローゼンシル「はい、わたくしは、平塚春雪君の事が好きです。あの人達から救つてもらつたあの日から……ずっと」

春雪「!!!」

春雪は腰を抜かしそうになつた。実際に思考回路がパニック状態になつている。ローゼンシル自身も今日の朝からこの告白をするために決意していたのだ。春雪は、今まで女子に告白したことは、一度もない。ましてや初めて告白された女の子は、帝国人でそれだけではない、貴族の娘である。だから春雪は、普通の家庭である自分とローゼンシルとは、釣り合わないと判断したのだ。自分なんかと付き合つても彼女を不幸にするだけだ。春雪は本心は、ローゼンシルが好きなのだ。好きだからこそ、あえて反対のことを言うためそう決意し

春雪「ごめん、ローゼ。君の告白は受け入れられない。俺を好きになつたのも……つり橋効果だと思う。君にはもつと僕なんかより、相応しい男性が現れる……僕はイケメンじゃなくブサイクだから」

ローゼンシル「春雪、なぜ自分自身を卑下するんですか？それとも貴族や平民だからですか？」

春雪「……貴族や平民とかは、君が関係ないと言ってたから、別にそれはいい。僕の顔……クラスの連中や家族だって僕の事、ブサイク、ブサイク、ブサイクって言ってる。ローゼだつて……」

ローゼンシル「わたくし、春雪の事をブサイクなんて一度も思っていないません！あの方達は、お顔ばかり言ってるしやいますし、内面の事を見ていらつしやいません。前に春雪は、わたくしに夢を語って下さいましたよね？弱き人々を助けるそんな仕事をする職業につきたい。もしくははこの国を変革出来る職業につきたいって言っていましたよね。夢を語る春雪の表情はとくに……カッコ良かったよ……わたくしにとって春雪は王子様……」

春雪「……ローゼ……」

春雪は、ローゼンシルに真剣に見据えながら

春雪「僕、立派になるよ！立派になってローゼンシルを迎えに行くよ！」

ローゼンシル「はい、わたくしも春雪に相応しい女になりますわ！」

ローゼンシル「……終了。」

再び黒の工房のアルベルヒに視点は移る。古代の秘宝という書本や黒の工房内における資料を調べ尽くしていたが、蘇生というのはない。

黒の工房の古代図書館で見た覚えがあると思っていたが、勘違いだったのかと思い始めた時、黒の工房にお客さんがやって来た。格好は全身黒で固めており、顔も仮面で見えない。男か女かさえわからない。

アルベルヒ「おや、珍しい客人のようですね。はてさてどのようなご用件でしょうか？」

???「お前が、黒の工房の工房長のアルベルヒか？」

アルベルヒ「私をご存知のようでありよりですね。ご用件はどのような事でしょうか？」

???「お前がやろうとしていることに、手を貸してやると言っている。私の力なら、あの者を生き返す事もできるが？」

アルベルヒ「古代の禁忌の古文書ですら、載っていない禁忌の蘇生魔法を？」

???「当たり前だ。私は、禁忌の力が使えるんでね」

黒の仮面が手をかざすと、アルベルヒの横にあつた壊れたアンドロイドがみるみるうちに直り、正常に動くようになった。

アルベルヒ「なるほど。我が主…それ以外の力も…これはおもしろい」

黒の仮面「協力する気になったか？」

アルベルヒ「ああ、こちらとしても貴方の協力は頼もしい」

黒の仮面「私の名前は、緋のフレイムソウルとても名乗ろうか…」

111204・5・07・昼・???・黒の工房

アルベリヒ「黒のフレイムソウル：それではフレイム殿とお呼びしましょう」

フレイム「単刀直入に言おう。彼は彼としては戻せない。彼には彼女になってもらう」

アルベリヒ「それも禁忌の秘術では無いのかね？」

フレイム「ああ、そうだな。禁忌の秘術：性転換の魔術…」

アルベリヒ「それをフレイム殿は使用出来ると？」

フレイム「そうだ。それではさっそく試してみよう」

フレイムは、禁忌の秘術の詠唱を始めた。この世界は、エイドスが封じたものは使えないようになってる。例えばそれが魔女の一族であっても地精であっても使えない。

だが目の前の仮面を着けた人物、フレイムソウルは、禁忌の秘術の性転換の魔術の詠唱をしている。

暗く薄暗い黒の工房内に明るく光る魔法陣。ただ明るだけの魔法陣ではない。緋白く力強く光っている。

アルベリヒ「ほおくなるほど。本当に禁忌の魔法ですね…。それをどこちらで覚えられたの？」

フレイム「長い時を得て取得したようなものだ。まあ見てほしいものだ」

アルベリヒ「そうですか、それは頼もしいことで」

フレイム「ふっ、素となる、新しき肉体は左に犠牲とする肉体は右に……」

フレイムが指をパチンと鳴らすと、左には、スカイブルーの髪の毛の色が現れた。右には平塚春雪の肉体がプカプカと浮いている。

「……右の者の精神を左の肉体へ委譲させたまえ！ 新たなる人としての人生を。この者に与えたまえ！」

フレイムがそう言い終わると、物凄い目映い光で何も見えなくなる。アルベリヒも光の遮断のサングラスをはめて成り行きを見ていた。

光が収まると、そこには、スカイブルーの髪の毛の色だけしかいなかった。春雪の肉体はどこにもなかった。

フレイム「ふっ、どうやら成功したようだな」

アルベリヒ「な、なんとすごいことだ」

フレイム「成功だ」

宙にふわふわと浮いていた、スカイブルーの髪の毛の女性は、ゆつくりとベッドの方へゆつくりと落ちた。

それと同時に転移の魔法陣が現れルーファスが現れた。

ルーファス「彼の様子を見に来たのが、うむ？仮面の方と、ベッドの真つ裸な彼女は？これは何事かね？」

アルベリヒ「彼はフレイム殿により、彼女になりました」
ルーファス「何？」

フレイム「アルベリヒ殿の言われたとおりだ。彼は彼女として生き返ったのです。元の彼と違って力を持った彼女へとね」

フレイム、アルベリヒ、ルーファスが会話していると、*“彼女”*の意識が回復したのか、目を開ける。目はエメラルドグリーンの瞳であり、こちらに気づいたのか起き上がる。しかし彼女は、自分が何も身に付けていないことに気がつき悲鳴を上げる。その悲鳴は、男のような悲鳴ではない。女の子がラッキースケベイベントで上げるような悲鳴である。アルベリヒとルーファスは驚いている。

フレイム「彼女は女ですよ。男に裸を見られたら悲鳴を上げるのは当然かと」

アルベリヒ「精神まで女性になったのか？」

フレイム「ああ、そうだ。精神そのものが完全に女性になるのは、時間の問題だろう」
アルベリヒ「なるほど」

フレイム「まあ、裸では可哀想だな」

フレイムは指をパチンとたたいた。

すると女性の回りが光り、彼女自身も光った。ものの数秒で光が収まり、彼女自身の光が収まると真つ裸だった彼女は、帝国婦女子が着る服を着ていた。

フレイム「ふっ、これで良いだろう」

アルベリヒ「アルバレア公子、彼女を救う依頼は達成した。次はどうするのかね？」

ルーファス「それには、礼を言わせてもらおう。肉体も精神も女性になったと仰つていましたが、記憶はどうかかね？」

フレイム「記憶はある。だが記憶だけつてことだな」

ルーファス「そうか。なら私が彼女を引き取ろう」

アルベリヒ「ええ、最初からそのつもりであったのでね」

フレイム「おっと、私の自己紹介がまだでしたね、黒のフレイムソウルとお呼び下さい、ルーファス卿」

ルーファス「ルーファス・アルバレアだ、お見知りおきを」

ルーファスがそう言うのと、彼女の手を取り、

ルーファス「さあ、行こうか」

???「い、行くつてどこへ？」

ルーファス「ついてくれば、わかるさ」

ルーフアスの足元に転移の魔法陣が現れ彼と彼女は転移の光に包まれたのだった。

3-3-5・07↓05・14-新しい名前。

1-1204・5・07・昼過ぎ・翡翠の都・バリアハート・アルバレア城館
ルーファスにより、バリアハート、アルバレア城館に連れてこられた。

そして彼女に部屋を与えられた。

部屋、普通の人間が住めるような部屋ではない。大理石の床、高級な家具一色を取り備えられている。

ルーファス「今日から、ここが君の部屋だ」

???「…この部屋…貴方は一体…」

ルーファス「ふつ、自己紹介がまだだったね。ルーファス・アルバレアだ」

???「私は…私は平塚春雪…です」

ルーファスは、苦笑いしながら

ルーファス「女性なのだから、春雪はおかしいかな。ふつ、私から名前をプレゼントしよう。シエルファニール・ソレイユだ。今日から君はシエルファニール、平塚春雪ではないのだよ」

シエルファニール「私は、シエルファニール。シエルファニール・ソレイユ…」

シエルファアニールは、自分の名前を連呼した。

ルーファアス「シエルファアニール、君は今から女性として生きていくのだよ。男性だった時は、振り返らずにね。そうだ、家の者達には、私の恋人として通してあるから、安心してくれたまえ」

シエルファアニールはびつくりする。いきなり、ルーファアスと恋人だと言われたからだ。仮にも何日か前まで、男だったのだから。

シエルファアニール「あ、あのルーファアスさん、ちゃんと前まで、私、男だったのですよ？」

ルーファアス「ふふつ、父やアルバレア家の人間、貴族派の人間を騙せれば、いいのだからね」

シエルファアニール「騙す？」

ルーファアス「まあ、色々あるのだがね」

ルーファアスは、シエルファアニールに軽く説明をする。帝国の事、帝国が今どのようなおかれているのか、革新派と貴族派、そして日本の国の状況について話を聞いた。

シエルファアニール「わかりました。それで私は何をすればよろしいのですか？ルーファアス様の恋人のふりをするだけでよろしいのですか？」

ルーファアス「そうだね…。まずはあの方にも会ってもらおうのも言いかもしれない

な」

シエルファニール「あの方？」

ルーファス「会えばすぐに分かるだろう」

ルーファスが部屋のとあるスイッチを押す。するとスクリーンが上から降りてくる。スクリーンが降りてくると、ルーファスが番号を押している。

番号を押し終えると、スクリーンの画面には、オズボーンが映り出されている。

オズボーン「ルーファスか。何用かね？」

ルーファス「閣下、お手間を取らせてしまつて恐縮ですが、彼女を紹介をしたいと想いまして」

オズボーン「ふむ、そのことならアルベリヒから話なら聞いている。なるほどお前が興味が出たと言うことも頷ける」

ルーファス「御褒めて下さつて光栄です」

オズボーン「名前はなんと言う？」

シエルファニール「私の名前は、ルーファス様から名付けてもらいました、名前は、シエルファニール・ソレイユと申します」

オズボーン「シエルファニールか…良い名前だ。そうだ！私からもプレゼントしよう。シエルファニール・ソレイユ・アークエンジェル…と名乗るがいい。そして鉄血の

子供達として認める。コードネームは、「墮天使（墜ちた女）」だ」

ここにシエルファニール・ソレイユ・アークエンジェルが誕生した。彼女は鉄血の子供達【墮天使（墜ちた女）】として活動していくことになる。

帝国にとっても日本にとっても厄介な人間を新たに生み出したことになった。

11204・5・14・昼間・バリアハート・アルバレア城館・シエルファニールの部屋。

シエルファニールは、オズボーン宰相、ルーファスから与えられた使命のための準備を進めていた。

オズボーン宰相が、目指す世界のため、ルーファスのために。

シエルファニール「あれから1週間が経ちましたが……」

シエルファニールは自身の身体を見下ろす。そこには、男であった時には無かったものの。

それは2つの膨らみ。

胸である。

メイド達の話では、シエルファニールの胸は綺麗な巨乳と評価されている。男だった時なら、これだけでも鼻血を出していたかもしれない。だが今は自分の身体の一部にし

か過ぎないのだ。変な感情は何も無い。本当に女になったんだな、と思うばかりだ。

彼女は、帝国の言語、言葉をすぐに覚えた。元々から頭が良かったが、さらに知識や記憶力をアツプしているのだ。帝国の言葉だけではなく、カルバード共和国、リベール王国の言語、言葉を覚えたのだ。

シエルファニールは、自分の机で、勉強をしている。もちろん今やつてるのは、日本での習ったものの勉強だ。今までやって来た勉強を忘れないためにやるつもりだ。

シエルファニール「ちよつと、休憩をしましょうか」

彼女は椅子から立ちあがり屈伸をやる。しばらくしてまた勉強をするために。

しかし、そんな彼女を性的な目で見ている人物がいた。ルーファスとユーシスの父であるヘルムートである。

ヘルムート「ルーファスが連れてきた娘がどんなものか見に来たが、中々の上玉だ。ちよつと味見でもしてみるか」

そう考えたヘルムートは、シエルファニールの部屋のドアをノックした。

シエルファニール「：ルーファス様、扉は開いてますよ」

シエルファニールはそう言ったので、ヘルムートは、ドアを開け中に入る。シエルファニールがこちらを振り向くと

「ルーファアス様？えっ?!…お義父様…キャ!!」

シエルファアニールは、ヘルムートによって、ベッドに押し倒される。

シエルファアニール「何をされるんですか、お義父様？わたくしは、ルーファアス様になる身です。このような真似はお止めください!」

ヘルムート「ふっ、この私を誰だと思っている？アルバレア公爵だぞ？ルーファアスの妻…息子言えども私には逆らえんだよ!」

ヘルムートはそう言つて、シエルファアニールのブラウスを引きちぎる。

すると純白のブラジャーが見えてしまう。シエルファアニールは、慌てて胸を隠すが、ヘルムートは、逆に興奮する。

ヘルムート「そうやって、誘つてんだろ?」

シエルファアニール「これ以上は、大声を上げますよ!」

ヘルムート「大声を上げてても無駄だ。メイドも執事も来やしない」

シエルファアニールは、恐怖を感じていた。力で押しかえせない。男だつた時は、簡単に押し返せたはずだ。だが今は女性となり、力が弱くなつたのは当然であつた。

シエルファアニール「やめて下さい!」

ヘルムート「じたばたしても同じ。素直に快楽に溺れてしまえ!」

シエルファアニールは、小瓶の何かを口に入れられた。飲まされた途端に身体が暑く

なってくる。鼓動も早く打ち始めた。

シエルファニール「身体が熱い……」

シエルファニールの肌は赤く高揚し、目はトロンとしていて、口からは、ヨダレが出ている。

ヘルムート「ふふつ、どうやら媚薬が効き始めてきたな」

シエルファニールは、身体の高揚が達し疼き始める。そしてもつと快感を求めて、彼女は右手は自分の胸を左手は自らのアソコを弄り始めた。

ヘルムートはその光景を見て、大変に興奮している。彼のズボンは、一部分が盛り上がっていた。

シエルファニール自身も、理性と快感との戦いが己の中で繰り広げているが、快感の方が段々と押しってきている。そして男時よりも断然気持ちが高まって、気持ちが良いすぎて考えが停止してしまう。

ヘルムートは、純白のブラジャーを剥ぎ取り、胸を鷲掴み、揉みくちやにする。

ヘルムート「喘ぎ声をそんなに上げて、気持ちが良いのか？ならば、もつと気持ちが良いことをするとしよう」

ヘルムートは、シエルファニールの股を開かせる。彼女の大事な場所を隠す純白なショーツは、濡れており中が透けて見えるほどだった。

ヘルムートは生唾を飲む。今までにここまで興奮することはあつただろうか。なかつた。

今、快樂の中にいる彼女に対して、いきり立つイチモツを彼女に向ける。

シエルファニールは、必死に抵抗をするが、快樂が押し寄せる。ヘルムートは、彼女のシヨーツを剥ぎ取つた。

そしてヘルムートが彼女の大事なところにイチモツを入れようとしたが、ルーファスが現れたのだ。

11204・5・07・昼過ぎ・翡翠の都・バリアハート・アルバレア城館。

怒りの表情に満ち溢れたルーファスは、父である、ヘルムートに剣を向けている。

ルーファス「父上、貴方は何をしてるのかわかっているのでしょうか？」

ヘルムート「フン、ルーファスか……」

ルーファス「その女性は、私の妻になる方なのです。父上は自身の息子の妻を寝とるおつもりなのですか？」

ヘルムート「フン、そんなつもりはない」

ヘルムートは、服を脱ぎかけていたが、ちゃんと着直してシエルファニールの部屋から出ていく。

ルーファス「シエルファニール、大丈夫かい？」

シエルファニール「…ルーファス様…わたくし…身体が熱い…」

シエルファニールは、股を広げて向かい入れる体勢になっていて、彼女の目はトロンとしていて、妖艶に見える。そんな彼女がルーファスに

シエルファニール「ルーファス様、身体が熱く、疼いて仕方ないです。こんなはしたない、わたくしでごめんさい！」

ルーファス「君ははしたなくないさ。君は綺麗で美しい。父上が欲情するのも間違いじゃないかな。でも君は、私の女だ、渡すわけにはいかないがね」

シエルファニール「…ルーファス様…わたくしの…わたくしの処女を貰って下さいませ！」

ルーファス「ふふっ、元よりそのつもりだ、君は誰にも渡さないがね」

その後、ルーファスとシエルファニールは熱い時を過ごした。それはもう互いに倒れるまで。

ルーファスは、シエルファニールに己の証を刻み込んだ。初めて本気で好きになってしまったのだ。彼女が元男であっても。

シエルファニールは、女としての悦びを知ってしまった。ルーファスのことを本気で好きになり、愛してしまったのだ。

いつかは、ルーファスの子供を身籠りたいと思うようになった。

そして、シエルファニールは、バリアハートでルーファスの婚約者として発表された。

4-4-5・23↓5・24-過去（平塚春雪）との決別。

111204・5・23・昼間・四葉宗家屋敷内

帝国↓日本↓四葉宗家屋敷

シエルファニールが日本での最初の会談である。四葉家は、エレボニア帝国と交流をいち早く始めた。同盟関係になったのは、ギリヤス・オズボーン、四葉真夜との結婚からである。

今でも革新派との同盟を結び、帝国においての四葉家の力は強めてると言っても良い。帝国だけでなく、リベールとも関係強化のために、深夜の娘であり、深夏を留学という手段を使っている。

深夜「貴女が、義兄の仰っておられたシエルファニールさんですか？」

シエルファニール「はい、シエルファニール・ソレイユです」

深夜「私が四葉家当主である四葉深夜ですわ。以後お見知りおきを」

シエルファニール「こちらこそ、お願いします」

シエルファニールは、ソファアに座り深夜は喋り出す。日本での役目を説明される。

シエルファニールの日本での役目は、獅童一派、反帝国新共和国派の人間の始末、日

本を帝国色に染めるためである。

オズボーンの計画の一部は、日本も含まれるから、障害物は取り除くに越したことがない。

普段は学生として暮らしてもらうため、第1高校に通ってもらおう。四葉の推薦状がある以上、他の十師族も逆らえない。

シエルファニールの住む場所は、八王子の一等高級タワーマンシヨンの最上階。そのタワーマンシヨンの所有者は四葉家であり、管理者はFLT社である。

シエルファニールは、四葉の支援で日本での活動を開始する。

シエルファニールは、第1高校に6月1日付きで転校する。

1-1組、十師族のご子息、ご息女がいるクラスへ編入されることになる。

第1高校内で、シエルファニールは、自分の勢力拡大のために、日本国内にあった反魔法団体ブランシユを影響化に入れる。

6月1日まで時間があるので、平塚春雪時代だった頃のあの場所やとある場所へ足を運んでみる。

1-11204・5・24・昼間・八王子・タワーマンシヨン・クローバー↓千葉県○市・平塚家

シエルファニールの服装は、ロングスカートにブラウスにクロスベルのブランドの

鞆、日本のブランドのヒールという格好である。

シエルファニールは、あまり良い気持ちがいなかったが、平塚春雪だった時の家に戻って来た。

シエルファニール「前だったら、吐き気や動悸に襲われそうになりましたが、今では何ともありませんわね」

本来なら安らげる場所でもある自宅が、春雪にとって安らげる場所ではなかった。地獄でしかなかったのだから。

だが今は幸せに満ちている。シエルファニールとして、女としてルーファスを愛しているから。

彼女が耳を澄ませていると、家の中の声が聞こえる。

小雪「お母さん、あのバカ兄貴ってどうなったの？」

雪「全く、あの無能息子はどこに行ったのかね」

春政「春雪がいなくても別に構わないさ、娘の雪子、小雪がいるから大丈夫だよ」

小雪「そうね、あんなブサイク兄貴いらんないし…死んでくれて正解だったね」

雪「小雪、死んだってあのバカ息子は死んだって？」

小雪「うん、総武中では死んだ事になってるよ…不良グループの誰かがバカ兄貴を殺して焼いたって……」

父親の春政も母親の雪もいなくなったことには驚きは無いが、不良グループに殺されたって聞いて青ざめた。

春政「こんなこと、十文字宗家にバレたらどうするんだ？」

雪「あ、あ、そうだ、春雪は病気で死んだことしよう」

春政「それが、いい：宗家にバレなきや良いのだ」

雪「十文字宗家と平塚家宗家にバレなきや良いわよね、小雪もわかった？」

小雪「病気で病死？殺されたんでしょ？なんで変えるの？」

雪「殺されたとわかれば、警察の加入や十文字宗家、平塚家宗家から調べられてしま
うでしょうが！」

それを聞いたシエルファニールは、怒りが込み上げてきて、黒い炎が出ている。おま
けにロングスカートがヒラヒラと巻き上がって、素足が丸見えに。黒い炎がシエルファ
ニールの心を憎しみに満たしていく。しかしシエルファニールはそれを抑える。

シエルファニール「まだ、その時じゃないわね」

そう言つて、黒い炎を抑え込む。黒い炎によつて出来た黒い炎の風は収まった。かつ
ての自宅だった平塚家を見ながら

シエルファニール「お父さん、お母さん、そして妹の小雪、精々、短い時間だけど楽
しみなさい」

シエルファニールの目は、何時もの優しい目ではなく、復讐者の目をしていた。

そしてシエルファニールは、平塚家から立ち去っていく。

二度とこの地には戻ることはない。

1-1204・5・24・昼過ぎ・千葉県の廃工場

千葉県のあるエリアの場所まで着ていた。そう春雪がこの廃工場とある不良グループによって、殴り付けられた後で、火をつけられた場所だ。

やはり火がついて廃工場は燃えたようだ。ほとんど何も残っていない。焼けた鉄骨が所々に残っているだけだ。

だが連中はそんなところにもいたのだった。

しかしシエルファニールが捜している不良グループではない。どうやら違うグループがこの辺りをいるようだ。

そんな中、シエルファニールは、廃工場跡の中を歩いていく。ヒールのコツコツとする音で、グループの連中は、音のする方へ振り向く。

不良1「なんだ？」

不良2「ここは女が1人で来る場所ではないぞ」

不良3「そうだぞ、女の子が1人でこんなことに来ちゃ襲ってくれと言ってるような

ものだぞ」

不良4 「それとも、それがわかってるから来たのかな？」

シエルファニール 「ふざけたことは言わなくても良いです。この辺でたむろしていた連中はどこに行つたのかしら？」

不良1 「この辺にいた連中だと？そいつらは確か…国のなんか偉い連中に連れていかれたぞ？」

シエルファニール 「国の偉い人間に連れていかれたつて…」

彼女は考えた。自分を殺したくらいで出世出来るわけがない。あの連中は大物の誰かと繋がりがあつてことになる。

不良1 「そんなことより、俺達と遊んでいかないか？」

シエルファニール 「貴方達と遊んでる暇はないのよ」

シエルファニールは、死神の鎌、デスサイズを取り出す。それは仰々しくそれでいてとつともなくヤバい雰囲気を漂わせていた。彼女の目は、赤く染まっている。そしてそれを不良達に対して構える。

不良3 「なんだ、こいつ！」

不良4 「死神の鎌！マジでヤバいぞ、こいつ！」

不良3と4はその場から逃げ足す。しかし彼女が逃がすはずもなく

シエルファニール「逃がすわけないでしょ！」

不良3と4は、高速で飛んできたシエルファニールに対して何も出来なかった。ただ殺されるのを待つだけだった。

シエルファニール「デス、エンド……」

シエルファニールは、不良3と4の首もとにデスサイズを持っていきそのまま首を刈り取る。不良3と4の鮮血が飛び散る。

不良1と2がそれを見て、すすぐさま逃げ出す。シエルファニールは、舌打ちをしてから、十文字家の18番の魔法「ファランクス」を発動させる。

不良1と2は、ファランクスにより、地面に押し潰される。彼女は、威力をさらに上げて、不良1と2を完全に押し潰した。不良1と2が押し潰された後には、小さなクレーターがあり、そこには真つ赤な水溜まりが出来ていた。

シエルファニール「……なんともあつけないものね……」

シエルファニールは、乱れたロングスカートを綺麗にする。そして、工場跡の場所から、自分の生徒手帳、スマホを見つけた。

シエルファニール「……私の生徒手帳とスマホ……よく火災から燃え残ったものです……」

シエルファニールは、春雪だった時の生徒手帳とスマホを拾い、自身の鞆に入れた。

シエルファニール「後は、あの不良どもの行方を捜さないかね」

彼女は再びコツコツと工場跡の外へ出ていった。

ステイル・アレフガルド編【星杯騎士団】

1-1 話-ガセな情報。

1-1 日本-九州-博多港

ここは東ゼムリアに位置する国日本。東ゼムリアの大国である。

ちよつと前までは、大亜細亜連合という国が大国であったが、日本、帝国、共和国との戦争で、東ゼムリアでの権威は失い、国土もほとんど失い、小さな小国に成り下がっている。

元々大亜細亜の領土であった領土は、帝国と共和国、そして日本が領土を分け合っている。

中国東北部（旧満州）には帝国の傀儡国家、東ゼムリア共和国が建国され、カルバード共和国よりは、南中華国が建国された。

東ゼムリア共和国は、帝国の属国。

南中華国は、カルバード共和国の属国。

大亜細亜連合は、小さな小国。それでも新ソヴィエトとは同盟関係は続けているため、東ゼムリアも南中華国も大亜細亜連合には侵攻はしない。

東ゼムリア、南中華国もアルテリア法国の承認は得ており、日本も東ゼムリア共和国も南中華国も国家として承認している。

話は日本の方に戻るが、博多港は、ゼムリア大陸へ行くための玄関口であり、陸路の玄関口である。九州と朝鮮半島は、陸路（海底トンネル）で繋がっており、大陸横断鉄道の終点である東京駅まで繋がっている。そう言う理由で企業の倉庫もたくさんある。もちろん帝国や共和国の企業倉庫もある。

そんな博多港の倉庫エリアに2人の女性がいた。

1人はブラウンの髪にツインテールで、活動的な服装をしている。もう1人は、とあるのインデックスの髪の色をしていて、こちらも活動的な格好をしている。

そんな2人は、倉庫エリアで何かを探している。

?? 「桜子先輩、そちらにありましたか？」

桜子 「無いわ、本当にここで良かったのかしら？クラレットと方はどうだった？」

クラレット 「ありませんね。この情報ってエツアリ先輩からもたらされたんですよね？目的なものは見つかりませんでしたけど、武器の密輸の証拠は見つかりましたけど」

桜子 「そうね。武器の密輸の証拠を見つけたのは偶然だけだね。本来はこれはじゃないのよね。エツアリに聞こうにも、どこかに潜入したっほいし…」

桜子がそう言いかけると、懐の木刀を取り出す。クラレットも気付き戦闘態勢にすぐ

に移行できるようにした。

桜子やクラレットの回りをいつの間にか取り囲むように黒服の連中がいた。その連中のリーダーと思われる男が喋り出す。

?? 「おやおや、弊社の倉庫エリアに何用でしょうか？」

桜子 「…ただの一企業つてのはおかしいんじゃない？」

クラレット 「そうですね、一企業がこんな武器をどこの勢力にお売りになるんですか？」

桜子とクラレットは大量の武器を取り出して黒服の連中に見せつけた。これは偶然に見つけたものであり、本当に見つけたいものはない。

?? 「貴女方は、政府の回し者ということでしょうか？」

桜子 「政府？日本政府つてこと？なんであたし達が日本政府の回し者ですって！」

?? 「違うのですか？なら十文字や一条や四葉の回し者か？」

クラレット 「すべて日本の組織ばかりですわね…」

?? 「なるほど…外国の回し者つてことでよろしいかな？」

黒服の連中は、一斉に拳銃を取り出す。

桜子 「拳銃…日本製ね…」

クラレット 「拳銃…ですか」

桜子は木刀を黒服の連中の方を見て構える。クラレットも構えのポーズを取る。

黒服の連中は、一斉に桜子達に拳銃を撃ちまくる。しかし桜子には効かない。彼女は、加速移動魔法を発動させながら避けている。

桜子「無駄よ…」

桜子は黒服の1人の目の前に現れて、木刀を振り下ろす。

黒服の何人かは、拳銃の標準をクラレット定めて撃つ。

クラレット「無駄ですわ!!」

クラレットの身体に当たったはずの拳銃の弾丸は、撃った本人の側を通り、音をたてながら後方の地面にめり込んだ。

クラレットが発動したのは、肉体硬化の魔法である。魔法や魔術系は跳ね返せないが、火薬を使った拳銃や導力銃の弾や戦車の砲弾などは跳ね返せる。

クラレットは、拳銃の弾丸が横をすり抜けていったことに驚いている黒服の連中の何人かに

クラレット「これでも喰らいなさい」

黒服の連中の何人かの腹に気を送りつけて、吹っ飛ばした。吹っ飛ばされた黒服の連中の何人かは、博多港の海に落ちた。

??「ちっ…！中々やりますね…ならば、この私が出る必要がありますね」

リーダーの男は、何かを懐から取り出して口の中に入れる。それは緑色していて、かつてのクロスベル騒乱時に使用されたグノーシスにも似ていた。

桜子「まさか、グノーシス!？」

クラレット「グノーシスは、クロスベル警察がすべて押収したのでは:!?」

??「グノーシス:確かにD::G教団のグノーシスでもありますが:あんな面白い物と一緒ににしないでいただきたい。あんな失敗したグノーシスとね」

桜子「:あれが、失敗作なら、貴方達が作ったグノーシス擬きはどんな効果があるのかしら?」

??「見ればわかることさ。まあ見たことで生存率も限りなく0になるがな」

黒服のリーダーの身体が徐々に変化していく。赤や青のような暴走するような感じはしない。それにヨアヒムのように悪魔に変化するわけでもなく、人間らしさは変わらない。

桜子「どこから、グノーシスを得たのかしら?グノーシスは世界中で回収の対象なんだけどね」

クラレット「まさか、横流ししているような組織があると言うわけですか?」

??「そんなところでしょうか。それでは貴女達には死んでもらいます。まあ死体はどこかの組織に再利用してもらおうとしましょう」

桜子「悪趣味ね…貴方…今、どのような状況になってるかわかる？」

黒服のリーダーの周り、いや桜子やクラレットの周り以外でも、春の夜だと言うのに、寒いと言いたくなるほど冷えてきていた。空気も冷え冷えになり、息を吸うのも痛い感じに黒服のリーダーはなっていた。そして空からは、白いものが舞ってきた。

??「なんだ…これは…?…氷の破片？」

桜子「ふふつ、貴方はもうあたしの術中にはまってるの…」

??「お前の術中だ?!」

桜子は、氷を自由自在に操る能力を持つている。空気中の水蒸気を凍らせる。もちろん身体の中の水分すらも凍らせる事ができる怖い能力である。能力の名前は、「氷の息吹き」と呼ばれる。

黒服のリーダーは、己の身体が内外から凍りついていくのが染々とわかる。そして恐怖にかられながらこう言う。

??「お、お前達はまさか…何でも屋稼業のラリクマ…か!?お前が氷の女王…!」

桜子「そんな名前で呼んで欲しくないけどね」

??「…この私を捕らえたところで、状況は…何も変わりはない…お前らのような何でも屋稼業の連中に…我々の…」

何かを言う前に凍りついてしまった。

桜子「…バツクに大物がいるってわけか…」

クラレット「桜子先輩、この者達はどうしまししょうか?」

桜子とクラレットとの戦闘で、破れた黒服の連中が凍りついて転がっている。

桜子「そうね…日本人みたいだし、日本の警察に引き渡して…!!クラレット!海に飛び込んで!!」

クラレット「え!?!…!!わかりましたわ!」

桜子とクラレットは、博多湾に飛び込んだのと同時に、一発のトマホークミサイルが、黒服達がいた場所に命中し大爆発を起こした。凍りついていた黒服のリーダーや黒服達は、衝撃と熱波で跡形も残ることはなかった。

桜子とクラレットの運命は…いかに。

——日本↓東ゼムリア共和国上空

——メルカパ第漆号機

博多湾を泳いでいたのをすぐにメルカパ第漆機を見つけ、すぐさま2人を助ける。

助けられた桜子とクラレットは、すぐにメルカパに備え付けられているシャワー室で海に置いた汚れ等を落としたのだった。身体を暖めてからみんなのいるエリアを尋ね

た。

?? 「間に合って良かった、桜子、クラレット、怪我はないか？」

桜子 「か、ステイル、ええ、怪我は無いわ」

クラレット 「ステイル卿、どうして日本の方へ？」

ステイル・アレフガルド。七耀教会の守護騎士である。階級は守護騎士第7位であり、別名は魔女狩りの王（イノケンティウス）とも呼ばれている。容姿は光井ほのかの髪の色で、顔のパーツは、達也のような感じである。本当の名前は、光井和也なのだが、先代のステイル・アレフガルドから名前を継承しステイルと名乗るようになった。

桜子 「そうよ、ステイル、貴方はカルバードへ行くって言ってたよね？」

桜子がそう言うのとステイルの後ろから、赤髪のツインテールのシスターがやってきた。容姿は説明すると、とあるの結標淡希みたいな感じかな。彼女の名前は、アクアエル・レインフォード。第漆号機の操縦士。能力は、結標淡希と同じ座標移動（ムーブポイント）である。位は、桜子と同じ正騎士である。桜子とは修行時代からの同期。

?? 「全く貴女方は、助けてあげたのにお礼の一つも言えないのかしら？」

桜子 「げっ、アクアエル、レインボー」

アクア 「だ、誰がレインボーですって！わたしの名前は、アクアエル・レインフォードだから！桜子、貴女、わざと間違えてるでしょ！」

桜子「さあーね…」

アクア「桜子、貴女ね！」

クラレット「クスクス」

ステイルは咳払いをすると、すぐに静かになる。メルカパ第漆号機の中では、ステイルが長なのだ。

アクア「ステイル卿、失礼しました」

桜子「ごめん、ステイル」

クラレット「はい」

ステイル「別に怒ってるわけではないんだ。桜子とクラレットには、危ない任務をさせてしまつて」

ステイルは頭を下げた。

クラレット「ステイル卿、頭を上げてください！」

アクア「そうですね、ステイル卿は、何も悪くはないのですから」

桜子「ステイル…」

ステイル「いいや謝らせてくれ。桜子やクラレットを危険な目に合わせた俺に責任がある」

桜子「あれはエツアリがもたらせた情報でしょ？ステイルが謝る理由にはならないで

しよ?」

ステイル「エツアリも謝っていたが、最終的に判断したのは、俺だ。俺の判断ミスだった」

ステイルは再び頭を深々と下げた。この性格は、和也であつた時から変わらないのだ。元々からの性格であり変えられるものでもない。

だが、今回の桜子とクラレットが受け持った件。元々は、エツアリがとある筋から手に入れたものである。日本の博多港から帝国、クロスベル方面に人身売買組織が高校生を運びだそうとしていると。

ステイルは、ちよつと疑いながらも了承し博多港に桜子とクラレットを送り込んだ。だが、見つけたのは、運びだされる高校生ではなく、武器の不正輸出の品だった。人身売買組織が武器までも不正に輸出しようとしていたら、大問題だとステイルは考えた。

武器を不正に外国に輸出しよとしている先も、帝国やクロスベル、カルバード方面で間違いないと踏んでいた。

帝国は、貴族派と革新派の対立で、内戦の可能性も秘めている。クロスベルは、近頃、頻繁に猟兵団が出入りしている。カルバードも帝国と同じような状況だ。移民容認派と移民反対派で分かれて対立している。

日本においても同じようなものか。帝国派と反帝国派で分かれてるようなもの。

西も東も火種の温床みたいなどころがあるのは間違いない。

そんな時、特殊な導力通信が入ってきた。モニターに映っているのはミサキだった。

ミサキ「は〜い、何でも屋のラリクマさん、ステイルさん、みなさん、こんばんは」

桜子「ミサキ・カミジヨウ！あんたの情報、間違つてじゃないの！エツアリによくも偽物を寄越してくれたよね！」

ミサキ「博多港のことには謝るわ。私達が捕まえた連中の情報によれば、前日に博多港から、クロスベル方面、帝国方面に運ばれたみたいね」

ステイル「やはりな…」

クラレット「ステイル卿、まさかこれつて…」

ステイル「…人身売買組織にまんまとやられたわけか、俺達もミサキさんも」

桜子「…人身売買と武器不正輸出。人身売買よりも武器不正輸出の方が罪も世間的なバッシングも全然違うだろうし…」

ミサキ「そうね。人身売買は、あのD・G教団を潰した時に、各国の取り決めで禁止になったわね。その条約は、帝国もクロスベルも日本も調印してるわ」

ステイル「でも裏社会では、まだまかり通っているわけか…」

ミサキ「そうね、そういう裏ビジネスをやってる組織、猟兵団は、片っ端から潰してきたんだけど…もぐら叩きのようなもので、数は全く減らない…。人身売買の元締め…」

【金城潤矢】を捕まえない限りは、いつまでも続くでしょうね」

桜子「金城潤矢、日本の警察や遊撃士が探してゐるんでしょ？」

ステイル「探しているが、しつぽも捕まえることはできてないようだ」

ミサキ「金城潤矢は、おそらく日本の警察の一部や一部の議員に守られてゐるでしょうね。これはあくまでも私の見立てだから。帝国政府や遊撃士協会の意見じゃないからね」

ステイル「わかつてますよ。ミサキさん、貴女には感謝してますから。今の俺があるのも、貴女が背中を押してくれたから、守護騎士になれたんです」

ミサキ「私は背中を押しただけよ。後は貴方の実力だから」

ステイルとミサキが2人の世界を醸し出しているのを面白くない2人がいた。

桜子とアクアエルである。

桜子は、先代ステイルの従騎士であり和也と修行仲間である。和也が守護騎士になるための修行をしていた時の相棒であった。先代ステイルは、和也に力を継承して引退するつもりで、過酷な修行を敢行した。むしろ先代ステイルは、そこまでするつもりはなかった。むしろ過酷な修行を望んだのは、和也自身だった。

己の秘めた力を使いこなすために、抑え込む力を身に付けるために。

そんな修行に桜子は付き合った。桜子は和也をほっとけなかった。和也の身の上話

は先代ステイルから聞いていたから、余計に気にかけていた。それが恋心だと気づかない桜子であったが。

3ヶ月前に桜子は、一度和也に告白している。だがフラれたのだ。

和也は、桜子が嫌いで振ったのではない。むしろ彼女の告白は嬉しかったのだ。

でも和也には、桜子の思いを受け入れるわけにはいかない。そう心に誓っている。恋人であった藤林朱里を守れなかったこと。

親友であった風間定晴を失ったこと。

恩師であった大久保先生を死なせてしまったこと。

6-13組のみんなを死なせてしまったこと。みんなの未来を奪ってしまったこと。そういうものが、和也の心の枷になっている。

和也はそれを自らの戒めだと言っているが、アイン総長を初め、トマスやケビン、ワジ、バルクホルンは、彼の心が壊れないか心配している。

だから和也（ステイル）には、桜子やエツアリ、クラレット、アクアエルを部下に持たせている。

そして、アイン総長は和也にはある程度自由を効かせている。そのため星杯騎士団の遊撃部隊として活動している。

そう表の役割は、何でも屋「ラニクマ」として。

アクアエルは、和也に能力を見いだされて、彼の仲間になった。彼女は、星杯騎士団の中でくすぶっていたのだ。

くすぶっていたアクアエルの力を和也の助言により、彼女は使いこなせるようになったのだ。

【座標移動（ムーブポイント）】

とあるの結標淡希が使っているあの「座標移動（ムーブポイント）」と同じである。

つまり何でも物を飛ばせるし、人間だつて瞬時に遠くに飛ばすことができる能力である。飛ばせると言っても限度はある。重すぎるモノは飛ばせない。

簡単にいってしまえば、瞬間移動と言っても良いのかな。

七耀教会では、魔女達が使う転移術と似てることもあり、好かれてはいなかったし、アクアエル自身も好きな能力ではなかった。ある時、「座標移動（ムーブポイント）」使用して、空間の狭間にはまりこんだことがある。その時はなんとか自力で外へ出て来られた。それから自身の能力を恐怖するようになった。

だが和也は、アクアエルの「座標移動（ムーブポイント）」に注目していた。

アクアエルの「座標移動（ムーブポイント）」が嫌われる能力なら、自分自身のこの力も周りから見れば、異端ではないかと和也は思っていた。だからアクアエルの事も、自分のことのように考えていたのだ。

桜子もエツアリもクラレットも、周りからは良いと思われてはいない能力の持ち主だった。たがらアクアエルの事も理解して、共に歩む事を決めていた。

一度危険な任務での事だ。和也達が全滅しそうになった時、アクアエルだけ逃げるように言われた。だが彼女は逃げなかった、またみんなを失って一人ぼっちになりたくなかった。その気持ちがあんなを守りたいという気持ちだが、「座標移動（ムーブポイント）」に対しての畏れが無くなり、みんなを無事に帰還させることができたのだ。

アクアエルの心をもっとも動かしたのは、和也の言葉である。

和也（ステイル）「アクアエル、自分を信じろ！信じきるんだ！失敗を恐れるな、例え失敗しても俺がアクアエルを支える！支えてやる！だから自分を信じろ！」

この言葉に触発され、アクアエルは「座標移動（ムーブポイント）」を自由に使かえるようになり、それだけではなく、メルカパの操縦の腕もあることがわかり、操縦士としての役割もこなしている。

そんなことを思い出していた桜子とアクアエルは、クラレットの声で我に帰る。

クラレット「桜子さんもアクアエルさんもうしたんですか？」

桜子「…えっ!？」

アクアエル「…ど、どうしたのクラレット？」

ステイル「桜子、アクアエル、どうかしたのか？」

ステイルが桜子とアクアエルを心配そうに見ている。

ミサキ「2人共、海に落ちたり、能力を使いすぎたとかでは無さそうね…」

ミサキは桜子やアクアエルの表情を見てそう思った。2人共にステイル（和也）に好意があることを。

桜子「コホン…色々言いたい事があるけど、ステイルやミサキさんには、聞いてもらった方が良いわね、クラレット？」

クラレット「そうですね」

桜子「実は…」

今回の博多港での出来事、あの黒服の連中のリーダーが、D∴G教団の残党、ヨアヒムが作っていたグノーシスが、クロスベル警察や遊撃士に回収されたはずのものが、なぜか持っていたこと。

そして自分達は、こう推理したことも。

誰かが、クロスベル警察や遊撃士が回収したグノーシスを日本国内に持ち込み、国内

の闇組織に売り渡したのではないかと。

ステイルもミサキも渋い表情をしながらも桜子やクラレットの推理は間違っていないと思つた。

ミサキ「日本国内に持ち込んだ連中は…恐らくは、獅童一派の金城あたりかしらね」
ステイル「そう考えるのが妥当ですね、まあクロスベルの誰かが横流しに加担してそうですね…」

ミサキ「うん、それはわかつてるわ…。クロスベルの混乱に乗じて誰かがそんなことをしてるのはね…」

桜子「ヨアヒム・ギウンターによるクロスベル騒乱…」

ミサキ「…彼は死んだわ。私やロイド達特務支援課やエステルとヨシユアとレンちゃんの前でね…」

ステイル「ミサキさん、気は晴れましたか？過去との因縁に…」

ミサキは、ちよつと驚いた表情でステイルを見る。

ミサキ「…うん、1つ…私の過去の因縁には決着をつけたかな…でももう1つはまだ終わってない」

ステイル「…クロスベルの伝説の熱き刑事…ガイ・バニングス捜査官…」

ステイル（和也）は、ちよつとだけミサキに身の上話を聞かされていた。当然ガイ・バ

ニングスの話も聞かされていたのだ。

ミサキ「…か、ステイルさんには以前話してたものね」

ステイル「まあ、プライベートなら和也でも構いませんよ…。メルカパ内も俺の部下しかいませんし、桜子達も俺が和也あることも知ってるので…」

ミサキ「…日本国内では、死んだことになってるんだよね？」

ステイル「ええ、死んだことになってます。親も妹達もあいつにも死んだことが伝わってますよ」

ステイルは、ちょっと寂しそうに言った。口では強がっていても家族と会えないのは、寂しいものだろう。桜子もエツアリ、クラレット、アクアエルも家族はいない。メルカパ第漆号機の仲間達は、1つの家族みたいになっていた。先代ステイルからそうだったようだ。

ステイル「…そんなことよりも、仕事、仕事…」

ミサキ「…和也さん…全く貴方は…。で、今メルカパ第漆号機は、帝国方面に帰って来てるのかしら？」

ステイル「そうですね、それが何か？」

ミサキ「貴方達、何でも屋〔ラニクマ〕には、パルム方面に向かつてほしいの」

ステイル「パルム、帝国南部の街ですね。この辺りで何かあったのですか？」

ミサキ「ええ、博多港から運び込まれた高校生達がパルム近郊、日本人移民街の工場団地の……」

ステイル達は、ミサキから詳しい情報を聞いて、メルカパ第漆号機のスピードを上げて、帝国南部の街パルム方面へ向かったのだった。

緋里雪奈（結社）編【怪盗団】

1-1-1-4・26-1 決意。

1-1-204・4・26-1 夕方―東京―秀尽学園校舎屋上。

春の夕暮れに染まった屋上に4人の男女と一匹の猫がいた。

まずは、そのグループの中で、一番リーダーと思われるメガネをかけたくせつ毛の黒髪の男の子である。屋上部分の壁に寄りかかっている。男の子の名前は雨宮蓮という。

2人目は、そのグループの参謀的なポジション的な黒髪メガネの女の子。髪は腰まで伸びていて、太陽を背にして立っているため太陽光とマッチして幻想的に見える。女の子の名前は、緋里雪奈という。

3人目は、屋上の椅子に座っている金髪。パツキン：周りから見れば、不良のように見える男の子。しかし根は仲間思いの優しいヤツでもある、坂本竜司である。

4人目は、屋上に無造作に置いてある机に座っている金髪碧眼の女の子。日本とリベールとのハーフ。見た目のせいで、人付き合いは苦手である。唯一の友達の鈴井志帆を守れなかった事を悔いている、高卷杏である。

後は猫の紹介である。猫の名前はモルガナ。雪奈の飼い猫と言うか、使い魔でもあ
る。正確には、雪奈の母親の使い魔であったが、母親の死により雪奈がモルガナを継承
したのだ。

雪奈の母親は魔女であり、帝国のとある魔女達の一族である。そのため雪奈も魔女の
血をひいている。母親の名前は、アヤノ・ミルスティン。日本名は、白河綾乃。雪奈の
本当の名前は、アヤナ・ミルスティン、日本名は、白河綾奈である。

幸せに暮らしていた親子。だが母親、綾乃は、何者かに殺されてしまった。

綾乃が生前に言っていたことがある。

母親「綾奈、貴女はエレボニア帝国のエリンの里に帰りなさい。その里の長である婆
様に会って、綾乃の娘って言えば通じるから…。ここは…この国は私達魔女にとって危
険になったの…だから…」

そんな話を聞かせられた直後に、綾乃、綾奈親子の住む住居を襲撃される。燃え盛る
炎が包む家の中で

綾奈「お母さんは？お母さんはどうするの？」

綾乃「大丈夫、貴女1人を逃がすくらいは魔力は残ってるわ…。だから…！」

綾奈「…いや、お母さんと離れたくない！」

綾乃「綾奈、こんな母親から生まれて来なければ、こんな不幸にならなくてすんだの

に、ごめんね、綾奈」

綾奈「：ううん、私はお母さんの娘として生まれてきて良かった！決して生活は楽じゃなかったけど、お母さんと2人で暮らせて幸せだった！不幸なんて思っていないから！」

火はどんどん2人の住み処を燃やしていく。綾乃は、最期の力を振り絞り、綾奈を安全な場所へ転移させるために詠唱を始める。

綾奈「お、お母さん!?お母さん!!」

綾奈の身体の周りには、転移術が発動される。綾奈は綾乃に対して叫ぶ。綾乃は涙を堪えながら、綾奈を見送る。娘が幸せになることを願って。

綾奈は、その後盟主に拾われ母親が死に自身も死んだことが、日本の警察から発表されたと聞いた。それも

「事故死」と片付けられた。

綾奈は思った。あのとき、黒服の男達が自分達の家を取り囲んで、火を放つたのにと。警察は嘘を言っていると。

しかし盟主に、日本の警察に言っても無駄だと告げられる。

あの国、日本の政治体制や十師族支配する中では、綾奈の意見などひねり潰される。

それどころか今度こそ綾奈も殺されると。盟主は、結社に入ることを薦めてきた。結社に入れば、力を与えると。綾奈に断る選択は無い。うちなる炎が燃え上がる。それは情熱の炎ではない。

彼女の中に復讐の炎に火が付き燃え上がる。元々の力、炎の力が、盟主から力を分け与えてもらって、凍える吹雪の力を手に入れた。

盟主は、綾奈に母親の仇を取らせてあげて、約束し執行者となる。執行者N.O. 22、断罪の魔女となる。

クロチルダとは気があった。綾奈の母親である、アヤノ・ミルスティンの妹分でもあった。だから姉と慕っていたアヤノの娘だとすぐに気づいた。

綾奈という名前を捨て、新しい自分になるためにクロチルダから名前をつけてもらう。

クロチルダは、大切な名前だから、捨てない方が良いと言ったが、綾奈本人の意思は固かった。

だから、エリンとアヤナ、そして能力の氷を合わせた名前、緋里雪奈と名付けた。クロチルダは、密かに帝国名、ユキナ・ミルスティンと名付けた。

回想から現実に戻ってくる。竜司か何かをしゃべっていた。

竜司「パレス攻略も済んだことだし、予告状を出すだけだな」

杏「いよいよだね」

モルガナ「予告状を出したら、一発勝負だ、お前達いけるか？」

蓮「ああ、いつでもOKだ」

雪奈「私もいつでも行けるわ。鴨志田には、天罰を食らわせてやらないと」

杏「そうだね！雪奈！志帆にしたことに対しての報いを受けてもらわないと」

竜司「女子が覚悟を決めたんだ！俺も覚悟を決めたぜ！」

モルガナ「決行日は明日、27日の放課後だ！オタカラを盗み出すのは、一発勝負だからな。失敗は許されない」

雪奈「わかっているわ！私達はやるしかないのだから！ねえ、蓮？」

蓮「ああ！」

蓮や雪奈、杏、竜司は、鴨志田のオタカラを盗み出して改心させることを改めて決意したのだった。

2-2-4・27-決戦、カモシダパレス。

1-1-204・4・27・朝-秀尽学園-1階の掲示板付近

朝早く、竜司と雪奈は秀尽学園に来ていた。なんで早く来たかと言うと掲示板に予告状を貼るためである。

学園内は無人である。モルガナが外から人払いの魔法をかけているので、誰も学園には近づかない。学園という認識が無くなるのだ。

竜司「雪奈、ここで良いか？」

雪奈「この掲示板なら鴨志田もよく目に入る場所でしょうから、予告状も目に入るでしょ」

竜司と雪奈は、予告状を掲示板に貼り付ける。

予告状の文章はこうだ。竜司が考え雪奈が竜司風にアレンジしたものだ。

【色欲のクソ野郎、鴨志田卓殿。抵抗出来ない生徒に歪んだ欲望をぶつける。お前のクソ加減はわかってる。だから俺達は、お前の歪んだ欲望を盗ってお前に罪の告白させることにした。鴨志田卓殿、覚悟してもらおうか。心の怪盗団・ウロボロスより】

竜司「なんか雪奈に修正してもらった分カッコよくなったよな」

雪奈「まあ竜司の文章をきれいにアレンジしただけだから。文字にも魔力をこめてね。さすがに新聞紙の切り抜きじゃね」

雪奈は魔女の力を使つて、竜司の書いた文字の上から文字に魔力を込めた。鴨志田を本気でひびらせるために。

掲示板に貼り終えたときモルガナがやってくる。

モルガナ「雪奈、竜司！もうすぐ結果が消える。消える前に学園をいったん出るぞ」

雪奈「わかったわ。竜司、一端学園から出ましょ！」

竜司「わかったぜ」

雪奈、竜司、モルガナは一端学園から出る事にした。

——秀尽学園にて。

みんなが登校してきたのを見計らつて、雪奈と竜司も登校する。鈴井志帆の飛び降り自殺未遂が起こつたというのに、学園の平穏さは変わらない。学園の教職員が、生徒達にかん口令を敷いているから誰も事件の事はしゃべらない。雪奈と竜司は不快になりながらも生徒達の反応を見る。

しかし掲示板を見ている生徒達は、ただ鴨志田が何かやったのかわかっていない。い

や疑問にもならないのだろう。

学園内では、鴨志田は優しくて良い先生と通っている。

噂程度がたったとしても、生徒達は信じない。

蓮や竜司の方が問題児だとレッテルを貼られているわけだから。そこに杏や雪奈が加わっても学園の状態を覆せるものでもなかった。

ただ、内容はともかく、予告状には生徒達も興味津々だった。

その様子を遠くで見ると、蓮、雪奈、竜司、杏。

竜司「中々のモンだろ？導力ネットや雪奈にそれらしいものを教えてもらったからな」

杏「ほとんど、雪奈に教えてもらっただけでしょ？」

雪奈「文章は竜司が考えたわ。それを私がアレンジしたんだけどね」

蓮「文章はともかく、様にはなってると思う」

モルガナ「まああのマークも竜司のやつから、雪奈に描き直させたんだ」

竜司が子供の落書きみたいな絵を描いたものだから、モルガナが雪奈に頼んで身喰らう蛇のエンブレムに似たようなモノを描いたのだ。

怪盗団らしく、一度狙った獲物は逃さないという意味で、蛇を描いたのだ。それを雪

奈は説明をした。

杏「最初は何で蛇とも思ってたけど、雪奈の話聞いたら良いんじゃないかなと思うし」
掲示板を見ている生徒達が騒いでいる。だが、騒ぎも鴨志田の登場によつて終わる。

鴨志田「だ、誰が!？」

鴨志田は、掲示板の予告状を見るなり苦虫を潰したような表情をしている。

モルガナ「見ろよ、歪んだ欲望に心当たりありまくりのリアクションだ」

竜司「相当、効いてるな」

雪奈「でしょうね、文字に鴨志田の被害者の心の叫びを込めたからね」

鴨志田は、怒りのあまりに掲示板を見ていた生徒達を犯人扱いにしている。鴨志田は、雪奈達に気づいた。そしてこつちの方へやって来る。

鴨志田「貴様らか!!」

雪奈「何の事ですか？」

鴨志田「とぼけるつもりか？」

蓮「とぼけるとは?」

鴨志田「まあいい。どうせお前達は、じき退学だ」

鴨志田がそう言うと、突然空間が歪み、鴨志田のシャドウが見えた。

シャドウ鴨志田「来いよ、盗れるもんなら盗ってみろよ!」

鴨志田は雪奈達を睨んで、去っていく。

モルガナ「今の鴨志田の反応……。パレスに絶対影響が出てるはずだ！」

杏「オタカラ出現ってこと!?! 今日ならイケんだよね？」

雪奈「ううん、杏、今日しかないわ」

モルガナ「予告状を目にするインパクトは、長続きはしないし、二度は起こせない」

雪奈「オタカラを盗めるチャンスは、たった一度きりしかないわ」

竜司「1日あれば十分だぜ！」

蓮「ああ、後はやってやるだけだ」

雪奈達は、鴨志田と決着をつけるため、鴨志田パレスへ乗り込むことになった。

111204・4・271カモシダパレス。

雪奈達は、カモシダパレスに潜入した。今日は攻略のために潜入したのではない。鴨志田と雌雄を決するためである。雪奈達は、鴨志田の被害者をこれ以上出すわけにはいかない。

カモシダ城の入り口に降り立った、フィクサーとジョーカー達。

こちらの世界では、みんなコードネームで呼び合う。

雪奈は、フィクサー。

蓮は、ジョーカー。

竜司は、スカル。

杏は、パンサー。

全てがこちらの方に来た時の姿、怪盗服姿からコードネームを決めた。

雪奈の姿は、大胆な格好である。蓮も竜司も最初に見た時は、興奮したものだ。黒の仮面にビキニに黒マント、黒のニーハイという格好。雪奈自身も最初に怪盗服になった時は驚いたものだ。杏も雪奈の格好を見て驚いた。委員長タイプメガネをしていて、みつあみにしていた。露出も控えめにしているから、怪盗服の露出大なのは、正直驚いている。おそらく雪奈の叛逆の心がそうさせているのか。コードネームは、自らフィクサー【断罪の魔女】と名乗った。

今では慣れたものか堂々している。

ジョーカーは、黒を基調した怪盗服である。怪盗団の切り札、リーダーである。

スカルは、仮面が特長である。キャプテンキッド、海賊のドクロマークが目立つ。コードネームもそこから持ってきた。

パンサーは、格好から女豹。怪盗服が赤く、ジョーカー、スカルが女豹と言ったため、フィクサーがパンサーと名付けた。

モルガナは、人形になり、コードネームは、モナ。

フィクサーのペルソナは、キューコ。断罪の魔女らしいペルソナである。

ジョーカーは、アルセーヌ。

スカルは、キャプテンキッド。

パンサーは、カルメン。

モナは、ゾロ。

みんなそれぞれの特徴を生かしたペルソナであるのは間違いない。

雪奈達みたいに、内なる心の仮面で戦う者をペルソナ使いとも言う。

ミサキ、深夏、静江みたいに天性の能力を持っているものや、激しい怒りなどで、眠っていた力が呼び覚まされる場合もあるとされている。

雪奈達は、大人達への怒り。

大人達への反逆。

もう覚悟は出来ている。

フィクサー「もう後戻りは出来ない。やるしかないわ」

ジョーカー「ああ！」

スカル「ああ、やってやるさ！」

モナ「ワガハイはいつでもいける！」

パンサー「雪奈、私はやるよ。志帆の思いを、志帆の味わった苦しみをわからせてや

る！」

フィクサー「わかったわ。なら行きましよう！鴨志田と雌雄を決しに」

雪奈達は、カモシダ城のオタカラ確保ルートをひた向きに走る。やけにカモシダ城が静かなのは、逆に不気味だが気にしている暇はない。

すぐにカモシダ城のオタカラの合った部屋に突入する。巨大な冠が出現している。

モナ「よおっしやああ!!オタカラ、大出現！」

スカル「つーか、デカツ！」

フィクサー「モナが言ったとおりに、オタカラが出現したわね」

モナ「どうよ！言ったとおりでろっ？これで言えてるぜ！」

パンサー「なんかムカつく。なんでこんなキレイなの？鴨志田の欲望なんでしょう！」

フィクサー「欲望に忠実何でしょうけど」

モナ「∴欲望に忠実∴まあそうなんだらう。雪奈達、これを運び出すぞ！」

雪奈「そうね」

モナ「ジョーカー、スカル、ほらっ運べ」

スカル「つたく命令ばかりしやがって。まあ思ったより簡単だったな。スゲー畏とかあるかなと思ってたけど」

ジョーカー「そうだな」

パンサー「これ持って帰っちゃえば、パレスが消えるんだよね？それで鴨志田が変わる」

フィクサー「ええ、そのはずよ、ねえモナ？」

モナ「ああ、そのはずだ」

スカル「今のうちに持って帰るとするか」

ジョーカー「そうしよう！」

フィクサー達は鴨志田の欲望の王冠を持ちながら帰り道を進み出す。すると

???? 「ゴーゴレツツゴーカーモーシーダ！」

???? 「そりゃあ!!」

フィクサー達が運んでいる王冠にボールが当たり、落としてしまう。そして目の前にピンクブルマを穿いたマントを付けた鴨志田が現れた。シヤドウ鴨志田が手をかざした時、王冠がヤツの手に収まっていた。それも玉座に座りながら、鴨志田の欲望から生まれた杏擬きが側にいる。

鴨志田「これだけは、絶対に奪われるわけにはいかないからな。これは俺様が城主である証明、この世界のコアだからな」

パンサー「あいつ…私のことあんな風に見てるってことよね？」

フィクサー「そうよ。以前私のアレもいたわ。ジョーカーやスカルには見られたけど、自分でもおぞましかったから」

ジョーカーとスカルがこっちの世界に迷い込んだ時に、フィクサーとモナとで救いだした時に、鴨志田と遭遇した。

それときに連れていたのが、エロイ下着を付けた雪奈であつた。それだけではない、鴨志田が雪奈擬きをなめ回していて、身体中におぞましかったから、キューコで叩き斬つたのだつた。

ーカモシダパレス

スカル「よう変態、待ち伏せかよ?」

ジョーカー「覚悟してもらうぞ!」

カモシダ「探す手間が省いてやっただけだ。俺様がじきじきに始末してやる」

スカル「こっちの台詞だ、セクハラ野郎!」

カモシダ「フン、勝手な勘違いだな」

パンサー「勘違い!?どこがよ!人に言えない事をしてきたくせに!」

フィクサー「どうやら自分がしてきた事がわからないのね。ゲスが!」

カモシダ「ゲスだと?何を言うか、隠してくれたのは、周りの連中だ。俺様の実績に

あやかりたい大人や、勝ち組願望が強い生徒達…そいつらが進んで俺様を守ったんだよ。みんなで「得」をするためにな」

スカル「得だあ!？」

フィクサー「ふふつ、そうね、お前が言う通りこの国の連中はそんなヤツばかりね…。正直ヘドが出るわ…」

ジョーカー「フィクサー」

パンサー「フィクサー…」

カモシダ「利口な生き方だろう？ 貴様ら青臭いガキどもも、飛び降りやがったあの娘もな！」

パンサー「そうね。アンタに良いようにされて死んじやおうとか…ほんと、バカ…それに気づいてやれなかった私はもつとバカ! どんなバカでもね…生きていくために、アンタの許しなんか要らないのよ！」

フィクサー「よく、言ったわ! パンサー。あんたみたいな小物のオオサマ…はつきりと言つて…五流以下ね」

カモシダは、それを聞いて表情を曇らせる。

カモシダ「偉そうに吠えるなよ。取り柄もない凡人共が! 俺だけの才能を俺のために使うのが何が悪い? 俺様は他の人間と違うんだよ！」

フィクサー「そうね、お前は人間じゃないわね。D∴G教団の人間と同じぐらいゲスの極みの悪魔ね」

フィクサーにそう言われ、本性を表すカモシダ。

カモシダ「D∴G教団かあ∴フハハ、違うな。そうだ、オレはそいつらやお前らとおなじなんかじゃない∴この世界を統べる悪魔さ∴」

カモシダは、色慾の化けモノに変化した。

カモシダ「全部、俺様の勝手だろうがああ！」

フィクサー「色慾の悪魔、カモシダ！（お前みたいなヤツは、執行者No. 22 断罪の魔女が盟主に仇なすカモシダを殲滅する）決着をつけさせてもらうわ！」

フィクサーは、小さな声で○の部分と言った。スカルやパンサーにはやはり聞かれないことなのだ。

ジョーカー「覚悟してもらおうか、鴨志田！」

カモシダ「来るなら来いよ！お前ら全員、返り討ちにしてくれる！」

ジョーカー達の戦いは始まった。スカルは先鋒として、カモシダへ攻撃をする。

スカル「来い！キャプテンキッド！」

スカルのペルソナであるキャプテンキッドによる雷撃がカモシダを襲う。

カモシダ「小賢しい真似を！」

パンサー「カルメン！」

パンサーのペルソナ、カルメンがカモシダに対して炎の攻撃が炸裂する。

カモシダ「くっ、くそガキどもが！」

モナ「我が意を示せ！ゾロ！」

モナの風撃をカモシダはくろう。だが

カモシダ「そんなものか？ああ！」

カモシダは、何本もある手足を使ってジョーカー達に攻撃を加える。しかしジョーカー達はそれぞれ攻撃をかわし、次の態勢に備えて構える。

カモシダ「もう終わりなのか？あつけないものだな」

ジョーカー「まだ終わりではない！アルセーヌ！」

カモシダの顔にジョーカーはアルセーヌで攻撃を加える。カモシダの顔に傷がついた部分から血が流れる。

カモシダ「よくも俺様の顔に傷をつけたな？」

フィクサー「それぐらい、なんとも無いでしょ？今までどんだけの生徒を傷つけて来たか！思いしれ！」

フィクサーは、キューコを呼び出す。呼び出しと同時にキューコの目が光る。光は氷を呼び覚ます。部屋の温度がどんどん下がっていく。カモシダは、足下から氷始めてる

のがわかる。それは本人ではなくてもわかるほどに。

フィクサー「絶対零度の檻（アブソリユートプリズン）」

フィクサーがそう言った後、カモシダは完全に凍りついた。フィクサーはジョーカーにバトンタッチをする。

フィクサー「バトンタッチ、ジョーカー！」

ジョーカー「わかった！」

ジョーカーは、カモシダの凍りついた身体に対して、アルサーヌで斬り刻んだ。

カモシダは、苦しみの絶叫を叫びながら悶えている。だがカモシダは苦しみながらも何か飛ばしてくる。

モナ「お前ら、避ける！」

フィクサー「わかってるわ」

ジョーカー「ああ！」

スカル「ぐはあ！」

パンサー「キヤーー！」

スカルとパンサーは、謎の球体みたいなものを背中と右足に当たった。

ジョーカー「スカル、パンサー！」

カモシダ「空気を球体にしたものをぶつけただけだ。当たれば痛いだろうがな」

フィクサー「空気の球体……。衝撃波みたいなものね」

モナ「気をつけた方が良さそうだな！」

カモシダ「さてと」

カモシダは、懐からグラスを取り出すと、中には何か入った物を飲み干す。するとカモシダの傷がみるみる内に回復していく。

フィクサー「さっきのは回復薬みたいなものね」

カモシダ「だとしたらどうする？」

フィクサー「だったら、回復が出来ないようにしてあげるだけよ！」

カモシダ「できるのか？お前によ！」

カモシダは、フィクサーに対して空気砲を飛ばしてくる。それをフィクサーはかわしまくる。

ジョーカー「フィクサー、大丈夫か？」

フィクサー「大丈夫よ」

スカル「わりい……。さっきの食らってた！」

パンサー「ジョーカー、フィクサー、大丈夫？」

ジョーカー「俺達は、大丈夫だ。それより取られたオタカラは……。ヤツの頭か」

フィクサー「王冠だから頭につけるのは、おかしくはないけど」

パンサー「本当にムカつくわね」

スカル「でも、どうするよ、アレ？あんなの簡単には取らせてはもらえねーだろ？」

モナ「そうだな：誰かが王冠を奪うヤツと囷になるヤツが必要になるな」

ジョーカーとフィクサーは、回りを見る。すると王冠の上の位置から行ける道を見つけた。だが、ジョーカー、フィクサーがいなくなると、カモシダも気づくだろう。ならスカル、パンサー、モナの3人になる。そんな中、スカルが

スカル「なら俺が行く」

ジョーカー「大丈夫か？」

スカル「何とかなるっしょ。伊達に陸上部で鍛えてたわけじゃねーし」

フィクサー「スカルの運動能力にかけるしかないわね」

ジョーカー「わかった、スカル任せたぞ！」

スカル「任せられた！」

スカルは、頃合いを見て、戦線を離脱。カモシダの頭の上の王冠が見下ろせる位置まで行く。それを察知されないようにするため、ジョーカー達の戦いは始まった。

3-3-4・27-奪え、カモシダのオタカラ。

ーカモシダパレス。

スカルを王冠の上のところに行かせるために、ジョーカー達は囚役をやることに。

ジョーカー「アルサーヌ！」

パンサー「カルメン！」

フィクサー「キューコ！」

モナ「ゾロ！」

ジョーカー達は、カモシダに対して攻撃を畳み掛ける。それに対してカモシダも防御や空気砲で応戦してくる。

カモシダ「こざかしいガキどもだ！」

再びワイングラスのようなものを取り出す。中には先ほど飲み干したものが入っている。それを再び飲むとしている。

フィクサー「あれは、ワイングラスじゃないわ！あれはトロフィーよ！」

パンサー「トロフィー!?!」

ジョーカー「そう言われれば、そうだな」

モナ「カモシダ、トロフィーすらも。ならトロフィーから壊した方が良さそうだな！」
カモシダ「お、おい！これの価値がわからないくせに、触つてくんない！もうやめろよ！
！教えたからな！」

モナ「やめろつて言われると、逆にやりたくなるんだよな」

フィクサー「そうね。人間つてそんなものだから！覚悟しなさい！」

フィクサーは、キューコを呼び出しトロフィーを凍り付かせる。

フィクサー「ジョーカー!!」

ジョーカー「任せろ！」

フィクサーからジョーカーにバトンタッチする。

ジョーカー「アルセーヌ!!」

凍り付いたトロフィーをジョーカーがアルセーヌで粉々に砕く。

カモシダ「あくあ、全日本で優勝したときの……」

カモシダが体勢を崩す。すかさずジョーカー達は、カモシダを囲む。

カモシダ「こんなことして許されるとも思っているのか？俺様はな、いいか？俺様

はなあ！カモシダなんだぞ！」

フィクサー「カモシダ？カモシダが何？日本のために、世界のために何かしたの？」

カモシダ「……キサマ……だから俺様はカモシダなんだ！俺様は王なのだっ!!」

フィクサー「人のこと見下してるくせに何が王よ……。裸の王様でしょ？」

パンサー「アハハ、フィクサーそれ受ける。裸の王様、わざわざ盗りに来てるんだから、さっさと渡してくれる！」

カモシダ「黙れ、貴様らなんぞにコレは渡さんぞ！」

モナ「まだそんなこという元気があるのかよ！」

ジョーカー「なら、こちらも本気でいかせてもらおう！」

ジョーカー達は、カモシダに総攻撃を与える。

カモシダ「俺様は王だ！俺様が王じゃなかったら、誰が王なんだ？どこまでも俺様にとついで、こりやとつておきをやらんとな！奴隷ども！アレ持つてこい！」

奴隷と呼ばれた者達が、何かを大量に持つて来た。バレーボールのようなものを取り出してきた。

カモシダ「現役のとときブイブイいわせてた俺の必殺スパイクだ！【必】ず【殺】すすパイクだ！どうした、奴隷ども！俺様のボールはまだか!？」

カモシダがそう叫ぶと、三島がボールを持つてきた。

三島？「す、すいません、カモシダ様。ただいまお持ち致しました」

カモシダ「遅いぞ三島！このクズのウスノ口が！」

ジョーカー「三島！」

パンサー「な、なんでこんなところに？」

フィクサー「認知世界の三島君：カモシダが認識してる三島君ね」

モナ「フィクサーのいうとおりだ。あれは認識上の存在。本物の三島じゃねえ！」

フィクサー「だから、迷うことないから！」

カモシダ「よし、三島！俺様にパスだ！クズでもそれぐらいは出来るだろ！」

三島？「で、出来ませす！」

三島のトスでカモシダがスパイクを撃つてくる。ボールはフィクサーの方へ向かってくる。

フィクサーは、そのスパイクを受け止める。受け止めた両腕がミシミシと痛い。パンサーがすぐにフィクサーの元に駆けつける。

パンサー「大丈夫、フィクサー!?!」

フィクサー「だ、大丈夫だから。パンサーも気をつけて！」

パンサー「わかったわ、それとカルメン！」

パンサーがフィクサーの両腕の負傷をカルメンで癒す。

フィクサー「ありがとう、パンサー！」

パンサー「仲間なんだから当たり前でしょ！」

フィクサーとパンサーは、ハイタッチを決めてから、カモシダと再び対峙する。

カモシダ「やはり三島じゃ調子がでないな！役立たずはさっさと消えろ！」

三島？「は、はい、カモシダ様！」

三島？「はそう言われ走り去っていく。」

カモシダ「次だ、次だボール持ってこい！」

すると、ウサギみたいな格好をした志帆が現れる。

志帆？「カモシダ、ボールをお持ちしました」

パンサー「し、志帆!？」

フィクサー「鈴井さん…カモシダ、次から次へと…」

モナ「パンサー、落ち着け！あれは三島と同じだ！」

パンサー「うん！わかってる、こんなところに志帆がいるわけないもんね」

フィクサー「本当にどうしようもないクズね！」

カモシダ「なんだと、貴様、もう一度俺様のスパイクを食らいたいんだな！」

フィクサー「…あんたのヘボスパイクなんて痛くも痒くもないわね！」

フィクサーは、パンサーに目線を送り、ジョーカーに合図を送る。それは、パンサー

が志帆？に攻撃を仕掛けてもらいジョーカーが志帆？にとどめをさしてもらおう。フィ

クサーは、カモシダにスパイクを跳ね返すという作戦。モナは指示を出しながら、スカ

ルのほうも気にする。

パンサーには、荷が重い作戦だが、これは親友である彼女にやってもらうしかない。ジョーカーは、パンサーがうちもらしたときのためにスタンバイ。

フィクサー「やるよ！」

パンサー「わかつたわ」

ジョーカー「ああ！」

モナ「任せたぞ！」

フィクサー、ジョーカー、パンサー、モナは所定の位置につく。

所定の位置についたと同時に、志帆？のトスから、カモシダの殺人スパイクがフィクサーに襲いかかる。

だがフィクサーは、その殺人スパイクをちゃんと受け止め、トスをしたようになる。フィクサーは、走り出してからのジャンピングスパイクをカモシダに食らわせる。勢い余つて後方に倒れ込む。倒れ込んだ瞬間に志帆？を巻き添えになつてしまった。

それと王冠が宙に回つたところで、スカルが王冠をカモシダの位置から吹き飛ばす。

カモシダ「ああ、俺様の大事な……あ！」

カモシダが起き上がるが、かなり動揺している。

モナ「見ろ！カモシダがかなり動揺している！」

パンサー「これ！いけるんじゃない？」

フィクサー「そうね、ジョーカー、総攻撃よ！」

ジョーカー「わかった！みんな総攻撃だ！」

ジョーカー、フィクサー、スカル、パンサー、モナの総攻撃が見事決まりカモシダは絶叫をあげながら倒れていく。

——カモシダパレス。

絶叫を上げて倒れたはずのカモシダが立ちあがり、元の大きさになって転がっていた王冠を拾い上げる。そして逃げようとする。だがそこからは到底下に飛び降りることとは出来ない。飛び降りれば、間違いなく彼の世行きだろう。それがわかっていながら、飛び降りれないのだ。

ジョーカー達は、ある意味追い詰めた。

パンサー「どうしたの、逃げないの？逃げたらいいじゃない？」

フィクサー「そうね、私達がお手伝いしましょうか？カモシダ先生、運動神経抜群でしたよね？」

カモシダ「昔からそうだ、ハイエナ共が、期待という名の押し付けばかり！そいつらの分までやってやってんだ！見返りを求めて何が悪い！」

スカル「言い訳かよ！お前の歪んだ心、俺らが何とかしてやるよ」
カモシダ「ぬうう！」

カモシダは、外の方を見ている。だが恐怖で足がすくんでいる。

パンサー「怖い？今、あんたは志帆と同じ景色を見てるんだよ。きつと志帆も怖かった。でも、飛び降りるしかなかった。あんたはどうするの？飛び降りる？それとも、ここで死んでみる？」

パンサーのペルソナ、カルメンが炎を出して、カモシダに対して言っている。

フィクサー「パンサー、ただ死ぬだけなら物足りないわ。死んでも苦しみ続ける煉獄地獄へ叩き落としてあげようかしら？」

フィクサーもペルソナ、キューコを出現させ、凍える炎と煉獄の炎を出している。その表情は魔女そのものだ。

モナ「ひと思いにトドメ刺しちまうか？まあ任すぜ」

カモシダ「やめてくれえ!!頼む!やめてくれ!!」

パンサー「みんな、アンタにそう言ったんじゃないの!?!けど、アンタは平気で奪ってつたんだっ!!」

パンサーは、炎の塊をカモシダに対して放つ。だが炎の塊は壁にぶち当たる。パンサーは、最初から当てる気はなかったのだ。フィクサーもぐうつと怒りを静めるのに必

死である。今の状態で放てば、カモシダなんか簡単に殺せるのだから。

カモシダ「わ、わかった…俺の負けだ」

カモシダは自分の王冠をジョーカーに投げた。それをジョーカーは受けとる。

カモシダ「トドメをさせよ…。そうすれば、『現実の俺』にもトドメをさせる。勝ったお前には、その資格がある」

パンサー「…！」

パンサーがカルメンの炎を再びカモシダに放とうとするが、フィクサーに止められる。

フィクサー「待って、杏！貴女が手を汚す必要はないわ…」

パンサー「雪奈…」

フィクサーは、カモシダに詰め寄る。

フィクサー「死ぬ前に答えなさい。貴方、私のお母さんを殺したヤツを知らない？とあるヤツから貴方が知ってるって聞いたけど…どうなの!？」

カモシダ「…：お前の母親を殺した？何の事を…まさかお前…あの女の…：そうか…：なるほど…：母親の仇を取りに…：だが俺はお前の母親を殺してはいない…：…」

フィクサー「じゃあ…：誰が私の…：お母さんを殺したの？」

カモシダ「知らない、俺は知らない…！」

フィクサー「本当にでしようね？」

カモシダ「……本当だとも……今さら嘘を言つてどうする……」

モナ「フィクサー！カモシダは何も知らないようだ。で、どうするんだ？」

フィクサーは、カモシダの目を見て、嘘は言つてないことがわかり

フィクサー「アンタに死なれたり、廃人になられたら、今までの罪が立証出来なくなるから。だから殺さない……自分でどうするか考えなさい」

カモシダ「俺は……負けた……負けたら終わりだ……これからどうすれば……いいんだ？」

ジョーカー「フィクサーに言われただろ、〃自分で考えろ〃と」

カモシダ「わかった、俺は現実の俺の中に戻ろう。そして必ず……」

そう言うと、カモシダは光に包まれたように消えていった。するとカモシダパレスが音を立てるように崩れ始めた。

モナ「オイオイ、長話している暇はないぜ。ここはすぐに崩壊する！」

スカル「ど、どうするんだよ！」

パンサー「どうするの？」

ジョーカー「どうする、フィクサー、モナ！」

フィクサー「モナ、転移術を使うわ！手伝つて！」

モナ「わかった！フィクサー！ジョーカー、スカル、パンサー、ワガハイやフィクサー

から離れるなよ！」

フィクサーとモナは、転移術を発動しカモシダパレスから脱出した。

11204・4・27・秀尽学園の周りの裏道。

フィクサーとモナの転移術で、カモシダパレスから現実世界に戻って来た。

杏「な、何とか戻って来れたね」

竜司「そうだな…」

雪奈は、スマホを取り出し、周りの気配を探したが、さつきまでであったカモシダパレスの気配が消えている。それだけではない。イセカイナビ（結社が作ったナビゲーター）からカモシダパレスが消えている。

雪奈「みんな、スマホのナビを見て！」

蓮達は、雪奈に言われてスマホを取り出してナビを見る。そしてナビにカモシダパレスが無くなっているのに気づく。

イセカイナビ「目的地が消去されました」

杏「本当だ、行けなくなってる」

モルガナ「カモシダのオタカラは？」

蓮「オタカラならここにある」

蓮は制服のポケットから、オタカラを取り出す。どうやらメダル…金メダルのようだ。

竜司「な、なんだそりゃ」

雪奈「メダル、金メダルでしょうね」

杏「金メダル…あの王冠は？」

竜司「どうなってるんだ？」

モルガナ「カモシダにとつての欲望の源が、それだったってことだ」

雪奈「鴨志田にとつては、この金メダルがパレスで見た王冠と一緒にしたことかしらね」
竜司「これ…世界大会のときのだろ。あの変態野郎、過去の栄光にしがみついていただ

けつてことか…」

杏「でも、これで鴨志田の心…変わったかも、なんだよね？」

モルガナ「おそろくな」

竜司「こっちは退学かかってんだぞ！」

雪奈「私やモルガナにとつても初めてなのよ…。はい変わりましたって軽々しくは言えない」

モルガナ「だが、カモシダの人格に相当な影響を与えたのは間違いない。パレス丸ごと消えて無くなったからな」

竜司「あーモヤモヤしやがるぜ！今すぐ確かめらんねえの？」

蓮「竜司、ここは様子を見るしかない。焦りは禁物だ」

杏「鴨志田の出方を待つしかないね」

モルガナがシケタ面をするなど言う。せっかく成功したのだから、もつと喜べと言つた。ただ、竜司は実感が無いからと言つた。それに対してモルガナは、大丈夫だと言う。

雪奈「あ、確かにあのカモシダ、現実の自分に戻るつて言つたわね」

モルガナ「カモシダスグル……。あんなヤツは人間じゃねえ！けど、あの時だけは、少しでも人間らしくつたな……」

蓮「そんな気はしたな」

雪奈と杏は、簡単には鴨志田を許すことは出来ない。だが鴨志田一人を責め倒すわけにはいかない。鴨志田をあんな風にしでかした連中も同じなのだから。

モルガナ「お前達のおかげで救われた連中が必ずいるはずだ」

雪奈「蓮、竜司、杏……とにかく待ちましょう」

杏「雪奈」

竜司「とにかく、待つか」

蓮「それしかなさそうだ」

竜司「……鴨志田の野郎がどうなるのか。マジで退学になのか、とか」

蓮「待つしかないな」

杏「そうだね、今日は帰ろ」

蓮と雪奈達は、途中まで一緒に帰ることに。

だがそんな会話を聞いていた者がいた。蓮達のいる場所から少し離れた物陰から、会話を聞いていた。

赤つ毛でポニーテールにしている秀尽学園の女子生徒である。制服の上着のポケットからスマホを取り出している。

??「なるほど、両宮先輩達の言うとおりね。イセカイナビから『カモシダパレス』が消えてる」

何故彼女が『イセカイナビ』や『カモシダパレス』を知っているのかは、偶然イセカイナビが発動しカモシダパレスに迷いこんだことがあるのだ。何故彼女のスマホにイセカイナビがあるのかはわからない。

彼女の名前は、芳澤すみれ。高校1年生で、今年から秀尽学園に入学している。原作では、芳澤かすみとして、入学してくるが、ここではすみれとして自覚している。もちろん新体操はやってるが、特待生ではない。ちゃんと己の力で入学している。

芳澤かすみは、不慮の事故で亡くなっている。

そして芳澤すみれは、3番目世界の光井和也の生まれ変わりなのだ。

4-4-4・27↓5・02-鴨志田卓の改心。

1-1204・4・27・ルブラン・

夜、既にルブランの札は、*clause* になつてゐるし、ルブランの主の佐倉惣治郎はすでに自宅へ歸つてゐる。

今日の放課後、カモシダパレスにて、そのキングであるカモシダを倒した。倒して、金メダルというオタカラも手にした。雪奈も鈴木志帆の無念をはらせたのは、良かったと思つてゐる。だが、母親の情報は全く得られなかつた。ちよつと遠くを見るような表情をしていたので蓮が話しかけてくる。

蓮「大丈夫か、雪奈？」

雪奈「うん、なんとかね」

蓮「鴨志田は、雪奈の母親の情報は知らなかつたようだな」

雪奈「そうね：鴨志田何かが関わつてるのか半信半疑だったけど、ヤツは違つた」

モルガナ「確かに。だが捜査は振り出しに戻つてしまつたがな」

蓮は、雪奈にルブランコーヒを淹れて持つてくる。

蓮「雪奈、ルブランコーヒを淹れたけど飲む？」

雪奈「ありがとう、頂くわ、蓮」

雪奈は、蓮が淹れたコーヒーを味わって飲む。コーヒーの味が、口の中に広がる。

蓮「どう、美味しい？」

雪奈「ええ、中々のものだわ」

蓮「佐倉さんにコーヒーの淹れ方を習ったんだ」

雪奈「なるほどね、佐倉さんに……か」

雪奈は、蓮がここに居候する前から通っている。惣治郎からは、変わった女子高生だと言われている。惣治郎曰く女子高生ならもつと洒落たところや可愛いとことかに行くものではない。

モルガナ「鴨志田の件は、焦っても仕方がねえ。しばらくは様子見だな」

雪奈「それしかないわね」

蓮「雪奈のお母さんを殺した犯人はわからずじまいか」

雪奈「そうね、だけど鴨志田の言い分だと他に殺した犯人いるってことが確証は得たわね」

蓮「鴨志田は、〃自分ではない〃と言っていたな。雪奈は信じるのか？」

雪奈「あの時の鴨志田は、嘘は言っていないと思うの」

雪奈は、あの時の鴨志田は本心から言ったと信じている。モルガナもあれは嘘ではな

いと言っている。

蓮「ああ、あの時の鴨志田は、雪奈やモルガナの言っているとおりだと思ってる」

雪奈「まあ、とにかくしばらく鴨志田の様子を見るしかないわね」

蓮「そうだな」

しばらくは鴨志田の様子を見るしか無さそうだ。

11204・5・02・秀尽学園・体育館・昼過ぎ

学校の校長から昼休みの後、午後の授業を潰して、全校集会を開くとのアナウンスが流れる。

それを聞いた雪奈達は覚悟を決めた表情をしていた。周りの生徒達は、ガヤガヤと騒いでいる。友達と騒いでいるものや、バカふざけをしている生徒達もいる。

カモシダパレスでカモシダと決着を付けた後、翌日から自ら自宅謹慎だと言って学校には来なかった。校長や教頭が、鴨志田の自宅を訪れて、出勤するように言ったが、来る日に学園に来て説明すると言って校長、教頭の言うことを拒否。

4/28・29・30

5/01・02と月日は流れて今に至る。

すみれは、1年の方から蓮達を見ていた。普通に怪しくないように。周りのガヤガヤにはうるさく感じながらも時間が過ぎるのを待っている。

そしてそんなすみれを見ている人物がいた。新島真である。彼女は、秀尽学園の生徒会長であり、ゴールド・マウンテン帝国支部に囚われていた1人である。

特科クラスⅦ組、エルフィン・スナイパー、七耀教会、ミサキ、静江によつて囚われていた生徒達は救われた。

だが、新島真は、救われ日本に戻つて来た後、姉である新島冴にかなり怒られた。

「勉強もせずにふらふらとしていたからさらわれるのよ」と言われたのだ。

真としては、生徒会長として、生徒の悩み事を聞いての行動だった。友達や先輩、後輩がゴールド・マウンテン社に捕まったと生徒会長である真に訴えて来たからだ。警察もマスコミも動いてくれないから、最後の望みで真にすがつてきた☒もいた。

それから真は、ゴールド・マウンテン社の事を独自に探つていた。

そんな真に、とある匿名のメールが入る。

【秀尽学園の生徒達を含む高校生達は、ゴールド・マウンテン社の帝国支部の人間達が、帝国へ拉致している。人身売買のために日本の高校生を複数拉致を繰り返している。

高校生達は、渋谷で消息を絶っている☒が多い。知りたければ、渋谷を探れ！

ヴァイオレット

このメールを送つたのは、芳澤すみれである。ヴァイオレットというのは、芳澤すみれのコードネームである。

すみれは、お助けチャンネルの依頼をこなしていた時に、偶然にもゴールド・マウンテン社の話を聞いたのだ。だから生徒会長として動き出した真に情報を提供したのだ。すみれとしては、いざとなった場合、助けに行くつもりだったが、すみれに匿名のメールが入る。

「ヴァイオレット殿、貴殿が彼女達を助けに行く必要は無い。彼女達は、帝国のとある区達とその協力者により助けられる」

すみれの話はおいといて、真はその情報を信じ、渋谷を歩いていた所にゴールド・マウンテン社の帝国支部人間に出くわし、そのまま拉致された。そして、渋谷から博多からクロスベルへ運び込まれ、帝国のパルムの近郊の工場に運ばれていた。

リインやエマ、ユース、ステイル達に救われ出すまで、あの工場の最奥で監禁されていた。

監禁されてた数日に起きた事件や拉致される前に起きた鈴井志帆飛び降り自殺未遂事件。

真自身も頭がいっぱいだった。副会長に生徒会の運営を任せて真自身は手掛かり探していた。

そんな中、真は連れさらわれてしまった流れである。

真は、ステイルやカズヤ、深夏から励まされていた。

深夏「たまには回りを向く事も大事だからね。助けて欲しいときは、素直に助けてと言つても良いのだから。この2人みたいに突つ張つちやダメだよ」

深夏はウインクをしながら真にこの事を言っている。

カズヤ「手厳しいな、深夏は」

ステイル「なんか、反論できないな……」

深夏は、女の子に生まれてきて、自分のやつてた事を反省し、協調性を持つようになっている。カズヤもステイルもマユミや桜子に言われているものだから、深夏に言われたことも否定はできなかつた。真も深夏やミサキ、静江のように強くなりたく改めて決意したのであった。

真が憧れる伝説の刑事、それは父親でもあるが、その父親も認めていたガイ・バニングスである。真もガイ・バニングスのような刑事になりたいと思つている。だが姉の冴は、父親もガイ・バニングスも良しとはしなかつた。

冴「真、父さんやガイ・バニングスを目標にするのは、やめなさい。死んだら負けなのよ、わかつてる？」

真は、姉のその言葉が今でも許せないでいる。死んだら終わり？ 違うと思つている。父親もガイ・バニングスも最後の最期まで、自分の信じる正義と誇りを貫いたんだと信

じているからだ。

真は、自然と口は真一文字に手は握りこぶしを作っていた。

すると、鴨志田がゆっくりと現れたかと思うと、生徒達の前にやって来て、土下座して謝り続けた。額を床に擦り付けながら、ひたすら罪の告白をして洗いざらい自身が犯した罪をしやべった。

雪奈達もすみれ、真も鴨志田の態度には驚いている。今まで謝罪などしたこともない男がひたすら許しを乞うているのだから。

鈴井志帆に対して、強姦したこと、それが原因で飛び降り自殺をはかったこと。

高巻杏に対してもセクハラやモラハラを繰り返していたことや脅迫をしていたこと。

緋里雪奈に対しても列車にて痴漢行為をし彼女を傷つけたこと。

バレエ部、陸上部の生徒達を複数人を壊したこと。

などを告白した。秀尽学園での鴨志田卓の評価は奈落の底へ落ちた。本人は命を持つて償うと言い出した。それを見た雪奈と杏の言葉により、鴨志田は罪を認め深く反省することになった。

本人は警察に通報してほしいといい、他の教職員が警視庁に通報した。

そして警視庁の刑事がやって来て、鴨志田卓は、逮捕された。

鴨志田卓の逮捕は、瞬間に日本中へ、そこに留まらずに世界に発信された。

蓮や雪奈達、すみれ、真は、それぞれの思惑があり、それが交差するときが必ずやってくる。

鴨志田卓の逮捕は、日本という国に風穴が開いた瞬間でもあった。

11204・5・02・秀尽学園屋上・

鴨志田卓は、警視庁に逮捕された。それは日本中に報道が駆け巡った。

それも臨時ニュースとして。

【世界大会金メダルリスト、鴨志田卓、逮捕】

容疑は、教え子に対してのセクハラ、パワハラ、等などで警視庁が緊急逮捕に至ったとされている。

今日は、ほとんど午後の授業はあつて無いようなものだった。先生達は緊急の職員会議を開いて、今後の対策を練っていた。

雪奈と蓮のクラスも、授業がないことを良いことに好き勝手をやっていた。杏は、志帆のお見舞いのために、一端学園を離れた。

職員会議が終わることもなく、放課後を迎えた。

放課後になってすぐに竜司からチャットが来た。雪奈と蓮はスマホを取り出した。

竜司「放課後、屋上に集まろうぜ」

雪奈「別に構わないけど？」

蓮「ああ、構わない」

竜司「じゃあ、放課後すぐ屋上に来いよ」

雪奈と蓮はスマホをなおすと、互いに顔を見合わせると、竜司が待つ屋上へ向かう。

やはり教室から出ると、鴨志田の話で持ち切りだ。今まで鴨志田の悪口を聞かなかつたが、嘘のようにみんな鴨志田の悪口を叩いている。

そんな会話を聞きながら雪奈と蓮は屋上の方の階段を昇る。

屋上の扉を開けると、夕陽が顔に当たって目をつむる。5月に入ってはいるが、夕方の風は何だかまだ冷たい。

雪奈、蓮、竜司、モルガナは、いつもの定位置に座り話をしていた。

竜司「マジでビビったわ：マジで改心だったな：運良く廃人化も無かつたし、1000点満点だぜ！」

雪奈「パレスが消えても、廃人化が起きないってことで良いのよね？」

モルガナ「ああ、そうだな。シャドウが死んじまう前に説得して、現実の本人の元へ

返してやれば、いいってことか」

蓮「そうすれば、廃人化は起きないってことか」

竜司「つまり、ちゃんと自白だけを狙えるって事だな？」

雪奈「そう言うことかしらね」

竜司「面白えじゃねえの！」

竜司がそう言うのと、杏がやって来て

杏「声でかいから！」

竜司「大丈夫だつて」

雪奈「杏、鈴井さんの様子はどうだったの？」

杏の話だと、鈴井志帆の意識は戻ったようだ。少しだけど、話すことも出来て鴨志田が自分のやったことを認めたとつてことを言った。

杏「志帆、私に『ごめんね』だつて。私が志帆の為に媚びてたの、バレちゃつてたみたい。謝りたいの私の方なのに」

雪奈「杏、悪いのは鴨志田よ」

杏「そだね。志帆のお母さんが、回復したら、転校させようと思うつて。強姦とか：セクハラとか自殺未遂とか：やっぱりレッテル付いて回るし：志帆もそうしたいつて言つたみたい」

竜司「寂しくなんな…」

杏「でも、私もそれがいいと思った。ここにいたら、きつと辛いし…」

雪奈「そうね、鈴井さんのためなら、その方が良いわ」

竜司「いつだつて会えんだろ…生きてりや、さ」

杏「私も、変わんなきゃ…雪奈みたいに」

雪奈「私みたいに？」

杏「うん…。雪奈って大人しそうにしてるけど、芯は強いんだなって」

雪奈「そ、そうかな？」

竜司「そうだけ、最初は委員長タイプと思ってたけどさ…全然違うからな」

蓮「それは言えてるかも」

雪奈「別に私の事はいいでしよう！」

竜司「それに、あのお前、鴨志田によく我慢できたよな？」

杏「私は、ただ直接謝らせたかっただけ…」

モルガナ「杏殿は優しいんだな…」

竜司「クズ相手でも廃人化は目覚めが悪いか…」

杏「いや、違うけど…改心させた方が、復讐になるなって思つて…」

雪奈「そうね…。その方が復讐にはなるわね…。死んだらそれまでだしね…」

秀尽学園教諭、鴨志田卓を殺さなかつたのは、生かして地獄を見せること。死んでしまつたら、それで終わり。

それに蓮はともかく、杏や竜司を人殺しの汚名は着せたくないという気持ちだが、雪奈にはあつた。あの2人は鴨志田卓の被害者つてだけだ。

蓮は、雪奈の取り引きしたため、結社の一員と数えている。

雪奈も鴨志田には、痴漢をされたという事実もあるから、殺す選択肢もあつた。

だが、鴨志田を殺せば、杏や竜司、志帆や今まで鴨志田にやられた人間がどう考えるかと思つた。怨みの対象が失うことで、生きる意味を失う可能性もあつた。

だからこそ、鴨志田卓という人間は、生かすことにしたのである。他の執行者から甘いと言われるかも知れないが、今の雪奈は怪盗団としてやっていくつもりである。

竜司には、死より生きて地獄を見せるつて事が怖いと言われた、雪奈。

竜司「まあ、とにかく、一件落着だけだよ：そういや、1つ気になつてんだ。あの『城』のことを。あんな変な異世界が、なんで鴨志田にだけあつたんだ？」

モルガナ「別にあの鴨志田に限つたことじゃない。欲望に心に歪みが起きてるヤツなら、誰でも持ちえるものさ」

杏「誰でも……」

モルガナ「確かめてみるか？」

竜司「い、今はいい。しばらくは大人しくしてねーと、鴨志田のこと、また騒がれるだろうしな…ま、パレスでやってたこと調べるなんて、ぜってー不可能だろうけどよ…」

杏「その事だけど、あんた達、もう変な噂を立てられてるたよ。結託して、鴨志田に暴力まがいの脅迫したって…」

雪奈「暴力まがいね…そんな噂を立てる暇な人間がいるのね…」

杏「まあでも流石に怪盗が実在するなんて、そうそう信じないでしょ」

雪奈「西ゼムリアでは、怪盗Bが存在するけど？」

杏「怪盗Bは、宝石とか美しいものしか取らない美学があるとか言ってるじゃない？」

雪奈「そ、そうだけど…」

杏「まあそれは別として、予告状は鴨志田の悪事を知った誰かの悪戯ってことになってるみたい」

竜司「そりやそうか。やった本人でも信じ切れてねえし」

蓮「確かに。ひとまずは、今後のことは事態が落ち着いてから相談だな」

雪奈「まあ、それが良いわね。今はあまり目立つようなことは控えた方が良いみたい」

竜司は懐から鴨志田から得た金メダルを取り出す。

竜司「とりあえず、このメダル、いくらで売れるか確認しよーぜ。こんなの、さっさと売つ払つちまった方がいいだろ」

竜司はスマホを操作をして金メダルの買い取り価格を見ている。

竜司「お、出た！って3万ミラ？金メダルって3万かよ!？」

杏がニコニコしながら竜司に話す。

杏「覚えてるー？中学の時に貸したミラ」

雪奈「竜司って杏にそんなにミラ借りてたの？」

竜司「いや、3万も借りてるわけねえだろ！」

杏「利子がついてたらこんなもんじゃない？」

竜司「お、おい！」

杏「誰も全部貰うなんていってないでしょ。てか何年も返さない方が悪いし！借りたものは返すって常識だし！」

竜司「く、くそ…」

蓮「竜司の負けだな」

雪奈「そうね」

モルガナ「事態を見守ることに、賛成だ。勝利の記念に祝杯でもあげるか？」

雪奈「まあ、モルガナのおかげでもあるし、勝利の祝杯でもあげるのはいいかもね」

竜司「こんなキメエ金なんて、パーツと使っちゃうのもありだな？」

モルガナ「怪盗の相談は美食の席でと決まっている。どうだ？」

雪奈「そうね、私は賛成よ」

杏「雪奈…!? うーん、雪奈が賛成なら私も賛成かな。それに私、行きたいところがあ
るんだけど?」

竜司「どこだ?」

杏「志帆と行きたいって前から言ってたところ」

竜司「俺は借金あるし、文句は言えねえ…」

雪奈「私は杏の決めた所で良いわ。私も杏達が行きたかった所に興味があるし」

蓮「俺も構わない」

モルガナ「ワガハイも杏殿に任せる」

杏「うん、じゃあ後で確認しとく」

竜司「いつ行くよ? さっそく明日にでも繰り出すか?」

杏「連休の最後にしない? 次の日からの学校生活に備えて、勢いつけるって意味で」

雪奈「5月5日の子供の日って事ね」

杏「って換金って誰がやるの?」

モルガナ「任せとけ、何でも買い取るお店を知ってる、そうだよな、雪奈、蓮?」

杏「へえー、雪奈、そんなお店を知ってるんだ。じゃあ、お願いね」

雪奈「まあ…ね。ふうーわかったわ、私と蓮で換金してくるわ」

蓮「え？俺も？」

雪奈「そうよ、蓮は怪盗団のリーダー何だし手伝ってくれるでしょ？」

蓮「わかった」

そして雪奈達は、5月5日の事を話ながら帰っていく。

5-5-5・02-雪奈と蓮。

1-1-204・5・02・ルブラン・

すでにルブランは、clauseの札を出しており、惣治郎ももう自宅へ帰って行った。

ルブランには、蓮と雪奈の2人だけだ。

雪奈は、蓮の入れてくれたコーヒーを飲みながら話している。

雪奈「今回は本当にお疲れ様」

蓮「雪奈の方こそ、お疲れ様」

モルガナ「ワガハイには、労いの言葉はないのか？」

雪奈「モルガナ、お疲れ様」

蓮「モルガナ、お疲れ様」

モルガナ「分かればいいんだ」

雪奈「全く、モルガナは」

雪奈は、そう言いながら導力テレビのチャンネルを変える。

桐条内閣の支持率の低下。鴨志田の報道がほとんどだ。

蓮「雪奈、ほとんどのテレビ局はそれだけだと思ふよ？」

雪奈「まあ、待つてなさい」

雪奈は、導力テレビに何かしている。彼女は何かやら暗号を入れているようだ。

すると日本の放送だけではなく、クロスベル、帝国、共和国の放送も観れるようになった。

蓮「す、凄い、何をやったの？」

雪奈「うん？ちよつとね、結社のあるものを装着しただけよ」

蓮「結社、身喰らう蛇（ウロボロス）……」

雪奈「私達は、盟主（グラランドマスター）の為にやってているの」

蓮「盟主（グラランドマスター）……俺に力をくれた人か……」

雪奈「盟主（グラランドマスター）を人と表現するのは、どうなんだろうけど」

雪奈は、帝国の放送を観始める。

【日本の企業、ゴールド・マウンテン帝国支社、日本の高校生を大量拉致】

【帝国軍情報局、エルフィン・スナイパー、七耀教会、トールズ士官学院特科クラスⅦ組
によつて救助される】

【パルム郊外の日本人移民街は、依然としてサザークラント州の領邦軍に占領されている】

【ゴールド・マウンテン帝国支社の社員、帝国軍情報局にて取り調べ。全面的に罪を認め

る」

【帝国政府と日本政府、秘密裏に極秘会談】

【近く、ゴールド・マウンテン帝国支社の社員、日本へ引き渡しへ】

【日本の高校教諭、鴨志田卓、自分の教え子達にセクハラ、パワハラ等をふるい、逮捕される】

【クロスベル自治州政府、クロスベル警察、クロスベル警備隊再編を強硬】

【クロスベル騒乱の罪で、帝国派、共和国派議員が多数逮捕され、マクダエル臨時議長兼市長が緊急で法案を議会通過させた、クロスベル警察、警備隊再編法案】

【クロスベル警察、警備隊再編法案を通過させたヘンリー・マクダエル市長、市長を辞任、新議長として就任することが決まる】

【マクダエル市長が辞任により、クロスベル市長選挙が近く行われる運びになる】

【日本国の世界大会メダリストで秀尽学園の鴨志田卓教諭が、生徒達を奴隷のように扱っていた。セクハラ、パワハラ、モラハラ等もやっていた罪で日本の警視庁により逮捕される】

モルガナ「鴨志田の逮捕は、西ゼムリアにまで流れてるな」

雪奈「まあ、バレーの金メダリストだったわけだしね…」

蓮「これで、鴨志田は二度と金メダリストって名乗れないな」

雪奈「鴨志田にとって、この方が死ぬよりも辛いだろうし」

モルガナ「しかし、日本の放送では、ゴールド・マウンテン帝国支社の話し全くしてないな」

雪奈「十師族に押さえられてる日本が、ゴールド・マウンテン社をどうこうできる訳がないわ」

蓮「十師族…絶対…権力…くう…」

雪奈「どうしたの、蓮？」

蓮「ちよつとめまいがしただけさ」

雪奈「今日は早く寝た方が良いわ。片付けは私がしとくから」

モルガナ「お前、今日は早く寝ろ。換金は明日にでも…」

蓮「ああ、そうさせて貰うよ」

蓮は、そう言うと、自分の部屋である屋根裏へ行ってしまった。

雪奈「うーん、蓮、大丈夫かしら？」

モルガナ「心配か？」

雪奈「まあね。取り引きとは言え、巻き込む形になってしまったしね」

雪奈は、手足となる仲間が欲しかった。ただ最初はそれだけであつた。だけど竜司、杏が仲間になり、一緒に戦って行くうちに、仲間意識が目覚めていったのも事実。

前に戦ったエステル達や司波深夏、ユフィ達を見て、心のどこかに仲間が欲しいとあつたのは間違いない。

雪奈は、蓮が上がって行つた屋根裏を見て、心配な眼差しで見っていたのだった。

11204・5・02・ルブラン・

雪奈とモルガナは、ルブランの方を片付けてから、屋根裏へやって来た。初めて蓮の部屋？みたいな所に来てみたが、物置小屋みたいな場所である。

その中でも綺麗に片付いている場所が寢床のようだ。そこで蓮は寢息を立てて寝ている。

モルガナ「まあ、人が住むような場所ではないな」

雪奈「うーん、確かにそうね…。蓮自身から話は聞いてたけど…」

蓮は、傷害事件を起こし裁判で保護観察処分を下され、前通つていた学校も退学させられ、両親からも遠ざけられた。

両親は最後の情で、知り合いの佐倉惣治郎に預けられた。ちゃんと両親からも教育費は支払われている。

蓮は、傷害事件なんて起こしてはいない。へんな男が女性に乱暴しようとする導力車に連れ込もうしてから、助けようとした。そのへんな男は、酔っ払っていたため足下がおぼ

つかなかつた。

そして自分で転んだ。頭に怪我を負った。

そして騒ぎを聞き付けてきたパトカーがやって来たが、その男の意見を聞いて、一方的に蓮を悪者に仕立て上げた。

蓮がその男に暴力を振るって怪我を負わせたと。

襲われた女性もその男に屈し蓮が暴力を振るった事を証言。

蓮は、本当の話をしたが、取り調べの刑事はさつさと罪を認めろと。さつさと認めた方が、罪を軽くなるだろうと言った。

蓮の味方になる弁護士も罪を認めて、情状酌量を狙った方が良いと、言っていたようだ。

つまりその男は、権力側の人間で、警察や検察、弁護士協会に圧力を加えられるような人間。十師族の人間、または、政府中枢の人間ってことになる。

雪奈「だから、盟主（グランドマスター）は蓮を選んだのかもね」

モルガナ「かもな。負の力：心に大きな傷があればあるほど：」

雪奈「：うくん、何だか眠くなってきたわね：」

雪奈はそう言つて屋根裏のソファーに寝転ぶ体勢に入る。

モルガナ「な、何してるんだ、雪奈？」

雪奈「何って…寝るんだけど？」

モルガナ「まてまて、なんで蓮の家で寝るんだ？転移魔術や魔法で自分ん家にかえれるだろう？」

雪奈は一端起き上がると、制服の上着を脱ぎ始め、上着をそこにあつたハンガーに掛ける。そしてモルガナに

雪奈「蓮の事が心配だからよ。帰るなら、モルガナだけ家に帰って良いわよ」

モルガナ「雪奈…バカ言え。使い魔であるワガハイが主人から離れてどうする！」

雪奈「これ…掛け布団代わりになるわね」

雪奈は、しまつてあつた掛け布団代わり？みたいなものを取り出して、ソファアールのところに再び寝転ぶ。

雪奈「お休み…Zzzz」

モルガナ「はあく大の男がいる前に無防備に寝るとは…。まあこいつは只の女じゃないか…執行者No. 22 断罪の魔女だったな…ワガハイも寝るとするか…」

モルガナも雪奈の近くで丸まつて寝ることにした。

6-6-5・03↓5・04-金メダルの換金。

11204・5・03・ルブラン・

朝の陽射しで目が覚めた蓮。蓮は昨日の夜の記憶があまり無い。何か嫌なことを思い出したような気もするが、快適に寝れたと思う。

蓮は、手作りベッドから起き上がる。するとすぐにいつもと違う何かに目が行く。

ソファアーに、何か毛布みたいなものにくるまって寝ている何かがある。そしてその毛布がソファアーの下に落ちる。

そこには、雪奈が丸まって寝ている。

蓮「な、なんで雪奈がここに寝ているんだ？」

蓮は昨日の記憶を探っていくが、肝心なところの記憶が無い。

再び蓮は、雪奈に視線を向けるとスカートがめくれ、黒いレースのパンツが見えてくる。

蓮「く、黒の…!？」

怪盗服も大胆だが、下着も黒だと思い凄いと蓮は思った。

つつい、見とれてしまう蓮だが一階の方からルブランの主である惣治郎の呼ぶ声が

聞こえる。

惣治郎「おくい、起きてるか？」

蓮「…あ、おつ、起きてますよ！」

惣治郎「なら、起きてこい！朝飯のカレーを作ったぞ」

蓮「わかりました。すぐ行きます」

蓮は慌てて1階へ降りていく。

蓮が降りていったのを確認すると、雪奈は、メモ帳を取り出した。

【蓮、私は自宅に帰るわね。何かあれば、チャットで連絡して】

そう書いて、メモ帳の紙を机に置く。そして転移術を発動させる。

モルガナ「戻るんだな。わかった」

モルガナは、雪奈の転移術を補佐を行う。ここはルブランの屋根裏だ。あまり派手に転移術を使うわけにはいかないからだ。だからモルガナが補佐に入る。

すると屋根裏部屋に転移術の術式が現れ、雪奈とモルガナは転移と共に術式も消えた。

111204・5・03・雪奈のアパート・午前中

雪奈は、自宅に帰って来ると、すぐに身支度をし始める。最初にシャワーを浴びるところから始める。

モルガナは、魔力を使ったため、ソファアに転がって寝る事にする。なぜ寝るのかは、魔力を回復させるためである。

シャワーを浴びてきてから、スマホが鳴ったのでチャットを見る。

蓮「雪奈、今日のは出掛けるのは無理だ。佐倉さんに、店の手伝いを言いつけられている。金のメダルの換金は、明日でも良いかな？」

雪奈「ええ、明日でも構わないわ。佐倉さんの言いつけなら仕方がないわ。蓮、それじゃあ頑張ってるね」

蓮「まあ、疲れない程度に頑張るよ」

雪奈は苦笑いをしながら、スマホをテーブルに置く。

雪奈「今日は、私も部屋の片付けやゴミ捨てなんかしようかな」

片付けや掃除がしやすい格好になってから、やり始めるのだった。

掃除や片付けを本格的にやり出したら、すでに夕方に時間がなっていた。

雪奈「時間が経つのが早いわね」

モルガナ「かなりゴミやらあつたな」

モルガナも魔力が回復して、雪奈と話していた。

雪奈「秀尽学園に入学してきたから、全くして無かつたわね」

モルガナ「秀尽に入学つて……そんなにしてなかつたのかよ……まあワガハイも気にはしてなかつたが……」

雪奈が秀尽学園に入学した頃は、学園内も平和であつた。だが春先になつて前校長が、病気による急死した。これが秀尽学園がおかしくなるきつかけだつた。

今の校長は、元は教頭であつた。教育委員会から、校長に任命されたのだ。そして彼が教頭を任命している。

この校長が、鴨志田卓を連れて来たのだ。他に数名を連れてきている。

これから秀尽学園がおかしくなる。まず教育方針に鴨志田卓と対立した複数の教諭が秀尽学園を辞めさせられている。

それだけではない、教諭人生まで断たれている。

教諭だけではない、生徒達も鴨志田や他の教諭に逆らつて退学になつた者達も複数いる。だから以前は、竜司みたいな連中もたくさんいた。

だが、鴨志田達が恐怖や絶望で支配し、自分達の操り人形のようにしたのだ。みんな退学にはなりたくない、止めさせられたくない、勉強を遅れさせたくない。いい大学、い

い会社に入りたいたか考えてる生徒が多かった。

だから鴨志田卓のような教諭をつけあがらせる結果になった。

モルガナ「明日は、金メダルを換金したいものだぜ」

雪奈「そうね。ただ蓮が佐倉さんに言い付けを言われなければ良いけど」

モルガナ「そうだな。もし明日も今日と同じなら…」

雪奈「本当は使いたくないけど、魔術を使うしかないわね」

【邪眼】ー相手をしばらくの間、術者の影響化に置く魔術。

雪奈「これは本当に万が一、蓮が今日みたいになつた場合だけ」

モルガナ「まあ、迂闊に使うわけには、いかないからな」

こんな感じで、雪奈達の5月3日は過ぎていく。

111204・5・04・雪奈のアパート

朝の陽射しが雪奈の部屋を照らす。照らしたのを合図に、雪奈はベッドから起き上がる。モルガナも心配で起きる。

雪奈「うくん、昨日は本当に疲れたわ」

モルガナ「仕方がない、雪奈自身が溜めたゴミだからな」

雪奈「わかってるわよ」

雪奈は、部屋の窓を開けると、換気をする。外から涼しい風が入って来る。

雪奈「明日は、約束日だからタイムリミットは今日まで。佐倉さんが、蓮に何か言つた時点で邪眼を使用しないと……」

モルガナ「まあ、敵でもない者に使うのもどうかと思うが」

雪奈「わかつてるわよ……。私も出来れば使いたくない……。でも換金の約束もしたし……」

モルガナ「蓮が、オーナーに言い付けをされなければ、良いんだかな」

雪奈「そうね……。さてと私も準備をしなきゃ……」

雪奈は、そう言うのと、身支度の準備を始めた。

準備を整えて、自宅からルブランに向かう途中にとある女性を見かける。

雪奈「あ、あれは東京地検の若手のホープと目されてる新島呀……。なんでこんなところに？」

モルガナ「まさか勘づかれたのか？」

雪奈「それはないでしょ。パレスとかあの世界とか証明できないでしょ？まあ新島呀に向こうの事がわかれば別だけどね」

モルガナ「どうする、雪奈？」

雪奈「ちよつと様子を見てみましょう。それから対応しても遅くはないでしょうし」

雪奈とモルガナは、ルブランの前を通るふりして中を伺う。

店内では、先月の列車脱線事故のニュースが流れていて、新島冴が佐倉惣治郎に質問をしている。だが惣治郎にかわされたため蓮に何か話しかけている。

冴「あなた、どこの学校に通ってるの？」

蓮「秀尽学園ですが」

冴「へえー知り合いもそこに通ってるわ。今…大変よね。鴨志田って教師、人が変わったように自分の罪を告白したんですってね…それも…『ある日突然』人間の心理状態って、そう簡単に変わるものかしら」

惣治郎「ふうん」

冴「コーヒーまだですか？」

惣治郎「はいよ」

惣治郎がコーヒーを淹れるため蓮から視線を外す。新島冴も考え込んでいるから、今のうちにと雪奈は、蓮にウイंकを送る。蓮が気づいて表に出てくる。

雪奈は蓮を駅前の方まで連れていき

雪奈「危なかったわね、蓮」

蓮「ああ、危なかった。あの女の人が出来なかったらまた皿洗いだっただ…」

雪奈「はあく結果的に蓮は『あの女の人』のおかげで助かったわけか…」

蓮「あの女の人がかしたのか？」

雪奈「金メダルを換金しに行くんでしょ？あの女の話は行きながら説明してあげる」
雪奈と蓮、モルガナは、四軒茶屋から渋谷のセントラル街へ向かう。しかし導力列車の中は、いつも以上に人が多い。当たり前だろう、ゴールデンウィークなのだから。

蓮は、導力列車に乗っている間、雪奈をずっと守っていた。雪奈はちよつと蓮のことを感心していた。

渋谷に下り立ったら、さらに人々が多かつた。ゴールデンウィーク中だからどこに行こうとも人は多い。

そそくさに岩井のプラモデルのお店に行こうとしたら、公安とおもしき2人が店の前にいる。雪奈は蓮を呼び止める。

雪奈「蓮、ちよつと待って！」

蓮「どうしたの、雪奈？」

雪奈「岩井のお店の前に、なんか怪しい男の2人組がいるでしょ？」

蓮「…確かにいる。あの男の2人組は一体？」

雪奈「公安ね…。岩井の店の何かに気がついたのかしら？」

蓮「どうする、雪奈？」

雪奈「まあ、どうこうするわけにはいかないわ。そうだ、蓮」

雪奈はそう言うと、蓮の左手を掴んで恋人繋ぎをやる。

蓮「ゆ、雪奈!？」

雪奈「怪しまれないようにするだけだから。変な意味はないわよ!」

蓮「そ、そうなんだ…」

蓮は苦笑いをしながら、雪奈と恋人のフリをして公安の刑事の横を通って岩井のプラモデル屋に入る。

岩井「緋里と新入りのヤツじゃねーか。どうしたんだ、今日は補給か？」

雪奈「補給はまだ良いわ。それより買って欲しいのがあるの」

蓮「これなんです」

蓮は鞆から金メダルを取り出す。

岩井「うん？金、金メダルか？なんで緋里達が持つてるんだ？まさか…!」

雪奈「出所は…あまり気にしないで」

岩井「…お前達が結社の人間では無かったらこんな物、買い取らねーぞ」

雪奈「アハハ…」

岩井は蓮から金メダルを渡す。

岩井「緋里、3万ミラでどうだ？」

雪奈「ええ、それでいいわ」

岩井「交渉成立だな……」

雪奈達は、3万ミラを受けとる。岩井が外の公安の刑事を気にしている。

雪奈「やつぱり、表の公安の刑事を気にしてる？」

岩井「ああ……まあな。ああ、そうだ……これを持っていけ、緋里」

岩井から雪奈は、とある紙袋を渡される。

雪奈「これは？」

岩井「いつぞの依頼の報酬だ。持ってけ」

雪奈「……わかったわ」

それだけを言い終えると、公安の刑事達が踏み込んでくる。雪奈と蓮は再び恋人のふりをする。

公安刑事1「岩井宗久だな。ちよつと話があるのだが？」

岩井「2人共、行け」

雪奈「うん」

雪奈と蓮は、公安刑事達の横を歩いて行く。

公安刑事2「用件は分かるよな？」

岩井「証拠でもあるのかい、刑事さん？」

公安刑事2「なんだ、その態度は！」

若い方の公安刑事がレジのカウンターを叩く。

岩井「ガサでも何でも好きにしろ」

公安刑事2「何だと！」

岩井「警察に協力すんのは、市民の義務だ」

公安刑事1「あのタレコミは本当なのか？」

公安刑事2「ええ、そのはず……」

岩井「……さつさと済ませてくれよ？」

公安刑事2「テメエ……おい、そのカップル！」

雪奈「な、何でしょうか？」

公安刑事2「何だあ？その紙袋は？ちよつと中身を見せてみる？」

若い方の公安刑事は、雪奈が持っている紙袋を見せろと言ってきた。

雪奈「え……!？」

岩井「……ただのカップルのお客さん」だよ。なんなら防犯カメラでも見るかい？カメラならやり取りの一部始終、全部お見通しってね……」

雪奈はチラッと蓮と岩井を見る。ここは協力して何とか公安刑事達をやり過ごすしかないと考えた。

公安刑事2「とにかく、捜査に協力しろ！」

雪奈「はい、わかりました」

公安刑事2「その紙袋の中身を見せろ！」

雪奈「刑事さん、女の子の買った物を見せろってプライバシーの侵害ですよ？」

公安刑事2「何だと！」

公安刑事1「おい、やめろ。相手は子供達だ。それに、ここは取り調べ室ではないぞ」

公安刑事2「はあく」

岩井「刑事さん、これ以上うちの客を脅さないでくれよ」

公安刑事2「チィ…」

岩井「またおいで、気をつけて帰るんだよ？」

雪奈「はい、ありがとうございました」

蓮「ありがとうございました」

雪奈と蓮は、そう言つて岩井のプラモデル屋を出るのであった。

111204・5・04・雪奈の部屋。

岩井のプラモデル屋から、四軒茶屋に戻つて来て、ルブランに立ち寄つてから自分のアパートに戻つてきた。戻つて来た時は、すでに夜になっていたのだ。

雪奈は、岩井から渡された紙袋を自分の机に置く。紙袋の中身は、拳銃でなくCADである。

日本では、楽々とCADを買うことは出来ない。魔法師一族（十師族関係）や魔法が使えることを役所に届けている人間達だけに持つことが許されている権利である。

非魔法師は、CADを持つ事を許されない。CAD所持法、現実の銃刀法みたいなものだ。

雪奈「岩井からもらったCAD、パレス攻略の時に役立たせてもらおうとしますか」

雪奈は、結社から貰った小型導力パソコンで情報収集をやる。

日本の情報は、いつもの当たり障りのない情報が流れている。鴨志田の話が大々的に流れている。

雪奈は、特殊な回線で、世界のニュース情報を引き出す。夕刊ニュースにて。

【エレボニア帝国】↓パルム騒乱の罪で、ゴールド・マウンテン帝国支部の複数幹部、日本へ強制送還。

【クロスベル自治州】↓クロスベル騒乱の傷痕、中々消えず。クロスベル警備隊の一隊員の話。

【カルバード共和国】↓移民賛成派の集会で移民反対派のメンバーの何人かが暴徒化し、騒動となる。状況を重く見たカルバード共和国政府が、軍警察を出動させ暴動を鎮圧する。

雪奈は、エレボニア帝国のパルム騒乱を詳しく情報を出す。

1204・4・25日にパルムにて、ゴールド・マウンテン帝国支部に雇われた猟兵団、日本人移民街を守る自警団が、パルムを襲撃する。

襲撃軍は、トールズ士官学院の学院生や帝国軍情報局、鉄道憲兵隊、領邦軍により鎮圧される。

ゴールド・マウンテン帝国支部の複数幹部は、帝国軍情報局により拘束される。

帝国政府、日本政府間にて交渉を重ねて、帝国支部幹部を4日日本へ引き渡し。

雪奈「私達が、鴨志田と戦いを繰り返してるときに、ゴールド・マウンテン社の帝国支部が帝国のパルムで…騒動を…」

日本では、ゴールド・マウンテン社の負の実態を明らかにするような報道はない。鴨志田の事件だけを長々とやっているだけだ。

そんな中、雪奈のスマホに連絡が掛かって来た。掛けてきたのは、杏だった。

杏「もしもし、雪奈、私」

雪奈「杏、何かあった？」

杏「ううん、何も無いよ。私、ニュース調べてみたよ。鴨志田のやつ。結構大きく取り上げられてたね」

雪奈「そうね、日本だけではなく、西ゼムリアにまで、報道されてるわ」

杏「そ、そうなんだ。私が想像してた以上に反応が大きくて…ちよつとびっくりした

かな…でも、間違った事をしたとは思わない。もしかして私達が動いたから、みんなも勇気が出て、話せたのかなって…」

雪奈「そうね、私達が動いたから怖くて震えていた人達も勇気を出すことが出来たと思うかな」

杏「雪奈もそう思うんだ。でもそれってすごくくない？今まで考えた事もなかった！とにかく、成功したんだから、お祝いだよね！明日、渋谷駅に12時に集合ね。遅刻厳禁だよ！雪奈、金メダル、換金した？」

雪奈「金メダルは、ちゃんと換金したから、安心して」

杏「さっすが。店は期待してて。絶対みんな満足するから。それじゃあ、雪奈、明日ヨロシクね」

雪奈「私こそ、ヨロシクね、杏」

通話を切ってスマホを机に置く。モルガナは、今はいない。蓮を少し鍛えるために雪奈の部屋にいない。

雪奈「しかし、蓮って九重寺に入門したのよね…。強くなるためとはいえ…」

九重寺の九重八雲。大昔の忍者の末裔ではないかと言われている。雪奈が懸念しているのは、九重八雲がかなりの切れ者であり、蓮の正体や結社と繋がりを疑われないかと心配している。

雪奈「カンパネルラからは、九重八雲は信用たる人物だと聞かされるけど……」
雪奈は窓を開けて星空を見る。

雪奈「まあ、先の事は、蓮やみんなと考えれば良いかな」
雪奈は星空を見ながらそう考えるのだった。

7-7-5・05-祝杯。

11204・5・05・昼間・FLTプリンセスホテル。

ゴールデンウィーク最終日、雪奈、蓮、竜司、杏の姿は、十師族、百家が来るようなホテル、FLTプリンセスホテルにあった。杏が予約したのは、FLTプリンセスホテルだったのだ。回りの客層は、セレブのようなものばかりであり、普通の人間はいない。

FLTプリンセスホテルは、FLT社が設立したホテルである。司波龍郎が、深雪と深夏が双子で誕生した時に記念に設立したのだ。四葉家が最大のスポンサーではあるが。

テーブルの上に並んでいる料理も普段では絶対食べれない代物ばかり。蓮達は眼を輝かせていた。

雪奈はフルーツ系や野菜系を食べていて、蓮と竜司は、肉系、杏はスイーツ系を食べている。

雪奈達は普段では食べられないだけあつてガツガツと食べている。

杏「そういえば、学校に警察が聞き込みに来るらしいよ」

モルガナ「厄介だな」

雪奈「うーん、そこはなんとも出来ないわね。容疑者の務め先とか、矢面に立たされるし」

竜司「絶対、俺らの名前、出ちまうよ。鴨志田のことで、妙な噂されてるし…けど、学校のヤツら盛り上がってるぜ！『怪盗が本当に心盗んだ』ってな。マジで信じてはいないだろうが、中には割りと本気あんで感謝してるヤツもいる。見ろよ」

そう言うと、竜司は自分のスマホを雪奈達に見せる。

そこには「怪盗お願いチャンネル」と表示されていて、ファンサイトのようになっているようだ。

杏「怪盗お願いチャンネル？」

雪奈「『怪盗よくやった』【これで私も頑張られる】『勇気をくれて、ありがとう』」

竜司「ちよつと嬉しくね？」

杏「今まで自分の事で精一杯だったけど、こんな風に言われると、なんか不思議…」

蓮「確かに」

雪奈「そう言う風に言われたことなかったわ」

竜司「なあ、これからどうする？」

蓮「時間は大丈夫か？」

雪奈「杏、ここって1時間だけだよな？」

杏「うん、1時間だよ」

雪奈「もう30分は過ぎたと思う」

竜司「やべえ、急いで堪能しなとな」

杏「急がないとね」

竜司と杏は、共に料理を取りに行った。残された雪奈と蓮は話し出す。

雪奈「蓮は、こういうところに来るの、初めて？」

蓮「初めてと言われれば初めてかな」

雪奈「そうか。私は初めてじゃないかな。まあ、プライベートでは初めてだからね」

蓮「結社の任務？」

雪奈「蓮、良く結社の任務ってわかったわね。まあ、私の生い立ちを知ってるか」

雪奈は、回りの人間達を見ている。その目は、この中にもしかしたら母親を殺した犯人達が、いるのではという疑いの目である。

雪奈「うん、つついそう思ってしまうのよね。もしかしたら、この中にお母さんを

殺した犯人達がいるんじゃないかってね」

蓮「雪奈……」

雪奈「ごめん、ごめんね。蓮にまで暗くなる必要はないわよ。せつかくの祝杯を上げてるんだから」

蓮「俺も結社の人間だ。雪奈の敵は俺の敵でもあるから」

雪奈「蓮…ぷっ…それって口説いてる？」

蓮「い、いやそんなつもりじゃないから」

雪奈「うん、わかってるわ。蓮が軽い気持ちでそんなことしないのは、わかるから」

雪奈は、苦笑いしながら蓮を見ている。彼女の心は、雨宮蓮と出会った事で、少しずつ自分の中の氷が溶けていく感じがするのだ。そんな話をしていたら、杏と竜司が戻って料理？を持って来た。

杏「雪奈、スイーツを持って来たわよ」

竜司「ほらっ、蓮、肉を持って来たぞ！」

テーブルの上にスイーツ、肉がドサツと置かれる。

雪奈「スイーツと肉…偏りすぎてない？」

蓮「…だな」

雪奈「うーん、私達がスイーツと肉以外の食べ物を取ってくるわね」

蓮「ご飯系、魚系、野菜系がないな」

モルガナ「今から取りに行くのか？」

雪奈「バランス良く食べないかね」

杏「う…それは…」

蓮「時間も無いし、ぱっぱと取ってから食べるとしよう」

雪奈は、野菜と肉系、蓮は魚系とご飯系と帝国風朝ごはんを取ることにしたのだった。

111204・5・05・昼間・FLTプリンセスホテル。

雪奈、蓮、竜司、杏の4人は、FLTプリンセスホテルで、鴨志田戦勝利のお祝いを兼ねて祝杯を送ることに。FLTプリンセスホテルは杏が予約してくれたお店である。

だがそこは、セレブ御用達のホテルのようで、雪奈達は随分と浮いてるようにも見えたが、雪奈や杏がどこかのお嬢様にも見えなくもない。だから何とかなったのだ。

かくして短い時間であったが、雪奈達には贅沢な時間になった。普段食べることも出来ない素材で作られた料理を食べることもできたから、大変有意義な時間を過ごすことが出来た。

だがそんな有意義な時間に水を差す輩がいるのも実情である。

裕福な女性「ちよっとアレ見て…」

裕福な男性「多目に見てあげようじゃないか。普段、ロクな物を食べてないんだろう、きつと」

裕福な女性「親御さんの顔を見てみたいわ」

竜司「……ンダト」

雪奈「竜司、やめなさい」

竜司「だけど……！」

雪奈「……アノモノにサバキのテツツイをクダシタマエ……」

裕福な男性と女性、雪奈達の横を抜けて去っていく。雪奈は裁きの鉄槌をあのにかけた。かけたと言つても殺す魔法ではない。

後々に人前で、男性のズボンのベルトと女性のスカートのが落ちて大恥を書くことになる。

竜司は吐きそうと言ひ、蓮がトイレまで連れていく。残された雪奈と杏は世間話をしていたら、雪ノ下分家の勘当息子である雪ノ下隆信が現れた。

隆信「君達は、どこかの良家なのかい？」

杏「はあく？ なんなのアンタ？」

雪奈「ナンパのつもりなら、お帰りください。私達、間に合ってるんで」

隆信「間に合ってる？ 君達は何を言ってるんだ？ せつかく僕が話しかけてるんだ！ ハイハイと聞いてれば良いんだよ！」

雪奈「私達が知らない男性にハイハイと言うことを聞かないといけないんでしょうか？」

隆信「僕は、雪ノ下隆信だ。知らないわけがないだろ？」

杏「知らないわよ！アンタなんか！」

雪奈も杏も隆信に従うつもりはない。ここで怯んだら、なんのために鴨志田を改心させたのかわからなくなる。だから雪奈達は怯むわけにはいかない。

隆信「2人共、僕の女にしてやるよ！」

隆信は、杏の腕を掴む。

杏「ち、ちよ…何、掴んでるのよ！さわらないで！」

雪奈「杏を離さない！」

雪奈は隆信の前に出て抗議をする。すると隆信は雪奈を平手打ちする。平手打ちされた衝撃で、雪奈は転んでしまう。こんな騒ぎになっても周りの大人達は見て見ぬふりをしている。中には運の悪い2人の女の子としか見ていない。杏は雪奈の名前を呼ぶ。

杏「雪奈…！」

隆信「へえー、大人しそうな顔して、黒のショーツとか履いてるんだな。誘ってるんだろ、お前！」

そんなことを言いニヤニヤと笑いながら、雪奈のスカートの中を見ている。雪奈もあわてて足を閉じて起き上がる。

雪奈の表情は、恥ずかしさと怒りが込み上げている。だからそんなことを誤魔化すため雪ノ下降信を睨み付ける。

隆信「なんだよ、その目はよ！」

雪奈「貴方、そうやって女性を扱ってきたのかしら？雪ノ下家だから何？貴方自身が何かしたの？」

杏「雪奈……」

隆信「下級国民のくせに上級国民である十師族百家の人間に逆らうつもりか！」

隆信は握りこぶしを作って雪奈を殴ろうとする。しかし彼のパンチは雪奈に当たることはなかった。彼のパンチは、深夏の手の平で受け止められていた。

11204・5・05・昼間・FLTプリンセスホテル。

隆信のパンチは、雪奈に当たる事はなかった。隆信のパンチは、深夏によって防がれた。司波深夏、四葉家の次期当主候補であり、司波深雪の双子の姉である。本来ならリベールに留学しており、日本にはいないのだが、とある事情で日本に帰国している。そして彼女は緋色のドレスを身に纏っている。ロングの黒髪には炎をあしらった髪飾りをしている。

そんな深夏は、隆信のパンチを手の平で受け止めていたのだ。

隆信「……司波……深夏……！」

深夏「女の子を平手打ちして倒した挙げ句に、無理やり自分のモノにしようとして、断

れたから殴ろうとする……貴方、最低ね」

今まで、見向きもしなかったギャラリーがこちらを見て騒いでいる。

セレブ女「あの方は、四葉家のご息女の深夏様よ」

セレブ男「本当だ、深夏様だ、司波深夏様だ！」

隆信「くっ……」

深夏「今度は、私を殴りますか？別に殴って構いませんよ、貴方がそれで気が済むなら」

深夏は隆信の手を放してそう言った。隆信は、深夏がそう言ったがバツが悪そうで、このフロアから出ていく。そして深夏は雪奈と杏に頭を深く下げる。

深夏「あの者がお客様に対し大変な無礼を働いた事に対し深く誠に申し訳ありませんでした」

雪奈も杏も深夏の美貌に見とれていた。自分達よりも年下の彼女に。

杏「い、いえ……貴女に謝られると流石にね、雪奈？」

雪奈「ええ、そうね。でも貴女……ギャラリーから聞こえたけど、四葉家のお嬢様なんでは？」

深夏「アハハ、聞こえてましたか。ええ、その通りです。私は四葉家当主の長女の司波深夏と申します。訳あって父方の司波姓を名乗ってますけど」

杏「あ、そうなんだ」

雪奈「十師族：四葉家のお嬢様って大変じゃないんですか？」

深夏「うーん、大変かって聞かれれば、大変かな。四葉家を背負い、交渉によっては、日本を背負ってるから……」

杏も雪奈も驚いた。司波深夏という女の子は、すでに世界と戦っているんだなと感心していた。自分達は、鴨志田の件で立ち上がったばかりだ。

杏「本当に凄いなだね、深夏さんは」

深夏「ううん、別に私自身が凄いやないわ。周りの方々がふがない私を支えて下さってるからですわ」

杏も雪奈も十師族の事は好きではない。十師族に威張りちからかすみたくないイメージがついている。だが目の前の司波深夏という女の子は、そんな感じを微塵にも感じさせないものであった。

深夏「お二人のお名前を伺っても宜しいですか？」

杏「ええ、もちろんです。私は高卷杏です」

雪奈「私は緋里雪奈です」

深夏「高卷杏さんに緋里雪奈さんね、よろしくお願いします」

自己紹介が終わると、ホテルのスタッフが深夏を呼んでいる。

スタッフ「深夏お嬢様、お連絡が…」

深夏「わかりました。それでは杏さんに雪奈さん、有意義なお時間を過ごしてください」

深夏は、頭を深々と下げてから、杏、雪奈のいる場所から去っていった。

杏「…アハハ、深夏…凄かったね」

雪奈「そうね…自分の席に戻ろつか」

杏「そうね」

雪奈と杏は、自分の席に戻ることにした。

――

一方出ていく途中で隆信は、蓮と竜司とすれ違い様に暴言を吐いていた。

隆信「司波深夏…おのれ…許さぬ…お前は…あの男と麦野静江と同じようなことを…

！

竜司「なんだあれ？」

蓮「さあ？なんだろうね」

蓮と竜司は、雪奈と杏のところへ戻って行く。

111204・5・05・昼過ぎ・FLTプリンセスホテル

蓮と竜司が雪奈と杏のいる場所まで戻つて来た。2人は何だか仲良くして、それを見た蓮と竜司は何だか安心した。

雪奈も杏も親友と呼べる人物は少ないだろう。杏も親友は鈴井志帆しかいない。雪奈に關しても親友と呼ばれる人物はいない。それに陰キヤとして回りから見られている。普段の雪奈は、みつあみ、メガネというスタイルだから。

竜司も鴨志田の件以降親友と呼ばれる人間はなくなった。蓮に關しては、鴨志田のホラ情報のおかげで友達なんかできるわけがない。

全て腐った大人達のせい、苦しんでいる人達がいることを改めて感じた。

先程、司波深夏が言っていたようなことは自分達には出来ない。だが自分達は自分達なりに困つた人達を助けたいと思つている。

怪盗団として。怪盗団、身喰らう蛇(ウロボロス)として。

竜司「きっと俺達なら、やれる。困つてる人々を救える」

杏「そうだね。私達ならできるよね」

雪奈「やれると思う、ねえ、蓮？」

蓮「うん、やれると思う」

モルガナ「ああつやつてやろうぜ！それにワガハイもついているんだからな！」

雪奈「怪盗団の名前は、身喰らう蛇(ウロボロス)つて竜司と決めたから」

竜司「ああ、雪奈に年を押されて身喰らう蛇（ウロボロス）にしたんだ」

杏「身喰らう蛇（ウロボロス）か…何だかよくわからないけど、良いんじゃないかな」
蓮「俺もそれで良いと思うよ」

怪盗団の名前は、雪奈が身喰らう蛇（ウロボロス）付けた名前に決まった。

杏「名前は決まったしターゲットは誰にすんの？」

竜司「クソ大人なんて、嫌ってほどいやがるけどな。あえて大物だけ狙うつてのはどうよ？」

蓮「有名人か」

竜司「まあ、そんなところだ。大物ならニュースになんだろ？そしたら、俺達を信じるやつら、今よりもずっと増える気がしないか？」

モルガナ「リユージにしては、面白い意見だ」

雪奈「でも日本の報道だけじゃ圧力で報道されない。だから帝国、クロスベル、共和国、日本の報道番組、ニュースからターゲットを決めましょう。私達が世界で知られることになるば、世界の人々に勇気を与えることができると思う」

杏「そうだね。私達がもつと知られれば…みんなに勇気を与えられる…」

雪奈「ターゲットは、誰か構わずにやるのではない。みんなが賛成できるターゲットにしようと思う」

モルガナ「うむ、全会一致で決めた大物か」

杏「いいね、全会一致！なんだか掟っぽい…」

モルガナ「怪盗団の結成だぜ」

雪奈「みんな、これから頑張っていこうね」

蓮「ああ！」

雪奈「まだ話したいけど、ここの時間が終わりそうだよ」

竜司「マジか…仕方がない、話の続きは明日にするか」

蓮「そうだな」

時間切れになった雪奈、蓮、竜司、杏、モルガナは、満腹な気分のままFLTプリンセスホテルを後にした。

8-8-5・06↓5・07-鴨志田の後は …。

1-1204・5・06・午前中・雪奈達の教室。

クラスの人間達は、ゴールデンウィークが終わって、また学校がはじまるので嫌な感じであるようだ。担任の川上貞代が話しているというのに、ペチャクチャと話している。

川上「先週伝えた通り、今日の体育は中止。この時間は生活指導ねー。要は、事件については、むやみに言いふらさないこと…それだけ。鴨志田先生のこと、まだ警察が調査中だし私の口からはなんともね…ただ、いち教師として、生徒のピンチを見過ごしたの、申し訳なかったかなと…弁解じゃないけど、同僚として見る限りじゃ、鴨志田先生は普通の人だったから。正直、まだ実感わかないんだけど、人の顔って、1つじゃないってことね」

モルガナ「先生も大変だな」

雪奈「そうね……」

蓮「そうだな」

川上「そう言えば、昔、ちよつとだけ心理学をかじったことあるんだけどね。人間っ

て、心の中の無意識の部分に幾つも【別人格】を持つてるんだって」

モルガナ「別の人格？」

川上「あ、多重人格とは全然別の話よ？その別人格は、本人とは違う性別だったり、かけ離れた年齢だったりするもの。と言うか神話の神様とか、怪物さえ元々は人間のイメージなんだとすれば…その【別人格】を、実際に目で見れたら、1や2つは怪物の姿か知れない…」

モルガナ「ほほう…」

雪奈「確かにそれは言えてるかも」

雪奈が、過去に執行者として活動していた時に、そんな感じな事件に遭遇したことがあるのだ。善人っぽい事を言っていたが、裏では悪魔的な事をやっていて、本性は化け物じみたものであったのだ。

川上「あれ？今日は珍しく起きてるじゃない？ひよつとして今日、私、結構、タメになること言ってた？まあ、全部、本とか受け売りなんだけど。なんか昔の知識が今になつて腑に落ちた感じがするわ」

川上の授業は、そのまま時間は過ぎていく。

11204・5・06・昼休み・階段の踊り場

昼休み、階段の踊り場に雪奈、蓮、竜司、杏の4人は集まっていた。

竜司「怪盗お願いチャンネル」、地味に書き込み増えてんぜ…「いつも借りパクする友達を謝罪させたい」そんなのテメエで何とかしろっつーの！」

杏「ねえ、あの子達…」

雪奈「クラスから出てきたあの女子達？」

雪奈達は、話してるふりをして、2人の女子達の会話を聞く。

女子生徒1「怪盗が鴨志田の心を盗んだってうわさ、あれ、本当かな？」

女子生徒2「作り話に決まってるでしょ？怪盗なんてマジで信じてるの？」

女子生徒1「だけど、鴨志田、ああなったじゃん」

女子生徒2「飛び降り騒ぎ隠し通せなくなっただから、自分でゲロっただけっしょ」

女子生徒1「まあ、そうか。いるわけないか」

女子生徒2「それよりさ、こんなことで学校が有名になるの、マジで勘弁んだけど
！」

女子生徒1「進学とかに影響あったりするのかな…」

女子生徒の2人は、そのまま行ってしまった。

竜司「やっぱ、あんなモンなんだよなあ…けど、今に見てやがれ！誰でも知っていろいろな大物を2、3人とやってけば、信じるしかねえはずだ」

杏「で…その大物だけど、今のところ、メド無しなんだよね？あんた達、鴨志田に暴

力まがいの脅迫したって噂立てられてるし…」

雪奈「しばらくはおとなしくするほかはないかもね」

モルガナ「雪奈の言う通りだが、いざというときのために準備だけはしとおけよ」

竜司「俺の方は、大物の情報が転がってこねえか見ておくから」

杏「私も導力ネットで色々探して見るね」

竜司「しかし、せつかくの怪盗団結成したつつうのに、狙う相手が見つからなねえとはな」

杏「まあまあ」

雪奈「慌てる必要はないと思うよ。必ず助けを求めてくる人達が来ると思うし」

蓮「慌てずにやって行こう」

雪奈、蓮、竜司、杏は、それぞれに役割分担を決めたのだった。ちなみに雪奈と蓮は、取り引き仲間や世間的な中での情報収集となった。

111204・5・06・午後・授業中

雪奈達は公民の授業を受けている。クラスメイト達は、学内に刑事や警察官が来ていることを気にしている。ざわざわとしていて、教科担任はイライラした表情で黒板に文字を書いている。雪奈は真面目にノートを取っていく。

そんな時、雪奈達のスマホにチャットメールが届く。

竜司【マジで警察来てるな…玄関のところで見たぜ】

杏【私も見た！先生達と話してた】

蓮【俺もトイレの帰りに見たな】

雪奈【あなた達、今は授業中よ】

竜司【雪奈、ちよつとだけだからさ、マジで改心すげえな！】

杏【私達がやったってバレないかな】

雪奈【バレないでしょう私達がやったという証拠があるわけでもないし。それにあの世界のことやペルソナ能力なんて、普通の連中じゃわからないわ】

蓮【雪奈と言うおりだろう。心配はいらないさ】

杏は、蓮と竜司には、鴨志田を脅迫したという噂があるから、警察に調べられないかと心配している。

竜司【こつちの鴨志田は何も知らねえはずだろ？】

杏【でも…】

雪奈【万が一の時は、私が記憶改竄してあげるから安心して】

杏【雪奈さん、さらつと怖い事を言わないで】

蓮「記憶改竄って、雪奈の思い通りに記憶を書き換えるってこと？」

雪奈「そうね。あまり使いたくはない、魔法：禁術かな」

竜司「雪奈：スゲーな……。でもその必要はないかな。俺達は正しいことをしたんだ、レットルの一つや二つでビビんねーよ」

杏「それは、そうだけど」

竜司「二重生活するんだろ？まかせとけって！んじや、そう言うことで、雪奈、蓮もよろしく頼むぜ」

雪奈達は、チャットを終え、スマホをしまうと公民の牛丸が蓮に

牛丸「おい！雨宮！今、よそ見していただろう！それが人の話を聞く態度か!!」

牛丸が蓮に対してチョークを投げつけるが、蓮には届かない。蓮の斜め前の席である雪奈がチョークを左指の間で受け止めていたからだ。

雪奈「牛丸先生、雨宮君がよそ見していたからって、チョークを投げるなんて危ないですよ。他のクラスメイトに当たったらどうされるつもりですか？」

牛丸「緋里：」

牛丸は、苦虫を噛むような表情で雪奈を見ている。クラスの人間達は、委員長スゲー的な声上がる。

牛丸「ふん、緋里の言うことも一理ある。雨宮、次から気を付けることだな」

そんなことを言って牛丸は授業を再開することにした。

蓮は、雪奈に感謝しつつ、授業を真面目に聞くことにした。

11204・5・06・夕方・放課後・雪奈達の教室。

ゴールデンウィーク明けの授業が終わり、安堵したクラスメイト達が帰る中、雪奈と蓮は帰る準備をしている。

しばらくは、普通の学生生活をおくりながら次なるターゲットを探すことに。

怪盗団のメンバーは、それぞれの学生らしくしていくのである。そんな時、三島が蓮に話しかけてくる。

三島「やあ、見てくれた、「怪盗お願いチャンネル」

蓮「ああ、例のサイトか？見たよ」

雪奈「あ、あれって三島君が作ったの？」

三島が怪盗お願いチャンネルの事を言ったので、雪奈は蓮達の方へ向いて話しかけたのだ。

三島「緋里…ふーん、なるほどね。緋里の言うとおりで、あれを立ち上げたのは、俺なんだよね。あのさ！怪盗は君らなんだろ？」

雪奈「…！」

蓮「三島、顔が近い……」

三島「あ、ごめん……。いや、もし俺が思っているとおりなら、秘密にしておいた方がいいよな。鴨志田なんか利用されて、俺は君にも緋里にも酷いことをした……」

雪奈「……三島君、あれは……もう気にしていないから大丈夫よ」

三島「雨宮、緋里、本当に済まなかった。そのお詫びつてわけじゃないけど、俺に出ることがあつたら何でも言つてくれ！」

三島は、雪奈達に協力を申し出ている。だがそれは三島にも危険が伴うことになる。それだけではない、結社との繋がりもバレてしまう可能性もある。だからこそ断りを入れる、雪奈と蓮。だが三島は聞いてはくれなかった。それどころか、怪盗団の広報担当になると言つてきた。

三島「鴨志田以外にも悪い大人達はたくさんいる。怪盗団ならなんとかしてくれる……。絶対に一度で終わるはずがない。だから、悩みが集まるサイトを作ろうと思つたんだ。怪盗団の今後に期待してる。内心そう思っているやつ、多分沢山いる。だからあのサイトには、匿名アンケートも実装してあるんだ」

三島はそう言つて、雪奈と蓮にスマホを見せてきた。

そこには、【怪盗団を信じますか、信じませんか?】とある。

三島「俺は、いつかこいつを、支持の声をいっぱいにしたい。怪盗団の正義の行いの

役に立ちたいんだ！いいだろ？」

雪奈と蓮は、三島がそこまで考えてるとは思っていなかった。どうせ面白半分だと考えていたが、彼は彼なりの覚悟を決めているようだ。

雪奈「ふうく勝手にしなさい」

蓮「ああ」

三島「言葉とおりに勝手にさせてもらうさ」

こうやって、怪盗団の武器調達担当の岩井、医療担当の武見、広報担当の三島を改めて仲間にしたのだった。

三島「緋里、雨宮、じゃーな」

三島はそう言って去っていく。入れ違いに竜司と杏が入ってきた。

竜司「聞いてたぜ、今の。ったく声かけづれーのなんの」

杏「あのサイト、三島君のだったんだ」

雪奈「そうみたいね」

モルガナ「ワガハイ達のこと、バレてるんじゃないか？」

杏「たとえ、そうでもある様子なら大丈夫だと思っけどね」

雪奈「ええ、杏の言うとおりにね。彼は怪盗団の支持者、正体をばらすようなことはないでしょうね」

竜司「一応、後で【お話】しとくか」

モルガナ「しかし、【悩みが集まるページ】な…こいつは、意外と使えるかもだぜ」

雪奈「そうね、私もそう思ったわ」

竜司「…まあいい、ともかく【大物探し】だな」

杏「それが見つかるまでは準備ね。見つかったら、またパレス行くわけだから、装備とかも」

雪奈「杏の装備は私が揃えるわ、蓮は、竜司のやつお願いね」

蓮「わかった」

竜司「…!! あっ!!」

竜司が突然叫びだした。

杏「なにを急に?」

竜司「俺ら、じき試験じゃね!？」

杏「その様子じゃ、今回も酷そうね」

竜司「お前だつて、英語ばつかだろ…!？」

杏「何も出来ないよりいいじゃん!」

雪奈「あなた達…大物探しよりもまずは試験突破が最初の難問ね」

竜司「雪奈、教えてくれないか!」

杏「学年1位の雪奈様、教えて下さい！」

雪奈「うーん、わかったわ。赤点取られて、怪盗団の仕事が出来なくなったら、本末転倒だから。そうだ、蓮もどう？」

蓮「俺もお世話になろうかな」

雪奈達は学校の図書館に行き、彼女は、蓮、竜司、杏に勉強を教えることに。

みんなと勉強するのは、改めて復習の意味でも大いに役に立った雪奈であった。

111204・5・07・朝・登校中の導力列車にて

雪奈と蓮と鞆の中のモルガナは、とあるトレイン・ニュースを見ていた。

「トレイン・ニュースのコーナー。本日の主なトピックスは、バレエ部体罰事件、学校に事情聴取。学校側は、指導は教師に一任していたと説明。体罰の認識については改めて否定した。」

週明けから花粉注意報、例年より遅くて多いのが特徴。

《TOKYO・お散歩スポット》渋谷でアートに触れる！斑目展、来週から開催。

モルガナ「鴨志田の件、相当話題になってんな」

雪奈「当たり前でしょ。それだけの事をしたんだから」

蓮「そうだな」

モルガナ「まさか、ワガハイ達の仕業なんて、ここにいる全員誰も思っていないぜ……」
雪奈「当たり前でしょ。普通はわからないんだから」

そんな話をしながら列車に揺られながら学校へ向かう。

11204・5・07・夜・秀尽学園↓渋谷

勉強会を終えた雪奈達。蓮と竜司は、学園の近所に出来たラーメン屋で食べて帰るといい、雪奈と杏は渋谷駅で軽く喫茶店で過ごした。

その後、渋谷駅内で分かれた雪奈は、バイトの募集のチラシを見た。

何故、雪奈がバイトの募集を見ているかと言うと、情報収集のためである。

花屋、コンビニ、牛丼屋がバイトを募集をしている。どこが怪盗団の役に立つ情報が得られるか少し考える。

雪奈「さて、どこが一番情報収集がしやすいかな」

渋谷駅内から、渋谷駅前広場へ出る。すると遠くから男性の声が聞こえてくる。

くたびれたスーツを着た中年の男性が何かしゃべっていた。しゃべっているというより演説である。

演説をする男性「近頃、多すぎませんか？忘れ去られる事件が！列車暴走事故に謎の

意識不明現象、教師が乱れる学校…真相は不明ではないですか!?! 社会に蔓延する無関心。全く、政府、マスコミの怠慢です…君、熱心に聞いてくれてるね。政治に興味あるのかい?」

雪奈「政治にですか? 私は興味があります」

演説をする男「君、まだ学生…高校生だね?」

雪奈「はい、私は高校生ですね」

演説をする男「君のような…若い世代、特に女性に興味を持つて貰えるのは、嬉しいことだ。うーん、確かに若い人手を欲しい所だが、未経験者を雇うわけにはいかないな。申し訳ないね。また演説を聞きに来てくれると嬉しいよ」

雪奈「はい、また聞きに來ますね」

演説をする男「さて、今日はこんなところか。帰りはいつもの牛井屋だな」

雪奈は、演説をする男性に一礼をしてからセントラル街の方へ歩いて行った。

セントラル街の人氣が無いところで、雪奈は考えていた。

雪奈「あの駅前広場で演説していたあの男性…あの人の側でもしかすると情報収集ができるかな」

バイトの募集のチラシをもう一度見てみる。そして選んだ結果、雪奈は牛井屋に決める。牛井屋【俺のベコ】に連絡をする。

店の店員「はい、〔俺のべこ〕セントラル街店です。注文、何人分ですか？」

雪奈「いえ、注文ではなく、アルバイトのチラシを見て、連絡をしましたか？」

店の店員「ああ、バイトの応募ね。ちょうど良かった、人手不足だね。猫の手も借りたいところだったんだ。夜で良いんだよね？働ける日ならいつでも歓迎だ。じゃあ、待つてるから！場所は、セントラル街入ってすぐね。それじゃあ、頼むね」

雪奈「わかりました」

雪奈は、牛丼屋〔俺のべこ〕でアルバイトをすることが決まった。彼女はセントラル街の牛丼屋〔俺のべこ〕を目指した。

牛丼屋〔俺のべこ〕に着いた雪奈は、すぐに、店の責任者と思われる人物に更衣室に案内され、制服に着替えるように言われる。

牛丼屋〔俺のべこ〕の制服に着替えた雪奈は、バックヤードに呼ばれ、説明を受ける。どうやら先ほどの店の責任者と思つた人物は、エリアマネージャーであつた。

エリアマネージャー「ああ、待っていたよ、君が新しいバイト君だね？」

雪奈「はい、緋里雪奈と言います、宜しくお願いします」

エリアマネージャー「ああ、宜しく。それじゃあ、早速仕事に取りかかってくれ」

雪奈「い、いきなりですか？」

エリアマネージャー「…質問はあるかな？」

雪奈「あの仕事の説明とか聞きたいのですが？」

エリアマネージャー「お客さんの注文を聞いて、作って、配膳して、会計して、片付けて、後は店を掃除をする。料理はマニュアルがあるし、ほとんどがオートだ。素人も作れる。後は接客態度に気を付けて。他に質問はあるかな？」

雪奈「仕事の内容はわかりました。あと他の従業員の方はいないのでしょうか？」

エリアマネージャー「悪いが人手不足な上に経費削減が至上命令だね。君一人で切り盛りしてくれ。若いんだから、それぐらいは大丈夫だよな？その分給料は多めにしておくから！それじゃあ、私は別の店を見ないといけないから！後は宜しくね」

そう言つてエリアマネージャーは、バックヤードから出ていった。

雪奈「……あの仕事量を1人で……」

雪奈は鏡で自分の顔を見る。そして伊達メガネを取り、みつあみをぼうしの中に入れた。それから顔を叩いてから

雪奈「さてと、戦場に行くとしますか」

雪奈はそうやって、バックヤードから戦場へと向かった。

初日からかなりのハードなバイトであった。それでもそつなくこなした雪奈であった。

今日だけでも、学生からビジネスマン達の会話を聞けただけでも大きな成果でもある。

雪奈「この調子だと、この牛井屋で情報交換もできるかな……」

雪奈は、自分がシフトに入るときは、情報収集、情報交換の場にしようと考えている。1人で切り盛りしろとエリアマネージャーが言っていたし雪奈もそれを活用させてもらうだけ。

結社との情報交換もあるし、ちょうどいいと思ったのだ。雪奈はチラッと客の方向を見る。

それは渋谷の駅前広場で演説していた男性である。彼から何か得られないか考えていたのだ。向こうは今の牛井屋の店員が雪奈だとは気がつかないだろう。みつあみのメガネ女子ではない。

彼女は、どんぶりを片付けながら、彼を見ていた。話すチャンスは、今日は無かったが、渋谷の駅前広場と牛井屋に通い続ければ、会話を交わすこともできるはずだ。

雪奈「とにかく、チャンスを待つしか無いわね」

雪奈はこのあと、閉店までバイトを続けるのだった。

9-9-5・08-メモントスと初の依頼。

111204・5・08・昼間・渋谷駅↓メモントス。

雪奈達は、休日だというのに渋谷駅の出入口付近にいた。何故休みのにここに居るのかは、モルガナの提案から始まったのだ。

メモントス、ここは大衆のパレスのようなものだ。並々ならぬ欲望の持ち主ではない人間のパレスの集合体と言った方がいいか。

イセカイナビでここに来たのだ。

何故、雪奈（フィクサー）達がここに居るのかは、修行の一環でもある。

これから先、どんなパレスの持ち主が現れるかわからないから、力をつけておくのは当然のことである。

雪奈（フィクサー）は、このメモントスで修行をしていた。結社の第6柱が作り上げたと聞いている。どうやら盟主から力を与えられて作り上げたとも言われている。

フィクサー「みんな、どう…ついて来れてる？」

ジョーカー「なんとかな」

スカル「ああ、あれぐらいのシャドウ、どつてことはないぜ！」

パンサー「私もやれる！」

モナ「これぐらいで、根を上げてもらっては困る。これからどんな敵が来ても戦って勝たなきゃならないわけだ」

フィクサー「だけど、長時間は出来ない。すぐに中間テストもあることだしね」

スカル「……テストか……」

パンサー「テスト……」

スカルとパンサーが落ち込んだ表情をする。

モナ「…シヤドウと戦うのは、ここまでにして、怪盗お願いチャンネルの依頼でも見ているか？」

モナは怪盗お願いチャンネルを見ないかと、フィクサー達に言ってきた。シヤドウがないエリアで、スマホを操作する。

チャンネルに書かれているものを一つずつ見ていく。するとパンサーがあるものを見つける。

パンサー「元カレがストーカー化して困っています。名前は中野原夏彦…区役所の窓口係だつて……」

スカル「役所の奴がストーカーかよ……」

フィクサー「案外、そういう…公務員がストーカー化しやすいかもね。公務員として

プライドが高いだろうし」

モナ「手頃だな。よしその中野原のシャドウをメメントスで探すぞ！」

スカル「居場所ってどうやってわかるんだよ？メメントスを調べ尽くすのかよ？」

フィクサー「こういうヤツは、鴨志田のようにパレスは無くても、メメントスの中で異様な感じでいるものだから、わかるはずよ」

フィクサーは、魔力探知の能力を使い辺りを探す。するとある場所から、中野原のおぞましいオーラを感じた。

フィクサー「見つけたわ！モナ！例のアレに変身して！」

モナ「例のアレか！わかった！」

モナはフィクサーに言われてとあるモノに変身する。それはネコバスである。ジョーカーもスカル、パンサーも驚く。

フィクサー「メメントスの中を歩いて行くわけには行かないでしょ？」

パンサー「確かかって：モナってネコバスに変身できたんだ？」

モナ「ネコバスになるのは、朝飯枚だぜ！」

スカル「なんで、ネコバスなんだよ？」

ジョーカー「さあ？」

フィクサー「大方の人間達がネコバスって認識があるんでしようけど」

モナ「とにかく、お前達乗り込め！」

ジョーカー、スカル、パンサーは後ろの席に、フィクサーは運転席に座る。

パンサー「フィクサー、車の運転できるの？とか免許持ってるの？」

フィクサー「日本の免許は持ってない。けど国際免許は持ってるわ」

パンサー「日本の公道では、国際免許では運転出来ないんじゃない？」

ジョーカー「確かに運転は出来ないが、メモントスでその法律は通用しないんじゃない？」

モナ「法律はともかく、フィクサーは、前から運転している。大丈夫だ」

フィクサー「さあ、中野原のそこへ行くよ！」

フィクサーは、モナが変身したネコバスを運転して、中野原がいるエリアを目指した。

11204・5・08・午後・メモントス内

フィクサー達は、中野原がいる場所を見つけ、彼を問い詰めるため中野原のシャドウが待つ異質の空間に入る。

フィクサー「あれが、中野原のシャドウね！」

スカル「確か、区役所の窓口係がストーカーになったんだっけか？」

パンサー「どこまでワルか分かんないけど、誰かを困らせてんなら、何とかしなきゃ」

モナ「よし、まずは話してみる」

ジョーカー「わかった」

ジョーカーは、中野原のシャドウに近づき話そうとした。だが中野原のシャドウがこちらに気付き

中野原「誰だ、お前ら！」

パンサー「アンタがストーカー男ね!?相手の気持ち、考えたことないの？」

中野原「あの女は、俺の女なんだよ!俺の物をどう扱おうと、俺の勝手だろ!俺だって物扱いされたんだ!同じことやって何が悪い!」

中野原は、昔に物扱いされたから、今度は自分が女性を物扱いして何が悪いと言っている。自分が物扱いされたからと言って他人を物扱いしていい理由にはならない。

フィクサーとパンサーは、中野原を睨み付ける。

フィクサー「自分がやられたからって、人を物扱いするなんて…可哀想な人ね」

パンサー「フィクサーの言う通りよ!」

スカル「テメーみたいな野郎は、改心させなきゃならないよな!」

中野原「俺よりも悪いやつはいくらでもいるだろう!そうだ、マダラメ…俺から全てを奪ったアイツはいいのかよ!」

スカル「マダラメ?何を言ってるんだコイツ?」

フィクサー「マダラメ…斑目…?」

中野原は暴走しシャドウになる。モナの掛け声にフィクサー達は構える。

中野原「俺のモノを取るんじやねーよ！ やつと手に入れたんだ！ 世の中、強いものが生き残る！ わかるか、弱肉強食なんだよ！」

中野原は、フィクサー達に攻撃を仕掛けてくる。だが中野原の攻撃は単調で、鴨志田よりも弱く、フィクサー達4人の連携プレイにより中野原は倒されてしまう。

中野原「わ、悪かった、もう許してくれ！ 俺、執着心が止められなくなつた。悪い先生に使い捨てにされてさ……」

フィクサー「悪い先生？ マダラメって人かしら？」

スカル「アレか？ さつき言っていたマダラメってヤツ……」

中野原「また物みたいに捨てられるのが恐かつたんだ……」

中野原がそんなことを言い出した。

パンサー「そつちも身勝手なヤツのせいで、苦しんでいたつてことか。けど、だからと言つて関係のない女の人、巻き込むのはよくないよ」

中野原「本当、そう通りだよな。もうこの恋は終わりにするよ……なあ、お前らつて、【改心】させられるのか？ そしたらマダラメ……！ アイツも改心させてくれ。たくさんヤツが犠牲になる前に……」

そういうと中野原は光輝いて消えた。

パンサー「マダラメを改心？」

スカル「ん？なんだその光ってんの、なんだ？」

モナ「オタカラの【芽】だな。ほっとけば、パレスに育ったかもしれない。ジョーカー、報酬にいたいといけ！」

ジョーカー「わかった」

ここにて最初の任務を達成したのだった。

111204・5・08・午後・メンテナンス内

中野原を改心させた後、再びメンテナンス内を探索していた。そして下のエリアに降りるエスカレーターを見つけて下のエリアに降りる。

そこはすぐにホームのような場所に扉がある。ジョーカーとスカル、パンサーが驚いている。

フィクサーとモナが手を扉に置くと扉が開いた。

フィクサー「…やはり、皮肉にも第6柱の言う通りだったわね…」

モナ「そうだな…『親愛なる仲間と共に』だったか…ジョーカー達でも良かったってことだな」

ジョーカー「それは、合言葉なのか？」

ジョーカーが不思議そうにフィクサーに話しかける。

フィクサー「まああの第6柱がまともな情報をよこしたことがなかったから、半信半疑ではあったのだけど、まさか上手いくとは思わなかったのよね」

モナ「いい加減なガセばかりを掴まされた事が多いからな」

スカル「メメントスってさらに下のエリアがあるのかよ！」

フィクサー「鴨志田のパレスが無くなって、現実世界でも彼の噂は広がっている。それにメメントスは、大衆のパレスみたいなもの：変化が起きてもおかしくはないわ」

ジョーカー「なるほど、それで今から下のエリアに降りるのか？」

モナ「今回は行かないぜ。ただ確かめたかっただけだからな」

フィクサー「詳しくは帰りながらも教えてあげるわ」

フィクサー達は、再びメメントスの入り口に向かい歩き出した。

フィクサー達がメメントス入り口に来た時、その場所に人間らしき人物がいたのだ。

普通の人間ならメメントスに入ってこれないはずだ。だが実際に入口の場所にいる。

フィクサー達は、先にその人間に話しかけられて、話すことになる。どうやら名前はジョゼというようだ。そのジョゼは、絶賛人間を勉強中だそうだ。

彼が言うには、メメントスの中にある花を拾って来て欲しいと。その花のジュースを

飲んで勉強するようだ。

ジョゼも持つてきてくれるかわりに、フィクサー達にも必要なものをくれると言うようだ。それはジョゼがメモメントス内で拾った星。ジョゼ曰くホシは願いを叶えるもの。だからフィクサー達の願いを叶えてくれるそうだ。

ジョーカー達が半信半疑の中、フィクサーが返事をする。

フィクサー「ええ、それで構わないわ」

ジョゼ「交渉成立だね。黒髪のおねーさん」

交渉成立後、ジョゼはどこかへ行ってしまった。その後、フィクサー達もメモメントス内から現実世界へ戻っていった。

11204・5・08・夕方・渋谷駅前広場

メモメントスから渋谷の駅前広場に來た雪奈達は、先程のことを話していた。

メモメントスのこと

中野原のこと、中野原が話したマダラメのこと。

ジョゼのこと

ホシ：それは願いが叶うこと。

モナ「小物は、メモメントスで改心させられる事がわかった。目につく情報があれば、実戦練習のついでに退治するのもアリだな」

杏「他にめぼしいのはいなかったけどね」

竜司「大物を改心させて、怪盗団の名前を売れば、そんなもん山ほど書き込まれんだろ。俺らの目的はあくまでも【大物】だけ！早め大物を見つけねえとな」

雪奈「大物も見つけるのは良いけど、まずは試験を乗りきれた後ね」

竜司「……勉強しねえーとな」

雪奈達はしばらくしゃべった後、それぞれの家路に着いた。

そんな雪奈をずっと見ていた人物が一人いたのだ。

雪奈はそんな気配を感じながらも家路に着いたのだった。

111204・5・08・夜・ルブランの屋根裏

メモントスから帰ってきて、ルブランの屋根裏で、雪奈と蓮は中間テストの勉強を軽く見直しているところに竜司からチャットの着信が鳴った。2人ともスマホを取り出して見る。

竜司「つか中野原、余裕！これで次の大物やれば、俺ら絶対に目立つな」

杏「ちよつと！それじゃあ目的変わってるでしょ！」

竜司「目立たないと、弱いやつらにも勇気与えられねえーじゃん」

雪奈「下手に目立ってどうするのよ。私達は目立つために怪盗をやってるわけじゃな

いのよ。弱い立場の人達を助けるのが目的でしょう？」

蓮【雪奈の言ってることも竜司が言ってることも間違つてはいないと思う。ただ鴨志田の時のように大義名分が無いのはどうするかだな】

竜司【それってクビを突つ込むなつて話しか？困ってるヤツいたら助けんのがスジだろ？】

杏【私だつてそう思つてるよ。今回はストーカーのこと解決できて嬉しかったし】

竜司【つか、そのためのペルソナだろ？雪奈も蓮だつてそう思うだろ？】

蓮【ああ、そう思っているさ。だから助けたい】

雪奈【まあ…そうね】

杏【それも私と同じ】

竜司【あんま迷っているヒマはねえぞ。マダラメつても気になるし】

杏【わかった。でも調子に乗るのはダメ。目立つのも止めてよ。テストで全部赤点とか】

竜司【やべー！勉強の続きをしないと！そう言えば、アレホシだっけ？ジョゼがくれたヤツ…】

雪奈【竜司、そんなズルは駄目よ、ちゃんと自分の力でやりなさい！】

杏【雪奈の言うとおりよ、自分でやりなさいよ！】

竜司「赤点回避だけでも」

雪奈「駄目に決まってるわよ！」

竜司「へーい」

雪奈と蓮はスマホを制服のポケットにしまった。

雪奈「全く竜司は、楽な方ばかり考えて」

モルガナ「まあ、竜司だからな」

蓮「アハハ。それで、結社からは何も連絡はないんだよね？」

蓮は真剣な表情で雪奈を見ている。

雪奈「別に結社からは何も無いわね。私と蓮は、ある程度自由にやらせてもらってる

わけだしね」

蓮「そうか。なら良いんだが」

蓮は自分の椅子に座る。そして改めて屋根裏部屋の置物を見る。明らかに自分の物

ではないものがある。

姿見の鏡、化粧台、1人が着替えられるようなエリアにカーテンが引かれている。

蓮「雪奈、これは一体…？」

雪奈「ああ、これね。貴方がマスターに呼ばれていた時に、軽く持って来て、設置し

たわ」

蓮「設置って……いくらなんでもこれはまずいのでは？」

モルガナ「安心しろ、蓮。その雪奈が設置ヤツは、他人には見えない。雪奈が魔力で作りに出したものだからな」

蓮「そ、そうなんだ」

雪奈「私の部屋よりこっちにいる方が都合が良いと思つてね。それに私は、蓮を信用してるからね」

蓮「そうなんだ」

雪奈「私は少し勉強するけど、蓮はどうするの？」

蓮「俺はちよつと銭湯行つてこようと思つてる」

雪奈「そう？じゃあ行つてらっしゃい」

蓮は、自分の銭湯の道具を持って近くの銭湯へ行ために、下へ降りていきルブランの扉が開きそして閉まった。

雪奈は蓮が帰ってきてから、転移で自分の部屋へ戻り銭湯へ行くことにしたのだつた。

10-10-5・09-次なるターゲットは。

雪奈 side

11204・5・09・朝・とある駅のホームにて。

ここ最近、花粉症注意報が発令されている。別に雪奈は花粉症ではないが、花粉症で悩んでいる人々を見たぐらいだ。

だが、雪奈は別の悩みができてしまったのだ。誰かに見られているような感じだ。どこの刺客かと思いいどりをキョロキョロしてみたが、殺気を出しているような人物は見当たらない。

ここが戦場なら、引きずり出すことも可能だが、ここは戦場ではない。どうしたものかと考えていたら蓮と杏がやって来た。

杏「雪奈、おはよー」

蓮「おはよう、雪奈、どうかした？」

雪奈「うーん、別にどうかした訳じゃないけど、なんか誰かに見られているような感じがして」

杏「見られる?」

蓮「ストーカー？」

杏と蓮は、回りをキョロキョロし始める。だが怪しい人物は見当たらない。

杏「特別怪しい人物はいないみたい」

蓮「ああ、いないね」

雪奈「…ごめん、2人共。私の勘違いかもしれない」

モルガナ「雪奈、勘違いって…それで良いのか？」

雪奈「うん、いいのよ。それより学校へ行きましょう！」

そして乗り換えの導力列車が来たので、雪奈は乗り込む。

杏「一応、気を付けましょ、蓮？」

蓮「そうだな」

杏と蓮はそう言って導力列車に乗り込んだ。

111204・5・09・午前中・秀尽学園・雪奈達の教室。

雪奈達が授業を受けていると、スマホのバイブが鳴る。すぐさま雪奈、蓮、杏はスマホを取り、グループチャットに参加する。もちろん竜司からだ。

竜司「なんか学校の雰囲気が変わったよな？」

杏【鴨志田のこと？】

竜司【こんなおおっぴらに話してなかっただろ?】

雪奈【まあ、そうでしょうね。今までは、鴨志田に密告されるのが怖かった生徒達もたくさんいた。生徒同士が見張っていたようなものだった。でもその恐怖の大魔王がいなくなつて、密告される事がなくなつた。恐怖の対象がいなくなつて、みんな自由を手に入れた】

蓮【まあ、そんなところだろう】

竜司【誰か俺らに感謝してくれねえかな】

雪奈【あのね、竜司……。感謝されるためにやったわけじゃないでしょ?】

杏【雪奈の言うとおりよ。鴨志田は罰を受けたんだし。今回はそれでよしとしよ?】

蓮【ああ、そうしよう】

竜司【あいつ、これからどうなるんだろうな。有名人で犯罪者だろ? ずっと後ろ指指されながら生きていくのか?】

杏【だからって同情なんかできない】

雪奈【そうね。鴨志田はそれだけの罪を犯したのだからね。当然の報いね】

竜司【当然の報いだよな】

そして怪盗団のグループチャットを終えた、雪奈、蓮、杏は、再び授業に集中することにした。

雪奈 side

111204・5・09・夕方・放課後・雪奈達の教室。

蓮や雪奈が帰る支度をしていると、蓮のスマホの着信が鳴った。

どうやら三島からのチャットだった。

三島【新しい情報見つけた】

蓮【情報？】

三島【怪チャンにあつたんだけど、学校内にも噂で聞いてて】

蓮【学校内に？】

三島【ちよつと度か過ぎたイジメをやっているヤツが入るって】

蓮【なるほど】

三島【助けてあげたいけど、俺には無理だ。怪盗団なら何とかならないかな？ストー

カーも改心させたんだし余裕なんだろう？】

蓮【余裕ってわけじゃないが、何とかしてみよう】

三島【それでこそ、怪盗団だ。それでイジメてるのは、よく校門前で見かける茶髪の

ヤツで、高梨大輔ってヤツらしい】

蓮【高梨大輔ね】

三島【期待しているよ！】

三島とのチャットを終え、スマホをポケットにしまう。雪奈は蓮の方を向き雪奈「何かあったの？」

蓮「実は……」

蓮は、雪奈に三島からの情報を雪奈のスマホに送る。

【学内でのイジメに関する事案】

【イジメている人物、高梨大輔】

【いつも校門前で、不良仲間とたむろをしている】

雪奈「なるほどね」

モルガナ「どうする？アジトに集まるか？」

蓮「ああ、情報を共有したい。集まろう」

雪奈「わかったわ」

雪奈と蓮は、杏と竜司をそれぞれ屋上へ呼び出すことにした。

11204・5・09・夕方・放課後・屋上。

雪奈達は、屋上に集まった。

竜司「今日集まったことは、行くんだろ？メモントス」

雪奈「中間テスト前に行くわけないでしょ！」

杏「そうだよ、中間テスト勉強しないとね」

竜司「細げえことは気にするなって！勉強なんかやめてパーツといこうぜ！」

杏「行くって言ったけど、ターゲットもいないんだよ？」

蓮「まあ、ターゲットならいるんだが……」

雪奈「三島君からもたらされた情報だよ」

竜司「願ったりじゃねえか。せっかくだから今から行こうぜ！」

雪奈「……よっぽど勉強したくないんだね、貴方は……」

雪奈は、諦めのため息を吐いた。モルガナがみんなに

モルガナ「慌てる必要はない。中間テスト前にメモントスに行つて、テストは赤点で

したつてシヤレにならないからな、なあ竜司？」

竜司「な、何だと！」

杏「それで、その高梨大輔つて男子生徒にも予告状を出すの？」

モルガナ「いや、出す必要はない。パレスを持たない小物は、中野原の様にメモント

スでけりをつければいい」

パレスを持つ人間、鴨志田のような人間には、予告状で相手の潜在意識を変える事で、

オタカラを実体化させた。これがパレス攻略でのルールだ。

だがメモントスでは、いきなりターゲットを狙うだけで、大丈夫というわけだ。予告

状の代わりになるのが、三島が作った怪盗お願いチャネルである。

三島が、好都合なことに「怪盗が狙っているぞ」と書き込んでいるのだ。小物程度のターゲットにとっては、実質予告状と変わらない。それだけでしばらくはビクビクしてゐるしかない。

雪奈「おそらく、あの中野原も怪盗お願いチャネルを見てたんじゃないかな」

モルガナ「だからナビが反応したのかもな」

杏「それ、人任せでいいの？」

モルガナ「メモントスのシャドウは、欲望や個性がパレスの主ほど強くない。そこまではシビアじゃないってことだ。ただ小物だからって人選に手抜きはナシだぜ！ちやんと「アジト」で全会一致してからだ。さて！なら早速、集めたターゲット情報について会議するぜ！」

雪奈「わかったわ」

蓮「ああ、始めようか」

傲慢な茶髪のイジメっ子の情報が、モルガナから伝えられる。

茶髪のイジメっ子は、秀尽学園の生徒。

人格否定や恐喝まがい、イジメにしては度が過ぎていると思われる。

竜司「改心させるには充分のネタだな。さっそくやつちまおうぜ！」

杏「メメントス行きたいだけじゃないの？でもまあ、ほっとくわけにはいかないし、私も賛成」

蓮「そうだな。！俺も異議はない」

モルガナ「後は雪奈だけだぞ。お前が賛成なら全会一致だ」

雪奈「みんなやる気になってるのに、水を指すみたいで重苦しいけど、もう少し表で物的証拠を掴んだ方が良くはなかって」

雪奈は、蓮達にそう言った。彼女の念には念を入れるのは、執行者の時からやっていることだ。決して失敗が許されない仕事をしているから、用心深くなるのだ。

雪奈「ダメかな？」

蓮「確かに物的証拠は欲しいかもしれない」

モルガナ「相手に反論させさせないためにか」

竜司「でもよ雪奈、メメントスではかせれば良いんじゃないやねえか？」

雪奈「確かにメメントスではかせれば良いかもしれない。でも私はイジメの確たる証拠も掴んでいたいかな」

杏「私も雪奈の意見に賛成かな」

竜司「……うーん、雪奈の言ってる事もわかるんだが、イジメられてる側は、一刻も早く助けて欲しいものだ……」

雪奈「わかってるわ、竜司。貴方は優しいもんね」

竜司「：ちやかすなよ、雪奈：」

杏「あつ、竜司、赤くなってる！」

竜司「はあくなくてねーよ！」

こんな会話をしながらアジトでの怪盗団会議は終わった。

雪奈 side

11204・5・09・夜・牛丼屋〔俺のべこ〕

雪奈は、牛丼屋〔俺のべこ〕から、チャットで今日アルバイトに来てくれないかと連絡を受け行くことにした。中間テストの勉強は、やるだけはやったので後は試験日を迎えるだけだ。

そしてアルバイトに入ったら人が沢山来ていて、シフトに入る前から忙しい事がわかるものだった。

モルガナ「こりや、大変だなく頑張れよ、雪奈！」

雪奈「わかってるわよ、こんなもの執行者の仕事より楽だわ！」

すると数人の客から注文が入ってくる。

男性客1「納豆丼、大盛下さいー」

男性客2 「ホイコーロー丼、大盛ねー！」

男性客3 「おーい、牛丼、並みで」

女性客1 「並盛りでホイコーロー丼、1つ！」

雪奈は、手際よく丁寧に1つ1つの注文をこなしていく。複数の人間の注文にも冷静に対処していく彼女を見て、感心する人達もいた。そしてあの駅前広場で演説していた男性もやって来て、注文をしてくれた。店のお客が落ち着いてきた頃、あの男性が話しかけてきた。

スーツの男性 「大変だね」

雪奈 「はい、大変です」

スーツの男性 「人、増やしてもらえないのかい？度を過ぎた忙しきに見えたけど？」

雪奈 「ええ、人は増やしてもらえないですかね。経費削減のためにとかで……」

スーツの男性 「経費削減……うーむ、それが慢性的な労働環境ならなんとかしたいもんだね。うむ、覚えておこう。お代、ここに置いておくよ。ごちそうさま」

スーツの男性は、そう言う席から立って牛丼屋「俺のべこ」から出ていった。

雪奈 「ありがとうございました」

このあとも、しつかり働いた。そして勤務時間を働いた雪奈は、バックヤードでエリアマネージャーから、給金をもらう。

エリアマネージャーが去ったあと、モルガナが
モルガナ「雪奈、よく頑張ったな」

雪奈「まあね」

モルガナ「あの政治家と話せたみたいだな」

雪奈「少しね。まあ本当に社交辞令程度だけ」

モルガナ「そうか。さてと、帰るとするか」

雪奈「ええ」

雪奈は、牛井屋「俺のべこ」から出て自宅へ帰るため渋谷駅へ向かった。

11-11-5・10↓5・13-丸喜先生。

雪奈 side

111204・5・10↓1204・5・11・朝・秀尽学園・玄関にて。

中間テストの日の前日まで、竜司と杏に勉強を教えたり、蓮と勉強をやつて今日を迎えた。

いつものように、まあ前日には、新島生徒会長にうだうだと文句を言われたが。そんなことは言いとして、蓮と共に学園へ登校すると、掲示板あたりに人集りができている。

だるそうな男子生徒「めんどくさ……試験期間中に全校集会とか何考えてんだよ」

真面目そうな女子生徒「試験3日目だから明後日だね。また鴨志田先生の話かな？」

だるそうな男子生徒「勉強の邪魔をすんなよな、学校のクセに……なにすんのか知ってる？」

真面目そうな女子生徒「なんでも良いけど、私ら関係ないし。巻き込まないで欲しいわ」

モルガナ「試験期間中に全校集会か。雪奈達は大変だな」

雪奈「まあ…大変というより、めんどくさいよね…蓮もそう思うでしょ？」
蓮「そうだな」

雪奈と蓮は、そう言いながら自分達のクラスへ向かった。

そして雪奈達の中間テストという戦いが始まった。

11204・5・11↓5・12↓5・13

11204・5・13・午後・体育館。

中間テストの最中だと言うのに学園の校長が、全校集会を開く事を決めた。生徒達の心のケアと断言しているが、一部の生徒達は学園の面子のためにそんなことをしていると思っているのだ。

そんな中、校長の説明がむなしく体育館に響く。

校長「…例の事件以来、みなさんからの不安の声は、私の耳にも届いています。早急にみなさんのメンタル面のケアが必要と感じ、担当の先生に来ていただいた次第です。それでは、先生」

校長に呼ばれて、白衣を着た眼鏡をかけた男性教師がやって来た。女子生徒達の黄色い声援が飛び交い始めた。

丸喜「初めまして…」

黄色い声援で、丸喜の声が聞こえてこない。それだけではなく、どうやらマイクのス

イツチも入っていないようで、彼はマイクのスイッチをONにした。

丸喜「僕の名前は、丸喜 拓人と申します。よろしくどうぞ」

頭を下げる位置を間違えたようで、マイクに頭をぶつけ笑いが起きる。

丸喜「担当はカウンセリングです。堅苦しく構えなくて大丈夫だから。相談ならなんでも：あつ、お金（ミラ）の相談は困るかな」

校長は、無言のまま丸喜をマイクの位置からどける。

校長「ありがとうございます」

校長の話がちよつとあつて、全校集会は終わった。

全校集会が終わわり、雪奈、蓮、杏が教室に戻る途中、竜司に話しかけられた。

竜司「うつす。まさかうちの学校が、メンタルケアとか言い出すなんてな」

雪奈「国内ニュースどころか、世界に報道されてるからね。学校側も放置はできないと判断したのでしょうかね」

杏「そうだよね。西ゼムリアの方でも報道されてたっぽいし」

竜司「つか、なんだっけ、名前…？」

蓮「丸喜拓人、丸喜先生だよ」

竜司「ツツコミどころ満載すきじゃね？本当にカウンセリングできんの？」

雪奈「竜司、やめなさい」

雪奈がそう言ったのは、背後から丸喜がやって来たからである。

丸喜「どうも。緋里さんに坂本君に高巻さんにそれと雨宮君ね」

雪奈達は全員名前を知っているのか驚いてしまう。

竜司「なんで名前を知っているんすか？」

丸喜「うん、それは鴨志田先生と……色々あつた生徒は、前々から聞かされていたからね。雨宮君も転校早々大変だったね」

蓮「まあ、確かに大変でした」

丸喜「本当にそう思うよ」

竜司「つか、俺らに何か用っスか？」

丸喜「あ、そうだった、さつき集会でも言ったけど、君達カウンセリングに興味あたりするかな？」

竜司「別にねえスけど」

丸喜「えっ…!?!」

竜司「いや、〔えっ?!〕じゃなくて」

丸喜「思ったより、直球で断られたからさ……あ、今ならお菓子もあるよ? 食べ放題は、無理だけどそこそこは食べられるし、どうかな?」

雪奈「丸喜先生、私達は小学生ではありませんので、お菓子で釣られませんか」

丸喜「実は、鴨志田先生の事で、深い関係性を持つ生徒は、必ずカウンセリングするように言われてね。一応、学校側の気遣いなんだけど……」

竜司「気遣いね……」

雪奈「……気遣いですか……」

丸喜は、中庭の方を見ながら雪奈達に話し出す。

丸喜「いきなり、見ず知らずの僕と話せと言われても、困るのは分かるよ。こういう強制でやつても意味はないし、せっかくなら、君達にもメリットが……そうだ！カウニングを受けに来てくれたら、代わりにメンタルトレーニング教えるよ。テスト前の集中力の上げ方とか、デートの時に緊張しない方法とかさ。どうかな？」

雪奈と蓮は、顔を見合せながら考えた。メンタルトレーニングで、怪盗団の役に立つ可能性や彼女の魔力や詠唱の速さ等を鍛えられる可能性を秘めている。そう考えるとメリットになるだろう。

丸喜「今なら、お菓子も……」

竜司「お菓子はもういいつつの！なあ、お前達どうする？」

雪奈「私は受けようと思う」

蓮「……俺も受けようと思うかな」

竜司「まあ、受けねーで面倒なことなりそうだしな」

杏「んーそうだね」

丸喜「本当かい？そうじゃあ、取引成立って感じかな。僕は保健室にいるから、都合のいいときにでも来てよ」

竜司「じゃあ、俺はこれで」

丸喜「うん、またね」

竜司と杏は先に行ってしまう。丸喜は雪奈と蓮に

丸喜「ありがとう。カウンセリングを受ける気になつてくれて」

雪奈「まあ、私達は受けなきゃならないだろうし」

蓮「そうだな」

丸喜「取り引きした分、君達の力にならないとね」

雪奈「丸喜先生、ありがとうございます」

丸喜と雪奈達は取り引きが成立したのだった。

竜司「雪奈、蓮、どうした？」

雪奈「ううん、何も……」

丸喜「引き留めちゃってゴメン。それじゃあ」

雪奈と蓮は、竜司と杏のいる方へ丸喜は保健室の方へそれぞれ歩き出し出したのだった

た。

雪奈 side

111204・5・13・午後・雪奈達の教室。

クラスメイトの人間達は、全校集会で紹介された丸喜の話を主に女子達がしている。話をしているのだが、担任の川上もいるのだが。

川上「はいはい、静かに。さっきの集会でも出たけど、カウンセリングのことで補足。今日の放課後から保健室で誰でも受けることができます。丸喜先生の赴任は、11月までだから受けたい人は、早めにね。受ける受けないのは自由だけど、その…学校側が必ずやだと判断した人は、こっちから声をかけるから」

川上が言っているのは、鴨志田と関係がある人間は、受けることは絶対と言っているようなものである。

それは、雪奈、蓮、杏、竜司は絶対と言っているのだ。

すると雪奈達のスマホの着信が鳴る。雪奈達は川上に気づかれないようにスマホを取り、グループチャットを見る。

竜司【お前ら、結局あれ受けんの？】

杏【カウンセリングのこと？】

雪奈「川上先生の話しや、私達は強制的に受けるのは決まってるみたいね」

蓮「そうだみたいだな」

竜司「丸喜には行くって言ったけどよ、やっぱメンドーだよな…」

蓮「行くしかないさ」

雪奈「そうね。拒否して学校側から睨まれたくないし」

杏「そうだよ、雪奈。とりあえず私、今日行ってみるよ」

雪奈「私も時間があれば行ってみようかな」

蓮「俺もそうしようかな」

モルガナ「学校側に目をつけられないようにカウンセリングを受けるのは間違いないだろう。いつ行くのかは、雪奈達に任せる」

こうして、杏は今日カウンセリングを受けることにしたのだった。雪奈と蓮も時間があるときに受けようと決めたのだった。

111204・5・13・放課後

雪奈と蓮が、教室を出ようとしたら、杏から着信があった。2人ともスマホを取り出す。

杏「カウンセリング行ってきたよ、雪奈と蓮はこれからでしょ？」

雪奈「うん、まあ、杏、カウンセリングどうだった？」

杏【うーん、思ったより嫌ではなかったかな】

雪奈【そうなんだ】

杏【とにかくさ、雪奈も蓮も行ってみなよ。丸喜先生、大人にしては結構話しやすいし】

雪奈【そうなんだね】

蓮【じゃあ、今日、行ってみるよ】

杏【じゃあ、また明日ね】

雪奈【また明日ね】

蓮【また明日】

杏とのチャットを終えた雪奈と蓮は、丸喜がいる保健室へ行くことにした。

――雪奈達の教室↓保健室

雪奈と蓮が保健室へ来たとき、保健室の前で丸喜と話している女子生徒がいた。どうやら先客がいたようだ。仕方がないだろう。杏がカウンセリングを受けてから時間が経っている。次の受ける生徒がいたとしてもおかしくはない。

ちなみにモルガナは、その辺りを散歩しているのことに。丸喜と話している女子生徒が雪奈と蓮に気がつき

すみれ「あ、緋里先輩、雨宮先輩、お疲れ様です」

雪奈「芳澤さん、お疲れ様」

蓮「お疲れ様」

何故、雪奈と蓮とすみれが知り合いかと言うと、すみれが不良達に絡まれていた時に2人で助けたことで知り合うのだが。

すみれ「先輩達も丸喜先生のカウンセリング、受けられるんですか？」

雪奈「うん、そうね」

蓮「そんなとこかな。芳澤も？」

すみれ「はい、丸喜先生、良い先生ですよ。私、先生が秀尽学園に赴任される前からお世話になってるんです」

丸喜「あれ？すみれ君と君達は知り合いなんだね。ってすみれ君、そんないいものでもないから、ハードルあげないでよ」

すみれ「私は、もう行きますね。緋里先輩、雨宮先輩、それじゃ失礼しますね」
すみれは、雪奈達に一礼すると保健室の前から去っていく。

丸喜「それじゃあ、保健室に入ろうか？」

雪奈「あのく2人いっぺんにカウンセリングを受けるんですか？」

丸喜「ううん、1人ずつだよ。流石に2人いっぺんにカウンセリングは出来ないから

ね」

保健室に入った雪奈と蓮。保健室の中は、どこでもある保健室の中と変わらなかつた。

カウンセリングは先にどちらから受けるのか、丸喜に聞かれると、雪奈から受けることにした。蓮は、近くのソファアに座り、スマホにイヤホンを付けて音楽を聞き始めた。

丸喜「緋里君、良く来てくれたね」

雪奈「私達の担任からも、確実にカウンセリングを受けるように言われたものですので」

丸喜「あつ、そうだったね。でもそんなに固くならなくても良いんだよ。いつもとおりの君と話したいからさ」

雪奈「わかりました」

それから雪奈と丸喜は、世間一般の話などをしながら喋っていた。その中にはちゃんとカウンセリングを交えながら。

丸喜「うん、なるほど。うん、ありがとう。緋里君の状況は大体把握できたよ。君は、中学まで他県に住んでいて、高校受験を気に東京に上京してきたんだね」

雪奈「そうですね。数年前に《母を事故死》で失ってから一人で生きてきましたから」

丸喜「その事は、学校側から聞いているんだ」

雪奈「ええ、私が入学時に学校側に説明しましたから」

丸喜「そうなんだね。あの君と話していてわかった事があるんだけど、君は自分の中と外にある現実できちんと折り合いをつけて生きているんだね。凄いことだと思うよ。大人だつて皆ができるわけではないから」

雪奈「……………」

丸喜「ほらっ人つてき、自分の中にある現実…こうありたいって理想があるわけじゃない？」

雪奈「……………確かにそのような理想は誰にでもあると思います」

丸喜「そうだね、テストでいい成績を残す自分、他人を助けて、役に立ちたい自分みたいなさ。けど外の現実、理想とおりにいかないこともある。多くの人はその内と外のギャップに苦しむんだ。誰しもがテストで100点を取れて、人を救うヒーローになれるわけではないからね。君に起きたことを思うと、苦しむどころか歪んでしまつても不思議ではないと思う」

雪奈「……………」

丸喜「けど君は、辛いはずなのに現実にまっすぐに立ち向かつているように見える。それが凄いと思った。それでも何か心の奥には何か秘めてる感じもするんだ。つて

会ったばかりのおじさんにこんなこと言われるなんて、ちよつと変かな？

雪奈「うふふ、確かに変ですよ。私ってそんな風に見えるんですね……」

丸喜「緋里君、……直球だね……。まあ僕個人の印象だから気にしないで」

丸喜が時計を見て申し訳無さそうに見る。

丸喜「さて……ごめん、少し長くなっちゃったね」

雪奈「いえ、とても有意義な時間でした」

丸喜「そうかい？ありがとうございます。君と話していると、時間や話が進んじやったてさ……。

あのさ、最後に1つ提案があるんだけど、聞いてもらえるかな？」

雪奈「提案とは？」

丸喜「僕はカウンセリングの他にやつてる事があるんだ。それはカウンセリングとは違う。心理療法のようなものについてなんだけど。人の心を知るための研究でね。上手く行けば、沢山の人を救ってあげられると思うんだけど、どうかな？」

雪奈「……沢山の人を救える？どのように？」

丸喜「ごめん、緋里君には、僕の話聞いてもらって、気づいたところや思った事を教えてもらいたい。頼むよ、君が気が向いたときとかでいいし、時間も融通するからさ……ほらお菓子も食べていいから！」

雪奈「……わかりました。私も何だかカウンセリングに興味が湧きましたし」

丸喜「ありがとう。見返りは、そうだな、とっておきのメンタルトレーニングを伝授するのはどうか？ 僕のノウハウを尽くした僕だけのスペシャルコースだ。努力次第で君の持つ潜在能力を最大限に引き出せるようになるはずだよ！」

雪奈「はい！ 私は構いません」

丸喜「よし！ 改めて取引成立だね」

雪奈と丸喜は、取引を成立させた。雪奈は、丸喜のカウンセリング等に興味が湧いてきたこともあるが、彼を味方につけるのも悪くないと思つたからだ。

丸喜「緋里君、連絡先を交換しない？ 時間の都合がついた時や相談したい事があれば、連絡するから」

雪奈「連絡先ですね、わかりました」

雪奈と丸喜は、連絡先を交換をした。

丸喜「さて、今回の見返りを渡さないかね、メンタルトレーニングを教えるよ。最初は、そうだな……」

雪奈は丸喜にメンタルトレーニングを教えられるように。そのお掛けで、雪奈の魔力は上がった。

雪奈の次の蓮も丸喜に会い、彼女同様にメンタルトレーニングを受けるようになった。

怪盗団のリーダーと参謀が丸喜のカウンセリングを受けることに。
後々に自分達の役に立つことになるのは、この時の2人にはわからなかった。

1 2 | 1 2 | 5 · 1 4 | 喜多川佑介。

雪奈 side

| 1 1 2 0 4 · 5 · 1 4 · 朝・とある駅にて。

雪奈は一人で駅の構内を歩いている。いつもなら蓮と行くはずだったが、先に行つてとメールを送つていた。

なぜそんなことをしたのかと言えば、最近自分自身に視線を感じる。いやつけられていると言つてもいい。そのストーリーカーの顔を見るためでもある。もし蓮と一緒に姿をくまます可能性もあつたからだ。単独行動をとつたおかげで、雪奈の思惑とおりに男はついてくる。

雪奈「やはり、姿を表したわね…」

雪奈は歩くスピードをあげ、駅のホームに急ぐ。

そこには、蓮、杏、竜司がホームで導力電車を待つていた。

雪奈「蓮、杏、竜司、おはよう」

竜司「おはようさん」

杏「おはよーって、雪奈、顔色悪いわよ?」

蓮「気分が悪いのか？」

雪奈「ううん、以前言っていたストーカーだよ…今日は駅に向かう途中からつけられていて…」

蓮、杏、竜司は、雪奈の周りをキョロキョロする。

杏「怪しい人物は見当たらないね…蓮、竜司はどう？」

竜司「別に、そんなヤツは見当たらないぜ」

蓮「怪しいヤツはいないな」

杏「隠れたのかな？」

モルガナ「……」

雪奈「…とにかく、導力列車が来ることだし、今日中間テストのラストだし急ごう」
導力列車が到着し、雪奈達は乗り込んだ。蓮と竜司、杏は、雪奈を守るようにして乗り込む。

雪奈達は、秀尽学園のある最寄り駅で降り、安心したのも束の間、男は降りてきていたのだ。

不安がる雪奈を見た竜司は、蓮と杏にとある作戦を伝える。それは雪奈を囿に男近づいてきたところを取り押さえることにした。そして作戦を実行する。

そして何も知らない男は、まんまと雪奈に近づいてきて、蓮達が前へ出る。

竜司「オイ、お前、俺達の連れになんか用か？」

杏「アンタ、雪奈のストーカー？」

??「なんだ、君達は？」

雪奈「貴方、ここ最近、私を付け回していたけど、そういうの迷惑なんですけど！」

??「つけ回す？心外だな……」

すると導力リムジンが、雪奈達の近くに止まり、導力リムジンの窓が開く。そして品のある老人が

??「やれやれ、いきなり車を降りたかと思えば、呆れるほどの情熱だな……結構、結構

……はっはっはっ……」

??「車から見かけて、追いかけてにはいられなかった。先生の着信にも気がつかないほど、けど良かった。追い付いた……」

雪奈「……………」

竜司「はあ？」

杏「はあ？」

蓮「言っている意味がわからない」

??「君こそ、ずっと探していた女性だ！ぜひ、俺の……」

雪奈「へえ…!？」

??「俺の絵のモデルになってくれ！」

雪奈達の頭には、???が踊った。

雪奈「モデル？」

??「俺は、今まで納得のいくものが描けなかった。君からは他の人にはないパッションを感じる」

モルガナ「何、雪奈をナンパしてやがる！マジ怪しいつてもんじゃねえ！」

竜司「いかがわしいスカウトじゃねえの？」

??「協力してくれるのか？どうなんだ？」

竜司「待ってて、お前、誰よ？」

杏「そうよ、一体誰よ！」

??「ああ、失礼、俺は洗星高校美術科の2年…喜多川佑介だ！」

佑介は、蓮と竜司をどかして、雪奈に近づいてきた。

佑介「俺は斑目先生の門下生で住み込みさせてもらっているんだ。画家を目指している」

雪奈「斑目…えっ斑目ってあの…こないだのカルバードの美術祭、メッセルダム美術祭で、最優秀美術賞を受賞したあの斑目画伯？」

佑介「そうだ」

竜司「知ってるの？」

雪奈「日本で一番有名な画家。カルバードのメッセルダム美術祭と言えば、映画祭と同じぐらいに名誉あることだね。日本で唯一世界に知られている画家とも言われているわ」

杏「……こないだメメントスで聞いた名前は…マダラメ…」

杏は小さな声で蓮と竜司にそう言った。すると斑目が

斑目「佑介」

佑介「す、すみません、先生。今戻ります」

竜司「あのじいさんがマダラメ？」

佑介は、雪奈の片手を掴んできて

佑介「明日から駅前のデパートで、斑目先生の個展が始まる。初日は、俺も手伝いに行くんだ。是非来てくれ！モデルの件、その時返事を貰えると……どうせ絵画に興味が無いだろうが、チケットは人数分、渡してやるよ」

雪奈は、チケットを佑介からもらうと内ポケットにしまう。

佑介「じゃあ、明日是非会場で！」

佑介は、そう言って導力リムジンに乗って行ってしまった。

竜司「わっかかりやすいヤツ…行くきじやねえよな？」

雪奈「私、絵画には興味があるから…ちよつと行つてみようかな…」

竜司「はあ？マジ!？」

蓮「みんな、急がないと遅刻するぞ」

雪奈達は、それぞれの導力腕時計を見て、4人とも駆け足で学校まで行くことになった。モルガナは、蓮の鞆の中で

モルガナ「喜多川佑介、雪奈を狙うとはいいい度胸だ！お前に雪奈は渡さないからな」
そう意気込んでいたのだった。

雪奈 side

11204・5・14・午後・渋谷駅内

中間テスト、計4日間を終えた。そんな雪奈達は、渋谷駅の構内にいた。

杏「ンー、終わったー!」

雪奈「終わったね、つて竜司は別の意味で終わつてそうだけど？」

竜司「ああ…終わった…蓮、お前はどうかだつた？」

蓮「やれることはやったかな」

竜司「裏切りモン!」

雪奈「裏切りモンって…蓮は当たり前のことをやっただけでしょ？」

竜司「てか、もう試験の話はやめにしようぜ。嫌でも来週、答案が返って来るんだしよ」

雪奈「…貴方ね…」

竜司「雪奈も…そう言わずにさ、終わったことよもさ」

竜司は、スマホで何かを見ている。見ているのは、怪盗お願チャンネルである。だがそこには目ぼしい情報も無ければ、書き込み自体も減ってきている。

モルガナ「一発屋で終わるのだけは、勘弁な」

雪奈「ジタバタしてもしょうがないでしょ」

杏「そうだよ、ってかどっかにランチにいかない？こないだのお釣りも残ってるし」

竜司「なら、俺、寿司がいい。それもうなぎ、国産のっ！」

雪奈「…ウナギとか寿司とか、食べれるほど余って無いわよ…」

杏「そんなに余るわけじゃないでしょ」

雪奈「…そうだ、斑目展のチケット！展は明日からか…」

モルガナ「まさか、あのユースケに一目惚れ？」

モルガナにそんなことを言われて、雪奈が

雪奈「違うわよ」

モルガナ「そ、そうだよな……」

雪奈「導力テレビの特番で見てた時、いい絵だなんて思ってたね……。それにタダ券があるしね」

雪奈は懐から佑介よりもらった斑目展のタダ券を蓮達に見せる。

雪奈「それにもしかしたら、メメントスで聞いていたのと関係あるかもだし……」

竜司「斑目……だっけか……」

蓮「気になるな」

モルガナ「うーん……」

雪奈「それより、私の分を差し引いたあと3枚、貴方達はどうするの？たまには芸術でも鑑賞してみる？」

竜司「げーじつ……ね」

モルガナ「こうなりや全員で行くぜ！芸術の鑑賞は、人間の魅力や品性を高める。芸術品の真贋を間違えう怪盗なんてダサイしな」

竜司「まあ、みんなで行くなら」

蓮「そうだな」

杏「雪奈だけに行かせるわけにはいかないしね」

雪奈「ありがとう、みんな」

杏「個展に行くなんてなんてなんだか大人になった気分…」

雪奈「アハハ：じゃあ明日、会場前で良いかしら？」

蓮「ああ、構わない」

竜司「わかった」

杏「うん、会場前に集合ね」

こうして、雪奈達は斑目の個展へ行くことになった。

雪奈 side

11204・5・14・夜・ルブランの屋根裏。

中間試験や喜多川佑介からのストーリーカーなんかがあったがなんとかなった。

雪奈達は、明日佑介からもらったチケットで斑目展覧会に行くことになった。

モルガナ「明日は、展覧会に行くことになったが、油断はするなよ」

雪奈「わかってるわ」

モルガナ「メモメントスで聞いたマダラメって名前も気になる…」

雪奈は、屋根裏の壁に設置されたホワイトボードに斑目の写真を張り付ける。そして弟子である喜多川佑介と元弟子の中野原の人間図を書いていく。

モルガナ「さすが、雪奈だな。ホワイトボードに調べた情報を書き込むとは」

雪奈「この方が良いと思つて書き込んだけど、良かったかな」

蓮「ああ、役に立つてるよ」

モルガナ「今日はお前達は疲れてるだろうから早く休め。リーダーや副リーダーが遅刻とかシヤレにならないからな」

雪奈「わかつてるわ」

すると雪奈のスマホと蓮のスマホのチケットの着信になる。2人とも出るが怪盗団のメンバーである杏からである。

杏「中野原が言ったこと気になる」

雪奈「マダラメの事？」

杏「マダラメつて本当に斑目先生なのかな？」

蓮「おそらくは……」

雪奈「私は斑目〓マダラメだと考えているわね」

竜司「俺もそう思う」

杏「やっぱり」

竜司「つか、マダラメなんて他であんま聞かねーし」

杏「そこもなんだよ、あの話が本当なら喜多川君つて悪い先生の弟子だ」

竜司「人のこと、物を扱いする先生……」

雪奈【喜多川君……ひどい目にあってるかも…】

竜司【こりや、調べた方はよさそうだな】

蓮【そうだな】

雪奈と蓮は、マダラメの事を調べるため、明日の斑目展で確認することを再確認をし、グループチャットを終えた。

そしてこの日を終えるのである。

13-13-5・15-斑目の個展。

雪奈 side

111204・5・15・昼間・斑目展。

この日は朝から雨が降り、じめじめした感じな日になっている。そんな中、雪奈、蓮、竜司、杏の4人は、今人気を博している斑目展へやってきた。そしてすぐさまあの佑介はやって来たのだ。

佑介「来てくれたんだね！」

雪奈「喜多川君：ええ、まあ」

佑介は、雪奈と蓮達を見る態度が全然違う。本当に来たのかという態度である。

佑介「本当に来たのか？」

竜司「テメーで券、置いてったんだろ！」

杏「そうよ！」

佑介「他のお客様の邪魔にならないようにな。さあ、緋里さん、案内するよ。俺の描きたい絵のことも、色々と話したい」

雪奈「みんな、また後で。(蓮、竜司、杏、そっちはそっちで調べておいて)」

雪奈は、そつとそう言つて佑介に連れられていく。それを見ている3人と蓮の鞆の中にある1匹。

モルガナ「喜多川佑介！雪奈に手を出したら許さないからな！」

竜司「つてか出てくんなつての！」

蓮「雪奈に言われたとおり、こつちも調べようとするか」

杏「そうだね」

竜司「マジでゲージツ堪能するのか…。帰る…」

竜司がそう言いかけた時、モルガナと杏が

モルガナ「雪奈が喜多川佑介と一緒にいるのに、帰るわけがないだろうが！」

杏「雪奈1人を置いて帰るわけがないでしょう！ねえ、蓮？」

蓮「そうだな、雪奈を1人にするつもりはない」

杏「そうだよね」

モルガナ「そうだよな、蓮！」

蓮達は、時間潰しで斑目展を見て回ることにした。

蓮達が見て回っていると、こないだ佑介と一緒にいたじいさんがいた。そのじいさんは、記者達に囲まれている。蓮達はそつとそこへ近づく。

インタビュアー「先生のイメージネーションには、いつも驚かされます。全て1人の人

間が描きだしたとは当店思えない縦横無尽の作風……いったい、どこからこれほどの着想が？」

斑目「そうですね、言葉で伝えるのは、なかなか難しいのですが、泉に1つまた1つと泡が浮かぶように、心のうちから自然と湧き出てくるのですよ」

インタビュアー「自然と……ですか……」

斑目「重要なのは、ミラや名声などの俗世から離れる事ですな。私のアトリエは質素なあばら家ですが、美の探求には充分なのです」

竜司「あばら家……？」

インタビュアー「なるほど……無心が内なる美を育ててくれる……と。それにしても巨匠斑目先生から「あばら家」なんて言葉が出るなんて」

斑目「ご覧頂ければ、わかりますよ。ハハハ……」

竜司「【あばら家】って言葉、確か……」

蓮「うーん……確か……」

斑目のインタビュアーに吸い寄せられるように野次馬達が集まって来る。蓮達は野次馬の圧力によりどんどんと端に追いやられるのだった。蓮達は何とか出口を目指すのだった。

一方雪奈と佑介は、日本画を鑑賞していた。

雪奈「日本画ってこんなに色々種類あるのね」

佑介「普通はもつと作風は限られる。でも先生は全てを……一人で、制作してる。特別なんだ先生は」

雪奈は全てをの後、ちよつと間があつたのを見逃せなかつた。だがそれが気にはなつたが、斑目がやつて来たからである。

斑目「佑介、ここにいたのか？」

佑介「先生！」

斑目「昨日の子だね。楽しんでもらえてるかな？」

雪奈「ええ、楽しんでいきます。上手くは言えないんですけど」

斑目「何かに楽しんでもらえる……。それだけで、我々画家は本望だ。いい絵になるといいな、佑介。では、失礼」

斑目はそう言つて去つていった。

雪奈「芸術家というのは、取っつきにくい感じだけど、斑目先生は違うし、親しみ安いのね」

佑介「ああ」

雪奈は、近くに展示されている絵の方へ行き

雪奈「こ、これだわ。直接来て見たかったのは」

佑介「……これが？」

雪奈「描いた人の怒り：分からないけど、熱い苛立ちを感じるわ。あんなに気さくで紳士的な人なのに、こんな絵が描けるなんて……」

佑介は、何故か不機嫌な表情になり

雪奈「どうしたの、喜多川君？」

佑介「な、なんでもない。こんな絵より……もっといい絵がある。さあ、こつちだ！」

佑介は、その絵の方へ歩き始める。

雪奈「喜多川君……」

雪奈は佑介のあの言葉に引かかった。師匠の絵をあんな絵と酷評するだろうか。尊敬している師匠に対してそんなことを言うだろうか。そんなことを考えながら、佑介に案内されながら絵を見て回った。

全てを見て回って後、佑介に絵のモデルの事を頼まれまくったが、なんとかかわして彼とは分かれた。

雪奈「蓮達、個展の会場にはいなかったし、まさか私を置いて帰ったとか？」

巨匠斑目画伯の個展だから人間が多いのはわかっているが、何も言わずに帰られるの

は気分が悪かった。不機嫌な感じになりながら、雪奈は帰ることにした。

雪奈 side

11204・5・15・昼間・渋谷駅内

蓮、竜司、杏は、渋谷駅のとある場所にいた。今日は雨だから外で雪奈を待つ事が出来なかったからだ。

竜司「オバチャンのヒジがモロ…」

杏「私なんかどさくさに紛れてお尻を触られたわ。マジ、最悪…」

蓮「2人とも災難だったね…」

竜司「けど、おかけで思い出したぜ。お前もわかってるだろ？」

蓮「導力ネットの書き込みだろ？」

杏「導力ネットの書き込み？」

竜司「まあ、聞けて」

竜司は、そう言うとう自分のスマホを取り出し導力ネットに書かれているものを見せた。

竜司「ほら、ここを見てみ」

蓮「なににな…」

杏「えーと……」

蓮と杏が導力ネットの書き込みを読もうとしたら雪奈が現れる。だが雪奈の周りには、どす黒い何かオーラが見える。

雪奈「蓮、竜司、杏、先に帰るんだ……。私に一言言ってくれても良いじゃない？」

雪奈のオーラに押されながらも

杏「ごめん、雪奈。お客さん達から押されて出口まで押されたのよ！」

蓮「それでどうしようかと思って、ここで待ってれば雪奈がくるだろうとね」

竜司「俺らは悪くないって、な、雪奈？それにこれを見てみるよ」

雪奈も導力ネットの書き込みを見る。

竜司「この書き込み……斑目のことかも知んねえ」

蓮、杏「!!」

雪奈「……………」

竜司「日本画の大家が弟子の作品を盗作している。導力テレビは表の顔しか報じていない。」だとよ……」

雪奈「……………」

竜司「最初に見た時は、なんとも思わなかったけど、【あばら家】で【斑目】だからな。【住み込みさせている弟子への扱いは酷く、こき使うだけで、絵など教えてもらえない。

人を人とも思わない仕打ちは、飼い犬をしつけるかのよう」

モルガナ「盗作に加えて、虐待ってどこか」

竜司「マジなら大スキャンダルだ」

杏「それって、喜多川君が書き込んだのかな？まさに弟子でしょ？」

さつきから黙り込んでいた雪奈が声を出す。

雪奈「喜多川君じゃないでしょうね。おそらく、斑目に潰され辞めて行ったお弟子さんのだれかでしょう。まあ中野原さん以外でしょうけど」

モルガナ「うーむ、雪奈の考えだとメモントスで聞いた「マダラメ」がああ「マダラメ」と同一人物かもしれないねえ」

雪奈「……でしょうね」

杏「雪奈、そこまで言える根拠って……？」

雪奈「まあね。色々喜多川君と話したり、行動をした時にわかったの」

蓮「わかった事って？」

雪奈は、佑介がとある絵に関してこんな絵だと酷評したこと。師匠の絵を弟子が酷評するの。その絵に不機嫌な表情を見せたこと。

竜司、杏がいることを踏まえ結社の執行者、カンパネルラから貰った情報は伏せた。

雪奈は佑介と分かれた後、カンパネルラと斑目の個展博で会ったのだ。

カンパネルラ「久しぶりだね、雪奈。リベールの作戦以来だね」

雪奈「か、カンパネルラ、なんでこんな場所に？」

カンパネルラ「グランドマスターにクロスベルに行くように言われてさ。ちよつと小旅行気分で日本に来たのさ」

雪奈「小旅行…日本に？貴方が用も無しにそのエリアには行かないでしょうに」

カンパネルラ「まあ…クロスベルの件と両立がどうかグランドマスターは言つてたかな」

雪奈「…：クロスベルの件と両立…。まさかあの件と両立で…」

カンパネルラ「ご明察。その時には、雪奈とその仲間のみんなには、手伝ってもらうらしいよ」

雪奈「わかつてるわ。その時は執行者として任務を全うするだけ」

カンパネルラ「まあ、それにしても怪盗団ウロボロスね…。結社の名前を怪盗団の名前にするなんてね。グランドマスターは、喜んでいたみたいだけど」

雪奈「私は、ウロボロスに誇りを持つてるわ。グランドマスターの為なら…」

カンパネルラ「はいはい、雪奈の覚悟は僕も知ってるから。雪奈、今、斑目を調べてるんでしょ？」

雪奈「カンパネルラ、何故それを？」

カンパネルラ「雪奈が斑目の弟子と話していたし、あのお仲間の子達も斑目の事を調べてたからね。それでピンつてきたのさ」

雪奈「……カンパネルラ……貴方、斑目の何か情報を知っているの？」

カンパネルラ「まあね。雪奈に話すくらいなら良いかな。あの斑目とか言う画家、とんでもない詐欺師だよ。自分自身では何も描いてはいない。弟子の作品を盗作して成り上がったようなものだからね」

雪奈「やはり……」

カンパネルラ「雪奈は勘づいたかも知れないけど、あの最後の弟子の作品も盗作してるよ」

雪奈はあの時に見せた佑介の表情がどうしても忘れられないのだ。あの憎しみというか悲しみとも言える表情を。

カンパネルラ「雪奈、気を付けることだね。色んな連中が斑目を狙っているようだからね。結社の立場は雪奈達に任せてるから」

そんな話をちよつと前にしていたのだ。その事を思い出していると杏が

杏「ねえ、雪奈、あのとときのシャドウにも聞いてみようよ？あ、現実の本人に聞いけば……」

竜司「どんな風に聞くんだよ？メモントスの事から説明すんのか？」

モルガナ「それに現実で表立って動いたらマドラマメ本人にバレる可能性もあるぜ」

杏「そっか、そうだよね」

雪奈「現実では表立つ必要はないからね。蓮は、斑目先生の事をどう思う？」

蓮「今までの論理からすれば、限りなく黒に近いな」

竜司「だろ。偶然にしては出来すぎている。こいつがクロなら、待つてましたの【大物】だろ？」

杏「まあ、そうだけど…ね」

竜司「そういや雪奈、モデルの話はどうなつてんだ？」

雪奈「モデルの話…まあ喜多川君から連絡はもらつてるかな。あと斑目先生のアトリエの住所とかね」

座り込んでいた竜司がニヤニヤとした表情で立ち上がり

竜司「住み込みつつつて言つてたな。ちようどいい。明日、行つてみようぜ。放課後、斑目ん家に行くぞ！」

雪奈「ち、ちよつとモデルまさか明日？急に言われても…」

杏「明日とか急すぎない？」

竜司「はあ？喜多川に話を聞きに行くんだよ」

雪奈「なんだ、話を聞きに行くだけね」

雪奈はちよつと胸を撫で下ろした。いきなり明日モデルをとまれても対応しきれないのだ。

明日の放課後、雪奈達は佑介に話を聞きに斑目邸を訪れることになった。

14-14-5・16-斑目邸へ。

雪奈 side

11204・5・16・午前中・雪奈達の教室。

昨日からの出来事で疲れている雪奈。佑介のモデルを今日やることを決められてしまったから、昨日の夜からソワソワしていた。

蓮やモルガナから万が一の時は、佑介をぶちのめす事を買って出てくれたのだ。だがそんなことにはしたくないのも事実である。

全ては斑目の事を調べるの事が目的なのだから私情は捨て去るべきなのに、今までやれてきたことが、蓮達と出会って出来なくなっている。そんなモヤモヤした気持ちで学校に来ている雪奈であった。

そんな中、午前中にカウンセリングの授業が始まっていた。先生はもちろんカウンセリングの丸喜である。クラスメイトの主に女子達が、真剣な眼差しで見つめている。

丸喜「こんにちは。スクールカウンセラーの丸喜です。カウンセリング以外でも、時々こうしてお話をさせてもらえるようになりました。話すのは心や精神が個人に与

える影響について、なんだけど：あまり肩肘張らずに、気楽に聞いてもらえると嬉しいな。さっそくだけど、みんなは「心」についてどれくらい知っているからな。心つて言うのは、身体に大きな影響を与えるものでね。やり方次第では、思い込みで病気も治せるっていうのも実証もあるんだ」

確かに病は気からと言われている。思い込みで強くなるような人間もいるのだから。

丸喜「じゃあ、雨宮君」

丸喜は、蓮を指名してきた。

丸喜「心の思い込みが身体に良い影響を及ぼすこの現象。なんて言うか知ってるかな？」

蓮「フラシーボ効果です」

丸喜「その通り、正解だよ。これは偽薬効果とも言ってるね。たとえ実際は効果のない薬でも、本人の気持ち次第で治療薬として効果を発揮するんだ。逆に悪影響だと思いついて服用すれば、本当にそうなってしまうこともある。これはノーシーボ効果と呼ばれるんだ」

蓮が正解を答えたため、クラス内の評価が高まった。

丸喜「今のは一例だけど、みんなの思う以上に、僕達の心を体は繋がってる。だから無理をせず心を休めてあげることが大切なんだよ。そしてその手助けを、僕にもさせて

ほしい。何かあったいつでも保健室においで」

こうして、丸喜のカウンセリングの授業は進んでいった。

雪奈 side

11204・5・16・夕方・放課後

秀尽学園↓あばら家（斑目のアトリエ）

学校が終わり、放課後の時間になると雪奈、蓮、モルガナ、竜司、杏の4人と一匹は、導力列車に乗って斑目のあばら家がある場所に向かっている。放課後だけあって、列車内は混み合っている。それでも何とか席を確保した雪奈達。

竜司「怪盗が列車に乗って移動とは……」

杏「導力列車が一番早いでしょ！ペット乗せても大丈夫だし」

モルガナ「おいこら！誰がペットやねん」

雪奈「モルガナ、あまり暴れないで」

モルガナ「雪奈、しかしだな」

雪奈はモルガナをヨシヨシと撫でた。それで気分を良くしたのかおとなしくなる。

雪奈「モデルなら、私よりも杏がいいと思うのだけどね」

杏「私？喜多川君は私よりも雪奈を選んだんだよ。画家には私達凡人にわからないセンスがあるんだと思う」

雪奈「そうかしらね」

竜司「俺が喜多川の立場なら、間違いなく雪奈をモデルに選ぶな。杏にない色気つてのが雪奈にはあるし」

杏「色気が無くてわるーござんしたね！」

蓮「竜司、杏、列車内だから静かにしよう」

蓮に言われて、大人しくなった2人。そんな感じで、渋谷駅からセントラル街の中を通って斑目邸を歩いていくことに。

セントラル街の先には、先の大戦の傷痕が残っているエリアに出てきた。そしてあばら家の斑目邸はすぐに目立った。周りがコンクリートの建物や洋式の住宅街が広がっている。逆に斑目邸が目立つ形になっている。

竜司「もしかして、アレ？」

雪奈「住所も合っているけど？表札は、ちゃんと【斑目】になってるし」

竜司「チャイム押してみろよ」

雪奈「私が？」

モルガナ「タライが落ちてくるかもしれない」

雪奈「モルガナ、ふざけないでくれる？」

雪奈達は、斑目邸の玄関にあるインターホンを雪奈が押す。するとインターホン越しに佑介の声がある。

佑介「どちら様でしょうか？先生は今は不在ですが」

雪奈「私です、緋里雪奈です」

佑介「ひ、緋里さん、いますぐ行きます！」

竜司「ひと、住めるんだ、ここ」

建物の中から走ってくる足音が聞こえてくる。そして引き戸が開かれる。

佑介「緋里さん……ってお前らもか……」

竜司「悪いけど、モデルの話じゃねえんだ。訊きてえ事があつてよ。斑目が盗作して
るってマジ？虐待もなんだろう？」

佑介「正気か？」

竜司「導力ネットに出てんだよ！」

竜司がスマホを佑介に見せる。

佑介「これ……？」

佑介は、いきなり笑い出したあと

佑介「くだらない！盗作もあり得ないが……虐待だと？虐待するほど子供が嫌いなら、住み込みの弟子なんか取るものか！それに今は、住み込みの門下生は俺一人。俺が無いと言うんだから、疑う余地はない」

竜司「お前が嘘ついてつかも知れねえだろ！」

佑介「そ、それは……下らない……。身寄りのない俺を引き取ってここまで育ててくれたのは先生だ!!恩人をこれ以上愚弄する気なら許さん！」

雪奈「喜多川君、本当にそうなのかしら？」

すると奥から斑目が出てきた。

斑目「佑介？どうしたんだ？そんなに大声出して」

佑介「こいつらが、根も歯もない先生の噂を！」

斑目「許してやりなさい。悪い噂を耳にして、彼女の事を心配して来たんだろう」

佑介「はい……」

斑目「まあ、この偏屈な年寄りが、万人に好かれているとは自分でも思わんさ」

雪奈「……」

斑目「横からでしゃばって、すまなかつたね。けど、ご近所の手前もある。ほどほどに頼めるかね？それじゃあ、失礼」

斑目はそれだけ言うと、この場から去っていく。

佑介「……非礼だったな、すまん」

蓮「いや、俺達の方こそすまなかった」

佑介「……そうだ、あの絵を見れば、先生を信じてもらえるかもしれない。先生の処女作であり代表作である【サユリ】だ」

雪奈「サユリ……」

佑介「俺が画家を志す、きつかけをくれた絵なんだ」

雪奈「キレイわね」

杏「キレイ……」

竜司「ゲージツわかんねえけど、これがすげえのはわかる」

蓮「そうだな」

佑介「緋里さんを初めて見たとき、この絵と同じ感動があった」

雪奈「私が？」

佑介「俺はこんな【美】を追求したい。君を描くことも、その一環だと思ってる。どうかモデルの話し……宜しく頼む。せっかく訪ねてもらったんだが、今日はこれから先生の手伝いなんだ。また日を改めて……それじゃあ」

そう言つて佑介は、玄関の中に入って行つた。雪奈達は玄関から離れた位置に
竜司「なんか、いいヤツじゃね、2人とも……」

杏「メントスで聞いた【マダラメ】は別人なのかもね」

雪奈「……」

竜司「せっかく、【大物】見つけたと思ったのによ……」

モルガナ「イセカイナビは？あれはどうなっている？」

蓮「イセカイナビ……これは」

竜司「おい、これ」

杏「さっきの会話を拾ったの？」

蓮「そうみたいだな」

雪奈「あの……斑目にもやはりパレスがある」

杏「あの斑目先生にパレスが？何で？」

モルガナ「【マダラメ】、【盗作】に【あばら家】か……これがキーワードみたいだな」

斑目一流斎のキーワードが、一気に埋まる。

竜司「つかこれ、マジで何なんだ!?! 本当にあのじいさんにもパレスがあんのか!?!」

モルガナ「入るには、最低限【本人の名前】と【場所】が分かれば良いんだっただな？」

雪奈「ええ、そうね」

モルガナ「あとはマダラメがあばら家を何と勘違いしているかだ」

杏「それ、鴨志田の【学校】が【城】的な？」

モルガナ「そういうこと。当てずっぽうでもいいから、言っていこうぜ」
 モルガナがあばら家が何と勘違いしているか言っていこうと言った。だが急に思い
 付くものでもない。

竜司「急にいわれてもよ…」

杏「取り敢えず【城】とか？」

アナウンス「候補が見つかりません」

竜司「じゃあ、【牢獄】は？」

アナウンス「候補が見つかりません」

竜司「ああつ、めんどくせえ！【刑務所】、【倉庫】、それと【教育指導室】！ついでに

【牧場】！」

アナウンス「候補が見つかりません」

竜司「か、かすりもしねえ」

モルガナ「出直すか」

杏「画家に関係する建物…か。素直に考えると…何だろ？」

雪奈「シンプルに言えば、美術館よね？」

アナウンス「ナビゲーターを開始します」

竜司「開始って、これって！」

雪奈「鴨志田の城の時と同じね」

雪奈達は、ナビゲーターによってパレスに案内されることになった。

雪奈 side

11204・5・16・夜・ルブランの屋根裏

斑目一流斎のパレスにて、少しの真相がわかった。斑目は自らの弟子を弟子とも思わず、盗作のためのだけにいかしていたようなものであった。斑目自身に絵の才能は無く、弟子から奪って栄誉を手にしていたに過ぎない虚飾でしかない人物である事がわかった。

これを得られただけでも良しとする。この日はこれでパレスから撤収したのだった。

雪奈「喜多川君が真実を語らない理由か」

蓮「それは、本人に聞くしかないな」

雪奈「だよね…」

すると怪盗団のグループチャットからメールが届く。

杏「恩人だから何でも許せるもんなのかな？なんかよくわからなくなってきた」

竜司「どした？急に」

杏「喜多川君の話では、斑目、問題なさげじゃない？」

雪奈「喜多川君の話ではだけどね」

蓮「祐介が本心で言ってる可能性が低いと俺は考えている」

杏「……斑目って悪いヤツとわかってるけど」

雪奈「鴨志田のように被害をあつてるのを見てないからじゃないかな」

竜司「まあ、確かにそこは鴨志田の時とは違うよな」

杏「極論かもしれないけど、どんな悪いヤツでも誰にも迷惑をかけてないなら……私達が出ていなくてもよくない？」

竜司「迷惑かどうかは祐介が決めることか？……まあそうだよな」

竜司「俺だったら絶対に許さねえけどな！」

雪奈「私もそんなヤツは許さない。許してはいけないのよ……」

蓮「真相を探ろう……」

杏「そうだね、悩むのは後でもいいか。雪奈、また明日モデルの話を頼むね」

雪奈「わ、わかったわ」

そしてグループチャットを終えて蓮と雪奈はくつろぐのあった。

15ー15ー5・17ーモデル。

雪奈 side

1ー1204・5・17・午後・雪奈達の教室

午後の授業中に雪奈は、佑介にモデルを件を連絡を入れた。その事をグループチャットで蓮達に連絡する。

雪奈【さきほど、喜多川君にモデルのこと連絡したわ。後は連絡がくるだけね】

蓮【そうか】

竜司【サンキュー、雪奈】

杏【ありがとう、雪奈】

雪奈【絵のモデルって何をすれば良いのかな？】

蓮【ヌードモデル…？】

雪奈【ぬ、ヌードモデル…!?!】

雪奈は、蓮がヌードモデルとか言ったせいで、声を出しそうになったが、ぐっと押さえた。

竜司【蓮、ヌードモデルとかありえねえだろ。もしやってきたら佑介のヤツを殴るか

もしれねえ」

杏「あんたが殴ってどうするのよ」

竜司「冗談はさておき、肩肘張らなくてもよくね？俺達の目的は斑目のウラを取るためのモデルだしな」

雪奈「肩肘を張らずにか…ありがとう、竜司」

竜司「まあな」

雪奈「喜多川君の話し方だと個人的なモデルって聞いたし、彼から返事きたら、みんなにも報告するね」

雪奈は、佑介から連絡が来れば報告することを約束し授業に戻るのであった。

11204・5・17・夕方・秀尽学園・中庭の休憩スペース

雪奈は、蓮、竜司、杏の3人に佑介からモデルの件の連絡があつた事を報告した。そして中庭の休憩スペースで話し合うことにした。

雪奈「喜多川君から返事がきたわ。今日の放課後、来てほしいって」

竜司「そりゃ願つたりだ。最速で予定に入れやがったな、アイツ」

雪奈「パレスで見たこと、本当かどうか喜多川君に確認しないとね…みんな静かにあそこに新島先輩がくるわ」

モルガナ「雪奈の言うとおりで。あそこにいる」

雪奈とモルガナの視線の先には、新島生徒会長が三島を尋問しているところである。

竜司「うわ、今日は三島が捕まってんのか？見つかつたら面倒だな、向こうからバラバラに帰ろうぜ」

雪奈「そうね、その方が良いわね」

蓮「わかつた」

雪奈達は、新島生徒会長をさけるためにバラバラに学校を出ることにした。

雪奈達は、いつもの場所に来て佑介の事を考えていた。佑介は、斑目の本性を知っているのではないか。知った上で斑目を庇っているのか。それは佑介が斑目に弱味を握られていてそうするしかないのかと。いずれは佑介自身に聞いてみないとわからない問題である。それと佑介は、雪奈がモデルの話をしたとき、かなり嬉しそうにしていた。場が和み始めたら、斑目の話をすることに決めて、斑目邸を再び目指した。

雪奈 side

11204・5・17・放課後・斑目邸

雪奈達は、再び斑目邸に赴く。それは佑介の絵の依頼を受けたからである。ただ受けたのではなく、斑目の事を調べるためである。ただ簡単に佑介が斑目のことをはなして

くれるかはわからないが、佑介の依頼のモデルをしないと始まらない。意を決して雪奈は向かうことにしたのだ。

斑目邸に到着すると、佑介に斑目邸の中に通され、佑介の部屋へ通された。ただ佑介は、蓮、竜司、杏が来ていることに不満のようだ。

佑介「緋里さんだけだと思ってたんだがな」

雪奈「二人きりだと緊張しないかな？」

竜司「監視だよ、お前が雪奈に変態な行為をしないためにな」

佑介「妙な勘繰りはやめてくれ。彼女に異性としての興味は一切無い」

杏「えっ!？」

雪奈「それはそれで傷つくな……」

佑介「いや、何か問題でも？」

佑介は至って普通に言っただけで返してきた。

雪奈「別に問題はないかな」

雪奈はちよつとカチンときていた。エロチックな気持ちで見れても困るが、全然異性に興味がないと言われるのも複雑な気持ちである。

佑介「じゃあ、始めよう」

佑介は筆を取り、絵を書き始めた。絵を書き始めた佑介は、書くことに没頭しており、

雪奈の話し声は届かない。竜司が佑介を呼ぶが彼には届いていない。

雪奈「ダメね、これ」

モルガナ「予定と違うぞ！油断させといて、とつと事情言わすはずだろ？」

竜司「こうなんなるなんて分かるかよ。終わるまで待つしかねえな。マジ面倒くせえ」

モルガナ「ワガハイ、別の部屋の外に出てみようかな」

蓮「それは構わないが、見つかるなよ」

モルガナ「ふつ、誰に言っている。ヒマすぎるからな。あちよつと偵察でもしてこよう」

そう言うモルガナは、部屋から出て偵察に出る。斑目邸の隅から隅まで見ていたら、妙なふすまがあるところまでやって来た。

モルガナ「妙に派手なフスマだな…。それにアレは鍵か？フスマにゴツイ鍵…何が入っているんだ？」

モルガナはちよつと調べることにした。一方の雪奈達は。

竜司「終わった？」

佑介「ダメだ」

竜司「は？」

雪奈「私じゃやっぱりダメだったかな？」

佑介「いや、違うんだ。ただ：今日はちよつと調子が出ない。悪いが日を改めさせてくれ」

竜司「ふざけんな！何時間待たされたと思つてんだよっ！」

竜司が立ち上がると、蓮と杏も立ち上がる。そして最後に雪奈も立ち

雪奈「ごめんなさいね、今日はお話があるのよ」

竜司「お前んとこの先生の噂だよ」

佑介「またそれか？」

雪奈「私が個展で見たあの絵、本当は喜多川君が描いたんじゃないの？」

佑介「それは……」

佑介はみんなから視線を外す。何かやはりあるなと4人は思った。

雪奈「やはり、そうなんだね」

竜司「お前の先生、マジヤベエんだけど。弟子達をただの【物】だと思つてやがる。だから盗作だろうが、虐待だろうが、そんなのお構い無しつてワケだ。言つとくが俺達には、隠し事は通用しねえからな？」

佑介「ははっ、何を言つてるんだが」

雪奈「逆らえなかつたんでしょ？でも私達なら力に…」

佑介「やめてくれ。お前達の言うとおり、俺達は、先生の【作品】だ」

雪奈「…!!」

佑介「勘違いしないでくれよ？自分から着想を譲つたんだ。これは盗作とは言わない。先生は今、スランプなだけだ」

竜司「どういうことだ？」

佑介はそう言いながらも何かに耐えながら話している。それがわかっているから雪奈達は

雪奈「喜多川君」

竜司「出てけばいいだろ!？」

杏「ちよつと竜司…」

竜司「弟子にもみんな逃げられて、それでお前1人つて事じゃねーのかよ!？」

佑介は竜司から言われた事に頭に来たよう

佑介「弟子が師匠を…助けて何が悪い!?!被害者などどこにもいない!身勝手な正義を押し付けるな!」

蓮「身勝手な正義…か。喜多川は、被害者はいないと言うんだな？なら他の弟子達は何故居なくなつたんだ？」

佑介「俺は、弟子として先生を支えている。それが何がいけない？二度と来るな。次は迷惑行為で訴えてやる」

竜司「待てよ！まだ話は済んでねえんだよ！」

佑介「じゃあ、仕方がないな」

佑介はスマホを取り出して警察に通報しようとしている。

杏「まさか！」

佑介「今日はモデルをお願いしたんだ。そもそも他の3人は呼んだ覚えはない！」

竜司「んだとコラ！」

雪奈「竜司、やめなさい。警察に通報されるつもり？」

佑介「通報はやめておく。ただし条件がある」

雪奈「条件？」

佑介「緋里さんにモデルを続けて欲しい」

雪奈「でもさつき違うって言ってたよね？」

佑介「あれは、俺が無意識に君に遠慮してしまっていたから……けどけどもう心配しなくていい。君が全てを曝け出してくれるなら……俺も全身全霊をかけて、最高の裸婦画に仕上げてみせる！」

佑介は雪奈にとんでもないことを言い出した。裸婦画と聞いて、竜司と杏は驚き、蓮

はメガネをカチツとする。当然雪奈自身もかなり驚いている。

雪奈「裸婦!!」

佑介「理想のモデルで裸婦画を掛けるなんて!もちろんお前達は入れないし、今日の事も忘れてもらう。そろそろ先生に新作を提出しないと、いろいろ不都合がある」

雪奈「裸婦ラフらふ…」

杏「喜多川君、雪奈にヌードをさせる気!そんなことさせるわけにいかないでしょうが!」

佑介「それが条件だからだ」

雪奈「ヌードが条件って……」

竜司「それってマズくねえ!」

佑介「個展の会期中なら、昼は先生も不在だし、ここを思う存分好きに使えるな…少し画材を足しておこう」

雪奈「ちよつと勝手に話を進めないで!」

佑介「もちろん待とう。君に合わせて、いつでも予定を空ける。個展が終わる頃までには来てくれ」

雪奈「ちよつと喜多川君!話を聞きなさいって!」

佑介「そろそろ、先生がお戻りになる。今日はここまでだ。緋里さん、連絡を待つて

いる」

雪奈「まだ話は終わってないから！」

佑介は、そう言うとう自分の机の椅子に座り何も話さなくなった。

竜司「おいどうするよ、蓮？」

蓮「向こうが雪奈のヌードをちらつかせてくるとは、計算外だったな」

竜司「ああ、全くだ、向こうが1枚上手だったぜ」

杏「どうすんのよ！これ」

雪奈「私はヌード……」

蓮と竜司は、帰る支度をしてから帰り始め、放心状態の雪奈を連れて帰ろうとした時、偵察中のモルガナが戻って来た。佑介に猫が何故家の中に？と思われたが、さっさと斑目邸から出ることにしたのだった。

雪奈 side

1-1204・5・17・放課後・斑目邸の近くにて。

雪奈「私、……ヌード、ヌードになるの……」

杏「頭、おかしいよ、絶対！このままじゃ、雪奈がヌードだよ!?!」

モルガナ「おのれ、佑介！よくも雪奈を！」

竜司「ヤツのあの言い方じゃ、『セミ』じゃなく『フル』だな…」

モルガナ「フル、フルヌード!!雪奈の!」

雪奈「フルヌードとか、私やらない!やりたくないわよ!」

竜司「つか、個展が終わる前に斑目を改心させれば、OKってことじゃね?」

杏「でも喜多川君は、斑目を恩人だと思ってる。改心させる必要、あるのかな?」

モルガナ「じゃあ、雪奈はフルに?」

雪奈「なりません!」

竜司「斑目だって鴨志田と変わんねえ。野郎は親のいない佑介を利用してやがんだぜ?他の弟子達と同じヒデ目に遭わされてんの見過ごせてのか?」

雪奈「私は…見過ごせない。ただ鴨志田の時、私も杏も耐えてきた。だから喜多川君のあの言葉もわからなくはないわね」

佑介の言った【それでいい】という言葉。被害者がよく言う台詞でもある。抵抗して酷い目に合うぐらいなら今の間までいいというやつである。

竜司「とにかく、ゼッター狙うべきだろ。斑目は待つてた【大物】だしよ。佑介の目も覚まさしてやろうぜ。俺らと同じになっちまう前にな」

雪奈「そうね」

杏「うん、そうだよね」

蓮「やろう」

モルガナ「まずは、斑目のことを調べないとな」

竜司「表沙汰になっていないこととか、まだまだあるかも知んねえし」

モルガナ「個展で忙しくなれば、パレスの中を調べやすくなっているかもな」

雪奈「……あと私のモデルのことも！新作を提出しないと不都合がとか喜多川君言っていたし。近々斑目の【作品】ってことでなんか発表とかあるのかも……」

竜司「じゃあ、雪奈の裸……世間に大公開ってこと!?!」

雪奈「……!!!」

雪奈が顔が真っ赤になっていく。

モルガナ「これはなにがなんでも個展が終わる前に斑目を何とかしないとな！」

竜司「さっそく、明日の放課後から動こうぜ。屋上はまた会長さんに見つかると面倒だし、集合は……そうだな渋谷の通路みてーな、あそこでいいか。斑目ん家からも近げし」

モルガナ「アジトを転々と変える……か。ワガハイ嫌いじゃないぜ」

怪盗団ウロボロスのアジトは、学校の屋上から渋谷の帝急連絡通路に変わったのだった。

16 | 16 | 5 · 17 | 5 · 18 | 中野原。

雪奈 side

11204・5・17・夜・ルブランの屋根裏。

雪奈と蓮とモルガナは、今日の事を話していた。

モルガナ「それにしても許せん！ 佑介め！ 通報を盾にして雪奈のヌードを迫るとは
！」

雪奈「ヌードとか…本当にやらないといけないのかな」

そんな話をしていたら、蓮のスマホが鳴る。かけてきたのは、三島であった。

三島「もしもし、俺、ちよつと良いかな？」

蓮「ああ、構わない」

三島「耳寄りな情報があるんだ」

蓮「耳寄りな情報…それは？」

三島「怪盗お願いチャンネルきっかけで、改心したってヤツから連絡をもらった。他にも改心させたいヤツがいるから、会えないかって」

蓮「改心させたいヤツって？」

三島「まあ、後のことは本人と話してよ。その、改心させたいヤツつててのが、相当ヤバイ奴らしくてね。導力ネット経由で名前を出すと、面倒なことになるかもしれないんだって、放課後渋谷駅で待たせておくよ。中野原つて男の人」

雪奈「中野原、あのストーカー依頼の。そして斑目の弟子だった人」

蓮「そうだな」

三島「向こうから声をかけるよう言つといたから。じゃあ、明日よろしく」

三島と通話が終わり、蓮はスマホをポケットにしまふタイミングで怪盗グループチャット呼び出しが鳴った。蓮はもちろん雪奈もスマホを取りチャットに参加する。

竜司「雪奈が言っていたことで調べていたら、斑目のことでヤバイことがわかった。盗作を断れなくて、自殺した弟子もいるんだと」

雪奈「ジャステイス通りの件だけではなく、他にもいるなんて」

蓮「それは本当か？」

杏「あの記者の人も斑目のことを調べてたよね。ありえない話ではないのかも」

竜司「死人だぜ。それに夕方、記者と話していた斑目の弟子が事故死したつてのだった。斑目が死に追いやつたに違いないだろうよ！日本のマスコミが報道しないのも圧力をかけてるに違いない！」

杏「喜多川君、何か知らないのかな？協力してくれると、すぐく助かるのに」

雪奈「今の彼に何を言っても駄目かもね。今日の事もあるから余計に警戒されると思うわ」

竜司「だよな、まあ、それは置いといて、斑目は許せねえけどな。つか明日集まろうぜ。初の新アジトだし」

杏「渋谷の通路のとこだよね。わかった、また明日」

雪奈「また明日ね」

蓮「ああ」

怪盗グループチャットを終えた雪奈と蓮は再び話をする。

モルガナ「竜司が言っていた噂が本当なら他にも被害者がいるはずなんだが……」

雪奈「そうね、カンパネルラから得たカルバード人のお弟子さんだった方は、カルバード共和国の裁判所で訴訟を起こしたみたい。だけど斑目が共和国の裁判所まで出頭するとも思えないわ」

モルガナ「だな、やはりワガハイ達が何とかするしかないだろうな」

蓮「俺達にしか出来ないことをやるだけだ」

すると雪奈のスマホの着信音が鳴り始める。どうやら夕方の女性記者からの着信である。雪奈は通話ボタンを押した。

大宅「もしもし、夕方に連絡先を交換した記者の大宅だけど、今話せるかな？」

雪奈「話せますが、何かわかったことでも？」

大宅「貴女に教えてもらった、ジャステイス通りの事件、ちゃんと調べたわよ。あたしが仕入れた情報を貴方のスマホにも送るわね」

【山田 真奈美―帝国支部No. 452】

【研究開発部所属―所属No. 231】

【七耀暦1203・2・15 入社日】

【七耀暦1204・3・03 退社日】

諸事情により退職する。

日本で亡くなった日が、七耀暦1204・4・05日である。日本の警察の内部の発表は自殺と断定し、世間向けには事故死として片付けている。

目撃者もいたのだが、全員意見を変えたり、居なくなったりしたのだ。警察もマスクもそのことには動かなかった。

雪奈「こんな情報をどこで？」

大宅「あたしの情報網を使ってやっと掴んだんだね。で、ジャステイス通りで自殺として片付けられ、世間的に事故死とされた被害者が山田真奈美。彼女も斑目の弟子だった人物。あたしが見せたものは、彼女が斑目の弟子を追放されてから、就職した会社ね」

雪奈【国内有数のゴールドデン・マウンテン社、その帝国支部に就職されたんですね】
大宅【そうみたいね】

蓮【彼女は、なぜ斑目の弟子を追放されているんだ？】

大宅【彼女は、斑目に盗作の疑いをかけられて、破門になつてゐるみたいね】

雪奈【盗作の疑い：!?!】

大宅【ええ、盗作の疑いがね。でもあたしは違ふと思うの】

雪奈【逆と言いますと？】

大宅【彼女は、なんなかの形で斑目の盗作を告発しようとした、だけど逆に斑目に嵌められ、逆に盗作の疑いをかけられて、斑目の弟子を破門され美術会からも追放されたとふんでいるわ】

雪奈【なるほど】

大宅【ここまででは、あたしの憶測と推理も入つてゐるから、真実かどうかはわからないわ】

雪奈【大宅さん、ありがとうございます】

大宅【また、なんかあつたら連絡を頂戴ね。待つてゐるから】

大宅はそう言つて通話は切れた。雪奈はスマホを制服のポケットにしまう。

雪奈【明日、竜司と杏にも説明しないとね】

蓮「そうだな」

モルガナ「斑目、予想以上にとんでもねえ悪党ってことになる。鴨志田以上に気を引き締めてやらないとな」

雪奈「そうね」

この日はそんな話で終わった。斑目の悪党さがどんどんと明るみになっていくのであった。

雪奈 side

11204・5・18・放課後・夕方・渋谷駅内

雪奈、蓮、竜司、杏の4人はアジトに向かう途中で、とある男性に話しかけられる。メガネをかけたスーツを着た青年である。

中野原「君…君たちだよね」

モルガナ「中野原だ。三島から連絡を受けて、今日渋谷で会うことになってたんだよ」
竜司「マジ」

雪奈「ええ、昨日の夜、三島君から聞いたのよ」

中野原「中野原です。怪盗お願いチャンネルに書き込まれた中野原夏彦」

杏「なんか、優しそうな感じだよね？ ストーカーしてた印象ないよ。多分改心が上手

くいったんだね」

中野原「管理者から連絡もらってる。猫を連れた秀尽の男子生徒とみつあみのメガネの女子生徒を探せって」

竜司「で、その中野原さんが、こいつらに何の用？」

中野原「聞いているとは思うけど、怪盗団に改心させてほしいヤツがいる。斑目って画家だ」

雪奈、蓮、竜司、杏「!!」

竜司「おいおい、キタンじゃね？弟子が師匠のヒミツを告白とか？」

杏「そう言えば、あのシャドウもマダラメのこと言ってたよね」

雪奈「言ってたわね」

中野原「私は、斑目の元弟子なんだ。住み込みで、絵のことばかり考えていた。本気で画家になりたいって思ってた。少し上に兄弟子と姉弟子がいてね。とても才能のある人達だった。当然斑目に目を付けられたよ。作品はみんな、斑目のモノにされた。まあ兄弟子や姉弟子に限らずの話なんだがね……」

竜司「おし、盗作のウラは取れたぜ」

中野原「その兄弟子は自殺し、姉弟子は先月事故で死んだよ」

雪奈「自殺……」

中野原「斑目が自分の作品で評価されているの、よっぽど耐えられなかつたんだろうさ。姉弟子も兄弟子の自殺を斑目に問い詰めてたんだ。だけど斑目は姉弟子に盗作の疑いをかけて破門にしたんだ！私は流石に怖くなって、斑目の反対を押しきってアトリ工を出した。けど、方々に圧力をかけられて、私は、絵の道を断たれてしまった。心機一転で絵とは別の道を、区役所に勤めたけど、ダメだった。絵の執着で気持ちが歪んでしまつてね。なんにでも執着するようになった。ついには、ストーリーにまで：アハハ：改めてお願いだ。斑目を改心させてほしい。一人の男の命を：救うためにも」

雪奈「一人の男の命を救うために？ どういうことかしら？」

中野原「今も一人だけ、斑目のところに残っている若者がいる。君たちと同じくらいだったかな」

モルガナ「佑介の事だ」

中野原「絵の才能があるばかりか、彼、身寄りがなくて斑目に恩義がある。斑目には格好のカモだ」

竜司「喜多川、言いなりになるしかねえってことか！」

中野原「まだ斑目のところにいた頃、その彼に聞いたことがあるんだ。斑目と一緒にいて辛いのかいって。そしたら彼、こう言ったよ。『逃げられるものなら逃げ出したい』ってね」

雪奈「喜多川君……」

雪奈は拳をぎゅつと作った。

中野原「逃げたした私が言うのもなんだが、自殺した兄弟子や事故で亡くなってしまった姉弟子のような悲劇は繰り返したくない！せめて前途ある若者だけでも助けられないかと……斑目の改心、検討していただけるよう、どうか、よろしくお願いいたします」

中野原は頭を深々と下げてきた。それだけ佑介のことを思つてのことだろう。そして雪奈は中野原の去り際に

雪奈「最後に1つだけよろしいでしょうか？」

中野原「はい、なんでしょうか？」

雪奈「貴方の姉弟子のお名前は、山田真奈美さんですよ？」

中野原「！はい、姉弟子の名前は山真奈美ですが、どうして？」

雪奈「山田さんは、斑目から破門された後、どちらへ？」

中野原「破門された後、私と同じで絵の道は断られたみたいです。絵とは関係ないゴールド・マウンテン社の帝国支部に就職が決まったと連絡は受けてました。ただ今年の2月だったか、体調を崩して日本に帰ってきたと連絡を受けたのが最後だったです。その後事故死したって別の元弟子から聞きましたから」

雪奈「そうだったんですね」

中野原「今更ですが、姉弟子の山田さんの事故がも斑目が仕組んだことじゃないかとも思っています。まあ証拠もないですが。それでは、失礼致します」

中野原はそう言って人込みの中に入っていく、そのまま立ち去ったのだった。

モルガナ「斑目の被害者から直接、頼まれたんだ。斑目を改心させるのにもう迷ってるヒマはなさそうだ」

雪奈「そうね、喜多川君の本音も聞けたしね」

蓮「そうだな」

竜司「おうよ！斑目は弱いもんを食いモンにする正真正銘のクズだ！」

杏「自殺なんて、私の周りで、そんなことさせない！」

モルガナ「じゃあ、前回一致ってことで、話は新アジトでだ」

雪奈達は、この後新アジトへと向かうことになった。

渋谷駅の連絡通路、新アジトに来た雪奈達。そこで

モルガナ「諸君、ようこそ新アジトへ！今回のターゲットは斑目だ。見ただろ、あのパレス。前と同じなんて舐めてたら痛い目を見るぜ。それに雪奈の貞操がかかってる

!!」

雪奈「私の貞操が!？」

モルガナ「やることは、鴨志田の時と同じだ。まずはパレスで【潜入ルート】を確保。その上で【心を頂く】予告。オタカラを【実体化】させていただく」

竜司「はいはい、質問!斑目って俺らのこと知らねえじゃん? 何で警戒されてたわけ?」

モルガナ「だいぶ学習しているな、いいぞ竜司。きつと【誰も信じていない】んだろ。知らない相手はすべてが敵扱いなのさ」

雪奈「それと悪い噂が広がってるのを知って、イライラしてる可能性もあるかも」

竜司「パレスが荒れんての、もらい事故みてえなモンで事かよ…」

モルガナ「なんにせよ、ワガハイ達は良い子ちゃんदैいつとこうぜ。無駄に【警戒度】を上げちまつたら、オタカラを取りづらくなる」

雪奈「今回は喜多川君にも気をつけてないかね。見られたことは、すぐ斑目に伝わるだろうし」

モルガナ「そのとうりだぜ!」

杏「てか斑目の【オタカラ】って見た目どんなの? また王冠?」

モルガナ「いや違うだろう。けどモノを見れば、ワガハイの直感で確実に分かる」

竜司「ああ、変なテンションになるからな、お前」

杏「今回の期限って個展が終わるまでなんだよね？」

雪奈「6月5日が期限日って事ね」

モルガナ「今回も【予告状】を出した後で【決行】だ。だから2つ戻って【6月2日】には潜入ルートを確認しないとな」

雪奈「いい、みんな絶対に、失敗できないからね!!!」

雪奈はそうみんなに言った。気合いが入る竜司と蓮。杏も雪奈を守るからと言ったのだった。ここから斑目の攻略に行動を本格的に動き出すのだった。

17 | 17 | 5 · 21 (18 : 00) ~ 5 · 22 (16 :
00) ~ モデルとして潜入。

雪奈 side 回想

1 | 1204 · 5 · 21 · 夕方 · 18 : 00 · 斑目邸の近くにて。

フィクサー達は、いつも通りにマダラメパレスを攻略していたが、とある場所、中庭に来た時、嚴重な警備が敷かれ、先に進む事ができなかつた。しかしヒントらしきものはあつた。

そのこの立札には、こう書かれていた。

【警備員各位。展示期間中、宝物庫への扉は、殿内の警備室のみで開閉が管理される。外からの解錠は不可能となるため、各員とも注意されたし】

思わぬ難所がやってきたと嘆くフィクサー達。しかしモナはあることを思いだした。モナの提案で一旦マダラメパレスから外へ出ることにした。

マダラメパレスから脱出した後、近くの広場へ向かいモルガナの話聞くことに。

杏「あの先、どうやって進んだらいいの……」

竜司「どっかに仕掛けでもあんのか？見当もつかねえ……」

雪奈「モルガナ、何か思い付いたんでしょ？だから私達を引き上げさせたんでしょ？」

モルガナ「雪奈の言うとおりだ。斑目邸の中に怪しい場所に心当たりがある。と言ってもこの「現実世界の屋敷」の方にな。忘れたか？あの美術館は、「ここ」なんだぜ？実は、前に来た時に偵察してある」

蓮「あの時、いなくなってた時に偵察をしていたのか？」

竜司「お前、あん時、ハナからそのつもりで……？」

モルガナ「その通りだ」

杏「暇だったからでしょ」

雪奈「杏、まあ、そう言うことにしてあげましょう」

竜司「んで、どこなんだ、それ？」

モルガナ「2階の一番奥だ。不自然にゴツイ鍵がかかっていた」

雪奈「鍵を掛けるってことは、何か見られたくないものがあるってことね」

杏「確かにそうよね」

竜司「けど、俺達がこじ開けてえのは、ここじゃなくてパレスだぜ？」

モルガナ「扉を斑日本人の目の前で開けんのさ。要は「扉な開けられない」っていうマダラメの【認知】を变えるんだ」

雪奈「現実の斑目邸のその扉を本人の前で開けることによつて、パレスの扉も勝手に開くつてことよね？」

竜司「なんかピンと来ねえな。本当にできんのかよ」

モルガナ「我輩を信じろ！必ず開く！はず！」

蓮「俺はモルガナを信じる。今はそれに掛けるしかないだろうし」

雪奈「今はモルガナの策に掛けるしかないでしょう」

杏「けど、やるにしても現実の方にもゴツい鍵があるんでしょ？」

モルガナ「我輩にかかれればヘアピン一本で楽勝さ。でも多少は時間がかかる。流石にこじ開けるところから全部マダラメの前でこなすのは無理だ。ほんのちよつとの間、目を反らしてくれる人が：いたらなあ」

モルガナがそう言うのと、蓮と竜司が雪奈の方を見ている。それに気がついた杏と雪奈は

杏「ま、まさか雪奈を？」

雪奈「えっ！まさか私に？」

竜司「屋敷に入れんのも、どうやるかなー無理に入ったらそく通報だし……」

雪奈「……貴方達、私にモデルを受けさせるつもりなの？」

竜司「ヌードしかなくねえ？」

雪奈「……!!!」

モルガナ「奇遇だぜ。竜司！同じことを考えていた」

杏「あんた達、自分が脱がないからいい加減なこと言ってるんでしょ！」

竜司「マジで脱げなくてねえよ」

モルガナ「雪奈、マダラメの家に怪しまれずに入れるのは、それが一番の口実だ」

雪奈「う……それはわかるんだけど……わかるんだけど……私が人芝居をうてば良いんでしょ？でも私はその鍵のかかった部屋も知らないし、やるにしても準備が必要なんだけど！」

モルガナ「雪奈、大丈夫だ。ワガハイも同行する」

雪奈「……うん、モルガナがいてくれるなら……」

杏「モルガナにいてるにしても雪奈の実質1人じゃん。バレたらどうするのよ？」

雪奈「パレスに逃げ込むか、襲撃するとか……」

杏「それつ大丈夫!?! 解決策になってないんじゃない？」

雪奈「……こうなったら覚悟を決めるしかないわ」

杏「雪奈、本気なの？」

雪奈「マダラメパレス攻略をここで立ち止まるわけにはいかないし、その先に何があ
るかもわからない。ここでモタモタするわけにはいかない」

モルガナ「すまない、雪奈」

杏「雪奈、もし襲われそうになったら、思いきり殴っちゃえ！」

雪奈「わかつたわ、杏。蓮、竜司、モルガナ、私が一肌脱ぐから絶対に成功させてよ
！」

モルガナ「任せとけ、雪奈。ちゃんと任せられたことはやり遂げるからな」

蓮「任せたぞ、モルガナ」

竜司「頼んだぞ、モルガナ。祐介に気づかれんなよ」

雪奈「私に触れてきたら、あの家…跡形もなく吹き飛ばす。跡形もなく…消し去る…。
ここまでやってパレスが開かなかつたら、私、斑目を殺しちゃうかも…」

雪奈は、不気味に笑みを浮かべている。竜司は慌てて

竜司「マテマテ、殺すのは不味いだろ！俺達は殺すんじゃないやなくて改心させるんだらう
が！」

雪奈「……はっ、そうね、私達は殺しはしない。悪党を改心をさせるだけ…」

竜司「とにかく、明日な！」

雪奈「明日！」

竜司「早い方がいいに決まってるだろ、雪奈がそう言ったんだろ」

雪奈「明日……：そうよね、ただ喜多川君が良いと言ってくれるかが問題よね……」

竜司「そんなの、【明日じゃなきゃムリ〜】とか言っときゃよくね〜？」

雪奈「はあ〜」

このあとは、解散しそれぞれに帰宅したのだった。そのあと雪奈は、佑介に連絡をつけて明日の22日にモデルの件の約束を取り付けたのだった。そのことを竜司、杏に連絡し明日が決行日となったのだった。

雪奈 side

111204・5・22・夕方・16:00・斑目邸

雪奈とモルガナは、斑目邸に向かい、蓮、竜司、杏の3人は、マダラメパレスの足止めを食らった場所で待機してもらっている。3人の役目は、扉が開いた時に制御室を探してもらって、二度と扉が閉じないようにしてもらうためだ。

そして斑目邸に着いた雪奈とモルガナは、それぞれの役目を果たすために行動する。

佑介「本当に来てくれたんだ。連絡くれた時は、嘘だと思った」

雪奈「急に連絡してごめんさい」

佑介「と、とんでもない。ただ昨日伝えた通り、今日は先生がもう20分〜30分もすると戻られる。その……：気を使わせてしまうかもしれないね」

雪奈「別に私は気にしないから（だから今日来たんだけどね）」

佑介「お世辞でもありがたい。ところで、その制服って秀尽学園の制服じゃないよね？」

雪奈「モデルになるんだし、絵になる制服が良いかなって思ったんだけど、似合わないかな？」

雪奈は、昨日の内に制服のパンフレットを見ていた。その中でも気に入った制服がトールズ士官学院の制服である。そして十三工房に頼んでトールズ士官学院の制服を作ってもらったのだ。ちなみにⅦ組の制服と平民クラスの緑をだが。佑介は、目線を逸らしながら

佑介「その制服は、どこかの制服なのか？」

雪奈「帝国のとある士官学院の制服なのよ」

佑介「帝国の制服なのか。だから見たことないのか。……それじゃあ、始めるか」

雪奈「……脱げばいいのね……。ってこつちを見られると脱げないでしょ？」

佑介「……す、すまん！」

佑介は、視線を雪奈とは反対な位置を見る。彼自身も雪奈の着替えを見るわけにはいかない。だから目線を逸らした。

雪奈「（斑目が帰って来る時間は……もうすぐのはず……）斑目先生ってもうすぐ帰って来

るの?」

佑介「確か、そのはず……」

雪奈「……そうなの……ねえ、喜多川君、場所は変えられないの? 私はもつと雰囲気がい
いところがいいな」

雪奈は色つばい声で佑介を誘惑する。佑介も冷静を保ちながら雪奈に答える。

佑介「こ、ここで十分な気が……」

雪奈「……(昔、クルーガーやルクレティアさんから教えてもらったお色気術をこんな
ことで、使うことになるなんて……でも今はなりふり構つてはられないし)喜多川君、鍵
のかかる部屋が良くないかな?」

佑介「鍵?」

雪奈「……女の子に言わせる気なの?」

雪奈は、自分の履いた靴下を佑介の方へ投げる。彼は靴下にビクツとなり

佑介「鍵のついた部屋、なんて先生のところくらいしか……」

雪奈「じゃあ、そこにしましょうか……」

佑介「む、無理、それは。第一、俺は鍵を持っていないし」

雪奈「(やつぱり持つてないか……。モルガナ、鍵持つてないって)」

モルガナ「(大丈夫だぜ、そのためのワガハイだ。このヘアピンで)」

佑介「緋里さん、もうそろそろ……」

雪奈「ちよつと待って。ここより別の場所が良いかなって思うんだけど。だって脱ぐんでしょ？私が恥ずかしくない場所がいいなあ〜」

佑介「他紙かに。モデルの気分を盛り上げた方が、いい絵になる、か……」

雪奈「そう、そうそう」

佑介「だ、大胆な構図やポーズにも協力してもらえるかもしれないしな」

雪奈「ポーズ……（マジでクルーガーやルクレティアさんが言っていたヤツをすることになるのかな……あつ、もう！覚悟を決めなさい、雪奈！）早く、やりましょうよ、せつかく気分も乗ってきたのに〜」

雪奈は、佑介にウイंकをやって、部屋を出ていく。目指すのは、鍵のかかった部屋である。

佑介「待ってくれ、緋里さん！勝手なことをしたら先生に怒られる！」

雪奈「喜多川君〜早く〜私の裸体を見たいんでしょ？」

雪奈は、お色気の術を使い、自分の裸体を佑介の頭に送り込む。

佑介「……ぶほお！緋里さんの裸体が！なぜ、俺の頭の中に……いやいや、他の部屋はまずいって！」

佑介は雪奈を追うため部屋を出たのだった。

雪奈「(ううっ…使いたくはなかったけど…モルガナ、後は頼んだわよ!)」

佑介は先に行く雪奈を呼び止める。

佑介「ちよつと、いい加減に…」

雪奈「ねえ、この奥って何なのかしら?」

佑介「そ、それは…」

雪奈「(モルガナが言っていたのは、この先ね)」

佑介「駄目だと言っているのに」

雪奈は構わずそのエリアに行く。そこにはパレスの時にあった扉があった。だがモルガナはまだ鍵を解除していなかった。

雪奈「…遅いわよ…」

モルガナ「猫の手ではやりづれえ…」

佑介「どうかしたのか?」

雪奈「…ううん、この部屋は何なのかしら?」

佑介「古い絵の保管庫だ」

雪奈「保管庫ねえ…ねえ、喜多川君、この部屋はどうかかな? 誰にも見つからない場所の方が、私的にも恥ずかしくもないし」

佑介は雪奈の問いに厳しい表情で

佑介「ここは先生しか入れない」

雪奈「喜多川君、どうしても駄目なの？2人きりで、静かな場所で誰にも邪魔されない感じのね」

モルガナ「(雪奈、まさか色欲魔術を使ってるのか！大丈夫なのか?)」

雪奈「(大丈夫だから、モルガナは鍵の解除に集中して!)」

佑介「どうかしたのか？」

雪奈「ううん、何でもないわ。(お色気術で何とか誤魔化さないと!)」

雪奈は再びお色気術を佑介に使う。彼の目には、憐れもない雪奈が見えている。トルズの制服が乱れたように彼女の綺麗な肌が見えている。

佑介「…こ、これは…ぶほお！緋里の肌…」

モルガナ「雪奈！佑介に何を見せてるんだ？」

雪奈「…裸体…」

モルガナ「はあ!?!ら、裸体だって！雪奈、お前…」

雪奈「クルーガーやルクレティアさんから教えてもらったお色気術を使っただけ…」
モルガナ「あの2人の色欲魔術って…。雪奈には難易度が高いんじゃないのか

？」

雪奈「覚悟を決めたのよ！それより鍵の解除は？」

そんなやり取りをしていると、斑目が帰って来てしまう。

斑目「佑介……」

佑介「せ、先生……！」

斑目は佑介の名前を呼ぶ。それと同時に鍵も解除される。すかさず雪奈は、部屋へ入る。扉が開いたことに佑介もびっくりする。斑目もそこへやって来て

斑目「そこで、何をしている！」

佑介「こ、これは……違うんです！」

雪奈は、そつと近づくと佑介を後ろからつかみ部屋の中に連れ込むのであった。

雪奈Side

111204・5・22・夕方・16:25・斑目邸内

斑目が佑介を問い詰めるのと同時に雪奈は彼の背中を後ろから掴み斑目が鍵を締めていた部屋の中へ入る。もちろんモルガナも一緒に。

佑介「緋里さん、ま、まずいよ！」

雪奈「明かりをつけるスイッチは……ここね」

雪奈が明かりをつけるために導力電源を入れると、部屋を明るく照らす。

祐介「こ、これは…!？」

雪奈「こ、この絵は、あのサユリ…なの？」

祐介「お、俺に聞かれても…」

斑目「で、出て行け！」

祐介「せ、先生、これは？」

斑目「み、見られてしまったのなら、もう黙ってはいられんな。実は借金を抱えている。このサユリは、私自身が複写して、特別ルートで売ってもらっているんだ」

祐介「ど、どうして…」

斑目「本物のサユリは、昔の弟子に盗まれてしまった。厳しくしすぎた事を恨んでたのかもしれない…そのことが、酷くショックでな…以来、私は、スランプに陥っている…苦悩から、弟子の着想を譲ってもらったことがあるのも事実だ…」

雪奈「……」

斑目「このままではいかんと、私は、何度かサユリの再現を試みた。だが、出来上がるのは、所詮模写…そんなときその模写でも良いから譲って欲しいという人が現れてな…すべては私の責任だ。有名税というのを払い切れなかったのさ。期待され、活動を広げていかねば、多くの方々に迷惑がかかるようになった…お前の才能を伸ばすにもミラ

が要る。不甲斐ない師を、どうか許してくれ……」

祐介「や、やめてください！」

雪奈「……なんか変よね。元のサユリが盗まれたのに、どうやって模写するのかしら？」

斑目「画集用の……精密な導力写真が残っていてね」

雪奈「導力写真のさらに模写が、売れたの？ 芸術家がそんな簡単に引つかからないと思うのだけど？ 残念だけど、嘘にしか聞こえない」

斑目「お、お前に何がわかるっ！」

雪奈「私の知り合いに絵に目利きの良い人がいるしね。その人から一通りは絵の見方は教わったわ。この絵からは、その人の思いや情熱が感じられない！」

モルガナ「雪奈！ これだけ何かが違う！」

雪奈はモルガナが言った違和感なモノ、上から被せ物で隠していたモノを取り払う。するとサユリがそこにあった。

祐介「これは、まさか本物のサユリ！ さっき、盗まれたって……！」

斑目「模写だ！」

祐介「いや、これは模写じゃない！ この絵に支えられてここまでやってきたんです……」

先生、先生、まさか！」

斑目「それは偽物……そうだ、贋作だ！迷惑な贋作があると聞いて、買い取ったのだ!!」
雪奈「本家が贋作を買うの？もう嘘がバレバレなんだけど？」

祐介「先生は嘘をついている。サユリの真実……話してくれませんか？」

斑目「お、お前まで！」

斑目は、何かの装置を取り出して

斑目「警備会社に通報してやったわ！」

雪奈「厄介なことを！」

斑目「迷惑な三流記事対策のつもりだったが、とんだところで役にたったわ」

祐介「ま、待ってください、話しを！」

斑目「話なら警察でしてくるといい。お前も一緒にな、祐介」

雪奈「警察に捕まるのは厄介ね。モルガナ、走りながら転移するわ！」

モルガナ「わかったぜ、雪奈」

雪奈「ほらっ、喜多川君も！」

斑目「無駄だ。警備会社に来るまで、2分とかからない！」

雪奈は、祐介を引っ張りながら走る。走りながらマダラメパレスへ逃げ込む事を考えている。

雪奈「一か八かのパレスへ転移するわ！」

モルガナ「それしか道はねえーやるしかない！」

雪奈は、祐介の手を握りながら転移魔術を発動し、雪奈、モルガナ、祐介の身体を不思議な力がつつみ込みそのまま、斑目邸から2人と1匹の身体は消えた。

18-18-5-22 (16:45) - 祐介の目覚めと怪盗団入り。

雪奈 Side

1-1204・5・22・夕方・16:45・マダラメパレス内

マダラメパレスにて、自分達のやることを終わらせて、待っている蓮（ジョーカー）と竜司（スカル）と杏（パンサー）。そこへ斑目邸から転移してきた雪奈（フィクサー）と祐介とモルガナ（モナ）がやって来た。

フィクサー「一か八かの転移だったけど、なんとかなったわね」

モナ「なんとかなかったけどな」

祐介「うん…な、なんだお前らは！」

フィクサー「落ち着いて聞いて！私だよ、喜多川君！」

祐介「緋里さん？じゃあ、お前らは…その着ぐるみには見覚えが無いが…なんだんだ（？）は？」

フィクサー「斑目の心の中ね」

祐介「先生の心の中…？緋里さん、気は確かかい？」

スカル「嘘じゃねえ、これがヤツの本性で本音なんだよ。欲望まみれのカネの亡者つてこつた」

祐介「デタラメを言うな！」

フィクサー「喜多川君だって思ったでしょ？斑目が何かおかしいって！」

祐介「そ、それは……」

フィクサー「信じたくないのはわかるわ……でもね、ここは斑目が見ている【もう一つの現実】……斑目の本性なのよ」

祐介「……こんなおぞましい世界が……お前ら一体なんだんだ！」

スカル「腐った悪党を改心させる集団……てどこか」

祐介「確かにお前らの言うことが本当なら、俺の知る先生など、どこにも……」

スカル「目を、覚ませって！」

祐介「だが、それでも10年置いてもらった。恩義だけは……消えない」

スカル「許すつてのかよ!?!このままじゃお前……!」

祐介「うっ……うっ……」

突然祐介が口を押さえてしゃがみ込む。理想と現実が追いついていないのだろう。普通にそうですかと聞くことができたのなら凄いことになる。祐介もそれに当たるのだろうか。

モナ「悪いがノンビリとしてられないぜ！ すごい警戒されてるぜ。さっさとズラかるぞ！」

祐介「はあ、はあ、はあ」

祐介が肩で息をしている。それを見た蓮と竜司が肩を貸し雪奈と杏が先行することになり、索敵をモナがやる。

逃げる傍らにとある部屋に入った時、弟子たちの絵があつた場所に來て祐介が

祐介「これが……先生の心のなか……だと言うのか、こんな虚栄にまみれた美術館……が」

フィクサー達が逃げる途中に祐介が知る弟子たちの絵を見て辛そうにしている。斑目は自分の弟子たちをモノ扱いにしかしていないのだ。

出口を目前にした時、マダラメ達が待ち伏せをしていた。

マダラメ「フハハハ！」

フィクサー「マダラメイチリユウサイ、なるほど成り上がりの殿様ってどこかしらスカル「ふざけたカツコウしやがって、王様の次は殿様かよっ！」

マダラメ「ようこそ斑目画伯の美術館へ……」

祐介「えっ？ 先生なのですか？ そのすがた……」

杏「サイテ！」

祐介「嘘ですよね？」

マダラメ「あんなみすぼらしい格好は【演出】だ。有名になつてもあばら屋くらし？別邸があるのだよ、【教団名義】いや今はオンナ名義だがな」

フィクサー「教団？まさかD∴G教団の事かしら？」

マダラメ「そうだ。まあ、席を、置いていたに過ぎないがな。使えない弟子たちを教団に売りつけてもいたが、ある時教団が壊滅してしまつた」

フィクサー「各勢力が各地の教団を潰しにきたとある作戦があつて、そして壊滅……」

祐介「教団、いったい、先生、何故盗まれたはずのサユリが保管庫に？本物があるのに、何故たくさん模写を!?聞かせてくれ、あなたが先生というのなら……」

マダラメ「まだ気づかんのか？青二才め！【盗まれた】など、私が流したデマだ！全部計算つくされた【演出】なのだよ！」

祐介「ど、どういうことだ？」

マダラメ「たとえば、こんなのはどうだ？本物は見つかったが、公にはできない事情がある。特別価格で譲りたい。ハハ、どうだ、この【特別感】！俗人どもは、大枚はたいて食いついてくる！」

祐介「そ、そんな……」

マダラメ「絵の価値など所詮は【思い込み】……ならばこれも正当な【経済行為】だ！

まあ、ガキには想像できんだらうがな」

スカル「さつきから、ミラ、ミラ、ミラ、ミラ、どうりでこんな気持ちのワリい、美術館ができるわけだぜ！」

パンサー「あんた、芸術家なんでしょ!?盗作とか恥ずかしくないわけ？」

フィクサー「彼に言っても無駄よ。法国の僧兵達に下道認定されかねない行為をペラペラと喋ったしね」

ジョーカー「そうだな」

マダラメ「法国がどうした？芸術など、道具に過ぎぬわ！ミラと名声のためのな！お前にも稼がせてもらったぞ、祐介」

スカル「ムカつくけどよ、あれがお前の師匠だ」

祐介「なら、貴方の才能を信じている者は：天才画家と信じてきた人達は：」

マダラメ「これだけは言つといてやる、祐介。この世界でやっていきたいのなら、私に逆らわないことだ。私に異を挟まれて出世できるとも思うか？フハハハ！」

祐介「こんな、こんなヤツの：世話になっていたとは：」

マダラメ「ただの善意で引き取ったとも思っておったのか？有能な弟子を集め、着想を吸い上げれば、才能あるめざわりな新芽も摘み取れる。着想を頂くなら、大人よりも、言い訳せん子供の将来を奪った方が楽だ」

祐介「なんてことを！」

マダラメ「家畜は毛皮も肉も剥ぎ取って殺すだろうが。同じことだ、馬鹿者が！喋り疲れたわ、そろそろ」

祐介「ゆるせん……」

マダラメ「うん？」

祐介「許すものか、お前が誰であろうと！」

マダラメ「長年飼ってやったのに、結局は仇で返すか……クソガキめ！者共！賊を始末しろ！」

パンサー「下がってて！」

祐介「面白い……」

フィクサー「喜多川君、貴方……まさか！」

祐介「ふふつ、事実は小説より奇なり……か。そんなはずはないと、長い間、俺は、自分の瞳を曇らせてきた！人の真贋すら見抜けぬ節穴とは……まさに俺の眼だったか！」

すると祐介の頭の中に声が響く。

【ようやく目が覚めたかい？】

【真実から目を背けるキサマこそが、なにより無様なまがい物。たった今、決別するのだな！】

「いぎや契約、ここに結ばん。我は汝、汝は我……人世の美醜の誠のいろは。今度はキサマが教えてやるがいい！」

祐介は、ペルソナ「ゴエモン」を呼び出した。

祐介「絶景かな、まがい物とて、こうも並べば壯観至極……悪の花は栄えども、醜悪、俗悪は滅びる定め……！」

祐介は、氷の冷気でシャドウ達を一撃で倒す。

フィクサー「喜多川君のペルソナ、凄いわね……」

マダラメ「ふっ、いきがりおつて！何も知らずに死んでいくがいい！出合え、出合え！」

マダラメが再びシャドウの大群を呼び寄せた。祐介は弟子たちの無念を晴らすために拳と今までの鬱憤をぶちまけた。

フィクサー達とマダラメのシャドウ達の戦いが始まる。

雪奈 side

11204・5・22・夕方・17:00・マダラメパレス内

フィクサー達とマダラメのシャドウが戦っている。祐介の気迫にてマダラメのシャドウは次々に片付けられていた。

フィクサー「キューコ！」

ジョーカー「アルサーヌ！」

パンサー「カルメン！」

スカル「キャプテンキッド！」

モナ「ゾロ！」

祐介「ゴエモン！」

あつという間にマダラメの呼び出したシャドウ達は倒されてしまった。しかし覚醒、目覚めたばかりだから力が入り過ぎて、体力消耗してしまう。

マダラメ「祐介、お前はな輝かしい未来をドブに捨てたんだ！キサマの絵描きえの道、あらゆる手段を浸かって刈り取ってくれる！」

祐介「斑目!!」

マダラメ「私に齒向かったことを、一生かけて悔いるがいい」

マダラメはそう言つてこのエリアから出ていく。祐介もそのあとを追おうとしたが、体力消耗で上手く動けなかった。フィクサー達は撤退を決めマダラメパレスから出ることとしたのだった。

逃げる途中で走りながら

フィクサー「喜多川君、本当はずつと前から気づいていたんでしょ？」

祐介「俺は、そんなに朴念仁じゃないさ。ずっと前から妙な連中が出入りしてたし、盗作も日常茶番事だった。けど、そんなの、認めたくないじゃないか。世話になった人が、そんな……」

パンサー「どうして喜多川君は、斑目のところから出て行かなかつたの？」

祐介「サユリを描いた人だし、それに、特別な恩義もある」

スカル「育ててもらったからか？」

祐介「俺には父がない。母親が一人で育ててくれたらしいが、その母も俺が3つの時に事故で死んだ。その時俺は、先生に拾われたんだ。母も生前、先生の世話になっていったらしい」

パンサー「らしい？」

祐介「母の事も正直あまり覚えていない。だから先生を親と思つて尽くしてきたつもりだったが、先生は変わってしまった。自分の原点である「サユリ」までも、あんなふう……」

スカル「色々、あつたんだな」

フィクサー「……………」

祐介「おまえ達が盗作だの言つてきた時、内心じゃ気づいていたんだ。だからこそ拒んでしまった。俺は、逃げてたんだ。すまない」

フィクサー「喜多川君の気持ち、わかるわ」

祐介「自分を誤魔化してきたことと向き合う、きつかけをくれて、感謝している」

スカル「真面目すぎんだよ、お前。そんなだから行き詰まるんだよ。俺なんかもつとテキトーだぜ？」

パンサー「ホントにそう！」

ジョーカー「だな」

モナ「これからどうするんだ？」

祐介「わからない」

スカル「斑目が変わっちまったもんは、もうしようがねえ。けどよ、俺達なら、心を変えられるんだ。野郎の罪を、野郎自身に償わすことができる」

祐介「そう言えば、『改心』がどうか言っていたな」

スカル「聞いたことねえか？」「心を盗む怪盗団の噂」…

祐介「…?!ま、まさか!？」

祐介がそう言った直後にシャドウがたくさん沸いて出てきた。

スカル「つと、やべえ！」

フィクサー「話の続きは後よ！今は逃げるのが先決よ！」

モナ「フィクサーの言うとおりだ。逃げるぞ！」

祐介「あれ？俺、こんなもの着ていたのか」

スカル「今更かよっ」

パンサー「ボケツツコミは後！早く逃げるよ！」

フィクサー達はシャドウに追われながらも無事にマダラメパレスを脱出した。

それを遠くから見ていた者達があった。くたびれたスーツを着て、ボサボサな髪型をしてやる気がない表情をしている。もう一人は、白い装束で身を包んでいるが、全体的にエロく見える。

???「あの方から様子を見てこいと言われたけど、僕も暇じゃないんだよね。それにしても気持ちの悪い美術館だよ、ここは。斑目よ、あの方やボスから斬り捨てられるのも時間の問題かねえ」

???「足立、主からウロボロス怪盗団には、接触すると言われてます」

足立「わかってるさ、【金】のオランピア。昔この僕を捕まえた連中に似てたからさ」
オランピア「自称特別捜査隊ですか」

足立「特別捜査隊とアルフィンとかいう女のおかげで、警察に捕まった。まあ、それでもボスのおかげで強くなれたし自由にもなれたわけだが」

オランピア「!?…!!撤退しますよ！」

足立「どうしたんだ？」

オランピア「探偵の明智吾郎がこの空間へ入ってきた！」

足立「明智吾郎、白鐘直斗の再来とか言われているんだっけか」

オランピア「獅童正義の息子と言われてますね」

足立「獅童の息子ねえ……まあいいさ。僕が興味があるのは、鳴上悠とアルフィンだけだからな」

オランピア「そうですか」

足立とオランピアはそれだけ言うとマダラメパレスから去っていく。

雪奈 side

11204・5・22・夕方・17:15・ファミリーストラン・サラマンダーにて。

マダラメパレスからファミリーストラン・サラマンダーにやってきていた雪奈達。

祐介「なるほど。それでその体育教師は心を入れ替わったと……【心を盗む怪盗団】本当に実在したとはな」

蓮「信じられないか？」

祐介「いや、信じるさ。あんな世界を見た後だ。今更常識に遠慮する気も無い。それ

でお前達、斑目先生：斑目を「改心」させるつもりって事か。俺も加えてくれ、怪盗団に」

雪奈、蓮、竜司、杏は祐介の台詞にビックリする。

祐介「もつと早く現実を見ていれば、こうはならなかったかも知れない。画家としての未来を奪われた多くの門下生のためにも、俺が終わらせなければ。それが…曲がりなりに親だった男へのせめての礼儀だ」

杏「礼儀か」

竜司「いいんじゃないの。どうせ斑目やんだしよ」

雪奈「失敗すれば、廃人になるかもしれない。防ぐ方法もわかってるけど、絶対保証なんか無いわ。ここに来るまでに話したでしょ？」

祐介「斑目は、美術界を牛耳る存在だ。あらゆる団体とコネクションを持っている。俺如きが声をあげたって、もみ消されるだけだ。やるしかない」

杏「喜多川君」

雪奈「蓮、モルガナ、喜多川君との取り引きは成功ね」

蓮「ああ、これからよろしくな、祐介！」

杏「怪盗団の仲間が増えたね！宜しく、祐介！」

竜司「足、引つ張んなよ」

雪奈「改めてヨロシクね、祐介！」

ここにてウロボロス怪盗団は、雪奈、蓮、モルガナ、竜司、杏、祐介の5人と1匹になった。

杏「そう言えば、現実の斑目はどうなったの？」

雪奈「あつ、私と祐介は、結構ヤバイ状況になってたけど……」

祐介「それならここに来る前に連絡を取った。俺は、緋里さんを追いかけていたことになってる。それと君らの説明とおりにシヤドウの事は、本人は知らないようだ」

雪奈「斑目は何て？」

祐介「女子高生1人を捕まえられないのかと、警備会社に愚痴っていたよ。でも怒りが収まらないようで、『全員告訴してやる』と言っていた」

竜司「そうとう警戒されてんぜ、それ」

杏「告訴とか、必死すぎんでしょ！実はまだなんか隠してるとか？」

雪奈「それはあるかもね」

祐介「うごくとしても個展が終えてからだろう。期間中に醜聞が立つのは向こうが損だ」

雪奈「確かにね」

モルガナ「告訴を回避するためにも、その前に改心だな。やっぱり【作戦期間】は、【個

展の会期中」とつてことだな」

雪奈「そうね。それしかないね」

雪奈達は互いに見合つて、斑目攻略を意を決することになった。

祐介「ところで、これはなんだ？」

竜司「あ？猫だけど」

祐介「喋ってるが」

モルガナ「文句あるのか？」

祐介「そうじゃないが」

竜司「なんで？」

杏「ちよつと人とテンポが違うよね」

雪奈「そうみたいだね」

モルガナ「このワガハイを描こうつてののか？ちゃんと素材の良さを引き出せよ？」

祐介「ふむ……」

モルガナ「気安く触んじや……」

祐介「黒あんみつを注文しようと思つてな」

竜司「黒猫から連想したな、コイツ」

祐介「ああっ！ミラを持って来なかつた！」

杏「やっぱ、この人ヘン…」

雪奈「祐介、私が今回は奢るから食べていいよ」

祐介「すまない、緋里さん」

こんな感じで、祐介を仲間に加えたウロボロス怪盗団は、斑目を改心させるために、マダラメパレスを攻略していくことになる。

芳澤すみれ編【Crusaders（十字架を付けた集

団）】

1-1-4・27-芳澤すみれとしての誇り。

1-秀尽学園前・裏路地

3番目の光井和也…。2番目の光井和也は、真由美と共に世界を守り、死んでいった。実際には、この世界に飛ばされたのだが。

3番目の光井和也は、横浜騒乱編で妹のほのかと幼なじみの真由美が大亜の世界級魔法師に殺される。

和也は、怒りと悔しさ悲しさで己のたがが外れ全ての力を解放する。

大亜の世界級魔法師との死闘の末、倒す和也。

悲しみにくれるみんなに対して、

和也「俺の大切な妹のほのかと幼なじみの真由美を生き返す。たとえこの命をかけることになっても!!」

エリカ「な、何を言ってるの？和也君？」

深雪「和也さん！そんなことをすれば、貴方がただではすみません！」

レオ「はやまるな、和也！」

幹比古「和也！」

達也「はやまるな、和也！」

和也は、仲間の声を聞きながらも、焔の力を全快し、自分の生命力を引き換えにほかと真由美を生き返した。

和也がほのかと真由美を生き返した後の記憶はない。

再び和也が目を覚ましたら、芳澤すみれという女の子となり赤ちゃんからの再スタートだった。だが和也が住んでいた世界ではない。似てはいるが似て非なるものである。

それから15年間、芳澤すみれとして生きてきた。

だが光井和也だった時の焔の力やその他もろもろの能力は失っていた。

だが頭の良さ、運動神経等は、すみれになっても引き継がれている。

だが、リベールの異変と呼ばれる大事件が起きた時に謎の力に目覚める。すみれは、リベールの異変時リベールに住んでいた。父親が仕事の関係で、リベールへ単身赴任することになり、すみれは父親の方に着いて行ったのだ。

母親と姉のかすみは、春先の精神暴走事故の被害者となり亡くなっている。その際

に、父親もリベールから日本へ帰国したのだ。

娘のすみれの前では、明るく元気に振る舞っている父親だが、1人の時には、娘に悟られまいと声を殺して泣いているのだ。

それを見たすみれは、そつと決意したのだ。

かつての自分が悲しみから立ち直ったみたいに。

かつて自分は、仲間の支えがあつたからこそ強くなれたんだと。

大切な何かを守りたい時、信じれない力を発揮するんだと。

自分のスマホにイセカイナビみたいなおアプリが入っており、それをクリックするとお助けチャンネルみたいのが出る。それは日本には、遊撃士がほとんどおらず、クロスベールのような特務支援課があるわけではない。帝国のツールズ士官学院特科クラスVII組があるわけでもない。

誰かが手を差しのべてくれるわけではない。誰かが助けてくれるわけでもない。

そんな世の中でも善意でこんなアプリを作り出した人間がいる。

その人間が芳澤すみれである。

前にも説明したが、すみれとしては、焰の力ではなく、謎の能力、サンドリオンとい

う力であった。サンドリオンを発動すれば、光井和也の能力を發揮できる。

前世の記憶や能力で、お助けチャンネルを作り出した。遊撃士協会のギルドにある依頼なんかを、チャンネルに登録してくれれば、すみれが解決できるものは解決してくれる。

鴨志田の件のことも内密に捜査していたのだ。捜査していくうちに、蓮や雪奈達と遭遇したのだ。直接会ったわけではないが。

すみれ「…今回は、あの雨宮先輩達のお手柄ってことかな。私は鈴井先輩が死なずにするのがやっとだったから」

すみれは、志帆が飛び降りるのを周りの人間と目撃したのだが、能力を使うことができず、死なない程度の能力を使うのがやっとだった。

夕陽に照らされながらすみれは、雨宮蓮達がいたところをずっと見ていた。

そして、雨宮蓮達がいた場所に来て

すみれ「これからも、私は困った人達を助けるつもり。それと雨宮先輩達がこれからも助けるつもりなら……」

すみれは、雨宮蓮達がこれからも困った人達を助けるつもりなのか見極めることにした。

すみれ「あ、バイトに行かないと」

すみれは、スマホの時計を見て、バイトに行く時間だと気付く。彼女がバイトしているのは、花屋さんである。父親が仕送りをしてくれているのだが、学費だけを仕送りだけで、生活費と小遣いはバイトと人助けで得た物を買ったりして生計を経てている。

すみれ「秀尽学園、まだまだ闇を抱えてる…誰かが助けを求めたら…」

すみれは、秀尽学園の校舎をちよつと見てから、学園の最寄り駅の方へ向かうのだった。

2-2-5・02-依頼者。

111204・5・02・秀尽学園・体育館・

すみれは、職員会議中の新体操の教師から、今日は新体操の活動は無いとチャットが来た。だから新体操の練習着から制服に着替えた。

女子更衣室で他の部活動の先輩達が何か話している。

先輩女子1 「鴨志田、やっと捕まったわね」

先輩女子2 「あんたさ、鴨志田に媚ってたじゃん」

先輩女子1 「別に媚びてなんかいないわよ？あれは鴨志田が誘ってきただけだから」

先輩女子2 「マジで？それマジ受けるんですけど！」

先輩女子3 「バレー部の女子って、みんな鴨志田に食われたって本当なの？」

先輩女子2 「マジらしいよ……だからバレー部の鈴木、飛び降り自殺を凶つたんでしょ？」

先輩女子3 「アレ本当だったの！鴨志田アウトじゃん!!」

そんな話をしながら他の先輩女子達は、すみれの横を通りすぎていく。

すみれ「……………」

すみれは、表情は怒りに満ちていた。あの先輩女子達は、鈴井志帆の飛び降り自殺未遂すらも笑い話にしていることが許せない。いや自分のクラスでも鴨志田の事を笑い話にしている者達がいることに驚いていた。

すみれ「この学園は、鴨志田以外にも闇を抱えている。いや…学園だけじゃない…この国自体が…」

スマホをポケットから取り出して、ニュース一覧を見る。

一面のニュースは、鴨志田の件が大々的に書かれている。

他には、東京都の職員による女子高校に痴漢をして逮捕、札幌市の市議会議員が、金を不正授与。大阪で今月初の精神暴走事故。などが最新ニュースとして流れてきた。

すみれ「また精神暴走事故…」

すみれは、ぐうつと息が苦しくなる。精神暴走事故で失った、母親と姉かすみを思い出したからだ。深呼吸をやって、精神を落ち着かせる。

すみれ「精神暴走事故のニュースを見ただけで、乱しちやダメ。そんなんじや、困ってる人々を救えないわ」

そう言うてからすみれは、女子更衣室を後にした。

体育館から出たすみれは、夕暮れに染まる校舎内を歩いて靴箱に向かって歩いている。歩いていても鴨志田の話題はみんなが話している。

靴箱で上履きと靴を履き替えると、そそくさに学園を出る。学園の最寄りの駅に向かって歩いていると、帰りがけのサラリーマン達が、鴨志田の悪口を言っている。そんな中をすみれは歩みを進めている。

駅に向かう途中、上着のポケットに入れているスマホのバイブがなる。すみれはスマホを取り出してみると、お助けチャンネルに依頼が来ていた。

11204・5・02・蒼山一丁目↓渋谷、七草記念公園

ここは、渋谷内にある七草記念公園。先の大戦にて破壊された渋谷を十師族の七草家が再建し復興させた。それを記念に市民により建立された公園である。

休みの日の公園には、家族連れやカップルがたくさんくる場所でもある。夜になるとライトアップもされる。

ただ今は平日であり、人はまばらである。

そんな中、すみれは黙って歩いている。お助けチャンネルに依頼してきた依頼主はここ

にいると言つて来ている。

秀尽学園の生徒ではない生徒達も結構いる。親友同士、恋人同士でいるかの違いはあるが。

すみれ「…目印にみっしいのぬいぐるみキーホルダーを付けているんだったわね」

みっしー：クロスベルのあのテーマパーク（MWR）のマスコットキャラである。依頼主は、そのみっしーのキーホルダーを目印にしているという。

すみれ「みっしーのキーホルダーって言うから女の子の依頼者ってことかな」

すみれはそんな事を考えながら、依頼者を探す。

だが段々と人が増えていく。学生から大人のサラリーマンまで人が増えているのは間違いない。

ただ変な悪目立ちをしているのは間違いない。

“秀尽学園の生徒”

“鴨志田卓の勤めていた学園”

これだけで、今は注目の的である。

同情の目、奇つ怪な目、憐れんだ目、色んな目がすみれを含めた秀尽学園の生徒達は見られていた。そんな目に耐えきれなかったのか、秀尽学園の生徒達はほとんどいなくなっていた。

すみれは、みっしりのキーホルダーを探している。すると鞆にみっしりのキーホルダー付けたサラリーマンの方を見つける。そのサラリーマンは、ベンチに座っていた。すみれは一瞬驚いたが、すぐに冷静に判断する。固定観念は抱いてはダメだと。

すみれは、ベンチが背中合わせにあることもわかり、背中合わせに座る。スマホを取り出して、話してるふりをしながら背中合わせのサラリーマンに話しかける。

すみれ「貴方が依頼者の山田さんですね？」

サラリーマン「あ！来てくれたんですね？」

サラリーマンの山田は、反対側を見ようとするが、すみれは

すみれ「反対側を見ないで下さい。互いに顔は合わせない約束でしょ？」

山田「はい、すみません」

すみれ「こちらこそすいません。これが私のスタンスなので。えーと、依頼と言うのは、とある事故で亡くなったお姉さんのことを調べて欲しいと？」

山田「はい、姉は元々斑目の弟子でしたが、師匠の斑目に盗作の疑いを掛けられ破門にされました」

すみれ「斑目一流斎：美術界隈では、かなりの有名人ですね。彼自身もさゆりを始め…いくつも美術作品を世に出してますね」

山田「…確かにそんな風になってます。ですが！あれは全て弟子の作品を盗作して作

り上げたものなんですよ！」

すみれ「全て盗作!？」

山田「ええ！斑目自身の絵なんてとうの昔に枯れてるんですよ！」

山田は、斑目一流斎には、かつてはかなりの弟子を抱えていたが、盗作やパワハラ、モラハラなどで弟子は辞めていった。山田の姉も自身の作品を盗作され、斑目の元を去った。

そして美術とは関係の無い食品加工や文房具会社であるゴールド・マウンテン社のエレボニア帝国支部で働いていたが、2月の下旬頃に体調を崩して、帝国支部を退社して日本に帰国していた。だが4月に入って姉は、体調が良くなったので、4月5日付けでゴールド・マウンテン社の本社復帰を許されたようだ。そしてその夕方に交通事故に遭って、そのまま亡くなったそうだ。

警察は、「姉が車に飛び込んで自殺した」と発表したようだ。

山田は、姉が自殺する原因は見当たらないし、斑目の破門の件は、吹っ切れていたし気にしないと説明したが、警察は受け入れなかった。

警察がダメならとマスコミに言ってみたが、マスコミも相手をしてもらえなかった。

そして山田は、失意のあまりに落ち込んでいたら、お助けチャネルを見つけたようだ。

山田「あの、姉の謎の死の事、調べてもらえますか？」

すみれ「……わかりました。お姉さんのこと調べて見ますね。斑目やゴールド・マウンテン社についても調べたいと思います」

山田「ありがとうございます！それでは、自分は失礼します」

山田はそう言つてベンチから立ちあがり、すみれの向いている方向に歩いていく。

すみれは、漆黒の空の中に輝く星を見ながらそつと握りこぶしを作つて、斑目とゴールド・マウンテン社を調べる事にした。

3-3-5・03-十文字家の英雄とその娘。

1-1204・5・03・新サエグサ再開発地区・スターライト・

新サエグサ開発地区、ここは大亜との戦争で破壊された地域であり、十師族の七草家が力を入れて再開発された場所である。戦争で破壊される前は、原宿と呼ばれていた場所。

そんなところの、スターライトと呼ばれるマンション、505号室にすみれはいた。

山田の依頼を受けてここに戻って来たのだ。すでに太陽は、東から顔を出し、太陽光が部屋を照らしている。すみれは、ベッドで気持ち良さそうに寝息を立てている。

今日から3、4、5日と日本においては、ゴールデンウィークに当たるのだ。

目覚まし時計が、06:30分になり目覚ましのメロディが流れる。

すぐにすみれは、起きて目覚ましのメロディを止める。

すみれ「休みになったけど、あまり呑気にはできない」

昨日、お助けチャネルの依頼主の山田から姉の事故を調べることを引き受けたからだ。

警察もマスコミも動かないのは絶対におかしい。警察は別にしても、あのマスコミが

全く取り上げないのは、おかしい以外に無いのだ。桐条内閣の大臣や官僚のスクヤンダルは、すぐに報じるのに山田の姉の事故はどこにも報じていない。やはり十師族、またはそれに順次する連中って事になる。

すみれ「まずは、山田さんのお姉さんの事故に合った場所に行ってみないと」

すみれは、山田から聞いていた住所、新東京第2開発地区、十区。

十師族による新東京開発計画に載つとり、各一族が開発にミラを注ぎ込んでいる。この十区は、十師族の十文字家の領地のようなものである。

十師族のボンボン息子、娘が沢山いそうな雰囲気である。そんな中、すみれは歩いている。

すみれ「なんだか、私は場間違いだよね」

そんな事を口に出しながら事故現場とされる場所へ行く。

【ジャステイス通り】

【十文字正義・十文字分家当主の嫡男の名前を取った通りの名前】

十文字正義は、大亜による沖縄戦役で、戦死している。ジャステイス通りの一角に、十文字正義の慰霊碑が立っている。慰霊碑のある端には、赤き獅子の紋章が入った旗が掲げられている。この旗は西ゼムリアの大国エレボニア帝国の旗である。寄贈者は、エレボニア帝国皇帝ユーゲント3世、帝国宰相ギリアス・オズボーンと印されており、十文

字正義を名誉帝国臣民に認定すると書かれている。

【我が友よ、安らかに眠れ。……意思是私が受け継いだ】
と慰霊碑には書かれている。

十文字正義は帝国軍を除隊すると、その後日本人初のS級遊撃士なった人物であり、八葉一刀流免許皆伝であり、九島烈以来の剣聖となる。正義は、黒の剣聖と呼ばれている。そしてギリアス・オズボーンの親友でもあった。同じくトールズ士官学院に入学している。容姿は、ブラック・クロバーのヤミ・スケヒロな感じて、性格もヤミさんみた
いかな。

後々にギリアスと真夜の間を取り持ったとされている。

十文字正義は、分家と言っても嫡男だったが、型にはまるのが嫌だった。それに家督を継ぐのも嫌だったから、家督は二男の正孝に譲り十文字を飛び出して、単身帝国に渡りトールズ士官学院へ入学している。

成績は、ギリアスと常にトップ争いを繰り返していた。

トールズ在籍時、ギリアスと共に台湾で行われていた、セレブ少年少女交流会に東ゼムリアのオプザーバー枠で出ている。

この後、大漢軍が攻めてきて、ギリアスが真夜を助けたりして一躍有名になるが、十

文字正義もかなりの活躍をしている。

カルバードの若者や、台湾の若者達を単身、太刀一つで大漢軍の戦車部隊に斬り込んで行ったとされている逸話も残されている。

すみれは、十文字正義の慰霊碑に手を合わせる。

すみれ「十文字正義さん、今のこの国を見てどう思うのかな」

汚職、不正授与、賄賂、怠慢：こんなことばかりをやっている日本。

十文字正義が生きていた時代は、常に新ソヴィエト、大漢（現大亜）の脅威があつて緊張感の中に生きていた。この2カ国とは、何度も衝突を繰り返していた。だが帝国と国交を結んでから、帝国と軍事同盟的なものを結び、共和国とも国交樹立を結んだ。それからは、東ゼムリアでも帝国と共和国の影響が出たために、日本とだけを見るわけにはいかなくなつた。

第2次大亜戦役にて、大亜と新ソヴィエトは、東ゼムリアにおける影響力は無くなつた。大亜は大亜自体と東ゼムリア共和国、南中華国に分離独立した。

すみれは、過去の歴史の出来事が頭を中を駆け巡る。そして手を合わせ終えると、再び慰霊碑を見る。すると後ろから話しかけられる。

??「珍しいこともあるものね」

すみれ「はい？珍しいとは？」

?? 「慰霊碑に手を合わせる人なんて近頃はいないから」

すみれの隣に金髪の女子がやって来る。この金髪の女の子は、すみれと同じくらい歳の。

すみれ 「手を合わせない人が多くは無いの？」

?? 「今では誰もみないわね。ちよつと前くらいならいたみたいだけど……」

すみれ 「そうなんだね……。私は芳澤すみれ、貴女は？」

アリス 「わたしは、十文字アリスよ」

これが、すみれと十文字正義の娘であるアリスとの出会いであった。

111204・5・03・ジャステイス通り・十文字正義慰霊碑にて。

ジャステイス通り・十文字正義の慰霊碑にてすみれは、十文字正義の娘である十文字アリスと出会った。

これは偶然か、または必然なのか、それはわからない。

すみれ 「十文字……って十師族の!？」

アリス 「あまり大きな声で呼ばないで！ちよつと来て！」

すみれはアリスに引つ張られながらとある喫茶店に入る。

その喫茶店は、緑で統一されていて、とても雰囲気が良い感じの店である。休みに

入っただけあって人も多い。アリスはお店のオーナーらしき人に話しかける。

アリス「オーナー、奥空いてる？」

オーナー「あ、アリスお嬢様：今日はご親友をお連れになられたのですか？」

オーナーは、ちよいワルオヤジ感（小山力也さんがCVの）が入っている親父さんである。

アリス「すみれさん、奥に行きましよう」

すみれ「あの、お邪魔しますね」

オーナー「構わないよ」

すみれはオーナーに一礼すると、アリスについていく。

アリスが入った部屋は、喫茶店とは場間違いな感じな和式部屋である。とても高級感があるような装飾品が飾られている。すみれは、綺麗に靴を脱いで揃えてから和式部屋に入る。足を踏み入れた時点で、何かの術式が発動したことをすみれは気づいた。

すみれ「…十文字さん…何かしましたね!？」

アリス「発動…なるほど…芳澤さんは、一般人が行く学校の高校生みたいですけど、わたしが何か発動したことをわかったんですね」

すみれ「ただ…話すだけなら…人払いの魔術なんて入らないでしょ？」

すみれは警戒しながらアリスを見ている。

アリス「人払いの魔術：そこまで知ってらっしゃるのですね」
すみれ「そ、それは……」

日本国の人間は、誰でも魔法や魔術が使えるわけではない。十師族の人間、そこに連なる人間、もしくは突然変異で生れた人間などがある。西ゼムリアの導力魔法も日本で普及し始めたが、まだまだである。

アリス「そんなところに立つてないでこつちにいらっしゃい。わたしは貴女の敵ではないわ」

すみれ「そ、それを信じろと仰られるのですか？」

アリス「……まあ、いきなりこんなこと言われても信じられるはずはないか……」

アリスは座っていたが、立ちあがって窓の外を見る。そこから窓の外の景色は、ちょうどとある交差点が見える。

この交差点こそ、依頼人の山田のお姉さんが亡くなった交差点なのだ。アリスが事の真相を話し出した。

この喫茶店のスタッフの1人が事故を目撃をしている。警察は事故と片付けようとしていたが、何人かの目撃証言が出たため、事故の原因を解明するために動き出す直前で、所轄のトップに圧力をかけたようで、それで捜査は打ち切り。事故死として世間で発表された。

事故の目撃証言として、スタッフの一人が名乗りを上げていたが、何かの間違いと意見を交えたようだ。

そして消えるようにして、そのスタッフは喫茶店を辞めていった。オーナーもアリスもそれを不自然だと感づき調べを始めた。

調べを続けていく内に、お助けチャンネルなるものを発見した。そのチャンネルには、助けられてる方々のお礼の言葉などがかかっていた。それをまた調べていったらすみれに行き着いたと説明してくれたのだ。

すみれ「そ、そこまで…私のことを…」

アリス「勝手に貴女に関する個人情報調べてしまったのは謝ります」

アリスは、深々と頭を下げた。すると部屋にオーナーがやって来て、頭を下げた。

オーナー「アリスお嬢様は何も悪くないです。貴女のお助けチャンネルは、わたくしめが探し出したのです」

アリス「山吹オーナー…わたしが、貴女に…」

すみれ「いいえ、お二人は悪くは無いです。多少は驚きましたけど、お二人は、そのお辞めになられたスタッフがなぜ辞めなければならなくなつたのか…それが知りたいんですね？」

オーナー「わたくしめは、そうですが…アリスお嬢様は…」

アリス「…わたしは…わたしは、権力で事件や事故を揉み消すような世の中は間違っていると思います。先月、秀尽学園に怪盗団を名乗る者達の働きによつて、学園が隠していた鴨志田教諭の醜態が明るみに出た…そしてすみれさん、貴女も困った人達を放つては置けないのよね…ヴァイオレットというコードネームで活動してる…」

すみれは、もう苦笑いをするしかなかった。さすがは十師族の十文字家分家のご息女だ。

すみれ「そこまで知られては、隠す意味もありませんよね」

アリス「…これも貴女が信用に値する人物か調べるためだったのです」

すみれ「私はただのお節介好きなだけです」

アリス「お節介…今の日本では死んでも当然な言葉です…」

すみれ「そうかもしれませぬ…。でも世界には、そんなお節介好きがまだまだいますよ…」

アリス「ええ…わたしもそう思います。西ゼムリア…リベール、クロスベル、そしてエレボニア…」

アリスが言わんとしていることは、すみれもわかる。リベールのエステル達、クロスベルのロイド達特務支援課、エレボニア帝国のオリビエ、ユファイ達トールズ士官学院特科クラスVII組等を指していることも。

アリス「二度、何でも屋のエルフィン・スナイパーのカズヤさんにも言われたことがあります」

すみれ「エルフィン・スナイパー……ですか」

すみれは、エルフィン・スナイパーという何でも屋があるのは、知っていた。それは、エルフィン・スナイパーという名前に疑問を持ったからだ。

エルフィン・スナイパーは、芳澤すみれとして生を受ける前、まだ「光井和也」として生きていた時の幼なじみの七草真由美の二つ名である。だからすぐに興味を持った。

エルフィン・スナイパーは会社であり、社長と副社長の名前は

【カズヤ・アレイスター】

【マユミ・アレイスター】

すみれはそれを見て、自然と涙が流れた。前世の自分自身と真由美がそこにいるかのようには思えたからだ。

エルフィン・スナイパー社の社訓を見た。私達エルフィン・スナイパーは、受けた依頼はどんな依頼でも必ずやり遂げる。

どんな依頼……それは政府、軍、猟兵等表では、遊撃士がやらないこともすると意味合いだ。だが日本には遊撃士もほとんどおらず、西ゼムリアの遊撃士もほとんど来ない。だからすみれは、お助けチャンネルを作り、遊撃士の真似事をやり始めたのだから。

アリス「あの、すみれさん？」

すみれ「あ、はい、何でしょうか？」

アリス「あの、何やらぼおとされてたから…心配で」

すみれ「いえ、私は大丈夫なので、話を続けて下さい」

アリス「…わかりました、話を続けますね」

アリスの話は、こうして続いていく。

11204・5・03・喫茶店↓ジャスティス通り・昼過ぎ

すみれとアリスは、これからのことを色々と話した。お助けチャンネルに依頼が来るものをこなしていくとかを説明する。すみれも十文字分家の血を引いてるアリスがいてくれるのは、正直嬉しいのだ。なんでも1人でやってる時よりも効率は格段に上がるのだから。

そしてアリスは、すみれと同じ歳で十文字家らしく第1高校に通っている。すみれは秀尽学園であり、通学している学校の違いはあるぐらいか。

すみれとアリスは、互いに番号交換をする。それとスマホ以外にも互いに帝国のAR CUSを取り出して、番号交換をした。すみれは、帝国のRF社の臨時依頼をこなして、

報酬としてARCUUSを貰った。

アリスは、十文字家と帝国のRF社と協力体制のもとで、十文字分家にも贈られているのを、母であり、十文字分家当主代行のシャルロットからもらっている。

すみれとアリスは、自分達のことをクルセイダーズと名乗る事にしたのだ。

クルセイダーズとは、(Crusaders)は、スペイン語で【十字架をつけた集団】という意味を持つ言葉で、転じて十字軍を意味する。同義の英語のクルセイド(Crusade)より転じて【社会活動家】を意味する語でもある。(Wiki参考)

喫茶店のオーナーも心嬉しかっただろう、ハンカチで涙を拭っていた。

すみれとアリスの最初の依頼の仕事は、山田さんの姉の事故と喫茶店の従業員の謎の退職について調べることだ。

オーナーに一礼すると、すみれとアリスは、喫茶店から出て事故現場に向かう。

向かうと言つてもすぐ目の前の交差点である。

すみれ「ここが、依頼主の山田さんのお姉さんが事故死とされた場所…」

アリス「ここの交差点で事故が起きることは、ほとんどと言つていいほど事故は無かったわ」

すみれ「それなのに、死亡事故が起きてしまった…」

アリス「そうね」

すみれは辺りを調べ回るが、何かあるわけではない。事故の現物は、警察が片付けたのだろう。破片の1つすら落ちていない。ただ、山田の姉の血の跡なのかくつきりと残っている。

アリスも周りの気の流れでも調べてるのか真剣な表情をしている。

アリス「変わった風の流れ、気の流れは無いわね」

すみれは、サンドリオンを呼び出した。だが特別に何かあるわけではないと、発動を止めた瞬間、何か目に見えたのだ。

すみれ「な、なんなのアレ……」

アリス「どうしたの、すみれ？というかすみれの背中の中後ろに現れたのって何？」

すみれ「サンドリオンの事よね……これは私が生まれ持った能力と言うか……突然目覚めたと言いますか……」

アリス「私、お父様から聞いたことあります。希に魔法や魔術の才能を生まれ持って生まれてくる子供がいるって……」

すみれ「やっぱり気持ちが悪いか思うよね？」

アリス「気持ちが悪い？わたしはそんなこと思いません。むしろ羨ましいくらいですよ」

すみれ「羨ましい……ですか」

アリス「すみれ、わたしは貴女を偉いと思うわ。生まれ持った能力を今まで人のために使つて来たんでしょ？」

すみれ「うん、まあね」

アリス「今の日本を見たら分かるでしょ。力を持つてる人間は、他の弱い人間を苦しめてるだけ。十師族も百家もその他の人間も何もしない。そんな人間よりもすみれの方が優れてるわ！」

すみれ「私は、私の信念に基づいてやってるだけだから」

アリス「それでもよ、すみれ」

アリスは、この国、今の日本の状態有り様を嘆いている。元々十師族百家は、この日本の為の模範になるために誕生したはずだ。大陸の侵略者から祖国を守るために、我が身を削つて誕生した先祖の時よりも今は平和だ。この平和が人々を墮落させてしまつたのか、そう思つた事もあつた。

だが今は違う。すみれやカズヤと出会つて考えを改めた。例えそうだったとしても抗う人々がいることがわかつたからだ。

すみれ「ありがとう、アリス」

アリス「大分、道がそれちやつたみたいだけど、さつき何かが見えたつて言つてたけど、何が見えたの？」

すみれ「はつきりとはわからないわね。ただサンドリオンを発動させた時、何か光ったの」

アリス「光系統魔法が使われた？」

すみれ「それは無いかな。発動させた魔法の形跡は探ることはできるから」

すみれは、サンドリオンを発動させれば、“カズヤ”の第3の眼がつかえるようになる。それで確認したが、光系統魔法を使った形跡は無かった。

だがわかった事がある。

あの光がなんなのか、わからないことがわかったのである。すみれも専門家ではない。第3の眼で見えていてもわからないものもあるのだ。

すみれ「…これ以上は、この場所からは何もでないでしょうね」

アリス「ええ、わかりましたわ」

すみれとアリスは、そう言うのと十字正義の慰霊碑の前に来て、手を合わせた。

そして次は、すみれとアリスは、ゴールデン・マウンテン社がある、渋谷方面へ行くことにする。

4-4-5・03-帝国（エレボニア）へ。

111204・5・03・渋谷・昼過ぎ

新東京第2開発地区十区から渋谷まで導力列車でやって来たすみれとアリス。渋谷は東京で一二を争う人が集まる場所である。今日からゴールデンウィークって事もあり、特に若い世代が多い。

すみれ「人が多いですね」

アリス「今日から休みだからね」

すみれ「休みであつても、お助けチャンネルに依頼は結構きますから」

アリス「それだけ、人々が助けを求めてるって事かしら」

すみれ「まあ…緊急を要しない依頼もありますけどね」

今の日本、特に東京都を離れると魔物が出没する場所もあるのだ。だから地方は、遊撃士を欲しているのだ。だが日本には、遊撃士協会の支部はあるが、なんせ数が足りない。全く需要と供給のバランスがおかしいのだ。

だから地方は、警察官や軍官が魔物退治に繰り出されるが、魔法や魔術の使えない者達ばかり出されている。魔術や魔法が使えなくても、剣術系が優れていれば、魔物と戦

えるのは実証済みだ。

だが大事な警察官や軍官をそうそう出したくはない。だから遊撃士協会やお助けチャンネルに依頼を出す。

最近になって日本人の遊撃士も増えてきたようだ。日本で遊撃士が職業選択の1つとも言えるようになってきた。

アリス「とにかく今は、山田さんのお姉さんのことに専念しましょう」

すみれ「ええ」

すみれとアリスは、そう言っただけで人の流れを逆らいながらゴールデン・マウンテン社に向かう。

やっとの思いで、ゴールデン・マウンテン社に到着。すみれとアリスは、ゴールデン・マウンテン社の華やかな歴史のコメントが置かれている1階に入っただけで見る。

【ゴールデン・マウンテン社、七耀歴1155年創業】

初代社長―門倉弥右衛門（1155～1173）

2代社長―門倉蔵衛門（1173～1186）

3代社長―門倉菊衛門（1186～1199）

4代社長―倉本達郎（1199～1200）

5代社長―四道孝政（1200～）

今は5代目社長の四道孝政。4代社長の倉本達郎の不慮の事故により、副社長であった四道孝政が社長に就任。臨時株主総会でも満場一致で決まっている。

今は日本国内に留まらず、世界に羽ばたいています、とアナウンスが流れている。

すみれもアリスも経済の時間で聞かされている企業の名前である。

ゴールデン・マウンテン社は、元々は食品加工会社であったが、3代社長の門倉菊衛門が、文房具分野にもシェアを拡大。今は、日本国内だけではなく、台湾、東ゼムリア共和国はもちろん、エレボニア、クロスベル、リベール、カルバードとシェアを拡大中。すみれとアリスは、ゴールデン・マウンテン社の見学者みたいになっている。ただ休みというだけあって、他の見学者もたくさんいる。

すみれ「山田さんのお姉さんが勤めていたのは、本社ビルではなく、帝国支部…エレボニア帝国にある帝国支部…」

アリス「帝国支部…」。ならあの端末で調べて見ましよう！」

すみれ「そうだね」

誰でも見れる端末がある。やはり端末は、就活をしているような学生が沢山いる。すみれとアリスもその中に混じって、端末に備え付けられている椅子に座る。

端末を操作して、色々な情報を見るが、当たり障りないものばかりしかない。何かを入力するような場所もない。ここで不正入力できれば調べられるだろうが、リスクが高

すぎる、とすみれは判断した。

すみれ「うーん、普通に会社情報しかないわね」

アリス「まあ、学生が見るくらいの端末でしかないしね…」

すみれ「そうだよね…」

アリス「どうする、すみれ？」

すみれ「…どうすると言われても…」

すみれがどうするか迷っていたら、彼女のスマホにメールが送られてくる。すみれはすぐにメールを見る。そのメールには

「ヴァイオレット殿、ゴールデン・マウンテン社の事実が知りたければ、エレボニア帝国にある帝国支部を調べるといい。ヴァイオレット殿が知りたい情報が見つかるだろう」

すみれはすぐに回りをキョロキョロする。前も新島真の件でもそうだが、日本では全く伝えられていない。

アリスもすみれのスマホを見て驚いている。

アリス「これって…すみれ…」

すみれ「ええ、以前の依頼でもこのメールに助けられたわ。でもどうして？」

すみれはすぐに端末の場所から出て、回りをキョロキョロする。自分にこんなメールを送りつけるとは、回りにいるに違いないと探すが、そのような人物はいない。

すみれ「それにしても…何故…」

そう思いながらも以前の新島真に關しても、この匿名のメールの送り主が色々と教えてくれたのは事実。すべてすみれだけで探し当てたのではない。

アリス「その匿名のメールの情報、信用しても良いのかしら？」

すみれ「うん、信用できると思うわ。今は少しでも何か手がかりになる情報が欲しいから」

アリス「でもエレボニア帝国に行かないと行けないわよ？」

すみれ「行くしかないか。サンドリオンの力を使って行くしかないか…」

アリス「サンドリオンで行く？まさかあの背後霊みたいなあれで？」

すみれ「そうよ」

アリス「わ、わたしはそんなの出せないわよ…。そ、そうだ十文字家の専用の飛行船で行きましょう！」

すみれ「飛行船で行ければ、それに越したことはないけど…」

すみれも帝国に密入国するつもりはない。出来れば正規ルートで行きたい。今までの依頼で外国に行く場合は、正規ルートで行っていた。だが時間がかかるため、サンドリオンの能力を使って行き来をしたこともある。

アリス「そうと決まれば、成田国際空港に行きますわよ」

すみれ「え、わかったわ」

アリスに引つ張られずすみれは、成田国際空港へ向かうことになった。

111204・5・03・ ↓ ・日本国成田国際空港↓エレボニア帝国・サザーラント州セントアーク空港（1204・5・04・ 到着予定）

一旦、すみれは、自宅にパスポートを取りに帰った。アリスは、十文字分家の導力車で迎えに来てくれた。もちろん運転手は、お付きの人が運転してるが。

すみれとアリスは、十文字分家のお付きの運転手が運転する導力車で成田国際空港を目指して走っている。

アリスは、自分の母親にわけを話して、やりなさいと言われたそうだ。何を言われたのかと言えば、すみれと共に人助けをすることを。

アリスの母親であるシャルロットは、アリスがそう言ってくれたことを嬉しくもあり、寂しくもあつた。でも反対はしない。アリスが信じる道を進んでほしいからだ。

アリス「すみれはご両親に言わなくても良いのかしら？」

すみれ「私は良いよ。母と姉は、事故で死んじゃつたし、父はまた単身赴任で外国に行っちゃつたし…」

アリス「そう…寂しい、すみれ？」

すみれ「うん：母と姉を失った頃は：泣いてたし寂しかった：でも父のおかげでなんとかなったかな」

アリス「立派なお父様ね：」

すみれ「アハハ：アリスのお父さんほどじゃないけどね」

そんな話をしながら成田国際空港へ向かう。

ー

成田国際空港に着いたすみれとアリスは、十師族が使う特別のレーンがあり、そこに行く。ゴールデンウィーク中つてこともあり、休みを海外で過ごす人間も多い。だから空港内も人が多いのだ。行き先は、リベール王国が1位、2位が台湾、3位がレミフェミアの順番である。

十師族専用レーンを歩いて行くと十文字家の飛行船が置かれている場所へやって来る。

空港での色んな事が省かれていて、時間が省略できるなどすみれは思った。

十文字家お抱えのフライトスタッフがすぐに来て、アリスにすぐに出発するのか聞いています。

アリス「すみれ、すぐに出発できるみたいだけど、どうする？」

すみれ「行けるのならすぐに行きたいかな」

アリス「わかったわ」

アリスは、十文字家のお抱えのフライトスタッフにそう伝えると、すぐに出発のための行動に移る。すみれは座席に座ると隣にアリスも座って来た。すると黒服を纏った初老の男性が2人の前に立った。

田中「すみれ様、十文字分家の執事でアリスお嬢様の付き人の田中と申します。以後お見知りおきを」

すみれ「芳澤すみれです。私こそ宜しくお願ひします、田中さん」

自己紹介などを終わらせたすみれ達は、フライトスタッフによる操縦で飛行船は、空へ上がりエレボニアへ向けて出発したのだった。

エレボニア帝国・サザーラント州セントアークの空港に着く予定時間は、明日の06:30分。着くまで空の旅を楽しむすみれとアリスであった。

5-1-5-1-5・03↓5・04-トラウマ。

1-1-204・5・03・朝・東ゼムリア砂漠地帯上空

東ゼムリア共和国よりも西側は、もう砂漠地帯。この辺りの砂漠化は、どんどん広がっている。この砂漠化は、ゼムリア各国の共通の課題である。

そんな砂漠の上空を飛ぶ十文字分家の飛行船。飛行船と言っても内部はちゃんと生活できる環境も整っている。

すみれとアリスは、先ほど簡易シャワーを浴びた後、晩御飯を食べてゆっくりとしている。

アリス「どう、外の景色なんかは？」

すみれ「そうね、日本国内にはわからない景色だよね……」

アリス「そうだったよね、すみれは外国に密入国してたんですものね……」

アリスは小悪魔的な表情ですみれを見ている。

すみれ「うっ……それはなんと言いますか……」

アリス「なんてね……。貴女は自分の欲のためじゃなく、困ってる方々のためにやったことですよのね」

すみれ「まあ、そうだけどね……」

砂漠地帯の空に広がる星ぼしを見る、すみれ。いくら人助けのためだからと言っても法を破つてはいけないと思っている。だからすみれは、アリスに感謝しているのだ。

下が砂漠地帯つてこともあり、星星が綺麗に見える。日本からは地上が明るすぎて、見えない。アリスは田中と何か話してならすみれに話す。

アリス「明日の明け方に着く予定だからもう寝ましよう」

すみれ「明日の明け方：わかったわ」

アリス「部屋は1つしか無いけど、すみれ、良いわよね？」

すみれ「うん、私は構わないですけど」

アリス「それじゃあ、明日も早いし寝ましよう」

すみれ「ええ」

アリスとすみれは、1つの部屋に入る。仮眠室つてだけあってベッド、ソファアールや机や導力テレビ、導力パソコンも置かれている。

アリス「すみれ、貴女はベッドに寝て良いわよ」

すみれ「アリスはどうするの？」

アリス「わたしは、ソファアールで寝るわ」

すみれ「え？良いのアリス？」

アリス「構わないわ」

すみれ「…アリス、なら半分こして寝よ？」

アリス「すみれって意外にさみしがりやさんなのかしら？」

すみれ「べ、別にそんなんじゃないわよ…もう良いから」

アリス「ごめん、ごめんね。すみれは心配してくれてんでしょ？ありがとう」

すみれとアリスは、2人でベッドで寝ることにした。お互いに寝るまでお互いにニヤニヤと笑っていたのだった。

11204・5・04・朝・帝国・サザーラント州セントアーク

朝日が心地よく照らし始めた頃、帝国のサザーラント州の都であるセントアークの空港に着いた。

すみれもアリスも、まさかゴールデンウィークを帝国で過ごすことになるなんて予想もしていなかった。

山田のお姉さんの依頼を受けて、まさか帝国に行くことになるなんて、受託した時にも思わなかった。

あのメールがすみれとアリスを帝国へと誘（いざな）ったのだから。

すみれは謎の夢を見ていた。街が赤い炎におおわれて、周りには人々が赤い血を流して倒れている。

だが街並みが日本ではない。どうやら帝国の街並みのようである。

すみれ「な、なんなのこれは……？つてここはどこ？アリス？アリス！どこにいるの？」
すみれは、アリスを呼ぶがアリスからの返事はない。すみれはサンドリオンを呼び出す。

すみれ「魅せて、サンドリオン！」

サンドリオンで第3の眼で回りを見渡す。すみれも日本の街並みではなく、帝国の街並みつてことを理解する。しかし次なる疑問が浮かび上がる。

何故、自分だけが帝国に降りたつているのか。何故帝国の街並みが焼けて燃えているのか？

すみれ「こんなの見せれると、昔のトラウマがよみがえつて来るじゃないの……」

昔のトラウマ、すみれが言ってるのは、母と姉を奪った精神暴走事故を言っているのか。はたまたすみれとして生まれ変わる前の「光井和也」として生きたときの苦い経験を言っているのかはわからない。だがどちらにしてもすみれを苦しめる出来事であるのは間違いない。トラウマがすみれを苦しめる。

すみれ「……う……う……やめて！私の中に入って来ないで!!」

すみれは頭を抱えてしやがみこむ。

すみれ「……ごめんなさい、ごめんなさい……私が……！」

すみれは、急に謝りだした。トラウマがそうさせてるのだ。するとすみれの前に2人の女性が現れる。1人は、30代後半から40代前半の女性。もう1人が10代半ばの女性。その10代半ばの女性は、すみれのような容姿をしているのだ。

すみれ「……!!お母さん、かすみ！」

かすみ「すみれ……」

母親「すみれ……」

かすみ「ゆ、許さない……許さないすみれ……」

母親「貴女より優秀なかすみに死に貴女が生き残ったの？」

すみれ「……!!」

かすみ「……貴女が死ねば良かったのに……。私が死ななきやいけなかったの？」

すみれ「……!!いやあ!私の中に……!!お母さん……かすみ……!私はそんなつもりじゃ……」

!

すみれとかすみの母親とかすみと思われる女性達は、すみれにどんどんと畳み掛けてくる。

すみれはどんどんと精神と意識を失っていく。

すみれ「やはり…私は生きてちやいけなかったのかな…。ごめんね、お母さん、かすみ…私が生き残ってしまつて…」

すみれから魔力や精神と意識がどんどんと吸い上げられていく。その時、どこからか声がしてくる。

??「芳澤すみれさん！貴女はこんなところで朽ち果てる人ではありません。貴女は、これからの激動の時代に必要な方。こんな精神攻撃を受けてる場合ではありませんわ！」

すみれ「貴女は…貴女は誰なの？」

??「芳澤すみれさん、貴女とはいざれ会うことになるでしょう。貴女の力はこんなものではないはずです！こんなところで朽ち果てるものではないはずです！」

すみれはそう言われると、不思議と力が湧いて出てくる。身体から焔の力が湧いて出てくる感じになっている。

すみれ「これって…まさか前世の…！」

??「そうです。貴女の本来の力…何者にも消せぬ、熱き焔…貴女自身の力」

すみれ「…私自身の力…」

??「貴女はもうそんな精神攻撃に惑わせないでしょう？」

すみれは、ふと自分の手に何か持っていることに気がつく。それは前世で一番使つて

いた武器、太刀であった。

光井和也の武器とは、銃型CADや銃のイメージが強いが、太刀も使っている。そう八葉一刀流の使い手でもあるのだ。

すみれは大きく息を吸うと、精神を統一させた。

すみれ「闇を滅せよ！八葉一刀流、三の型、業炎撃!!」

八葉一刀流、三の型、業炎撃が決まる。するとすみれを苦しめていた、母親の姿も姉のかすみの姿も消えていた。そしてそこには、母親でも姉でもない者が立っていた。

すみれ「貴方が私にあんなものを見せてたの？」

??「ふふつ、左様。私の名は、メルキス。まさか精神攻撃が破られるとはおもいませんでしたけどね。あのエレボニアの小娘の仕業か……」

すみれ「エレボニアの小娘？私にこんなことを？」

メルキス「知れたことよ……。お前はこそこそとゴールド・マウンテン社のことを調べてるだろう？」

すみれ「…調べる？何のことかしらね…」

メルキス「とぼけても無駄だ。まあいい…どうせお前は精神世界にて死ぬのだからな！」

すみれ「私はこんなところで死ぬわけにはいかないのよ！」

メルキス「いいや、死ぬんだお前は！」

メルキスが、すみれに攻撃を仕掛けてきた。すみれは、メルキスの攻撃を簡単にかわす。

すみれ「魅せて、サンドリオン！」

サンドリオンで攻撃を仕掛ける。メルキスは、サンドリオンの攻撃をかわす。すみれは、メルキスに対して走り出す。

すみれ「サンドリオン！」

メルキス「同じ攻撃が通用すると思っているのか？」

すみれ「隙を見せたわね。八葉が…無想霸斬!!」

メルキス「ぐはっ…な、なんだと…お前…八葉を…物真似では…なかったのか…」

すみれ「物真似で八葉を使うわけじゃないでしょう…。八葉一刀流、千葉流派…新体操の他に中学まで千葉流派の道場に通っていた…」

メルキス「八葉一刀流…千葉流派か…見事だ…」

メルキスはそう言うと、灰のように崩れていく。するとすみれがいる場所もガタガタと崩れ始める。

すみれ「え？崩れるの？ち、ちよつと待ってよ…」

??「芳澤すみれさん、貴女の戦いぶりは見事でした。貴女はわたくしが見込んだとお

りでした。さあ、手を伸ばして下さい。貴女の大切な仲間が呼んでますよ」

アリス「すみれ！すみれ！」

すみれ「アリス！私はここよ！」

すみれは、謎の声に言われた通りに手を伸ばす。すみれの精神は現実に戻っていく。

1-1204・5・04・朝・帝国・サザーラント州セントアーク空港。

すみれは精神世界から戻って来ると、アリスに抱きしめられていた。

すみれ「アリス……」

アリス「すみれ、すみれ良かった……良かったわ……」

すみれ「アリス、ありがとう」

アリス「本当に良かった……。貴女うなされ始めた時、慌てましたわ……」

すみれ「うなされていた？」

アリス「ええ……いきなりですわ。貴女がうなされ始めたのは」

すみれ「いきなりうなされ始めた……」

すみれは考える。メルキスの精神攻撃が始まって、あの惨状を見ることになったのか

と。だが本人は倒したのだから、本当がなにかはわからないままである。

アリス「そうですね、わたしはどうしたらわからなくて、田中を呼ぼうとしたら、謎の

声に言われるように、やってみたの」

すみれ「謎の声！それってアリスも!?」

アリス「え!?!すみれにも聞こえてたんですか?」

すみれ「うん…その謎の声のおかげで私は助かったかな」

アリス「謎の声！貴女にも聞こえてたのね！」

アリスにも謎の声が聞こえたようだ。苦しむすみれを助け出したいのなら、言う通りにしてくれと言ってきたようだ。アリスはその声の言うとおりにやったのだ。精神世界に引き込まれたすみれに呼び戻すように名前を呼び続けたのだ。

すみれ「聞こえたよ、アリスが私を呼ぶ声がね」

アリス「わたしも必死だったから…。このまま眠り続けるんじゃないかって心配だったんだから！」

すみれ「本当にありがとう、アリス」

アリス「当たり前でしょ、親友で仲間なんだから！」

すみれ「ふふっ、ありがとう。アリスがピンチになったら私がすぐに駆けつけるから！」

アリス「ありがとう、すみれ。わたしはそうならないように頑張るわ」

すみれとアリスは、互いにそんなことを言い合っていた。

ー帝国・帝都ヘイムダル・バルフレイム宮内・??の部屋。

すみれとアリスが到着した白亜の旧都セントアークから真北に行ったところにあるのが、帝国の首都であるヘイムダルである。

そのヘイムダルでも一際目立つのが、アルノール家である皇帝一族や帝国政府、議会、宰相執務室などもバルフレイム宮に入っている。

そのバルフレイム宮のとある部屋の人間は、バルコニーにて、セントアーク方面を見ながら考え事をしていた。

??「なんとかなりましたね、大賢者」

大賢者「解、当事者の芳澤すみれ、その仲間の十文字アリスも難を逃れています」

??「良かったわ。万が一わたくしが自ら出向く必要があったから」

大賢者「解、マスターが出向く必要は無いのでは？万が一な場合の時、あのエルフィン・スナイパー…何でも屋に依頼することも出来ましたが？」

??「エルフィン・スナイパーの方々に頼むのは簡単よ。でも何故そうなのか説明しなくてはいけないでしょ？」

大賢者「解、あのエルフィン・スナイパーの一人、カズヤ・アレスタは、マスターと転生者の可能性と何かの原因でこの世界へ飛ばされた可能性があります」

?? 「うーん、平行世界のわたくしが転生したつてのは、わかるのだけど、何かの原因でこの世界へ飛ばされたつてのは、何なのかしら？」

大賢者「解、飛ばされる原因、何者かによる召喚、または事故や何かに巻き込まれる形でその世界へ行ってしまうような感じですね」

?? 「巻き込まれる可能性ですか……」

?? もここ辺りがないわけではない。転生する前に、どこかに飛ばされそうになった事がある。そんなことを考えていると

大賢者「解、前世のマスターが『光井和也』だった時、横浜、日本騒乱にて大亜の魔法師が大亜の敗北をを悟つて、究極魔法の1つである『ベツレヘム（隕石）』を発動させた。マスターは、緋の騎神テスタロツサに乗り込んで、『ベツレヘム（隕石）』地球の軌道から弾き飛ばしました。あの時、異次元の割れ目も観測していました」

?? 「大賢者、あの時はそんなこと言わなかったじゃないの？」

大賢者「解、あの時は必要の無かった情報だったので言いませんでした」

?? 「あの時は、わたくしも余裕が無かったですし、不特定の情報を聞けなかったでしょうね」

大賢者「告、これからどうするつもりですか？ マスター…アルフィン・ライゼ・アルノールとして？」

アルフィン「そうですわね：今のところは様子見かしら。もしすみれさんとアリスさんに何かあれば、わたくしは動きますわ。ですから大賢者、あの2人の動向を見守って下さいね」

アルフィンは小悪魔的な表情で大賢者に言う。その大賢者は

大賢者「解、わかりました。あの2人の動向に注目します。それにしても貴女は女の子になりましたね」

アルフィン「ふふっ、当たり前ですよ、わたくしは女の子ですもの」

アルフィンは、セントアークの方向を見ながら、そう言ったのだった。

6-6-5・04-帝国の問題と旅の出会い。

1-1204・5・04・朝・セントアーク空港↓白亜の旧都セントアーク

すみれとアリスは、色々準備を済ませると、白亜の旧都セントアークへ歩みを進める。

白亜の旧都セントアーク。帝国四大名門の一角であるハイアームズ侯爵家が治める侯都でもある。

かつては帝国の臨時帝都にもなった場所でもある。その説明は、ユファイ編で説明するので、すみれ編では省きます。

すみれ「白亜の旧都セントアーク：綺麗ですね」

アリス「そうね、日本には無い帝国建築がたくさんあるわね」

セントアークの街並みを良く見ていると、何かの式典の準備なのかいろんな物を見る。そう日本の物もあるのだ。物珍しく見ていると、年配の方がすみれ達に話しかけてきた。

お婆ちゃん「貴女達は、日本人移民街から来たのかい？」

すみれ「日本人移民街…？」

アリス「ううん、違うよ、東ゼムリア、日本から来たのよ、お婆ちゃん」

お婆ちゃん「そうかい、日本から来たのかい：懐かしいのお」

お婆ちゃんは、すみれとアリスに自分の過去話をしてくれたのだ。お婆ちゃんも昔は、日本に住んでいたと。日本と帝国が国交を樹立し、第1次帝国移民団として両親、一族で帝国へ渡ったそうだった。

渡ったすぐは、帝国貴族による差別意識も酷かった。平民も東ゼムリアから来た野蛮人と揶揄していた。第1次帝国移民団の日本人は苦労を重ねて、帝国に慣れることを必死に頑張ったそうだった。

それを重く見たハイアームズ侯爵も、何とかしようとしていた。だが上手くはいかなかった。

そして、台湾事件が起きる。

台湾にて、帝国のギリアスと日本の十文字正義が、手を取り合って、大漢に立ち向かって行ったこと。四葉真夜とシャルロット・ハイアームズも手を取り合ってか弱き人々を守ったと。

そんな中、フェルナン・ハイアームズが、ハイアームズ侯爵家の家督を継ぐと、日本人移民に対する差別を無くす改革を断行する。

長年の改革の努力が実って、今は帝国人と日本人の差別意識は無くなった。まだ平民

と日本人の壁が無くなっただけで、貴族との壁は残っているそうだ。それは日本人だけではなく、平民との確執もまだまだあるそうだ。

平民と貴族の融和政策が去年施行され、改革断行されている最中である。

改革の断行者は、フェルナン・ハイアームズの二男である、フレデリック・T・ハイアームズである。

彼の政策のおかげで、セントアークは、平民も貴族も仲良く暮らせる都市として、帝国内外からも人気は上がっている。

詳しい話は、ユファイ編で説明するので、すみれ編ではこれくらいです。

お婆ちゃんとは30分くらい話してから、すみれ達は行動を開始する。

セントアークは、貴族街、平民街、中央区、商業区と分かれているが、昔の名残で残っているだけで、貴族街にも平民は住んでいて、平民街の方にも貴族が住んでいる。セントアークの中央区には、七耀教会の大聖堂がそびえ立っている。

アリス「ゴールド・マウンテン社の帝国支部の情報は遊撃士ギルドで聞いてみましょう」

すみれ「そうだね。一般の方々に聞くより確実性はあるでしょうね」

アリス「まあ遊撃士ギルドは、商業区にあるのが定番だろうから商業区に行ってみましょう」

すみれとアリスは、中央区から商業区へ移動する。

商業区に移動中も日本人観光客を見かける。日本人移民街に住んでいる日本人ではなく、日本本土から来ている日本人のようだ。

気にもせずにすみれとアリスは、遊撃士ギルドであるセントアーク支部に来てみると、ギルドが封鎖されている。普通ではあり得ないがすみれとアリスはまわりの人達に聞いてみた。

おぼちゃん「遊撃士ギルド、セントアークに限らず、帝国全土のギルドは封鎖されたわよ」

すみれ「え？帝国全土ですか？」

おぼちゃん「貴女達は観光客なのかしら？」

すみれ「はい」

おぼちゃん「それじゃあ知らないか。2年前にギルドの帝都支部が襲撃されてから、帝国全土のギルド支部が閉鎖されたんだね」

アリス「閉鎖って遊撃士協会がそんなことをするわけが…」

おぼちゃん「あんまり大きな声では言えないけど、帝国政府が閉鎖を決めたそうね」
すみれ「帝国政府がそんなことを…」

アリス「ギリアス・オズボーン宰相が取り決めたってことかしらね…」

おばちゃん「そうね、みんなオズボーン宰相が潰したって噂はしてるわね。帝国でも1カ所だけギルドはやってるところはあるわよ」

すみれ「本当ですか？」

おばちゃん「もちろんだよ、レグラムだ」

すみれ「レグラムですね、わかりました」

おばちゃん「レグラムに行くのなら、帝都経由して行くよりもパルムから東の街道を
目指してエベル湖を渡った方が早く行けるわ。列車もちゃんとセントアークからパ
ルム行きも通ってるから」

すみれ「わかりました」

アリス「おばさま、ありがとうございます」

すみれとアリスは、おばさんに言われた通り、セントアーク駅に向かう。

すみれ「まずは、パルムに行きましよう！それから東の街道を歩いて行きましよう」

アリス「ええ」

すみれとアリスは、セントアーク駅に着くと、中に入って行った。

11204・5・04・昼過ぎ・東日本街街道の途中にて。

東日本街街道を歩いていると、すみれとアリスは何度か魔物に襲われた。何故襲われ

たかと言えば、魔物避けの街灯が壊されたままである。

壊れた原因は。パルム騒乱の時に、ゴールデン・マウンテン帝国支部が放った人形兵器群や日本街移民街を守っていた自警団や猟兵達が暴れたため、魔物避けの街灯まで倒れてしまったのだ。

今は帝国政府、ハイアームズ侯爵家もパルムや日本人移民街の復旧作業で街道まで手が回っていないのだ。本来なら遊撃士が請け負う依頼でもあるのだが、なんせ帝国には、遊撃士はいないことになっている。ただレグラムを除けば。

すみれは、アリスから渡された太刀で、アリスは腕輪型CADで魔物を倒した。

魔物に警戒しながら、東日本街街道を歩いて行くと、人工的な丘が見えてくる。この丘は、以前ユファイ達を訪れたパルムの丘でもある。

すみれ「あの丘……不思議な感じしない？」

アリス「あの丘……確かに不思議な感じはするけど、特別に何かは感じないわよ？」

すみれ「丘自体に不思議な感じはしないけど、丘の一部のあの森林地帯からは不思議な感じがする」

アリス「……まあ確かにね」

―パルムの丘・イストミア森林エリア

一度ユフィサイドで説明はしたが、もう一度説明をする。パルムの丘の一部を人工の森林エリアにしている場所が、イストミア森林エリアである。セントアークの西に広がるイストミア大森林の一部の木々を許可をもらい植えさせてもらったのだ。

人工の森林エリアだが、神秘的な雰囲気が漂っている。それは魔女の森に生えているエリン草がそうさせてるのかもしれないと言われている。

すみれ「ちよつと行ってみる？」

アリス「ええ、ちよつと行ってみようかしら。私、ちよつと興味も湧いてきたし」
すみれとアリスは、パルムの丘、イストミア森林エリアに歩き出した。

イストミア森林の中は、人工的な森林だが神秘的な感じは漂っている。その中を歩いて行くと、すぐに丘の頂上に出る。丘の頂上からは、右手には日本人移民街、左手には、パルムの街が見える場所だ。すみれとアリスが頂上を訪れると先客がいたようだ。

その先客は、青色の髪の毛に片目を隠すようなヘアスタイルをしている。いやゆるキタローヘアスタイルである。服装はどこかの制服を着ている格好である。何をしているのかと言えば、日本人移民街の方を見ているような感じである。その先客は、すみれとアリスに気がついたようだ

??「おや、別のお客さんが来たようだ……うん？君達は日本の本土からきた日本人かい

？」

すみれ「そうですが……。貴方は？」

?? 「僕かい？僕は日本本土から来た旅行者だよ。休みを使って帝国旅行をしたくなつてね」

アリス「そうですか」

すみれ「日本は今、ゴールデンウィーク中ですからね」

??? 「君達こそ2人で帝国旅行かい？」

すみれ「まあ、そんなところでしようか」

??? 「女の子2人の帝国旅行：か。僕は良いと思うよ」

アリス「お兄さんも帝国旅行ですか？」

??? 「アハハ、1人で帝国旅行中さ」

すみれ「お一人で？彼女さんとか連れてないんですか？」

アリス「こ、こらっ、すみれ！」

??? 「アハハ、別に構わないよ。僕は彼女なんていないからね」

すみれとアリスは、この青年の容姿なら彼女ぐらいいろと思つていたのだ。

??? 「さてと、僕はレグラムに向かうとしようかな。君達はパルムに向かうのかい？」

すみれ「え!?そちらもレグラムに？」

??? 「そちらもということ、君達もレグラムに？」

アリス 「はい、レグラムにある遊撃士ギルドに用があるんです」

??? 「レグラムの遊撃士ギルドに用事か？何か困った事でもあるのかい？」

すみれ 「本当は、セントアークの遊撃士ギルドとある事を聞きたかったです」

??? 「レグラム支部にいるトヴアルさんなら何かしら聞いてくれると思うよ。トヴアルさんとは知り合いだし、口利きしてあげるから」

すみれ 「良いんですか？」

??? 「構わないよ」

すみれは何も思わなかったが、アリスが警戒心を露にしている。

アリス 「すみれ、簡単に信用しすぎよ？」

すみれ 「うん？どうして？」

??? 「そちらの女の子にはあまり良い印象ではないみたいだね」

アリス 「貴方、ただの旅行者にしては、何かがおかしいのよね。この辺りは魔物が出るのになんの武器を持って無いわけじゃないよね？」

??? 「なるほど、魔物は確かに出たかな。でもね…僕も武器はちゃんと持ってるよ…」
青年は太刀を背中から取り出す。

すみれ 「太刀…」

??? 「僕の得物は太刀だよ。まあ騎士剣や導力銃も使えるけど、太刀が一番しっくり来るからね」

アリス「……………」

??? 「どうかしたのかな？」

アリスはずっと青年が出した太刀を見ている。それも真剣な表情で見ているのだ。

アリス「貴方…もしかして…お父様の最後の弟子の…結城理さん？」

理「君は、どうして僕の名前を？」

アリス「私の名前は十文字アリス…。十文字正義の娘…貴方の事はお父様から聞いていました。最後の弟子だと言っていました」

理「君がアリスなのかい？よく正義さんから話を聞かせてもらってたよ」

アリス「そうですか。お父様から…」

十文字正義と目の前の青年、結城理は、師匠と弟子の関係でもあった。

1-1204・5・04・昼過ぎ・パルムの丘・イストミア森林

十文字正義と結城理は師匠と弟子の関係である。

結城理は、数年前に世界の命運を掛けた戦いに仲間と共に切り抜けた。

そんな戦いに身を置くことになったから、十文字正義の道場に入った。

十文字正義は、結城理のただならぬオーラを見抜き、彼の力を伸ばすために限られた時間で修行されたとされる。

アリス「すいません、結城さん。疑うような発言をしまして」

理「別に気にしていないから。それより君達は、ただ旅行に来たって感じではないよね？」

すみれとアリスは、理にある程度の事を話す。お助けチャンネルの事。ゴールド・マウンテン社の帝国支部の事を調べに帝国へ来たこと。この依頼を出された山田さんのお姉さんが自殺か他殺かどっちかを判断をするためにだが。

理「なるほど、まさか君がお助けチャンネルを作ったのか…凄いな」

すみれ「お褒めを頂きありがとうございます！あ、まだ私の自己紹介がまだでしたね。私は芳澤すみれです。よろしくお願いします、結城理さん！」

理「よろしく、芳澤さん」

アリス「改めてお願いします、結城さん」

理は、すみれとアリスと共に行動することになった。理も帝国には旅行のつもりでやって来たが、日本では流れていないゴールド・マウンテン帝国支部の問題、日本の子供達を猟兵、生体実験のために帝国支部に拉致をしていた事。その他諸々の情報が日本では報道されていないこと。獅童一派が報道関係に圧力を加えられるだけの権力を手に

していることを肌で感じてしまうほどになっていると、理はわかったのだ。

カルバードのC I Dに所属している真田明彦経由で、帝国のパルム事件は聞いてはいたが、やはり自らの目で確かめたくもあった。

パルムの丘から日本人移民街の様子を伺っていたときに、すみれとアリスと出くわしたというわけだ。

理はこれも何かの力が働いた運命だと思ったのだった。

そんな時だった、理のA R C U Sが着信がなったのだ。すぐにホルダーから取り出して出る。

理「はい、結城理ですが：あ、はい、はい、わかりました。それでは日本人移民街にですね：はい」

理はそう答えると、A R C U Sをホルダーにしまう。

すみれ「あの、どうかしましたか？」

理「レグラムのギルドから連絡があつてね、どうやらトヴアルさん今、帝国にいないらしい。依頼でクロスベルに行つてみるみたいだね」

すみれ「そうですか、それじゃあ、このままレグラムに行つても無駄足つて事ですネ」
アリス「理さん、日本人移民街がどうのつて言つてませんでした？」

理「僕達の知りたいことを知つてる人物が日本人移民街に居るつて教えてもらったか

な」

すみれ「日本人移民街にですか」

理「そうだね」

アリス「日本人移民街：パルムの街の騒乱のきっかけになった場所：」

理「あまりそのことを気にしても仕方がないかな」

すみれ「複雑な気持ちにはなりませんよ」

アリス「そうね、ゴールド・マウンテンの帝国支部が、人身売買、武器の不正輸出に関わってるのなら、大問題になるはずわ。そんなことを日本政府やマスコミが言わないわけがない」

すみれ「でも日本では、帝国支部の問題なんか何も報道はしてません。精神暴走問題や鴨志田問題とかしか」

理「うん、そうだね。意図的にゴールド・マウンテンのこの報道は避けてるみたいだね」

アリス「獅童一派とゴールド・マウンテン社が裏では繋がって可能性もあるわね」

すみれ「：：それしかなさそうですね」

理「ゴールド・マウンテン社：日本では文房具用品の王手：そんな会社と獅童正義がね：：」

アリス「理さん、日本人移民街に行けば、何か分かるんですよ？」

理「確証は無いけど、分かることはあると思うよ」

すみれ「それでは、日本人移民街へと行きましょう」

アリス「ええ」

理「わかった」

すみれ、アリス、理の3人は、パルムの丘から日本人移民街へと続く街道を歩いていく。

7-7-5・04-日本人移民街にて。

1-1204・5・04・昼過ぎ・日本人移民街

日本人移民街

ここは、日本から帝国に移民してきた人間達がこの辺りを開拓して、街を作ったのだ。最初の移民団の日本人達が、帝国で生きていくために、帝国という国を学び日本系帝国人としての基礎を作ったのだ。

今では移民3世く5世の世代になっており昔の苦勞を知っている者も少なくなっている。

移民団が街を作った頃は、日本家屋が多かったが、今では帝国の建物も混じった街になっている。

リベールとの戦争の時も、帝国に忠誠心を示すために激戦地に自ら志願した日本系帝国人もいた。

今ではそれも話しを聞いたぐらいしかいない人間ばかりになってきている。

それから平和に暮らしていたのに、本土から来たゴールド・マウンテン社の帝国支部が、人身売買や武器の不正輸出をやっていたのだ。

日本移民街の人間は、驚きの連続だった。まさかそんなことをしている会社が日本人移民街に進出しているなんて思ってもいなかった。

西トウキョウ駅の西側にも日本人移民街はある。向こうはすぐにサザールント州の影響下に入ったが、東の日本移民街は、サザールント州から自治を認められて自治区となった。

しかしそれが、日本からの悪党を呼び寄せることになったと、パルム騒乱で自治区長が辞任した。後に就任した自治区長が、自治権をサザールント州に返上したのだ。

自治区長は辞任し日本移民街の自治は終わりを迎えた。

今は、日本移民自治区からサザールント州の中の東日本移民街としての手続きの最中のようであり、ただ日本人移民街の人々は普通通りに暮らしているようだ。

そんな中、すみれとアリスと理は歩いている。

アリス「ここって何だか懐かしい気持ちになりますわ」

理「そうだね、帝国の中にあっても日本に戻ってきた感じになるね」

すみれ「確かに」

理「うつとりするのは、後でするとして今は、ギルドから聞いた人に会わないと」

すみれ「そのギルドから教えてもらった人物って誰なんですか？」

理「帝国軍情報局特務中尉、ミサキ・カミジヨウさ」

すみれ、アリス「帝国軍情報局特務中尉、ミサキ・カミジヨウ！」
理「なんだ、知ってるんだね」

すみれ「まあ…名前だけですけど。以前クロスベルの騒乱を収めた1人だと」

アリス「そうね。帝国軍情報局の人間でありながら、クロスベルのために戦った女性って言われてるわ」

すみれ「理さんは、ミサキさんに会ったことはあるんですか？」

理「直接は会ったことはないよ。ただ僕の知り合いが、会ったことがあるね。一言で言えば、志は君達と一緒だね」

すみれ「私達と一緒…ですか？」

理「そう、か弱き人達のために頑張っているところとか…」

すみれ「…導力ネット内で、そんなことを言われているのを見ましたことあります」

ミサキは、特にヨアヒム・ギユンターによるクロスベル騒乱の活躍で、特務支援課同様に一躍有名になっている。

帝国やもちろん、リベール、カルバード、他の地域、東ゼムリアにも名前は広まった。

理「まあ、議論するより、直接会った方が早いかもね」

すみれ「そうですね」

アリス「でも、そのミサキさんは、日本人移民街のどこにいらっしやるのか、わかり

ませんわ」

理「そこまでは聞いてないけど、おそらくは、日本人移民街の…町長屋敷にいるかも…」

すると何だか回りがざわめき始める。すみれ達もそちらを見る。するとミサキが歩いてやって来ている。そしてすみれ達の前で止まる。

ミサキ「貴女達が日本から来た人達かしら？」

すみれ「あ、はい、私達が日本から来ました者達です」

ミサキ「なるほど…ここではなんだし、話せる場所まで…鉄道憲兵隊の詰所まで行きましょうか」

ミサキは、そう言うとARCSを取り出し、どこかに連絡をした。

ミサキ「導力車を手配したわ。歩いて行けなくはないけど、貴女達を注目的にはさせたくないからね」

すみれ「確かに…注目的になりかねませんね」

しばらくすると導力車がやって来て、すみれ、アリス、理と乗り込み、助手席にミサキが乗った。運転手はミサキの部下である。

そして導力車は、鉄道憲兵隊の詰所に向かっている。

ミサキ「まだ自己紹介がまだだったね。私の名前は、ミサキ・カミジヨウよ。よろし

くね」

すみれ「私の名前は、芳澤すみれです」

アリス「私は十文字アリスですわ」

理「僕は結城理、よろしく、ミサキさん」

すみれ達は、導力車に乗せられて、鉄道憲兵隊の詰所までやって来た。鉄道憲兵隊が詰所として使っているこの建物は、かつてはこの日本人移民街を守ってきた自警団が入っていたものである。自警団が解散し領邦軍に組み込まれたため、鉄道憲兵隊が摂取したのだ。！なぜ摂取したのかと言えば、パルムから日本人移民街にも鉄道がひかれる予定があるためとしている。

ミサキ「ここが日本人移民街の鉄道憲兵隊の詰所よ。まあ元々は日本人移民街を守るための組織、自警団が入ってた建物だけどね」

すみれ「そうだったのですか」

ミサキ「とにかく会議室まで来てもらうわ。話しはそれからね」

すみれ達は、ミサキの後を追う。鉄道憲兵隊の建物の中だと言うのに、部外者が歩いているというのに気にしてる感じはない。それどころかすみれ達に挨拶をかわしてくるのだ。帝国軍情報局というところだから、もっと堅苦しい場所だと思っていたすみれ達だったが、見当違いだった。

そして会議室と書かれた一室に案内される。

会議室の一室には、ミサキ以外にももう一人いたのだった。

111204・5・04・昼過ぎ・日本人移民街・鉄道憲兵隊詰所。

深夏「ミサキさん、お客さんかしら？」

すみれ達の前に現れた人物は、ジエニス王立学院の制服を着た司波深夏であった。彼女もハードスケジュールである。パルムの騒乱の後、一時は日本に帰って日本政府、十師族会議にも出席し帝国で起きた事を説明している。その後、リベールに行き、リベール王国政府、リベール王家にも事情を説明している。そして再び帝国へ戻り、日本人移民街にて事後処理をしているという。

すみれ「す、凄い……」

アリス「さすがというしかありませんね、四葉家のエージェントの司波深夏さん」

すみれ「え……？ 四葉家!？」

深夏「まさか、十文字分家のアリスさんがいらつしやるとは思いませんでしたが、何で、帝国の日本人移民街へ入らしたのですか？ えーと、自己紹介がまだでしたわ。私は司波深夏です。ワケあって、リベールに留学中ですが」

すみれ「私は芳澤すみれです、よろしくお願いします」

理「僕は結城理だよ、よろしく」

ミサキ「で、すみれさん達が知りたいことってゴールド・マウンテン社の事？」

すみれ「はい」

すみれは、日本での事を話し出した。話すかは迷ったが、お助けチャンネルの事も話した。ミサキと深夏なら話しても良いかなと判断したからだ。

ミサキも深夏もお助けチャンネルの事は知ってたらしく、かの遊撃士協会も褒めていたようだ。

ミサキ「まさか、あのヴァイオレットが、日本の女子高生だったとは驚いたわ」

深夏「私もね」

すみれ「私なんかまだまだですよ、私よりも世界で活躍されてる、ミサキさんや司波さんが凄いですよ！」

アリス「すみれの言う通りですよ。ミサキさんや深夏さんは、自分達女子の憧れなんですから」

ミサキ「憧れか…ふふっ、ありがとう」

深夏「私はまあ…自分の思ったままにやってるだけだしね。そこは、すみれさんもわかるのではなくて？」

すみれ「ええ、わかります」

深夏も四葉のエージェントを引き受けたのは、妹の深雪を守るため。その事から全てが始まっている。すみれも困った人達を救いたいという気持ちから始まっている。理はずみれ達に苦笑しながら

理「女の子同士の話も良いけど、本題に入っても良いかな？」

ミサキ「あ、そうね。女の子の話を聞きに来たわけじゃないものねえ。すみれさん達の間きたい事は、ゴールド・マウンテン帝国支部が起こした問題よね」

すみれ「はい、日本ではゴールド・マウンテン社の報道すら無いので」

深夏が不服そうな表情で喋り始める。

深夏「すみれさんの言うとおりに日本においては、ゴールド・マウンテン社の報道は、十師族の間でやらないことが決まっているのよ！四葉家としたら、ゴールド・マウンテン社の悪性を知らせる必要があるって言ったんだけど、一条やアリスさんの本家である十文字家は四葉家に賛同してくれたけどね」

アリス「一条、十文字家以外の十師族が反対したと言うことですね？」

深夏「ええ。七草家は、賛成でも反対でもない、中立ね…。反対から中立に変わってくれたのも、静江さんのおかげでしょうけど…金城の件では、五輪、九島も賛同してくれたけどね。ゴールド・マウンテン社と金城とは別つてことかしら…」

深夏は、中学生にしては発育の良い胸の下で、腕を組んでいる。

理「国会が独自に発表なんかはできないし日本政府からも発表は無理ですよね？」

深夏「無理でしょうね。桐条内閣の支持率は30%以下、ましては獅童一派がそんなことをさせるわけないわ」

ミサキ「日本の獅童一派、帝国の貴族派、共和国の反移民派……この辺りが横で繋りがあるのは確かかね」

すみれ「そこまで……」

アリス「私も薄々は気がついたけど、帝国軍情報局のミサキさんがそこまでおっしゃれると説得がありますわ」

深夏「私も感じるわね。リベールにいてもわかるくらい、帝国内部、日本内部が割れ始めてる……四葉家が押さえている国防軍の中にも獅童一派が増えはじめているって報告が上がってるし」

アリス「国民の中でも獅童一派を支持をする方々も徐々に増えて来ているわ」

すみれ「今の世界状況がそうさせてしまうのかな」

理「そうかもね……。あの時、僕達は何のために戦ったのだろう……みんなは力を失ってまで世界を守ろうとしたに……」

理は小さな声でそう言ったのだ。それも周りには聞こえないように言った。すみれと深夏は、理の唇の動きでその言葉を読み取った。

ミサキ「そうね、今の世界状況だどこかで火が付けば一気に燃え広がる可能性はあるわね」

すみれ「それって…過去の世界大戦みたいになるってことですか？」

ミサキ「……絶対になるとは言っていないわ。可能性の1つってことかしらねえ」

すみれ、アリス「……」

理「……」

ミサキ「世界大戦なんて、私が起こさせない！起こさせてなるものですか！」

すみれ「ミサキさん？」

深夏「私もよ。これ以上の戦争は起こさせないように頑張ってるのよ。悲劇は繰り返

させては駄目だから」

ミサキと深夏が、真面目にそう話をする。すみれ達は、2人が真剣に世界の事を考え

ているのだなと思うばかりであった。

1-1204・5・04・日本人移民街・鉄道憲兵隊詰所。

ミサキと深夏の話聞いた後、ミサキから色んな情報が載ったレプリカ資料を見せてもらった。本来ならマル秘情報だが、特別にすみれ、アリス、理に見せることにした。

レプリカ資料の中身は、ゴールド・マウンテン帝国支社が密かに行っている事がかかっていた。

日本国から帝国への武器の密輸。運んできた武器を、帝国の貴族派、クロスベルのヴァーチエ商会、カルバード共和国の移民反対派、猟兵団などに売りさばく。

ルバーチエ商会やD∴G教団から密かに得ていたグノーシスを日本国内に回すことや教団が行ってきた実験を引き継ぎ、日本の高校生や一般人達で実験していたと書かれている。

○年○月○日、536回実験をし、生存者は0

帝国支社の支社長の佐藤が、金城にもっと実験体を増やすように通達している。

○年○月○日、新たに金城より、125名の実験体を手に入れ、実験を始めた。

○年○月○日、何度も実験をするが、一回とも成功はしなかった。

1204・4・3・30、125体の実験体を実験失敗し、再び金城に依頼を出す。

1204・4・20、新たに25名の新しい実験体を得た。金城には感謝しなければならぬ。だが妙な連中がかぎ回り始めている。気をつけて続けなければならない。

レプリカ資料は、ここまでしか書かれていない。すみれ、アリス、理は、プルプルと震えている。おそらく資料の内容を見てのことだろう。ミサキも深夏も最初に見た時、

同じような感じになったのだから。

すみれ「つい最近まで、そんなことをやっていたんですね…」

アリス「ゴールド・マウンテン社、黒どころか、真っ黒じやないのよ」

深夏「ええ、真っ黒ね。でも今の日本では、それがまかり通るのよ…」

理「十師族の権限と獅童の権力が政府の力をも凌駕してしまっているって事か…」

ミサキ「そうね。ちよつと前のクロスベルがそんな状態だった…。クロスベル自治政府は機能不全まで追い込まれていた…」

深夏「帝国派議員と共和国派議員が議会で対立、議長と市長とも対立してたわけだしね」

ミサキ「それもクロスベル騒乱で、帝国派議員、共和国派議員の大半が逮捕された。次期の市長選挙と議会議員選挙も同時に行われるわ」

深夏「それで、クロスベルが少しずつ変わっていければ良いね」

ミサキ「ええ、そうなることを願うばかりね」

すみれとアリスと理は、ゴールド・マウンテン社が、D∴G教団やルバーチエ商会と繋りがあったことに怒りを覚えていた。

すみれ「十師族の方々は、こんなに犠牲が出てるのに平気でいるんですか…」

アリス「ごめんね…」

深夏「ごめんなさい、私達にもっと力があれば、ゴールド・マウンテン社や十師族や獅童一派に問い詰める事ができるのに……」

ミサキ「帝国政府としても、強硬には出れないのよ。強硬に出れば、共和国派に一気に流れが来てしまうと、桐条首相や四葉深夜様から言われてるしね」

理「理不尽だと思うだろうけど、一個人ではどうにもならない。それは君達もわかるよね？」

すみれ「はい、わかります」

アリス「そうね……」

すみれは、秀尽学園でイヤと言うほどそれを見てきた。在籍した時間は、僅かな時間だったはずだが、何年もいたような錯覚に陥っていた。

鴨志田卓の事件は、ゴールド・マウンテン社のやってきたことの縮図でしかない。だからあの時、彼らは立ち上がったのだろう。

心の怪盗団「ウロボロス」が鴨志田の悪事を世間に公表したこと。

なあなあだった日本社会に風穴を開けてくれたようなものだ。

すみれはそんな彼らの正体を知っている。

自身の学園、秀尽学園の先輩達である、雨宮蓮、緋里雪奈、坂本竜司、高卷杏の4人である事を知っている。

「彼らの正体を誰かに話そうとは思わない。怪盗の正体をばらすような行為は、したくはない。彼らは彼らなりの正義を執行したのだから。」

すみれ「それと、ゴールド・マウンテン帝国支部の社員名簿はありますか？」

ミサキ「社員名簿？社員名簿は確か……これのはずね」

すみれは、ミサキから社員名簿を受け取った。名前はあ行から並んでいるから、依頼主の山田さんのお姉さんは、や行なので、最後の辺りである。や行はそんなにいないので、すぐに見つかる。

【山田 真奈美―帝国支部No. 452】

【研究開発部所属―所属No. 231】

【七耀暦1203・2・15 入社日】

【七耀暦1204・3・03 退社日】

諸事情により退職する。

日本で亡くなった日が、七耀暦1204・4・05日である。日本の警察発表は、自殺と断定して調べてはいない。

目撃者もいたのだが、全員意見を変えたり、居なくなったりしたのだ。警察もマスクも動かない。

山田さんのお姉さんの死を自殺と片付けられるようなヤツは、限られてくる。

十師族か獅童正義一派……と限られてくる。

だが、誰がどうのと証拠があるわけではない。

自殺を他殺に持つていけるだけの証拠が無いのだから。

アリス「研究開発部って何を研究していたのかしら？」

ミサキ「研究開発部は、日本から拉致した高校生達を生体実験するところね」

すみれ「生体実験！」

理「諸事情で辞めたってことになってるけど、何かしようしてたんじゃないかな？」

アリス「何かを？」

ミサキ「帝国支部の連中を取り調べた時、帝国支部を告発しようとした女がいたと言ってたね」

すみれ「それが山田真奈美さん？」

ミサキ「その可能性は高いわね。連中もそれらしいことを言っていたわ」

アリス「ゴールド・マウンテン社は、告発されることを恐れて殺したってことかしら？」

すみれ「帝国支部の人間に聞くことが出来れば、何かわかるかも知れない」

アリス「でもどうやって、聞き出すの？帝国軍情報局に身柄は拘束されてるのよ？」

ミサキ「本来なら部外者である貴女達を入れるわけにはいかないけど、私や深夏さん

の知り合いつてことで、特別に許すわねえ」

深夏「本当に特別よ」

すみれ「ありがとうございます、ミサキさん、深夏さん」

アリス「ありがとうございますわ」

理「ご配慮、ありがとうございます」

ミサキ「拘束してる場所は、帝国軍情報局の本部じゃないわ。この地下に拘束してるのよ。それじゃあついてきて」

ミサキは、地下に行く通路の扉を開ける。どうやら地下に行く扉はパスワードになっていて、スラスラと番号を入れていく。番号が入力されると、扉は開く。

ミサキ「ここからは、階段で地下に降りるわ、気をつけてね」

そう言うのと、ミサキは階段を降りて行った。その次に深夏が降りて行った。

理「じゃあ先に降りるね」

理はそう言うのと階段を降りていく。すみれとアリスは

すみれ「行きましようか」

アリス「そうね、行きましよう」

すみれとアリスもそう言うのと地下に続く階段を降りて行った。

8-8-5・04-明らかになる真実。

1-1204・5・04・日本人移民街・鉄道憲兵隊詰所の地下。

ここは、以前日本人移民街の自警団があつた建物の地下だ。

元々は自警団が牢屋として使つていた。今はゴールド・マウンテン帝国支部の幹部達が牢屋に収監されている。

帝国軍情報局の取り調べもここで行われた。あくまでも帝国政府と日本政府の共同の捜査をしているためである。

帝国支部の人間達の帝国での取り調べは今日で終わり、今日中に日本へ護送することになつていると、ミサキからすみれ達に説明があつた。

ミサキがすみれ達のために少しだけ時間をくれたのだ。地下の牢屋は、古代帝国の牢屋その物の重苦しい雰囲気がある。そんな牢屋に入れられた帝国支部の幹部の3人が不貞腐れている。

そんな3人と、すみれ、アリス、理は対面することになる。

ミサキ「あんた達に彼女達が何か聞きたいそうよ」

多村「彼女達……？なんだお前ら？まだガキじゃねーか、ガキが何を俺達から聞くんだ

「？」

すみれが、格子越しに多村達を睨み付ける。背後には、うつすらとサンドリオンが出現している。

すみれ「貴方達には、聞きたいことが山ほどあるわ。時間が限られてるから単刀直入に言います。山田真奈美さんを知ってるわよね？」

山中「山田真奈美!?!何故お前達が、彼女の名前を? って…お前…あの方と同じ能力を持つてるのか?」

アリス「あの方と同じ能力…あの方って誰? 答えなさい!」

多村「山中さん、何をしゃべろうとしてるんですか。あの方はあの方さ。お前らには手も届かない方なのさ!」

今度は、理が会話の間に入る。ただ表情は怒ってるようだ。

理「あの方とは誰だ! 答えろ!」

多村「はい、そうですかかって答える気はねーんだよ!」

すみれ「言いなさい! 言わないと…」

多村「言わないと、どうなるんだ? お嬢さん?」

すみれは、サンドリオンを呼び出し、多村を押しさえ付ける。

多村「な、なんのつもりだ? お前!」

すみれ「しゃべらない貴方が問題だからよ……」

多村「……くつ、テメエ……捕虜虐待じゃねーか！」

アリス「捕虜虐待？わたし達は軍人じゃないから」

多村「くう……」

すると今まで黙っていた理が喋り出す。

理「あれだけの事をしておいて、自分達の仕打ちが捕虜虐待？彼女達が起こるのも無理ないよね。君達は、命づいをしてきた人達もいたんじゃないのか？でも君達はそれを無視して、生体実験を繰り返した？違わないだろう？」

山中「……あれは……あの方から命じられてやっただけだ！私や回りは反対したんだよ！」

多村「何を言つてやがる？山中、お前も喜んで協力していたじゃないか！」

山中「……逆らえれば、命がいくらあつても足りない！多村、お前もわかるだろ！」

多村「ふつ、確かに……。今さら何をしたところで、何になるか……」

山中「お前達を知りたい情報とは、何だ？山田真奈美の事か？」

すみれ「そうね、山田真奈美さんのことを洗いざらい話してもらいます」

山中「わかった、その変わり……」

アリス「……取り引きね……わたし達は貴方達から聞いたことにはしない」

理「情状酌量の余地は無いとは思うけどね」

深夏「……まあ、良いでしょう。貴方達が十師族や獅童一派に風穴を開ければ、良いのだから」

山中「わかった」

山中は、そう言うのとペラペラと話し始めた。

山田真奈美を消せと命じたのは、獅童正義とゴールド・マウンテン社の社長である四道政孝。

ゴールド・マウンテン社は、社ぐるみで高校生達や一般人を拉致、帝国支部へ運び生体実験を繰り返していた。

その事に気がついた山田真奈美は、帝国支部を退職している。だが彼女は、帝国支部を告発しようと、本社に問い合わせきたと。

しかし本社もグルだとわかり、どこかの新聞に告発しようと、自宅から成田に向かう途中のジャスティス通りで山田真奈美を自殺に見せかけて殺した。

山中と多村は、獅童正義の部下に命じられたままに命じられたままにやった。

実行班は、狂犬の旅団という新規の猟兵部隊。

山田真奈美の事故を見た目撃者は、記憶を消されて、カルバードの移民推進派に売り飛ばした。

目撃者はカルバード共和国のどこかの施設にいるだろう。

獅童正義と繋がりがある連中は、秀尽学園の校長、斑目一流斎、金城潤矢、その他、雪ノ下隆信、貴族派、帝国解放戦線、カルバード、反移民連合、赤い正座、西風の旅団、狂犬の旅団、その他……

クロスベルのハルトマンと帝国派議員や鴨志田は、塗り潰されている。

すみれは秀尽学園の校長がいた事にただ驚くことしかできなかつた。アリスは、雪ノ下隆信の名前に反応し、ミサキは帝国の貴族派が関わっていることに確信を持ったのだった。

11204・5・04・夕方・日本人移民街・鉄道憲兵隊詰所地下。

山中、多村達との会話が終わったすみれ達は、1階の会議室へ戻って来ていた。

すみれ達は、山中達からかなり重要な情報を得た。獅童正義、この人物がおそらくの黒幕。

すみれは、秀尽学園の校長が繋がっている。これが一番インパクトがあつた。それと山田真奈美は、ゴールド・マウンテン帝国支部に勤務する前は、斑目一流斎の弟子だったと聞いている。だからすみれは、斑目とゴールド・マウンテン社は獅童正義と繋がりがあ、全てが手の平で踊らされていたってことになる。

アリスは、日本美術界の斑目一流斎や七草家を支えている雪ノ下の家の分家の雪ノ下

隆信が繋がっていることに驚きがあった。

理は、獅童正義が世界中にパイプを持ち始めたことに危機感を抱いた。

ミサキは、貴族派が獅童正義一派と繋がりがあることに確信をした。

深夏は、もはや四葉家だけではどうにもならなくなることも考え、一条や十文字家との同盟も選択肢にいれるようになった。帝国の革新派との協力体制の強化も図るようになる。

すみれ「山田さんの依頼は、達成できたって考えた方が良いのかな？」

アリス「山田さんのお姉さん、真奈美さんがどうやって亡くなったのかは、わかったわね」

理「別に、依頼者から仇を取ってくれとか言われていないんだから、それで終わりだろうね」

すみれ「ええ、真奈美さんがゴールド・マウンテン社に入社してから、退職して亡くなるまではわかったわ。でも彼女は元々斑目の弟子だった。いわれのない盗作の罪を着せられて、破門になってるわ」

理「斑目一流斎、日本の美術界では知らない人間がいないとされる巨匠の一人。かのさゆりが一番の有名だね」

すみれ 「山田真奈美さん弟さんの話では、弟子の創作アイデアを自分のモノにしてるって言っていた…」

アリス 「それが本当なら、秀尽学園の鴨志田教諭なんか比べ物にならないほどの衝撃が世界中に響くことになるわね」

理 「確かに」

ミサキ 「でも獅童正義に繋がりを持つてる人物の1人でしょ、可能性は全く無いはずはないわ」

すみれ 「ええ、そうですね」

ミサキ 「引き続き、調査はしないと。ところですみれさん達は、これからどうするかしらあ?」

すみれ 「今日ですか…もう夕方みたいだし、日本人移民街からパルムに戻って宿を取ります」

アリス 「依頼の仕事で来てなかったら、帝国の旅行でもやってたかもね」

すみれ 「まあ、私もしてたと思うかな」

ミサキ 「日本から遙々帝国まで来て、お疲れ様、すみれさん、アリスさん、理さん」
すみれ達は、再び鉄道憲兵隊の車にて、パルムまで送ってもらったことになった。

11204・5・04・紡績町パルム・宿酒場(白い小道亭)にて。

すみれとアリスと理は、パルムの宿酒場（白い小道亭）に泊まることにした。

別に日本に急いで帰る必要もないし、ゴールデンウィーク最終日くらい楽しんでもいいよね的に決めたことだが。

宿酒場（白い小道亭）も先月のパルム騒乱にて少々破壊されたが、今では元通りになっている。

ただ所々に銃撃の痕が残っているが、それはいずれは名物になるかもしれない。

宿酒場（白い小道亭）にて、夜ご飯を食べてから、お風呂に入り、自室の部屋に戻っている。部屋は2部屋借りている。最初、3部屋借りようとしたが、アリスは2部屋で良いと断った。

パルムの街も夜の静寂に包まれていた。すみれもアリスも日本では経験できない夜の姿に驚きつつ、これからの事を考えていた。すみれもアリスもラフなスタイルで部屋にいた。

アリス「明日の夜までには、日本の成田まで着いてないといけないわね」

すみれ「そうね。6日から学校だしね。あの帝国支部の人達、今頃日本に向かってる途中よね」

アリス「そうね、明日の朝くらいには着くでしょう。日本のFLT社が作った高速護

送挺だから」

すみれ「それにしても、山田真奈美の話から、こんなに話が広がるなんて思いもしなかった。獅童正義……とんでもない相手が相手か……」

アリス「怖くなったの、すみれ？」

すみれ「まさか、断然やる気が出てきたから」

アリス「……そう。わたしもすみれを手伝う事を決めてるから。1人で勝手な事はしないでよ」

すみれ「ふふっ、ありがとう、アリス」

アリス「相棒なんだから、当たり前でしょう」

すみれ「私こそ、よろしくね」

すみれとアリスは、パルムでゆっくりと夜を過ごすことになった。

一方、理はARCCUSと誰かと話していた。話し相手は、アルフィン皇女殿下である。理のARCCUSの向こうに映るアルフィンは、ラフな格好をしていて、胸元の谷間がよく見える姿をしている。

理「アルフィン、さっき話した通りだよ。君が思ってたとおりの2人だった」

アルフィン「理さんもそう思われたのですね。わたくしも精神世界で話せましたが、

志はわたくしと同じようですわ」

理「アルフィンとすみれとは、魂の波長が同じように感じたけど、やはりそうなのかい？」

アルフィン「ええ、そうですね。わたくしと違う世界から転生した『光井和也』ってことでしょうね」

理「なるほど。そういうことか」

アルフィン「そういうことですわ」

理「で、僕はこのまま、すみれ達と同行するけど、良いのかい？」

アルフィン「構いませんわ。そのために桐条美鶴さんに頼んで、貴方を呼んだのですから」

理「やはり美鶴先輩に頼んだのは、アルフィンだったんだね」

アルフィン「ふふっ、そうですね。兄は兄で、姉は姉で独自の人脈のパイプを持つてらっしゃいます。わたくしもわたくしの人脈パイプを生かして、この激動の時代を乗り越えなければならぬと思っておりますわ」

理「ふっ、大した皇女殿下だよ、アルフィンは…いや君達兄妹は凄いよ」

アルフィン「お褒め頂いて光栄ですわ。ですが、理さんも世界のために戦われたのでしょう？」

理「まあ、そんなこともありましたね」

アルフィン「理さんも誇つてもよろしいかとわたくしは思いますよ」

理「誇るか…そんなことは考えたことなかったな…」

アルフィン「ふふつ、そうやって謙遜されるところが、今まで世界を救つてこられた方々はそんな感じですから」

何故、アルフィンと理がこんなに親しげに話してるのかと言うと、一度彼女が日本をお忍びで訪れている。その時に理達、特別課外活動部と知り合っている。もちろん桐条美鶴経由で知り合っているが。その後も美鶴や理、明彦とは、付き合いが続いている。

アルフィン「それでは、通信を切りますわね。わたくしのお付きの方がお見えになりましたし」

理「うん、わかった。ではまた」

アルフィン「ええ、いづれまた」

理は、ARCU Sの通信を切った。そして部屋の窓を開けてから、パルムの星空を眺めながら

理「アルフィンには、報告は済ませたし…後は…寝るだけなんだけど…このまま果たして無事に日本に帰れるかな…」

理は一筋の不安を感じ取っていた。日本人移民街の騒動ではない。セントアークの

方から感じ取ったのだ。

理「白亜の旧都セントアークか…。一応行って見るかな」

理は、セントアークの方を見ながら窓を締める。そしてベッドに入り、眠りに付いたのだった。

9-19-15・05-1アルフィンとの出会い。

1-11204・5・05・朝・紡績街パルム・宿酒場（白い小道亭）にて。

窓から陽射しが差込みすみれ達を照らしていた。小鳥の囀ずりも聴こえて来て、すみれはベッドから起き上がる。アリスはまだ寝ていて起こさないように窓を開ける。すると冷たいひんやりな風が、吹いて気持ち良かったりする。

薄いピンクのブラとパンツが陽射しに照らされて、新体操をやっているだけあって神秘的に見えるすみれ。

すみれ「今日は何をしようかな」

アリスから1人で勝手にするなと言われた。だから勝手にするつもりはない。彼女は、すみれを相棒だと言ってくれたのだから、悲しませることはしない。

すみれ「うーん、今日は観光をするか、お助けチャンネルの依頼をこなすか…どっちにしようかな」

アリス「わたしは、どっちでも良いわよ。観光にしろ、依頼をやるのもね」

すみれ「ありがとう。あーやっぱり、起こしちゃった？」

すみれと同じように下着姿のアリスは、あくびをしながら話しかけていた。ちなみに

アリスの下着の色は、ブラ、パンツ共にスカイブルーである。

アリス「別にすみれが謝る必要はないわよ。わたしも起きるつもりだったし」

すみれ「アハハ、そうなんだ」

すみれは苦笑いをしながら身支度をするのであった。

すみれとアリスは、身支度が終わり、朝ごはんを食べてる時に、理がやって来る。

理「おはよう、2人共に早いなだね」

すみれ「おはようございます、理さん」

アリス「理さん、おはようございますわ」

理「さてと、僕も朝ごはんを食べようかな」

理は、すみれ達の座るダブル席に座る。

理「で、君達は今日は何をするんだい？まだ山田真奈美の調査かい？」

すみれ「いえ、山田真奈美さんの件は終わりましたので、何をやるうか迷ってますね」

アリス「理さんは、何をされるんですか？」

理「僕かい？僕は、セントアークに行くつもりだよ」

すみれ「セントアークにですか。観光ですか？」

アリス「セントアークを観光：わたしもやってみたいですわね」

すみれ「私もセントアークは観光したいなと思ってたけどね」

お助けチャンネルの依頼は、あくまでも日本人が主に依頼者である。日本は遊撃士の人間が少ないから、お助けチャンネルに依頼がやって来るのだ。日本人遊撃士も増えましたが、まだまだな部分である。

理「ちよつと観光とは違うかな。えーと君達もセントアークに？」

すみれ「ええ、そうですね」

アリス「日本に戻る前に、セントアークの観光を楽しみたいと思ひまして」

理「そうなんだね。観光気分などこ申し訳ないんだけど、とある依頼をやる気はないかい？」

すみれ「とある依頼ですか？」

アリス「とある依頼とはなんでしようか？」

理「依頼は受けてくれると判断しても良いかな？」

すみれ「理さんには、助けてもらったですしね」

アリス「そうですね。それで、その依頼ってのはなんでしようか？」

理「ありがとう。で、その依頼ってとはね…。セントアークでとある方に会う事かな」
このあと、理がとある方の名前を言つて、すみれとアリスがびつくりするのである。

111204・5・05・朝・紡績街パルム・宿酒場（白い小道亭）

理から聞いた名前は、アルフィン・ライゼ・アルノール。
アルフィンとは、エレボニア帝国の皇女、アルフィン・ライゼ・アルノールである。すみれとアリスは驚き声をあげそうになったが、自分の中に押し込めた。理は今朝の事を話し始めた。

理も朝、アルフィンから連絡をもらって慌てたくらいだ。

アルフィン「わたくし、セントアークに行くことにしましたから。理さんよろしくお願いますね？」

理「……朝からなんの冗談でしょうか？」

アルフィン「冗談ではありませんわ、理さん」

ARCUの向こうにニコニコしているアルフィンが映っている。

理「冗談じゃなかったら、嫌がらせでしょうか？」

アルフィン「わたくしは、嫌がらせとかしませんわ。わたくしはただ、すみれさん達に会いたいだけです」

理「……昨日話して……今日ですか……。で……そんなすぐに話したい事って何ですか？」

アルフィン「色々とお話することはあります。お兄様はお兄様で、誰かと会うみたいだし、わたくしもね」

理「ねって言われましても…」

アルフィン「ふふっ、わたくし、理さんがお断りしても、会いに行きますわ」

理「……日本では、ゴールデンウィーク中で休みですが、帝国は普通に学院生活があるのでは？」

アルフィン「ふっ、それは変り身の術、分身魔術とかで、わたくしの代わりに出せますから」

理「………何が何でも来るんですね…。はあくわかりました。えーと、お忍びで来るとはですね？」

アルフィン「もちろんですわ、護衛とかいけませんからご心配なく」

そう言うと、ARCSの通信は切れる。理はため息を大きく深くはく。理の話は終わる。

すみれ「アハハ、何だかアグレッシブな皇女様じゃないですか！」

理「アグレッシブかあくそんな感じかな」

アリス「お伽噺の中に出てくる皇女様ってイメージじゃないわね」

すみれ「お伽噺の皇女様なら、憧れはあっても親しみやすさは無いかな。でも理さんから聞いたアルフィン皇女様って何だか親しみやすそうかなって」

理「すみれが言うとおりかな。親しみやすいと思うよ」

アリス「アルフィン皇女殿下、帝国の至宝って言われてるのに、親しみやすい方ですね：メアドとか交換出きるのかしら？」

理「まあ：僕も知ってるけど、本人の了承無しには教えられないしね」

すみれ「それは確かにですね」

すみれもアリスも自分の個人情報に勝手に教えられるのは、嫌である。すみれ、アリスに限らず、普通は誰だって勝手に教えられるのは嫌だと思う。

理「それじゃあ、朝ごはんを食べてセントアークに出発しよう」

すみれ、アリス「はい！」

すみれ、アリス、理は、それぞれ頼んだ朝ごはんを食べ終えてから、パルム駅からセントアーク駅を目指すのであった。

111204・5・05・朝・帝都ヘイムダル・バルムヘイム宮・アルフィンの部屋
理との通話を終えたアルフィンは、ARCSを机に置いた。朝焼けに照らされる帝都ヘイムダルを見ながら

アルフィン「ふっ、これですみれさん達に会えますわ」

大賢者「問、何故昨日の今日で、芳澤すみれ、十文字アリスと急に会う気になったの

ですか？やはり昨日見た夢の事で気にしてるのですか？」

アルフィン「大賢者、わたくしが見た夢は、今までは絶対に現実になったのは覚えているでしょう？」

大賢者「解、全て覚えています」

アルフィン「大賢者と共に潜り抜けて来ましたから」

大賢者「解、無茶な事も度々言われた事もありましたが、今となつては良い思い出になつてます」

アルフィン「わたくしも大賢者と共に色々な世界を巡れたのは、嬉しいですね。その糧がアルフィンとして役立てたいと思いますわね」

アルフィンは、寝間着の格好から普段着に着替えようとしている。寝間着のネグリジェは、白い薔薇が刺繍されており、中の緋いブラと緋いパンツが透けて見えている。

以前、セドリックが着替えていたアルフィンに気づかずに入つて来た時、今のような格好をしていたため、鼻血を盛大に吹き出した経緯があり、それからあまりアルフィンの部屋に来なくなった。

アルフィンは、そんなセドリックをお子ちゃまだと思つている。

大賢者「問、セントアークまで行く交通機関は何で行くつもりですか？」

アルフィン「さあ、何で行きましょうかね」

大賢者「解、まさかと思いますが、座標移動（ムーブポイント）で行くのではないでしょうね？」

アルフィン「ええ、もちろんそのつもりですわ」

そう言いながらアルフィンは、身嗜みを整えていく。

大賢者「解、まあマスターが普通に交通機関を使うとは思えませんわ」

アルフィン「まあ、大賢者、それじゃあ、わたくしが交通機関を全く使わないみたいじゃないの？」

アルフィンは、ぶうつと頬を膨らませて怒っている。クロゼットや高級なタンスの中身を見ながら何を着ていくか迷いながら探している。探し求めたのは、日本から取り寄せた服である。

それは、以前、岳羽ゆかりからもらった服である。白いブラウスにピンクのプリーツスカートを取り出す。

大賢者「告、マスター、その白いブラウスだと、ブラ透け対策をされた方がよろしいかと。それとそのプリーツスカートだと、パンチラ対策もしたい方がよろしいでしょう」

アルフィン「大賢者、それはわかってるから」

アルフィンはそう言うのと、高級タンスから見せパンを取り出す。

大賢者「解、見せパンとは、見えてもよいパンツとも言われる。ミニスカート・スコートは女性のファッションの定番となつてはいるが、スカート・スコートの中の下着（ショーツ、パンティー）が見えてしまうこと（いわゆるパンチラ）は恥ずべきこととされ、スカートめくりや盗撮の被害に遭つてしまうことや、風などでめくり上げられたり、激しい動きをして中の下着が見られてしまうこともある。ショーツパンツも丈が短く裾がゆつたりしている場合に下着が見えてしまう場合がある。またミニスカート・スコート・ショーツパンツは暖かいといえる服装ではなく、下半身が冷えることによる健康への影響も心配されている」

アルフィンは、大賢者の見せパンの説明を聞いて

アルフィン「大賢者、見せパンの説明は別に要らないかと思うのだけど？」

大賢者「解、青少年のために説明はいるかと思いましたが」

アルフィンは、見せパンを緋いパンツの上から履く。

大賢者「問、そんな色気も味気もない見せパンを履くぐらいなら、紺のブルマを履く事を推奨しますか？」

アルフィン「うーん、ブルマでもわたくしは構いませんわ」

アルフィンは、今の見せパンと紺のブルマなら後者を選ぶ。トールズ士官学院の体操服が、女子がブルマであるから密かに憧れを持っているのだ。アストラリア女学院で

は、ブルマではなくハーフパンツである。

アルフィン「でも、女学院だと見せる殿方もいないですしね」

そんなかんだで着替え終わると、アルフィンのARCSの着信が鳴る。

大賢者「告、どうやらマスターの放った者からの着信ですね」

アルフィン「朝から何かしらね…この番号は誰かしら？」

アルフィンがARCSの通話ボタンを押す。

??「アルフィン皇女殿下、お久しぶりでございます」

アルフィン「そのお声は…、真田明彦さんですね？」

明彦「ええ、覚えてくれていたんだな」

アルフィン「当たり前です。理さんをはじめ、忘れてりませんわ」

明彦「ふっ、そうか。おっとそんなことを言うために、連絡をしたのではない」

アルフィン「やはり何かあったんですね…」

明彦「ああ、悪いニュースだ。昨日の夜、帝国から日本に護送されていたゴールド・マウンテン社の帝国支部の幹部達を乗せた高速護送艇が東ゼムリア海上で消息を断った」

アルフィン「な、なんですって！」

明彦「俺の仲間からの連絡だが、おそらく東ゼムリア海上で落とされたんじゃないか

と言っている」

アルフィン「東ゼムリア海に墜落したと証拠はあるんですか？」

明彦「俺は直接見たわけではないからな。仲間の話しによれば、東ゼムリア海に高速護送艇の破片が浮いてるらしい」

アルフィン「わかりましたわ。しかし…ゴールド・マウンテン社の悪事を公表できると思っていましたのに」

明彦「美鶴も言っていたが、ゴールド・マウンテン社は、獅童一派と繋がりがあろうだ。簡単にはいかない相手だと言うことがわかっただけでも良しとするしかないだろう」

アルフィン「…それしかなさそうですね」

明彦「また新しい情報が入れば連絡する」

アルフィン「最後に聞きますが、明彦さんは、まだカルバードに？」

明彦「ああ、そうだが。中々カルバードは良いところだ。修業に適した場所だと言いたいところだが、実はカルバードの中央情報省…CIDに所属している。修業中にキリカ室長に引き抜かれてな…」

明彦の同僚と思われる声が聞こえてきた。

明彦「また時間が出来たら説明する」

アルフィン「そうですか、わかりました。それではまた」

明彦「ああ、またな」

アルフィンは、真田明彦との通話を切った。だが表情はちよつと暗い。そんな時大賢者が

大賢者「告、真田明彦氏の話と第3の眼で調べた結果、東ゼムリア海の海底に高速護送艇が沈んでるのを発見しました」

アルフィン「……やはりね……。わたくしもチラツと眼で見たけれど、東ゼムリア海で気配が消えますわ……」

大賢者「問、マスターは、これからどうするつもりでしょうか？ 予定通りに結城理氏やすみれ嬢にお会いになられるのですか？」

アルフィン「ええ、当然です。いずれはこの事は、帝国政府、日本政府にも分かることです。特に日本側には正しく情報が伝わらない可能性は高いですわ。だからわたくしが、理さんやすみれさん達に教えるしかありません」

大賢者「解、理屈はそうでしょうか、彼女達に教えてよろしいものですか？」

アルフィン「良いわよ。わたくしが判断しました。すみれさん達は、か弱き人達のためには戦っています。わたくしはそれにお手伝いしているだけですわ」

大賢者「解、まあマスターのお人好しは、今始まったわけではないですが。そのおか

けで、多くの事を学べたのは間違いないですね」

アルフィン「そうでしょう？だからこれからもよろしくお願いしますね、大賢者」

大賢者「解、わかりました。それよりまた分身を？」

アルフィン「そうね、魔法で分身を生み出しましょう！」

アルフィンはそう言うと、魔法の詠唱を始める。するともう一人アルフィンが登場する。その偽物はまるでアルフィンがもう一人いるかのようなものである。普通の人間ならまず見抜けないだろう。

アルフィン偽「わたくしがまたアルフィン様の影武者を努めればよろしいんですね？」

アルフィン「ええ、そうですね。いつものようにしてくれば、良いですから」

アルフィン偽「わかりました。それとこれを」

アルフィンは、偽アルフィンから変装帽子を受け取った。

アルフィン「野球帽ですか。変装の誤魔化しにはなりますよね」

アルフィンは、そう言って白亜の旧都セントアークの方角を見る。そして、座標移動（ムーブポイント）を発動して、アルフィンはセントアークに飛ぶ。

10-10-5・05 (08:50~) ー今、セントアークで起きてる事。

1-1204・5・05・朝↓08:50・サクラの庭園

サクラの庭園。

帝都ヘイムダルとセントアークの間に西トウキョウという日本人移民街がある。東にある日本人移民街とは、同時期に出来たが、西トウキョウの方はすぐにサザラント州に属したが、東日本人移民街は自治が認められた。

サクラの庭園の話に戻るが、日本人が帝国に移民してきた時に、サクラの樹をこの辺りに植樹したのだ。帝国に移り住んでも、日本のサクラだけは見たかったと言うことかもしれない。

今では、かなりの数のサクラが咲いていて、サクラの庭園とも呼ばれている。ハイアームズ侯爵家がこの辺りを整備して、庭園にしたのだ。そして帝国のライノの樹も植樹されて、春にはサクラとライノの共演が見られるのだ。

しかし今は5月になり、葉桜と葉だけのライノの樹になっている。

そんな木々の中に女の子座りているアルフィンがいた。

大賢者「告、サザーラント州、セントアーク北部のサクラの庭園に着いたようですね。予定の休憩所ではありませんが」

アルフィン「イタタタ…。座標移動（ムーブポイント）…ちよつと失敗しちゃったかしら？」

大賢者「解、座標の多少のズレが生じてますね。原因は…あ、なるほどそう言うことですか」

アルフィン「そう言うこと事って何なのかしら？」

大賢者「マスター、女の子の日が近いですね」

アルフィン「…?!?!」

女の子の日、月に1回は絶対に巡ってくる逃れられない日々。女の子の日になると、座標移動（ムーブポイント）の座標などの緻密な計算などの狂いが出るのだ。過去にそのせいで、計算違いな場所に来た苦い経験がある。

アルフィン「そんな計算はしなくてもいいのよ」

女の子の目を気にしているアルフィンの耳に何か不吉な音が聞こえてきた。

アルフィン「え？先程の音は、剣同士のぶつかり合い？」

大賢者「解、ここから、数百アージュ行つた場所から聞こえてきます。おそらく人間同士の戦闘かと」

アルフィン「ふう……」

アルフインはそつと深呼吸をしてから、音のする方へ近付いていく。

大賢者「告、音はどんどんと大きくなっています。それだけ近付いて、リスクも上がっています」

アルフィン「わかってますわ」

アルフインがそう言つて、サクラの庭園内を音をする方へ走る。そしてアルフィンが人影を捉えた時、平民風の男の方が、貴族風の男に剣を向けられている。平民風の男の剣は近くの地面に刺さっている。

???「いい加減に諦めたらどうだ、アツシユ?」

アツシユ「諦めるはずがないだろ! アニスは俺の恋人だ! てめえに渡すわけがないだろ!」

アニス「もうやめて、アツシユ! これ以上やれば、貴方は殺されちゃう!」

アツシユ「こんなヤツにアニスを…お前を渡してたまるものかよ!」

アツシユは、素手で???に向かつて行くが、剣で吹き飛ばされる。???はすかさずアツシユに向かつて走り出す。

???「終わりだな、アツシユ!」

???は剣を振り上げる。アツシユは動けない、アニスはアツシユの方へ駆け出す、だが

間に合わない。アツシユは、目を閉じる。???に切り殺される事を覚悟した。

だがいつまで経っても斬られない。だからアツシユは目を開けた。するとそこにはアニスではない野球帽子を被った女の子が、???の剣を焔の刃で押さえていた。

――

大賢者「告、あの平民の男性は、あの貴族の男性に勝てません」

アルフィン「大賢者、勝てないなんて最初から決めつけては駄目よ」

大賢者「解、しかし確率では、ほとんど勝ち目がないでしょう」

アルフィン「人間には、驚く力を出す場合もあるのよ!」

大賢者「解、確かにマスターのように驚くような力を出す可能性はあります。この場合……」

アツシユは???に吹き飛ばされ、喉先に剣を突き出されている。そして剣を振り上げながら、アツシユを斬ろうとしている。アルフィンは、焔の刃を出して、高速で向かう。そして、???の剣を押さえながらアツシユに向かって言う。

アルフィン「大丈夫ですか?」

アツシユ「な、なんとか大丈夫です」

アニス「助けてくれるんですか?」

アルフィン「もちろんですわ」

???「なんだ、お前は？」

アルフィン「わたくしが誰でもいいでしょう？こんな悪事を行っている貴方を許すわけにはいきませんわ」

???「悪事？誰が悪事を行っているというのか？」

アルフィン「女の子を連れ去ろうとしている時点で、悪事ですわ！」

???「貴族が平民の娘をどう扱うなんて、お前には関係無いだろう？」

アルフィン「……フレデリック卿の行う政策の意味も分からず、まだ旧時代のやり方しか知らないかわいそうな人……」

???「お前、フレデリックの回し者か！ふっ、フレデリックのやって事は、貴族の特権を奪っているだけだ！平民と融合？ふざけた事をほざくな！」

アルフィン「ふざけた事を言ってるのは、貴方の方ですわ！」

アルフィンは、焰の刃で???の剣を押しえながら、右足で顔を蹴り飛ばした。蹴られた弾みでノーバンドで、サクラの庭園の看板にぶつかり、看板を粉々に壊した。アツシユとアニスも驚いている。

???はすぐには出てはこれない。アルフィンの蹴りが、モロに顔に入っている。何故、モロに入ったのかは、アルフィンの蹴りが顔に到達する前に、彼女のプリーツスカート

の中身を見てたからだ。そうアルフィンの見せパンを。

??? 「お前、貴族の顔を蹴るとは、ただですむと思っているのか！」

アルフィン 「…先程の蹴りは避けようとすれば、避けれるはずですわ…。でも貴方は避けられなかった。貴方の視線は、わたくしのスカートの中身を見ていらつしやつたみたいですし」

アルフィンは小悪魔的な表情で、???を見る。???は怒りで満ちた表情でアルフィンへ向かってくる。彼は剣を持っていない。蹴られた時に剣を手放しており、今は何も持っていない。

??? は、アルフィンを押し倒すと、ゲスな笑みを浮かべる。

??? 「フン、女は黙って俺に抱かれれば良いんだよ！お前も誘ってんだろ？パンツを俺に見せつけてよ！」

アルフィン 「はあく、ムードもへつたくりもありませんわ。無理やり女の子を従わせるしか…ありませんの？」

??? 「黙れ！黙れ！おとなしく俺に抱かれる！」

アルフィン 「貴方のような品の欠片も微塵もない殿方に抱かれるつもりは、ありませんわ！」

アルフィンは、???に対して座標移動（ムーブポイント）を使用する。???は、アルフィ

ンの上からいなくなったのだった。

111204・5・05・朝↓09:00・白亜の旧都セントアーク

すみれ、アリス、理の3人は、朝のセントアーク駅からセントアークに降り立った。

通勤の人々が一段落したせいか、ちよつと少なくなっている。

理「通勤の人々と少しかぶったからどうなるかと思っただけど、何とかなつたね」

すみれ「通勤列車は、学校に行くときに経験してますし慣れてますよ」

アリス「わたしは、導力車で送ってもらってるから、ちよつとビックリしましたわ」

すみれ「導力車かぁ羨ましいかな」

アリス「わたしは、すみれみたいに部活動をやって、放課後に食べ歩きとかしてみた
いですわ」

すみれ「あゝあ、ちよつと前に言ってたアレね。でもアリスとやりたいけど、学校も
違うしそもそも学校位置も全然違うし…」

アリス「そ、そうよね」

すみれの通う秀尽学園は、蒼山にあり、アリスの通う第1高校は、蒼山の西の方角、八
王子にある。だから一緒に通うのは、不可能である。どっちかが互いのどちらかに転校
すれば通えるだろうが、そんな予定はない。理が私達が言う前に

理「普通に無理そうだけどね」

苦笑いをしながら、理は言った。

すみれ「理さんは、学生時代は何か部活動はされてたんですか？」

理「おっと、それを聞くかい？」

アリス「運動系ですか？文化系ですか？」

理「さて、どちらでしょうね？」

すみれ「うーん、理さん、運動系、文化系？どちらなんだろう？」

アリス「運動系：剣道部ではないですか？理さん、太刀を使われてるし！何だってお父様のお弟子さんだったわけですし！」

理「そこまでの大袈裟ではないけど当たりだよ。運動系は、剣道部に入ってた。剣道の全国大会にも出場したかな」

すみれ「理さん、すごいじゃないですか！」

理「仲間に恵まれたからね。剣道部の同期の仲間や先輩、他校のライバルで親友もいたから、出来たんだと思うかな」

アリス「それって凄いことではないですか！」

理「言っておくけど、魔法を使う大会ではないからね。一般の剣道の大会だから」

魔法が使える者同士が戦う魔法剣術大会。魔法が使えない者同士が戦う剣道大会。

2つに分かれている。もちろん理が出たのは後者の剣道大会である。

アリス「いえいえ、理さんは魔術大会に出ても勝てたと思いますわ」

理「アリス、それは言い過ぎだと思うから」

3人はそう言う会話をしながらセントアーク内を歩いていく。目の前には、セントアーク大聖堂があり、大聖堂の奥には、ハイアームズ侯爵家の城館もちらりと見えていく。

そんな中でも、セントアークでは、融和政策1周年を祝う式典の準備も整えられている。

〔七耀暦1204・5・10―貴族平民融和政策1周年〕

ハイアームズ侯爵家二男―フレリック卿による貴族平民融和政策が取られて5月10日で1周年になることが、セントアーク中央広場の掲示板には書かれている。

理「5月10日か…ちよつと早かったね」

すみれ「そうですね、式典ちよつとは見たかったですね」

アリス「式典っていうぐらいですから、お祭りみたいな感じなのでしょうか」

理「どうだろうね、僕も見たことないからね」

すみれ「今回は見れないけど、いつかはその式典を見てみたいですね」

アリス「そうね」

理「確かに」

理が導力腕時計で時間を見ると、09:25分になっていた。

理「そろそろ待ち合わせ時間になるし、行こうか？」

すみれ「待ち合わせ場所ってセントアークじゃないんですか？」

理「セントアークだよ。詳しくはセントアークの北側。西側の日本人移民街がある方向側かな」

アリス「そちら側をアルフィン殿下がご指定に？」

理「まあ、そう言うことかな」

すみれ「それじゃあ、行きましようか。セントアークの北側の方へ」

すみれ、アリス、理は、セントアーク中央広場から、北側へ向かった。

111204・5・05・09:30・休憩所

ここは、北サザラント街道と西日本人街街道が交差する場所にある休憩所。

近くに帝国軍の軍事要塞 ドレックノールがある。西日本人街の人間は、東日本人街の人間よりも帝国への忠誠心が強く、先の戦争でも帝国軍軍人として、戦って帝国政府や帝国軍、アルノール家からも表彰されている。今でも西日本人街の人間は、帝国軍に入隊するか、ドレックノール要塞に働きに行くぐらいだ。

ここは春になると、南の方にあるサクラの庭園を指す日系帝国人の人々が往来するための休憩所でもあるし、普通に旅行者のための休憩所でもある。もちろんこの休憩所にもサクラの木々はあるが、既にハザクラになつてゐる。

今回、理は、ここをアルフィンに指定されたのだ。だがそのアルフィンの姿は無い。そんな中、すみれとアリスはベンチに座り、理は壁に背を向けて立つてゐる。

すみれ「アルフィン様、まだ来ませんね」

理「そうだね、アルフィンは時間に遅れることはなかつたけど……」

アリス「理さん、何かあつたんじやないんじやないんでしょうか？」

理「うーん、それはどうだろうか」

理は、アルフィンが普通に公共機関を使つてくるとは思つてはいない。以前も彼女いわく、座標移動（ムーブポイント）なるもので、一瞬で待ち合わせ場所に来たからだ。

理「まあ、もうすぐ来るんじやないかな？」

すみれ「もうすぐですか？」

アリス「あれ？サクラの庭園の中の方から誰か来るわよ？」

アリスがサクラの庭園の方を指差す。指差す方から、誰かがやつて来る。その人物はすみれ達に対して腕を降つてゐる。

アルフィン「皆さん、遅れてすいませんでした」

金髪に野球帽を被った白いブラウスとピンクのプリーツスカートという服装の人物がすみれ達に頭を下げていた。

理「アルフィン殿下、まさかサクラの庭園からいらっしやるとは思いませんでしたよ」
アルフィン「サクラの庭園から来たのは予定外でしたし、ちよつとアクシデントにも遭遇してしまいましたね」

理「アクシデントって……」

アルフィンは先程のアッシュとアニスの事を話した。ロイヤル伯爵の息子のライトフォードがアニスに横恋慕をしていて、朝から連れ去ろうとしていた事。アッシュが何とか守ろうとして怪我を負った。

アルフィンは、そのライトフォードを座標移動（ムーブポイント）で、どこかに飛ばしたのだ。

そのライトフォードはその後、セントアークの自宅であるロイヤル伯爵家の噴水でプカプカ浮いていた。

だが、ライトフォードの頭の中には、アルフィンの見せパンがすっかり焼き付いていた。

すみれ「つて大丈夫なのですか、アルフィン殿下？」

アルフィン「硬い敬語は使わなくて良いです。わたくしはただのアルフィンですも

の

「アリス「ですが…」

理「アルフィンが、敬語は無しって言うてるし、そうすれば良いと思うよ」

アルフィン「敬語なんかで話したら、親しみ安さが無いでしょ？わたくしは、すみれさんやアリスさんとお友達になりたいんです」

すみれ「アルフィン殿下…」

アリス「アルフィン殿下」

すみれとアリスは、互いで見合ってからアルフィンを見据える。

すみれ「わかりました、アルフィン」

アリス「アルフィンとお呼びしますわ、私のことは、アリスで構いません」

すみれ「私のことはすみれと呼んで下さい」

すみれ、アリス、アルフィンは、互いに打ち解けたようになっていた。理はそれを見て微笑ましくも思えた。そしてかつての最終決戦時にアルフィンに救われた事を思い出していた。

そうニユクスとの戦い。

絶望しかなかった戦いだったが、アルフィンの参戦により、絶望から希望に変わったのだ。

アルフィン「キング・オブ・ジパング」
アルフィン曰く日本でしか使えない魔法。

日本自体を術式に見立てて、発動するものであり、今まで理達が築き上げた人々の力の力、思いの力が術者とその仲間以降り注ぎ、一時期神の力と同等になる。

この力によりニユクスを倒すことに成功したのだ。そんなことを思い出していると、すみれ達が理の方を見て

すみれ「理さん、どうかしましたか？」

理「うん、いや、何でもないよ」

アルフィン「さっそくですが：お話をしても構いませんか？」

すみれ「ええ、でもこの休憩所ですか？」

理「なるほど：既にこの辺りに人払いの：アレを発動させたんだね？」

すみれとアリスは、理がそう言ったため、回りを見渡す。するとさつきまで人の気配を感じていたが、今はそれが感じない。

すみれ「人払いの魔法ですか？」

アルフィン「ええ、理さんやすみれ達に会う前に人払いの魔法を発動させましたわ。

このお話しは、あまり人に聞かれるわけにはいきませんから」

アルフィンは、真剣な表情になり、すみれ達を見据えていた。

理「聞かれるわけにはいかないって、やはり機密情報？」

アルフィン「ええ、大変な機密情報ですわ。この機密情報には、すみれやアリスだって重要なことがあるわ」

アルフィンは、ベンチの椅子に座る。対面にすみれとアリスが座る。理は柱の側に立っている。

アルフィン「すみれ、アリス、貴女達はゴールド・マウンテン社…帝国支部を調べていたのでしょうか？」

すみれ「ええ、調べていました。ミサキさんと一緒に帝国支部の幹部達共会いました」
アリス「特別にミサキさんが会わせてくれましたわ」

理「彼らはすでに帝国から日本に護送されて、日本で逮捕されたのでは？」

アルフィン「…：…帝国支部の幹部は、全員死んでしまったわ…」

すみれ達はアルフィンからそれを聞いて驚愕する。昨日、日本人移民街にある鉄道憲兵隊の詰所で、帝国支部の幹部達と会っていたのだ。山田真奈美の件で幹部達から話を聞き出したのだ。その幹部達がその後、日本へ護送中に東ゼムリア海海上で護送艇が墜落して海の藻屑になってしまったのだ。

墜落した理由は、現在検査中とのことだった。

1111115・05(10:i5)―鉄血を恨む者達。

111204・5・05・10:15・休憩所

驚愕の事実。ゴールド・マウンテン帝国支部の幹部達が全員死亡したこと。

驚愕の事実を突き付けられたすみれ達。ゴールド・マウンテン社の悪事を彼らから喋ってもらうつもりだった。だがゴールド・マウンテン社の方が1枚上だった。

山田真奈美の貰いが出来ると思っていた矢先の彼らの死亡宣告。山田真奈美が明らかにしたかった事が再び闇に葬られてしまいそうになっている。

理「:こんな時に護送挺が墜落するなんて、何か仕掛けられてる可能性もあったのか思えない」

アルフィン「護送挺の搜索は日本だけで、行おうとしていたみたいですけど、帝国も共同で搜索を行うと交渉したみたいです」

アリス「強引に入ったと言うわけですね。その方が良いですわね」

すみれ「日本政府:いやマスコミや獅童達に握り潰されずに済みますね」

理「うん、どうだろうね。どちらの国にしても同じような内情を抱えている」

理が言う内情とは、もう言わずもがなだが、説明しないわけにはいかないのだ。

日本では、獅童一派が議会や政界、経済界まで勢力を伸ばしつつある。十師族体制を崩すつもりもあるようだ。反帝国親共和国派とも共闘し始めている。ただ獅童を押し切っていた七草家は、彼の行きすぎた行動を問題視し、ゴールド・マウンテン社の件で手切れにしている。

帝国では、革新派と貴族派の対立は、益々激しくなつて来ている。革新派は日本の四葉家と同盟を締結している。貴族派は獅童一派と同盟を締結。

お互いにそんな状態であるため、正しい情報が発信されるのかわからないと理は考えているのだ。

アリス「確かに：」

すみれ「全て無かつたことにするつてことですよね？」

理「そうだね。その可能性は高いつて事だね」

アルフィン「悔しいですが、今の現状ではそうなるしかありません：」

アルフインは、悔しい表情をしている。すみれもアリスも理も。

アルフィンだつて今の現状を良しとはしていない。だが今は行動に移すだけの余力も無いし仲間も少ない。

みんなで難しい表情をしていると、西の日本人移民街からなにやら爆発音が聞こえた。

聞こえたのと同時に西の日本人移民街から煙が上がっている。理は日本人移民街の方を見て

理「煙!?!まさかさっきの爆発で!」

アルフィン「そうみたいですわ!」

すみれ「爆発つて、ただ事ではないですよ!」

アリス「まさか、ゴールド・マウンテン帝国支部の残党の仕業!」

アルフィン「まさか、そんなことは…。とにかく行つてみましょう!」

アルフィンは、西の日本人移民街へ走り出した。

理「アルフィン、待つて!僕も行くよ!」

理もアルフィンの後を追う。すみれ達も

すみれ「私達も行きましょう!」

アリス「そうね、行きましょう!」

すみれとアリスもアルフィンと理を追つて、西の日本人移民街へ走り出したのだつた。

1-1204・5・05・11:00・西の日本人移民街付近

アルフィンと理が先に西の日本人移民街にたどり着いた。街の方からは、煙が黙々と上がっている。おそらく火の手が上がってるのは、間違いない。

2人の目に映ったのは、獵兵団の格好をした兵士達が、日本人移民街に攻撃を仕掛けているところだった。2人は様子を見るために、木陰に隠れる。

アルフィン「獵兵団でしょうか？」

理「獵兵団…獵兵達とも言いがたいかな…。獵兵団なら自分達の旗を揚げるはず…」
アルフィン「確かにそう言われれば…」

2人に遅れて、すみれとアリスが駆け付けてきた。

すみれ「あの連中は、獵兵団ですか？」

理「いや…獵兵団にしては、おかしい」

アリス「あ、獵兵団は、自分達の旗を掲げるはずですよ。それが彼ら誇りであり、ポリシーのはずですよ」

理「だから、彼らは獵兵団ではない可能性は高い…」

アルフィン「うーん、新米の獵兵団って可能性もあるとは思いますが、新米で新米であればあるほど、旗を掲げたがるものですよし」

理「僕は、日本人移民街に潜入するけど、君達はどうするんだい？」

アルフィン「わたくしは、行きますわ」

すみれ「私達も行きます！」

アリス「ええ、当たり前ですよ」

すみれは、太刀を取り出す。アリスは、腕輪型CADを取り出した。理とアルフィンは、その姿を見て微笑ましくもあつた。理は、二手に分かれて行動する事を提案する。

理「それじゃあ、アリスは僕と来てくれるかい？」

アリス「あ、はい！光栄でございますわ！」

理とアリスは、日本人移民街出入り正面から突入する事を決めた。アルフィンとすみれは、裏口から侵入することにした。

アルフィン「それじゃあ、すみれ、わたくし達で組みましようか」

すみれ「はい！喜んで！」

——日本人移民街出入り付近

理とアリスは、日本人移民街の出入りにたむろしている猟兵团擬きの兵士達を次々に無力化していく。

理「アリス！そちらから来るよ！」

アリス「はい！わかつてますわ！グラビトンプレス！」

アリスは、腕輪型CADを素早く操作し猟兵团擬きの兵士達に重力の重りで潰していく。理の背後から猟兵团擬きの兵士達が攻撃してくる。

アリス「理さん！後ろ！」

理「オルフェウス！」

理は、オルフェウスを呼び出して、猟兵団擬きの兵士達を風呂払う。

猟兵擬き1「なんなんだ！お前達！」

理「お前達は、ゴールド・マウンテン帝国支部の残党なのか？」

猟兵擬き2「ゴールド・マウンテン帝国支部？そんなものと一緒にしないでもらおうか！」

猟兵擬き1「お前達こそ、鉄血宰相の手先か！」

理「鉄血宰相：オズボーン宰相の手先かって？僕達は違う」

アリス「貴方達は何故、日本人移民街を襲撃しているの！」

猟兵擬き2「知れたことよ！西日本人移民街の連中は、革新派：鉄血宰相に忠実な犬だからな、裁きの鉄槌を下しているだけだ！」

理「身勝手な理由をつけているだけにしかみえないけど？」

猟兵擬き3「我々は、あの鉄血に苦しめられた者達、それ以上我々を馬鹿にするのなら容赦はしない」

猟兵団擬きの兵士達が、理とアリスに数で押し寄せて来る。

理「数で攻めてくるか。ならば！これで！」

理は、オルフェウスを呼び出してアギを使う。

猟兵团擬きの兵士達の服に火が付き転がり始めた。そこにアリスの重力攻撃で猟兵团擬きの兵士達を沈黙させたのだった。

11204・5・05・11:10・西の日本人移民街内部

アルフィンとすみれは、裏口から日本人移民街に侵入していた。

街内は、かなりの騒がしさになっている。領邦軍と猟兵团擬きの兵士達が、重火器で応戦している。

街の中央辺りから火の手が拡大し始めている。移動しながら領邦軍と猟兵团擬きの兵士達の戦闘を横目で見ながら

アルフィン「とにかく、あの火の手の場所まで行って見ましようか？」

すみれ「はい！」

アルフィンとすみれは、屋根づたいをジャンプしながら中央エリアを目指している。

11日本人移民街中央エリア。

アルフィンとすみれが目指している中央エリアでは、今回の猟兵团擬きの兵士達のリーダーと日本人移民街の町長が人質にされていた。

リーダー「まだ制圧はできないのか！」

この猟兵团擬きの兵士達のリーダーである、サントス・ネクヤード。容姿はいたって

普通の青年である。髪の色は、ミカン色で、髪型は3分けか。

兵士「表からの攻撃と内部にいる領邦軍の連中の抵抗激しく、我々の損害は大……」

小宮山「サントスさん、ちよつと急ぎ過ぎたんじゃないの？」

サントス「急ぎ過ぎ？何を言っている？Gからの命令で、サザラントのフレデリック・ハイアームズに一泡吹かせろと。今、それを実行中だろうが！」

小宮山「革新派寄りのフレデリック・ハイアームズに一泡吹かせろ、ね……。それで日本人移民街を襲撃するか……。これじゃあ、ちよつと前のパルム襲撃を起こしたゴールド・マウンテン帝国支部の連中と同じじゃないかい？」

ゴールド・マウンテン帝国支部。少し前にパルム騒乱を起こし、帝国軍情報局に幹部達は逮捕され、日本へ強制送還になった事件がある。すでに帝国支部は閉鎖されていて、帝国軍情報局が差し押さえている。その騒動で東の日本人移民街は、自治が返還され、西と同じ立場になっている。

小宮山が言いたいのは、ゴールド・マウンテン帝国支部の幹部のように失敗し、サントスの故郷であるローザンブリアに強制送還されると。

サントス「強制送還が恐くてこんな事をしているわけではない。それにあんたこそ、どうなんだ？故郷は日本なんだろう？」

小宮山優。純粹の日本人。日本の十師族百家体制に不満を持ち潰したいと思ってい

る。ある事件を境に日本を出国。

後に帝国解放戦線に入隊、日本にも活動拠点を広げ、同志Kとして活動している。

容姿は、眼鏡を掛けた上条当麻みたいな感じである。けっして上条当麻ではない。性格は、元々は目立つようにはなかったが、同志Cに拾われて、自身を認められてからは、開放的になっていく。元から生まれ持った能力（ミサキや静江達と同じ）があり、家族達にキモがられ、学校の同級生にもキモがられイジメられていた。でも光井和也だけは、自分自身を庇って守ってくれていた。だがあの北海道のあの事件を境に世間は和也をバツシングしていく。【死神】や【疫病神】と。そして和也の死。それは、小宮山が行動を起こしても良い材料だった。そんな時、Cと出会い彼と共にする事決める。いつか和也の仇を取るために。こんな自分を友と認めてくれた彼を死に追いやった日本を潰すために。

小宮山「あんな国に未練も何もないさ。十師族の連中は消しとばしたいが、Cに止められてるからな」

サントス「十師族…貴族みたいなものなのか？」

小宮山「まあ、そうだな。帝国の四大名門みたいなものだな…」

サントス「なるほどな…。まあ俺も鉄血宰相に恨みがある。俺達の住んでいた村を…鉄道を通すために排除しやがったからな。だから鉄血に味方するフレデリックも許せ

ね……」

サントスは、握りこぶしを作っている。そこからは、怒りが滲み出ている。そんなサントスを見た小宮山は、ちよつと考えを変えた。最初は、見捨てるつもりだったが、ここで死なせるには惜しいと思つたからだ。

兵士1「なにつ……街にも賊が……!?!」

サントス「どうした?」

兵士1「サントス隊長!街の中にも賊が入り込んだ模様……!」

小宮山「賊つてのはあの2人か?」

小宮山が見上げた建物の上には、2人の姿が見えた。ヴァイオレットに変身したすみれとアルフィンである。

サントス「……女が2人……」

小宮山「ふつ……まさか日本のお助けマンのヴァイオレットと出会うとはな……」

兵士1「お助けマン?」

小宮山「余計な事を考えるな!考えたらやられるぞ!」

兵士1「はあ!」

サントス「……全兵士に告ぐ、西日本人移民街からの撤退する。フレデリックに一泡は吹かせるという目的は果たせた。だが、犬死は認めない!撤退せよ、強敵と戦うな!

今はその時ではない！」

兵士Ⅰ「サントス隊長は、どうされるので？」

サントス「俺は、全兵士が撤退する時間を稼ぐ。だからお前も撤退せよ」

兵士Ⅰ「しかし……！」

サントス「しかしでもない！こんなところで死なせるわけにはいかない！」

すると小宮山が前に来て

小宮山「なあーに心配しなさんな。サントスだけを戦わせるつもりはない。俺も時間稼ぎぐらいできる」

兵士Ⅰ「……わかりました。どうかご無事で」

兵士Ⅰは、その場から離脱する。サントスと小宮山は、ヴァイオレットとアルフィンを迎え撃つ態勢をとり始めた。

111204・5・05・11:25・西の日本人移民街内部

屋根つたいに飛んでいたすみれとアルフィン。移動中、すみれが途中で止まる。

すみれ「……これからは、本当の戦場……。ヴァイオレットにならないと」

すみれは、当初あの世界、メメントスと言われる場所でしかヴァイオレットになれな

いと思っていた。しかしこちらの世界でもヴァイオレットになれることがわかった。それからお助けチャンネルを始めたのだった。アルフィンがあっ!とした表情で

アルフィン「…あっ、例の戦闘服みたいなやつですね。新体操のレオタードみたいなやつですね」

すみれ「まあ…そうですね。新体操のレオタードよりも面積は狭いですけど」

アルフィン「わたくしもそうコスチュームが欲しいですわ」

すみれ「いやいや、アルフィンがそのような身に付けたら…」

アルフィン「身に付けたらなんですか?」

アルフィンが小悪魔的にすみれを見る。すみれは、アルフィンが自分のような戦闘服に着た姿を想像をしてみました。ボン、キュッ、ボンの体型のアルフィンであるため、色々大変でダメだと思った。

すみれ「や、やはり皇女殿下が着られるものではありませんよ!」

アルフィン「そのコスチュームは、すみれの専売特許なのかしら?」

すみれ「べ、別に私の専売特許ではありませんが…」

アルフィン「ふっ、すみれって、エリゼと同じく、からかいがある感じがするわね」

すみれ「か、からかわないで下さい。私もまだ恥ずかしさがありますから」

すみれは、心を落ち着かせるため、胸に手を置いた。するとすみれの身体が光だして、ヴァイオレットに変身する。

アルフィンもそれを見届けると、彼女自身も精神を研ぎ澄ませ始めた。ヴァイオレットもアルフィンの回りに魔力が集まって来てるのを肌でヒシヒシと感じている。彼女の回りに炎の感じのオーラを纏っているような感じになっている。

アルフィン「さて、行きますわ。準備は良いかしら？」

ヴァイオレット「はい！私はいつでも行けます！」

すみれは、太刀を鞘からゆつくりと抜いた。アルフィンは格闘戦術で行くようだ。

ヴァイオレット「アルフィン、プリーツスカートで格闘戦術を？」

アルフィン「ええ、そうですね？何か変でしょうか？」

ヴァイオレット「そ、そのプリーツスカートで、動き回ったら…スカートの中が見え

るんじゃない？」

アルフィン「すみれは、わたくしのパンツが見えるのではと心配してくださってるのかしら？でも大丈夫、見せパンを履いてるから大丈夫ですわ」

ヴァイオレット「見せパンですか…」

アルフィン「すみれは、見せパンを穿かれたことは無いのですか？」

ヴァイオレット「あ、ありますよ」

アルフィン「今はわたくしよりもすみれの格好の方が殿方の視線を独り占めですね」

ヴァイオレット「見せつけるためではありませんから！」

アルフィン「冗談はここまでにしておいて……。獵兵団擬きの兵士の方々が、撤退しているみたいですね」

アルフィンの指摘したとおりに、獵兵団擬きの兵士達が、一斉に撤退をしている。領邦軍と戦っていた兵士達も撤退を開始、領邦軍は、一気に獵兵団擬きを街の外へ追い出すようにしている。

ヴァイオレット「撤退して諦めたんでしょうか？」

アルフィン「わかりませんわ。ただ占領する目的では無かったのでしょうか……」

ヴァイオレット「それでは何のために？」

アルフィン「わたくしも分かりかねます。街の中央……に2人いますわ。わたくし達を待ち構えるように……」

ヴァイオレット「アルフィン、行きますか？」

アルフィン「ええ、もちろんですわ」

アルフィンとヴァイオレットは、建物の上から獵兵団擬きの兵士達のリーダー各の2人を見下ろした。

ここにアルフィンとヴァイオレットとサントス、小宮山の戦いが始まる。

12-12-5・05 (11:40~) -セントアーク騒 乱の序章。

111204・5・05・11:40・西の日本人移民街内部。

西の日本人移民街内部の中央部に位置する場所にて、アルフィンとヴァイオレット（すみれ）と猟兵団擬きの兵士達のリーダーの2人と対峙する。

日本人移民街の内部に、燃える建物の中、風が吹いてアルフィンやヴァイオレットの髪やスカート揺らす。

サントス「何なんだ、お前達は？」

小宮山「お前は、お助けチャンネルのヴァイオレットだな」

ヴァイオレット「わ、私を知っているのですか？」

小宮山「ああ、知ってるさ。俺も日本人だからな。まあ、日本人って名乗るのは久方ぶりだな。本来なら名乗りのもへドが出るがな」

ヴァイオレット「へドが出る？」

小宮山「そうだ。あの国は終わってる。何がエリートだ！何が十師族だ！そんなものせいで、友が死んだんだよ！」

アルフィン「お友達の死が、その十師族となんの関係があるのですか？」

小宮山「大有りだ。俺はあいつにおつきな借りがある。それなのに借りを返す前に死んでしまった…自殺だ…日本のやつらがあいつを死に追いやったんだ！」

アルフィンもヴァイオレットも黙りこんだ。

サントス「同志…K…」

小宮山「ヴァイオレット、お前は何のために戦う？」

ヴァイオレット「それは…」

小宮山「か弱き人のためか？」

ヴァイオレット「……」

小宮山「あいつも、か弱き人達を守っていかなくてはならないって言っていた。あいつは、魔法師じゃないのにそんなことを言っていた。だが北海道の事件で、十師族関係者が多数死んで、生き残ったあいつを糾弾しやがった…あいつが守っていかなくてはならない人間達と言った連中も一斉にバッシングしやがった」

ヴァイオレット、アルフィン「…!!」

ヴァイオレットもアルフィンも小宮山が誰の事を言おうとしているのか。

この世界の光井和也であることを。

アルフィンは、平行世界から来た和也（カズヤ・アレイスター）の事は知っている。

平行世界から生まれ変わって誕生した四葉家の長女である司波深夏。そして隣にいるヴァイオレットこと芳澤すみれ。そして自分自身である、アルフィン。

カズヤ・アレクスターや自分達の様に生まれ変わって来た者もいる。そんな考えからあることを考えた。

この世界にも光井和也はいるのではないかという仮説。それと小宮山の言葉がアルフィンを正解に導く。

この世界に光井和也がいる事を確信したのであった。

小宮山「だから、鉄血に手を貸す四葉も七草の手の中で泳がされてる連中も全て潰す……」

ヴァイオレット「復讐って事ですか？」

すみれは小宮山達と対峙しながら、小宮山にそう聞いた。

小宮山「復讐：確かにそうかも知れない……。だかな：俺はそれでも良しと思ってる。だから、ヴァイオレット：復讐はやめるとか、聞くつもりはない……」

サントス「そうだな、俺達は復讐の炎で集まった同志だ。お前達にとやかく言われるつもりはない」

小宮山とサントスは、身構える。もう説得という選択肢は無い。

アルフィン「やるしかありませんわよ、ヴァイオレット！」

ヴァイオレット「わかってます！」

アルフィンとヴァイオレットも小宮山、サントスと対峙して身構える。

ここにセントアーク騒乱の序章の戦いが始まるうとしていた。

11204・5・05・12：15・西の日本人移民街内部中央エリアにて。

11ヴァイオレットside

強い強風が吹く中、ヴァイオレットとアルフィンは、サントスと小宮山と戦っていた。

サントスとヴァイオレット、アルフィンは小宮山と戦っている。

サントスの戦い方は、導力銃と背中に抱えてる剣。今は導力銃でヴァイオレットと対等に戦っている。

ヴァイオレット「みせて、サンドリオン！」

サントス「なんの、これしきの攻撃！」

サントスは、サンドリオンが繰り出す攻撃を導力銃の胴体部分ではね返す。
ヴァイオレット「導力銃の胴体で、跳ね返した!?!」

サントスは導力銃をチラチラ見ながら説明をする。

サントス「これはな、そこらの導力銃じゃないんだよ。太刀だろうが大剣でも受け止める事ができる。なんで出来てるかは知らんが、随分と助けられてるよ！」

ヴァイオレット「…ふう…私にしたら、厄介この上ないって事ですわね」

互いに距離を空け、様子見の状態が続く。そんな時、サントスとヴァイオレットが戦っている向こう側で衝撃という爆発が起き、衝撃波が襲いかかってくる。サントスもヴァイオレットも吹き飛ばされないようにガードをする。

サントス「ふう…向こうはかなり激しいみたいだな。あのお嬢さんもよくやる」
ヴァイオレット「ええ、私もそう思います」

——アルフィン side

ヴァイオレットとサントスが戦っている時、アルフィンと小宮山が激しく戦っていた。

小宮山「中々やるな、お嬢さん」

アルフィン「貴方もですわ」

アルフィンの白いブラウスは、少し汚れている。小宮山との戦いで、汚れてしまった。

小宮山「…そんな力があるのに国のために戦うのか？」

アルフィン「わたくしは国のためではありませんわ。か弱き人達のため、声を上げる事が出来ない人達のために…力を振るうことにしていますから」

小宮山「…：…なら、今のこの世界の実情をどう思っている！」

小宮山は、アルフィンに衝撃波を放つ。

大賢者「告、正面から衝撃波がきます！」

アルフィン「わかってるわ」

アルフィンは、ガードの体勢を取る。両手を交差させ顔を守る体勢である。声を放った衝撃波は、重くアルフィンの白くて細い手足に傷を付けていく。傷から血が滲み出てくる。白いブラウスやピンクのプリーツスカートもところどころ衝撃波で破れてしまっている。

小宮山「…俺の衝撃波を受けて無事だったヤツは、あいつとお前が初めてだ！」

アルフィン「あいつとは、どなたか存じませんが、それは光栄ですわ。確かにまともな喰らえば、ただではすまないでしょうね。貴方がさつき言っていた今の世界の実情をどう思うか、と仰いましたよね？わたくしも今の世界の実情を良しとは思いませんわ」

小宮山「世界は…あいつを見殺しにしたんだ！いやあいつだけではない…イジメやなんかで自殺した人間のことを何とも思っていないんだよ！」

小宮山からどす黒いオーラが漂ってくる。

大賢者「解、あのオーラは、負の感情そのものです。この者の絶望や哀しみが合わさって作られた…オーラ…」

アルフィン「大賢者、わかってるわ…」

小宮山「だから、壊す…。あいつの死に関わってるヤツは全て壊す！」

小宮山は、そう言つてアルフィンへ向かつてくる。アルフィンは、真横に飛ぶ。しかし小宮山は、避けた方へ攻撃を加える。アルフィンの肩に当たり、後方に吹き飛ばされる。飛ばされた先に民家の壁に激突し内部まで飛ばされた。

大賢者「解、マスター、先程の攻撃のダメージは、15%くらいでしょうか」

アルフィン「15%も喰らつてはないわ。ただ民家の壁の破片とかが、身体に当たつて痛いですわ」

先程よりもアルフィンの白いブラウスやピンクのプリーツスカートは、破けが酷くなっている。

大賢者「15%とは、衣服まで入れたダメージ数値です。既に自動回復魔術が発動し、傷を癒しています」

大賢者が言ったとおりに、ダメージのほとんどは、衣服だろう。さつきは言つてないが、白いブラウスが破れた部分から緋いブラジャーが見え隠れしている。しかし傷は自動回復魔術で傷は治っていく。

アルフィン「この白いブラウスとピンクのプリーツスカートは、お気に入りだったのに、こんなになってしまいましたわね…」

大賢者「解、まさかこんなことになるなんて思わなかつたですからね」

アルフィン「そうですね…」

大賢者「告、向こうから、再び衝撃波が放たれています！」

アルフィン「わかってますわ！」

アルフィンは、衝撃波を炎の障壁でかわす。かわしてすぐに民家から出る。

アルフィンは、すぐに小宮山を捉える。

小宮山「ほう、まだ生きていたのか。たいしたものだよ」

アルフィン「随分と余裕があるようですね？」

小宮山「そう見えるか？あまり力を入れると、相手を殺してしまうからな。そう言う

お前こそ…ピンピンしているようにしか見えないが？」

アルフィン「そうでしょうか？」

アルフィンは、小悪魔的な表情で小宮山を見る。小宮山は苦笑いをしながら

小宮山「…そんな表情をあまり男にしない方が良いぜ。変な男なら勘違いを起こす

ぜ」

アルフィン「貴方はどうなんですか？」

小宮山「ふん、どうだろうな…」

小宮山がそう言った後、上空からヘリコプターの音が聞こえてくる。

小宮山「…時間か…」

アルフィン「この音は…導力ヘリ…ですか！」

小宮山「そうみたいだな…」

導力ヘリから兵士の1人が小宮山に声をかける。

ヘンリー「小宮山さん、同志Cからの伝言です！」

小宮山「ヘンリー、同志Cが言いたい事はわかる。同志の部隊の撤退は終えたんだな

？」

ヘンリー「ええ、サントスさんと小宮山さんのお掛けで撤退は完了しました」

小宮山「そうか…お前とはまだ戦いたいが、そうも言ってもらえないからな」

アルフィン「貴方達の目的は一体…フレデリック卿を困らせるだけじゃないですね

？」

小宮山は民家の屋根から導力ヘリへ飛び移る。

小宮山「いづれ分かるさ。それまで生きていろ」

アルフィン「こ、答えになってもせんわ！」

小宮山を乗せた導力ヘリは、ヴァイオレットとサントスの方へ飛んでいく。

ヴァイオレット side ー

ヴァイオレットとサントスも互いに譲らない戦いを繰り返している。サントスは、導

力銃からCADに使用武器を変えている。

ヴァイオレット「サンドリオン!!」

サントス「CAD発動! スクリューウォーター!」

サントスが放ったスクリューウォーター、ヴァイオレットに対して回転しながら水の渦が迫ってくる。ヴァイオレットは、太刀を構えて静かに目を瞑る。

ヴァイオレット「八葉一刀流: 式の型: 疾風!」

ヴァイオレットは、回転している水の渦を太刀で切り裂いた。

サントス「スクリューウォーターを切り裂くだ! ならばこれならどうだ!」

サントスは、すかさずCADを発動させる。

サントス「今度は、これだ! アースクエイク!」

今度は地面が揺れ始め、地面から細長い土の槍がヴァイオレットを襲う。ヴァイオレットは、避けながら

ヴァイオレット「日本を魔法を使いこなせているわけですね」

サントス「ああ、同志Kや他の日本人同志に習ったわけだ」

ヴァイオレット「: 小宮山さんや他の日本人の方に何があったのですか? やはり、光井和也の件なんですか?」

サントス「同志Kが言っていただろう? 友の仇とあいつの故郷を変えること、帝国を

変えること……それだけだ！」

土の槍が、ヴァイオレットを一斉に襲う。ヴァイオレットも避けてはいるが、全てを避けているわけではない。彼女の全身を見ればわかる。ヴァイオレットの衣装がところどころ破れている。破れているところからは、血が滲み出ている。

ヴァイオレット「……国や周りを憎む気持ちは分からなくもないです。ですが……こんなことして、亡くなった人が納得するでしょうか！」

サントス「俺も他の同志達が、最初からこんなことを始めたわけじゃねーよ。話し合いや交渉でやろうとした……だが裏切られたんだよ！わかるか、奴らは約束なんか最初から守るつもりはないんだよ……！」

サントスは、CADを操作しアースクエイクを発動させる。ヴァイオレットの足元を揺らし、地面からは土の槍をヴァイオレットに向かわせる。ヴァイオレットは、太刀で土の槍を斬り裂いていく。しかし多勢に無勢な感じになり、彼女の右腕をかすり、痛みで表情が歪む。かすった場所からは、血が流れ出す。

サントス「お前さん、大丈夫なのか？右腕を怪我してるじゃないか。血が流れているぞ！」

ヴァイオレット「ええ、わかってます。血が流れようが関係ないです。こんな痛み……なんか大したこと無いです！」

サントス「やせ我慢か？ならば仕方がない…」

サントスは、CADを操作しようとした時、地響きがなり始める。そして空には、導力ヘリが現れる。そして小宮山の声がする。

小宮山「サントス！撤退だ！」

サントス「同志K！わかった！」

小宮山は、サントスのためにロープを垂らす。サントスは、ロープを掴んだ。そして導力ヘリは、再び高度を上げて進み出す。

サントス「今はまだ殺しはしない。ヴァイオレット…今一度世界をよく見る事だな…
そしてよく考える事だ」

サントスがそう言うと、彼や小宮山を乗せた導力ヘリは、北西の方角へ飛んでいった。
ヴァイオレット「……今一度世界をよく見る、か……」

ヴァイオレットは、ただその言葉の意味を考えていたのだった。

13-13-5・05 (13:00~) -騒動の後で。

111204・5・05・13:00・西の日本人移民街

西の日本人移民街を襲撃した謎の部隊は、すみれ、アルフィン、理、アリスと領邦軍によつて撃退された。

火災の気の方も領邦軍の迅速な行動により、小規模で済んだのだ。このあとすぐに帝国軍情報局の人間が来て、すみれ達は取り調べを受けることになった。すみれは、アルフィンにより治療魔法をかけてもらった。それと彼女から領邦軍や帝国軍情報局には内緒にしてくれと頼まれた。偽物が、アストライア女学院に入るため、余計な騒ぎになりかねないと。

すみれ達は、重要参考人という立場にあるようだ。それはある意味仕方がないだろう。領邦軍と猟兵団擬きが交戦中に、猟兵団擬きのリーダー各と戦っていたのだから。

西の日本人移民街の鉄道憲兵隊と領邦軍の詰所で取り調べを受けることに。西の騒動の報の知らせを聞いたミサキも東の日本人移民街から西の日本人移民街へとやつて来たのだった。

すみれ達は、ミサキと再び再会するのだった。

そしてすみれ達は、鉄道憲兵隊と領邦軍の詰所の会議室の中でミサキによる取り調べ中である。

ミサキ「まさか、貴女達が西の日本人移民街で戦つてたなんて驚きよ」

すみれ「なし崩し的に戦いに参戦してしまいました」

ミサキ「ふう、すみれさん、猟兵团擬きの兵士が西日本人移民街を襲撃を見たから、戦いに身を投じたつてわけね」

すみれ「すみません」

理「今は…目の前の出来事を見てみぬふりは出来ない性格になつてしまつたからね」

アルフィン「ミサキさん、誠にすいませんでしたわ」

ミサキ「姫様…全く無茶をされて…他の者達が気づいたら大変ですよ」

アルフィン「確かに大変でしょうねえ。でもミサキさんが何とかしてくれますから」

ミサキ「姫様…私の能力を当てにされてるのでしようが、あまり使いたくは無いです」

ミサキの能力の1つ、【心理掌握（メンタルアウト）】。禁書の食蜂操祈と同じあれである。記憶改竄を行えば、気づいた人間の記憶を書き換えることは出来るが、それではミサキが意味嫌うD∴G教団の連中と変わらないと考へてるからだ。アルフィンもそれは理解している。

アルフィン「ミサキさんのことは、ちゃんとわかってますわ。だから使わなくても良いんですよ」

ミサキ「：それならば、アルフィン殿下が無茶をなさらないようにしてもらいたいですね」

アルフィンとミサキは、お互いに不敵な笑みを浮かべて笑っている。すみれ達にはそれが不気味にしか見えなかった。そんな中理が話を切り出す。

理「コホン、それでミサキさん、あの連中の素性はわかったの？」

ミサキ「まだわからないわ。ゴールド・マウンテン帝国支部の残党かとも思ったけど、どうやら違うみたいだし。帝国支部の幹部達は、東ゼムリアで護送挺ごと海の藻くずになっただけで報告がくるし：」

ミサキはため息を吐きながら、すみれ達を見る。

アルフィン「やはりミサキさんも知ってらっしゃいましたか」

ミサキ「殿下ですか：。大方殿下の御知り合いから教えてもらったですね」

アルフィン「まあ：そうですね」

ミサキ「東ゼムリア海上：日本の領海内に沈んだようだし、日本政府が単独で回収するつもりだったけど、私が日本の七草家を通して交渉したわ。帝国と日本の共同調査まで取り付けたわ」

理「へえー、よくそこまでやれたものだね」

ミサキ「まあね。まあ私だけの力じゃないけどね。四葉の深夏さん、七草の静江さんの助力があつたからこそね」

四葉家のエージェントである司波深夏、七草家のエージェントである麦野静江、2人とも東の日本人移民街で起きたゴールド・マウンテン帝国支部による騒動を鎮圧を手伝ってくれたのだ。

その後の日本との交渉を陰ながらも助力してくれたのだ。

すみれ「私達の知らないところでそんなことが……」

アリス「四葉家と七草家……十師族の中でも飛び抜けた2家……それも2家の中でも飛び抜けた力を持つ司波深夏と麦野静江……私でさえ会ったこと無いですが……ミサキさん凄いですわ」

ミサキ「別に凄くはないわよ。私は交渉事が得意なだけだから」

ミサキは照れながら、机の上の資料を見る。その資料には、今回の西の日本人移民街の襲撃してきた者達と同じ格好をした連中の資料のようだ。

ミサキ「すみれ達やアルフィン殿下が戦った連中の正体はまだつかないけど、この連中は他の場所でも同じように騒動を起こそうとしてみたい」

理「明らかに帝国の革新派に対しての行動だろうね。しゃべっていた言葉……フレデ

リック卿の邪魔がどうのって言ってたね」

すみれ「ええ、言ってみました」

アルフィン「それと、友の仇を取るとも仰られていましたね」

ミサキ「友の仇…ね…」

理「西の日本人移民街以外でもあの連中は騒動を起こしていたって具体的にどこ？」

ミサキ「帝国以外では、日本でも暴動を起こしていたみたいね。日本の方は、静江と深夏が鎮圧したみたいだけだね」

理「やはり日本でも…」

アリス「やはり、十師族に不満がある方々が…」

すみれ「そう考えた方が良くもされない」

アルフィン「ミサキさんは、これからどうするのですか？」

ミサキ「帝国軍情報局本部と色々と話さないといけないかな。ゴールド・マウンテン帝国支部の幹部達が死んだことも含めてね」

ミサキはコップを取り、中のコーヒーを飲み干す。理もカップを手に取り飲み干した。

ミサキ「とにかく、今回の件はすみれ達に救われた部分は大いわね。ありがとう」
すみれ「いえいえ、私はそれほどでも…」

ミサキ「誇つていいのよ、すみれ」

すみれ「はい……」

ミサキ「私は帝国情報局……宰相側の人間よ。でもね、遊撃士でもあるわ。貴女の活躍は、他の遊撃士仲間から聞いているの。遊撃士の少ない日本で、人助けをしている人物がいるってね……。お助けのヴァイオレット……すみれ、貴女でしょ？」

すみれ「はい、私です。私は……困ってる方々を見て見ぬふりは出来ません」

ミサキ「深夏や静江が言ってるわ。すみれ今の日本に必要な人材ってね。日本人が失い欠けてる志を持ってるってね」

理「そうだね、僕もそう思うよ。すみれやアリス、君達は日本の希望の光……激動の時代の希望の光になると思う」

すみれ「私やアリスが？」

アリス「理さん……」

アルフィン「ええ、すみれとアリスはきつと理さんみたいになれますわ」

理「アルフィン、別に僕は良いよ」

アルフィン「いえ、理さんも含めた日本での希望つてことですよ」

アルフィンはニコニコしながら理を見ている。

ミサキ「それと、すみれさん達、今日は帰れないかも」

すみれ「え!?ち、ちょっとそれは困ります!明日から学校ですから!」

アリス「私も学校だけど、十師族権限である程度は許されるけど…」

すみれ「ず、ずるい…アリス…」

アリス「私はそんなことで、十師族権限なんて使わないわ」

ミサキ「私も帰ってあげたいけど、私の権限だけじゃ、できないわね」

アルフィン「ミサキさん、何とかありませんの?」

ミサキ「ええ、何とか1日で済むと思うので、明日の朝に…間に合えば…」

すみれ「…明日の朝…遅刻は確定ですね…」

すみれは、ガツクリとした表情で明日の方向を見ている。アルフィンがすみれの耳元で

アルフィン「大丈夫、わたくしが座標移動(ムーブポイント)で日本まで送って差し上げますわ」

ミサキ「アルフィン殿下…まあ私は目をつぶりますけど」

アルフィン「ありがとうございますわ」

ミサキ「理さん貴方も大丈夫なの?」

理「僕は大丈夫。ある程度の事情聴取はなれてるし」

ミサキ「そうなの」

理「まあね」

ミサキ「これから、帝国軍の人間とサザーラント州の領邦軍の人間が来るわ。その人達にも説明してね。もちろん私もついているから」

この後、すみれ、アリス、理、アルフィンは、帝国軍のサガット、領邦軍のロイドがやって来て、西の日本人移民街の騒動の説明をしたのだった。

111204・5・05・14:15・FLTプリンセスホテルVIPルーム。

FLTプリンセスホテルのスタッフに呼ばれた深夏は、FLTプリンセスホテルのVIPルームに案内された。

スタッフ「深夏お嬢様、帝国軍情報局のミサキ様よりお連絡が来てます」

深夏「ミサキさんから？わかったわ」

深夏は、ミサキからの導力通信をスクリーンに映し出す。

ミサキ「深夏さん、お久しぶりと言うにはまだ早いわね。さつきも搜索の件で交渉したしね」

深夏「まあ、そうでしょうね。前に会って2時間も経ってませんが…何かあったのですか？」

深夏は、ソファアーに腰を降ろしてスクリーンに映るミサキを見据える。

ミサキ「アハハ、それがあつたのです。つて深夏さん：その緋いドレス：何かパーティー中だったの？」

深夏はため息を吐きながらミサキに苦笑いをする。

深夏「パーティー：まあそんなものでしょうか。私は出席したくなかつたけど、四葉の：母の名代で来てるし：無下に出来なから」

ミサキ「アハハ、大変みたいね」

深夏「ええ、大変です。これならリベールの社交界が楽しいですね」

ミサキ「私も帝国の社交界に出たことあるけど、まあ：深夏さんがため息を吐くのはわかるわ」

深夏もミサキも社交界モテるのだが、その大半が下心丸出しの男ばかり近づいてくる。それに嫌気がさしているのだ。

深夏「コホン、それでミサキさん、本題はいつたいなんでしょうか？」

ちやんと真剣な表情に切り替えた深夏を見てミサキも真剣な表情になる。

ミサキ「ええ、それは、東の日本人移民街はご存じよね？」

深夏「当たり前です。ミサキさんや静江さん、トールズ士官学院特科クラスⅦ組の方々、カズヤさん達、教会の方々で、パルム騒乱を戦い抜きましたでしょ？その東の日本人移民街でまた何かあつたのですか！」

ミサキ「今回は、東の日本人移民街じゃないの。西の日本人移民街……で騒動が行ったの」

深夏「……西の日本人移民街で！でもゴールド・マウンテン帝国支部の幹部達は、東ゼムリアの海中に……」

するとスクリーンに理が映し出される。

理「やあ、深夏さん、お久しぶりだね」

深夏「え……？なんで理さんが、帝国の方から？」

理「僕は、桐条首相の特命で、帝国の東日本人移民街……ゴールド・マウンテン帝国支部の様子を探るように言われたのさ。まあその途中で、西の日本人移民街を襲撃していた連中と遭遇、交戦し撃退に成功したって感じだね。すみれやアルフィン殿下の話だと、リーダー各は日本人だったみたいね」

深夏「理さん、しれつと凄い固有名詞を言わなかったですか？」

深夏がちよつと慌てるような表情をしている。

理「あ、あ！アルフィン殿下か……。まあ彼女も西の日本人移民街の騒動を収めた一人だからね」

深夏「そう、わかりました。アルフィンがね」

ミサキ「深夏さん、最初は驚いたみたいだけど、意外に冷静ね」

深夏「以前、お忍びで日本に来られたの。皇女って感じではなく、ラフな感じでね」
理「まあ、想像つくな、それ……」

深夏「コホン、それで理さん、その日本人がリーダー各の武装集団……猟兵団でしょうか？」

理「猟兵団とは、言いがたいけど、猟兵の人間は混ざっていた。かなり統制が取れてたし、あの日本人が統制してるって事か……」

深夏「なるほど……それとさつき、すみれって言いましたよね？それは誰ですか？日本人ですか？」

理「僕に協力してくれた、日本人の1人だよ。名前は……」

理が名前を言おうとしたら、すみれ達がやって来た。

すみれ「理さんから紹介があった芳澤すみれです」

アリス「十文字アリスですわ」

アルフィン「深夏、アルフィンですわ」

深夏「十文字さん……貴女も!？」

アリス「私はすみれの親友ですもの。一緒に帝国に旅行に来ただけですわ」

深夏「……そうですね。日本ではゴールデンウィーク中だし海外旅行も人気だったわね」

理「話の続きだけど、すみれやアルフィンの話を照らし併せたら、日本人のリーダーの1人の名前は、小宮山優：日本の中学生だった：人物だ」

111204・5・05・14：35・FLTプリンセスホテル

理の口から衝撃な単語が出た。

小宮山優：○○中学

しかし在学中に自殺。享年15

自殺の原因は、進学の悩みによる自殺だと警察発表。家族も抗議をすることもなく、自殺したことを認め幕引きしている。小宮山優の遺品の受け取りを家族は拒否。警察で処分しろとまで言っている。

前では説明していないが、自殺しようとした時にCに止められ、自殺を改める。Cの考えに賛同し仲間になったのが正解か。

まあ自殺したように細工をしたのは、小宮山自身なのだが。もう二度と日本に戻るつもりもなく、C達と目的遂行のために生きていくを誓ったのだから。

すみれ「家族の抗議もないなんて…」

理「おそらく、家族内でも小宮山の事は、必要もなかったんだらうね…」

アリス「そんな…」

理「今、日本でかなり自殺者が増えてるんだ。それでも警察、マスコミが報道しない

からね。報道しても軽くながされるだけ」

すみれ「…そんな……」

アリス「……十師族や獅童一派のせいですわ……」

理「……僕は、たまに分からなくなるんだ。あの時、世界を滅ぼそうとしていたニコスを倒したのは、正しかったのかって……」

アルフィン「理さん……」

深夏「……」

ミサキ「……」

理「……僕達が命をかけて戦った。みんなのために。でもこんな世界を守るために戦ったわけじゃない」

アルフィン「もちろんですわ」

すみれ「……小宮山やサントスが言っていた……よく世界を見てみる、って……本当に守るべき相手は誰なのかって……。私がしてきた事って間違いなのかな……」

すみれは下を向いて悲しい表情をしている。アリスも表情は暗い。アルフィンはそんな2人を見て

アルフィン「貴女達がしてこられたことは、わたくしは正しかったと思います。それは誇っても良いです。少なくともすみれに救われた人達は、そう思ってるでしょう」

すみれ「アルフィン殿下……」

深夏「すみれさん、貴女は貴女なりのやり方で助けてきた。それを誰が批判できましようか……」

ミサキ「そうね……。すみれさん、貴女は帝国のユファイさんや達也君やリイン君、クロスベルのロイド、リベールのエステルみたいな感じがするのよ」

すみれ「え……？クロスベルの英雄のロイド・バニングス、リベールの英雄のエステル・ブライトみたいな感じですか？」

深夏「ええ、あの人達みたいに、貴女の目はそんな感じがするわ」

理「ロイドとエステル……。あの2人か。すみれからはそんな感じはするね」

すみれ「理さんは、会った事があるんですか？」

理「まあね」

理は、エステルとは影の国事件の時に会った。ロイドとは、クロスベル市長暗殺未遂事件の時に会っている。その時に不思議な力を2人から感じ取っていた。だからすみれと最初に会った時から不思議な力を感じ取っていたのだ。

すみれ「私なんかがその方々と比べるなんて失礼なんではないでしょうか？」

ミサキ「大丈夫よ、彼らはそんな器の小さい人間じゃないから。それこそ彼らが光栄に思うかも」

理「そうかもね」

深夏「私は、リベールに留学してるから、エステルとは親友だし…すみれさんの事を話してみるわ」

すみれ「あの…私の事をですか…」

深夏「すみれさん、顔が赤いですけど、どうかさされましたか？」

すみれ「いえ…そんな…私なんて」

すみれが顔を赤くしてモジモジしながら照れている。深夏はすみれのいじり方をわかったようで、小悪魔的な表情をしている。アルフィンも同じような表情を浮かべている。

ミサキ「深夏さん、すみれさん達は今日1日は預かるかな。明日、朝イチで日本の住まいに帰すから」

深夏「西の日本人移民街の件ですよ。わかりました」

ミサキ「それと、七草家と話し合った結果、5月8日に東ゼムリア海上にて墜落し沈んだ護送艇を搜索活動することが決まったわ」

深夏「はい、わかりました」

ミサキ「四葉深夜様に七草家との共同搜索を打診したけど、断られたわ」

深夏「ふふつ、四葉は前々から帝国とは良しなにしてもらってますが、七草家も帝国

に切り替えようとされてるのが、お母様は気に入らないみたいですね」

ミサキ「まあ、そこは中々かもね……」

深夏「ええ、私や真由美さんや静江さんとは仲良くしてますけど、お母様と弘一様は……」

四葉深夜と七草弘一は、本当は仲良くしたいのだが、先代の手前それが出来ないである。真夜から仲良くしなさいと言われていた事もあり対立することはない。これでも歩み寄ろうとしてるようだ。

ミサキ「帝国代表が私、日本国代表が静江になったってことかな」

深夏「すみれさん達は、飛行船で帝国へ？」

すみれ「まあ、はい」

アリス「はい、十文字家のヤツで帝国へ来ました」

理「僕も飛行船だけどね」

深夏「アリスさん、十文字家の飛行船は？」

アリス「飛行船は、一応帰しましたわ」

深夏「それじゃあ、私が帝国まで……」

深夏がそう言った途中にアルフィンが

アルフィン「でしたら、わたくしが自分の能力で日本までお送りしますわ」

深夏「え……？」

深夏はとつきにそんな声を出した。そしてすぐにアルフィン表情を見て理解した。彼女は、すみれ達に自分の素を出していることに。そして座標移動（ムーブポイント）のこと。

アルフィン「どうかされましたか、深夏？」

深夏「い、いえ……アルフィン殿下は、すみれさん達に」

アルフィン「ご想像にお任せしますね」

アルフィンは、深夏に対してそう言った。アリス達はなんのことかわからないようにしていた。だがすみれは感じてしまう。深夏もアルフィンも、生まれ変わる前はすみれ自身と同じ「光井和也」だったということに。

深夏「アルフィン殿下、また貴女とは直でお話したいです」

アルフィン「ええ、わたくしもそう思っていましたわ」

ミサキ「……アルフィン殿下、深夏、まだすみれさん達には、事情聴取があるから」

深夏「はい、わかりました。すみれさん、貴女とも是非直でお話をしたいですね」

すみれ「い、いえ、私とお話をしてくださるなんて光栄です」

すみれと深夏は、5月のどこかで話すことを決めた。アルフィンとは、夏に帝国で夏至祭があるからその時に話しましょう的に決まった。

ミサキと深夏は、帝国と日本との東ゼムリア海に沈んだ護送艇【暁】を引き上げる手順などを模索している。理は、アルフィン殿下と何かを話しているようだ。

こんな感じに時間は過ぎていく。再び帝国軍のサガット、領邦軍のロイドの事情聴取が始まるのだった。

こうして、すみれとアリスのゴールデンウィークの帝国旅行擬きは終わりを告げる。すみれは秀尽学園、アリスは第1高校での生活が再開される。

ただ、運命の動乱は、着々と進み始めていた。

111204・5・05・22:30・セントアーク中央ホテル。

すみれ、アリス、理は、それぞれの部屋をとってもらった。ちよつと前まで、帝国軍情報局とサザラント州の領邦軍から事情聴取を受けていた。

全ては西の日本人移民街の戦闘行為に介入した件だろう。

すみれ「明日は…途中から登校かあ」

アリス「私は途中からの登校で咎められることはありませんけど、すみれの方はどうですの？」

すみれ「うーん、鴨志田逮捕の件で学校はまだあわてふためている可能性もあるかも」
アリス「そう言えば…そんなことありましたわね。帝国で色々ありましたから、忘れ

ましたわ」

すみれ「色々気になることはあるけど、山田さんに調べたことを報告した後は、しばらくは学業に専任しようと思う」

アリス「私達の本業は学生なんですから。それが良いと思うわね」

すみれ「そうね：それと今回はありがとう、アリス」

アリス「私こそありがとうですわ」

すみれ「ふふっ、こちらこそ」

すみれとアリスは、そう言って就寝することになった。

だがすみれのお助けチャンネルには、平塚春雪の助けての声が届いていたが、そんなことを知るよしもなかった。

14 | 14 | 5・06 | 5・07 | ゴールデンウィーク明け。

1 | 1204・5・06・昼前・11:20

帝国↓日本 | 成田国際空港↓芳澤家↓秀尽学園。

すみれとアリスは、日本の成田国際空港まで一緒に帰ってきた。空港内で分かれたすみれは、すぐに自宅へ帰宅する。帰宅するとすぐに制服に着替えて登校する。

駅に張られているポスターとかは、鴨志田の悪逆非道の内容が絵と共に書かれている。鴨志田も悪人だが、全て彼のせいだとなっている。

この国の状態は、帝国で知れたので何とかしないとイケないとは考えている。だがまだ高校生の身分であるため、行動に移ることが出来ない。ゴールデンウィーク明けの日常のスタートでもある。

すみれ「久しぶりの学校：みんなはどうしてたのかな」

すみれは、そんなことを考えながら秀尽学園へ向かった。

1 | 1204・5・06・昼休み・秀尽学園、1階の廊下。

昼に登校したすみれは、職員室で担任に報告をした。担任は、私が少し具合を崩したから午前中は休んで午後から来ると報告を受けていたのだ。父親が報告したことになるってなのだ。

担任に報告したすみれは、職員室から出る。そしてすみれは右手の指を顎に添える。

すみれ「報告は、アリスがやってくれたのかな」

アリスの実家は、十文字に連なる家柄である。このようなことは、お安いものである。すみれ「：アリスには後でお礼を言うとして：この秀尽学園は変わらないわね」

日本の5月の休日であるゴールデンウィークが終わったというのに、まだ休日気分であるかの生徒達である。

すみれ「私にとっては：この日常が当たり前のはずなのに：」

すみれは、帝国国でのテロリスト達、小宮山が言っていたことを気にしている。十師族や現体制を否定することばかり言っていた。確かにすみれ自身も今を良しとはしていない。だからと言って戦いを起こすことが正義ではないと思っている。

すみれがそんなことを考えていたら、彼女の前を新島真が通りすぎて行く。

真「失礼します」

そう言って校長室へ入って行く。

すみれ「あれは、新島真生徒会長：彼女なんか思い詰めた表情をしていたような：」

すみれは、校長室の様子が気になったので、自身のペルソナであるサンドリオンを呼び出す。そして校長室を覗く。校長室の隣にある休憩スペースのベンチに座り様子を窺う。

真「失礼します、お呼びででしょうか？」

校長「鴨志田君の有り様は、君も見たね？まるで【人が変わった】ようじゃないか。絶対に何かがおかしい」

真「仰つてる意味が……」

校長「聞けば、妙なちよっかいを出していた生徒らがいたそうじゃないか。その連中が、先生に【何か】をしたのか……したとしたら、誰なのか……」

真「つまり鴨志田先生は、生徒に何かをされて、あんなつたと？」

校長「それが知りたいんだ。大人が学生のコミュニティに立ち入っても……ね。君に探つてほしい」

校長は、真に鴨志田があんなつた原因を探れと言っている。ただ真も鴨志田のよからぬ噂も聞いているから、即答はできなかった。

真「鴨志田先生にもいろんな噂がありますが……まさか、例の怪盗団のことと？」

真がゴールド・マウンテン帝国支社の連中に帝国へ連れ去られて、ツールズ関係者や他の者達に救いだされて日本へ帰ってきた時に、怪盗団騒ぎになっていたのだ。それから

ら、鴨志田の様子がおかしいと真も思っていた。

校長「鴨志田先生が「変わった」のは事実だ。原因が何なのか、正しく掴んでおきたい。警察やマスコミへ対応をまちがえないためにもだ」

真「……………」

校長「鴨志田先生には、引き続き私が話を聞く。

「君は、【何か】をした【誰か】を探るんだ。でないは無責任のウワサは収まらないウワサも収まらない。そうだろ？入学以来、定期考査は毎回のように学年首位。素行も良く、教師からの人望も厚い。どこの大学にも推薦できるよ。新島真君」

真「あ、ありがとうございます」

校長「やはり血筋なんだろうね。確かにお姉さんは、若くして検察庁のキャリア：だったかな？」

真は、姉の事を出されて、あまりいい気分にはならなかった。校長は、真の弱味を握っているかのように言ってくる。

校長「君に何か不本意があつたら、お姉さんは、あまり都合が良くないだろうね。前回のように…ね、わかるよね？」

真「…はい」

校長は、ゴールド・マウンテン帝国支社に連れ去られてたこと自体をなかつたことに

してしまっている。とある連中達を使って改竄をしているのだ。彼女の経歴に傷をつけさせないために。彼女を縛るために。

校長「急いでもらえると助かる。さっそく取りかかってくれたまえ」

真「……失礼します」

真はそう言つて校長室から出ていく。彼女が出ていくのを見てから、校長はスマホを取り出しどこかへ連絡する。

校長「先生、私です。お忙しいところ恐れ入ります。例の件で……はい……抜かりはありません。早速、調査に……もちろんです。あの、良い結果を……はい、近日中には……お伝えできるかと……それでは、失礼致します。お時間頂きまして、まことに……」

すみれは、校長室からサンドリオンを戻した。心の中で、情報を整理する。

校長は、真に鴨志田がああなった原因に誰か生徒がいるとして、犯人捜しをやらせることに。だが当の生徒会長である真は、犯人捜しには消極的だが、姉の事を持ち出して、圧力を加えてきた。

真も渋々承諾。

ただ校長にもスポンサーがいることがわかった。先生と校長が言っていたから、「先生」と呼ばれる職業柄であることがわかった。

すみれ「だけど、それが誰なのかまでは分からなかった」

サンドリオンを発動した状態で、第3の眼を使ってもわかったかどうかはわからないが。

真がすみれの前を通りすぎていく。そんな彼女を見つめるすみれ。するとスマホの着信が鳴る。すみれはスマホを取り出すと、アリスからチャットがきていた。

アリス「すみれ、真由美や克人君から聞いたのだけど、秀尽学園に警察の調査が入るみたいよ」

すみれ「真由美、克人君？」

アリス「ごめん、すみれ。私のお友達だよ。2人は直系の十師族だから。その2人からの情報だからね」

すみれ「やはり、鴨志田事件で？」

アリス「それもありませんが、それ以外なこともありますわね」

すみれ「怪盗団のことかな？」

アリス「ええ、怪盗団が秀尽学園にしているとふんでるみたいね。これから警察がくると思うから、気を付けてね。また何かあれば連絡するわ」

すみれ「ありがとう、アリス。こちらも気をつけるね」

すみれは、そう書き込んでチャットを終える。スマホをポケットにしまうと窓の外を見る。

すると校門から警視庁の刑事や警察官が入ってくるのがわかる。すみれ「やはり、鴨志田センセイの調査をやるために。物的証拠を集めに来たと言うことかしら。それと怪盗団の調べもあるからかもしれない。できる限りは私もしないと」すみれは、警察の状況を見極めながら、己のやるべき事をやっていく。

111204・5・07・夕方・秀尽学園の廊下。

今日の1日の授業を終えたすみれは、帰る準備を整える。

来週から中間テストなので、部活動は無い。勉強をしなくても前世の記憶があるからすらすらと解けてしまうが、前世の記憶に頼りたくはない。だから前世の自分の記憶ではなく、芳澤すみれとしてやり遂げるためである。

すみれが廊下に出て、くつ箱に向かう途中、生徒会長である新島真とすれ違う。

彼女は、階段を昇って行く。

すみれ「新島生徒会長、何だか思い詰めた表情をしてたわね」

すみれはその表情が気になって真の後を追う。先の飛び降り自殺未遂があったから余計に気になっている。

真は、屋上の扉を開けて外へ出る。すみれは、気づかれないように気配を消して、屋

上の扉から聞き耳を立てて外の会話を聞く。

すみれ「どうやら新島生徒会長、雨宮先輩達と会話しているのかな？」

サンドリオンを発動して聞いている訳じゃないので、音声は聞き取りにくい。それでも何とか聞こうとする。

真「……まあ、いいわ。考えておくれ。ところで、鴨志田先生と、いろいろあつたみたいだけど？」

蓮「まあ、確かに色々ありましたわ」

雪奈「この学校に入れば、嫌でも鴨志田先生とは接点を持つことになりますね」

真「ふうん……前歴のこと、鴨志田先生が広めたらしいね。バレエ部員を使って。憎くない？鴨志田先生のこと」

竜司「さつきからなんなんスカ？つか、こいつすげえ人間できているんで」

真「気を悪くしないで。鴨志田先生の件で動揺している生徒も多いの。予告状みたいな貼り紙の噂も、中々消えないし」

杏「意外、新島先輩って、あんな貼り紙のこと気にしてるんだ？」

竜司「……そ、そうだよな〜つか、もうよくねえっスカ？話しかけると出れねえし」
真「悪ふざけに付き合わされる身にもなつてよ」

杏「悪ふざけ……」

雪奈【……】

真「そうそう、ここね、例の事故もあったし、閉鎖することになったの。誰かさん達が無断で入ってるって噂もあるしね。お邪魔してごめんなさい」

真がそれだけ言うところからへ向かって来たので、すみれは慌てて隅の見えないところへ隠れる。

真「私だって、こんなことしたくは支度はないよ。鴨志田先生に非があるのは明白なのに……。校長先生は生徒を守るより、学園の体裁、学園の面子、校長の地位を守りたいだけ……。私は……。悔しい……。帝国のツールズ士官学院特科クラスⅦ組のユフイさん達は、自分達の意味であるテロリスト達と戦っていた。同じ年頃なのに……。私と彼らは覚悟が違ふ……」

そう言つて、真は階段を降りていく。

すみれ「新島先輩……。ツールズの皆さんに会つてたんだ……」

すみれはそう言いながら真が去つていった方向を見る。すると蓮達が屋上から降りてくる。やはり真の事ばかり、言いながら降りていく。

すみれ「……。雨宮先輩達は、中間テストが終わるまでは、行動はしないか……。なら私もテストに集中できるかな」

すみれは、蓮達が去つていく方向を見ながらそう思つたのだった。

15-15-5・13-丸喜先生とカウンセリング。

すみれ side

111204・5・13・朝・すみれの自室。

まだまだ中間テストの最中であり、テストのことばかり考えていたのだが、親友の魔法科高校に通う十文字アリスから昨夜連絡があったのだ。

アリス「すみれ、夜遅くにごめんね。ちよつと話があるのよ」

すみれ「話したいことって何？」

アリス「貴女の学校にカウンセリングの先生を派遣することになったわ。明日から来ると思うわ」

すみれ「カウンセリングの先生？なんで急にそんなことを？」

アリス「鴨志田先生によって傷ついた生徒の心をメンタルケアをするって、十文字家宗家に学校側から頼まれたらしいわ。私も学校で従兄の克人から聞いたのだから」

すみれ「カウンセリングの先生って誰が来るのかしら？」

アリス「えーと、丸喜拓人先生だね。十文字家が支援している丸喜カウンセリング所の所長さん」

すみれ【えっ!!丸喜先生が!!】

アリス【すみれ、丸喜先生の事を知ってるの?】

すみれ【うん、知ってるわ。お父さんの先輩の息子さんで、私も以前カウンセリングを丸喜先生から受けたことあったから…。まさか丸喜先生が……】

学校側、学校のPTAやら東京都の教育委員会等から十文字家にカウンセリングの要請があったのだ。

丸喜拓人、丸喜カウンセリング所の所長であり、すみれの父親の先輩の息子である。

すみれとは、昔に何回か会った事があるが、彼女はあまり覚えていない。彼女の母親と姉を失った時、落ち込んでいた彼女をカウンセリングをしたときに再会した。その時からすみれは、丸喜にカウンセリングを受け、相談などを受けていたのだ。

実はお助けの仕事も丸喜と相談した上でやり始めたのだ。

アリス【丸喜先生が…すみれの…何だか運命的よね…】

すみれ【確かに運命的を感じるわね…】

アリス【丸喜先生の話は、一旦置いといて、すみれ、お助けチャンネルは見たの?】

すみれ【ううん、山田さんに帝国で調査した内容を説明した事、引き続き斑目の事を調査すると報告しただけ】

アリス【お助けチャンネルの、1204・4月下旬に書かれているこれを】

アリスは、すみれのARCCUSにあるお助けチャンネルに書かれたデータを写真付きで送った。

111204・4・下旬・23:25ー

【平塚春雪は、学校、家族からのイジメから助けてくれ】と

【お願いします、ヴァイオレット様:助けて下さい】

アリス【お助けチャンネルのサイトの書き込みを見ていたら、十文字家を陰ながら支援する家のトップ、平塚家の分家の春雪君の書き込みがあったの:】

すみれ【……その頃は:鴨志田問題や私自身の問題:で精一杯だった時:アリス、書き込みの彼は:彼の連絡先はわかる?】

アリス【春雪君の連絡先は、わかるわ】

アリスは、すみれのARCCUSに平塚春雪のスマホの番号、通っている高校の連絡先等を送った。

【スマホの番号ー〇〇〇〇ー58〇6ー95〇2】

【千葉県千葉市ー〇〇〇〇】

【総武小↓総武中↓千葉高等学院】

すみれは、送られてきた情報を見る。そしてあることに気がつく。

そう【総武中】である。

すみれ〔総武中……その春雪君って……総武中出身なんだね。総武中と言えば、1年ほど前に、とある男子生徒が自殺した学校じゃないの!〕

アリス〔そうね。1年ほど前に中3の比企谷八幡って男子生徒が自殺しているわね〕

すみれ〔比企谷八幡君……確か……日本海……で自殺したと推測された彼よね?〕

アリス〔……推測……残された彼の遺書や彼の靴からそう警察はそう判断した〕

すみれ〔遺体は見つかっていないのよね?〕

アリス〔見つかっていないわ。彼が自殺した場所は、一度落ちれば二度と浮かんでは来ない場所だからね。警察の動きも鈍いものだった。十師族の七草家を支える雪ノ下家、七宝家、葉山家が警察やマスコミ、教育委員会や文部科学省に圧力をかけていたみたいなのよ〕

すみれ〔……!!な、なんのために彼の自殺を隠すつもりなの?彼の家族は、どうしても抗議しなかったの?〕

アリス〔彼の家族は、雪ノ下家と取り引きして、八幡君のことに關して抗議をしないと約束してるみたい〕

すみれ〔……これが……この国の現状……。弱い者が強者に喰われていく……〕

すみれは、ぎゅつと握りこぶしを作った。ゴールデンウィークに帝国で出会った彼らは、日本の十師族体制そのものが、強者が弱者を食い物にしていると云っていた。だか

ら自分達が日本を解放すると。

アリス【すみれ：ごめんなさい。私達が力不足なせいで】

すみれ【アリスのせいじゃないわ。この国には、リベールのように：帝国のあのオリヴァルト皇子のように声を上げる人がいないから：】

アリス【そうね：。こんなこと中間テスト前にする話ではなかったね】

すみれ【私、中間テストが終わり次第、平塚春雪君や比企谷八幡君の調査もやっていたわ。もちろん斑目の事も】

アリス【私も手伝うわ】

すみれ【ありがとう、アリス】

アリス【仲間でしょ】

すみれ【うん、ありがとう】

すみれとアリスは、そう決意するのだった。

すみれは、アリスから丸喜が秀尽学園のカウンセリングの教師として赴任することを聞かされた話から、話が発展したわけだが。

すみれは、姿見の鏡で身支度を再度確認してから学校へ行くことに。

すみれ「今は中間テスト中、今は中間テストだけに集中よ」

すみれは、そう言つて自宅を出るのだった。

すみれ side

11204・5・13・朝・すみれ達の教室

すみれは、色々考えながら学校に登校した。中間テストの事もあるが、アリスから聞いた1年前に自殺した【比企谷八幡】、お助けチャンネルにSOSを出した【平塚春雪】。気になるものばかりで、中間テストに集中出来ない。

クラスにやって来て、自分の席に座つてもそれは変わらなかつた。

クラスの中の雰囲気は、初めての高校での中間テストだから、幾分緊張もあるようだが、それでもピリピリとした雰囲気ではない。近くの男子生徒達は

男子生徒1 「中間テスト中に全校集会とかありえなくねえ」

男子生徒2 「そうだな」

男子生徒3 「この学校の教師が捕まったんだからしょうがないだろ」

男子生徒1 「そうだけだよお、何も中間テスト中にやる必要はないだろ…」

男子生徒2 「確かにオレもそう思う」

周りの男子生徒達は、中間テスト中に全校集会なんか受けたくはないと言っているようだ。

そんな男子生徒達が騒いでいる中、すみれは、今日あるテスト科目のノートを鞆から

取り出し、もう一度復習をやり始める。そんな時

「すみれ、おはよー」

「おはよう、すみれ」

すみれ「おはよう、恵梨奈、紗綾」

すみれに話しかけてきた2人は、彼女の親友である。2人共、高校からの友達だが入学式の時、両サイドに座っていた縁で親友となったのだ。

黒髪を茶髪に髪を染めていて、ショートボブの娘が、片岡恵梨奈。彼女は純粋の日本人。中学までは真面目にしていたが、高校からのデビューを果たすため、髪を茶髪に染めた。

もう1人の娘は、綺麗な黒髪のロングヘアであり、目の瞳がブルーである、鍋島紗綾。彼女は、父である日本人とカルバード人の母を持つハーフである。性格は、真面目のように見えるが、ミーハーである。

恵梨奈「すみれは、真面目にテスト勉強なの？」

すみれ「テスト前の最後の復習かな」

紗綾「テストだけが人生じゃないしね」

恵梨奈「すみれはともかく、紗綾は、入学式の次の日にあった学力テストで赤点だったんでしょ？中間で赤点取ったらヤバいっしょ」

紗綾「うっ…今から間に合うかなあ…。すみれ、ちよつと教えてほしいよお！」
すみれ「紗綾、別にいいけど…恵梨奈は？」

恵梨奈「私は、昨日勉強してたけど…もう一回復習するわね」

すみれ達は、中間テストの前の最後の復習をやり始めた。

限られた時間で、紗綾に教えたすみれと恵梨奈は、中間テストに挑むことになった。

テストとテストの間の休み時間にすみれのスマホが着信が鳴る。すぐにスマホを取って見る。

丸喜「ごめんね、すみれ君。中間テスト中なのにグループチャットを送って」

すみれ「丸喜先生、秀尽学園のカウンセリングの教師就任おめでとうございます」

丸喜「ありがとう、すみれ君。それで体調の方はどうかな？」

すみれ「体調の方は別に悪くありませんよ。丸喜先生は、秀尽学園の生徒のカウンセリングを？」

丸喜「そうだね、学校側から正式に頼まれたからね」

すみれ「学校側からですか？」

すみれは、ふと考えた。あの校長の話では、鴨志田をあんな風にした生徒達を捜している節がある。カウンセリングというのは、表向きで実際は犯人探しみたいなものだと考えた。

丸喜「すみれ君、何かあるのかい？」

すみれ「……え？」

丸喜「うーん、鴨志田先生の関係者の中にすみれ君の名前もあったからね」

すみれ「……」

丸喜「ごめんね、すみれ君。こんなことテスト前にする話じやなかったね。チャットで引き留めてごめん。中間テスト頑張つてね。これから毎日……11月まではいるから、いつでも来てくれてもいいから」

丸喜のチャットでのコメントは、ここで終わった。

すみれ「……これから毎日か……。ちよつと今日、行つてみようかな」

すみれは、今日丸喜がいる保健室へ保健室に行つてみることにした。

再びすみれは、テスト前の復習をして、テストに挑むことになった。

111204・5・13・午後・すみれ達の教室↓体育館。

中間テストの最中だと言うのに学園の校長が、全校集会を開く事を決めた。生徒達の心のケアと断言しているが、一部の生徒達は学園の面子のためにそんなことをしている。としか思っているのだ。

そんな中、校長の説明がむなしく体育館に響く。

校長「：例の事件以来、みなさんからの不安の声は、私の耳にも届いています。早急にみなさんのメンタル面のケアが必要と感じ、担当の先生に来ていただいた次第です。それでは、先生」

校長に呼ばれて、白衣を着た眼鏡をかけた丸喜がやって来た。女子生徒達の黄色い声援が飛び交い始めた。

丸喜「初めまして：」

黄色い声援で、丸喜の声が聞こえてこない。それだけではなく、どうやらマイクのスイッチも入っていないようで、彼はマイクのスイッチをONにした。

丸喜「僕の名前は、丸喜 拓人と申します。よろしくどうぞ」

頭を下げる位置を間違えたようで、マイクに頭をぶつけ笑いが起きる。すみれもクスツと笑ってしまった。

丸喜「担当はカウンセリングです。堅苦しく構えなくて大丈夫だから。相談ならなんでも：あつ、お金（ミラ）の相談は困るかな」

校長は、無言のまま丸喜をマイクの位置からどける。

校長「ありがとうございます」

校長の話がちよつとあつて、全校集会は終わった。

すみれ side

111204・5・13・午後・すみれ達の教室。

すみれ達の教室であつても例外ではなかった。女子生徒達の会話の主体は、丸喜の話で持ちつきりである。

まあ一部の男子生徒達の中でも、丸喜の話は出ていた。

担任の鳴沢先生は、生徒達に静かにするように言っている。担任の名前は、鳴沢滯、教師になつてから、5年になる。

鳴沢「みなさん、静かにして下さい。帰る時間が遅くなつても良いですか？」

クラスの子生徒達は、早く帰りたいからパツと静かになる。

鳴沢「集会で言われた事に補足説明を入れます。丸喜先生のカウンセリングは、今日の放課後から受けることができます。丸喜先生は、11月まで秀尽にいらつしやいます。絶対にカウンセリングを受けたい人は、早めに受けて下さい」

クラスメイト達は、丸喜のカウンセリングを受けるかどうか、親友同士とかで相談している。

そんな感じで、ホールルームが終わる。

111204・5・13・夕方・放課後・すみれ達の教室。

すみれが帰る支度をしていると、恵梨奈と紗綾がやって来た。

恵梨奈「すみれ、一緒に帰ろうよ」

紗綾「それとも、すみれは、カウンセリングを受けに行くの？」

すみれ「そ、それは……」

恵梨奈「すみれって、丸喜先生みたいなのがタイプなんだ」

すみれ「べ、別にタイプとかじゃ……違うし……」

すみれは、恵梨奈と紗綾に違うと否定する。彼女は、自分の母親と姉を失って、病んでいた時にカウンセリングをやってくれたのが、丸喜だと2人に説明する。

紗綾「でもお、それで恋心を抱いてもおかしくはないと思うしいねえ」

恵梨奈「だよね」

すみれ「恵梨奈と紗綾が想像してるみたいなことはないからね！」

そんな話をしながら3人でいたら、鳴沢先生がやって来る。

鳴沢「芳澤さん、貴方はカウンセリングを受けてくださいね。鳴志田先生に関係する生徒は受けさすように学校側からいわれてるのよ」

すみれ「……わかりました……」

恵梨奈「鳴沢先生、カウンセリングって本人の意思次第じゃ？」

鳴沢「私も言われても困るわ。私もそう言ったんだけど……校長の権限で強く言ってく

るわ」

紗綾「でもお…すみれにしては嬉しい感じでしょ？」

すみれ「な、なあ!？」

すみれが驚いた声をあげたため鳴沢先生も驚き

鳴沢「えっ!?!どうしたの芳澤さん？」

すみれ「い、いやなんでもないので、鳴沢先生、私、丸喜先生にカウンセリングを受
けてきます」

すみれは、そう言つて保健室の早歩きで向かう。それを見て、恵梨奈と紗綾はニヤニ
ヤしていて、鳴沢はちよつと心配な感じで見っていたのだった。

11204・5・13・夕方・保健室

すみれは、保健室がある特別棟までやつて来た。中間テスト中だけあつて、特別棟の
方は、人が少ない。

保健室の方へ歩いていると、保健室から出てくる女子生徒がいた。

杏「丸喜先生、今日はどうもありがとうございます」

丸喜「どういたしまして、何かあつたらいつでも来ていいからね」

杏「はい、それでは失礼します」

杏はそう言つて保健室のドアを閉めてから、すみれの方へ歩いていく。杏は、スマホを取り出しながら、すみれの横を通り過ぎて行く。彼女は、遠ざかつて行く杏を見ながら

すみれ「彼女は、緋里先輩や雨宮先輩の仲間である高卷杏先輩……彼女は……」

高卷杏、鴨志田に取り入つて気に入られていると一時期は噂になつていた。だがそれは、親友を守るためにやつていたのであり、彼女の本心ではなかつたのだ。

今では、鴨志田の被害者の一人として認識されている。そんなことを考えながら保健室のドアをたたく。

丸喜「はい、どうぞ」

すみれ「失礼します」

何か作業をしていた丸喜は、すみれの姿を見て作業をやめて

丸喜「すみれ君、来てくれたんだね。どうぞ、そのソファに腰かけてくれて構わないから」

すみれ「はい、ありがとうございます」

すみれは、丸喜に言われたとおりにソファに座る。

丸喜「すみれ君、カウンセリングを受けに来たのかな。それとも……チャットで話していたことかな？」

すみれ「もちろん、両方でもお願いします」

丸喜「アハハ、そう来たか。まあ…後者の方は、学校の保健室で話すような内容ではないよね…えつとすみれ君何か飲む？」

すみれ「はい、お構い無く」

丸喜「カルバードからいいコーヒー豆が手に入ったんだ、すみれ君飲むかい？」

すみれ「…はい、コーヒーでしたら…。お言葉に甘えて」

すみれは、丸喜が淹れてくれたブラックコーヒーを飲む。

すみれ「流石、カルバード製のコーヒーですね。とてもコクが深くて、それでいて口の中に広がる味…」

丸喜「すみれ君が気に入ってくれて良かったよ」

すみれ「ありがとうございます」

すみれは、コーヒーが大好きだ。大好きな父と一緒にいることが多かったため、父の大好きなコーヒーもいつの間にか好きになっていたのだ。コーヒーに浸っているすみれに対し丸喜は

丸喜「一応のカウンセリングはやりたいたいから、すみれ君よろしくね」

すみれ「あ、はい、よろしくお願いします」

すみれは、丸喜にここ最近の話をした。勉強に学校のこと、親友関係などを話したの

だ。そして帝国での出来事も。

丸喜「学校、親友、勉強の話はわかったけど、帝国でそんな出来事に遭遇していいとはね……。それは危ない橋を渡ってことだよね？」

すみれ「確かに、危険なことにも合いました。でもお助けチャンネルで人助けをする
と決意した時から、覚悟は決めています！」

丸喜「……すみれ君」

すみれ「それにあの時は、私の親友のアリス、理さんが一緒にいてくれてたし……」

丸喜「十文字アリスさんね。それはわかるが、理さんとは？」

すみれ「アリスの知り合いの結城理さん」

丸喜「……なるほど」

丸喜は、窓の外を見ながらそう言った。

すみれ「私は、帝国に行つて、今の日本の現状を外から見てきました。それでわかつた事があります」

丸喜「うーん、すみれ君が話そうとしている話は保健室でするような内容ではないよね。時間もそろそろだし、続きは……そうだな……」

丸喜は自分の導力腕時計の時間を見て、期限が迫つてゐる事がわかつた。すみれも何となくそれを察し

すみれ「私もまだ中間テストがありますので、続きはテスト明けでも良いですか？」
丸喜「中間テスト明けね。わかった、でもその時は、保健室ではなく、僕の事務所まで来てくれないかな？」

すみれ「事務所って渋谷にあるあの事務所ですよね？」

丸喜「そうだよ」

すみれ「わかりました。テストが終わればすぐに行きますね」

こうして、すみれと丸喜のカウンセリングを兼ねた話は終わった。

16-16-5・14-渋谷セントラル街の裏の闇。

すみれ side

111204・5・14・午後・渋谷駅↓渋谷のセントラル街

すみれは、中間テストが終わるとすぐに、丸喜のカウンセリングの事務所を目指していた。

渋谷のセントラル街、つい最近はかなり治安が悪くなっている。今年になってから、治安の悪化が目立つようになっていたが、今ではどんどん悪化を辿っていくばかりだ。

各国の半グレや猟兵、カルバード系マフィア（黒月）、ルバーチエの残党、日本のヤクザ、半グレも息を吹き替えしつつある。

日本の警察は、渋谷のセントラル街にあまり近づかなくなっているのも事実。

【表】はまだ良い、しかし【裏】はヤバイ世界であることは間違いない。表の法律は意味をなさない、裏の法律がちゃんとあるからだ。

すみれがテクテク歩いていると、丸喜カウンセリング所という看板が見えてきた。

すみれ「ちよつと前までは、こんなに物騒じゃなかったのに……」

セントラル街の裏道を夕方以降に女性が1人で歩いているようなら、襲われてもおかしくはないのだ。

すみれがそう思いながら歩いていると、なにやら騒ぎが起きている。

騒ぎの中心は、秀尽学園の生徒達である。秀尽の生徒達が、注目されるのは、鴨志田が逮捕されてから、ずっと注目の的である。秀尽の生徒達に絡んでいるのは、どうやら記者崩れのような5流の記者のようなのが3人いる。

記者1「君達、秀尽学園の生徒だろ？鴨志田の情報をもつと何かないのかな？」

記者2「教えてくれよ？なあ〜良いだろ？」

記者3「良いだろ？」

女子生徒1「報道されている以外に鴨志田先生の情報はありません！」

女子生徒2「わたしも何も知りません！」

秀尽の女子生徒達は、知らないと言っているのに、記者崩れの連中は、しつこくつきまとう。しかし絡まれている女子生徒達を助ける人達はいない。だがすみれの聞き覚えのある声が聞こえた。

恵梨奈「なんなの！あんた達、記者なんでしょ？取材対象を脅すとかあり得ないでしょう？」

紗綾「ほらあ、貴女達、今のうちににげなさいなあ〜」

女子生徒1 「貴女達は、片岡さんと鍋島さん」

女子生徒2 「あ、ありがとうね、2人とも」

女子生徒達は、恵梨奈達にお礼して、逃げようとしたが道が完全に塞がれている。

恵梨奈 「道が塞がれるわ！貴方達なんのつもり！」

記者1 「なあーに、記者だけじゃないさ。周りの連中は、半グレどもさ。秀尽の生徒を売れば、金になるからな」

恵梨奈 「な、なんですって…」

紗綾 「なるほどねえ…。ちよつと前に紙面を賑わせた日本人拉致事件かしらねえ？」

記者2 「ゴールデン・マウンテンの連中みたいに他国に売り付けるのじゃね！日本のとある方に送るのだよ！」

記者3 「その方が金にもなるしな」

紗綾 「なるほどねえ」

恵梨奈 「納得してる場合？逃げ道がないしどうしたら？」

女子生徒1 「どうしよう…」

女子生徒2 「怖いよ…」

記者1 「とにかく、来てもらおうか！」

記者達と半グレの連中に捕まれた恵梨奈達は、どこかに連れていかれそうになってしまふ。

それを見ていたすみれは、誰もいない場所で、ヴォイオレットに変身する。急いで恵梨奈達の救出に向かう。

恵梨奈達を導力車に連れ込もうとしたから、ヴォイオレットは、導力車のタイヤを全て太刀で切り裂いた。そのあと道路標識の上に立つ。

記者1「な、なんだ？」

記者2「なんだあれは？」

ヴォイオレット「秀尽の女子生徒にしつこくつきまとい、あげくのはてには、女子生徒を拉致して売り飛ばす…とんだ下道ね」

記者1「…お前が秀尽の鴨志田を吊上げた怪盗か？」

ヴォイオレット「はあくあれは、私の名誉のために言っておきますが、鴨志田の件は違います。私は、貴方達のようにか弱き人を食いものにする輩が許せないだけです！」

記者2「ほおう、つまり正義の味方気取りかな？だが、甘いな！」

記者3「これで終わりだな」

記者2、3は、導力銃を取り出し、ヴォイオレットに撃ってきたが、太刀で銃弾を粉々にされる。

「ヴォイオレット」導力銃なんて物騒なもの…持ってたのね…なら…きてサンドリオン！」

サンドリオンは、記者1と記者2と記者3を吹き飛ばす。半グレ達は、何が起きたかわからない。勝手に記者1と記者2、記者3が吹き飛んだぐらいにしかわからないのだ。

記者達は、目を回して気絶している。ヴォイオレットは、太刀で半グレ達を一瞬で気絶させた。半グレ達は自分達に何が起きたのかもわからず気絶をすることに。遠くから警察のサイレンが聞こえてきた。

ヴォイオレット「警察のサイレン？ヤバイかな、ではみなさん、それじゃあ！」

ヴォイオレットは、飛び上がるとそのまま消えたのだった。

恵梨奈「私達、助かったの？」

紗綾「そうみたいねえ…。ただ、あのコスプレ女…どこかでえ…」

紗綾は、コスプレ女ことヴォイオレットが去っていた方向を見ていた。そして警察のパトカーが到着したのだった。

すみれ side

111204・5・14・夕方・渋谷セントラル街

渋谷のセントラル街は、警視庁の警官達が至るところに配置されている。

原因は、記者と半グレ達が秀尽学園の女子生徒達を絡んでることから始まっている。そしてそこにコスプレ女が、秀尽学園の女子生徒達を救ったと目撃者達からの証言などもある。茶つ毛の髪の色でスポーツ風の感じのする男性刑事。名前は里中貴史。階級は警部補。その里中貴史刑事は、先輩刑事であるオジサン風の男性。名前は堂島遼太郎。階級は警部である。

?? 「堂島警部、この連中はなんなんでしょうね？」

堂島 「里中、よく見てみる！記者とこの辺りにうろついている半グレだろう」

貴史 「ああ、交通課を悩ませている半グレ集団ですか」

堂島 「そうだ。渋谷のセントラル街を縄張りになっている半グレ集団、ヤマナミ組だな」

貴史 「ヤマナミ組、今年の春前から見かけるようになりましたよね」

堂島 「確かに、今年の春前から出没するようになったことは、証言、証拠もある。だがヤマナミ組の構成員は、日本人だけではない。カルバード、クロスベルといった西ゼムリアの連中ばかりだ」

貴史 「確かに：…今までなら、香港系や漢族系が多かったですよね」

堂島 「やはり、2月に起きた東北独立運動あたりに反乱軍に雇われた連中が、そのまま渋谷のセントラル街の裏に住み着いているのか？」

反乱軍、十師族から日本を取り戻す同盟。七耀曆1204・2月、十師族から日本を取り戻す同盟の部隊、獵兵部隊が突如、日本の東北地方の仙台で、一斉蜂起する。

十師族から日本を取り戻す同盟軍は、東北各県を制圧。破竹の勢いであった。

しかし長くは続かない。富山から十師族の内の一つ、一条家の旗印を持つ国防軍が、東北地方に進軍、国防軍主体もすぐに東北地方へ進軍する。

十師族から日本を取り戻す同盟軍は、北海道方面軍と関東から進軍してきた国防軍により、東北各地で敗戦を重ね、拠点としていた仙台を制圧され、同盟軍は壊滅したのだ。た。

同盟軍は、海外から人員増を図っていた。それが獵兵团だったり、半グレだったり、不良達だったとする。

彼らは祖国に帰らずに、日本の新たななる契約者と契約を交わし渋谷セントラル街の裏を拠点としているのだ。

貴史「全く、用が済んだらさっさと帰れば良いのに……」

堂島「そうはいかないのが世の常だろう。契約切れの連中を雇った連中がいるわけだから」

貴史「……堂島さんが日頃言っている激動の時代がやってきてるって事ですか？」

堂島「ああ、そうだ。甥の悠もそれを感じて、遊撃士になったからな」

貴史「遊撃士ですか。でも我々警察とは、相違がありますよ」

堂島「まあな。それもある。だがあいつが学生時代に稲羽の事件を仲間達と共に解決したんだ。俺達警察より先にな……」

堂島は渋谷のセントラル街の空を見上げながら稲羽の空を思い出していた。すると調べ終わった他の刑事達がやって来る。

一之瀬「堂島警部、里中警部補、秀尽学園の女子生徒達の事情聴取は終わりました」
一之瀬奈央巡查、金髪のツインテールの女性。母方の曾祖父がカルバード人、父方の祖母がりべール人であり、国際色が強い血筋である。

堂島「目撃証言はとれたか？」

堀北「証言はとれたのですが、コスプレの女の子が囚われた女の子達を救ってくれたと話してくれましたが……」

堀北奈美巡查、黒髪ロングの女性。両親共に日本人。一之瀬奈央とは、警察学校時代からの親友。

堂島「コスプレを着た女か……。まさかな……」

貴史「どうしたんですか、堂島警部……」

堂島「……カルバードの女怪盗がまさかな……」

貴史「カルバードの女怪盗？」

カルバード共和国の裏で暗躍する「怪盗グリムキャッツ」のことである。この話は後から語られることになるので、ここでは語らない。堂島達がグリムキャッツ説を言っているが、一之瀬が反論する。

一之瀬「目撃証言からですが、カルバードのグリムキャッツではないですよ」

堂島「違うか。まあ当たり前だが」

一之瀬「グリムキャッツってカルバードの首都辺りで暗躍してるって噂ですよ。それが日本まで来るメリットなんかありませんよ」

堀北「私が思うには、秀尽学園に現れたという怪盗の仕業じゃないかと思うのですが……」

貴史「怪盗団……身喰らう蛇ってやつですよね……」

堂島「国際指名手配危険度SSS認定、身喰らう蛇「ウロボロス」……奴らが人助けをするとは思えねえ……ましてや秀尽学園の一教師を改心させる理由がわからねえ」

貴史「たんなる名前が一緒なんでしょうか？」

堂島「一緒だと思いたいのが、奴らが自分達の名前を使わせるとも思えないが……」

一之瀬「堂島警部、この記者達と半グレを連行しましょう」

堂島「そうだな、こいつらを連行するぞ。まずはそれからだ」

堂島達は、記者達3人と半グレの数人を警視庁に連行することにした。

今までなら連行することも出来なかつた警察。渋谷のセントラル街は、日本で日本では無いような感じになっていて、日本の警察が入ることも出来なくなっていた。だが、桐条首相が無理矢理押しきって作った組織。

警視庁特務課。

官房長官がトップであり、警察組織の独立の部署となっている。課長は、御坂雅孝。彼は警察官僚の改革の推進派であり、桐条首相の盟友でもある。桐条首相の思いから、特務課の課長を引き受け、日本全国から優秀な刑事、警察官を呼び寄せた。

それだけではなく、とある能力にも目をつけている。

それはまた後で明らかになるのだが。普段は、クロスベル警察の特務支援課のように市民からの依頼をこなしたり、捜査一課等他部署からの応援に行ったりする。後は他部署が踏み込めないような案件やグレーゾーンへと対処などがある。

堂島達、警視庁特務課もいろんなことに巻き込まれていく。

すみれ side

11204・5・14・渋谷セントラル街の裏路地。

すみれは、渋谷セントラル街の裏路地に避難していた。なぜ彼女がこんなところにいるのかは、自分の親友達を記者や半グレから救うためにヴァイオレットになったからだ。

ヴァイオレットとして、あの現場に留まることは出来ない。なんせ警察まであの現場に来そうになっていたからだ。警察に関われば、必ずヴァイオレットの事を説明しなくてはならない。それにそんなことを警察が信用するとは思えない。

すみれ「警察に睨まれるわけにはいかないから」

すみれは、そう心に言い聞かせながら裏道をとぼとぼ歩く。さきほどよりか裏道に当たる陽射しも少なくなり、闇が拡がるような感じになっている。

普通の女子高生ならば、こんな時間にうろろするはずもない。すみれは警戒しながら丸喜カウンセリング事務所を目指して歩いている。

だが再びそんなすみれに絡んでくる連中がいた。

不良1「秀尽の生徒がこんなとこで何しているのかな？」

不良2「向こうでは、バカな連中が秀尽の生徒に手を出して警察に捕まったみたいだな」

すみれ「そうみたいですよ」

不良3「今や秀尽学園は、かつこうの的だからな。極悪非道の鴨志田が教師をしていた学園ってな」

すみれ「それと秀尽学園の生徒を襲うのと関係があるんですか？」

すみれを囲むように3人の不良は立ち塞がる。

不良1「秀尽学園の女子生徒は、みんな鴨志田のお手付きと噂もあるわけだ」

すみれ「ふざけないで！誰が鴨志田先生のお手付きですって!?!」

不良2「知らねーのか、この界限では有名な話だ。鴨志田が、秀尽の生徒を外国のマフィアあたりに売り付けているとかな」

不良3「つまり、秀尽の生徒は鴨志田のおかげで、高値が付くってことだよ。わかるだろ？」

不良達がニヤニヤとすみれを下から上へとなめ回すようにガン見している。

すみれ「私をどこかに売り付けるつもりですか？」

不良3「まあ、そういうことだ」

すみれは制服の背中に潜ませている太刀を握るが、それを出すことはなかった。何故なら別の男達が現れたのである。

???「こんなところで、女子高生をナンパか？」

???「裏路地でナンパって、もうやることしか考えてるしか思えないよね？」

男達の1人は、茶髪の髪型で遊び人の格好をしていて、もう1人も茶髪で肩まで伸びしている。格好は、綺麗にスーツを着ている。すみれは、どのような関係な2人組なんだと混乱する。

不良1「なんだ、お前達は？」

「ただの通りすぎの者だが、女子高生を売買するとか聞こえたからな」
「だから来たのさ」

不良3 「……お、お前達は……もしかして……！」

不良2 「どうしたんだ？こいつらが何かあるのか？」

不良1 「なんだ、どうしたんだ？」

不良3 「……！カルバードの諜報部員の徳川義景と日本の探偵の一条将斗か！」

義景「……なんだ、日本人なのに俺の名前を知っているのか。まあ先祖は日本人だったみたいだな」

将斗「……150年くらい前まではだね」

今から150年前の日本は、徳川幕府による統治されていた。そして鎖国体制でもあった。日本は一部の国とは貿易をしていたが、156年前にカルバード王国が日本に対して開国を迫り、日・カルバード和親条約が結ばれた。その後帝国やその他の国々と国交樹立していった。

しかし国内では、徳川幕府による統治は無理だと判断し立ち上がった者達もいた。それが現体制の十師族百家体制である。

徳川幕府軍と十師族百家軍は、日本各地で戦いを起こすことに。幕府軍には、カルバード王国軍が支援し、十師族百家軍には、彼らを支援する獵兵団がいた。

約半年の内戦は、十師族百家軍の勝利し徳川幕府は倒れた。

十師族百家による日本統治と徳川將軍家の処遇はどうするかで揉めたが、徳川將軍家は、カルバード王国へ亡命することに決まった。

徳川家は、カルバード王家の特別の客将として迎えられ、のちに侯爵の爵位を授与される。

100年前のカルバード革命の時、徳川家は王国軍側に立ち革命軍と戦いを繰り広げた。

結局、革命が成功しカルバード王国は共和制に移行したのだ。そして革命側のある人物から、これからは共和国のために尽くしてくれと言われ、当時の徳川の当主は、共和国のために尽くすことを決意したと言われている。

徳川家は、家名存続のため奮闘することになった。

今では、三つ葉葵のマークの企業、徳川グループを設立している。カルバードで5つ指に入る企業。導力自動車部品の製造から食品加工や製造、建設業、軍需産業までなんでもやっている。この話は一端は置いておこう。

将斗「義景君の御先祖様は置いといて、君が日本に逃げたことは、最初からわかってたんだよね。ダット・ナヤナル」

義景「まさか、カルバード人であるお前が、日本人に整形していたとはな…」

不良3もといダット・ナヤールはカルバード人。カルバードとある政治結社をけしかけ、反乱を起こさせようとした容疑が掛けられている。

ダット「くっ…本当にしつこい連中だな」

不良2「お前ってカルバード人だったのか？」

ダット「そうだ」

不良1「どうするんだよ。捕まったらお前、カルバードに強制送還されるんだろ？」

ダット「そうだな」

義景「お前ら2人は日本の不良だろう。これ以上関わらないと言うなら日本の警察に報告はしないがどうする？」

義景は、不良2人にそう警告を言った。これ以上ダット・ナヤールに関われば、間違はなく共犯と見なされ、カルバード共和国へ送還されかねない。

不良1「悪いな、ダット。俺らカルバード共和国へ連れていかれたくないからな」

不良2「同感だな」

不良1と不良2は、ダットを見捨てて走り去って行く。ダットは仕方がないため息をはきながら義景と将人を見据える。

ダット「まあ、平和ボケしているような国の連中だ。覚悟とか無いだろうが…」

義景「平和な国で何が悪いんだ？」

ダット「そうだな、平和な国ほど崩しがあるつてもんだよな……」

将斗「日本でもカルバードのような事をしようと企んでいるのか！」

ダット「だとしたらどうする？」

ダットは、そう言いながらさつとすみれの背後に行き彼女を人質のように取った。

ダット「さあ、お前らどうする。この女子高生が殺されたく無ければ、道を明けて大

人しく武器を捨てろ」

義景「卑怯極まりないな」

ダット「なんとでも言え。この俺はお前らと違つて崇高な理想があるんだよ」

将斗「崇高な理想……？ そんなことを言うヤツに限つて大したことがないんだが？」

ダット「な、何だと！ カルバードの犬や探偵ごときが舐めた事を言つてるんじゃない

！この女の鮮血な血をそんなにみたいと言うわけか……」

すみれ「鮮血な血……私は貴方に殺されるつもりはないですよ！」

すみれは、思い切りダットの胸板に肘で攻撃し吹き飛ばす。ダットは、思い切り雑居

ビルの側面の壁に叩きつけられる。義景と将斗もそれを見て驚いている。

義景「なにつ！？」

将斗「彼女は一体……」

雑居ビルの崩れ落ちた側面からダットは、素早い動きですみれに向かつて来る。

ダツト「このくそアマがっ!!」

すみれは、華麗に避ける。そして制服に隠していた太刀を取り出し

すみれ「八葉一刀流…忒の型疾風…!」

すみれの放った疾風により、ダツトは空を舞いゴミ箱に顔ごと突っ込んで気絶した。すみれは抜刀した太刀を鞘にしまう。そして再び制服の中に隠した。

将斗「八葉一刀流…すごい」

義景「八葉一刀流の人間に出会ったのは、クロスベルのアリオス以来だな」

すみれ「…アハハ、見られちゃいましたね…」

この件がすみれと義景、将斗の出逢いでもあった。

17-17-5・14-徳川義景と一条将斗。

すみれ side

11204・5・14・夕方・渋谷セントラル街裏路地。

渋谷セントラル街の裏路地にて、すみれと義景と将斗が出会ったのである。

将斗「まさか、自分の故郷で八葉の人間に出会えるなんて驚きだよ」

義景「日本には、八葉の支流の九島派がなかったか？」

将斗「あるにはあるけど、八葉の本流の太刀捌きとはまた違うから。彼女の太刀捌きは本流そのものだった」

義景「なるほど、彼女は本流の流れ組むと言うわけか」

すみれ「えーと…私…そろそろ行かないと…」

義景「俺達の正体を知られたわけだし、そのまま行かせるわけには行かないんだよね…」

将斗「義景、ちょっと悪人みたいだよ。まあ確かに俺はともかく義景は不味いよね」
すみれ「…カルバードの諜報部員…CIDの…」

すみれは、ちよつと後退りをしてしまう。

将斗「怖がらなくて良いから。彼はカルバード人だけど、俺は日本人だから」

義景「俺だって先祖は日本人だがな」

将斗「とにかく…義景、このダットを君のお仲間に取り渡すんですよ？このままだと日本の警察が来てしまうよ」

義景「そうだな」

義景がスマホを取り出し、どこかに連絡をしている。彼は何やら指示を出してから連絡を終える。そしてしばらくすると、黒服の仲間と思われる人達にダットを連れていかれてしまう。

すみれ「すごい……」

義景「なあーに別にすごいことはないさ。カルバードを守るためにやってるのだから。君がやっている人助けと同じでしょ、芳澤すみれ君…いやヴァイオレットと言うべきかな」

すみれは、表情が険しくなる。当たり前だ。正体を知っているのは、親友のアリスとカウンセリングの丸喜しか知らないのだから。

すみれ「……どうしてそれを…？」

将斗「女の子のプライベートを除くのはどうかと思ったけど、君の変身した時と解除の時を見てしまったからね…。ただ見たのはタマタマだから」

すみれ「……………」

義景「すまないな。カルバードにも同じように現れる怪盗がいるから。つつい仕事柄で君の正体を暴くような事をしてしまった」

義景と将斗は、2人共頭を下げた。すみれも申し訳なさそうにしながら

すみれ「もう良いですよ。私も確認をしなかったのがいけなかったのですし…」

将斗「君の正体は、誰にも言わないから、安心して」

すみれ「はい」

すみれと義景と将斗が話していると別の方向から話しかけられた。

丸喜「すみれ君に…義景君に将斗君？君達知り合いなの？」

すぐに丸喜からカウンセリング事務所に入ることと言われる。すみれ達の話しは裏路地で話す内容でもなかった。だから丸喜が自身の事務所へ入れることにしたのだ。

1-1204・5・14・夕方↓夜・渋谷セントラル街裏路地↓丸喜カウンセリング事務所。

普通の雑居ビルの一室に丸喜カウンセリング事務所を構えている丸喜。彼はここでカウンセリングを行っているのだ。一応すみれ達は自己紹介をやった。

丸喜「まさか、すみれ君と義景君と将斗君が知り合いだとは思わなかったよ」

義景「知り合いというかさつき知り合ったばかりですがね」

将斗「丸喜先生と芳澤さんが知り合いだったことも驚きですが…」

丸喜「すみれ君は私のカウンセリングの患者さんかな。まあお世話になった方の娘さんでも良いのかな」

義景「なるほど」

将斗「そういうことだったのか」

すみれ「それでお2人と丸喜先生とは、どういう関係で知り合うことに？」

丸喜「話せば長くなるんだけどね」

丸喜は、義景と将斗との出会いを話し始めた。

丸喜と義景と将斗の出会いとは、とある事件の容疑者の心の状態を知るため、凄腕のカウンセリング治療を行うを丸喜に依頼して来たことが始まりであった。

丸喜カウンセリング事務所は、各国諜報機関からも依頼が来ることもあるが、カルバード共和国からの依頼が一番多い。

それはカルバード共和国の諜報機関CIDのとある人物と交流があることも一つではあるが。

すみれ「そうだったのですか」

丸喜「僕も最初は、カルバードのCIDからの依頼だったから驚いたよ」

義景「丸喜先生、貴方はカルバードのとある大学で独自カウンセリングの産み出して

いた。それがCIDの目に留まったってことかな」

丸喜「僕は心が病んでいる人々を助けたい一心で産み出した療法なんだ。それでも犯罪心理学も学んだからね」

将斗「そのおかげで、丸喜先生にはアドバイスをもらったりして、なんとか依頼を完遂することができてますけどね」

すみれ「でも将斗さんは、十師族のあ的一条家のご子息ですよ？それなのに……！なぜ探偵業を？」

すみれは、将斗になぜ探偵業を営んでいるのか。十師族の一条家。日本の北陸エリアを領土に持つ。先の大亜、新ソビエトによる侵攻時、佐渡や東北、北海道にて新ソビエト軍を撃退している。

そんな家の生まれだが、将斗は現一条家当主の双子の兄弟の弟である。一条家の十八番である爆裂魔法を使える。だが将斗は、その十八番の爆裂魔法が使えない。

だから将斗は、自分自身に負い目を感じていた。そんな将斗に対して、兄の将輝も感じていたし、両親でもある。

だが一条家の分家や一条家を支える家系の間人達が、将斗を出来損ないの子として揶揄していた。両親や将輝に迷惑をかけまいと中学生になる前に、カズヤ・アレイスターの元へ行き探偵業を学んだ。カズヤ・アレイスターの計らいで、飛び級でアラミス高等

学校に通った。

将斗は、魔法力は劣っていても学力は一条家いや十師族の子供達と比べても飛び抜けていたのだ。

そんなアラミスを今年（2年）で卒業し探偵業に付いたのだ。アラミス始まって以来の天才児とされ、カルバードのCIDからもオファーが来たが、それを断り探偵業に付いたのだ。だが一条探偵事務所の依頼は、CID絡みばかりであり、丸喜と知り合ったのも先月である。

義景「本当は、CIDに入って欲しかったのだがな。探偵事務所を開いたと言ってもCIDからの依頼ばかりだろう？」

将斗「まあ、そうなるかな。ご飯が食べれるのは、CIDのお掛けでもあるけどな」

丸喜「将斗君、親御さんやお兄さんや妹さん達には報告はしたのかい？」

将斗「手紙と導力通信で報告はしましたよ。両親も兄も妹達も祝福してくれました」

義景「それは良かったじゃないか。両親達はともかく、お前を劣等扱いした連中を見返せたんじゃないか？」

将斗「どうだろうね…あの人は爆裂魔法が使えない時点で俺のことを劣等とかかんがえてないから」

すみれ「将斗さん……」

義景「お前は劣等なんかじゃねえ！カルバード共和国のCIDがお前を勧誘しようとしたんだ！それだけじゃね！帝国の情報局もお前を勧誘しようとしてた噂があるんだ……だからお前は劣等なんかじゃねえんだよ！」

義景は将斗にそう言ったのだ。彼は将斗の能力以外でも買っている。人柄や性格なども含めて。歳は5歳も違うがダチのように接している。

将斗「義景……ありがとう。もうそのことは気にしていないから」

丸喜「義景君と将斗君はこれからどうするんだい？カルバードに帰るのかい？」

義景「ダツドは、他の連中に任せるが、俺と将斗は別件で来てるんだ」

丸喜「別件？」

義景「ああ、丸喜先生、すみれは知っているだろうが、斑目一流斎って画家だが」

丸喜「日本人で初めてカルバードの賞を取った斑目一龍斎画伯の事だよな？」

すみれ「斑目一流斎……画家……！あの方のお姉さんの！」

将斗「どうしたの、すみれさん？」

すみれは、ゴールデンウィーク前に受けた依頼の話を詳しく教えるのであった。

すみれ side

11204・5・14・夜・丸喜カウンセリング事務所

すみれは、とある依頼から帝国へ赴き、帝国が抱えている問題点と遭遇したこと。帝国の問題に日本人も多数関わっていること。日本自体の問題も帝国の問題と連動していること。

ゴールドマウンテン社の問題が日本国内では揉み消されていること。

帝国で問題を起こした容疑者であるゴールドマウンテン社の幹部達を乗せた輸送艇が何者かによつて東ゼムリア海に沈められたこと。

ゴールドマウンテン社の帝国支社がやらかした問題を、秀尽学園の元教師である鴨志田に全てを押し付けていること。などの話を話したのだ。

義景「なるほど……。学生の身分でそこまで調べたのか。すごいな、今からでもC I Dに勧誘したいものだな」

すみれ「私が1人で調べたわけではありませんよ。親友のアリス、理さん達もいらっしやっただけですし」

将斗「桐条首相の片腕の結城理さんに十文字家の分家の御嬢様であるアリス嬢……すみれさんの人脈は凄いね。義景が勧誘したくなるのもわかるな」

丸喜「2人とも、すみれ君の将来を勝手に決めるのは良くないよ。ちゃんと彼女が決めて進まないよね」

すみれ「アハハ……」

すみれは、苦笑いするしかなかった。まだ将来何になるなんてまだ決めていなかった。高校3年間のうちに決めようとも思っていた。丸喜は義景と将斗に先程の話をふった。

丸喜「で、君達の話は斑目一流斎画伯の話だったけど、彼に何かあったのかい？」

義景「ああ、斑目一流斎に盗作の疑惑がCIDに情報がもたらされたのだ」

丸喜「カルバードのCIDに？ 告発するなら日本の警察庁とか日本の美術協会とかに告発するんじゃない？」

すみれ「警察庁、美術の協会じゃ斑目の権力で潰されてかねないから。だから斑目が賞を取ったカルバードで告発をしたんじゃない」

将斗「なるほどね。それはあるかもしれない……」

義景「カルバードなら第3者として捜査してくれると思われたってことか……」

丸喜「でも難しくはないかな。仮に斑目画伯を調べるにしても日本の警察権力がそれを認めるとは思えないけど……」

義景「そこは大丈夫つすよ、丸喜先生。将斗の実家の一条家、七草家、十文字家の許可は取れましたし」

丸喜「なるほどね、その3家を味方に付けければ、なんとかなるかな」

すみれ「私も、斑目の事は調べなくてはいけないんです。依頼人からの頼みでもあるのでお願いします」

すみれは、義景と将斗に頭を下げる。山田さんのお姉さんと斑目の関係性、彼女の作品を彼が盗作したのか否か調べる必要があるからだ。

将斗「義景、どうするの？探偵の俺からすれば、協力するのもアリだと思うけど？」

義景「まあ、確かに彼女の能力は、CIDに勧誘したいものだ。だが…俺はカルバードのためにやっているわけだ。別に人助けのためにやっつてるわけではないが……」

義景はふと天井を見上げる。すみれの願いを拒否しようとは思ってはいない。ただ手を組める物を探しているのだ。すると彼女があることを言い出す。

すみれ「私が手に入れた情報は、義景さんと将斗さんに渡します。その代わりに、そこから得た情報を教えてもらえないでしょうか？」

義景「取り引きってことだな。…わかった、それでいこうか。将斗、それで構わないな？」

将斗「俺は構わないよ」

すみれと義景、将斗は、取り引きを成功させた。すみれの得た情報と義景達が得た情報を交換することを。

丸喜「えーと、僕が得た情報は、すみれ君や義景君達にも提供するよ」

すみれ「ありがとうございます」

義景「すまないな、丸喜先生」

この日は、互いにこれまでの情報を交換するだけであった。これからすみれ達の斑目に対しての捜査が始まる。

18-18-5-22 (13:45) ヲヴァイオレット
とグリムキヤッツ。

すみれ side

1-1204-5-22・昼過ぎ・13:45・ゴールド・マウンテン社共和国支部
内

すみれことヴァイオレットとグリムキヤッツことジュデイスは、ゴールド・マウンテン社共和国支部の屋上から姿を消して侵入していた。

何故、ヴァイオレットが共和国の怪盗であるグリムキヤッツと一緒にいるのかは、何日間か前に遡る。

ヴァイオレットとグリムキヤッツが出会ったのは、マダラメパレス内である。ジョーカー達怪盗団が、マダラメパレスから引き上げたのを確認して、ヴァイオレットは、単身マダラメパレスへ侵入する。カルバードから来た徳川義景、一条将斗からの情報により、斑目のアトリエを教えてもらっていた。そんな中、蓮や雪奈達が斑目一流斎を調べ回っていることを確認し、彼らの後を密かにつけていた。

蓮達がイセカイナビを使って入ってるのは、カモシダパレスの時に分かっており、ナ

ビを使って入ってきた。パレス内でマダラメの事を調べ回っていた時にカルバードの怪盗グリムキャッツと遭遇したのだ。

グリムキャッツ「マダラメのパレスを調べにやって来たけど、貴女は何者かしら？」
ヴァイオレット「貴女こそ、何故マダラメパレスにいらつしやるのですか？カルバードで有名な怪盗、グリムキャッツさんが東ゼムリアの日本に？」

グリムキャッツ「私の名前つて東ゼムリアにも広まつてるんだ…つて貴女こそ何者なの？」

ヴァイオレット「私が何者かなんて、別に関係ないですよね…。私はただマダラメを調べてるだけですから」

ヴァイオレットは、グリムキャッツを無視して先に進もうとしたら、高速か鞭さばきで真後ろへ避ける。鞭をパチパチさせながらヴァイオレットを見据えながらヴァイオレットに言う。

グリムキャッツ「これは警告よ、今度は痛いじゃ済まさないわよ？」

ヴァイオレット「なるほど、ただの“痴女”つてわけではなさそうですね」

グリムキャッツ「誰が痴女よっ！つてかあんたも大概でしょうが！そのレオタード、Vラインが際どいわよ！」

ヴァイオレット「……うう……そこを見ないでください！私だつて、気にしてるんで

すから！」

ヴァイオレットは、赤くながらもマントの懐から太刀を取り出す。

グリムキヤッツ「へえー、あんたもただの露出狂ではなかったのね」

ヴァイオレット「だ、誰が露出狂ですか！この痴女！」

グリムキヤッツ「誰が痴女やねん！」

グリムキヤッツが鞭をしならせて、振り回す。ヴァイオレットは、太刀を構えながら鞭をかむす。

ヴァイオレット「格好はともかく、かなりやりますね。八葉一刀流：紅葉斬り！」

ヴァイオレットは、グリムキヤッツに紅葉斬りを仕掛ける。グリムキヤッツは、寸前で避ける。

グリムキヤッツ「貴女の格好もどうかと思うけど、中々の太刀捌きね」

ヴァイオレット「それは褒め言葉として受け取っておきますね」

ヴァイオレットとグリムキヤッツは、ある程度の距離を保ちながら対峙する。

2人が対峙している最中、マダラメの大声が響き渡る。

マダラメ「弟子のモノは、この私のモノ。他のモノではない。全てがこの私のモノと言つて過言ではない！」

グリムキヤッツ「な、いきなりなんなのよ！つてかマダラメね。調べた通りの悪党ね」

ヴァイオレット「山田さんや彼らの情報を照らし合わせて、そしてシャドウのマダラメの言葉で、全て確証に変わりました」

グリムキャッツ「マダラメ、覚悟なさい！」

このマダラメパレスのどこかにいるマダラメの場所へ向かおうとするグリムキャッツをヴァイオレットは掴む。

グリムキャッツ「つて何するのよ!?!」

ヴァイオレット「あのマダラメを…あれはシャドウのマダラメなのよ、あれを捕まえても何の意味もないわ！」

グリムキャッツ「シャドウ？ 貴女は何を言ってるの？」

ヴァイオレット「あれは…欲望…斑目から生み出されたもう一人のマダラメ……。ここは、マダラメの認知世界…周りを良く見てください！」

グリムキャッツ「周りを良く見ろつて…!!何よこれ…」

グリムキャッツは、周りの風景を見て驚愕する。ヴァイオレットもそれを見て悲しくなってくる。

ヴァイオレット「これは、みんなマダラメのお弟子さんなのでしょう。マダラメにとって、彼らは芸術を生み出す絵つてとこでしょうか…」

グリムキャッツ「……イチリユウサイ・マダラメ…とんでもない悪党つてことじゃない

い……。なおさらマダラメも懲らしめない！」

ヴァイオレット「認知世界のマダラメをどうこうしても現実のマダラメに何かあるわけではない……」

ヴァイオレットは、頭の中でジョーカー達怪盗団のことを思い出す。カモシダパレスの事に関して怪盗団の活動によりシャドウカモシダを追い詰め、鴨志田を改心させることに成功している。

ヴァイオレット「それに私達が制裁を加えても意味はないわ」

グリムキャッツ「はあ、意味がないって、どういうことよ？」

ヴァイオレット「貴女は、秀尽学園の鴨志田事件の事は、知ってますか？」

グリムキャッツ「知ってるわよ。教師の立場でありながら女子生徒達にセクハラやパワハラなどを繰り返していた最低なヤツね。それとマダラメの件と何の関係が？」

ヴァイオレット「鴨志田の件を解決したのは、怪盗団なんですよ……」

グリムキャッツ「怪盗団……なんなのそれは？」

ヴァイオレットは、秀尽学園で起きていたことをグリムキャッツに説明する。最初こそ疑っていたグリムキャッツもヴァイオレットの言葉が嘘でたらめではないことがわかる。

グリムキャッツ「なるほどね、怪盗団ね。噂程度にしか信じていなかったけど、貴女

の証言で信じないわけにはいかないわね」

ヴァイオレット「斑目の件も怪盗団が何かやっているようです。怪盗団は、ちゃんと斑目の件もやってくれるはずですよ」

グリムキャッツ「怪盗団とやらを私も確かめてみましょうかね」

ヴァイオレット「ええ、まずここから出しましょう。話はそれからです」

ヴァイオレットにそう言われ、グリムキャッツもそれに応じて2人は、マダラメパスから出ることにした。

すみれ side

ー前の続き。

ヴァイオレットとグリムキャッツは、マダラメパレスから出て、斑目邸の近くの公園にやってきた。時は夕方から夜になりかけていた。すみれは公園のベンチに座る。もちろん彼女は、学校帰りなので、制服である。

すみれ「まあ、ここまで来れば、一安心でしょう。というか、グリムキャッツの正体がまさかカルバードの女優のジユデイス・ランスターだったとは驚きですね」

ジユデイス「私も驚きだよ。ヴァイオレットと言えば、私の界限にも噂が届くくらいのお助け怪盗だって。まさかその怪盗が、高校生の女の子だったとはね。それも変態教

師の勤め先の学校の秀尽学園の生徒とは……すみれ・芳澤さん」

すみれ「名前を覚えてもらっているとは光栄です。学校の方は、まあそういうことな運命だったのかはわかりませんが、とにかく私は鴨志田先生みたいな人は許せません」

ジユデイス「まあ、そうよね。そんな教師がいつまでも教師をしているのは、許せないよね。それで怪盗団が制裁……改心させたってわけね……」

すみれ「ええ、私を知る限りですが……」

すみれも直接改心現場を見たわけではない。雪奈や蓮達の会話から聞いただけである。それと鴨志田の学校で謝罪したこともある。

ジユデイス「1日で蹴りをつけるために、カルバードから来たというのに……どうするか」

すみれ「1日ですか……」

ジユデイス「女優の仕事の休みの時に日本へ来たのよ。それが今日……。明日にはカルバードにいないといけないし」

すみれ「女優の仕事って忙しいのでしょう？」

ジユデイス「そうね、大変よ……。でもね、それ以上にやりがいのある仕事なのよ」

すみれ「そうなんです。自分も学生をやりながらお助け業の両立は大変ですが、依

頼をこなした後に感謝の言葉や笑顔を見ると、やってて良かったと思いますしね」

そんな話を2人でしていると、斑目邸を訪れる客がいた。ファンが訪れるような感じではないし蓮達怪盗団でもない。スーツを着た男とリクルートスーツで身を固めた女性の計4人である。すみれとジユデイスは、近くの建物に身を隠して様子を伺う。

ジユデイス「なんなの、あの連中は？この国のお偉い方？」

すみれ「違うと思います。あれはおそらくゴールド・マウンテン社の幹部達だと思われ……」

ジユデイス「ゴールド・マウンテン社って帝国でろくでもないことをしていた企業じゃないの！まだ潰れてなかったのよ!？」

すみれ「日本内外から批判され、経営陣が総入れ替えにはなつたんですが、新社長が獅童正義の元秘書をしていた人のようです」

ジユデイス「政義・獅童：日本の騒動になつている張本人ね。今年の日本の総選挙では、首相になれるのではとかまで、出ているわね」

すみれ「ええ、日本国内では、少しずつでありますけど、獅童正義人気が出てますね」
ジユデイス「そんな獅童やゴールド・マウンテン社が斑目と……」

すみれ「おそらくですけど、獅童達は斑目から資金援助をもらつてる可能性もあるんじゃないかと思つたりしたんですが」

ジユデイス「資金援助ねえ…。もしくは、斑目が獅童達に資金援助されてる可能性もあるわね。もう1回パレスに侵入して探るか」

すみれ「いますぐ探るのはリスクが大きいですよ」

ジユデイス「どうして？今、探るのが先決でしょ？」

すみれ「あの黒服の連中以外にも潜んでいますよ。見張り役が…。そうとうの警戒を
しているみたいです」

ジユデイス「じゃあ、どうするの？このまま帰れって言うのかしら？」

すみれ「そうは言ってません。ただ…」

すみれはそう言うと、手の甲に小さな炎の塊を出した。ジユデイスは驚き

ジユデイス「な、なんなのそれ…？」

すみれ「まあ、見ていてください」

すみれは小さな炎の塊を斑目邸の方へ投げた。炎の塊は、すぐに見えなくなり、斑目邸の中に入って行った。

炎の塊

すみれが建物とかに侵入するために中を調べるために放つ術。炎の塊が、すみれの中に知りたい情報を送ってくるのだ。

すみれ「ジユデイスさん、斑目とゴールド・マウンテン社の幹部達が会合しますよ」

ジユデイス「すると言われても……何もわかんないけど!」
すみれ「これで観てください。映りだされると思うので」

すみれは、鞆から導力タブレットをジユデイスに渡す。

ジユデイス「導力タブレット……これがどうかしたの?」

すみれ「その導力タブレットを観てみてください」

すみれがそう言うのと、何も映っていない導力タブレットに斑目邸の内部が映し出される。映っているのは、斑目一流斎と先程の4人組だ。彼らは対面にて何かを話している。

??「我々と斑目先生とは初対面ですので、自己紹介からやりましょうか。私は、天川保文。対外交渉担当官という身分であります」

斑目「ほおう、対外交渉担当も変わったわけか。なら前任者から聞いておろう。まず何をすべきかを」

天川「伺っております。斑目先生、これをお納めください」

天川は、残りの3人に例のモノと称されるトランクを持ってこらせる。トランクの中には、大量のミラが入っている。

斑目「ふっ、わかってるではないか。それでなに様で参られたのだ?」

天川「斑目先生がカルバードの裁判所から訴えられています。そのことはご存知ですよ

ね？」

斑目「知っているとも。不肖の元弟子が、日本で訴えが受理されなかったから、カルバードで訴訟を起こすとは…全くだよ。それでカルバードの裁判所から出頭命令が来ているんだが」

天川「それにつきましては、無視でよろしいかと。共和国支部の方に裁判の差止め、訴訟を起こした本人の殺害なども考えてますが、いかがされますか？」

斑目「裁判の差止めとかできるのか？日本では上手くいったが、カルバードでは上手くいく保証はあるのだろうか？」

天川「それにつきましては、共和国の反移民団体や政治結社などにお金を渡しておりません。差止めはできなくとも、本人を殺害するのは他愛もないでしょう」

斑目「わかった、それでいくとしよう。できれば、6月5日までに蹴りをつけてもらえるか？」

天川「6月5日、日本での個展博が終わる日までにと？」

斑目「そうだ、それからはまた製作作業に入る準備をしなければ、ならないのでね」

天川「わかりました。そのように共和国支部に伝えておきますので、斑目先生、これからも宜しくお頼み申します」

—

すみれとジュデイスは、斑目と天川と言われた人物の会話を訊いて驚いていた。

すみれ「……アレが斑目の本性ってこと」

ジュデイス「みたいね。カルバードで裁判をおこしてる元弟子を殺そうとしているけど最低最悪ね」

すみれ「……すぐにもカルバードへ行きたいですが、学校もありますし、どうしよう……」

すみれは、学校をサボってまでお助けチャンネルの依頼をするわけにはいかない。どうするかで悩んでいたらジュデイスが

ジュデイス「私が先に戻って、ゴールド・マウンテン社の共和国支部を調べておくわ。で土曜日や日曜日なら来れるの？」

すみれ「まあ、土曜日、日曜日なら来れますね。普通の手段や裏の手で来ること」

ジュデイス「裏の手って何!？」

すみれ「ジュデイスさん、耳を貸してください」

ジュデイス「耳を貸す？」

ジュデイスは、耳をすみれの方に傾けた。すみれもそつと答える。

すみれ「瞬間移動ですよ……。座標移動（ムーブポイント）っていつて瞬時にそこへ移

動する…」

ジュデイス「……にわかには信じれないわね」

すみれ「…でしょうね。それでは…あることをして見せますね」

すみれはニコニコと手を2、3回振った。すると彼女の手には、ジュデイスの下着（白のブラ、白のショーツ）が握られていた。

ジュデイス「……ブラとショーツ……!?わ、私の!？」

すみれ「正解です」

ジュデイス「…って…どうやって!？」

すみれ「ジュデイスさんのブラとショーツが、瞬間移動して私の手にやって来たというわけですよ」

ジュデイス「ぐぬぬ……瞬間移動…信じるしかないわね…」

すみれ「ふふっ、信じてもらえたようでなりようです」

ジュデイス「…って…ブラとショーツ、ちよつと返しなさいよ…」

すみれ「アハハ、ブラとショーツはお返ししますね」

その後ジュデイスは、誰にも見られない場所にてすみれに剥ぎ取られたブラとショーツを身につけるのだった。

すみれ「コホン、気を取り直して…一度は共和国支部に乗り込む必要があるかもですね」

ジュデイス「ゴールド・マウンテン本社じゃなくて？」

すみれ「ええ、本社からの意向を実行に移すのは、共和国支部つてことになりますよね？」

ジュデイス「確かに……」

すみれ「とにかく、早めに動く方が言いようですので、5月22日にゴールドマウンテン共和国支部を調べることしましょう、それで良いですよ？ジュデイスさん？」

ジュデイス「まあ、いいわ。共和国つてことは、私にとつても都合が良いし」

すみれ「私は正規ルートで行きますから。新体操部の合宿が共和国のイーデイスであるので。22日の朝にはイーデイスに到着して、ホテルにチェックインしたら、22日は自由時間ですので、調べることはできますから」

ジュデイス「なるほどね。新体操やつてるから身体が柔らかかったわけね」

こうしてすみれとジュデイスは、ゴールドマウンテン共和国支部に潜入することになった。

19-19-5.22 (13:45) - 共和国支部の闇

すみれ side

1-1204・5・22・昼過ぎ・13:45・リバーサイド・ゴールド・マウンテン共和国支部屋上

新体操部の合宿のリバーサイドのホテルから、ゴールド・マウンテン共和国支部の近くのカフェで相方のジューデイスを待つ。すみれが到着して10分後に変装したジューデイスがやってきた。

そして、すみれとジューデイスは、共和国支部の方へ向かう。侵入経路は、怪盗らしく屋上から内部へ侵入する。

もちろんヴァイオレット、グリムキャッツに変身し姿を消す魔法を使って。

ヴァイオレット「共和国支部はどうやら一枚岩ではなさそうです」

グリムキャッツ「一枚岩ではない？」

ヴァイオレット「アレから調べたんですが、共和国支部も問題を抱えてるみたいです。谷垣支部長は、共和国政府、CIDに対して協力的みたいですが、天河警備室室長は、あまり良くは思っていないようです」

グリムキャッツ「先月の帝国支部の問題から共和国支部も監査の対象になったわけか。まあきな臭い噂は、前々からしてたし」

ヴァイオレット「共和国支部の機密情報ってやつぱり警備室が握ってる可能性は高いですよね……」

グリムキャッツ「普通に考えればそうよね。普通に訪れても教えてはくれないでしょうね」

ヴァイオレットは、懐からスマホを取り出す。そしてイセカイナビ、メメントスと口にする。すると空間が歪みメメントスが現れる。

ヴァイオレット「やはり、共和国でも使えた……」

グリムキャッツ「……パレスが現れた!?!」

ヴァイオレット「人間一人のパレスじゃないです。大衆のパレスって言った方が良いのかな」

グリムキャッツ「大衆ね……人間には欲がある。その欲望が強い人間はパレスがあり、それ以外はメメントスにある……。すみ、コホン、ヴァイオレットから聞いた時は半信半疑だったけど、実物を見ると信じないわけにはいかないわね」

ヴァイオレット「まだ半信半疑だったんですか……。というかグリムキャッツもパレスとかは知ってたじゃないですか?」

グリムキャッツ「そ、それは…お婆様から聞いたくらいしか…」
ヴァイオレット「お婆様ですか…」

グリムキャッツ「お婆様は、ずいぶんと知っているみたいだったけど、本当に人の欲がこんな世界を生み出すなんてね。まあ、この私が言うのもあれだけど、私も貴女も一般社会から言えば変わってるんでしようけど」

ヴァイオレット「そうですね、不思議な力を使える時点でそうなりますよね。おしゃべりはここまですして、ゴールド・マウンテン共和国支部がある方へ行きましょう！」

グリムキャッツ「そうですね…それに何だか面倒な奴らも出てきたみたいだし！」

ヴァイオレット「そうですね」

ヴァイオレットは、懐から太刀を取り出し、グリムキャッツは、鞭を取り出した。

ヴァイオレット「共和国支部へ走りましょう！」

グリムキャッツ「そうですね！」

ヴァイオレットは、太刀でシャドウを斬り裂き、グリムキャッツは鞭で薙ぎ払う。そんな感じで共和国支部のあるエリアに向かうのだった。

ーメメントス内ゴールド・マウンテン共和国支部

メメントス内、ゴールド・マウンテン共和国支部は不気味に立ち誇っている。現実の

ゴールド・マウンテン共和国支部とは似ても似つかない不気味な共和国支部。

ヴァイオレット「…欲望が溢れだした感じがするパレス擬きですな」

グリムキヤッツ「それだけ、共和国支部の支部長が欲望を垂れ流しているんじゃないの？」

ヴァイオレット「そうかもしれないませんが……とにかく調べてみましょうか」

ヴァイオレットとグリムキヤッツは、ゴールド・マウンテン共和国パレスに侵入する。中は会社ではなく、どこぞの奴隷工場のようにも見える。

グリムキヤッツ「なんなの、これが会社なの？」

ヴァイオレット「おそらく、このパレスの持ち主は、現実でこんなことを思っているんでしょね」

グリムキヤッツ「最低最悪なのは確定ね」

すると奴隷社員達の上司と思われる制服を来た人間が

上司「オメーら、タラーレ次長のために働け。タラーレ次長がいずれは、共和国支部の支部長になれるお方だ！今の谷垣は話にならない。我々のために尽くしていないのだから」

奴隷達「イエス、タラーレ次長の出世のために命を削つても頑張ります！」

上司「それでいい！それが貴様らのためになるのだからな」

奴隷達「イエス、我々のために！タラーレ次長のために！」

そんな彼らを見ていたグリムキャッツは、助けようと向かおうとするが、ヴァイオレットに止められる。

グリムキャッツ「彼らを助けないと！」

ヴァイオレット「彼らを助けても無駄ですよ」

グリムキャッツ「何故？助けるのは普通でしょ！」

ヴァイオレット「前にも説明しましたが、ここは認知世界、このパレスの主が作り出したモノ。この主が現実世界の彼らが救われるわけではないです。この人達を助けても現実世界の彼らが救われるわけではないです」

グリムキャッツ「本当に腹立たしいわね」

ヴァイオレット「ええ、腹立たしいです。先ほどの上司が言っていたタラーレ次長という人を探しましょう」

グリムキャッツ「谷垣支部長を蹴落として、タラーレ次長が成り変わるとか言っていたわね……」

ヴァイオレット「おそらくこのパレスも谷垣支部長のモノではなくタラーレ次長のパレスで間違いはなさそうですね」

グリムキャッツ「タラーレ次長を探せば良いのよね？」

ヴァイオレット「ええ、タラーレ次長を探しだし問い詰めてみましょう！」

ヴァイオレットとグリムキャッツは、タラーレ次長を見つけ出すために走り出した。

すみれ side

11204・5・22・昼過ぎ・14:00・タラーレパレス内

タラーレパレス内をタラーレ次長を探し回って、やつと本人の居場所を突き止めたヴァイオレットとグリムキャッツ。居場所を突き止めるため、タラーレ次長の部下と戦闘になってしまったが。ただ鴨志田や斑目のようなパレスでないにしろ、一般人の欲深さとは違うようだ。巨大な悪事の主の元にいると、普通の人間でさえ欲に包まれるようになるようだ。

グリムキャッツ「タラーレの部下達を締め上げてはかせても良かったの？」

ヴァイオレット「大丈夫ですよ、私達があの部下さん達を改心させたみたいにはなつたでしょうが。少なくとも死なないので安心してください」

グリムキャッツ「わかったわ。それにしてもヴァイオレット、貴女、尋問術とか知ってるわね」

ヴァイオレット「ええ、とある方から教えてもらったんですけどね。まさか使うことになるなんて思わなかったですけれど」

グリムキャッツ「とある方ね……。貴女もとんでもない知り合いがそうね……」

ヴァイオレット「顔が広いってだけですよ。話しているうちにタラーレ次長の部屋ですよ！」

グリムキャッツ「……な、なんなのあれは。まわりは……貧相なのに次長の部屋だけ立派なのよ！」

ヴァイオレット「このパレスの主に着々と進んでいる証拠ですね。このままだと、この今の主を殺し自身が主になって変わる可能性も……」

グリムキャッツ「そうなたらどうなるのよ？」

ヴァイオレット「それは……現実世界でも乗っ取られる可能性もあります。だから今のうちに摘み取るしかありません！」

グリムキャッツ「……わかったわ」

ヴァイオレットとグリムキャッツは、タラーレ次長のパレスである部屋へ入る。そこはいかにもと言ってもいいくらいのブランドで固められた部屋である。そこにはタラーレ次長が窓を

タラーレ「侵入者とはお前達の事か？」

ヴァイオレット「貴方がタラーレ次長ですわね」

タラーレ「そうだが、私の城に土足で踏み入るとは、どういうことになるのかわかる

か！」

グリムキヤッツ 「何が私の城よ！自分達の会社の社員を奴隷のように見て、扱ってどういうつもり！」

タラーレ 「社員を奴隷と思つて何が悪い？それが悪いことなのか？誰だつてやつてゐるだろうが！帝国も共和国も日本も他の国の連中だつて同じさ。だつたら私だつてやつてやるさ！どつちにしろ谷垣支部長ではどうにもならないからな」

タラーレは、そう言いながらシャドウに食われながらもニヤニヤしている。気持ちの悪い姿になり

シャドウタラーレ 「…お前達、私が共和国支部長になるための生贄になることだな！」

ヴァイオレット 「グリムキヤッツさん！やれますか！」

グリムキヤッツ 「やれるわよ、ヴァイオレット！」

ヴァイオレットは、太刀を構え、グリムキヤッツは、鞭を取り出した。

シャドウタラーレ 「ひやはっ！気持ちがいいぜ！」

シャドウタラーレは、右腕を鞭のように振り回す。ヴァイオレットとグリムキヤッツは揃つて避ける。右腕が直撃したタラーレパレスの壁が粉々に粉碎される。

シャドウタラーレ 「チョロチョロと小賢しい小娘どもが！」

シャドウタラーレは、再び右腕を鞭のように振り回す。

グリムキャッツ「はっ、何度も同じ手は食わないっての！」

シャドウタラーレ「果たして先程と同じかな？」

ヴァイオレット「……！グリムキャッツ！後ろ！」

シャドウタラーレの右腕の先から鋭い刃が見えた。その刃がグリムキャッツの背中を狙っていたのだ。それに気がついたヴァイオレットは、グリムキャッツへ叫んだ。ヴァイオレットは叫ぶだけではなく、太刀を鋭く振り抜く。

ヴァイオレット「紅葉斬り！」

シャドウタラーレの右腕を切り落とすことに成功する。しかしすぐに切り落とされた右腕はすぐに再生してしまう。

ヴァイオレット「再生能力！」

グリムキャッツ「再生能力を持つてるなんて厄介ね！」

シャドウタラーレ「どうだ！お前達がいくら攻撃しても再生能力で回復するんだ。お前達に勝ち目はないのだよ！」

ヴァイオレット「……奥の手を使うしかないですね」

グリムキャッツ「奥の手……？」

ヴァイオレット「まあ、見ていて下さい」

そういうとヴァイオレットは、懐から何かを取り出す。取り出したモノは紙切れのよ

うにも見えるが、七耀教会の人間が使うルーン魔術のようにも見える。

グリムキヤッツ「それって、ルーン魔術!？」

ヴァイオレット「ええ、ルーン魔術です」

グリムキヤッツ「ヴァイオレット、貴女、ルーン魔術まで知ってるなんて……」

シャドウタラーレ「な、なんなんだよ！」

ヴァイオレット「……私は別に殺しはしません。ただ邪悪な心を浄化するだけです。それで改心するでしょうし」

シャドウタラーレ「……改心だと……お前……まさかあの鴨志田の……ぎゃあ!!!」

ヴァイオレットは、シャドウタラーレが何か言おうとしたが、ルームの紙切れが彼の回りに魔法陣を描くように配置され、そして魔術を発動させ邪悪な心を浄化させ始めた。

シャドウタラーレ「ぎゃあー!!!」

魔法陣の光は、そのままシャドウタラーレを包み込みながら、邪悪の心をそのまま浄化していったのだった。

魔法陣の光が消えると、そこにはシャドウタラーレが立っていた。だが邪悪な感じは消えている。

シャドウタラーレ「私は、いつたいてどこ間違えたのだろうか：次長になったときだろうか？いやプロジェクトリーダーになった時、ライバルを蹴落としたときからか」

シャドウタラーレは、その場に座り込み、昔話を話しだした。

シャドウタラーレ「自分の出世のために他人を蹴落としてきた：なんて酷い人間になつてしまった。ゴールド・マウンテンの本社に入社した頃は、熱き志しを持つてたと言うのに：」

ヴァイオレット「会社に入社して、会社という組織にもまれて、次第におかしくなつたと？」

シャドウタラーレ「そうだな。最初は上司や同僚に対しても意見を言つていた。だがだんだんとそういうことに疲れてしまったのさ。上司は同僚はお前が間違つていると問いただされた」

シャドウタラーレは、ポツリポツリと自身がおかしくなつた件も話していた。自身を追い詰めた人間達は、自身が出世することにより、本社から地方へ飛ばしたりしたようだ。

グリムキャッツ「なるほど、それで復讐したつてわけね。1つ聞くけど、それで満足

したの?」

シヤドウタラーレ「……いいや、満足などしなかった。ただ虚しさだけが、私を満たしていった。こんなことを私は望んでいたのか、こんな結果を見なくてやってはいいなかつたはずだと。こんな私に古株の悪野泰輔という専務に次長にならないかと誘われた。専務は支部での私の功績を称えてと言っていた。だが私はおかしいなとも思いつながらも承諾してしまった。共和国支部は、元々本社への出世コースのために設立されたのに、今では帝国支部の尻拭いまでするようになってしまった。まあその帝国支部は閉鎖されだがね」

ヴァイオレット「タラーレさん、一つお聞きしてもよろしいでしょうか?」

シヤドウタラーレ「なんだね?」

ヴァイオレット「支部長の谷垣さんは、どんな方ででしょうか?」

シヤドウタラーレ「谷垣弥太郎、バカがつくぐらい、熱い男だ。アイツは本社から共和国支部の支部長になったんだ。仕事も出来るヤツで、詐欺の画家の斑目の絵も疑問を持ちながら購入していた」

グリムキヤッツ「詐欺ってわかってるのなら、何故購入を?」

シヤドウタラーレ「共和国支部の人間を、カルバードの人間を人質に取られれば、そうするしかなかっただろう」

グリムキャッツ「人質!? 斑目は画家の巨匠と言われてるだけで、カルバードを脅せる権力を持つてるわけ!？」

ヴァイオレット「ええ、タラーレ次長のおかげで、斑目はどうやら日本の獅童派、帝国の貴族派、共和国の反移民派と繋がってるのは、確証を持つていると断言できるというわけですね。斑目から共和国の反移民派に命じて、共和国支部を攻撃をすると言われたのですね？」

シャドウタラーレ「ああ、そのとおりだ。悪野専務は、今回のことは、かなり気にしていたのだ。今考えれば、慌てて出たみたいだね。帝国支部の件、斑目の盗作の件、そのあたりで、イライラがつのつていったのだろうが、とにかく悪野専務には、気をつけろよ。彼は、共和国の闇と付き合いがあるようだ。それだけではない、猟兵団との付き合い、いや取り引き先を持つている。お前達も十分に気をつけろ」

シャドウタラーレは、それだけ言うと、再び光に全体が包まれて、彼は元の姿に戻り現実の自身に戻っていった。

すみれ side

11204・5・22・昼過ぎ・14:30・タラーレパレス内

シャドウタラーレから、悪野専務という人物の話聞いたヴァイオレットとグリム

キヤッツ。悪野専務は、タラーレや谷垣が就任する前から専務として、共和国支部に居座っているようだ。タラーレ自身も悪野専務から誘われ共和国支部の次長になったようだ。

ヴァイオレット「悪野専務は、タラーレ次長の心の隙間に入り込み、自分の思い通りになる人間を作ろうとしたんでしょか」

グリムキヤッツ「人の弱みに付け入っているのは確かなようだけど、思い通りになる人間を作ろうとしたのかまでは、わからないわね」

ヴァイオレット「そうですね、とにかく今は現実世界に戻りましょう」

グリムキヤッツ「そうですね」

ヴァイオレットとグリムキヤッツは、メモントスから現実世界へ戻ってくる。しかしゴールド・マウンテン共和国支部内には、警察と遊撃士がやって来ている。

ジュデイス「すみれ、警察や遊撃士が来てるわ。どういうことかしら？」

すみれ「メモントスの事で、通報されるはずは無いはずです。他に支部に何かあったのでしょうか？」

ジュデイス「そうね、そう考えるのが妥当よね」

すみれとジュデイスは、共和国支部の人気のないところから様子を伺っている。すると2人の男女が話している。

順平「しかし、どこから魔物を呼び出すかね？影時間？や？マヨナカテレビ？じゃあ
るまいし」

ゆかり「シヤドウならそれで説明ができる。でも魔物となるとそれでは説明が
できない」

順平「うーん、真田さん達がわからないものは、オレらがわかるわけないよな…」

ゆかり「わからないままには、しておけないでしょ！私達は仮にもC I Dの外部諜報
部員なんだから」

順平「へいへい、そうでしたね」

ゆかり「とにかく、何でも良いから魔物を呼び出した証拠を見つけ出すわよ！」

順平「ゆかりっち…わかった、オレも共和国でもまれて来たんだ！逃げ帰るだけは
しねえ！ダサイ姿はチドリには見せねえって誓ってるしな！」

ゆかり「お熱いことで。とにかく証拠を見つけろわよ
！」

順平「おうよ！」

そう言つてゆかりと順平は、再びゴールド・マウンテン共和国支部内に入つて行つた。
ジュデイス「さっきのは、特撮女優のユカリ・タケバと野球選手のジュンペイ・イオ
リじゃないの！」

すみれ「ユカリ・タケバ、ジュンペイ・イオリ…日本の方ですか？」

ジュデイス「ええ、出身は日本だったはずよ。ただあの2人がCIDの人間だったなんて、気をつけないとね」

すみれ「あの2人が言ってた？魔物？とはなんででしょうか？」

ジュデイス「街道のハズレにいる魔物ではなさそうよね。呼び出したとか言ってたし」

すみれ「あの2人が言っていた？影時間？や？マヨナカテレビ？とはいったいなんなのでしょうか」

ジュデイス「私に言われてもわからないわよっ」

すみれ「そうですね」

ジュデイス「まあ、私のお婆ちゃんなら知ってるかもしれないけど」

すみれ「お婆ちゃんがですか…」

ジュデイス「田舎のお婆ちゃんなら知ってるかもってだけよ。ただ最近実家に帰ってないしね」

すみれ「さっきの2人が言ったことも大事ですけど、悪野専務を調べるのが先ですよね」

ジュデイス「まあ、そうですね。ただ警察や遊撃士が来ている以上これ以上は調べられない」

いわね」

すみれ「ええ、私も新体操の合宿で来ているので、これ以上は続けられません。練習時間とかがありますし」

すみれのスマホがピピッと着信となり、すみれはそれを見て苦笑いをする。

ジュデイス「そう言えば、貴女は学生だったわね。まあ、良いわ、これからは私が一人で調べるわ。何かわかったら連絡してあげるわ」

すみれ「ありがとうございます、ジュデイスさん」

ジュデイス「すみれ、新体操の練習頑張りなさいよ。学生の本文は、学園生活をせいっぱい楽しむことなんだから」

すみれ「はい、ありがとうございます、ジュデイスさん」

すみれとジュデイスは、軽い会釈するとすみれは、合宿先のホテルへ帰り始めた。彼女の背中を見送ったジュデイスは

ジュデイス「さてと、調査の続きでもしますかね」

ジュデイスはそつと立ち上がるとどこかに歩き始めたのだった。

すみれとジュデイスが再び顔を合わすのは、6月の半ばになる。

20-20-5・22 (14:30) - 悪野専務。

すみれ side (2)

11204・5・22・昼過ぎ・14:30・タラーレパレス内

シャドウタラーレから、悪野専務という人物の話聞いたヴァイオレットとグリムキヤッツ。悪野専務は、タラーレや谷垣が就任する前から専務として、共和国支部に居座っているようだ。タラーレ自身も悪野専務から誘われ共和国支部の次長になったようだ。

ヴァイオレット「悪野専務は、タラーレ次長の心の隙間に入り込み、自分の思い通りになる人間を作ろうとしたんでしょか」

グリムキヤッツ「人の弱みに付け入ってるのは確かなようだけど、思い通りになる人間を作ろうとしたのかまでは、わからないわね」

ヴァイオレット「そうですね、とにかく今は現実世界に戻りましょう」

グリムキヤッツ「そうね」

ヴァイオレットとグリムキヤッツは、メモントスから現実世界へ戻ってくる。しかし
ゴールド・マウンテン共和国支部内には、警察と遊撃士がやって来ている。

ジユデイス「すみれ、警察や遊撃士が来るわ。どういうことかしら？」
すみれ「メモントスの事で、通報されるはずは無いはずです。他に支部に何かあったのでしょうか？」

ジユデイス「そうね、そう考えるのが妥当よね」

すみれとジユデイスは、共和国支部の人気のないところから様子を伺っている。すると2人の男女が話している。

順平「しかし、どこから魔物呼び出すかね？影時間？や？マヨナカテレビ？じゃあるまいし」

ゆかり「シヤドウならそれで説明ができる。でも魔物となるとそれでは説明ができない」

順平「うーん、真田さん達がわからないものは、オレらがわかるわけないよな……」

ゆかり「わからないままには、しておけないでしょ！私達は仮にもC I Dの外部諜報部員なんだから」

順平「へいへい、そうでしたね」

ゆかり「とにかく、何でも良いから魔物呼び出した証拠を見つけ出すわよ！」

順平「ゆかりっち……わかった、オレも共和国でもまれて来たんだ！逃げ帰るこだけはしねえ！ダサイ姿はチドリには見せねえって誓ってるしな！」

ゆかり「お熱いことで。とにかく証拠を見つけてるわよ

！」

順平「おうよ！」

そう言つてゆかりと順平は、再びゴールド・マウンテン共和国支部内に入つて行つた。

ジュデイス「さつきのは、特撮女優のユカリ・タケバと野球選手のジュンペイ・イオリじゃないの！」

すみれ「ユカリ・タケバ、ジュンペイ・イオリ：日本の方ですか？」

ジュデイス「ええ、出身は日本だったはずよ。ただあの2人がCIDの人間だったなんて、気をつけないとね」

すみれ「あの2人が言つてた？魔物？とはなんででしょうか？」

ジュデイス「街道のハズレにいる魔物ではなさそうよね。呼び出したとか言つてたし」

すみれ「あの2人が言つていた？影時間？や？マヨナカテレビ？とはいつたいなんなのでしょうか」

ジュデイス「私に言われてもわからないわよっ」

すみれ「そうですよね」

ジュデイス「まあ、私のお婆ちゃんなら知つてるかもしれないけど」

すみれ「お婆ちゃんがですか…」

ジュデイス「田舎のお婆ちゃんなら知ってるかもってだけよ。ただ最近実家に帰ってないしね」

すみれ「さっきの2人が言ったことも大事ですけど、悪野専務を調べるのが先ですよね」

ジュデイス「まあ、そうね。ただ警察や遊撃士が来ている以上これ以上は調べられないわね」

すみれ「ええ、私も新体操の合宿で来ているので、これ以上は続けられません。練習時間とかもありますし」

すみれのスマホがピピッと着信がなり、すみれはそれを見て苦笑いをする。

ジュデイス「そう言えば、貴女は学生だったわね。まあ、良いわ、これからは私が一人で調べるわ。何かわかったら連絡してあげるわ」

すみれ「ありがとうございます、ジュデイスさん」

ジュデイス「すみれ、新体操の練習頑張りなさいよ。学生の本文は、学園生活をせいっぱい楽しむことなんだから」

すみれ「はい、ありがとうございます、ジュデイスさん」

すみれとジュデイスは、軽い会釈するとすみれは、合宿先のホテルへ帰り始めた。彼

女の背中を見送ったジユデイスは

ジユデイス「さてと、調査の続きでもしますかね」

ジユデイスはそつと立ち上がるとどこかに歩き始めたのだった。

すみれとジユデイスが再び顔を合わすのは、6月の半ばになる。

アルフィン編【アークライド解決事務所】

1-1-1-5・05（22:50〜）ーバルムフレイム宮にて。

1-1-204・5・05・夜・22:50・バルフレイム宮・皇族の間（ユーフェミア、アルフィン、セドリック）

帝都ヘイムダル、バルフレイム宮の皇族の間から夜景のヘイムダルを見ながら話している人物がいる。寝間着の格好をしているアルフィンである。

アルフィンは、セントアークでの取り調べが終わった後、すぐに帝都ヘイムダルにあるバルフレイム宮へ戻った。すみれ達の取り調べは終わっており、今日はセントアーク内のホテルで一泊、朝一で日本に戻る手配になっている。深夏やアルフィンの座標移動（ムーブポイント）で日本に帰る手段も考えたが、結局は空路で帰国することを決めた。ミサキには、取り調べ中にロイヤル伯爵家の息子の件までも報告したのだ。アッシュとアニスの件は、伏せながら伝えた。

ミサキは、ロイヤル伯爵家はもちろん、サザーラント州の反フデリック卿を取る貴

族派を監視対象にすることを決めた。

ミサキ「…というわけです。アルフィン殿下は、心配なさらなくてよろしいので」

アルフィン「わかったわ」

ミサキ「それでは、アルフィン殿下。お休みなさいませ」

アルフィン「ミサキさん、お休みなさい」

アルフィンは、ARCSの通話ボタンを押した。

アルフィン「ミサキさんは、これから色々忙しくなりそうですわ」

大賢者「解、東日本人移民街の問題、西の日本人移民街の問題、日本国政府との交渉、それから東ゼムリア海の護送艇の捜索…休まるのでしょうか、彼女？」

アルフィン「うーん、わたくしなら、その前でクタクタになりそうですわ」

アルフィンはそう言いながら、ソファーに女の子座りをして座る。

大賢者「告、今日1日だけで、東西ゼムリアで動きがあるようです」

帝国では、西日本人移民街で騒動が起こり、共和国では、反移民団体の一部が政府関係機関の建物を占拠し、共和国軍警により鎮圧。クロスベルでは、市長選挙の選挙戦が開始。

アルフィン「ふう〜今日も世界情勢は激動ですわね」

大賢者「解、それだけ世界は激動の時代へとシフトチェンジしていつてます」

アルフィン「ええ、徐々に世界は激動の時代へ流れてますわ。だからすみれさんや理さんのような方々が必要なんです」

大賢者「解、マスターも含めてですが」

アルフィンと大賢者がそんな話を話していると、セドリツクが皇族の間に入つて来た。

セドリツク「アルフィン、まだ起きてたんだ…ぷっ！」

セドリツクの目線は、アルフィンのスカートの中、緋色のショーツを見ている。セドリツクがいる場所からは、アルフィンが女の子座りをしているから丸見えである。アルフィンの緋いショーツを見て、ドキドキしているセドリツク。それを知つてか知らずかアルフィン「どうかしたのかしら、セドリツク？」

セドリツク「アルフィン、パンツが見えてるって！」

アルフィン「あら？ふふっ、セドリツク、顔が赤いですわよ？まさか…お姉ちゃんのパンツを見て興奮したとか？」

セドリツク「ち、違うよ！なんで姉であるアルフィンで興奮しなきゃいけないの？」

アルフィン「ふふっ、別に良いのよ。姉のパンツで、興奮するのも健全の証ですものね」

セドリツク「!!…ぼ、僕は先に寝るから！」

セドリツクは、真つ赤にしなからそそくさに自分の部屋へ戻って行った。

大賢者「問、マスター、弟に対してからかいすぎなのでは？」

アルフィン「そうかしら？」

大賢者「解、ええ、誰が聞いても同じ答えが返ってくると思いますが？」

アルフィン「ふふつ、まあそれはそれとして、もう一人のわたくしが記憶したものを覚えるとしますか」

今日、一日学院の授業内容等をもう一人のアルフィンが通っていたのだ。それを覚えることにした。名目は勉強の予習復習という形にして。アルフィンがそれを片付けた時は、日付けが変わるちよつと前であった。

一方のセドリツクは、自室の部屋にてアルフィンのパンツが頭に焼き付いて、自身の息子が熱くしていた。

2 | 2 | 5 · 21 (07 : 30) | 旅立ち。

アルフィン side

111204・5・21・朝・07 : 30・帝都ヘイムダル・バルフレイム宮にて。

アルフィンは、ソファアに座つて、ここ最近のカルバード共和国や日本などで起こっている問題の資料を見ていた。彼女はなぜこんな資料を持つているかと言うと、カルバードにいる真田明彦や帝国に滞在している結城理からもらったものである。

アルフィン「ここ最近でよく耳にするのは、斑目画伯のことですわね」

大賢者「解、斑目一流斎、日本の画家。自身の代表作、『サユリ』で、カルバード芸術祭で、大賞を取った。その後も次々と賞を獲得していく…とされています」

アルフィン「サユリなら、帝国の美術館にも飾られていますわね」

帝国美術館にも斑目一流斎の絵は一通りは、展示されている。

大賢者「解、マスターの読んでいる資料には、斑目画伯が盗作や虐待の常習者と記されていますね」

アルフィン「これが事実だとすると、すみれさん達が追っていた事件に繋がるかもしれませんわ！」

以前すみれ達が追っていた事件。ゴールドマウンテン帝国支部の事件と山田真奈美の事件と斑目の事件と繋がるかもしれないとアルフィンは考えた。

大賢者「問、マスターはこれからどうするつもりでいるのですか？」

アルフィン「もちろん、斑目画伯の件が気になりますし、アルトライアには、分身を行かせますわ」

大賢者「やはり、そう来ましたか」

アルフィン「そうと決まれば、善は急げですわ！」

アルフィンは、分身を登場させる魔法を使い、自身の分身を呼び出す。

分身が呼び出された後、アルフィンは、前と同じようにするように言い聞かせた。分身には、アルトライアの制服を着せ、自身は旅人の格好（アニエスみたいな服装）をする。

アルフィン「お頼みましたわ」

分身「アルフィン様のままに」

分身は、アルフィンのアストライア女学院の制服を来て、学院に行く準備に入る。アルフィン自身は、旅支度の準備を整えてから、頃合いを見計らってバルフレイム宮を出るのであった。

アルフィン side

111204・5・21・朝・08:25・帝都ヘイムダル・バルムフレイム宮

アルフィンはいつもの隠し通路からヴァンクール通りの裏通りへ出てきた。今は通勤通学時間帯で表通りはあまり歩けない。

裏通りは、表通りと違い治安があまり良くないイメージがあるが、カール・レーグニッツ帝都知事の改革のおかげで、治安が良くなっている。

大賢者「問、マスターはこれからどうするつもりですか？」

アルフィン「そうね…本当なら帝都ヘイムダル中央駅から大陸横断鉄道に乗って、カルバードの首都イーデイスへ行きたいけど、それは無理そうだし」

帝都ヘイムダル中央駅から大陸横断鉄道に乗ることは簡単だ。だが必ず身分証明をする区間がある。その時に身分がバレる可能性が十分に高い。ならどうするか、飛行船で行くか？

飛行船も身分証明が必要である。

残っている手段は、徒歩&走ること。

大賢者「問、まさかと思いますが、歩いて行くとかの発想なんでは？」

アルフィン「まさか、もちろん途中までは、座標移動で行くわ」

大賢者「問、マスター、帝国やりベールや東ゼムリアの日本内ならどこまでも座標移

動で一瞬で行けるでしょうが、未踏のカルバード共和国には座標移動では行けないかと。あれをカウントすれば、完全な未踏ではないですが」

アルフィン「わかってるわ、それも含めてね」

大賢者「告、カルバード共和国に行くためには、1つ目は帝都ヘイムダルから鋼都ルーレを越え、そのノルド高原を抜けて、カルバード共和国の国境の村クレイユ経由でイーデイスに入るルート。2つ目は、クロスベル経由で、アルタイルを通ってイーデイス入るルート。3つ目は、第3国ルートで、カルバード共和国首都イーデイスに入るルート。3つがありますが、ちなみにマスターはどれで行きますか？」

アルファン「2と3は無いわね。1もルーレまではいらないわね。ノルド高原経由で行きましょうか」

大賢者「解、マスターはいばらの道を進むのが好きなようで」

アルフィン「別にいばらの道が好きないわ。最善策を選んだまだよ」

アルフィンをそう言うのと座標移動（ムーブポイント）で帝国北部のノルド高原へ飛んだ。

アルフィン side

1-1204・5・21・朝・09:10・帝国北部のノルド高原。

アルフィンが座標移動で移動してきたのは、ノルド高原の北部の場所である。ノルド

の民がいる集落は、ここより南部の方にある。ここから先はカルバード共和国側に踏み込むことになる。

ノルドには観光資源があるのは、確かだが、今はそれは置いておこう。トールズ士官学院の帝国史にも出てきたとおりに、アルノール家の人間にとっては、縁深い場所である。

大賢者「解、ここがかの有名なドライケルス大帝の挙兵された場所ですか。のどかで気持ちいい場所ですね」

アルフィン「ええ、わたくし達にとつては、とても大事な場所であり大切な隣人よ。今は…領土紛争の種になってますが…」

大賢者「解、帝国と共和国が互いに領土主張をし過去に何度も紛争になっていますね」

アルフィン「わたくしは、この綺麗なノルド高原を戦火の火で焼きたくはありませんわ」

大賢者「解、マスターの気持ちもわかる気がしますね」

ノルド高原の綺麗な空気、吹き抜けていく、ひんやり冷たい風。帝都ヘイムダルにては、味わえないものばかりである。

大賢者「告、カルバード共和国方面から、何かの一団がやって来ますね」

アルフィン「何かの一団？商人の方々でしょうか？」

大賢者「問、マスター、どうされますか？」

アルフィン「どうするもなにも、商人の一団の方々ならなにも警戒する必要もないでしよ？」

大賢者「解、確かにそうですが万が一に備えるのも大事だと思われませんが」

アルフィン「わかったわ、大賢者。あなたがそう言うなら警戒度はあげるわ」

アルフィンは、そう言うのと神経を研ぎ澄ませて、一団がやって来る方向を見ている。一団もゆつくりとこちらへ近づいてくる。怪しまれないようにアルフィンもカルバード共和国方面へ歩き出す。

商人「今時ノルド高原のこの街道を使う者がいるなんて珍しいな」

商人の一団のリーダーの方と思われる人に話しかけられた。

アルフィン「ええ、わたくしは、古い街道を使って旅するのがロマンがあつて好きですわ」

商人「近頃の若者にしては、見る目があるじゃねーか。一人旅なのかい？」

アルフィン「そうですわね」

商人「カルバードでは、女性の一人旅は珍しくはないが、帝国では珍しいのでは？」

アルフィン「確かに帝国では珍しいかもしれませんが、これから流行るかと思います

わ」

商人「そうだといいな。それじゃあ、ノルドの各集落を回らないといけないから、オレ達は失礼するよ」

商人の一団は、ノルドの各集落へ向け再び歩き出した。アルフィンはそれを見送ると彼女も商人の一団がやってきた方向へ歩き出す。

大賢者「解、普通の商人の一団でしたね。色々とスキャンで調べましたが、何もなかったです」

アルフィン「私の目で見ても普通の炎の色の方々だったですわ」

大賢者「解、あの商人の一団は、月2回ほどカルバード共和国からノルドの民達に物資を運んでるみたいですね。それも共和国側に協力的、傘下になったような部族だけに物資を運んでるようです」

アルフィン「……帝国も帝国に協力的、傘下に下ったノルドの方々達だけに補強物資を運んでるみたいだしね」

大賢者「問、政治的駆け引きってどこでしょうか？」

アルフィン「そう言うことになるわね。オズボーン宰相と共和国のロックスミス大統領の駆け引きってことでしょいか」

ノルドが抱える問題を話ながら、アルフィンは、帝国から共和国側へ入る。そこは帝

国側とそんなに変わらないが、すぐに丘陵になりノルドの南部にある古代遺跡群が立ち並んでいる。

アルフィンには、崖の部分から遠くを眺めてみる。近くに共和国軍の基地があるのが確認でき、共和国軍の基地の向こう側に帝国軍の監視塔が見える。共和国軍の基地は、街道沿いにあるようだ。

大賢者「問、マスター、どうされますか？共和国軍の基地で、必ず検問に引つ掛かると思われますが？」

アルフィン「……一か八かの座標移動を使うとか？イーデイスには、*彼*がいるでしょうし」

大賢者「解、それは、彼：ヴァン・アークライド様に座標移動するってことになりませんが？」

ヴァン・アークライド。黎の軌跡の主人公になるのだが、今はまだ駆け出しの裏解決屋（スプリガン）である。彼の仕事は、遊撃士や警察が受けたがらない依頼などをこなしているのだ。とあることで、とある少女を、とある勢力から守り抜いて、とある家族の元へ届くようにやったのだ。

アルフィン、とある少女とヴァンがとある勢力に襲われていたところに加入して、それからヴァンと共に行動しとある少女をとある家族に送り出したのだ。

そのあとにアルフィンとヴァンは、連絡先を交換したが何も寄越してはいない。

アルフィン「まあ、便りがないのが元気の証拠とも言いますし、こつちから押し掛け
てあげましょうかね」

大賢者「解、ヴァン様が迷惑にならないようにしないとなりませんね」

アルフィン「ヴァンさんに会うためには、あの共和国軍基地を越えなきゃなりません
ね。近付いてちよつと確かめましょうか」

大賢者「解、危なくない程度にしませんと、万が一見つかりでもすれば、大変なこと
になりかねませんから」

アルフィン「そうね、帝国と共和国の問題にもなつてしまいかねませんからね」

そう言つてアルフィンは、様子を見るために警戒しながら近づくのであった。

3-3-5・21 (09:45~)ーカルバード共和国へ。

アルフィン side

111204・5・21・朝・09:45・カルバード共和国側、ノルド高原・共和国軍基地の近く。

アルフィンは、共和国軍の基地の近くまでやって来た。共和国軍の基地の様子は何ら変わりのない感じのいつもとおりの様子である。

大賢者「告、カルバード共和国軍基地の概要は、兵士の人数は350名、軍用挺20、導力戦車40両、装甲車30両、補給車、3台」

アルフィン「細かく調べてたのですね…。別に基地には用はないのだけど…。わたしが様子を見ると言ったからですね」

大賢者「了、まあ参考までにマスターは覚えてください」

アルフィン「参考までに、ね…。もちろん、向こうからわたくしを認識出来ないように魔法をかけてますが」

大賢者「解、光を屈折させる魔法…光井家が得意としていた魔法ですか」

アルフィン「そうね。わたくしよりも妹のほのかが得意だったですけどね」

そんな会話をしながらアルフィンは、共和国軍の基地を避けながらクレイユ村方面に歩みを進める。

共和国軍基地を難なく通りすぎるとかなり先にクレイユ村が見えていた。

アルフィン「クレイユ村、わたくしのあの世界のオランダの都市みたいな場所ですね」

大賢者「了、そうみたいです」

それを尻目にアルフィンは、クレイユ村の方へ歩き出す。のどかな街道を歩きながらカルバードの春から夏に変わる前の季節を噛み締めながら歩いてきた。

クレイユ村は、大変外国人客やカルバード国内に置いても人気の高い観光地でもあり、この時期の観光客も多いのである。

だが、人気が高い分、犯罪もそれだけ増える。カルバード共和国内では、各地に警察署を設けてはいるが、遊撃士の手も借りる必要もある。

クレイユ村に近づくにつれて、観光客がどんどん増えてくるのが、目にわかるように増えている。事件は人間の犯罪だけではない。中には魔物が襲ってくる場合もある。

大賢者「告、この先すぐに観光客を乗せた導力観光バスが魔物に襲撃を受けている模様。マスターどうされますか？」

アルフィン「本来ならカルバードの警察官や遊撃士が対応するのですが、時間が

惜しいですね。わたくしが行ってやるしかないですね」

大賢者「了」

アルフィンには、魔物の襲撃を受けている導力観光バスを助けに行くために走ったのだった。

アルフィン side

11204・5・21・朝・10:20・クレイユ村の途中の街道。

観光客を乗せた観光導力バスは、複数の魔物に襲撃され囲まれていた。

運転手「乗客の皆様、落ち着いてください。ただいま遊撃士及び警察に連絡を取りましたので、彼らがすぐに来てくれるでしょう。だからもうしばらくの辛抱を」

乗客1「くそっ、何て日だよ、せっかくの観光だつてのに」

乗客2「全くくだわ！観光気分には水を指さないでほしいわ！」

乗客3「早く、遊撃士か警察よ、来てくれよ！」

魔物達が今にも観光導力バスを襲いかかろうとしている。運転手も乗客達もダメかと諦めかけた時、颯爽と現れた者がいた。アルフィンである。クラッシュガルの一匹が観光導力バスに突撃してきたので、アルフィンは回し蹴りでクラッシュガルムを蹴り飛ばした。導力バスの運転手や乗客達は、アルフィンの登場で助かったと安堵する。乗客の1人は、アルフィンのスカートの中身が見えて股間を熱くした。

アルフィン「その観光導力バスには、手を触れさせませんわ！」

大賢者「告、クラッシユガルムは、全部で12体。導力バスを囲むように展開して
います」

アルフィン「わかりましたわ。12体ぐらい別に問題はありませんし」

アルフィンは泰斗流の構えをやる。クラッシユガルムもアルフィンを目標に変えた。彼らはアルフィンを最も危険だと判断したからだ。それは間違いいではないだろう。だが彼女の回し蹴りからの2連撃の蹴りは、クラッシユガルムも大ダメージを受けて、そのまま動かなくなる。

アルフィンの2連撃、【飛燕連脚】

そんな様子を観光導力バスの中から見ている人物がいた。

???「女の子が戦っているのかな」

その人物は、クレイユ村を観光するような感じはしない。何か目的があるようには見えない。流れ者って感じである。

???「あの彼女が戦ってるみたいだし、加勢に行くまでもないか」

その人物は、アルフィンが戦っているのを眺めているだけであった。

アルフィン「はあく踵落としですわ！」

クラッシユガルムの脳天に踵落としをヒットさせそのまま倒した。残り10体。

アルフィン「チマチマ戦ってる場合じゃありませんわ！」

アルフィンは、拳を構えて数体のクラッシュガルドに向かつて放つ。

アルフィン「衝撃波！」

衝撃波を受けた数体のクラッシュガルドは吹き飛ばされてそのまま倒れる。

アルフィン「まだまだよ、ファイアーボール！」

火炎の玉を数体のクラッシュガルドへ投げ込む。火炎の玉を受けたクラッシュガルドは、炎に焼かれながらそのまま消し炭になってしまふ。残り4体。

大賢者「問、あと4体残ってますが、一気に片付けますか？」

アルフィン「あまり派手なやり方で目立ちたくはないですし、地味かつスピーディーに片付けましょう！」

大賢者「了、地味かつスピーディーですな…。わかりました」

大賢者は、アルフィンに対して、加速魔法を掛け、彼女自身は走り出して、空高く舞い上がり

アルフィン「ドラグナーハザード!!!」

アルフィンは、火龍の如く4体のクラッシュガルドに命中させた。4体のクラッシュガルドは燃えながら力尽きた。

こうして観光導力バスを襲撃をした12体のクラッシュガルドはアルフィンによつ

て倒されたのであった。

アルフィン side

11204・5・21・昼前・10:45・クレイユ村に通じる街道の途中にて。

アルフィンによってクラッシュユガルムによる観光導力バスの襲撃は阻止された。その後、遊撃士やカルバード警察のクレイユ村駐在所からの警察官がやってきて、事情聴取が行われていた。

アルフィン自身は、あまり関わりたくないのです、おさらばしたかったが、観光導力バスの運転手や観光客の方々からお礼を言われて、立ち去るわけにもいかなかった。

大賢者「問、このまま、事情聴取を受けるおつもりですか？」

アルフィン「まあ、仕方がないでしょう。今さら立ち去るわけにもいけませんし」

大賢者「解、万が一のために、マスターの：アルフィン・レンハイムの身分証明書を作っておきましたので、ご安心を」

アルフィン「大賢者、ありがとうございます」

アルフィンが確認すると、ちゃんと身分証明書は彼女の鞆の中にちゃんとしまわれている。

大賢者「了」

遊撃士の方々や警察官達は乗客や観光導力バスの運転手から話を一通り聞き終える

とアルフィン の元へやって来る。

警察官「それで、貴女がクラツシユガルムを1人で片付けたんですね」

アルフィン「はい」

警察官「失礼ですが、お名前と身分証明書などを提示して下さい」

アルフィン「わかりましたわ。わたくしの名前はアルフィン・レンハイム。身分証明書はこれですわ」

アルフィンは身分証明書を警察官に見せる。

警察官「……はい、帝国からの旅行ですか。……失礼ですが共和国には、どちらから入国されましたか？」

アルフィンは、心臓がドキツとしてしまう。どこから入国されたと聞かれて、ビツクリしてしまふ。実は密入国してきましたとは、言えない。大賢者に助けを求めようとしたら、観光客の中から助け船が出される。その人物は、スーツ姿だが、スーツを左肩に下げている。堂島さんがやっているような感じ。

???「彼女は、俺の知り合いだ。ちゃんと入国は、ノルド側からの入国を許可””されている」

警察官「貴方は、真田情報分析官！」

真田明彦、CIDの情報分析官である。かつて日本で世界の命運をかけて戦った仲間

でもあり、理の学校の先輩でもある。高校卒業後、カルバードの大学に進学した。修行や大学在籍中にCIDからの勧誘を受け情報分析室へ配属される。卒業後もめきめきと頭角を表しロックスミス大統領から情報分析室の分析官として任命された。

明彦「彼女の身分はこの俺が保証する」

警察官「真田情報分析官のお知り合いとは、いざ知らず大変失礼しました」

明彦「この場合は、俺が引き継ぐ。貴殿達は、クレイユ村周辺の警戒を引き続き行つてくれ！」

警察官「わ、わかりました！」

警察官達は、明彦にそう言われると、クレイユ村の方へ向かって行つた。

アルフィン「…ふっ、助かりましたわ。明彦さん」

明彦「全くの皇女様だよ。まさか、ノルド方面からの密入国とはな…」

アルフィン「わ、わかってらっしゃいました？」

アルフィンは、小悪魔な表情を浮かべながら明彦に言う。

明彦「当たり前です。俺は実はカルバード側のノルド高原にいたのだからな。まあ帝
国側の監視塔なんかを見ていたからな」

アルフィン「帝国側の監視塔を見張ってたんですの？」

明彦「まあな。その時にお前さんがこちらにやって来るのが見えたからな」

アルフィン「……わたくし、密入国したってことに……」

明彦「安心しろ、ちゃんとカルバード共和国に正式入国したことにしてあるからな。

まあ、前に話した後にお前さんが、いつ来ても良いように俺が根回ししたんだが」

アルフィン「明彦さん、ありがとうございます！」

明彦「まあ、お前さんが密入国までしてやって来たのは、例の斑目の件か？」

アルフィン「ええ、その件ですわ」

明彦「つたく…仕方がないな。ここではなんだが、クレイユ村まで行くぞ。その宿で話すでしょう」

アルフィン「わかりましたわ」

アルフィンと明彦は、クレイユ村で続きを話すことにした。

そんな2人を遠目で見ている人物がいた。先程の観光導力バスに乗っていた人物である。

???「へえー彼は…カルバードのCIDの人間で、彼女は帝国の皇女様なのか…」

口元はニヤニヤとしているが、目が全く笑っておらず冷徹な瞳をしているその人物は、アルフィンと明彦が彼の導力車に向かって乗り込むのを見ている。

???「まあ、今は別にどうでもいいし。いずれは刃を交える時がくるから、それまでの楽しみにしようか」

???は、
そう言う首都イデービスへ向かう臨時導力バスに乗り込んだのだった。

4-4-5・21 (11:05～)ークレイユ村。

アルフィン side

11:20・5・21・昼前・11:05・クレイユ村の宿酒場《リモージュ》

クレイユ村の唯一の宿酒場であるリモージュ。観光客から猟兵団まで泊まりにくる場所である。猟兵団がいるから治安が悪いように見えるが、クレイユ村は猟兵団のルールで非戦闘地域になつてゐるようだ。クレイユ村は、アルフィンが考えていたように地球のオランダのような村である事がわかる。

アルフィンと明彦は、クレイユ村の駐車場に導力車を停めてから、リモージュを訪れ、空いている席に2人は座る。

明彦「こつち方面に来たら、クレイユ村は外せないからな」

アルフィン「外せない？」

明彦「クレイユ村はな、日本人街でしか食べれない日本料理を出してくれるんだ」

アルフィン「へえー日本料理が食べれるんですね」

明彦「そうだ。上手いから食ってみるよ」

アルフィン「わかりましたわ」

アルフィン は、メニュー表を明彦から受け取る。そこには日本の料理や他の合わさったメニューが記載されている。

アルフィン 「わたくしは、ソバにしますわ」

明彦 「ソバか。俺もソバにするか」

アルフィン と明彦は、ソバを注文する。しばらくするとソバが運ばれてきて、2人も食べ始める。

アルフィン 「お、美味しいですわ！」

明彦 「そうだろ、日本以外でソバが食べれるとは思わなかっただろ？」

アルフィン 「ええ、思わなかったですわ。帝国でも食べれる場所を作ってほしいですわね」

明彦 「まあ、帝国の事情はわからないが、食べれるようになればいいな」

アルフィン 「ええ、そうなってくれば良いのですが」

ソバを食べ終わると、アルフィン と明彦は先ほどの話の続きを始める。

明彦 「それで、お前さんが来た理由は、斑目の件だったな？」

アルフィン 「ええ、そうですね。斑目の件、日本と共和国で繋がっているような感じがしますわ」

明彦 「繋がっているか……。まあお前さんの考えは外れではないな。斑目の件で日本に

もC I Dの諜報部員を派遣しているのは事実だが……」

アルフィン「そうでしたの。やはりC I Dもその線で？」

明彦「まあな。今、斑目の弟子のカルバード人が、カルバードの裁判所に訴えを起こしてる。それでカルバード警察関係が調べに入っている」

アルフィン「なるほど」

前にも説明したが、彼は日本の裁判所で訴えを起こしたのだが、裁判所は訴えを受理をしなかった。それどころか斑目が名誉毀損で逆に訴えを起こすと脅してきた。危険だと思った彼は日本からカルバードへ帰国。カルバードの美術界に斑目の盗作の件を訴えいた。カルバードの美術界は、彼の言った事をすぐに信用したわけではない。とある筋から斑目の盗作の疑いがあると情報を流れた。それからカルバード美術界や経済界も調査に入っている。その流れでC I Dも調査に入りだしたというわけである。

明彦「日本の財界や美術界は、斑目から裏金もらっているヤツが多い。だから斑目を告発されるのは困るのだろうな」

アルフィン「…最低のクズばかりですね。理さんや明彦さんが命を掛けて戦ったのに……」

明彦「まあ、俺達の戦いはほとんどヤツが知らないわけだからな」

アルフィン「それでもです」

明彦「まあ、そう言ってくれるのは、嬉しいが……」

明彦の言葉が、一瞬止まる。視線はアルフィンの後ろ側にいる観光客の3人組を見ている。そしてその3人組は宿酒場から出ていく。

アルフィン「どうかしましたの？」

明彦「いや……アルフィン、後ろの……今出ていった3人組、お前さんはどう思う？」

明彦は小声でアルフィンに話してくる。

アルフィン「後ろの出ていかれた3人組ですか……」

アルフィンは、後ろの出ていった3人組の事を調べる。大賢者にスキャンするように命じる。

大賢者「解、ただの観光客ってわけでは無さそうですね。鞆の中に武器の様なものを隠し持っているようです」

アルフィン「やっぱり……そう来ますか」

明彦「どう思う？」

アルフィン「ただの観光客では無さそうですね」

明彦「やはり、お前さんもそう思うか。実はな、斑目の件の他にテロリスト達の予告もあって、このクレイユ村に来たのだ」

アルフィン「テロリストによる予告ですか」

数日前、警察やC I Dにテロリストによる犯行声明が出た。犯行声明を出した組織名は、反大統領を唱える政治結社「月影」であったため、密かにC I Dは動き出していたのだ。

アルフィン「その政治結社も反移民を掲げているんですの？」

明彦「そうだな。過激の事を平気でやる連中だ。ただ他の政治結社と比べて、頻繁にやるわけではない。何か前後にある時なんだ」

アルフィン「何か前後にある時……。今回って何かあります？」

明彦「特別には何も無いが……。いやイーデイスでは、革命の決起した月であるため、お祝いみたいなのはやってるが……クレイユ村付近では関係がないはず……」

アルフィン「カルバード革命、王政を倒した革命でしたわね。カルバードの方々にとってはとても大事な月でもあるんでしょうね」

明彦「かもな。世間話はこちらまでにして、あの3人を追ってみるぞ」

アルフィン「わかりましたわ」

アルフィンと明彦は、ソバ代のミラを払ってから酒宿場《リモージュ》から出たのだった。

アルフィン s i d e

111204・5・21・昼前・11:35・酒宿場《リモージュ》↓クレイユ村内。
酒宿場《リモージュ》から出たアルフィンと明彦。すぐさまに3人の旅行者の追跡を
開始する。

3人組は、クレイユ村の入り口付近までやって来て何か話している。気づかれないよ
うにアルフィンと明彦は、観光客として化けて様子を見る。1人は好青年に見えるヤー
マン。

ヤーマン「クレイユ村で待ち合わせで良いのか？」

タロス「ああ、ここで間違いない」

2人目は、真面目そうな青年のタロス。

カインズ「……だーな」

3人目は、チャラチャラしている男であるカインズ。そんな3人組で構成されてい
る。

ヤーマン「カインズ、なんだその返事は？」

タロス「どうした、カインズ？」

カインズ「別にどうもないけど……」

うわのそらのカインズの視線を2人は追う。すると1人の女の子に行きつく。それ
はアルフィンである。

カインズ「か、彼女良いなあ……」

ヤーマン「お前な、俺達はナンパしに来たんじゃないんだぞ！」

タロス「そうだぜ。ナンパなら暇なプライベートでやってくれ」

カインズ「2人共、そんなに詰め込んだじゃ、潰れるよ。俺みたいに遊びも入れなきやね」

ヤーマン「全くお前と言うやつは……」

カインズ「彼女、旅行者かな。ちよつと声を掛けたい気がしてきた……」

ヤーマン「バカ、任務中に旅行者等に接触してどうする？ 計画の失敗とか考えないのか？」

カインズ「別に成功するって」

カインズの視線は、アルフィンあるため、ほとんどヤーマンとタロスの言葉は聞こえてない。

ヤーマン「もうすぐ、俺達に依頼が入るはずだ。とにかく結社のために失敗は許されない。それだけは覚えておけ」

タロス「はい」

カインズ「はいはい」

カインズは返事をするアルフィンの方を見てニヤニヤしていた。するとノルド方

面からの冷たい風がクレイユ村を吹き抜けていく。カインズは、風でアルフィンのスカーツが巻き上げられることを期待したが、そんなこともなく、ガツカリしていたのだった。

一方3人の様子を見ていたアルフィンと明彦は、距離を取りながら話していた。

アルフィン「3人のうちの1人がわたくしたちを見てますわ。気づかれたのでしょうか？」

明彦「いや、気づいてはいないだろう。まあそれでも警戒はした方がいいだろう」

アルフィン「ええ」

明彦「うん、あの3人、別の1人と話始めた。その1人は、クレイユ村の外から……イーデイス方面からやってきた」

アルフィン「その最後の1人って、依頼者でしょうか？」

明彦「わからん。ここからでは聞こえないからな」

アルフィン「明彦さん、ちよつと待って下さいね」

アルフィンは、耳を研ぎ澄ませ3人＋1の会話を聞くことにする。

ヤーマン「……22、火に包まれる……クレイユ村……西にある共和国軍基地……」

タロス「わかりました」

カインズ「へいへい……」

???「検討を祈る」

そう言つて???はクレイユ村の外へ出てイーデイス方面に帰つていく。

アルフィン「明彦さん、全てはわかりませんでした。22、火に包まれる……クレイユ村……西にある共和国軍基地……つて……」

明彦「うーん、22、火に包まれるクレイユ村……？西にある共和国軍基地……」

22、火に包まれるクレイユ村、西にある共和国軍基地とは何を指しているのか、アルフィンと明彦にはわからなかった。

大賢者「告、マスター、ちよつと宜しいですか？」

アルフィン「大賢者、どうかしました？」

大賢者「解、先程の言葉、22日共和国軍基地の部隊によりクレイユ村が火に包まれる、なのでは？」

アルフィン「大賢者！ナイスですわ！」

大賢者「解、ただ真田様にどう伝えるかでしょうが」

アルフィン「そうですね……」

アルフィンと大賢者とそんな話をしていて悩んでいると明彦が

明彦「あの3人が近づいて来るぞ」

アルフィン「ええ、わかってますわ」

ヤーマン、タロス、カインズは、アルフィンと明彦の前を通り過ぎていく。その中のカインズがアルフィンと明彦に一礼をやつていく。アルフィンと明彦も頭を下げる。そのまま、彼らはノルド高原の観光客の中に混ざつてノルド方面の方に行つてしまう。

アルフィン「明彦さん、どうしますか？」

明彦「…深追いするのは、危険だが……ここは情報も欲しい。行くしかないか」
アルフィン「そうですね」

明彦「ちよつと待ってくれ。仲間にも連絡をしておく」

アルフィン「ええ、わたくしは、あの3人を遠くから見張っていますね」

アルフィンは、第3の眼で3人を見張ることに。今のところは、おかしなことはしていない。別状なんな観光客と変わらない行動しかしていないのだから。

そのまま、時間だけが過ぎ去っていくことに。

111204・5・21・18:30・クレイユ村

すでに日が暮れ始め、太陽も西のノルド方面の方にある。アルフィンと明彦は、ずっと3人組の動向を伺っていたのだ。彼らは、ノルド高原の遺跡郡、共和国軍の基地の見学などのツアーを楽しんでいるように見えた。

アルフィン「あの3人組、ツアーを楽しんでるようにしかみえませんね」

明彦「確かにな。CIDの方にも連絡は入れたが、イーディス方面も別状何にもない
そうだ」

アルフィン「やはり、クレイユ村が標的なんでしょうか？」

明彦「お前さんが予測した22日、共和国軍基地から部隊が出てクレイユ村を火に包まれるというヤツだが、外れではないかもしれん」

アルフィン「やはり……」

明彦「ああ、先ほどのツアーの時に、共和国軍基地の連中にこつそり話を聞いた。そしたら共和国軍基地の内部の導力戦車や武装ヘリなどが数両数台無くなってると言うんだ。共和国軍も共和国政府もそのことは伏せている。見つけ次第、破壊か拿捕するように言われているが、お前さんはどう思う？」

アルフィン「そうですね」

大賢者「告、マスターはどう思われてるのですか？」

アルフィン「わたくしはまあ、そうですね：まず共和国軍基地の中に内通者がいる可能性を考えます。いるかないかでは、全然目的達成も違いますし」

大賢者「解、なるほど。確かにそうですね。外部からの侵入者だけだと、応戦され失敗する可能性が高い。ですが内部に内通者がいる場合は、手招きで作戦効率もあが

りますね」

アルフィン「そんなことを明彦に説明をする。明彦も同じような事を考えていた。

明彦「内通者の可能性も考えていた。だがまだ証拠も無いから、踏み込むわけにもいかないからな」

アルフィン「今日のところは、クレイユ村で様子を見るしかありませんよね？」

明彦「確かにそれしかないな、それよりお前さんは良いのか？帰らなくて？」

アルフィン「別に構いませんわ、わたくしの分身がちゃんとわたくしを努めてくれますから」

明彦「なるほどな、俺達を助けに来た時みたいにか…」

アルフィン「そうですわ」

そんな感じでこの日は、アルフィンと明彦はクレイユ村に一泊する感じになってしまったのだった。

5-5-5・21 (22:30~) -騒動。

アルフィン side

11204・5・21・夜・22:30・クレイユ村・宿酒場 《リモージュ》の沸かし温泉にて。温泉に浸かりながらアルフィンは月を眺めていた。

アルフィン「いい温泉ですね。月も眺められて最高ですわ」

大賢者「解、月夜にお酒を見ながら一服がたまらないとか?」

アルフィン「ふふつ、それってわたくしの：光井和也だったあの世界の風習みたいなものよね。お酒をのみながら月夜を見たいですが、何せまだ年齢が達してないので飲めませんね」

大賢者「解、帝国もあの日本と同じく20歳からでしたね」

アルフィン「そうですね、あと少なくとも4年は待つてないといけませんわ」

大賢者「解、気長に待つて感じてですかね」

アルフィン「そうですね、それしかないわね」

酒場の方では、ガヤガヤと騒いでいる観光客のいるようだ。その声が温泉の方まで聞こえてくる。

アルフィン「酒場の方は盛り上がってますわね。わたくしは、温泉を味わってますが……」

大賢者「解、マスター、どうかしましたか？」

アルフィン「……ううん、一瞬誰かに見られた感じがただけ……」

アルフィンは周りをキョロキョロと見渡す。しかしどこにも人影などは見えない。

大賢者「告、一応スキャンをかけてみますか？」

アルフィン「お願い、大賢者、やって頂戴」

大賢者「了」

大賢者は、辺り一面にスキャンをかけてみる。だが人影は写らず。

大賢者「解、何もヒットしませんでした。マスターの勘違いとかではないでしょうか？」

アルフィン「わたくしの勘違い……何もスキャンできなかったわけですし、勘違いだったのでしょうか……」

アルフィンはそう思うことで、ゆっくりと温泉を楽しむことにする。

一方そんなアルフィンを覗いているヤツがいた。昼間もアルフィンのことをイヤらしく見ていたカインズである。彼がいるのは、宿酒場《リモージュ》の宿の部屋である。

仲間に2人は、酒場の方で盛り上がっている。カインズは覗きながら興奮していくことがわかる。

カインズ「ほう：胸は中々。綺麗な乳首で理想な胸の出かさだな。下の方も綺麗なモノだな：ちよつと味見でもしてやるか」

カインズは、見えない何かでアルフィンの乳首に触れる。彼女はビクツとなり喘ぎ声をあげてしまう。

アルフィン「あ、アン：何？何かわたくしの乳首に触れました？」

大賢者「告、何者かの能力を感じ取る事ができましたが、マスターにイヤらしい視線と欲望を向けています！」

アルフィン「：…一体誰が：…!?!」

アルフィンは、乳房の周りを舐めまわすような感じで触らわれているのがわかる。それだけではない、下半身の方にもそういう感触があるのだ。それも彼女の大切な場所を。

アルフィン「アン、あつ、そんなとこ舐めたらダメですわ：!!」

快樂に向かわんとするアルフィンを大賢者はある行動に出る。

大賢者「、告、マスターが正常な判断ができないため、私がなんとかして見せます」

大賢者は、とある魔法を発動させる。アルフィンに掛かっている魔法の解除をさせる

ために。

大賢者「告、やはりクレイユ村の中にいる誰がつてことでしたね。魔法を二度と使えないようにしてあげましょう！」

大賢者がそう言った後、クレイユ村の宿酒場《リモージュ》の宿の一部屋が中で爆発したのだった。頬を赤めたアルフィンが

アルフィン「……はあ、はあー、大賢者、やれたの？」

大賢者「解、ええ、魔法の発動者に対して制裁を加えました。おそらく部屋で小爆発して気絶してるかもしれませんね」

アルフィン「あ、ありがとう、大賢者」

大賢者「解、マスターのためですから。それにしてもイヤらしい声で喘いでいましたね？感じてたんですか？」

アルフィン「……!!!か、感じてなんかいませんわ！」

アルフィンは、そう言ってそっぽを向く。だが大賢者の言ったことは間違えではない。アルフィン自身も気持ち良くなっていたのは事実である。

そんなとき、クレイユ村の広場方面から何か爆発音が聞こえてきた。

アルフィン「な、何か爆発しませんでした？」

大賢者「告、クレイユ村の広場あたりで何か爆発した模様、クレイユ村の駐屯所か

ら警官と遊撃士も向かつてる模様」

アルフィン「わ、わたくし達もいきますわよ！」

大賢者「了」

アルフィンは、急いで温泉から上がって、クレイユ村の広場まで急いで行くことにした。

アルフィンスide

11204・5・21・夜・23:00・クレイユ村の広場。

アルフィンは、温泉から戻って宿酒場《リモージュ》を出ると、広場辺りが燃えている。クレイユ村の住人は各自自分の家にいたため、被害や怪我人はいないが、観光客の中には怪我人が出ていた。すでに陣頭指揮をとっている明彦と話す。

アルフィン「明彦さん、一体何があつたんですか？」

明彦「アルフィンか、いやこちらもわからない。突然クレイユ村の広場から爆発がしたと報告受けて来てみたが、この有様だ……」

クレイユ村の広場の真ん中に大きな穴が空いていた。おそらく対戦車ロケット砲が撃ち込まれた感じである。

アルフィン「誰がこんなことを……」

明彦「例の3人組の連中は、まだ宿なのか？」

アルフィン「わかりませんわ……」

明彦「とにかく、今はこの状況の打開だ」

アルフィン「わかりましたわ。わたくしは、もう一度宿の部屋を1部屋ずつ探してきますわ」

明彦「頼む！」

アルフィンは、すぐに宿酒場《リモージュ》の中に戻る。そこには、避難してきた人達で溢れていた。彼女は、第3の眼を使って部屋の方を見ると、彼らが泊まっていた部屋には、泊まった形跡が無かったのだ。

アルフィン「どういうこと？あの3人は、確かにこの宿に泊まっていたはず……。なのにどうして……」

アルフィンがその事で悩んでいると、大賢者があることに気づく。

大賢者「告、マスター、宿になにかしらの魔法がかけられている感じがします」

アルフィン「何かしらの魔法……。彼らを認識出来ないようになるような魔法……」

大賢者「…解、例えば光井家の光の屈折魔法がありますが、生命エネルギーまで消すことはできませんね」

アルフィン「そうね。命の炎を消すなんてできないわ。だとしたら、それすらも消せ

る魔法があるってことかしら？」

アルフィンと大賢者は、古代遺物（アーティファクト）の可能性、もしくは自分達のような転生者みたいなものの可能性、あるいは13工房あたりから流れた技術を使いこなしている可能性、色んな可能性を考えていたが

アルフィン「今は考えることよりも、行動ですわ」

大賢者「了」

アルフィンはすぐに部屋の隅々を調べていたら、1枚の写真が置かれていた。

アルフィン「これは、わたくしの導力写真…どうしてこんなところに？」

大賢者「解、この導力写真は、隠し撮りのようですね。それもクレイユ村で撮られたものようですが…」

ただその導力写真は、どこかがおかしい。誰が見てもおかしいのは気づくだろう。

何故ならアルフィンの身体の一部に舐め回したような跡が残っている。彼女はすぐに思い出す。温泉に入っていた時におぞましいあの出来事が頭を過る。そして鳥肌がたってくる。

大賢者「解、あの時のアレですか」

アルフィン「そうあの時ね……。これっておそらく性魔術ね…」

大賢者「解、性魔術…かのアレイスター・クロウリーが使用していたとされる魔術…」

アルフィンには他に何かないか調べる。するとベッドの隣で1人の男が倒れている、それも真っ裸で。

大賢者「告、これはもしかすると先ほどの魔術が命中したわけですね」

アルフィン「……！わたくしを凌辱しようとした輩ですわね……」

アルフィンの身体の周りにワナワナと見えざる空気が見える。彼女がかなり怒っている。

アルフィン「さて、この輩はどのようなにしてあげましょうか……」

大賢者「解、マスター、かなり怒っていますね」

アルファン「ええ……わたくしの大事な……」

アルファンは、真っ裸で気絶している男の身体を踏みつける。

大賢者「解、マスター……大胆な」

アルファン「わたくしの！わたくしの大事な場所を好き勝手に!!」

大賢者「解、まあ確かにこの男がしたことについては、許せませんが、今は残りの2人を確保することが先決なのでは？」

アルファン「……確かに……。残りの2人はどこに行ったのかしら？」

大賢者「告、再びスキャン開始です」

大賢者は、再び周りにスキャンをかけ始めた。するとヒットしたみたいで

大賢者「解、マスター、2人の行方を確認できました！」

アルファン「大賢者！それはどこなのか？」

大賢者「解、クレイユ村の西側、ノルド高原に通じる道を帝国方面に逃走中……」

アルファン「それは、まずいわね。万が一帝国に逃げ込んだりすれば、かなりの問題になってしまおうわ！」

大賢者「解、そうならないためにも、帝国に抜ける前でケリをつけるしかありませんね」
アルファン「なら……銭は急げですわ」

アルファンは、帝国に抜ける手前まで、座標移動（ムーブポイント）で戻って、2人組を待ちぼうけで待つことに。

アルファン side

111204・5・21・23:25・ノルド高原に続く街道。

夜のノルド高原に続く街道にて、アルファンは1人待っている。残りの2人がこちらに来るのを待っている状態である。宿酒場の宿の部屋で気絶していた男は、明彦に引き渡すことになっている。

もちろん、この場所に来て明彦に伝えたのだが。

大賢者「告、もうすぐ、あの2人がやって来ます」

アルフィン「わかつてるわ。帝国側に逃げよつて考えは通用しないことを教えてあげないといけませんわ」

アルフィンと大賢者が、そう言った直後走りながらやってくる2人組がいた。

アルフィン「ここから先には行かしませんわ!」

ヤーマン「お、お前はクレイユ村にいた観光客か!」

タロス「お前、観光客に化けたCIDの刺客か?」

アルフィン「わたくしは別に刺客でも無いですが、あのクレイユ村に騒ぎを起こす事を良しとしない者ですけど」

ヤーマン「だったら何だつて言うんだ?」

タロス「遊撃士か?」

アルフィン「それも違いますが、まあ同じような理念は持ってますけどね」

アルフィンはそう言うと、構える。

ヤーマン「俺達とやると言うのか?」

タロス「やつちまってもいいつてことだよな」

ヤーマンとタロスは、己の得物を取り出す。ヤーマンは、普通の剣でタロスは導力銃である。

タロス「お前には、ここで死んでもらうがな！」

タロスは、導力銃をアルフィンに向けて射撃してくる。だが彼女もすぐに真横に避けて射撃から逃れる。

ヤーマン「導力銃を避けても俺の剣もあるぞ！」

ヤーマンは、アルフィンに対して剣を振り下ろす。しかし

アルフィン「脇が甘いすわよ！」

アルフィンは、ヤーマンの脇を蹴り飛ばす。

ヤーマン「がはっ!!」

吹き飛ばされたヤーマンは、街道の壁に叩き付けられる。タロスはすぐさまに導力銃でアルフィンを撃ってくる。

タロス「これでも喰らいな！」

アルフィン「ふう…甘いすわよ…」

アルフィンは気合いで導力銃の弾丸を吹き飛ばす。

タロス「何だど！なら導力魔法で！」

アルフィン「甘いすわよ。導力魔法を使うのでしたら、先程の殿方が気絶する前に使った方が良かったのではないのでしょうか？」

タロス「うるさい！小娘が！」

アルフィン「……はあ、小娘ですか…重力波！（グラビティプレス）」

タロスは、導力魔法を発動する前に、アルフィンの重力波（グラビティプレス）により、地面にめり込んでしまう。重力波の影響で周りの岩壁や岩などがバキバキ、メキメキと崩れてしまったのだった。

大賢者「告、気絶していたヤーマンが、剣撃を仕掛けてきます！」

アルフィン「わかってますわ！」

ヤーマン「斬撃…魔神剣!!」

ヤーマンの放った衝撃波は、アルフィンの真横を通り過ぎる。通り過ぎて街道の岩壁に衝突し、岩壁に穴を開ける。

ヤーマン「先程の魔神剣を避けるとはな」

アルフィン「おとなしく気絶してた方が良かったんじゃないでしょうか」

ヤーマン「……そうも言ってもらえないんだよ。俺達もお仕事でやつてるわけだからね」

アルフィン「お仕事ですか…。クレイユ村を火に包むのがお仕事なんですか？」

ヤーマン「…知っていたか。そうだな…クレイユ村を戦火で焼けという依頼が来たのは事実だ」

アルフィン「そのような依頼を…。一体誰が…」

一定の距離でヤーマンとアルフィン是对峙している。

ヤーマン「そんなことを話す必要があるのか？」

アルフィン「まあ：そうですね。話される方がおかしいですよね。」

アルフィンは、ヤーマンに対して距離を摘める。そして右足を突き出す。

ヤーマン「泰斗流の戦い方：なるほど」

ヤーマンは左足を突き出してアルフィンの右足を弾く。

アルフィン「貴方も、どこかの格闘術を？」

ヤーマン「俺のは我流でな、偉そうに名乗れるものではないのだよ！」

ヤーマンは、左足からの右足の叩き落としをアルフィンに仕掛けてくる。それをアルフィンを真後ろに避けて回避する。

アルフィン「確かに我流みたいですね」

ヤーマン「そうだ。格闘術と剣術をも合わせもつ流派にしたつもりだからよ！」

アルフィン「なるほどそう言うことでしたの。ならばわたくしも泰斗流と八葉を合わせもつ秘技でご相手させてもらいますわ！」

ヤーマン「泰斗流と八葉一刀流をか？是非とも見せてもらいたいものだな！」

ヤーマンがそう言った直後に身体の一部に異変を感じる。異変を感じた場所を見ると、そこから血液がドボトボと出ているのだ。

ヤーマン「……！いつの間に！いったい何をしやがった！」

アルフィン「幻影瞬殺斬り……貴方はわたくしの的中の中ですわ」

ヤーマン「な、何だと！」

アルフィン「残念ですけど、貴方はわたくしの影響化に置かれていきますわ。そして遅れてやってくるのは、一撃の衝撃波が貴方の身体を駆け抜けていきますわね」

ヤーマンは、遅れてやってきた衝撃波により吹き飛ばされ、街道の地面と壁面に叩き付けられ、それでも立ち上がろうとする。

ヤーマン「ま、まだだ、まだやられるわけには、いかないんだ！」

アルフィン「……はあくそまでの根性は褒めて差し上げたいですけど、クレイユ村を焼こうとする人達には容赦はしませんわ」

アルフィンの右目が緋く光る。するとヤーマンの身体が発火したように燃え広がり、アルフィンは右手を空へ伸ばす。

アルフィン「……フレイムスター」

空の星から光の光線が燃えているヤーマンを包む。そしてその光線はヤーマンごと爆発する。

アルフィン「威力は抑えましたので、死なないですよ。まあ戦場にはずっと出られないでしょうけど」

クレーターの中心にヤーマンが気絶していてピクリともしない。

アルフィン、ヤーマンを倒しホツと胸を撫で下ろした。そんな時共和国軍基地の方からサイレンが鳴り響く。

アルフィン「ヤーマンを倒したのに次はなんですの？」

大賢者「解、共和国軍の基地の警報のサイレンが鳴ってますね」

アルフィン「共和国軍基地で何かあったのかしら？」

大賢者「解、共和国軍基地で何かあったと見るべきでしょう」

アルフィン「とにかく行ってみるしかないわね」

大賢者「解、警戒しながら行く事を進めますね」

アルフィン「わかりましたわ」

アルフィンは、共和国軍基地の方へ急いで向かう。向かう前に、ヤーマンとタロスとを嚴重に縛って明彦に連絡をしてから共和国軍基地へ向かう。

6-6-5・21 (23:45) クレイユ村攻防戦。

アルフイン side

11204・5・21・夜・23:45・共和国軍基地に続く街道。

共和国軍基地の内部の方からサイレンが鳴り響いている。そしてその中から猟兵達が出てきている。猟兵団のリーダーらしき人物は、誰かに連絡をしている。

猟兵団リーダー「依頼の通りに共和国軍基地を制圧したぜ」

???「ご苦労、それで例の3人組は来たのかね？」

猟兵団リーダー「いえ、約束の時間になっても来ませんが？」

???「そうか、クレイユ村にCIDが出向いていたようだからな。もしかすると捕まったのかもしれない」

猟兵団リーダー「良いのか？捕まったままで？」

???「構わんさ、どうせ知っていることはほとんど無いからな」

猟兵団リーダー「そうなのか」

???「奴等が捕まったと想定して、計画を早めなければならぬ。幸いにも奴等がクレイユ村に火を放ってくれたようだしな」

猟兵団リーダー「…火を付けたと……」

???「クレイユ村は、猟兵団同士の非干渉地帯、非戦闘地帯にしてるのはわかっている」
 猟兵団リーダー「わかっている。大きな事を成し遂げるためには、小さい犠牲は払うものだ……」

???「そうだな。我々も我々の理想のためにやっているのだからな」

猟兵団リーダー「わかった」

猟兵団リーダーは、スマホの通話を切ると猟兵の団員達に話し出す。

猟兵団リーダー「次の作戦は、クレイユ村になる」

それを聞いた団員達は戸惑いを見せる。当たり前だろうクレイユ村は、猟兵団同士の不干渉地帯、非戦闘空域になっており、それは暗黙のルールである。リーダーはそれを破ろうとするのかと戸惑いなんかが見える。

猟兵団リーダー「今回の作戦、抜けることを許可しよう。場所が場所だけに、クレイユ村に思い入れがある団員は抜けてくれないも構わない」

リーダーからそう言われて団員達は、ざわざわが無くなり、リーダーのために作戦遂行のために決意するのであった。

猟兵団リーダー「ありがとう、みんな。さて…共和国軍基地の兵器郡でクレイユ村を襲撃を開始する」

獵兵団員達「ヤー!!!」

獵兵団員達は、声をあげて共和国軍基地にある兵器郡、軍用挺20、導力戦車40両、装甲車30両、補給車、3台を次々と動かして、クレイユ村を目指す。

こうしてクレイユ村の一番長い1日が始まるのである。

アルフィン side

11204・5・22・夜・0:10・共和国軍基地の近く。

アルフィン「ええ、共和国軍の基地の兵器郡がクレイユ村に向けて進軍中ですか……。今日の前の街道をまさに進軍中ですわ。それも共和国軍兵士ではなく、獵兵団のようにも見えますわ」

明彦「なるほどな。おそらく内密に内通者が手引きして共和国軍基地を制圧したのだろう。もしくは共和国軍基地の兵士達そのものが、内通者なのかわからないがな」

アルフィン「このまま進軍させたらクレイユ村が大変なことになりますわ!!」

明彦「大統領に許可申請している。共和国軍を動かすようにしてな」

アルフィン「許可が申請される前に、クレイユ村が……」

明彦「わかつている。だから俺やお前さんがいるだろう?こつちは、クレイユ村の人々の避難誘導は完了している」

アルフィン「避難誘導は完了されたんですね」

明彦「ああ、クレイユ村に関してだか。……ふつ、共和国軍基地から出撃してきた武装ヘリがクレイユ村にやってきている……。これから迎撃を開始する。お前さんも……」

明彦との通信が遮断される。

大賢者「告、おそらくは妨害導力波が出てる模様。真田様はクレイユ村にて、武装ヘリ部隊と戦っているようです」

アルフィン「大賢者、こちら共和国軍の基地の陸上部隊が目の前に来てますわ」

アルフィン「そうみたいですわね」

夜中にふさわしくない爆音をならしながら進軍してくる共和国軍基地の陸上部隊。どうやら陸上部隊を指揮している人間は共和国軍の兵士ではないようだ。そのリーダーと思われる人間は、導力戦車のハッチを開けたまま身体を出している。その人物はアルフィンに対して

猟兵団リーダー「なんなんだ、お前は？」

アルフィン「わたくしは、貴殿方にクレイユ村を焼かせないようにする者ですわ」

猟兵団リーダー「なるほど、例の3人組を確保撃破したのは、お前のようなだな？」

アルフィン「ええ、そうですわね」

猟兵団リーダー「なるほど。どこの差し金かは知らないが、我々の目的を邪魔すると

「いうのなら、容赦はしない」

猟兵団のリーダーが手を上げる。

大賢者「告、マスター、陸上部隊からの攻撃が来ます！」

アルフィン「わかつてるわ！」

猟兵団のリーダー「戦車部隊、奴を撃て!!」

猟兵団のリーダーの掛け声で、アルフィンに向けて導力戦車の弾丸を発射する。それだけではない、歩兵部隊がアルフィンに向けて、マシンガンや対導力戦車砲やロケット砲などを撃ち込む。普通の女の子にやるような行為ではない。

猟兵団のリーダー「やったか？」

猟兵1「これだけの攻撃で、何も残らないでしょう！」

猟兵2「これで生きていたら化け物ですよ」

猟兵3「普通に死んでるだろうよ……」

砂煙が無くなり攻撃をしたところが露になる。だがアルフィンが無傷でその場にいらる。全然のダメージを与えたようにも見えない。猟兵団の中にも焦りの色もで始める。

アルフィン「わたくしのような普通の一般市民にそのような攻撃をなさるんですね」
アルフインは砂煙で汚れた服をパタパタとして払う。彼女は髪の毛にも目がいき

アルフイン「折角、温泉にも入ったのに、髪の毛にも砂煙がくっついていきますわね」

猟兵団のリーダー「何が一般市民だ。一般市民がこんな場所には来ないし、先程の攻撃で無傷でいるわけがない！再び攻撃開始!!」

再びアルフィンに対して戦車の砲撃、対導力戦車砲、マシンガン、ロケット砲を撃ち込んでくる。轟音が夜の空に鳴り響く。

猟兵3「今度こそ、やれたか？」

猟兵2「わからんさ、死体を確認しないと」

猟兵1「今度こそ、死んでくれよ！」

猟兵団のリーダー「今度こそ……」

砂煙が徐々に無くなっていき、アルフィンがいた場所は小さな穴が空いていた。アルフィンの姿はどこにもなかった。それを見た猟兵団の連中は騒ぎ出す。

猟兵団のリーダー「ふっ、やったな！」

猟兵1「跡形も無くなってしまいましたね！」

猟兵2「今度こそ、やったか！」

猟兵3「難敵でしたね、リーダー！」

猟兵団のリーダー「そうだな、何とか倒したな……」

アルフィンを倒したと騒ぎ出した猟兵団。だが

アルフィン「何をそんなに喜んでいらつしやいますか？わたくしは全然無傷で大丈夫

ですよ？」

アルフィン は小さな穴が空いた場所から、街道の両脇に立ち並ぶ樹木の幹の上に行った。ちょうど獵兵団の連中を見下ろす位置でもある。

獵兵3 「な、なんで生きているんだ！」

獵兵2 「マジで化け物なんでは？」

獵兵1 「あわわ…どうするんだよ！」

獵兵団のリーダー 「これでもくらえ！」

獵兵団のリーダー は、アルフィンに向けてロケット砲を放とうとするが

アルフィン 「そう何回も撃たせるとでも思いですか？」

アルフィンは、高速移動で獵兵団のリーダーのロケット砲を蹴り飛ばし、踵落としを脳天に食らわした。踵落としを食らった獵兵団のリーダーは、そのまま白目を向き倒れてしまう。それを見た獵兵団の連中は向かってくる獵兵もいたが、逃げ去れる連中もいた。

アルフィン 「あらら、簡単に逃がすわけじゃないでしょう」

アルフィンは、左手を逃走する獵兵達に向けて気合い砲を放つ。

逃走中の獵兵達は、気合い砲をまともにくらいその場に崩れ落ちる。

獵兵3 「くらいやがれ！」

獵兵3は、アルフィンに格闘戦を仕掛けてきた。

アルフィン「貴方はお逃げにならなくて？」

獵兵3「逃げないのか？ふざけた質問をしているのか？」

アルフィン「ふざけていませんわ！」

獵兵2「このアマ！ようやく捕まえたぜ！」

獵兵2は真後ろからアルフィンの身体を拘束する。

アルフィン「拘束されちゃいましたわ」

獵兵3「ナイスだ！これで攻撃が当たるぜ！」

獵兵2「さっさと当てる！」

獵兵3は、アルフィンを獵兵2が拘束しているため身動きが取れないと思っているため余裕をもって攻撃をしてくる。

アルフィン「わたくしの動きをそれで封じてるおつもりですか？」

獵兵2の拘束は解け、そのまま獵兵3の攻撃を獵兵2は食らい、声を上げる。

獵兵3「…ちい！こしやくな真似を！」

獵兵3は、短剣を抜きアルフィンへ向けてその短剣を振り下ろしてくる。

アルフィン「その短剣をそのまま振り下ろしてきてもわたくしには効きませんよ？」

獵兵3「ちよこまかと！」

獵兵3は、短剣を無茶苦茶に振り回すが、わざとやつてるわけではない。それに気づいた彼女も

アルフィン「貴方、無茶苦茶に短剣を振っているのかとも思いましたが、わたくしの行動を読むために……」

アルフィンの服のところどころが破れており、それは獵兵3の仕業でもあった。

獵兵3「そうだな、この短剣は魔術が掛けられてるらしいからな！」

獵兵3は短剣をアルフィンに斬りかかる。アルフィンはすぐさま避けるが、スカートの一部が斬られる。

アルフィン「スカートが……！貴方、わたくしの大好きなスカートを……」

獵兵3「悪かったな、だが……死ぬんだからそんなこと気にしても仕方がないだろう！」

獵兵3は、アルフィンにめがけて、短剣の魔術を発動させる。短剣から目映い光が立ちアルフィンに向かって発射される。

獵兵3「死ねよ、小娘！」

発射された目映い光は、アルフィンの左手によって弾かれる。

アルフィン「わたくしはあのような光では、死にませんわ！」

獵兵3「な、ならば、これならどうだ？」

獵兵3は、短剣をアルフィンに向けて走り出した。それも通常の速さではなく、日本

の魔法である加速魔法を使って。そしてアルフィンに対して高速斬りを浴びせる。

彼女の右腕に傷を入れることに成功する。彼女の右腕の傷から赤い血が滴り落ちて
いる。

アルフィン「加速魔法に加速による高速斬りですか……。わたくし少々甘く見えました
わ……。と言うか貴方ただの猟兵ではありませんね？」

猟兵3「確かにただの猟兵ではないが？お前こそ、ただの旅人ではあるまい？」

アルフィンと猟兵3は、ある程度距離を保ちながらお互いに様子を見ている。

猟兵3「まあ、この猟兵団（波の花）は終わりだろうが……。俺の本来は簡単には壊滅
するところじゃないんでね」

アルフィン「本来……。貴方の本当の所属元って……。まさか!？」

猟兵3の一部の服が破れ、赤い星座の猟兵団のマークが現れる。

大賢者「告、あれは西ゼムリア最強の猟兵団の1つである赤い星座です」

アルフィン「わかってますわ」

猟兵3「波の花から赤い星座に依頼があつて受託したものだが、こんなつまらんこと
だつたとはな」

アルフィン「クレイユ村の襲撃のことですか？」

猟兵3「当たり前だ。クレイユ村を襲撃するよりか、強者の村や強者達と戦えるなら

嬉しいがな」

アルフィンと猟兵3がそんなことをしゃべっていると、クレイユ村の方から閃光弾が上がって、花火のように見える。

猟兵3「ちっ、撤退命令か……。お前さん、悪いな」

アルフィン「クレイユ村での戦いも終わったんですか？」

猟兵3「ああ、無茶苦茶な波の花の作戦だったからな。向こうの波の花の団員が戦闘不能になったのだろう。俺達赤い星座がこれ以上付き合う必要もないのさ」

猟兵3が空に左手をかざした時、中型の飛行艇が突如現れ上から紐みたいなのが垂らされおり、猟兵3はそれを掴む。掴みながら

猟兵3「気絶している連中は、波の花の団員さ。調べるつもりなら調べるがいい」

アルフィン「どういうつもりなの？」

猟兵3「波の花の連中は、日本の暴力団とも繋がりを持っている。もちろんお前が知りたがっている情報を持っているはずだ」

アルフィン「何故そんな情報をわたくしに？」

猟兵3「別に大したことではねえ。波の花の連中は前から気に入らなかっただけだ。それとお前には俺の名前を教えてやろう、セシル・ガルボ・ダークス、赤い星座の所属だ。生きていれば、どこかで会うこともあるだろう」

アルフィン「セシル・ガルボ・ダークス、貴方の名前は覚えましたが」
セシルを抱えた中型挺は、そのままクレイユ村の北東方面に飛んで行った。

アルフィン side

11204・5・22・夜・01:00・共和国軍基地内

セシルが中型挺で逃げ去った直後、クレイユ村の方から明彦や共和国軍の将官がやってきた。それだけではなく遊撃士もやってきた。

アルフィンは、明彦にここでの出来事を説明し、クレイユ村を襲撃しようとした猟兵団【波の花】の猟兵達を拘束していた。もちろん逃走した猟兵達もCIDによって確保されたのだった。

クレイユ村を襲撃した猟兵団【波の花】・3人組のヤーマン、タロス、カインズは、共和国軍基地の中の留置場に入れられている。もちろん取り調べをする目的のため。持ち出された共和国軍の導力戦車、装甲車、軍用挺、武装ヘリ補給車などをクレイユ村の襲撃に使用するつもりだったようだ。

ヤーマンら3人組や猟兵団【波の花】のリーダーが依頼を受けた人物はわからずじまいである。

彼らを使ったとされる謎の人物は、イーデイス方面に向かったとされる。これ以上は

彼らから情報を得ることは難しいだろう。

アルフィンと明彦は、共和国軍基地の一室を借りてそこで仮眠をさせてもらうことに。

明彦「お前さん、こんな場所で本当に良いのか？」

アルフィン「別に構いませんわ」

明彦「そうか……まあ、これは良しとしてだ。クレイユ村の件、考えていたよりも闇が深そうだな」

アルフィン「帝国との軋轢、共和国内の反移民勢力などが……色々と駆け巡ってるようですね」

明彦「そうだな、どっちとも長年の問題であり課題である。

アルフィン「そうですね」

明彦「で、お前さんは、どうするんだ？帝国に戻るのか？」

アルフィン「戻りませんわ。ちゃんと替え玉は用意してきたのですから、心配はございませんわ」

明彦「替え玉って……俺達の戦いの時からそんなことをしてたのか？」

アルフィン「もちろんですわ」

明彦「ははっ、全くたいした皇女様だよ……」

アルフィン「褒め言葉として受け取ってますね」

そして今日の予定を明彦が喋り出す。

明彦「今日の朝方には、CIDの本部へ戻らないといけない。報告もかねてな」

アルフィン「そうですの、わかりましたわ」

明彦「それで、お前さんはどうするんだ？斑目の件を調べるのか？」

アルフィン「当初の目的はそうでしたし。クレイユ村の件も気になりますが…」

明彦「クレイユ村の件は、CIDが直接介入する。警察も介入するだろうが…。共和国軍基地の件は、共和国軍との合同になるだろうが」

アルフィン「まあ、そうなりますよね」

明彦「斑目の件は、イーデイスで調べた方が良さだろうな」

アルフィン「わかりましたわ。イーデイスで調べたいと思います」

こうして、アルフィンと明彦は、それぞれの目的のために動き回る事を決意した。

明彦「ところでアルフィン、お前さんこの部屋で寝るのか？」

アルフィン「そうですね。別にわたくしは明彦さんと同じ部屋で寝るのは嫌ではありませんわ」

明彦「嫌ではないって……。立場ってものが…！」

明彦がそう言ったが、アルフィンはずでに夢の中へ落ちていた。
だが明彦は、アルフィンの寝相で、あまり眠れなかったのは言うまでもない。

7-7-5・22 (07:20~) -イーディスへ。

アルフィン side

111204・5・22・朝・07:20・共和国軍基地の一室。

共和国軍基地の一室を借りて泊まったアルフィンと明彦。今日の深夜まで戦っていたわけだから、2人が爆睡していてもおかしくはない。だが明彦はすでに起きていている。

明彦「今日は朝一で本部に戻らないとな」

借りている一室の窓を開ける。するとノルド高原からひんやりとした風が吹き抜けていく。それだけではなく、鳥の囀り、降り注ぐ太陽の日射しが明彦を包んでいる。それから明彦はアルフィンを起こすため

明彦「そろそろ、起きないと置いて行くぞ?」

アルフィン「う……う……うん」

アルフィンは気持ち良さそうに寝息を立てている。すでに陽は出ているが、深夜深く戦っていたので、今も眠いのはわかるが、明彦にも事情があることには違いない。それにアルフィンの肌着がめくれて、緋いブラが見える状態であるし、下も緋いショーツが

見えている状態である。

明彦「ア、アルフィン、全くなんて格好を……！アルフィン、いい加減に起きろ！」
アルフィン「……………あ、明彦さん……もう朝ですの？」

アルフィンは、そのまま起き上がる。緋いブラとショーツをまる見せの状態で。

明彦「アルフィン、ちゃんと服を着ろ！俺は先に出てるからな」

明彦はそう言つて外に出ていく。アルフィンはきよんとしながら手で塞ぎながらあくびをする。

大賢者「告、真田様がさつさと出ていかれるのは、マスターの格好に原因があります」
アルフィン「わたくしの格好……」

アルフィンは、大賢者に言われて自分の格好を見る。緋いブラジャーと緋いショーツが丸見えになっていたのだ。

アルフィン「アハハ、わたくし……はしたない格好してましたね……」

大賢者「解、さつさと着替えてしまいましょう」

アルフィンは、大賢者に促されるままに着替えることにした。

111204・5・22・朝・07:45・共和国軍基地の外。

共和国軍基地では、共和国軍の関係者、警察関係者、共和国政府関係者と思われる人物の出入りが激しく続いている。猟兵団「波の花」の猟兵達と先の3人達は、今日の朝

から本格的に調査が始まる。明彦も調査に加わりたいが、本部に連絡をするのが最優先である。もちろん明彦の仲間達であるCIDも関係者も来ている。そんな彼は、帝国軍の監視塔の方を見ている。

明彦「波の花の連中や3人組の調査は、岳羽に任せるとして、俺は俺の仕事があるからな。その前にアルフィンをしてイーディスに届けないといけないが」

岳羽ゆかり。理や明彦の仲間であり高校を卒業後、カルバード共和国の大学に進学した。芸能関係のバイトをしている時にスカウトされ芸能界デビュー。大学卒業後も特撮系俳優として活動中。その裏では、CIDの外部諜報部員という肩書きも持っている。もちろんアルフィンとゆかりの交友である。ゆかりは、CIDの命で共和国軍基地の方へ向かってきてるようだ。

明彦がそんなことを考えていると、アルフィンがやってきたのだった。

アルフィン「明彦さん、おはようございますわ」

明彦「おはよう、アルフィン。俺はすぐにイーディスに戻るが、お前さんは、イーディスで調べるんだったな？」

アルフィン「ええ。イーディスにはちよつとつてがありました」

明彦「つてね…。それ以上はつつこまないようにするがあまり無茶苦茶なことだけはするなよ」

アルフィン「わかってますわ」

明彦「あまり時間もない。すぐに出発するぞ」

アルフィン「はい」

こうして、アルフィンと明彦は、カルバード共和国の首都であるイーデイスに向かうことになった。

アルフィン side

111204・5・22・08:50・カルバード共和国首都イーデイス・旧市街

共和国軍基地からクレイユ村を経由してカルバード共和国の首都イーデイスに到着。そしてそこから8区の旧市街へと、明彦の導力車で送ってもらったアルフィン。

第8区の旧市街。他のところと開発が遅れている区域でもある。それでもその住民達は、生き生きと生活をしている。

明彦「……なるほどな、お前さん……あの裏解決屋……スプリガンのところに行くんだな？」

アルフィン「ええ、裏解決屋（スプリガン）をご存知で？」

明彦「まあな。まさか、お前さんもあのスプリガンを知ってるとは思わなかったが」

アルフィン「まあ、以前に知り合いました…」

明彦「そうか、それじゃ、何かあったら連絡してくれ。すぐに駆けつける」

アルフィン「わかりましたわ」

明彦はそう言つて導力車を発進して行つてしまった。アルフィンは旧市街を見渡しながら、アークライド解決事務所が入る雑居ビルを探す。雑居ビルの1階はビストロ《モンマルト》が入つてると以前聞いていたので、それを探す。

アルフィン「ビストロ《モンマルト》の看板はあれでしょうかね？」

大賢者「解、ビストロ《モンマルト》の看板はあれでしょう。それに小さくアークライド解決事務所と書いてありますね」

アルフィン「実際には初めて訪れるわけですし、何か折菓子か何かを持っていくのが良いですわよね」

大賢者「解、ええ、ヴァン・アークライド氏は、甘いものに目がないという情報もありますし、その方がよろしいかと」

アルフィン「うーん、どうしましょうか。この辺りでは、お菓子屋さんは見当たらないですし…」

大賢者「解、近く…イーディス内では、駅前通りに徳川百貨店というデパートがあるようです。そのデパート下に徳川駄菓子屋というお菓子屋があるので、マスターも喜

べるお菓子があるようです」

アルフィン「なるほど。わたくしが楽しめるお菓子…和菓子つてことね。さつそくそこに行つてみましょう」

11204・5・22・朝・09:30・首都イーデイス（旧市街↓駅前通り）

アルフィンは、旧市街から導力列車にのり駅前通りへやってきた。

カルバード共和国首都イーデイスの中央駅。エレボニア帝国の帝都へイムダルと違つて、かなり都会感ある。クロスベル市よりと比べても大きいのである。日本の東京駅と比べるのが正解かもしれない。

アルフィン「日本の東京駅から降りた感じですわね」

大賢者「解、そうでしょうね。あの三葉葵のマークがある百貨店が徳川百貨店でございます」

アルフィン「三葉葵…わたくしの…あの世界の徳川家を思い出しますわね」

大賢者「マスターの生きた世界、265年間続いた徳川幕府。この世界でも徳川幕府は健在だった。ただ倒した相手が違うだけ」

アルフィン「そうですね。さてと徳川百貨店に参りましょうか」

アルフィンは、駅前通りから駅の目の前にある徳川百貨店へ入ることしたのだった。

アルフイン side

111204・5・22・09:25・徳川百貨店

徳川百貨店、日本からカルバードへ移民してきた徳川幕府の人間達の中の1人、徳川重春が創立。創立は80年共和制に移る前は、貴族向けの高級百貨店であったが、今の庶民的の百貨店に移行してから80年、高級百貨店時代を合わせると、約100年くらいである。

アルフインは、徳川百貨店の中に入る。百貨店の中は、カルバード風にされてはいるが、東ゼムリア、日本の徳川幕府時代の感じもあつてうまくマッチングしている。

アルフイン「ふふっ、帝国の百貨店よりも庶民的ですわね」

大賢者「解、それはそうですね。民主主義の先駆けの国ですから、庶民が中心なのは当たり前でしょう」

アルフイン「大賢者、それってわたくし達のエレボニアが遅れているってことよね?」
大賢者「解、そのように解釈されたのであれば、謝罪致しますよ」

アルフイン「大賢者、別に謝罪は要らないわ。帝国もオズボーン宰相のお掛けで、大分近代化しましたわ。だけど貴族派との対立は深まるばかりですけど」

大賢者「解、先日の事件といい、どの国にもいろんな事を抱えているわけですね」
アルフイン「そうね。だからこそわたくし達が頑張らなきゃいけないですけどね」

朝早くもありお客はそこまで多くは無いが、休日であるため、次第にお客は増えていくのは予想ができる。

アルフィン「とにかく、ヴァンさんに甘いもののお土産を手に解決事務所へ向かいましょうか」

アルフィンはそう言うと、徳川百貨店のデパ地下の徳川和菓子屋へ向かうことにした。

111204・5・22・朝・09:40・徳川和菓子屋。

デパ地下に来てみると、日本風のエリアに和菓子屋が構える作りになっている。和菓子の匂いも彼女の鼻腔を刺激する。

アルフィン「わたくしのいた日本とはちよつと違いますけど、それでも懐かしさを感じますわ」

和菓子の匂いにアルフィンは心を躍らせ、和菓子の店の前までやって来る。

ちゃんと和菓子が陳列されている。自身が好きな抹茶と合いそうな羊羹、饅頭等を眺めている。

アルフィン「わたくしの大好きなどら焼きやカステラもありますわね」

大賢者「解、マスターが大好きな和菓子でもよろしいのでは？」

アルフィン 「大賢者、それですわ！」

大賢者 「解、その方がよろしいかと思ひまして」

アルフィン 「さつそく、わたくしの大好きなどら焼きとカステラを購入しましょう」

アルフィンは、自分の大好きなどら焼きとカステラを購入、それとお茶を購入するのであった。

8 | 8 | 5 · 2 2 (1 0 : 4 5) | ヴァン・アークライ
ド。

アルファイン side

1 | 1 2 0 4 · 5 · 2 2 · 昼前 · 1 0 : 2 5 · 駅前通り ↓ 旧市街

和菓子を購入してきたアルファインは、再び旧市街に戻ってきた。さつききた時よりも人の数は増えている。彼女が目指すのは、アークライト解決事務所である。先ほど見つけておいた老舗モンマルトが入る雑居ビルの前まで来る。

雑居ビルの階段を登って、アークライト解決事務所であることを確認すると、「訳あり客以外お断り」と書かれている。

アルファイン「訳あり客以外はお断りですか」

大賢者「解、マスターは訳あり客に該当するとは思われますが」

アルファイン「まあ…お忍びで来てますしね…」

アルファインは、扉をノックする。

「ふあゝ客か…：せつかく人がいい気分で眠ってたのに…」

「は、扉の方へやって来て、扉を開ける。」

アルフィン「久しぶりですわね、ヴァンさん」

ヴァン「……うん、お、お前さんはあの、ア、アルフィンか!？」

アルフィン「あのアルフィンですわ、お久しぶりですわ、ヴァンさん」

ヴァン「まさか：お前さんが客として来たのか？」

アルフィン「ええ、わたくしはアークライト解決事務所に用があつて来ましたわ」

ヴァン「はあくとかく中に入れ。話はそれからだ」

アルフィン「わかりましたわ」

アルフィンは、ヴァンにアークライト解決事務所の中に案内される。そして中のテーブルがある椅子に足を組んで座る。ヴァンは、コーヒーを淹れてくる。

ヴァン「コーヒーで構わないか？」

アルフィン「ヴァンさん、お構い無く」

ヴァン「で、《帝国の皇女殿下であるお前》さんが共和国にいるんだ？」

アルフィン「わたくしが共和国にいる理由：まずは、これを見てくださいな」

アルフィンは、懐から導力写真で撮った斑目の写真や美術作品の盗作疑惑の資料とかをヴァンに見せる。

ヴァン「これって何だ？」

アルフィン「東ゼムリアの大国、日本の美術界の巨匠、斑目一流斎という人物ですわ」

ヴァン「斑目一流齋、美術界の巨匠ねえ…。で、そいつが他人の美術作品を盗作していると言うことか…」

アルフィン「そうですね、それだけではなく、自身の弟子にも虐待をしている疑惑もありますわ」

ヴァン「疑惑か…聞いている限りでは、最悪だな」

アルフィン「ええ。それで受けてくれるかしら？」

ヴァン「そうだな…」

アルフィンは、そつと徳川和菓子屋で買ってきた和菓子を取り出す。

ヴァン「これは？」

アルフィン「貴方への贈り物ですわ。甘いものが大好きだと以前聞いていましたので」

ヴァンは、袋の中身を確認する。そこには和菓子のどら焼きとカステラが入っている。

ヴァン「これは…共和国のお菓子ではないな」

アルフィン「このお菓子は、和菓子と言って、東ゼムリアの日本のお菓子ですの。この丸いのは、どら焼きで長方形なのがカステラですね。徳川百貨店の中の地下の徳川和菓子屋から購入してきました」

ヴァン「東ゼムリアの日本のお菓子か。食べたことはなかったな。で、この飲み物はお茶か？」

アルフィン「お茶はご存知なんですね」

ヴァン「昔、師父と共に東方に行った時に飲ませてもらったことがある。というか帝国生まれのお前さんが知ってるのが不思議なもんだが」

アルフィン「まあ、わたくしは、お忍びでどこでもですから」

ヴァン「それにしても徳川百貨店か……。あるのは知っていたが、中までは入ったことはなかったな」

アルフィン「東方と言えば、昔は中華圏をさしてましたが、今では日本になりつつあると思いますわ」

ヴァン「まあ、そうなりつつあるな。日本からの移民の連中が共和国の議員の中に結構増えてるしな」

アルフィン「帝国も日本からの移民は受け入れてますが、共和国のようにはまだ至ってはいませんわ」

ヴァン「移民を受け入れ始めたのは、共和国が先だからな。そこらへんはあるだろ」
アルフィン「それで、依頼は引き受けて、もらえるのですか？」

ヴァン「……いつもならこんな面倒な案件、お断りだが以前の借りがあからな。引

き受けてやるよ」

アルフィン「ヴァンさん、ありがとうございますわ」

ヴァン「斑目の盗作疑惑と虐待疑惑を調べるんだったな」

アルフィン「ええ」

アルフィンは、日本で得ている情報、帝国で得た情報をヴァンに教えるのであった。

アルフィンスide

11204・5・22・昼前・11:00・イーデイス内

アークライド解決事務所（旧市街18区）↓タイレル通信（タイレル地区14区）

アークライド解決事務所からヴァンが運転する導力車（スポーツカー）でイーデイス内の4区タイレル地区にやって来たアルフィンとヴァン。助手席に座るアルフィンが運転席のヴァンに話しかける。

アルフィン「ここがタイレル地区ですか。エンターテイメントの集まりでもありませんね」

ヴァン「エンターテイメントねえ、まあそんなところか。まあここならカルバードや世界の情報ならすぐに手に入るだろう。斑目の件もな」

アルフィン「ええ、斑目の件を扱っている記者さんとかいればいいんですけど……」

ヴァン「記者か……。知り合いの記者がいないこともないが……」

ヴァンは、運転をしながら窓の外を見ている。それを見たアルフインは

アルフイン「知り合いの記者さんがいらっしやいますの？」

ヴァン「いるっちゃいるが、ゴシップ紙の記者だが……」

アルフイン「ゴシップ記事の……。わたくし、その記者さんに会いたくなりましたわ」

ヴァン「マジかよ？」

アルフイン「マジです。わたくしはおおマジですわ」

ヴァン「まったく仕方がないな……。待ってる、今すぐに連絡スツからよ」

アルフイン「はい、よろしくお願いしますわ」

ヴァンは、スポーツカーを路肩に停め、エニグマを取り出して、ゴシップ記事に連絡を取る。

ヴァン「……デインゴか？ちよつと良いか？」

デインゴ「ヴァンか？何かまた新しい依頼でもやってるのか？」

ヴァン「まあ、そんなところだ。今から会えるか？」

デインゴ「今から？まあ構わんが？いつものベルモツテイで構わないか？」

ヴァン「ベルモツテイか、わかった、そこで落ち合おう」

ヴァンがそう言うのとエニグマをホルダーにしまう。

アルフィン「今からそのベルモツティというお店に向かわれるのですか？」

ヴァン「そうだな。そこでゴシップ記事の記者のデイングという人物と会う。そいつから斑目の事を聞き出せればいいが」

アルフィン「そうですね」

ヴァン「とにかく、ベルモツティがあるリバーサイドに向かうぞ」

アルフィン「わかりましたわ」

そしてヴァンは、タイレル地区からリバーサイド地区へ向かうことになった。

アルフィン side

111204・5・22・昼前・11:30・リバーサイド・ベルモツティ

リバーサイド、川沿いにある商業地区。河川をつなぐ2つの歩道橋や飲食の屋台が並ぶテラスエリアが特徴的で、その開放的な雰囲気は観光客の人気を集め、若者達のデートスポットにもなっている。その他倉庫も建ち並んでおり、首都イーデイスの商業の要所として発展を遂げてきた。導力車の販売や整備を手掛ける整備屋【ブラッドレイ】やライブハウス【ブルースコア】など、他の区域には無い独自の店も並ぶ。

ヴァンのスポーツカーを近くのパーキングエリアに停めてから改めてリバーサイドに降り立った、アルフィンとヴァン。

アルフィン「ここがリバーサイドですわね」

ヴァン「ここがリバーサイドだ。イーデイスの商業の要つてとこか。まあ今は若者のデートスポットになってやがるが……」

アルフィン「デートスポット、何だか羨ましいですわね」

ヴァン「デートスポットくらい帝国にもあるだろうが」

アルフィン「ありますが、やはりリバーサイドが良いですね」

ヴァン「まあ、無いものねだりだな。ベルモツティに行くぞ」

アルフィンとヴァンは、ベルモツティへ行く。昼間ということもあり、ベルモツティにもお客がいるようだ。もちろん昼間の顔であるカフェであるが。

ベルモツティ「あくらくいつらっしやい。ヴァンちゃんがもうそろそろ来る頃だと思つたわくそつちのカワイコちゃんに依頼者かしらく。ちゃんとディングゴちゃんも来てるわよお」

ディングゴ「ヴァン、奥の方のテーブルに来てくれ」

ヴァン「わかった」

ヴァンとアルフィンは、ディングゴが座っている奥のテーブルの場所まで行つて座る。

アルフィン は軽く会釈をしてから座る。

デインゴ「ヴァン、この子が新しい依頼者なのか？俺としてはどこかで見た顔だが？」
ヴァン「まあ、色々わけありだな。そこの辺りは許してくれ」

アルフィン「すいませんわ、デインゴさん。一応はアルフィン・レンハイムと申しませぬ」

デインゴ「アルフィン・レンハイム、ねえ、まあ、俺もお嬢さんのことを深くは詮索しないさ」

アルフィン「ありがとうございますわ。ところでデインゴさん、斑目一流斎画伯をご存知でしょうか？」

デインゴ「斑目一流斎、日本の美術界の巨匠だったか。その人物がどうかしたのか？」
アルフィン「ええ、表の顔は日本美術界の巨匠、顔ですが、裏の顔は盗作、虐待の数々だと噂がありますわ」

アルフィンの言葉を聞いて、デインゴの表情が変わった。

デインゴ「ほう、お嬢さん、その情報をどこで仕入れたんだ？カルバードでも一部でしか知らない情報だ」

ヴァン「アルフィンは、顔が広いようでそんな情報が手に入るみたいだな」

アルフィン「日本やカルバードの協力者からの情報を元にわたくし自身で調べたんで

すわ」

デインゴ「なるほど。わかった斑目の事をこちらも知ってる限りを教えよう」

アルフィン「ありがとうございますわ」

デインゴは、黒い手帳からとあるモノを取り出した。それは、とある男性がカルバードの裁判所に訴状を出しにいくところの導力写真である。その後マスコミ向けに会見を開いた導力写真もある。

デインゴ「この男性の名前は、ノイマン・カガ。日系カルバード人だな。彼は斑目に憧れて、日本に渡航し斑目の弟子になったそうだ。だがそこで待ち受けていたのは、虐待と斑目の盗作だったそうだ。弟子が描いた美術作品を自分の名前で作品を世の中に出す…。弟子が中々作品を出さなければ、虐待をする……。そんな感じだ。ノイマンさんは、日本の裁判所で訴えを起こすために訴状を出したが、裁判所は受理せず門前払いだ」

ヴァン「ひでーな」

アルフィン「今の日本は、獅童とかいう人物が牛耳ってるようですわ」

デインゴ「獅童正義、与党議員でありながら野党側と共闘してるふしがあるな。それだけではなく、帝国の貴族派側、共和国の反移民派との繋がりも指摘されてはいるが、確かな証拠がない」

アルフィン「彼はざる賢い人物です。中々しつぽを出しませんし、つかましてくれませんか」

デインゴ「獅童正義の話は今ほ置いて、斑目の話だったな…。ノイマンさんは、カバルードの裁判所に斑目の事で訴状を提出して、受理されている。それでCIDが動き出してるようだ」

ヴァン「CIDがね…」

アルフィン「そのノイマンさんには、会うことはできるんでしょうか？」

デインゴ「普通に会えないだろうな。どうせCIDの護衛かついてどこかにいるんだろうが。流石にそこまでは、俺もつかんではない」

アルフィン「そうですか」

デインゴ「CIDならヴァン、お前の知り合いから情報を貰えないのか？」

ヴァン「…お、俺？はあく俺がアイツに頼むのかよ？」

デインゴ「それしかないだろ、他に知ってるヤツなんて皆無だと思うぞ」

アルフィン「ヴァンさん、わたくしからもお願いしますわ」

アルフィンから頭を下げられ、一瞬考えたがすぐに

ヴァン「わかったよ…。CIDのアイツに連絡しなきゃとは思ってたところだ。ちよつと連絡するから待つてな」

アルフィン「わかりましたわ」

ヴァンはそう言ってからアルフィンとデインゴから離れる。

デインゴ「帝国からわざわざ出向いてくるあたり、帝国でも何かあったのか……。いや先月の帝国南部のパルム騒乱の繋がりでもあるのか？」

アルフィンは、びっくりした表情でデインゴを見る。

アルフィン「流石、一流の記者さんですわ」

デインゴ「一流の記者じゃねえ、ただのゴシップ記事を書いているだけさ」

アルフィン「いえいえ、そんなことないですよ。中々の鋭い勘をお持ちのようですし」
デインゴ「帝国南部のパルム騒乱の話は、エルフィン・スナイパーのカズヤから聞いた話だ。実際にリベール経由でパルムに足を運んで現場の状況を見てきたさ。カズヤの説明していた通りだったさ」

アルフィンとデインゴが話していると、ベルモツティが入ってきて

ベルモツティ「帝国南部の都市パルムの話よね？」

アルフィン「ええ、そうですね。ってベルモツティさんもそのことをご存知で？」

ベルモツティ「そうね、これでもわたし、情報屋ですもの。いろんな情報網ももってるわね」

アルフィン「なるほど。それではパルムで起こった事件もご存知なんですわ」

ベルモツテイ「東ゼムリアの日本の企業：ゴールド・マウンテン社が帝国に進出して
いる帝国支部が独断で問題を起こしたことになるわね。なにやらきな臭いと思っ
て調べたわけ」

デインゴ「それで何か分かったのか？」

ベルモツテイ「ええ、ゴールド・マウンテンの帝国支部は、日本から子供達をさらつ
てきて、生体実験をしていたそうね」

デインゴ「ちつ、あのD：G教団の真似事か！」

アルフィン「帝国支部の悪事は、トルズの生徒さんと教会関係者、エルフィン・ス
ナイパーのお二人やミサキさんや深夏さんにも協力にて潰えたと思われますが：」

デインゴ「まあ、日本でゴールド・マウンテン社は健在だし、帝国支部の勝手な行動
で片付けてるところからして、胡散臭いがな」

ベルモツテイ「それで、アルフィンちゃんはヴァンちゃんとうするつもりなの？」

アルフィン「まずは、ゴールド・マウンテン社の共和国支部を調べるつもりですわ」
デインゴ「共和国支部もあまり良い評判は聞かないな：」

ベルモツテイ「そうみたいよね。以前共和国政府機関からゴールド・マウンテン社共
和国支部の業務体制の改善や指導も入ったみたい。改善をしたみたいだけど、悪い部分
は闇の中でも隠したんでしょね」

アルフィン「闇の中ですか。まああり得ない話ではないでしょうね」

デインゴ「共和国支部も帝国支部ほどでないにしろ、黒いってことには変わりはない。それでも危険が伴うがやるのか？」

アルフィン「もちろんですわ」

デインゴ「そうか…なるほど順平やゆかりから聞いていたとおりだな」

アルフィン「デインゴさんは、順平さんとゆかりさんをご存知なんですか？」

デインゴ「まあな…。2人共、芸能人だからな。そういう取材もあるのさ」

ベルモツティ「順平・伊織、プロ野球、彼は首都イーデイスのチームに所属し活躍しているのよ。それにカルバード野球会に必要な人材だわ。ゆかり・岳羽、カルバードの特撮界のホープ的存在なの。でもそれは表の顔、裏の顔はC I Dの外部エージェントって肩書きね」

アルフィン「そうみたいですわね」

デインゴ「順平もゆかりもC I Dの真田明彦の部下…仲間って関係か。敵に回すと厄介そうだな」

アルフィンは、デインゴとベルモツティと話をしていたら、ヴァンが戻ってきた。

ヴァン「アルフィン、なんとかC I Dの許可を取ったぞ」

アルフィン「ヴァンさん、ありがとうございます。それでC I Dから何か情報は掴め

たんですの？」

ヴァン「C I Dも明白な共和国支部の悪さの証拠を持ってはいなかった。帝国支部で起こったことは、さすがにC I Dも把握済みみたいだが」

アルフィン「C I Dに情報提供したのは、わたくしですけどね。帝国軍情報局だけに情報を預けておくわけにはいかないのよ」

そんなことをニコニコしながらヴァン達に話すアルフィン。

ヴァン「…つたくとんだ女だよ、お前さんは…」

デインゴ「それで、共和国支部を2人で調べに行くのか？」

アルフィン「ええ、そのつもりですが」

ヴァン「危険じゃないかって心配してんのか？」

デインゴ「まあな、ヴァンはともかく…アルフィンの方は…」

ヴァン「ハーツ、アルフィンは、俺なんかより強い女だ。結社の使徒や執行者を1人で撃退できるほどにな」

ベルモツテイ「…あら、まあ」

デインゴ「それでもだ、過信は禁物だと肝に刻んどけ。ヴァンもアルフィンもだ」

ヴァン「つたく、わかったよ」

アルフィン「デインゴさん、ご忠告ありがとうございます。過信せずに謙虚に行きま

すわ」

ヴァンとアルフィンは、デインゴとベルモツテイに挨拶してからゴールド・マウンテン社の共和国支部に向かうことにしたのだった。

9-19-15・22（12:30〜）ーゴールド・マウンテン共和国支部。

アルファイン side

111204・5・22・昼・12:30・リバーサイド・ゴールド・マウンテン社
共和国支部

日本と共和国が国交樹立して、日本の企業は共和国内に進出していく。それは日本内の騒乱を得て10師族100家体制になってからも変わらない。

ゴールド・マウンテン社は、3代目社長時代に進出してきて、カルバード内でもシェアを拡大中。だがシェア拡大と共に良くない噂も聞こえてくるようになった。

そして先月の帝国支部の事件は、カルバード共和国内でも大きく報道されている。帝国支部のマジの機密情報は、帝国軍情報局が回収した。教会もエルフィン・スナイパー、四葉家、七草家も機密とした。もちろん日本政府も。

報道されているのは、マスコミ関係の憶測や推測でされているとされている。

問題のゴールド・マウンテン社は、先の問題等は帝国支部の独断先行でやったことで、

本社は一切関係なしとしたが、株主、マスコミ関係や野党や獅童達がゴールド・マウンテン社に対して責任追及をやり始めた。

ゴールド・マウンテン社経営陣は、社長以下全員辞任。

新社長は、臨時株主総会で山波 大輔が選出された。

ゴールド・マウンテン社は、多額の賠償金を支払い再スタートを切った。

だが……。新社長山波 大輔は……。

——

リバーサイドの賑やかな位置より奥の方に共和国支部を構えるゴールド・マウンテン社。従業員は結構な数があるようだ。

アルフィンとヴァンは、ゴールド・マウンテン社の共和国支部がある近くにスポーツカーを停めて、共和国支部の方へ近づく。支部の建物の前には見張りが2人立っている。

ヴァン「入り口に2人の見張りがいやがるな」

アルフィン「一般企業があのような警備員を配置するでしょうか？」

ヴァン「……一般企業があんな警備員を配置するとは思えねえ……。とてもじゃないが、一般の警備員にも見えないがな……」

アルフィン「ですわね。わたくしの目にも警備員には見えません。むしろ猟兵が雇われて警備をしてるしか思えませんわ」

ヴァン「まあ、そんなところか。普通の企業が一昔前のやり方をするわけないだろうな。普通に企業内に警備局があり、中で待機しているはずだから」

アルフィン「正面突破ってわけにもいかないですし、裏口か非常階段を使うのが先決でしょうね」

ヴァン「そうだな、正面突破なんかしたら共和国支部に警戒されて調べることができなくなるだけになるからな」

アルフィン「リスクを避け最適、最短で行ければ良いのですから」

ヴァン「確かにな……」

アルフィンは自身の眼で、建物の内部構造や人間の配置などを能力で見ている。

大賢者【告、共和国支部の裏側の建物の入り口には、警備員は配置されていませんね】アルフィン【「そうみたいね。罠って可能はあるかしら？」】

大賢者【解、調べています。……裏側には「普通の警備員」が配置されています。本来なら会社内の警備担当の者のようですが】

アルフィン【「おそらく、「新社長」の指示でそのような配置になったんでしょいうね

……」】

大賢者「了、それでマスターは、どうされるおつもりですか？」

アルフィン「それはですね……」

アルフィンはヴァンにあることを耳打ちで提案する。

ヴァン「アルフィン、それは俺は賛成しかねるぞ！」

アルフィン「大丈夫ですわ、何とかかりますよ」

ヴァン「……うーん、わかった。だか俺が危険だと判断したら行くからな」

アルフィン「はい、わかりましたわ」

アルフィンはそう言うと、共和国支部の裏側の入り口へ近づいていく。ヴァンは、いつでも行ける準備を整える。

そしてアルフィン来訪を裏側の入り口を警備している警備員がそれに気づく。

警備員1「その娘、止まれ。ここがどこかわかって来ているのか？」

アルフィン「いいえ、わかりませんわ。ちよつと道に迷ってしまったて、ここはどこですの？」

警備員2「迷子か……。それにしても……」

警備員2は、アルフィンを下から上を舐めるように見ている。

大賢者【告、警備員の1人は、マスターを身だ定めをやっているようです】

アルフィン【「わたくしをですか……。それはわたくしの手中に嵌まつてること

しようか」

大賢者「解、そのようですね。マスターに対しての欲望が垣間見れますね」

アルフィン「欲望ですか……」

アルフィンはそう大賢者に言うと、その場にしゃがみこむ。わざと足を広げて緋のショーツが見えるように。警備員2は、食い入るようにアルフィンの緋のショーツを見ている。警備員1もチラチラと見ているようだ。

警備員2「道に迷ったのなら、我々が案内してやつても良いぞ？」

警備員1「案内って我々がやらなくても良いのでは？」

警備員2「良いんだよ！あの女と楽しみやろうぜ！」

警備員1「お楽しみって……。ふざけないで下さい！我々は警備員ですよ！」

警備員2「はあく何正義感ぶってんだ、お前……」

警備員1「な、なっ、別に正義ぶってるわけじゃ……」

警備員2「こういう女にはな、こういう風にするんだよ！」

警備員2は、そう言うってアルフィンを押し倒す。ヴァンは、その時点で飛び出そうとしたが、彼女の目はまだそこにくださ目の目であった。

警備員2「お前が悪いんだぞ、そんなエロチックな身体をしているお前が悪いんだ」

アルフィン「……こ、こんなことして、何をされるんですの？」

警備員2 「何をするって、わかるだろう、男女がする事なんて1つしかないだろう」
警備員2は、そう言ってアルフィンの匂いを嗅ぎ始めた。彼女も恥ずかしくなりながらもとぼけたフリをする。

アルフィン 「こんな、わたくしで興奮されるなんて、よほど女性に飢えてるんでしょうか？」

警備員2 「見せつけてるんだからお前もそのつもりなんだろう！」

警備員2は、押し倒したアルフィンの胸を触ろうとするが、彼女の指が警備員2の後頭部を押す。すると意識を失うように警備員2は倒れた。アルフィンの方へ倒れたので、彼女はそれを押し退ける。それを見た警備員1は逃げ出したが、ヴァンによって気絶させられた。

アルフィン 「ヴァンさん、ありがとうございますわ」

ヴァン 「ありがとうございます、じゃない！あのままなんかあったらどうするつもりだったんだ！」

アルフィン 「ヴァンさん……」

ヴァン 「つたく…お前さんには、心配は入らないだろうが、ちよつと言い過ぎだ…。でも心配したのは本当だ」

アルフィン 「……ふふつ、ヴァンさんは優しいんですね。だからレンちゃんを傷つき

ながらも守りとおされたんですものね」

アルフィン「は、小悪魔的な笑みを浮かべながらヴァンにそう言った。ヴァン自身もアルフィンの事は妹のようにしか見てないのだ。

ヴァン「茶化すな……。あの時は今のようにも強くもなかったからな。色々と必死だったわけだ」

アルフィン「ふつつあの時のヴァンさんもカッコ良かったですわ」

ヴァン「だから茶化すなって。あとはこいつらをどうするかだな。反応が無ければ、何かあったと思われるな」

アルフィン「ご安心を……」

アルフィンは気絶した警備員の2人の頭に手を乗せる。そして何かを呟く。

アルフィン「……。………………。私の命に従え……服従の証(マインドコントロール)いつもとおりに警備をしてなさい。そして先ほどは『何もなかった』、『誰も来なかった』、いいわね?」

警備員の2人は、アルフィンの命じたままにうなずくと何事もなかったかのように警備に着いた。

ヴァン「前も思ってたのだが、アルフィン、お前さんのその能力は……」

アルフィン「わたくしの『生まれ持った能力』ってやつですわ」

ヴァン「生まれ持った能力……ねえ……。まあ、深くは考えるのはしないが」

アルフィン「ヴァンさん、女には色んな顔がありますし、隠してるものもありますから」

ヴァン「別に踏み込まねえよ。とにかくその裏口から中に入るんだろ？」

アルフィン「ええ、そこしかありませんしね」

アルフィンとヴァンは、裏口からゴールド・マウンテン共和国支部内に潜入することになった。

アルフィン side

11204・5・22・昼・13:20・ゴールド・マウンテン共和国支部内。

ゴールド・マウンテン共和国支部内に裏口から潜入したアルフィンとヴァン。内部は普通の会社内と変わらないようになっていて、だが一本道である。先には警備室があるだけのようである。

大賢者【告、この先は警備室しか無いようです】

アルフィン【「警備室しかないと言うことなの？」】

大賢者【解、この先は警備室しかありませんが、警備室の中から支部の内側へ行けるみたいですな】

アルフィン「「なるほど、そう言うことね」」

ヴァン「アルフィン、どうするんだ？この先は警備室しかないようだぞ？」

アルフィン「ええ、そうですね。でも警備室の中から内側に行けるみたいですよ」

ヴァン「警備室の中からか。お前さんの眼には、それが見えたんだな」

アルフィン「まあ、そうですね」

アルフィンは大賢者が教えてくれただけだが、そんなことは言えないので、自身の眼でも警備室を見てみる。すると警備室の全容が見える。警備室にいる人数は35名。その35名は、会社内の全体フロアが監視カメラから映し出されるディスプレイを見ている。そして警備室から内側に出る扉も確認できた。

アルフィン「さて…ヴァンさん、どうしましょうか？」

ヴァン「どうするかって…正面突破は厳しいだろうな。応援を呼ばれる可能性が高いだろうからな」

アルフィン「ええ、間違いなくそうなるでしょうから」

大賢者【告、警備室の隣には、トイレがあります。そのトイレのダクトから内側に続いているようです】

アルフィン「「ダクトですか。気付かれないためには、それしか無いでしょうね」」

アルフィン「ヴァンさん、トイレのダクトから内側に入りましょう」

ヴァン「トイレのダクト……。まあ、それしか無いだろうな。つかアルフィン、お前さんは大丈夫なのか？」

アルフィン「別に大丈夫ですわ」

アルフィンは、そう言うのとトイレの方へ向かう。トイレはどうやら共同トイレのようである。トイレにやって来たアルフィンは、通気構のダクトを発見する。

アルフィン「通気構、発見しましたわ」

大賢者「告、マスター、その格好で昇るのでしようか？」

アルフィン「そのつもりですけど、大賢者何か問題でも？」

大賢者「解、マスターは、ヴァン氏に自らのシヨーツを見せつけるおつもりで？」

アルフィン「そんなわけではないでしょう！」

大賢者「解、違うんですね」

アルフィン「ち・が・い・ま・す」

アルフィンは、大賢者にそう言つて、笑顔でヴァンに

アルフィン「ヴァンさん、お先にどうぞ」

ヴァン「お、おう……さつきまでは、我先に行こうとしていたが？」

アルフィン「わたくし、このような格好ですので、ちよつとはしたくないようなので」
ヴァン「はしたない格好ね……。まあいい：俺が先に行く」

アルフィン「ヴァンさん、すいませんわ」

ヴァンは、先に通気構のダクトへ侵入する。その後アルフィンがダクトへ入る。入る前に

アルフィン「わたくし達がダクトに入ってる間に誰かが来ても大丈夫なようにしてないよね」

大賢者「告、幻影のトイレを見せるつもりなんですね」

アルフィン「「そういうことですわ」」

大賢者「了、さつそく魔術を発動させます」

大賢者は、トイレに認識の違いの魔術を発動させた。入ってきた人間は、アルフィンやヴァンを認識を出来なくしたのだった。

アルフィン「さてと、わたくしもダクトに入りましょうか」

アルフィンは通気構のダクトの中に入っていった。

アルフィンスide

111204・5・22・昼過ぎ・13：30・ゴールド・マウンテン共和国支部内

支部長室。

現ゴールド・マウンテン共和国支部支部長である、谷垣弥太郎。彼はゴールド・マウンテン本社の財務局長まで勤めた男である。本社から支部へ行くのは、左遷されたと思われるが、共和国支部へ出向は立派な出世ルートなのである。共和国政府、共和国経済界、共和国軍、共和国警察などにパイプを作ることが、できるためだ。

ちなみに帝国支部は、出世街道から外れかけた社員達がいく支部なのだ。活躍できなかったのなら、本社へ戻れることになるようだが。

しかし帝国支部は、先の問題で支部は閉鎖され、幹部達は帝国から日本に護送中に護送挺が東ゼムリアに墜落し全員死亡という結果に終わった。

事件性を疑った帝国政府と日本政府は、東ゼムリア海をくまなく搜索している。搜索結果は、まだ発表されていない。

共和国支部長である谷垣弥太郎は、日本から取り寄せた机にて斑目一流斎の絵の導力写真を見ている。

谷垣「日本の本社から斑目の絵を共和国内で売りさばけと言われているが、生憎裁判所に訴えられてるんだ。裁判所の目をかいくぐって売れと言うのか？」

???「谷垣支部長、本社の意向はそのようすわ」

谷垣「エレナ、簡単に言ってくれろ……。共和国政府やCIDの監査が入っているんだ

ぞ！　たく本社の持みだからといって、斑目の絵なんか販売するんじゃないからなかつたぜ」
エレナ・マルスハート。谷垣の秘書。谷垣が本社の財務局局長時代からの秘書である。茶髪ロングのナイスバディの持ち主。OLスーツに身を包んでいる。

エレナ「斑目一流齋、弟子への虐待、弟子の絵を盗作……彼の弟子だったカルバード人が、裁判所へ訴えをおこした」

谷垣「そうだ。だからこそ共和国政府やCIDには、睨まれるわけにはいかないんだ」
エレナ「……………」

谷垣「エレナ、私は本社のやり方に嫌気がさしたのだよ。数年前に財務局長になった時に本社の闇を知ったのだ……」

エレナ「本社時代からもそのことを聞かされましたが、本当にあのような事を……」

谷垣「ああ、帝国支部の不祥事で本社の経営陣は、みんな退陣した。だが新しく社長になったヤツは、獅童正義の息のかかった人物だ」

エレナ「ダイスケ・ヤマナミという人物ですよね」

谷垣「ああ、ヤツは獅童正義の秘書をしていた人物だよ。3年前に議員秘書を辞めたと噂があったが、社長になるために経営学でも学んでいたのか……」

エレナ「そのヤマナミ社長から、無茶苦茶な要求を？」

谷垣「まあな。おかしいとわかっていながらそれを受け入れた俺も悪党だな」

エレナ「タニガキ、ヤタロウ支部長は悪くありませんよ。アラミスに通われている娘さんのために……」

谷垣「娘…妻とは分かれたとはいえ、制理は私の娘だ。その娘のためだと言ってやってはいけないことに手を染めた。娘のためといえ犯罪は犯罪だ」

谷垣弥太郎には、1人の娘がいる。名前は吹寄制理。カルバード名は、制理・吹寄である。今は母親の苗字を名乗っている。容姿はもちろん原作とあるの吹寄制理そのものである。高校1年生でアラミスに通っている。母親は、制理を学校に通わせるために、パートの仕事をやっており、もちろん谷垣が養育費を払っているのだが、それだけでは暮らしてはいけないのだ。

谷垣「2人と別れたのは、自分のせいだがな。家庭を顧みず、仕事ばかりしていたから。あの頃はそれが正しいと思ってた……」

谷垣は、窓の外を見ながらエレナにそう言った。別れて1人になって初めて気がついた、自分の愚かさ、過ちを。しかし気がついたのが遅すぎたのだ。全て失ってしまった後で気がついたとしても遅い。

もし気がつくのが早かったら家族は壊れなかったかもしれない。

だから今は、娘である制理を見守ることだけにしている。会うことも禁止されてる

わけではない。

だが娘には会わないという自らの枷にして、仕事を頑張っているのだ。それに今となつては、益々娘と会えない。犯罪に手を染めてしまったのだから。

エレナ「……それでもタニガキ支部長は、お気づきになったのですから。それだけでも前進したと私は思いますよ」

谷垣「エレナ、私は前進しているのだろうか？」

エレナ「ええ、私はそう思います」

谷垣は、エレナにそう言われ、少しは肩の荷が降りた。そして覚悟を決め

谷垣「私は、これから共和国政府とC I Dに全面的に協力する。これ以上、ゴールド・マウンテン社の悪事に加担するつもりはない」

エレナ「ええ、私も協力致します。共和国支部の中にも反発を持った方々がいらつしやいます。その方々を味方につけましょう！」

谷垣「エレナ、これからよろしく頼む」

エレナ「ええ、私は支部長の秘書で片腕ですから」

こうして、谷垣弥太郎支部長とエレナの反逆が始まったのだった。

10-10-5・22 (13:45~) 一斑目一流齋。

アルフィン side

1-1204・5・22・昼過ぎ・13:45・ゴールド・マウンテン社共和国支部

内

ヴァンとアルフィンは、ダクト内を移動し共和国支部の一般向けのエリアに出てきた。ここは一般向けの場所なので、一般の見学者も来ている。

アルフィン「ここは、一般向けのエリアですわね」

ヴァン「企業紹介の場所だな。まあ、こんなところに斑目の証拠があるわけないか」

アルフィンとヴァンは、共和国支部の一般エリアをキョロキョロ見ていると、斑目一流齋の絵が飾られていた。その絵には、日本の巨匠斑目一流齋の【愚かさと黄昏】という絵だと紹介文が書かれていた。

「どうやらこの絵は、ゴールド・マウンテン社共和国支部が購入したと書かれていた。」

アルフィン「……斑目一流齋が、ゴールド・マウンテン社を騙して購入させたとかでしようか？」

ヴァン「……支部長クラスの人間が、そう簡単に騙されるか？ 目利きなんかあるだろう」

アルフィン「確かに：ですが、斑目一流斎は、カルバードの賞をもらつてますわ。それで先入観が働いて、目利きなんかを狂わせるのでは？」

ヴァン「：確かにそれもあるだろうが：」

アルフィン「ヴァンさん、ちよつと待つてください」

アルフィンは、自身と眼で何かを見ている。

大賢者「告、この絵は、斑目一流斎画伯が描いてはいませんね。おそらく破門にした弟子の一人だと考えられます」

アルフィン「「やっぱりねくわたくしの眼にも弟子の一人の魂の炎が見えましたし」

大賢者「「解、魂の炎：マスターにはそう見えたのですか。私は、この絵を描いた本人が見えました」

アルフィン「「大賢者は、描いた本人さんが見えたのですね」

大賢者「「解、破門した弟子、日本人の前田 知憲さんと言う方ですね：」

アルフィン「「前田知憲さんですか。この前田さんは、日本人なの？」

大賢者「「解、日本人だったようですね」

大賢者の日本人だったの部分に疑問を持ったアルフィン。当然、そのことについて聞いてみる。

アルフィン「日本人だったって過去形みたいだけど、今は違うのかしら？」

大賢者「解、前田知憲氏は、斑目に破門され、美術会に怨みを持ちながらしばらく生きていたようです」

アルフィン「怨みを抱きながら生きていく…斑目の仕打ちならば、致し方ないですよね」

大賢者「解、怨みつらみが、日本人でいることをやめ、猟兵へと転職したようです」
アルフィン「猟兵にですか……。さぞ斑目一流齋に夢を潰されたことは、彼は絶望したのでしょね…。前田さんの所属する猟兵団まではわかりませんよね？」

大賢者「解、そこまでは、わからないですね。それとマスターはお気づきですか？」
アルフィン「調べるしかなさそうですわね。それと大賢者、わたくしも気づいてますわ」

大賢者とアルフィンが一通りのやり取りを終えると、ヴァンが話しかけてきた。アルフィンと大賢者の最後の問は、後からわかることになる。

ヴァン「アルフィン、何か分かったのか？」

アルフィン「ええ、あまり大きい声では言えませんが、この絵は斑目一流齋の絵ではありませんわ」

ヴァン「ほおう……。俺は斑目の絵を見たことがなかったが、この絵から何か匂うな」
アルフィン「ヴァンさんの第6感の匂い：前田さんの居場所までわかれば、良いのですか」

アルフィンが困り顔でヴァンを見ている。

ヴァン「居場所までわかるか、って前田って誰だ？」

アルフィン「前田さんとは、この絵を本当に描かれた方ですわね。斑目にこの絵を奪われた被害者ですわね」

ヴァン「お前さんの眼には、そんなこともわかるのかよ」

アルフィン「まあ、ある程度ですけどね。それよりこれからどうしますか？」

ヴァン「どうするって、この共和国支部の悪態を調べるために来たんじゃないのか？」

アルフィン「ええ、もちろんですわ。ただ忍び込んだのは、わたくし達だけではないみたいですよ」

ヴァン「なんだと……」

ヴァンはあたりを見渡す。そして自身の十八番の匂いにも反応する。

ヴァン「確かに俺達以外で侵入者がいるようだな」

アルフィン「これは好都合かもしれませんわ。別の侵入者さんがうまく警備員の方々を引き付けてくれれば、共和国支部の機密情報入手できるかもしれませんわ！」

ヴァン「そう上手くいくものか、疑問は残るが……こっちはこっちで動くのでしょうか」
アルフィン「そうですね」

アルフィンとヴァンは、社員達の行動を把握しつつ内部の方へ侵入し始めた。

アルフィン side 内

吹寄制理 side

11204・5・22・昼過ぎ・14:00・駅前通り・遊撃士協会イーデイス支部

カルバードの首都イーデイスの駅前通りの一角にある遊撃士協会イーデイス支部。周りには若者向けの店やショッピングモールなどがある。

街には、ちゃんとカルバード警察の警官達がパトロールしていて治安も良い。それでも遊撃士を出勤させる事案は減らないのも事実である。

そんな遊撃士イーデイス支部の中に学生らしき女子がいる。アラミスの制服に包まれた黒髪ロングの女の子が支部内の掃除等をしていた。

彼女の名前は、日本名は吹寄制理。カルバード名では、セイリ・フキヨセ。アラミスの2年生で生徒会長でもある。なぜ学生である制理が支部で働いているのは、自身の将来のためである。彼女も実は遊撃士でもある。まだみらないではあるが。

そんな制理が憧れるのは、アラミスの先輩であるとある人物であるのだが、その人物が巡回から支部へ帰ってきた。

制理「お疲れ様です、エレイン先輩！」

エレイン・オークレール。彼女は、アラミスの先輩でもあり遊撃士の先輩でもある。彼女は、この間C級からB級にランクが上がったのだ。もちろん生徒会長でもあったのだ。

エレイン「制理、ありがとう。貴女も学校が忙しいのに支部のお手伝いをさせてごめんなさいね」

制理「学校の方は、理解のある副会長に頼んでますから。私も自分の出来る範囲の仕事はやって来ましたので」

エレイン「制理、無理は禁物よ。困ったことがあれば、私に言いなさい。できる範囲で協力してあげるから」

制理「ありがとうございます」

制理は、支部内のお掃除していて、綺麗にしている。本来なら遊撃士の数名は待機組もいるのだが、遊撃士の案件がここ最近増えている。支部最強と言われているジンもとある案件で不在となっている。他の遊撃士も依頼をこなすために出かけている。だから制理が受け付けもやっているのだ。ちなみに午前中は、別の受け付けがいたのだが、

制理と交代し今は食事休憩に入っている。

エレイン「3月にクロスベル騒乱が起きてから、西ゼムリア全体が不安定になつてゐるわね」

制理「その煽りを受けて共和国も軍備拡大路線を取りつつありますし、帝国も軍拡してますしね」

エレイン「はあ、お互いに戦力拡大するためにクロスベル騒乱を利用してただけ。全く腹正しいだけね」

制理「共和国の移民推進派と反移民派の対立、帝国では、貴族派と革新派の対立…でしたよね…」

エレイン「そうね、そこに付け足すなら、クロスベルに利権を持つ連中…共和国も帝国も両方にいると言った方がいいかな…。それと…」

エレインは深く考え始めた。そうアルフィンと明彦が関わったクレイユ村の事件の事を考えている。支部の同性の先輩のゆかりがクレイユ村に訪れていることは、ゆかり自身や警察から聞いている。B級に成り立ての自分には、身が重いかも知れないとわかつてはいるが、新人時代からお世話になつたお礼も兼ねて力になりたいとも思つてゐる。

制理「エレイン先輩、クレイユ村の事件が気になるんですよね？」

エレイン「ええ、クレイユ村は、私が新人時代にお世話になった村なの。だから今回の件、余計に自分のことのように思ってしまうものよ」

制理「私もそう思います。新人からほとんど変わらない私もクレイユ村は、とても良かったですね。何だか故郷に似てるなと思って思いましたし」

エレイン「制理、貴女の故郷は、東ゼムリアの日本よね？」

制理「ええ、お母さんは、日系のカルバード人で、お父さんは純粋の日本人です。でも両親は離婚して、私はお母さんと一緒にカルバードへやって来ました。国籍も日本からカルバードへ変更しましたけどね」

エレイン「ごめんなさい、聞いてはいけない話だったかしら？」

制理「エレイン先輩、全然そんなことないですから。今はプライベートも学業も充実していますし、昔のことは気にならないですから」

エレイン「強いわね、制理は」

制理「先輩……！私こそごめんなさい。先輩はお父さんとは……」

エレイン「制理、私は大丈夫。私は私、お父さんはお父さんだから」

エレインは、そう言つて奥の方へ行つてしまった。口ではそう言つてもまだまだ彼女が乗り越えていないことは、制理にもわかつてしまう。だからこそ力になりたいのだ。だが今の彼女には、力になれるほどの力がまだ備わっていない。

制理「私にもつと力があれば……」

握りこぶしを作つて歯痒い気持ちでいっぱいであつた。そんな制理も共和国や帝国の激動の流れに巻き込まれることになっていく。

1111115・22(14:00)―奇襲と取り調べ。

アルフィン side

111204・5・22・昼過ぎ・14:00・ゴールド・マウンテン共和国支部内
アルフィンとヴァンは、自分達以外の侵入者がいるのがわかり、様子をうかがっていた。だが10分が経過し侵入者達が共和国支部に捕まっているのかとも考えたが
得ないと思った。

何故なら誰にも気づかれずにゴールド・マウンテン共和国支部に忍び込んでいるからである。

アルフィン「侵入した彼らはどこへ行ったのでしょうか？」

ヴァン「共和国支部から脱出したようにも思えねえ。まだ匂ってやがるし」

2人で考えていると、大賢者がアルフィンに話しかけてくる。

大賢者「マスターは、お気づきでしょうか？」

アルフィン「ええ、先程から妙な空気が漂い始めてますわね。これは、昔に日本の時に遭遇した影時間みたいな感じでしょうか？」

大賢者「ええ、そんな感じなのでのですが、少しばかり違うようです」

アルフィン「少しばかり違う？それはどういう意味でしょうか？」

大賢者【影時間やマヨナカテレビのような感じのようにも思えるのですが、何かが違うようです】

アルフィン「…何かが違う…：わたくしも何か違う何かを感じていますが、それと関係はあるのでしょうか？」

アルフィンと大賢者が話していると、突然空間が歪みそこから魔物達が突然現れる。突然のことで、会社内がパニックに陥る。

ヴァン「いきなりなんだ！空間が歪んだと思ったら魔物がそこから現れてきやがる！」

アルフィン「誰が魔物を召喚した!？」

ヴァン「魔物を召喚だと！」

アルフィン「ええ、こんなこと誰かが召喚しないと起こりえせんわ！」

ヴァン「ちい、一体誰がそんなことを！」

アルフィン「わかりませんわ！今はとにかく召喚された魔物を倒すしかありませんわね」

ヴァン「ああ、そうだな！」

アルフィンとヴァンは、突然現れた魔物を退治するべく、戦闘態勢に入る。ゴールド・

マウンテン共和国支部内にいる社員や一般の見学者達が混乱して逃げ惑っている。アルフィンやヴァンは、逃げ惑っている人達に安全な方へ逃がすために自らが罠を買って出る。

アルフィン「この当たりには、逃げ遅れた人達はいませんわ！」

ヴァン「こつちもだ。さて、この魔物をどう相手してやるかだな」

アルフィン「首が6本、…あれはまるで…」

大賢者【解、あれはケルベロス：地獄の番人と呼ばれるものですな】

番人ケルベロス。俗に地獄の番人とも言われる冥府の入口を守護する犬の怪物とも言われる。

アルフィン「ケルベロスですって！私があの世界『禁書・劣等生世界』で、私が倒したケルベロスなのかしら？いやそもそもケルベロスは、首は3本のはずよ？それが何故6本に？」

大賢者【解、おそらく誰かが通常のケルベロスに何か改造を施してる可能性があります。マスター、十分に気をつけて下さい】

アルフィン「わかったわ、大賢者。慎重に大胆に行きますわ」

大賢者【解、私もマスターを援護を致します】

アルフィンは、戦う構えを取り、ヴァンも警棒みたいなものを取り出して、ケロベロ

スと対峙する。

ヴァン「やれるな？アルフィン！」

アルフィン「ええ、やれますわ！」

アルフィンとヴァンは、ケロベロスに向かって走り出した。ケロベロスは2人に対して炎を吐く。ヴァンは炎を真横に避け、アルフィンは炎を手でかき消した。

アルフィン「私にそんな炎は効きませんわ！」

炎をかき消されたケロベロスは、アルフィンに対して6つの首を使って攻撃をしていく。しかしヒョイヒョイと避けて見せるアルフィン。彼女に夢中になるケロベロスを見て、ヴァンはケロベロスに向けて、警棒を振り下ろした。振り下ろされたケロベロスは、雄叫びをあげながらヴァンの方を見る。

ヴァン「生憎、この警棒はただの警棒ではないんでな」

アルフィン「その警棒は、エルフィン・スナイパー製の特種警棒ですわね」

ヴァン「なくんだ知っていたのか。正式にはエルフィン・スナイパーとマルドゥック社の共同開発って感じだか」

アルフィン「武装一体型の警棒ですわね」

ヴァン「まあな。エニグマと一体型もやつもあるようだが、俺はこの警棒型がしように合ってるしな」

アルフィン「似合ってますわ」

ヴァン「褒めても何もねえーぞ」

そんな会話をしながらアルフィンとヴァンは、ケロベロスと再び対峙するのであった。

アルフィンサイド

——1204・5・22・昼過ぎ・14：15・ゴールド・マウンテン共和国支部内

エントランスホール

6つの首を持つケロベロスとアルフィンとヴァンが対峙していた。

アルフィン「さてと、どうしましょうか」

ヴァン「正面から行くにしてもあの6つの首をどうにかしないとな」

アルフィン「そうですね。ヴァンさんは何か策がありますか？」

ヴァン「策だと？」

アルフィン「ええ、何か策がありましたら、それを採用しようと思うので」

アルフィンの問いにヴァンがため息をはきながら首をひねる。

ヴァン「ケロベロスのヤロウ：6本同時には攻撃してこない。3本、3本の波状攻撃

のようだな」

アルフィン「確かにですわね」

ヴァン「波状攻撃を避けながら、ヤツの本体に攻撃を叩き込めば、勝機は見えてくるだろう」

アルフィン「ケロベロスの牽制は私にお任せ下さい」

ヴァン「ふうう、わたったよ。トドメは任せな！」

アルフィン「はい」

アルフィンは、ケロベロスに向かって走り出す。ケロベロス自身もアルフィンに向かって3本の首を伸ばしながら攻撃してくる。

アルフィン「ケロベロスさん、こっちですわ」

ケロベロスは、アルフィンを捕らえようと、首を前後左右に振り回す。しかしアルフィンを捉えることは出来ない。ヴァンは、アルフィンが作ってくれる隙をついてケロベロス本体に攻撃を与えようとしている。そんな時にぴよんぴよんと飛び跳ねるアルフィンを見ながら

ヴァン「つたく、スカートでぴよんぴよんと飛び跳ねるとはな…ガキンチョのヤツを見てもな…ぶっ！」

ヴァンは、アルフィンのスカートの中身を見て吹き出した。何故ならアルフィンが身につけている下着（ショーツ）に吹き出したのだ。彼女が身につけているのは、子供用

ではなく、大人用それもセクシーなものばかりである。

ヴァン「アルフィン、アイツが同じ歳だった時にもそんなものは穿いてなかったぞ」そんなことを言いながら、アルフィンが作る隙を見据えながら、警棒を握る力が増していく。するとケロベロスの悲鳴が上がる。なんと6本のうちの首が3本が首同士で巻き付いているのだ。

アルフィン「どうでしょうか、ケロベロスさん。それではまともに動けないでしょ？」ケロベロスは巻き付いている首でアルフィンに向けて炎を吐く。彼女はその炎を避けようともせず、ただその炎をぐうパンで、炎をケロベロス自身にぶち当てる。ケロベロスはその衝撃でよろめく。

アルフィン「今ですわ！ヴァンさん！」

ヴァン「ああ！やってやるよ！」

ヴァンは、走りながら警棒を振り上げる。警棒のあるスイッチを押して警棒をより硬化させる。

ヴァン「これでもくらいやがれ！」

硬化魔法により警棒が強化され、どんなに硬いモノでさえも斬り裂いてしまう警棒がケロベロスの身体を斬り裂いていく。トドメと言わんばかりにアルフィンが

アルフィン「グラビティプレス」

アルフインは、重力魔法でケロベロスを押し潰す。体力や身体の安定さを失ったケロベロスは、ただただ雄叫びを上げながら押し潰されていくだけであった。

そしてケロベロスは消えていき、あたりからも瘴気が消えていく。

アルフイン「やりましたね」

ヴァン「全く、何とかなつたみたいだな」

アルフインとヴァンがケロベロスを倒すと、ゴールド・マウンテン共和国支部内が一気に平常を取り戻し始めた。

それにあわせて、警察や遊撃士がやってくるようになってしまっていた。

アルフインサイド

111204・5・22・昼過ぎ・15・10・ゴールド・マウンテン共和国支部↓

カルバード共和国警察本部内

ゴールド・マウンテン共和国支部内に突然魔物が現れ、それだけではなく、地獄の番人であるケロベロスまで現れた。そんな中でもヴァンとアルフインが魔物とケロベロスを倒し騒ぎを沈めた。

しかしその騒ぎが、カルバード警察と遊撃士が駆けつけてくる原因ともなった。

そして、アルフインとヴァンはカルバード共和国警察の本部へ連れて行かれることに

なる。魔物騒ぎを片付けたことの他に疑いを持たれることに。ゴールド・マウンテン共和国支部内も警察の家宅捜索は入ることになった。

谷垣支部長は、警察の支部内の家宅捜索を了承。

そしてヴァンとアルフィン、カルバード共和国警察の本部の取調室で尋問を受けていた。

取調室の中は、刑事モノに出てくる感じの部屋である。

アルフィンとヴァンを同時に調べている捜査官は、荒垣真次郎である。

荒垣真次郎、かつて日本で起きた影時間事件を解決した特別課外活動部の1人である。彼も高校卒業後は、カルバードの大学に行ったが2年で卒業し、警察学校へ入り直した。

警察学校を卒業すると同時に警察本部へ入ったのだ。それから出世し警視というポジションにいる。

真次郎「はあくましかアンタがあんなところにいるとは思わなかったが…ましかスプリガンも一緒とは」

アルフィン「真次郎さん、お久しぶりですね。あの真次郎さんが警察官になられるなんて、あのときには思えなかったですが」

真次郎「フン、あれから色々あったからな。明や美鶴ともだが：後輩達もそれぞれ頑張っているからな。先輩である俺がやらないわけにはいかないからな」

アルフィン「みなさん、それぞれに頑張っていていらっしやいますね。ちよつと前には、理さんにもお会いしましたし」

真次郎「ああ、理から聞いている。ゴールド・マウンテン帝国支部の件で」

アルフィンと真次郎が、話してのを見て、ヴァンは咳払いを入れる。そしてヴァン「こつちは無視かよ？ 鬼の捜査官さんよ？」

真次郎「無視はしていない、スプリガン。それよりお前達2人がゴールド・マウンテン共和国支部にいたんだ？」

アルフィン「ゴールド・マウンテン共和国支部のことで、私がヴァンさんに依頼をだしたのですわ」

ヴァン「アルフィン、話して良いのか？」

アルフィン「ええ、構いませんわ。彼は信用たる人物です」

ヴァン「そうか」

アルフィン「私とヴァンさんは、ゴールド・マウンテン共和国支部内部を調べたかっ
たんです」

真次郎「ゴールド・マウンテン共和国支部の調査か。斑目一流斎の事ですか？」

アルフィン「やはり警察も斑目を調査を？」

真次郎「斑目の弟子だった奴が、裁判所に訴えを起こしたならな。俺達警察も捜査をしなくてはならなくなった」

アルフィン「斑目のお弟子さんは、最初は日本の裁判所で訴えを起こそうとしてましたが、何者かの圧力で裁判所が受理をしなかった。だからお弟子さんは、カルバードの裁判所で訴えを起こしたわけですよ」

真次郎「なるほど、あなたの情報収集能力は健在……むしろ上がつてると言うわけか」

アルフィン「真次郎さん、お褒めに頂きありがとうございます」

ヴァン「で、警察は斑目の事をどこまで掴んでいる？」

真次郎「斑目の資金の流れ、ゴールド・マウンテン社だけではないことはわかった。共和国の企業も少なくとも関わっている」

アルフィン「やはり、共和国の企業もですか。だからこそ共和国の美術会の賞も取れたわけですね」

ヴァン「ミラで名誉を買ったのか、とんだヤツだな」

アルフィン「それで、ゴールド・マウンテン共和国支部の方はどうなりましたか？」

真次郎「谷垣支部長の元で、共和国支部内を家宅捜索をやっている」

ヴァン「それでわかったことは？」

真次郎「それはだな、」

真次郎が話の続きを答えようとしたら、とある人物が取調室へ入ってきたのだ。

アルフィン side (4)

11204・5・22・ 前・15:30・カルバード警察本部取調室内。

明彦「シンジ、取り調べはそれぐらいで良いだろう。その2人は釈放してもらおうぞ」

真次郎「つたくCIDが出しやばりやがってと言いたいが、斑目の件は警察とCIDの協力体制だからな」

ヴァン「鬼の捜査官の次は、CIDのホープかよ、ってアルフィン、どんだけ顔が広いんだよ」

アルフィン「明彦さんも真次郎さんは、親友であり仲間ですわ」

明彦&真次郎「親友は余計だ!」

アルフィンの親友って言った言葉に明彦と真次郎はシンクロしたように言った。それを聞いた彼女は、クスクスと笑った。ヴァンは苦笑いをしたのだった。

明彦「と、とにかくお前達は、一旦警察署から出る。話はそれからだ。シンジ、お前も来るか?」

真次郎「当たり前だ」

こうして、アルフィンとヴァンは、警察署から釈放される。もちろん明彦と真次郎もだが。

警察署から出たアルフィン達は、ヴァンの導力車と明彦の導力車で、リバーサイドのベルモツティへ向かうこととなり、当然お互いに情報収集をするために。

11204・5・22・夕方前・16:00・リバーサイド・カフェ・ベルモツティ
太陽が西に傾き始めていて、西陽が強くアルフィン達を照らし続けている。そんな中、カフェ・ベルモツティへ足を運ぶ。アルフィンとヴァンは2回目になるが。

ベルモツティ「あら、ヴァンちゃんにアルフィンちゃん、またいらつしやい。それと明ちゃんに真ちゃんもいらつしやい」

アルフィン「ベルモツティさん、またまた来ちゃいましたね」

真次郎「おい、ベルモツティ、そんな名前で呼ぶなど言っただが？」

明彦「まあ、良いじゃないか、シンジ」

真次郎「アキ、テメエ：」

ヴァン「大の大人がそんなことでケンカするなよ。やるなら表でやりな。まあ審判くらはしてやるが。もちろん貰えるもんはもらうがな」

真次郎「フン、昔じゃあるまいし、誰がやるかって」

ベルモツテイ「うーん、そういうのもいいワね。ワルぶってるけど、心の中では仲間思いの真ちゃん」

真次郎「うるせえ、ベルモツテイ、盛ってんじゃねー」

アルフィン「良いですわね、男同士の会話って」

ヴァン「そうか？」

カフエ・ベルモツテイに入ってからそんな話をしていたので、明彦が本当の話である本題を始めた。

明彦は、ゴールド・マウンテン帝国支部でやっていた人体実験。生体実験を繰り返して、被検体を死亡している。最初の被検体は、みなしごで対応していたが、学園都市が提起したみなしご保護育成条約が各国と締結されたあと、日本からの調達に切り替えた。帝国支部が解体されるまで、多数の死者を出した、悍ましい事件。

日本から密かに武器を密輸して帝国に運び帝国の貴族派、クロスベルの帝国派、ルバーチエ、共和国の反移民派に流していたこともわかった。

少なからず斑目にそのミラが流れていること。

帝国支部解体時に被検体の子供達の生存者は、日本へ返された。

日本警視庁が被検体の子供達を取り調べている。もちろん帝国軍情報局も協力とい

うことで調べているようだ。

帝国支部の幹部達は、帝国から日本への護送中に護送艇が東ゼムリア海に墜落し全員死亡。

日本側と帝国側の合同調査にて護送艇を引き上げたが、調査の結果、事故ということに。

だが、帝国軍情報局のミサキ・カミジヨウ、七草家のエージェントの麦野静江の両名は事故死でなく何者かによる殺害を主張。

ミサキ・カミジヨウ、麦野静江の両名は、日本、帝国政府の意向と別行動をとつてるとも言われている。

ヴァン「極東の日本のことや帝国のことまで良く調べられたな」

明彦「まあな。日本や帝国にもエージェントは忍ばせてあるのさ。日本には徳川を行かせているが、色々のツテから情報が入ってくる」

真次郎「昔なじみの連中から俺だって情報は入る。CIDが徳川なら、警察は一条からもな」

ヴァン「情報源のケンカをしてんじゃねーよ。ゴールド・マウンテン社そのものはどうなんだ？」

明彦「徳川の情報からすれば、本社はクロ。それも今は獅童正義の生きのあるヤツが

社長って話だ」

アルフィン「社長がいくらクロでも日本の警察は動くことができない。それは獅童正義の仲間が日本警察の上層部いるようですね。明彦さんや真次郎さんが、日本を救った時とは大違いですよ」

真次郎「ああ、そうだな。アルフィンの言うとおりだ。今の国家体制に無理が来てるんだろがな」

ヴァン「十師族百家革命、カルバード革命よりも前の日本の革命……」

明彦「旧徳川幕府倒幕のために立ち上がった十師族とそれに連なる百家。彼ら中心にその後国家体制が築かれた」

ヴァン「それに敗れた徳川家の残党がカルバード王家の庇護を受け、後々にカルバード革命で王家側に立って戦った。最終的には、革命軍についたみたいだが」

明彦「そうみたいだな」

真次郎「まさかこっちで徳川の歴史を習うとは思わなかったが」

ベルモツティ「明ちゃんの部下さんの義景ちゃんもその徳川家の血筋かしら？」

明彦「義景、徳川義景は、分家のほうだな。本家のヤツは議員をやっているはずだ」
ベルモツティ「そうなのねえ」

アルフィン「そう言えば、明彦さん、共和国軍基地の問題はどうなりましたか？」

明彦「そのことだが、アルフィン、岳羽が共和国軍基地を終撃した連中を取り調べた」
アルフィン「獵兵団〔波の花〕でしたよね。ヤーマン、タロス、カインズの3人：クレイユ村を！それと赤い正座のセシール・ガルボ・ダークス」

真次郎「獵兵団〔波の花〕」

ヴァン「つか、アルフィン、俺のここに来る前に、赤い正座のセシールとやりあつたのか！」

アルフィン「そうですね、クレイユ村を守るために戦いました。まあ向こうが撤退してくださつて助かりましたわ」

ヴァン「セシール：首狩りのセシールと呼ばれてる、赤い正座内でも団長やその娘にも匹敵すると言われてるやつを退けたつて……」

ベルモツティ「アルフィンちゃん、女の子なのにすごいじゃない」

アルフィン「まあ、そうですね」

明彦「アルフィンのおかげで、波の花の連中も確保できたし、そこからわりだしたら日本の暴力団と繋がりがあつたことがわかつた」

真次郎「日本の暴力団と繋がりを持とうとするカルバードの不屈き者が増えるのは間違いないな。先週だけでも12件発生している」

ベルモツティ「で、ヴァンちゃん達はどうするのかしら？」

アルフィン、ヴァン、明彦、真次郎、ベルモツティが話しているとデインゴがやって来た。どうやら何か調べて来てくれたようだ。

デインゴ「がん首、揃っているようだな」

ヴァン「デインゴ、何がわかったのか？」

デインゴ「どれについてだ？ ゴールド・マウンテン共和国支部、共和国軍襲撃事件、斑目と猟兵団【波の花】か、この3つを調べてきたぞ」

ヴァン「まずは、ゴールド・マウンテン共和国支部についてだ」

デインゴ「わかった、ゴールド・マウンテン共和国支部とは…」

デインゴがゴールド・マウンテン共和国支部の話をし始めた。

1211215・22(16:00)ーパンツ同盟。

アルフィンスide

11204・5・22・夕方前・16:00・カフェ・ベルモツティ内

デインゴ「ゴールド・マウンテン共和国支部の幹部は、ゴールド・マウンテン本社上層部への一歩の出世コースってことだ」

ヴァン「共和国で甘い汁を吸って、本社にそのミラを流す」

真次郎「アキ、俺達が高校の時にも桐条の権力で揉み消そうとしていた奴がいたんだっただな？」

明彦「ああ、月光館学園内のイジメ問題だったか。ある教師が、美鶴に頼み込んできた奴がいた。美鶴は、鼻で笑って、イジメ問題を公にした。その教師は懲戒免職になったんだかな。他にも山岸の件でもそうだったんだが」

デインゴ「まあ、そんなやつはどここの国にもいるもんさ。共和国の支部長になれば、本社の幹部候補の筆頭になれるようだ。前任の支部長もそうみたいだな」

明彦「なるほどな」

ヴァン「今の支部長も本社の幹部候補を狙って悪事を働いているのか？」

「デインゴ」それがな、現支部長のヤタロウ・タニガキは、本社の幹部候補だったよう
だ」

アルフィン「幹部候補の方だったのですか。それなら何故共和国支部の支部長になら
れたんでしょうか」

デインゴ「支部内の噂だが、タニガキ支部長は、共和国支部の不正を暴くためにやつ
てきた、とか言われている」

ヴァン「たんなる噂だろ？その噂を信用するに値するかだ」

ヴァンの間にベルモツティが反論する。

ベルモツティ「ヴァンちゃん、彼は信用できるわ」

ヴァン「情報屋のカンか？」

ベルモツティ「彼、タニガキ支部長は、たまにここに来てくれるのよ。それで彼と話
したりしてて、彼が共和国支部のことを、社員さんの事を思ってる。それと本社からの
命令が不正なことばなりさせられるみたいね」

アルフィン「社員を守ることと、本社からの理不尽な命令の狭間：板挟みってことで
しょうか」

アルフィンはその気持ちはわかる。アルフィン個人とアルフィン皇女としての立場
で、気もちが板挟みになるのは良くあるのだ。個人として動いている今は、自分の意志

で決断できるが、皇女の立場なら帝国のための決断を迫られる。たとえ間違っているとしても立場的に決断しなければならない。

ベルモツティ「彼、そんな感じだったわね」

真次郎「谷垣支部長には、全面的に協力してもらっている。だが内部には反乱分子もはらんではいらぬようだがな」

明彦「反乱分子がいるのは、CIDでも把握済みだ。潜入捜査官から報告を入れている」
真次郎「チツ、CIDは仕事が早いことで」

明彦「障害は小さいうちに詰み取るのが、当たり前だ。それは警察も同じだろう」

真次郎「まあな」

明彦「谷垣支部長に全面的に協力は取り付けているが、部署によっては、時間を稼がれている部分もある。それにゴールド・マウンテン共和国支部だけではない。反移民派の勢力も何やら動き出しているようだからな。アルフィンが片付けた波の花という猟兵団をけしかけた人物もイーデイスに潜伏してみたいだからな」

真次郎「問題をイーデイスに持つてくるなど言いたいが、共和国軍基地がやられそうになったのなら中央が無視するわけにはいかないだろう」

ディング「共和国軍基地を襲撃した波の花、元々は日本や東ゼムリアで活躍していた猟兵団のようだ。主に日本の10師族や東ゼムリア共和国政府から依頼をこなす猟兵

団だったらしいが、1、2年前に共和国入りをしているみたいだな」

明彦「日本の10師族や東ゼムリア政府の依頼があるのなら、食いつばぐれることは無いだろう」

真次郎「そうだな、他に共和国に来るような事情でも出来たのか。もしくは行く方から分らない新しい雇い主の命令で共和国へ入って来たのか」

デインゴ「波の花は、共和国軍基地を襲撃を足掛かりに名を上げようとしてたのは間違いないだろう。まあ内部内に異分子である赤い正座のセシールをなんか飼ってたわけだしな」

アルフィン「彼は確か波の花は、日本の暴力団とも繋がりと云ってましたわ」

明彦「ああ、例の3人が日本の暴力団とも関係はある白状したさ」

アルフィン「そうでしたの。他にわかったことは？」

明彦「まだ調査中さ」

このあとデインゴとヴァン、明彦と真次郎が互いに話して情報交換をする。そんなときアルフィンの変わり身を務めるモノから連絡がやってくる。もちろんアルフィンの精神の中でだが。

変わり身「アルフィン様、アルフィン様、至急エレボニアに戻られたし」
アルフィン「何かあったの？」

変わり身「帝都で、反オズボーンの抗議行動が起きまして、その中でも波の花という
猟兵団が、反対派と行動を共にして帝都で暴れてたのですが…」

アルフィン「波の花ですって…帝都に波の花猟兵団が現れたの！まさか抗議デモの中
に紛れていたのかしら！」

変わり身「ええ、抗議デモの人間に化けていた可能性は高いです。デモ自体は、すぐ
に鉄道憲兵隊や謎の人物により片付けられたようですが…」

アルフィン「鉄道憲兵隊と謎の人物ですか…とにかく私は戻りますわね」

変わり身「はい、アルフィン様」

アルフィンは一旦深呼吸してから、ヴァン達に

アルフィン「私、一旦帝国へ帰国しますわ。帝国でも波の花が現れたわ」

明彦「なんだと！」

デインゴ「やはりか」

ヴァン「知ったのか？」

デインゴ「確証が無かったから言わなかったが、波の花の一部が行方不明になってい
たって情報があった。だが確証もないからガセかとも思ってたんだが、マジで帝国に
行ってるとは…」

アルフィン「ゴールド・マウンテン共和国支部、猟兵団の波の花、斑目…色々調べた

いいことは山のようですが：ヴァンさん、私からの依頼は継続調査ということでお願いますわ。デインゴさん、ベルモツテイさん、明彦さん、真次郎さん、何かわかりましたら、私のENIGMA(エニグマ)に連絡ください」

ヴァン「つたく、しようがねえーな。ペースは落とすだろうが、調査の継続はするぜ。4spgをこなしながらな」

明彦「わかった、何かあれば連絡する」

真次郎「本来なら民間人にこんなことはしないが、アンタの頼みだからな」

デインゴ「わかった」

ベルモツテイ「わかったわ、アルフィンちゃん」

アルフィン「私からとヴァンから言い忘れていたことがあったわ。ゴールド・マウンテン共和国支部に忍び込んでいたのは、私達や侵入犯だけではないですよ」

ヴァン「匂っていた連中だけではなく、他にもいやがったってことか」

アルフィン「ええ、普通に侵入していたみたいですよ」

ヴァン「ちっ、普通についてどうにかよ：」

こうして、アルフィンは急いで帝国へ戻ることになった。再びアルフィンが共和国を訪れるのは、6月になってからである。

アルフィン side

11204・5・22・夜・21:35・帝都・バルフレイム宮・アルフィンの部屋

アルフィンは、変わり身の報告によりカルバード共和国からエレボニアへ帰国した。変わり身の話によれば、帝都で暴動を引き起こしたのは、反オズボーンの間人ばかりで、猟兵団【波の花】を金で雇い今回の騒動を起こした。暴動自体はすぐに鉄道憲兵隊により鎮圧された。あとは名前を名乗らなかった白髪の女性であった。

鉄道憲兵隊と帝都守備隊、正規軍の第1師団により警備体制は強化された。

アルフィンは自室の机で何かの作業をしている。

大賢者「解、マスター、警棒型特化型CADを復活されたのですか？」

アルフィン「ええ、そうですわ。これから先のため活用しようと思ひましてね」

大賢者「解、マスターが【光井和也】だった時に活用していた例のアレですか？」

アルフィン「そうね。これから先にどんな方々が出てても対処できるようにですけどね」

大賢者「解、カズヤ・アレイスターやMK社、十三工房等の方々と会って自身のアイデアを売り込む…この世界の技術力を上げる。普通の皇女ならしませんね」

アルフィン「普通の皇女ならしないわね。私は、来るときのために、大丈夫なためにやっているだけですわ」

来るべきこととは、巨いなる一のことを指しているのか、それが場所なのかも、それとも、違う場所なのか今のアルフィンにはわからない。アルフィンが警棒型特化型CADを調整をしていたら大賢者が

大賢者「告、なにやら招かざる何かが潜んでいるようです」

アルフィン「やつぱり、大賢者も気づいてましたか」

大賢者「解、マスターどうされますか？」

アルフィン「大賢者、私に任せてくれますか？」

大賢者「解、マスター、良いのですか？」

アルフィン「構いませんわ」

アルフィンは、警棒型特科型CADを天井の方に向けて、何かを発動させる。そして天井から床の方に警棒型を向ける。すると茶髪に茶系のジャンパーを着ていて、下はジーパンをはいている男が現れた。

???「うわっ、なんだ、いったい何が起きたんだ？」

アルフィンは、座標移動(ムーブポイント)を使ったのだ。それで天井側にいた???を自分の部屋の床へと連れてきたのだ。

アルフィン「貴方、私の部屋の天井から何をしてたのかしら？」

???「そ、それは：アハハ、情報収集と言いますか…」

アルフィン「私の部屋の天井で、私の情報収集ですか…」

アルフィンは、???の男をジトメで見ている。???の言っていることを信用していないのだ。

???「別にあんたの部屋を覗くつもりで、きたわけじゃねえ、ちよつと帝国の情報を共和国へ…」

アルフィン「へえー貴方は、共和国のスパイなんですね。そんな方が何故私の部屋の天井にいらつしやるのですか？」

アルフィンは小悪魔的な表情で???を見つめる。

???「あんたの部屋には：天井には逃げるために来ただけだ。情報局の追手から逃げるために」

???が言うには、帝都で起きた波の花が起こした抗議デモを調べていたようだ。しかし帝国軍情報局の人間に怪しい人物と目をつけられ、バルフレイム宮まで逃げてきたようだ。

アルフィン「貴方、命知らずも良いとこね。バルフレイム宮に逃げてくるなんてね」
???「あのおときには無我夢中だったから、今思えばそう思うよ」

??? はため息を吐きながらそう言った。

アルフィン 「貴方は、共和国のCIDの人間なのかしら？」

??? 「え…!？」

アルフィン 「安心してくださいな。私は共和国の人間だからと言って通報したりしませんわ。なんせ私は共和国に知り合いもいますし、CIDにも知り合いがいますわ」

??? 「な、なんだってー」

アルフィン 「まあ驚かれるかもしれませんが、私が言ったことは本当ですわ」

??? 「……そうさ、俺は、CIDの潜入捜査官さ。それも帝国に潜入し諜報活動をすること」

アルフィン 「なるほど」

??? 「まさか、反オズボーン抗議活動が共和国にいる猟兵団、波の花だとは思わなかったが」

アルフィン 「大方、貴族派の誰かに買われたのでしょうかね」

アルフィンと???が話していると、何やら部屋の外から足音が聞こえる。

アルフィン 「貴方、ちよつとここに隠れて下さい」

??? 「か、隠れるってそこかっ!」

アルフィンに掴まれる???。なんと隠れる場所は、アルフィンのドレスの中である。???

は意を決してドレスの中に入る。

???がアルフィンのドレスの中に入ると、部屋がノックされる。

アルフィン「はい、私は、いますがなんででしょうか？」

メイド「アルフィン皇女殿下、こんな時間にすいません」

アルフィン「いえ、構いませんわ。どうぞ、入ってきて構わないから」

メイド「失礼します」

メイドはアルフィンにそう言われ部屋に入って来る。

メイド「今日の昼間に抗議活動のデモがあったのは、ご存じでしょうか？」

アルフィン「ええ、知ってるわ」

メイド「その…抗議活動の主体は波の花で一般市民が起こしたわけではありませんでした」

アルフィン「なるほど、それはつまり波の花を雇ったのが貴族派の誰かということかしら」

メイド「おそらくはそうなのかと」

アルフィンとメイドのやり取りをドレスの中で聞いている???。???はふと視線を上げると、アルフィンの緋のショーツをガン見することになった。

???「コイツ、緋いパンツなんか穿いてるのかよ。帝国の皇女はこんな派手なパンツを

穿いているのか……」

アルフィン「ドレスの中で、そんなことを???は言っている。

???「まあ、減るもんじゃねーしガン見しても良いよな」

???「がそんなことをしている時、アルフィンとメイドは

メイド「公式の見解では、貴族派はどのような抗議活動はしていない。革新派が自作自演をしているのではないのかと主張しています」

アルフィン「革新派の自作自演ですか……100%ありえないとは言えないですが、今の時期に革新派がそんなことをしてもあまりメリットがあるとはいえないわ」

メイド「そうですね、引き続き調査をしてまいります」

アルフィン「ええ、頼みましたわ」

メイドは、そう言われアルフィンの部屋から去っていく。彼女が遠ざかるのを見て、ドレスのスカートを上上げる。???は、アルフィンの緋のショーツを眺めていた。

アルフィン「……私のショーツをガン見なされてるのですか?」

???「はっ、そんなわけなからう!」

アルフィンは???の股間のあたりが膨らんでいるのを見逃さなかった。

アルフィン「そんなことを仰っていらっしやいますが、ジーパンの膨らみはなんでしようか?」

??? 「これは、つまり生理現象だ!というかお前がドレスの中に入れたのだろうか!」

アルフィン 「そう言えばそうでしたね、ところで貴方のお名前はなんでしょうか?」

??? 「ツチ、名前は、浜面仕上:偽名じゃないぞ」

アルフィン 「浜面仕上さん、貴方は日本の方ですよね?」

仕上 「まあな。先祖が日本から来たみたいだな。共和国では東方系の移民とされるが。俺は共和国生まれの共和国育ちだから、日本のこと言われてもわからん」

アルフィン 「そうなんですな」

アルフィンと仕上は、世間話をしばらく続ける。そして仕上が真剣な表情で

仕上 「ところで、お前さんは、この俺をどうするんだ? 帝国軍情報局に売ることか?」

アルフィン 「売りませんよ。私になぜ仕上さんを売らなきゃならないのですか?」

仕上 「なんでだ? 帝国と共和国の状況を見ればわかるだろ? 帝国人は共和国の事が嫌いじゃないのか?」

アルフィン 「先にも言いましたけど、私は共和国の方々が好きじゃありませんわ。共和国の知り合いもいますし」

仕上 「……お前さん、エレボニアの皇女だろ? なんで共和国の知り合いがいるんだ?」
アルフィン 「ふふつ、それは秘密ですよ、乙女には色んな顔があるんですからねえ」

仕上 「色んな顔……」

アルフィン「ねえ、仕上さん。私と取り引きしませんか？」

仕上「取り引き？」

アルフィン「ええ、取り引きですわ。貴方が帝国で諜報活動を黙認しましょう。その代わり帝国で仕入れた情報を私にも流してほしいのです」

仕上「帝国の情報がほしいなら、さっきのメイドから聞けばいいじゃないか」

アルフィン「あのメイド、マリーにばかりにも押し付けるわけにはいけないわ。ただで頼むつもりはありませわちゃん報酬もありますから」

アルフィンは、ドレスのスカートの中に手を入れ、ショーツを掴んで下ろしていく。もちろん仕上もそれに驚く。脱いだ緋いショーツを仕上の手に握らせる。

アルフィン「仕上さんは、こういうプレゼントがお好きなようですので、私の脱ぎ立でショーツをあげますわ」

仕上「皇女の…アルフィン皇女のパンツ…わかったよ、取り引きしようじゃないか」
アルフィン「ありがとうございますわ」

こうしてアルフィンと仕上は、手を組むことになった。あとから通称パンツ同盟になつてしまふ出来事であつた。